

# 教化研究

2008年（平成20年）

No. 19

## 研究成果報告

「他教団における海外開教の現状と開教使（師）養成」

「沖縄本島都市部における各宗派寺院の現状と展望 ③」

「各地の法然上人二十五霊場研究プロジェクト報告」

浄土宗総合研究所



# 教化研究

2008年（平成20年）

No. 19



# 教化研究 第十九号●目次

## 研究成果報告

他教団における海外開教の現状と開教使(師)養成……………	海外開教……………	6
沖繩本島都市部における各宗派寺院の現状と展望③……………	国内開教……………	42
各地の法然上人二十五霊場研究プロジェクト報告……………	法然上人二十五霊場研究……………	92

## 平成19年度 研究活動報告

総合研究 総合研究プロジェクト……………	開教……………	130
総合研究 総合研究プロジェクト……………	仏教福祉……………	132
総合研究 総合研究プロジェクト……………	生命倫理……………	136
総合研究 総合研究プロジェクト……………	現代葬祭仏教……………	144
総合研究 総合研究プロジェクト……………	国際対応……………	147
総合研究 総合研究プロジェクト……………	浄土宗近現代史……………	152
総合研究 総合的研究プロジェクト……………	近世浄土宗学の基礎的研究……………	154
基礎研究 教学的研究プロジェクト……………	浄土学研究の基礎的整理……………	156
基礎研究 法式的研究プロジェクト……………	近代の勤行の音声……………	158
基礎研究 布教的研究プロジェクト……………	現代布教……………	163
特別業務 特別プロジェクト……………	浄土宗善本叢書……………	167
特別業務 大遠忌関連プロジェクト……………	法然上人二十五霊場―歴史と現状について……………	169
特別業務 大遠忌関連プロジェクト……………	浄土宗大辞典……………	172
特別業務 大遠忌関連プロジェクト……………	浄土三部経……………	177

特別業務 大遠忌関連プロジェクト 四十八巻伝……………180

研究ノート

義山『浄土三部経随聞講録』対照表……………近世浄土宗学の基礎的研究……………186

仏説無量寿経③……………浄土三部経……………305

四十八巻伝……………四十八巻伝……………316

結縁五重相伝勸識録の比較研究……………現代布教……………325

建永の法難における住蓮房の事跡調査報告……………現代布教……………397

視覚的布教資料の研究(パネル法話の検討)……………現代布教……………425

・パネル法話1 「怨親平等の聖者」

・パネル法話2 「智者のふるまいをせず」

大日比法洲上人の『信法要決』について……………現代布教……………438

Ojo in the West:

A Report on End of Life Issues in the United States of America……………国際対応……………34

佛説無量壽経巻下 Skt. Larger Sukhavatyūha Sūtra[Second Scroll; third section]……………国際対応……………22

平成十九年度 活動報告……………12

平成十九年度 研究課題別スタッフ一覧……………7

平成十九年度 研究プロジェクト一覧……………6

総合研究所運営委員会名簿……………5

浄土宗総合研究所研究員一覧……………4

編集後記……………3

# 研究成果報告

# 他教団における海外開教の現状と開教使（師）養成

## 目次

### はじめに

### 第1章 他教団の海外布教組織と教師養成

#### 第1節 代表的な伝統仏教教団の海外布教組織と

開教使（師）養成について 水谷浩志

#### 第2節 代表的な新宗教教団の海外布教組織と開

教使（師）養成について 武田道生

### 第2章 ハワイ本派本願寺教団の現状と現地僧侶養成

名和清隆

### 第3章 浄土宗ハワイ開教区檀信徒意識調査報告

### おわりに

### はじめに

本海外開教研究班では、平成16年度より、新宗教を含めた他教団の海外開教の現状と課題について、主に他教団の海外開教担当の当局者を招き、聞き取り調査を中心として調査研究を進めてきた。その結果、本宗の開教施策を構築する上で、開教使養成の為のプログラムの必要性を痛感し、現在もその研究が進行中である。本論では、その研究に至る経緯として、他教団の調査研究を行ってきたので、その成果を中心中間報告を行うものである。

まず、第1章では、他教団の海外布教組織の形態と開教使養成プログラムの現状について特筆すべき例を、



第1節の伝統教団と第2節の新宗教教団に分けて報告する。第2章では、その中から伝統教団としては、最も特徴的な開教使養成プログラムを實踐している浄土真宗本願寺派のハワイ開教区での取り組みについて詳述する。第3章では、浄土宗ハワイ開教区の檀信徒（メンバー）に対して直接行ったアンケート調査の結果を報告する。

## 第1章 他教団の海外布教組織と開教使（師）養成

第1節 代表的な伝統仏教教団の海外布教組織と開教使（師）養成について

### ① 浄土真宗本願寺派の場合

(1) 開教に関わる組織について

浄土真宗本願寺派の海外開教は、第21代門主明如（1850～1903）により提唱され、アジアを中心

にハワイ、北米への開教使派遣、寺院建立が行われてきた。第二次世界大戦前に寺院数・信者数共にピークを迎えたが、他の伝統教団同様、植民地主義と密接な関係にあったアジア開教地は敗戦と共に消滅し、戦後は南米やヨーロッパへと進出している。（現在の台湾開教地は戦後復興されたものである。）現在は、4つの海外開教区（北米、ハワイ、カナダ、南米）と4つの開教地（メキシコ、オーストラリア、台湾、ネパール）、さらに6つの拠点を持つヨーロッパ開教地区（ドイツ、スイス、ベルギー、オーストリア、英国、ポーランド）を有しており、宗務庁総局国際部が管轄している。また、宗会議員で構成される国際伝道推進委員会で、各種の海外開教に関わる施策と予算が協議されている。

### (2) 開教使養成について

国内においては、龍谷大学が、将来、海外開教使を志す者のために必要な知識を修得させることを目的として開教使課程を開講している。この講座では英語による仏教知識を修得することができるが、この課程を

修了するためには、浄土真宗本願寺派教師資格が必要となっている。平成19年度のこの課程は、ハワイ開教区付属の学術研究機関である「仏教研究所」(Buddhist Study Center 略称「BSC」)で毎年開講されているサマーセッションに参加する形で行われた。およそ2週間の集中講義は、すべて英語でなされる。さらに、サマーセッションとは別に、ホノルルを中心として各人それぞれ割り当てられた開教寺院に行き、寺院駐在の開教使からマンツーマンの開教伝道や法務の指導を受けたたり、ハワイ開教区が行なっている社会活動(ターナプロジェクト、カウンセリング、チャブレン等)にも参加するなど実践的なプログラムとなっている。

次に、海外開教区での僧侶養成についてであるが、ハワイの場合は、別の論考(第2章)にて詳述するので、ここでは、米国本土の状況について述べることにする。

浄土真宗本願寺派のアメリカ合衆国本土における布教組織は、現地では北米仏教団(Buddhist Churches of America 略称「BCA」と呼ばれ、本願寺派の海外開教

拠点のひとつである北米開教区として位置付けられている。100年以上の歴史を持つアメリカ大陸最古の仏教組織でもあり、本部をサンフランシスコに置いている。米国においては、このBCAが、カリフォルニア州バークレーに「仏教大学院」(Institute of Buddhism Studies 略称「IBS」)を設置し、仏教学修士課程を開設している。IBSは宗教大学院連合(CTU)に加盟するほか、浄土真宗本願寺派教学研究所、龍谷大学大学院とも提携し、交換留学や単位互換を行っている。1950年代に日系アメリカ人によって結成された仏教の研究会が母体となっており、以前は本願寺派の海外寺院であるバークレー仏教会に本部を置いていた。設立時の主な目的は、北米仏教団の指導者を養成することであったが、現在では仏教について学び修士号を取ろうとする一般の学生にも門戸を開いている。またBCAでは、2005年にバークレー市街地に「浄土真宗センター」を開設した。このセンターは、日本の浄土真宗本願寺派当局と龍谷大学の協力を得て、浄土真宗を世界的に

伝道布教するための新たな拠点として設立された。そのため大講堂をはじめとして、各種講座・研究用の中

小ホール、教室、図書館、仏教書店、研究滞在用宿泊設備まで完備した機能的な施設である。従来の上野は

あくまで学術研究機関であり、真宗教師養成という当

初の目的を果たすには限界があったが、今後は、この

センターがアメリカ人僧侶養成の中心的拠点として機能

能することとなるであろう。また、設立に協力した龍

谷大学は、Ryukoku University Berkeley Center (RUBeC

ルーベック)を、このセンターの中におき、龍谷大学

の教育・研究の海外拠点として職員が常駐し、龍谷大

学生の留学サポートや教職員の研究をサポートする体

制を取ることとなった。日米の宗教団体と教育機関が

生み出したコラボレーション事業と云うことが出来る。

一方、日本の浄土真宗本願寺派では、現地での教師

養成とは別に、BCAをはじめとした非日本語圏からの

僧侶志望者を受け入れて養成しており、同派の得度習

礼、教師教修、開教使課程などの一部を日本において

も英語で受講することができるとしている。

## ②曹洞宗の場合

(1) 開教に関わる組織について

曹洞宗の海外開教は、1903(明治36)年ハワイ

並びに南米ペルーにおける日系移民に対する布教活動

を嚆矢として、以降、北米、ヨーロッパと順次開教活

動が始められ今日に至っているが、現在、宗門の海外

布教に関しては、宗務庁内局内にある教化部国際課が

所轄している。そのほかに、海外の宗務機関として後

述する曹洞宗国際センター並びに国際布教総監部があ

る。国際布教総監部は、ハワイ・北米・南米およびヨー

ロッパの4カ所にある。

曹洞宗では、海外での布教活動開始以来、100年

の足跡を点検し、現在の多様化した世界情勢に対応さ

せ、さらに布教教化活動を積極的に展開していくため、

「開教」の用語を「国際布教」に改めた。この変更に伴

い「開教師」が「国際布教師」、「開教総監部」が「国

際布教総監部」、「開教総監」が「国際布教総監」と名称変更された。さらに、これまで北アメリカ開教総監部に設置されていた北アメリカ開教センターを発展的に解消させ、2007年7月より「曹洞宗国際センター」を新たに発足させた。これにより、センターは曹洞宗宗務庁の直轄となり、各国際布教総監部とのより円滑な業務提携はかれることとなった。曹洞宗国際センターの役員は、本宗の国際布教師及び曹洞宗宗務庁役職員の内から所長、主事、書記が任命され、業務にあたる制度となっている。

こうした組織改革の背景となったのは、開教100年の歴史の中で、当初の教化対象であった日系移民が3世・4世以降の世代になり、日本文化の伝統継承や、日系寺院のあり方が変容しつつある状況や、その一方では多くの禅センターに代表されるように、坐禅を中心とする人々の活動が世界の各地で顕著となり、出家得度をし、僧侶を目指す人々が増加してきている状況が挙げられる。したがって、こうした組織改革は、こ

のような海外布教の抱える諸問題に適切に対応し、より積極的に展開していくためにはかられた施策と言える。

曹洞宗には、このほか海外布教を支援し、曹洞宗の国際布教、及び曹洞禅の国際交流を推進する任意団体としてSOTTO禅インターナショナル(Soto Zen International 略称[SZI])がある。この団体は、大山永平寺、總持寺と宗務庁から協賛を得て、ボランティアスタッフによって運営されている。SNIの活動は、全国で約400に及ぶ有志寺院、会員一人ひとりの「会費」により運営されている。

## (2) 開教使養成について

開教使については、宗務庁からの募集に応募した者が、宗門より辞令を受け国際布教師となり赴任する形を取っており、そのため現地での言葉の問題や経済的な問題があり、現在のところ応募者は少ない状態である。

開教使養成に関しては、宗門行政・宗門大学等の教

育機関での育成プログラムが、過去には存在したが、現在は実施されていない。また、ハワイ開教区では現地任用開教使養成のための独自の教育プログラムを実施する試みがかつて行われたが、現在このプログラムによる国際布教師は育っていない。しかし、曹洞宗の最近の開教師養成の注目すべき試みとして、2007年10月に、海外初の曹洞宗立の専門僧堂がフランスに開設（今村源宗堂長ヨローロッパ国際布教総監部総監）された。これにより、曹洞宗の僧籍を持つフランス人ら11人（うち尼僧2人）が掛搭し、90日間の安居期間を終えると申請により教師資格が得られることとなった。この専門僧堂はパリ郊外にある禅道尼苑（モンテイル村）に置かれている。この苑は、故弟子丸泰仙初代ヨローロッパ総監が開創し、約25万坪の敷地に坐禅堂のほか本堂、典座、鐘楼を備える施設であったが、これまでは、常駐者は置かず国際禅協会が管理し、サマーキャンプ（夏期講習）などに利用されてきた。開設にあたって既存の建物・施設を用いただけでなく、

20人ほどが坐れる単を新たに設置し、開設に伴い、フランス、ベルギー、ドイツ、スイスの4カ国から11人の掛搭僧侶が集まった。このほかに日本からも両大本山、愛知専門尼僧堂の雲衲が研修生として参加した。安居期間中、坐禅、作務など一連の修行を通して曹洞宗の行・学を修得するプログラムとなっている。指導は英語とフランス語で行ない、曹洞宗国際センターや北アメリカ国際布教総監部からも講師が派遣された。ここで育成された教師の今後の活躍が注目される。

### ③日蓮宗の場合

(一) 開教に関わる組織について

日蓮宗の近代海外開教は、1902年（明治35）高木行運上人により、ハワイのカパパラにおいて始められた。当初は、日系移民の信仰の拠り所として、その役割を果たしていたが、日系人社会の変容とともに、果たすべき役割も変わりつつある。一方、1980年代以降、法華系新宗教の活動に伴う題目の世界的普

及により、法華系の信者人口が急増したものの、これらの新宗教から最終的には離れる信者も多く、そうした人々に対応するため日蓮宗の開教拠点も世界中に広がってきた。開教拠点は、日本の宗門の直轄寺院、公認拠点、その他の布教所という分類のもと、現在北アメリカに15拠点、ハワイに5拠点、南アメリカに7拠点、アジア地域に9拠点、ヨーロッパ地域に4拠点となっている。現在、宗門の海外布教に関しては、宗務院伝道局伝道部国際課が所轄している。

日蓮宗では、こうした拠点を後方支援するために、日蓮宗開教布教センターを、1991年に設立した。2002年には現在地に施設も完成させている。場所は、サンフランシスコ国際空港から車で約30分の距離で、サンフランシスコの対岸にあるヘイワード市にある。ヘイワード市は、サンフランシスコとシリコンバレーの中心地サンノゼのほぼ中間に当たり、交通の便もよく落ち着いた比較的安全な街である。この開教布教センターが、現在行っている事業は、機関紙「ブリッ

ジ」の日英両語による発行、ホームページの運営、各種英文パンフレット、書籍、ビデオ、カセット、CD、DVDなどの発行販売、英語回向集、法話集、結婚式資料集など教師向け布教資料の作成や教師用、沙弥用、檀信徒用各種研修の開催である。

## (2) 開教使養成について

浄土宗の場合や曹洞宗のこれまでの方法とほぼ同じで、既に宗門の教師資格を有するものが、応募の上、開教使に任命される。本山において、日本語による加行を終えた僧侶しか正式な開教使となる資格がないため、言葉をはじめとする様々な課題を抱えている現状は伝統教団に共通の課題である。ただ、前項で述べたように、かつては日系人社会を基盤としてきた開教地域が、法華系新宗教の活動でそれ以外の地域に広がったため、開教使の言葉の問題が他の伝統教団以上に大きく、当局者への聞き取り調査時点で、現地任用開教使の養成制度について、具体的に検討を始める段階に

至っているとのことである。

(水谷浩生)

第2節 代表的な新宗教教団の海外布教組織と開教使

(師) 養成について

### ① 立正佼成会の場合

(一) 開教に関わる組織について

立正佼成会の開教は、1945(昭和20)年、日蓮聖人六三三年遠忌にあたって、「いよいよ交成会(当時の名称)に久遠実成の釈迦牟尼仏を本尊として勧請せよ。法華経が立正交成会を元として世界万国に弘まるべし」との啓示を受けたことに始まる。実際の開教は、58(昭和33)年に開祖庭野日敬が、ブラジル・北米・ハワイを訪問し、日本で入信していた現地の日本人会員を「手取り」したのが始まりである。手取りとは未信者を入信させるための勧誘行為である。翌年からハワイとロサンゼルスに支部が結成され、支部長が任命された。63年、東京オリンピックを契機に、教団運営

基本問題調査会によって本格的な海外布教の答申がなされた。第一段階として留学生の派遣、第二段階として具体的な布教計画の樹立及び準備、第三段階として支部の設置・布教師の派遣が計画された。65年には經典翻訳委員会が発足し、英字紙の発刊、經典の英訳などが進められた。その後海外拠点急速に拡大し、70年にはサンフランシスコ支部、シアトル支部、シカゴ支部が発足し、71年にはブラジル教会発足、75年ダラス支部発足した。80年には、世界の諸宗教対話のために、ニューヨーク法輪センターが設立された。

以後、布教拠点はアジアに向けられ、82年にはタイのバンコク、98年、韓国にも支部が結成された。91年には「布教の国際化に伴う基本構想」(10カ年計画)が打ち出された。92年には台湾で法人化、ネパールに拠点設置、94年にはシンガポール連絡所設置、タイではタイ立正の法人取得、98年にはスリランカ、バン格拉デシュに連絡所設置、2003年にはインドとモンゴルで法人化が成った。04年には南アジア教会が設立さ

れ、05年にはサハリンに拠点が設置された。またヨーロッパにも展開し、92年スイスに拠点を、94年には英国、イタリアに拠点を設置したが、98年には英国は法人化が認められた。

海外開教施策を所轄する組織は、教務部国際伝道グループである。そのもとに、05年現在、7教会、1姉妹団体（韓国）、27支部、支部までは行かない「法座」は17法座、2グループとなっている。施設に関して、支部以上は基本的に建物を購入しているが、法座やグループは個人宅を利用している。信者数はおよそ8800人である。海外会員の32%を韓国が占め、台湾16%、インド13%、バングラデッシュ・ブラジル各8%となっている。これを見ると、初期の北米から、現在ではアジア布教に力点が置かれていることがわかる。現在日本との関わりの深い日本で入信した海外労働者の帰国後の布教との関連が見られる。

日本の教団との関係では、各拠点は現地の法令に基づく独立した法人である。それぞれの本部会規によつ

て、日本国内の教会と同様に立正佼成会の構成の一部をなしている。教会長などは、必要に応じて現地法人の許諾のうえ専従教会長を派遣している。

## (2) 開教方針

このような展開の中でも、開教方針に試行錯誤が見られる。45年からの本格開教以前は、自然発生的な日本から渡った信者の集会的な「僧伽」の時代で、58年以降海外在住日本人会員のケアを主眼とした時代、63年以降は国際布教の第一段階の時代で、翻訳事業と外国語布教を重視した時代である。69年以降は組織的な国際布教の始まった時代で外国語布教を期待した時代といえる。76年以降は組織的な国際布教を進めようとした時代、92年以降は、現地語布教が見直しを迫られた時代といえる。現地語ができれば良いのではなく、布教経験を重視した開教師が送られた。97年、現地語布教が再び見直された。01年からはそれまでの日系の現地人への布教が主だったものが、非日系人へ



の布教が検討され始めた。04年には、庭野日鑽二代会長は全国布教において、「世界布教」という言葉を初めて用いて、その重要性を強調し、教団として、人種民族を超えた国際布教を進める意思が形成され始めた。

各国での布教の特色をあげれば、ニューヨークは国連平和活動、タイ立正は財団法人しかとれないことから社会活動、韓国は脱北者支援、ネパールはシャティバーン（平和の森）プロジェクトなどを中心に社会貢献を行っている。

### (3) 開教師養成について

海外教会長、布教師の養成機関は現在も確立していない。ひとつは、立正佼成会教師養成機関である学林卒業生が海外留学を経て、海外教会長となるケース。ふたつめは、一般信者から布教意欲が高いものを職員として採用し、現地に派遣したケースが、最近では2件あるが、これは国内の教会長も同様である。みつつめは、10年ほど前から学林海外修養生（非日本人、2

年間で日本語を1年間、布教や教義について1年間学ぶケース）があるが、未だ教会長や専従布教使は出ていない。

任命については、専従者ならば誰でも任命される可能性はある。任命については、国内教会長同様、会長によって任命され辞令を受ける。

### ②真如苑の場合

#### (1) 開教に関わる組織について

真如苑は、第二次大戦後誕生した極めて新しい真言宗醍醐寺派系の新宗教である。特徴としては、一如教徒と呼ばれる信者の宗教的目標は、接心と呼ばれる靈能者との交流によって自身も靈能者となり、教学を学び教階と僧侶としての僧階も取得することである。この教団は現在、国内ばかりか海外に於いても教勢を拡大している。

海外開教の歴史的経緯としては、朝鮮戦争やヴェトナム戦争をきっかけとして日本において入信していた

女性が、米兵と結婚して米国に渡ったことによる。こうした女性たちが多かったハワイに、1970年、教主伊藤真乗が北米巡教の際にハワイに立ち寄ったことが、ハワイ支部結成に契機を与えた。真如苑も当初は海外に渡っていた日本人が自然発生的に拠点を築いていき、教団は後追いで施設を提供していった支援維持型開教であった。真如苑ではこの年を開教元年としている。ハワイに伽藍が完成したのは翌71年である。次第に各国への広がりを見せ、82年にはサンフランシスコ支部設立、85年には台湾、フランス、その後各地に支部が結成されていった。その力となったのは近年では、日本人一如教徒の海外留学生、一般企業の海外派遣社員などである。98年にはイギリスで厳修された齊燈護摩は、メディアでも取り上げられることとなった。99年以来、ハワイ州ホノルルの入り江で、5月のメモリアル・デイにアメリカの戦死者なども供養する水施餓鬼廻向法要を行い灯籠流しを盛大に実施している。主に日本からではあるが、毎年約5万人の信者を集め、

ハワイではラジオやテレビで報道されて一大イベントとなっている。現在ではアメリカなど各国で齊燈護摩を行っている。

05年現在、海外の規模は、北米・南米では、ハワイ、ロサンゼルス、シアトル、ニューヨーク、ブラジル、ヨーロッパではフランス(ヨーロッパ本部)、ベルギー、イタリア、ドイツに支部がある。アジアでは、台湾、香港、タイ、シンガポール、オーストラリアに寺院がある。信者数は、ヨーロッパで5000名程度、霊能者(信仰が深まり、教団所属期間も長く、活動に熱心な信者で、霊界からの指示が受けられるまで修行がすんだと認定されたもので、信者の理想、通常5年から15年かかる)は70から80名(フランスでだけで20名)で、海外全体での霊能者は250名ほどいる。教階を持つ教師数は調べればわかるそうだが、明確ではない。ちなみに、霊能開発の最終段階前の「大歡喜」までは各支部で受けることが可能だが、霊能は立川本部でのみ可能とされている。フランスで霊能者が出たのは94年頃で、

支部結成の9年後のことである。海外各地部の人種構成では、非日系人がどこも5割を超えている。教学を教える「智流学院」はフランス支部成立数年後にできた。およその信者数では、ハワイを含む北米全体では8000人、アジア30000人ほどである。

海外支部と日本の教団組織との関係は、各支部は基本的にそれぞれが独立している。本部は布教師を派遣し、布教師の給与は日本本部が支給する。なぜなら布教師は本部の職員が本来の職務（たとえば、人事部職員なら人事部の出張扱いで、出先支部で本部の仕事を現地で行う。）のまま出張扱いで行う職務なのである。現地支部が法人化をする際には、本部が種々の援助を行う。また、施設建築など巨大事業などには、金銭的援助を本部が行う。

信者の布教組織は独自のものがある。明治以来の新宗教が採用してきた「親子」の導き関係は、多くの教団が捨て去つたり、欠点が多く問題視している。「親子」の導きとは、自分が入信させた信者を自分が親

会員として「子会員」を育て守る。その「子会員」がさらに「孫会員」を入信させ育てる。日本では多くの教団が、現代人がわずらわしく感じる人間関係の構築に悪戦苦闘したり、薄まった関係にうまく機能しなくなっている状況の中、この教団は、海外でも国内でも、あえて積極的にこの「親子」を「経親」<sup>（トシカウ）</sup>制度と呼び、人間関係の強化を前面に押し出しているのである。親はさまざまな相談を受けたりと機能しているという。またアメリカよりもヨーロッパの方がより機能しているという。

## （2）開教師養成について

布教師は、国際部が任命し、日本本部からおおよそ半年任期で派遣される。職員は多くが霊能者であり教団も学階も有する一如教徒である。日本の職員の40人から50人の中から選ばれる。多いときは14名ほどが派遣されたが、現在は7人が任地に向かっている。これは、現地指導者が育ってきたこともあり、日本からの布教

師の数は減少してきている。布教師の役割は現地の指導者を育成することであり、派遣前の語学研修もなく、現地語の使用は必ずしも必要とはされていない。(我々が見学した、ハワイの日曜日の集会での法話も、教会長の布教師はハワイに着任したばかりで、日本語で法話を行い、流ちょうな日系人の通訳が同時通訳していた。きちんと伝えられない日本語ならば、使わない方がよいとのことであった。)(武田道生)

## 第2章 ハワイ本派本願寺教団の現状と現地僧侶養成

### はじめに

ハワイ本派本願寺教団 (Honpa Hongwanji Mission of Hawaii) は、ハワイの伝統仏教教団で最も多くの寺院数、教師数、メンバー数を抱える教団である。ハワイ本派本願寺教団の現状、抱える問題点、そして現地での僧侶養成について知ることは、浄土宗の今後の海外開教

を考える上で非常に有益である。浄土宗総合研究所開教班は、これらの情報を得るべく、2006年12月19日、ハワイ本派本願寺教団与世森智海総長への聞き取り調査をおこなった。以下に、その聞き取り調査と入手した関連資料をもとに記述していきたい。

### 1. ハワイ本派本願寺教団の歴史と現状

#### ①略歴史

本派本願寺のハワイ布教は1889年から曜日蒼竜によつて始められていたが、正式な開教は1898(明治31)年に里見法爾が初代監督として就任したことによつて始まる。急激にハワイの日本人が増加した時期(1896年…約2万4000人→1900年…約6万人)であつたが、当時のプランテーション労働者の多くはハワイに定住する意思をもつてはおらず、3年という期間で日本に帰国した者が多かつた。

1900(明治33)年には二代監督として今村恵猛(就任期間1900-1932)が就任する。葬儀や法

事はもちろんのこと、結婚の斡旋、子弟の教育、家庭不和の仲介、労使対立の仲裁にいたるまで耕地労働者の生活全般に深く関係し、その勢力を拡大していった。そして1910年頃までには法人認可を受けての教団体制の確立、他島への教線の拡大、日曜学校・仏教青年会・婦人会の信徒体制の確立、幼稚園から高等学校におよぶ日本語教育体制の確立というように、その全島のな教団体制を完成させたのである。

当時、寺は日系コミュニティの教育や社交の場としても重要な役割を果たしていた。しかしながら、このことがかえって「閉鎖社会としての日系社会の形成」に寄与する結果になり、第一次大戦へアメリカが参戦（1917年）しアメリカ化運動（Americanization）が激化する頃になると、日系社会のアメリカ化を阻害しているとの批判にさらされるようになるのである。

これに対し本願寺教団は日系市民啓発運動に参加するなどし、日系市民のアメリカ化運動を推進する。また同時に本願寺教団自身もアメリカ（ハワイ）仏教と

して生まれ変わる必要性に迫られようになる。その本願寺教団のアメリカ化の一つとして、1918年に落成した別院伽藍はガンダーラ風の建造物で通仏教的イメージを演出し、内部にはベンチ式腰掛、説教壇、オルガンが配されキリスト教式スタイルが採られたのである。

また1920年にはカービー（M. T. Kirby）やハント（Ernest Hunt）が中心となり英語伝道が開始され、1921年別院に英語伝道部が新設されることにより本格的な活動となる。すでに英語で思考し始めた2世に対する英語での布教の必要性、また本願寺が民族的宗教という殻を破る必要があったのである。ハントはまた妻とともに英語訳の讃仏歌（Vade Macum）を作り、サンデーサーピスで歌い始めた。これらの活動は日系2世だけではなく、非日系人をも取り込むことに成功し、多くの2世や白人が英語部の活動に参加するようになった。今村の死後、厳しい財政難と古参の開教使の反対によりハントの活動は中止され（1937年）、

本願寺を追われる結果となるのだが、彼が築いた英語伝道の活動は本願寺の英語布教の礎となった。

1920年代から30年代にかけてはこれら英語布教の活動に加え、護持会の設立、教団本会議に信徒代表を加えた議制会を発足させるなど教団組織の再編を行なった。またバりに本部を置く国際仏教会(International Buddhist Institute)に参加するなど、宗派を超えた協力体制を整えていった。

そして戦後の1949年アメリカではじめての正式認可を得た仏教系小学校の開校、1954年には真宗の基本的な聖典(歎異抄・教行信書・和讃など)の英語版(Shinshu Seiten, Holy scriptures of Shinshu)を発刊する。これにより仏教用語の英語訳が確立し、英語による布教の更なる進展をみるようになったのである。

## ②ハワイでの現状

現在、ハワイでは36ヶ寺の本派本願寺の寺院が活動している。そのうち、14ヶ寺が無住寺院であり、兼務

で運営をしている状況である。2006年12月現在では、31人の開教使が活動しているが、その人数は減少しているという。31人のうち4人が開教使補である。ハワイ出身開教使は、10人いるが、そのうち7人は全く日本語が分からないという。非日系の開教使も2人いる(開教使1人、開教使補1人)。なお、過去10年では、7人のハワイ出身開教使が生まれているという。

31人の開教使のうち、日本から派遣されてきた開教使が8人いる。日本から派遣されてきた開教使は、5人に4人くらいは5年以内に帰国してしまうという。これはビザの問題や、また「寺の長男なので、日本の寺を手伝うために帰らなければならない」という理由が多い。また、日本から来た若い開教使は、ハワイのことを理解しない、アメリカ社会の厳しさ・布教することの厳しさを理解しない人が多いという。なお、元ハワイ開教使の6人が、日本で都市開教を行っている。ハワイ本派本願寺教団の規程では、開教使は70才で引退となっている。ただし、その後は1年ごとに契約延

長ができ、最大75歳までとなっている。

③ ハワイ本派本願寺教団の抱える問題点—ハワイ本派本願寺教団再考計画より—

ハワイ本派本願寺教団では、現在置かれている状況を捉え今後どのように教団が進んでいくべきかを模索するために、一つのプロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトは「ハワイ本派本願寺教団再考計画 (Rethinking of the Honpa Hongwanji Mission of Hawaii)」と呼ばれる。

この計画は、1998年のハワイ本派本願寺教団の議制会において採択されたもので、プロのコンサルタントを雇用し助言をもらいながら、開教使、信者からなる中核委員会 (The core committee) が中心となり、ハワイ本派本願寺を再考し変えていくために、有益な情報を様々な人々から入手し改善策を講じていくというものである。

このプロジェクトの一つとして、2000年7月の

ハワイ島ヒロを皮切りに、01年7月のハワイ島コナまでの六つの情報収集セッションが行なわれた。このセッションは、各地域の本願寺メンバーの代表者を集め、現時点において各寺院・本願寺教団が抱える問題点を明らかにすることを目的とし、各セッションに120人程度が参加、10程度のグループに分けて話し合いがもたれた。

その成果として、中間報告書が01年にまとめられた。普段あまり聞くことのできない信者の生の声が収められていて非常に興味深い。少々煩雑にはなるが、それぞれの問題点をなるべく具体的な形で拾い出し分類してみる。

○メンバーの高齢化と減少、若者不足

(メンバーが徐々に減少している、メンバーの高齢化、若いメンバーが少ない (特に20-30歳)、YBAが弱く、ダーマスクール・プレススクール・小学校の生徒数が減少している、メンバーがその子供を本願寺に通い

続けるように仕向けるのに困難を感じている)

### ○開教使の問題

(開教使の数が不足、開教使の語学不足の問題、開教使が信者の直面している問題を理解していない、開教使の話が今日的問題でない、開教使とメンバーとの意識のギャップがある、非日系人には分からないような具体例を挙げる開教使がいる、理解困難な専門用語を使う、開教使とメンバーのコミュニケーションが十分でない)

### ○メンバー間の問題

(熱意のあるリーダーが不足している、メンバー間で本願寺を日本人だけの寺にし続けようとの雰囲気がある、変化を望まない雰囲気がある、メンバーの間で、年齢層による考え方の違いがありすぎる、新しく参加した人が孤独感を感じる)

### ○教団運営の問題

(教団のビジョンが見えない、世代変化・文化変化の問題に取り組んでいない、従来のメンバーに重点を

置きすぎていて、若い人や非日系人の欲求に答えようとしていない、仏教の教えより日本の伝統に重きを置きすぎている、活動に対する十分な資金援助がない、若い人を引き付けるプログラムが少ない、インターネットなどを有効に活用していない、アウトリーチプログラムが十分でない、コミュニケーションの関わりが少ない、信者からの意見を十分に聞き入れていない、新しいメンバーがお香を挙げる際の作法といったような仏教に関する作法を学ぶ場がない、仏教をあまり詳しくない人が仏教を学ぶことのできる教材がない)

### ○教義・儀礼の問題

(サンデーサービスのマンネリ化、讃佛歌が陰気くさい、歌うのが難しい、歌詞に共感できない、阿弥陀仏は神と言っているように解釈できる歌詞がある、説教壇・讃佛歌・オルガンによる音楽・腰掛といったキリスト教的な様式が仏教に合わない、お経が理解できない、仏教の教えが難しい、葬式や法事などの



儀礼にたいする説明が十分でない、日本語による宗教用語・伝統・行事にこだわりすぎている、仏教の教えが日常生活にどのように役立つかわかりにくい)

セッションに参加したメンバーは、それぞれ異なる寺院に所属しており、また広い年齢層に亘っているため、なかには相矛盾するような答えが見出されるし、ある特定の寺院に先に挙げた問題点すべてが当てはまるという訳ではない。しかし巨視的に見た場合には、ハワイ本派本願寺教団が抱える問題点をすくなく浮き彫りにしていると思われる。

まず、信者の高齢化と若者不足ほどの伝統仏教系教団でも深刻であるが、本願寺も同様である。「子供の頃はダーマスクール、高校卒業後はハワイ大学に行きつつ仏教ステイセンターに通い、その後結婚、子供が出来たらダーマスクール(PTA)」という従来のパターンが成り立たなくなってきたという状況である。小さな子供が寺に来たがらないということに加え、小さな頃か

ら寺に通っていた子供も大きくなると寺から離れてしまふことが多いという。寺から離れるパターンとしては、小学中学と本願寺の学校(フォート学園)に通っていて寺の活動にも参加していた子供が、高校に入学することを機に寺から離れていくというもの、もう一つのパターンは Jr. YBA (16歳まで)を卒業するのを機に寺から離れてしまうというものである。この状況を打開するための一つの策として、03年にこれまで中学までであった教団付属の学園に新たに高等学校(Da'celite Buddhist Academy)を開校した。これは中学まで仏教的教育のもと育った生徒が、高校にあがってキリスト教徒として取り込まれていくという状況を打開するためであるという。

開教使不足も深刻な問題であり、三分の一以上の寺院に専任開教使がいないという状況である。また開教使の質に関しても問題視されている。英語布教をできるだけの十分な語学能力を身に付けることは最低条件であり、仮にそれをクリアしていたとしてもハワイで

生まれ育った人々の感覚を理解し、その欲求に応える能力を身に付けたことにはならない。とくに若い世代から聞かれる話であるのだが、20年や30年といった長い間ハワイにいる開教使はまだいいが、日本からきた若い開教使は魅力がないという。自分達の状況を理解していなく、今日的問題に対する答えを示してくれないのだそうだ。一方、若くてもハワイ出身の開教使には満足しているという。日本の感覚をもった人が、ハワイ的感覚を理解しそれへ切り替えていくのはやはり難しく時間が掛かるということであろう。

## 2. 教師養成について

先に見たような状況のなか、ハワイ本派本願寺教団は、ハワイ出身（またはアメリカ本土出身）の教師を育てる取り組みをしている。

現在、浄土真宗本願寺派の僧侶になるためには、外国出身者、外国居住者であっても、日本に来て京都の

西本願寺で10日間の「得度」を受け、その後、「習礼」を受けなければならぬ。また海外で活動する開教使になるためには、さらにインターナショナルプログラムをうける必要がある。なお、日本で得度・習礼を受けるためには、日本語の習得は必須条件とはなっていない。なぜなら、得度・習礼には国際部所属の通訳がつくからである。また、日本語が出来ない受講者が6人以上集まると、英語による得度セッションが開講される。過去2回開催され、最近では04年に開講された。この英語による得度セッションにかかる費用は、日本の国際部が負担する。なお、日本語が出来ない教師であっても、制度上においては日本で住職になる資格を持っているとのことである。

現在において、ハワイ出身者が教師になる道のりには、大きく分けて3つのパターンがある。

①アメリカで4年生大学卒業→龍谷大学または中央仏

教学院↓得度↓習礼↓教師

② アメリカで4年生大学卒業↓IBS↓得度↓習礼↓教師

③ プレ得度プログラム↓得度↓開教使補として五年以上のインターン↓習礼↓教師

この三つのパターンの大きな違いは、仏教や真宗の教えをどの機関で学ぶかということである。①のパターンは日本、②のパターンはアメリカ本土、③のパターンはハワイである。

①は、龍谷大学または中央仏教学院で学んだ後、得度・習礼を受けるパターンであるが、この場合には、ハワイ本派本願寺教団からの奨学金を受けられることができ、学費のほか、月13万円の生活費が支給される。奨学金を受ける条件に、「日系人であること」は含まれていない。ただし、「奨学金を受けた年数の、最低でも倍の年数をハワイ本派本願寺教団で開教使として活動しなければならぬ」という規則がある。この①のパターンは、日本語を習得する必要もあり、年数が最も掛かるパターン

であるが、その分「しつかりとした開教使が育つ」とのことである。

②は、アメリカのカルフォルニアにあるIBS（米国仏教大学院、Institute of Buddhist Studies）で勉強したのち、得度・習礼を受けるパターンである。IBSでは、僧侶養成の課程のほか、仏教学の修士課程を取得できるコース、またチャプレンシーの資格を取得できるコースもある。これらの場合においても、ハワイ本派本願寺教団からの奨学金を受けられることができる。しかし奨学金を得て、IBSで修士号（MBA）を取得し、またはチャプレンシーの資格を取得しても、本願寺の開教使にならない人がいるという。

③は、ハワイで「プレ得度プログラム」を受けた後に、得度・習礼を受けるパターンである。このプレ得度プログラムとは、先述したようなハワイ本派本願寺教団の抱える問題を背景にして、ハワイ出身の開教使を多く排出すべく1980年頃に作られたプログラムである。

ハワイ本派本願寺教団内の開教使育成委員 (Ministerial Training Committee) が運営を行い、Ministers Association (Kyogakkan) に任命された開教使が実際のプログラムを行う。受講希望者は、プレ得度プログラムの説明会・書類審査・面接を受け、それに合格したものは、各寺院 (または地区レベル) で、1. 得度の大切さについて 2. 教義と歴史の勉強 3. 儀式の実習と作法について研修を行い、その後ハワイ州全体でのプログラムを実施する。これは具体的には、1. 得度の大切さについて 2. 仏教の歴史と教えについて 3. 浄土真宗の教えの概要 4. 浄土真宗の歴史 5. 宗教と社会 6. 布教 7. 儀礼の実習 8. 読経の実習という8つの内容について、週1〜2日、3〜4週間かけて行う。所用時間は受講者の習得レベルに応じて臨機応変に対応している。このプログラムはまた志願者の資質や得度を受ける決意を計るという目的も持っている。プログラム実施の費用は教団が持つが、旅費は受講者負担となる。現在活躍している開教使では3人、

引退した人も含めると10名がこのコース出身である。

プレ得度プログラムを修了し、コミッティーによる審査に合格したものは、総長による認証を受け、得度を受けることができる。そして、得度を満了し総監が認めた場合には「開教使補」になることができる。開教使補は、教師になるまでの間、寺院での儀礼や布教の手伝いをする立場であり、監督教師のもとでの活動に限定され、葬儀や結婚式を執り行うことはできない。開教使補は「アシスタント・ミニスター」であり、「ミニスター」と名乗ることはできない。

得度を受けた後、開教使補として5年以上のキャリアを積み、監督教師による推薦・総長による認証を受けると、習礼に進み教師となることができる。ただし、習礼を受けるには、4年生大学の資格を持っていることが条件である。もしも、卒業資格をもっていない場合には、開教使補の時にハワイ大学で勉強し卒業資格を取得する。この際には、大学で勉強するための奨学金を、教団から受けることが出来るという。

このブレ得度プログラムへの受講希望者は、社会で仕事を経験してきた人が多いという。これは、僧侶は定年が遅いため、「長く働くために僧侶の道を選択する」というということも理由のひとつであるという。また、「職が無く、食べられない外人（非日系人）」がきて「僧侶になりたいと簡単にいつてくる」場合も多いという。禅の影響を受けた「宗教遍歴者」も多い。このため、このプログラムは、「食べられない外人の救済機関」になる危険性も孕むため、プログラム受講希望者への書類審査は慎重に行っているという。

ここまで、①、②、③のパターンを見てきたが、それぞれに指摘したような問題を孕んでいるのも事実である。しかし、それでも日本から来た若い開教使に関する問題のほうが深刻であるという。なお、「開教使として成功するのに、日系・非日系は関係ないのでは」と与世森総長は感じている。また、現在は、女性開教使の人氣が高いという。ハワイ本派本願寺教団のメンバーの間には、「人種の壁」についての意識はないとい

う。これは、「ハワイ本派本願寺教団では、特に戦争時期に女性の開教使が増えたことが契機となって、男性・女性、日系・非日系という意識がなくなってきたのではないか」と推測している。

なお、元ハワイ大学教授で、真宗学者であるアルフレッド・ブルーム氏がハワイ本派本願寺教団と非日系人との人的つながりを持っていたとのことである。

### 3. 今後の見通し

2006年8月に、親鸞聖人七五〇回大遠忌計画の「国際伝道の推進」の一環として、北米開教区（小杭好臣開教総長）が、米国カルフォルニア州パークレー市に宗派や龍谷大学などの助成をうけて「浄土真宗センター」を開設した。このセンターは、約2600㎡の敷地に鉄筋3階建・総床面積約2600㎡の建物に礼拝堂や教室、事務所、宿泊施設（学生寮、講師宿舍用）が完備している。このセンターに開教使養成所、英語通信教育、米国仏教大学院（IBS）、北米開教区教育研

修センター、龍谷大学海外拠点の5部門を設置した。

現在では得度・習礼は日本に入って受けなければならぬが、米国で得度・習礼を受けて教師になれるよう、システムを整備する予定であるという。「5年以内には実現するのではないか」とのことであり、今後は、この「真宗センター」で教師となるための勉強をして、米国で得度・習礼を受けるといったパターンが増えることが予測される。

(名和清隆)

### 第3章 浄土宗ハワイ開教区檀信徒意識調査報告

浄土宗総合研究所開教班では2006年12月、ハワイ開教区の浄土宗寺院のメンバー(信徒)に対して、「ハワイ浄土宗寺院の現状と課題に関するアンケート調査」

(英語タイトル「Questionnaire on the Present Situation and Future Direction of Jodo Shu Temples in Hawaii」)を実施した。この調査は、ハワイ開教区のメンバーは浄

土宗寺院の現状についてどのように考えているのか、今後の寺院・僧侶にどのようなことを求めているのか、ということ明らかにするためのものであった。本稿では、このアンケートの結果を報告するとともに、簡単な分析を行いたい。

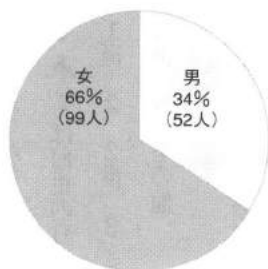
なお、このアンケートは無記名でおこなった。また、日本語版と英語版の両方を用意したうえで、回答者の使用言語に応じて回答していただいた。配布方法は、アンケート調査用紙を、各ハワイ寺院の開教使に渡し、開教使からサンデーサービス、あるいは法要に参加したメンバーに配布していただく方法をとった。なお回収票は151票であった。

(1) 性別を教えてください。

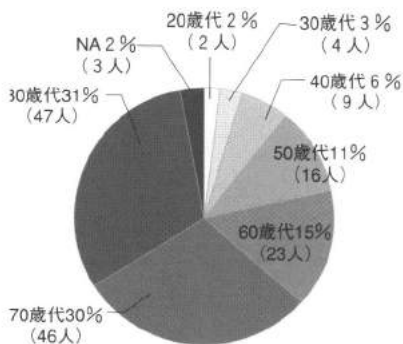
1. 男性
2. 女性

男性34%、女性66%で女性の割合が男性の約2倍である。

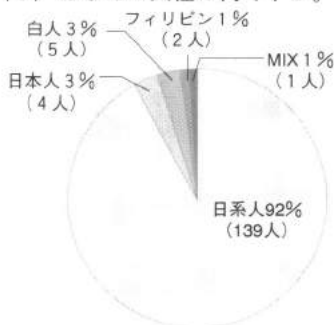
(1) 性別を教えてください。



(2) あなたの年代を教えてください。



(3) あなたの人種は何ですか。



70代以上が61%と過半数を占める。50歳～69歳が

日系人が9割以上を占めている。

20代が2%、30代が3%、40代が6%、50代が11%、60代が15%、70代が30%、80歳以上が31%

日系人 92%、日本人 3%、白人 3%、フィリピン 1%、混血 1%である。

(2) あなたの年代を教えてください。

1. 20歳代
2. 30歳代
3. 40歳代
4. 50歳代
5. 60歳代
6. 70歳代
7. 80歳以上
8. 20歳以下

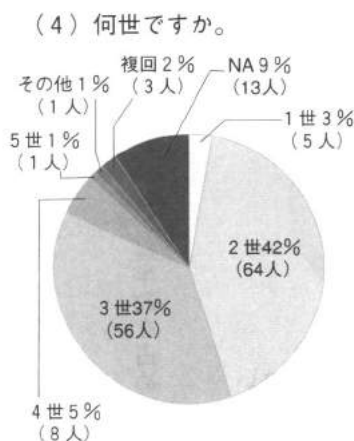
(3) あなたの人種は何ですか。

26%以下が11%であり、60代以下の年代が少ないことが分かる。

(\*) (3) で「日系人」という回答の場合には、次の質問にもお答えください。

(3) — あなたは何世の日系アメリカ人ですか。

1. 1世
2. 2世
3. 3世
4. 4世
5. 5世
6. その他



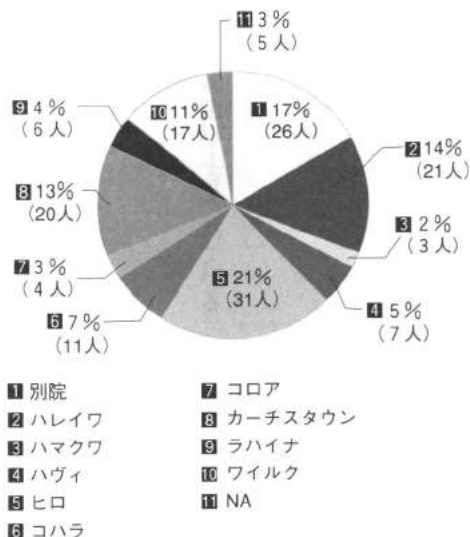
1世3%、2世42%、3世37%、4世5%、5世1%  
2世または3世の割合が79%を占め、4世以降が急激に減少している。

(2) — (3) — 1の質問から、現在のハワイ開教区の

寺院では、70代、80代の日系2世3世が寺のメンバーの中心となることが分かる。

(4) あなたの所属する寺院はどこですか。

(4) 所属寺院はどこですか。



- |        |           |
|--------|-----------|
| 1 別院   | 7 コロア     |
| 2 ハレイワ | 8 カーチスタウン |
| 3 ハマクワ | 9 ラハイナ    |
| 4 ハヴィ  | 10 ワイルク   |
| 5 ヒロ   | 11 NA     |
| 6 コハラ  |           |

(5) あなたが使用できる言語は何ですか。

1. 英語のみ
2. 日本語のみ



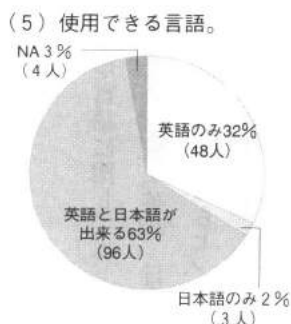
3. 英語と日本語ができる

英語・日本語両方できる人の割合が63%、英語のみできる人の割合32%、日本語のみできる人の割合3%

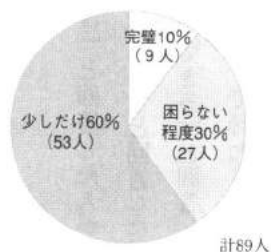
\*3と回答した人のみ、次に設問に答えてください。

(5) — 1. あなたの日本語のレベルはどの程度ですか。①②③それぞれにお答えください。

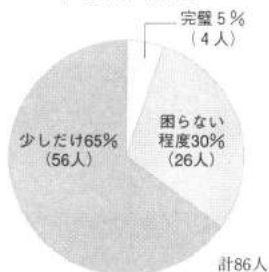
①聞く(A. 完璧にできる B. 困らない程度にできる C. 少しできる)



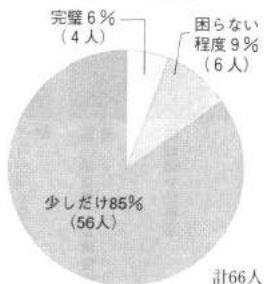
(5-1) ①聞取能力。



(5-1) ②話す能力。



(5-1) ③書く能力。



完璧にできる…10% 困らない程度…30%  
 少しできる…60%

②話す(A. 完璧にできる B. 困らない程度にできる C. 少しできる)

完璧…5% 困らない程度…30% 少しだけ…65%

③書く(A. 完璧にできる B. 困らない程度にできる C. 少しできる)

完璧：6% 困らない程度：9% 少しだけ：85%

使用言語に関しては、「英語だけ」と回答した人が32%であった。「英語・日本語両方できる」と回答した人の割合は63%にも上ったが、「両方できる」と回答した人に、能力ごと（聞く、話す、書く）で尋ねてみると、問題なく日本語を聞取ることが出来るのは40%（全体の25%）、同じく、問題なく会話ができるのは35%（全体の22%）、問題なく書くことが出来る人の割合は15%（全体の9%）しかないということが明らかとなった。

(6) 寺に今後積極的に取り組んでほしい活動は  
何ですか。次の中から上位3つのみ選んでください。

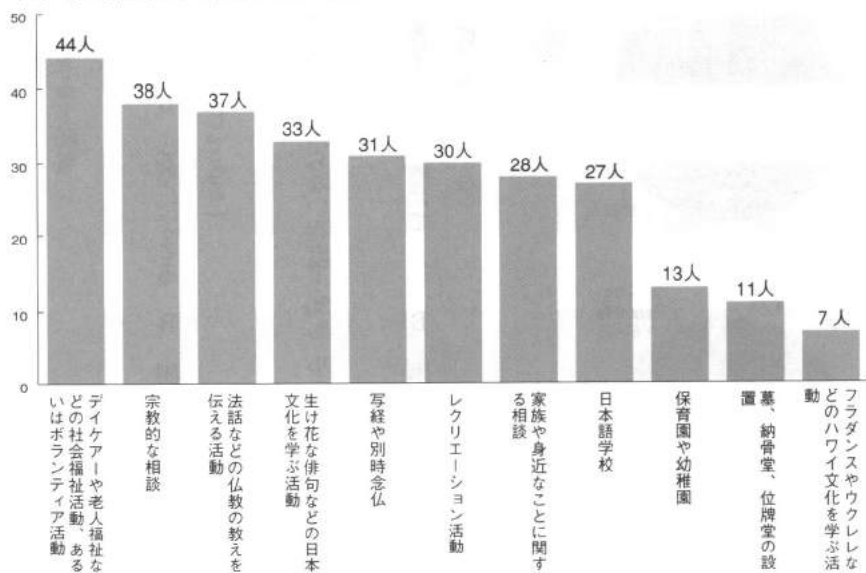
期待される順

1位 デイケアや老人福祉などの社会福祉活動、あ

るいはボランティア活動

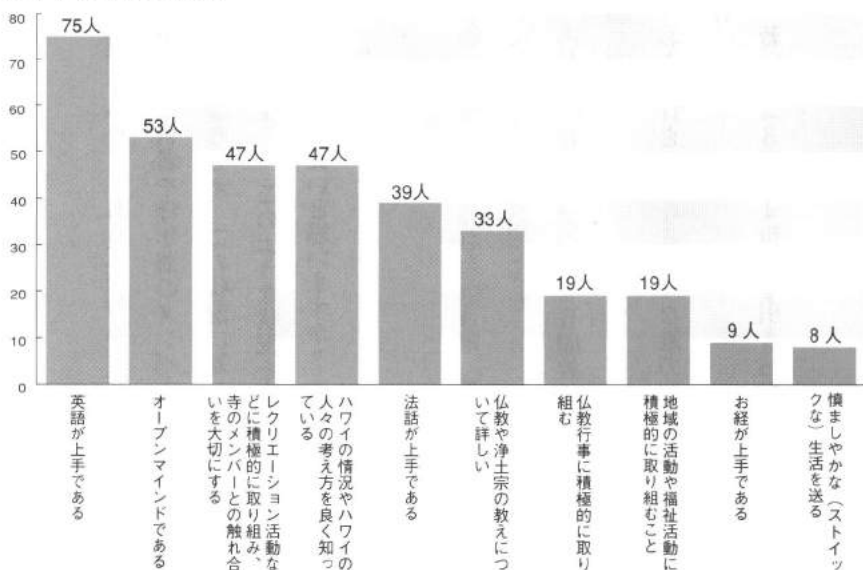
2位・宗教的な相談

(6) 寺に積極的に取り組んでほしい活動



- 3位・法話などの仏教の教えを伝える活動
  - 4位・生け花な俳句などの日本文化を学ぶ活動
  - 5位・写経や別時念仏
    - ・レクリエーション活動
  - 6位・家族や身近なことに関する相談
    - ・日本語学校
  - 7位・墓、納骨堂、位牌堂の設置
  - 8位・フラダンスやウクレレなどのハワイ文化活動
    - ・保育園や幼稚園
- デイケア、老人福祉などの社会福祉への貢献が最も強く期待され、次いで仏教的な相談や法話などの精神的なケアへの期待、および日本文化活動、レクリエーション活動への期待が高いことが分かる。
- (7) 開教使に求めるものは何ですか？次の中から上位3つのみ選んでください。

(7) 開教使に求めるもの



1、お経が上手である

2、法話が上手である

3、仏教や浄土宗の教えについて詳しい

4、英語が上手である

5、オープンマインドである

6、仏教行事に積極的に取り組む

7、レクリエーション活動などに積極的に取り組み、

寺のメンバーとの触れ合いを大切にする

8、地域の活動や福祉活動に積極的に取り組む

9、ハワイの状況やハワイの人々の考え方を良く知っ

ている

10、慎ましやかな（ストイックな）生活を送る

「英語が上手である」ということが、開教使に最も求められている資質である。続いて「オープンマインドであること」、「レクリエーション活動に積極的であること」、「ハワイの状況、考え方をよく理解していること」が求められており、「法話が上手であること」や「仏教

の教えの理解度」よりも高いことが分かる。

(8) 現在、ハワイにある伝統的仏教寺院では、メンバーの減少（特に若者や壮年層のメンバーの減少）が深刻化しているようです。この状況に対してどのように思いますか？ また、このような状況を改善するには、どのようにしたら良いと思いますか？ あなたの考えを自由にお書きください。

檀信徒の方から寄せられた改善策・要望のポイントは大きく分けて3点に分類できた。

1 言葉の問題、英語の話せる開教使・英語の経本・法話 29件

2 お寺へ行きたくなくなるような魅力的な活動の実施 20件

3 若い人（3世・4世）を引き込む活動の実施 21件

一つ目の「言葉の問題」であるが、メンバーを増やすには「より英語の上手な開教使が必要」で、「メンバーと、より密に英語でコミュニケーションをとることが必要」という意見が多く見られた。とくに3世4世以降の人々は「日本語がわからない」ことが多く、また「お経や法要の意味、また仏教という教えがよく分かっていない」ため、まず「一般的に仏教とはどういう教えなのか」ということを若い世代に英語で教育する必要があるのでは？」という意見も見られた。

二つ目の「お寺へ行きたくないような魅力的な活動の実施」とは、具体的には、家族向けの行事を開催してほしい、日曜学校を開設してほしい、寺を一般開放してほしい、現代的な法話の実践をしてほしいなどの意見であった。また、「日系人による閉ざされた雰囲気があるため、お寺に縁のなかった人にとっては、お寺へ行くということはかなり敷居が高いことのように感じられるのでは」という意見も見られた。まず、「気楽にお寺に行ける」という雰囲気こそが、人を集める要

因であるのだろう。

そして三つ目の「若い世代を引き込む活動の実施」とは、具体的に同好会の設立、子供たちの為のスポーツ（空手・柔道・ハイキング・スイミング・太鼓等）の催し、ひな祭り・子供の日、盆踊り等の日本由来の行事をもっと盛んにすることであり、広い年代でお寺へ来る楽しみと意義を共有できる機会を設けたいというものであった。

(9) 現在、ハワイにある伝統的仏教寺院の多くでは、メンバーの大多数が日系人によって占められているという状況ですが、これに対してどのように思いますか？あなたの考えを自由にお書きください。

総コメント数 54

- ・日系人以外も増えた方が良い 44
- ・このままで良い 10

回答者の約8割の人々が「寺にくるのは日系人ばかり」という現状に不安や疑問を覚えている。

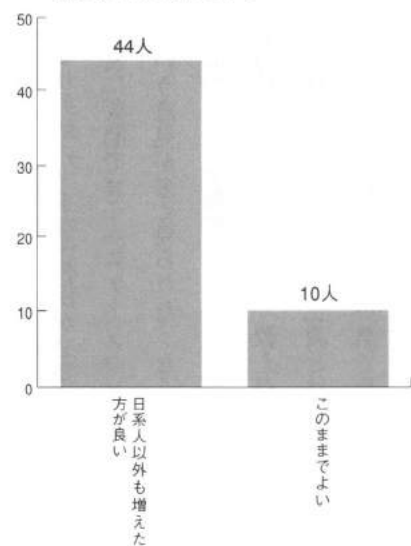
◆「日系人以外も増えた方がよい」 44件

この意見は寺院や開教使側へ対するものとメンバー側へのものと2種にわけられる。

寺院・開教使側への意見としては、

「日本語を話す僧侶に日本語のお経では日系人以外は居心地が悪い・教えが理解できない」

(9) メンバーの人種が日系人に偏っていることについて



「ハワイは多民族社会であるのに日本の単一文化を色濃く持つ寺院は社会に受け入れられない」

「日本語や浄土宗の教えを、地域やメンバーが難なく受け入れられると思うべきではない」

「寺は日系人のものだという考えを捨てるべきだ」「他の人種の人々が興味をもって寺を訪ねてくることに寛大であるべきだ」等

またメンバーから同じメンバーへの意見としては、

「『日本人』という枠で群れている限り他の人種は入り込めない」

「私達（信者）が文化的に多様で柔軟でなければいけない」

「信者が柔軟であればアジア文化・芸術に興味を持つアジア系以外の人々たちも寺に来てみようと思うだろう」等の多民族社会ならではの人種の壁の問題が見受けられた。

◆「このままでよい（日系人ばかりでよい）」 10

また、それに対し現状のままでもよいとする意見も、少数ながらも存在する。

・「仕方がない、問題ない」

・「伝統だからそれでよい。ごく自然のこと。」

・「日本の伝統に浸れるいまの環境がよい。」

・「昔からのつながりはなくしたくない。」

・「昔の日曜学校の人々が戻ってきていてよい。」

大多数のメンバーが「日系人だけのお寺ではいけない」と考えている。しかし、そのような状態をメンバー自身も気づき危惧を感じつつも、「日系人コミュニティ」として居心地が良くなっていて、結果的に日系人以外にとっては「閉じられた」雰囲気となっていることが伺える。現在、若い世代では日系人以外と結婚する場合も多く、「自分は日系人である」という意識が薄らいでいることも予想される。今後「日系人」という枠に捉われすぎると、益々「閉じられたお寺」となる恐れもあるだろう。

また、「非日系人」や「若い人」、「新しい人」が寺へ来ないのは、やはり言葉の問題が大きいと多くの人が感じている。

(10) 現在、ハワイにある伝統的仏教寺院の多くでは、僧侶は日本からやってくる僧侶で、ハワイ出身の僧侶は少数です。また非日系人の僧侶もほとんどいない状況です。これらの状況に対して、どのように思いますか？あなたの考えを自由にお書きください。

開教使の出身・人種についての回答(56)を ①ハワイ出身の僧侶を希望する ②非日系人の僧侶を希望する ③非日系人の僧侶でもよい ④日本人(日本から来た)僧侶以外を希望する ⑤日本人(日本から来た)僧侶以外でもよい ⑥日系人の僧侶を希望 ⑦日本人(日本から来た)僧侶でもよい ⑧日本人(日本から来た)僧侶を希望する ⑨英語に堪能な僧侶を希望 ⑩若い僧侶を希望する ⑪僧侶の人

種は問わないの11項目に分類した結果、「①ハワイ出身の僧侶を希望する」と言う意見が15票と最も多く見られた。つづいて人種にかかわらず「⑨英語に堪能な僧侶を希望」という意見が9票、3番目に「③非日系人の僧侶でもよい」8票、4番目に「⑦日本人（日本から来る）僧侶でもよい」6票というようになつた。これはハワイ開教寺院のメンバーの人々が日系・非日系を問わず「ハワイ文化や言葉の理解のある僧侶」を希望している結果であると考えられる。それぞれの回答に見られた詳細は以下の通りである。

#### ◆ハワイ出身の僧侶を希望する

- ・ハワイ出身の若者に僧侶になつてほしい。
- ・ハワイでの僧侶養成講座を開講してほしい
- ・ハワイ出身の僧侶は地域の人々と意志疎通がはかれ、法話にも親しみやすい
- ・ハワイ出身の僧侶ならばもっと話し合え、多くの人に入信を促すことができる

(10) 開教使の人種について





◆非日系人僧侶を希望する もしくは 非日系人の僧侶でもよい

・ 他人種の僧侶の存在は地域の多様性を促してくれる、または国際的な宗教のイメージとしてよい。

・ 他人種の人々が仏教・浄土宗の教えを学ぶことに前向きであるべきだ

・ アメリカの習慣を熟知した英語の出来る僧侶が必要

・ 3世4世の人々の為にも念仏をわかりやすく教えてくれる人が必要

◆日本人（日本から来る）僧侶以外を希望 もしくは日本人（日本から来る）僧侶以外でもよい

・ 日本から来た僧侶はハワイの言語や地域のニーズに適合できないため

・ 「日本の誰かに操られている寺」ではなく「自分たちの寺」だと自覚すべき

◆日本人（日本から来る）僧侶を希望 もしくは日本人

（日本から来る）僧侶でもよい

・ 現状で問題ない・良い

・ 東洋と西洋のつながりが保てる

・ 日本人もしくは日系人以外は不自然

・ 日本の伝統や文化を学べる

◆英語に堪能な僧侶を希望

・ 信者の減退を止め、また信者を増やすためには英語のできる僧侶を採用するべき

・ 新しい信者へのメッセージは英語でなされるべき

・ 日本からの僧侶であっても英語が十分に理解できなくては困る

・ 人種を問わず英語に堪能な僧侶がハワイにおける浄土宗存続の為に必要である

・ 若い世代を取り込むためにも英語を十分理解できる僧侶を希望

◆その他

・日本人の価値観や信念にとらわれずに私たちを受け入れることができるのなら人種は問わない。問題は僧侶では無く、信者たちが壁を作っていること。ここの信者はもつと教育される必要がある、僧侶はそれに関しての対応の仕方を認識すべきだ。

・偏見無く協力してほしい。島の文化を知ってもらいたい。ハワイ文化は日本文化と違うのだ。

・資格があれば人種は問わない

#### 〈アンケート結果からみる現状の整理〉

現在、ハワイのほとんどの寺院は、「メンバーの高齢化と減少」という問題を抱えている。アンケートからは、寺院に多く関わりを持つメンバーは、70歳代80歳代の日系2世3世の女性が多くを占め、4世以降の若い世代、また非日系人は極度に少ないという状況が明らかになった。この原因の一つとして、開教使とメンバーの間の「言葉の壁」があると考えられる。お寺にきているメンバーの7割以上が、「日本語ができない、自信

が無い」とする人が占める中で、現地の人々と十分なコミュニケーションが取れ、英語で布教ができるだけの英語力をもつ開教使が不足している。

またメンバーのほとんどを、「日系人」が占めるといってお寺コミュニティは、他人種に人々にとっては近寄りたいた閉鎖的な雰囲気があることも事実のようである。若い世代や日系人以外の人々が寺へ関心を持つよう、「言語の壁」が無い寺院の環境づくりと、彼らを引き込むような活動がハワイ開教使及び寺院に期待されている。

なお、この場をお借りして、アンケートに協力頂いたハワイ開教区の開教使・メンバー、また回収したアンケートの自由回答の和訳を担当していただいた、神奈川教区 正安寺 酒井仁成 上人にお礼申し上げます。

資料作成・文責 田中和敬

おわりに

以上、第1章、第2章で見てきたように、各教団と

も今後の海外布教の活性化の重要な施策として、開教使(師)養成のプログラムに対するさまざまな取り組みを行っている。また、第3章の調査結果から開教区現地の檀信徒(メンバー)達は、日本から開教使が派遣されてくる形態にこだわっているわけではなく、むしろ言語的な障害が少なく、よりよいコミュニケーションが可能な開教使の存在を求めていることが読み取れる。

こうした調査結果を基に言及できることは、本宗でいかなる開教使養成が可能なのかを探る取り組みが、今後の本研究班の研究の重要な方向性となっていくことは明らかである。

## 沖縄本島都市部における各宗派寺院の現状と展望③

### 目次

はじめに 武田道生

沖縄の仏教寺院の活動の特徴 名和清隆

調査寺院報告

東寺真言宗 遍照寺 中村憲司

日蓮宗 道善寺 春近敬

真宗大谷派の活動〔諦聴寺・真宗大谷派沖縄開教本部〕

春近敬

浄土真宗本願寺派 来迎寺 名和清隆

曹洞宗 天童寺 江島尚俊

高野山真言宗 正福寺 大澤広嗣

### はじめに

本研究プロジェクトは、沖縄本島都市部における各宗派寺院の開教の現状を調査分析することを目的としている。今回の研究報告をもって、本プロジェクトは終了することになるので、これまでの経過を振り返り、今回新たに報告する寺院に関する調査報告をもって最終報告としたい。

まず始めの二〇〇四（平成十六）年報告〔『教化研究』十五号〕では、袋中上人来琉・沖縄開教四〇〇年を記念して行われた事業を契機として、三州教区沖縄組の浄土宗寺院と沖縄の民俗信仰を中心とした宗教状況の調査並びに寺院住職の聞き取り調査を行った。詳

細は譲るが、十五号では、総論として鷺見定信が「沖繩における仏教寺院」と題して、歴史の変遷とその宗教的意味について概括的に分析した。沖繩における仏教寺院は十三世紀英祖王の時代に禅鑑という禅僧が漂着し庇護を受けて極楽寺という寺院を建立したことに始まるとされ、十四世紀には薩摩から来琉した真言宗僧によって護国寺が勅願寺として開山された。以後琉球王朝の庇護を受けた僧は多く、浄土宗の袋中もそのひとりであった。江戸期には薩摩藩の支配下に置かれ活動は停滞するものの、明治になって琉球王朝が廃止されると、浄土真宗を中心に沖繩開教が徐々に始まった。沖繩の宗教風土については鷺見論文に詳しいが、一九七二年の沖繩の本土復帰を契機にして、仏教式の葬祭が一般に爆発的に浸透して来たこともあって、各宗派を含めて僧侶の活動が活発になってきている。また沖繩出身の僧侶も多数出現してきている。こうした背景のなか、浄土宗も復帰を契機に宗門が袋中寺を再建したことによって、以後寺院の建立が相次いでいる

ことは、武田道生が「沖繩本島都市部における浄土宗寺院の開教の歴史と現状—その特徴について」としてそれらの特徴の分析を試みた。各論として浄土宗個別寺院の聞き取り報告と今後の展望について、中村憲司「袋中寺・光明寺」、大澤広嗣「西方寺」、中村憲司「阿弥陀寺」、江島尚俊・大澤広嗣「回向寺」、江島尚俊「観音寺」、名和清隆「極楽寺」「大雲寺」について行った。なお、以下の報告においても、寺院名は袋中寺など歴史的にも寺院としても明白な場合を別にして、すべて仮称である。

次の二〇〇五年十六号では、前回未調査だった浄土宗三寺院について報告を行った。これら寺院はともに近年開教を始めた寺院で、僧侶は共に在家出身者で、そのうち二人は沖繩出身である。また彼らは開教使としての独自の方向性を持っている。尼僧である点を生かした活動など多彩で、今後の浄土宗の寺院活動を考えるうえにも重要な意味を持っている。それぞれ担当は、名和清隆「浄土宗寶勝寺宮古島別院布教所」「東林寺」、

中村憲司「浄土宗三宝寺沖繩布教所（善智庵）」である。

二〇〇六年十七号からは、第二期の開教研究として浄土宗寺院ばかりではなく他宗派寺院の活動を調査分析した。最初に、浄土宗寺院の二〇〇五年のその後の活動について報告した。そこでは阿弥陀寺と観音寺が布教活動を認められ、沖縄県の宗教法人認証を受けたことと東林寺と安徳寺の開山法要が行われ、その内容について報告した。さらに二〇〇六年二月に沖繩組合同で「五重相伝会」が初めて行われたことに触れた。次いで他宗派寺院の調査報告を行った。その内容は、最初に、名和清隆は、「沖繩における浄土真宗本願寺派の開教」で、教団をあげて組織的な開教に取り組んできた浄土真宗本願寺派の開教方針とその展開の歴史について分析を行い、大澤広嗣は「西信寺」で、近年の本願寺派寺院の活動の典型的な例として報告した。次いで本土復帰以前から活動している寺院の例として、中村憲司は、十五世紀頃から開教を開始し、琉球王朝に庇護されてきた臨濟宗妙心寺派「寿光院」、江島尚俊

は、高野山真言宗「報恩寺」について報告した。

二〇〇七年十八号では、武田道生が「沖繩における浄土宗寺院の展開と受容」で、前号で報告した浄土宗寺院が合同で行った「五重相伝会」の受者の意識調査アンケートの内容分析を行った。この分析によって、これまで沖繩では、寺院と信者との繋がりが葬儀しかないといわれてきたことに対する新たな分析を行うことができた。五重相伝会を受けた後の受者の意識に明らかに変化が起こり、浄土宗の教義と念仏への理解が深まり、積極的な寺院への関わりを希望する数値が極めて高いことが明らかになったのである。この報告は、葬式仏教と言われ続け、生きている人間の教化が疎かになっていると批判されている浄土宗寺院の現状のなかで、沖繩ばかりでなく本土の各地で起こっている葬儀だけの寺院と檀信徒の繋がりに変化をもたらす貴重なヒントを与えてくれることだろう。

また十八号では、前号に引き続き、他宗派寺院の現状と展望についての聞き取り調査の結果を報告した。

報告は開創年代順で、大澤広嗣「大聖寺」は、琉球王朝時代の東寺真言宗、春近敬「光徳寺」は臨済宗妙心寺派、中村憲司「妙法寺」は日蓮宗、江島尚俊は「雄山寺」は真言宗智山派、名和清隆「天徳院」は天台宗の各寺院である。沖縄では、寺院ごとに様々な活動が行われていることはこれまでの報告でも明らかである。

今回取り上げた寺院の活動もそれぞれ独自性を持っている。大聖寺は世襲三代目である。この点は、明治以降世襲化が認められたどの地域でも基本的には三ないし四代目であることに変わりはなく、沖縄の特殊性でもない。主な特徴は、神仏分離以前は琉球八社のひとつという普天間宮と神仏習合した一体となっていた歴史を持つ「格式の高い」寺院であることにある。また住職は沖縄出身であるが、大正大学で社会事業を学んだことから幅広く活動し、地域の社会福祉法人の理事長を務めたり、本堂改築を機に地域商店街活性化推進協議会と共催でコンサートを開催するなど熱心な地域活動を行っている。歴史のある寺院の新たな活動とし

て特筆できるだろう。光徳寺は十九世紀初頭に開創の禅宗寺院であるが、現在の活動の特徴といえば、中城湾を一望する高台斜面に広大な墓園を中心に本堂、禅堂、納骨堂、研修道場を構えていることだろう。この規模は沖縄でも群を抜いている。詳細は報告に譲るが、ひとえに現任職の個性と能力によるところが大きい。

妙法寺はひとときわ異彩を放つ日蓮宗寺院である。この寺院は日蓮宗直轄ではあるが、ひとえに一昨年急逝された当時の住職の夏井師の、青少年更正に一生を捧げた個性と活動によっている。智山派雄山寺と天徳院はともに、沖縄出身者が一九八〇年代に開創した新しい寺院である。雄山寺の住職は、僧侶になるきっかけが、霊的体験であった。これまで報告した浄土宗寺院にも同様の僧侶がいたが、これから進めていこうとする寺院の方向性も共通している。こうしたあり方も沖縄型寺院のひとつと言えるだろう。このように、他宗派の調査を通じて、沖縄の寺院の特徴も一層明瞭になってきている。

本号、二〇〇八年十九号は、これまで継続して行ってきた「沖繩本島都市部における各宗派寺院の現状と展望」の最終報告となるものである。内容としては、十五号からこれまで各号で行ってきた各宗派の寺院報告と論文から構成されている。

論文は、名和清隆「沖繩の仏教寺院の活動の特徴」で、沖繩仏教寺院が急激に増加している現状を踏まえ、本号まで報告した沖繩における各宗派寺院の特徴を、僧侶の出身を本土出身と沖繩出身に分け、さらに沖繩出身者を世襲と在家出身に分類し、それぞれの活動の特徴を明らかにしている。次いで布教活動の特徴を、①葬儀・法要の執行、②寺院への帰属の教化、③「沖繩的」要素への対応に分け、それぞれ具体的事例をあげて分類している。これによって、これまで報告した個別の寺院が、沖繩寺院のあり方のなかで、どのような位置を占めているのかが個別総合的に明らかになったと思われる。

寺院報告では、大まかに寺院の開創年順では、中村

憲司「遍照寺」は東寺真言宗で、十五世紀に開創されている王朝への献納品を集積する倉を境内に持つ寺院であった。敗戦で施設全てが焼失して、寺院名を変えて別地域で活動していたが、本土復帰後、宗教法人の認証を受けて、現在は家族四名が僧籍を持ち活発に活動している。春近敬「道善寺」は、日蓮宗である。沖繩における日蓮宗の歴史は、明治の末から大正時代にかけて、在家信者が自分たちの自宅で勤行を行っていたことに始まるが、昭和十五年に宗教法人認可を受けているが、創価学会の進出もあって、現在も日蓮宗独自の布教活動は余り活発とはいえない。春近敬「真宗大谷派の活動（諦聴寺・真宗大谷派沖繩開教本部）」は、沖繩唯一の開教寺院であり、明治初頭の真宗禁制の弾圧を受けた歴史を持つ諦聴寺の活動を中心に、大谷派の独自の活動を報告している。名和清隆「来迎寺」は浄土真宗本願寺派に属する。十七号で名和は本願寺派の宗門をあげての布教活動を報告したが、来迎寺はそれらを補う報告である。本土寺院に生まれ沖繩開教を



目指した住職によって、九一年に法人認証を受けた独自の活動色が強い寺院である。江島尚俊の曹洞宗「天童寺」、大澤広嗣の高野山真言宗「正福寺」は共に、沖繩出身の僧侶によって開創された寺院である。その資格取得までの経歴は、本土の世襲寺院ではあり得ないほど多様であり、世襲僧とは異なる宗教への関わり方が布教の上で大きな力となっている。

以上のように、これまで四年余に及ぶ沖繩寺院調査を行ってきたが、もとより本号で取り上げた寺院報告が、沖繩の全ての寺院というわけではない。しかし沖繩の仏教寺院の全体像を捉えるには、ほぼ十分であったと思われる。

しかしこの調査報告はあくまでも、現時点までのものであり、再三にわたって本文中で各報告者が述べているように、現在沖繩の寺院は定着期を迎え、さらに新しい転換期にさしかかっていることを伺わせる報告は多い。また調査中でも本土仏教の進出は加速化している、日蓮宗宗門の本格的挺子入れ、昨年の天台宗

の開宗千二百年事業としての沖繩初の授戒会厳修、同じく昨年には真言宗豊山派初の沖繩寺院が糸満市に出来た。真言宗豊山派の寺院は、本土出身の僧の個人開教ではあったが、宗門あげての開山式であったことなど個人開教期から宗門による本格的な沖繩開教期に入ったことが感じられる。今回の報告をもって、「開教」プロジェクト「沖繩本島都市部における各宗派寺院の現状と展望」は終了するが、沖繩の仏教のこれからの展開には関心をもっていきたい。

## 沖繩の仏教寺院の活動の特徴

はじめに

沖繩においては、一九七二年（昭和四七年）の本土復帰を契機にして、宗教者の数が増大した。神道、キリスト教、仏教いずれも急激に教師数を増加させたが、そのなかで特に急激な増加をみせたのが、仏教の僧侶であった。このような状況で急増する寺院・僧侶について、その歴史的展開と具体的な活動から捉えることは、「人口に対して僧侶が少ない」という地域に対して、新たに僧侶が活動を開始するという「開教」を考える上で、重要な資料となるであろう。

浄土宗総合研究所開教班は、大正大学「沖繩と本土化」研究会と合同で、二〇〇四（平成一六）年二月から翌二〇〇五年八月にかけて、現在沖繩で活動している寺院三四ヶ寺（僧侶三三名<sup>1)</sup>）に対して寺院の歴史的展開、僧侶のライフストーリー、活動内容に関する聞き取り調査を実施した。本稿では、インタビューを行なった

三四ヶ寺の調査結果をもとに、現在沖繩で活動している僧侶の出自および活動の現状を実態的に捉え分析することにより、国内開教施策を考える上での基礎的資料としたい。なお、本稿で事例として挙げる寺院の詳細は、『教化研究』一六一―一九号を参照頂きたい。

### 一．沖繩の仏教の状況

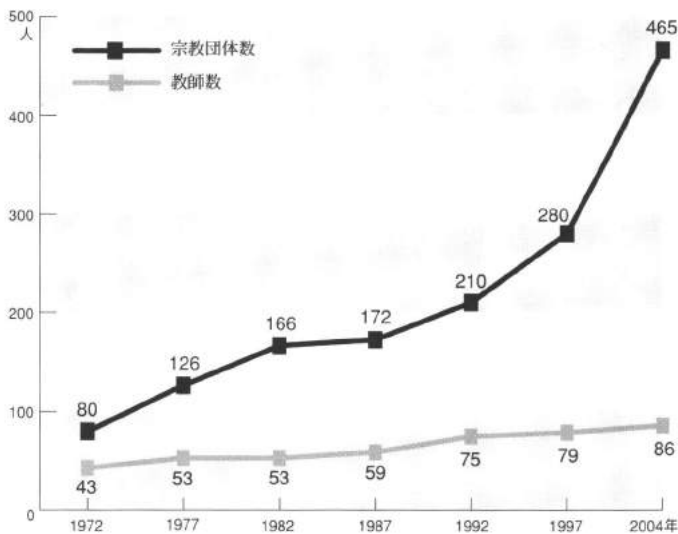
「沖繩県宗教法人名簿」によると、二〇〇六年現在、沖繩における仏教系宗教法人は五八ヶ寺である。その内訳は、臨済宗妙心寺派一五ヶ寺、高野山真言宗三ヶ寺、東寺真言宗五ヶ寺、真言宗智山派一ヶ寺、浄土真宗本願寺派一三ヶ寺、真宗大谷派一ヶ寺、浄土宗五ヶ寺、日蓮宗二ヶ寺、日蓮正宗五ヶ寺、曹洞宗一ヶ寺、金峯山修験本宗三ヶ寺、立正佼成会一ヶ寺、単立三ヶ寺となっている<sup>2)</sup>。また、文化庁の『宗教学年鑑』によると、二〇〇四（平成一六）年の仏教系宗教団体数は八六ヶ寺である。しかしながら、沖繩県の電話帳で調べてみると、一一〇以上の寺院を確認できることから、現在、

沖縄県では百ヶ寺程度の仏教寺院が活動していると推測できる。

『宗教年鑑』によると、一九七二（昭和四七）年には、仏教の宗教団体数が四三、教師数八〇人であったが、本土返還を契機として急増していく。一九八二年では宗教団体数が五三、教師数一六六人、一九九二（平成四）年では宗教団体数が七五人、教師数二一〇人である。二〇〇四（平成一六）年では宗教団体数が八六と一九七二（昭和四七）年と比べると倍増し、教師数は四六五人と一九七二年と比べると五倍以上の増加を見せている。特に、平成以降の宗教団体数と僧侶数の増加が著しいことがわかる。その仏教寺院と僧侶の増加を、一九八七（昭和六二）年から二〇〇四（平成一六）年までの変化で見ると、寺院の増加は二七ヶ寺であるのに対し、僧侶は二九三人も増加している。つまり、平成以降、とくに寺院を持たないで活動している僧侶が増加していると推定できるのである（図一参照）。

人口を寺院数で割った数（寺当人口）を見ると、

図一 沖縄県における仏教寺院数と僧侶数の変化  
（文化庁『宗教年鑑』昭和四八年度版～平成一七年度版より作成）



二〇〇〇年の全国平均は、一、六一四人（人口一二六、八一八、五六八人、七八、五七七ヶ寺）であるのに対して、沖縄県では二四八七二人（人口一三二、八三二〇人、五三ヶ寺<sup>(5)</sup>）と全国平均の一五倍以上と突出している。二

位の神奈川県が四、三七一人(人口八、四八九、九七四人、一、九四一ヶ寺)であるので、その突出ぶりが際立っている。この人口と寺院数のアンバランスな状況が、仏教寺院・僧侶の増加に繋がっていると考えられる。

## 二. 僧侶の出自

このことは、三四ヶ寺(三三名)への聞き取り調査をもとに、現在沖縄で活動している僧侶の出自を、A. 本土出身 B. 沖縄出身と分類し、それぞれを宗派活動開始時期と関連させその特徴を捉える。

A. 本土出身者・・・二三名

宗派の職員・開教使・・・四名

その他・・・九名

本土出身の僧侶は三三名中二三名である。宗派の職員(宗派が管轄する直轄寺院や開教事務所の主任、開教使)、または宗派から援助を受けて活動している開教使が四名である。その他の九名の内訳は、元は宗派の職員の開教使であったが、後に自ら布教を開始した僧

侶が一名、何らかの人的繋がりで沖縄に渡り活動を始めた僧侶が八名である。一九六四(昭和三九)年から沖縄で活動を開始した僧侶もいるが、多くは本土復帰以降、特に一九八〇年代以降に活動を開始している。

B. 沖縄出身者<sup>(?)</sup>・・・二〇名

世襲僧侶・・・二二人

琉球王朝時代に建立された寺院で大正期以降に世襲化した寺院の後継者・・・一〇名  
大正期く本土復帰に沖縄に建立された寺院の後継者・・・二名

在家出身僧侶・・・八人(活動開始は一九八五年頃から)

本土で仏教に出会い、本土で僧侶資格を得し、沖縄に戻って活動を開始・・・二名  
沖縄で仏教に出会い、本土で僧侶資格を得し、沖縄に戻って活動を開始・・・二名

沖繩で仏教に興味を持ち、沖繩で仕事を続けながら僧侶資格を取得……四名

沖繩出身者二〇人は、寺院を世襲するために僧侶の道を選んだ人（世襲僧侶）が一二名、寺院出身でない僧侶（在家出身僧侶）が八名となっている。

世襲僧侶二二名のうち、琉球王朝時代に建立された寺院で大正期以降に世襲化した寺院を継いだ人は一〇名である。宗派で見ると臨済宗妙心寺派と高野山真言宗・東寺真言宗の寺院の多くがこれに当たり、世襲化してから三代目・四代目の住職が多い。<sup>(8)</sup> また、大正期から本土復帰までの間に沖繩に建立された寺院で世襲化が進んでいる事例が二ヶ寺見られた。これは一九二二（大正一〇）年に建立された日蓮宗・道善寺（現住職は五代目住職）と一九五七（昭和三二）年に建立された高野山真言宗・正福寺（現住職は二代目住職）である。

沖繩出身で在家出身の僧侶は八名であるが、彼らが沖繩で活動を開始した時期は、一九八五（昭和六〇）年頃からである。<sup>(9)</sup> 彼らが仏教に触れ、僧侶資格を取得

するに至るまでには、大きく分けて三つのパターンがある。一つめは、学校や仕事などの関係で本土に行き、そこで仏教に出会い、僧侶資格を取得し、沖繩に戻って活動を開始したパターンである。これに当たるのは臨済宗・A寺、天台宗・天徳院の二名の住職である。二つめは、沖繩で仏教に出会い、本土で僧侶資格を取得し、沖繩に戻って活動を開始したパターンである。これは、曹洞宗・天竜寺、浄土宗・浄土宗三寶寺沖繩布教所の住職がこれにあたる。三つめは、沖繩で仏教に興味を持ち、沖繩で仕事を続けながら僧侶資格を取得したパターンである。これに当てはまるのは四名（浄土宗・回向寺、浄土宗・阿弥陀寺、浄土宗・観音寺、浄土宗・浄土宗寶勝寺宮古島別院布教所の各住職）いるが、いずれも、佛敎大学の通信課程で僧侶資格を取得した浄土宗僧侶である。これは、沖繩にいながら僧侶になる唯一の手段が、佛敎大学の通信課程であることが大きく影響していると考えられる。また、佛敎大学の通信課程を経て僧侶となった四人のうちの三人

が、「仏教に対して知的興味が湧いた」から通信課程に入学し、その結果として僧侶資格を取得している。彼らは僧侶資格を取得した後も、僧侶として生計を立てるつもりはなかったのだが、「周りの人びとからの依頼が段々と増えて」いって、終に寺院を創建するに至っている。

沖繩出身で在家出身者のうち二名が、その家族が霊的能力を有す民間巫者であった。また、沖繩の在家出身者、本土の在家出身者それぞれ一名が自らの霊的能力が発動したことをきっかけとして僧侶の道を歩んでいる。

なお、沖繩出身で在家出身の僧侶のなかには、彼らの子弟が僧侶資格を取得し、親子で法務に携わっている事例もあり、世襲化の兆しが見える。

### 三. 僧侶の活動の特徴

ここでは、沖繩の僧侶が行なっている活動の特徴を、沖繩の僧侶が共通して盛んに行っている「①葬儀・法

要の執行」、近年特徴的な動きとして見えるようになった「②寺院への帰属の強化」への取り組み、そして僧侶によって異なる態度が見られる「③「沖繩的」要素への対応」から捉える。

#### ①葬儀・法要の執行

長谷部八朗は沖繩の葬儀の実態について、「かつてはユタなどの民間職能者主導で死者儀礼を行うケースが目についたが、近年は、寺院に直接あるいは葬祭業者を通して依頼する例が顕著な増加をみせている」としたうえで、寺院活動の状況を「大半は、葬儀や追善供養の依頼に追われて、ほかの活動にまで手が回らないのが実情のようである」と述べている。現在、沖繩において、僧侶を介在せずにユタなどの民間職能者のみに依頼して葬儀を執行する割合がどの程度であるか判然としなが、僧侶、およびその信者への聞き取り調査で聞いた範囲では、僧侶と民間職能者の両方を呼ぶ場合もあるが、「ほとんどの葬儀では僧侶を呼んでいる」

という。

沖繩においては、県人口に対して僧侶・寺院の数が少ない状況となっている。人口を寺院数で割った数（寺当人口）は、全国平均一、六一四人であるが、沖繩では二四、八七二人であり、全国平均の一五倍以上である。沖繩で実質的に活動していると推定される百ヶ寺という数値で計算してみても、全国平均の七倍以上である。

このため、葬儀を年間百件以上執行している寺院も珍しくない。また付随する年回法要もあわせると「葬儀と年回法要をこなすのに追われる」という状況になる。調査した寺院の中で見ると、沖繩本島で最も年間葬儀件数が多い寺院は一四〇件から一五〇件、宮古島では年間三〇〇件以上という寺院もある。これら葬儀の多くは、葬祭業者を介しての依頼である。

しかし、全ての寺院が多く葬祭業者をこなしているわけではなく、年間葬儀件数が五件から一五件という寺院もある。注目すべきは、ここ二〇年の間で葬儀件数が激減している寺が少なからず見られることである。

二〇年間で半減、あるいは、五分の一の葬儀件数になった寺院も見られた。現在の沖繩では、葬祭業者が五〜七万円程度<sup>(12)</sup>、法要布施が三〜五万円程度が一般的であることから、葬祭業者・法要による収入だけで経済的基盤が成り立っている寺院は決して多いとはいえない。

先に挙げた寺院で葬祭業者数が減少した理由を即断することはできないが、その理由として考えられることは、平成に入る頃からの僧侶数の増加、特に寺院を持たずに活動している僧侶が増えたことが挙げられよう<sup>(13)</sup>。また、檀家制度がない沖繩においては、葬祭業者の依頼は葬祭業者を介して行なわれることが大半である。葬祭業者である僧侶を、葬祭業者が選択して葬祭依頼者に紹介するという構図であり、僧侶に対して葬祭業者が大きな影響力を持っている状況であるといえる。先に挙げた寺院の中には、葬祭業者との関係が良好でなくなつたため、葬祭業者からの葬祭の仲介が減少したという寺院もある。

## ②寺院への帰属の強化

「沖縄には檀家組織は存在しない」「葬式に依頼した僧侶が気に入らなかつたら、年回法要は違う僧侶に頼むのが普通」などと言われている。しかし、近年、「寺院への帰属を強化しよう」とする寺院側からの試みが見られる。その取り組みには a) 信徒化への取り組み b) 納骨堂・寺院墓地の建設と法要依頼の抱え込みの二点が見られる。

### a) 信徒化への取り組み

調査を実施した寺院の中では、積極的に信徒化をはかり、恒常的な関係を構築している事例が見られた。

事例一) 阿弥陀寺(浄土宗、沖縄・在家出身)<sup>14)</sup>

葬儀・法要依頼を受けた人々を名簿に記載していき、彼らに対して、寺院の各行事の案内を出している。また、名簿に記載されている人々に対して三千円という布施額を明記した棚経の希望を募る往復

葉書を毎年出している。年々棚経を希望する信徒が増えているという。なお棚経は、新盆だけではなく、毎年行うように勧めている。現在では、旧七月一三〜一五日の間に一二〇軒ほどをまわっている。また、沖縄では通夜を行う風習がほとんどないが、極力喪家に赴き、通夜を行なうようにしている。現在では葬儀一〇件に対して、三〜四の割合で通夜を行ってゐる。通夜は法話をするのに一番良い機会だという。

二〇〇四(平成一六)年二月に行つた浄土宗主催の袋中上人来沖四百年記念法要「袋中祭」<sup>15)</sup>には、この寺院から二三七人の参加者を出している。また、二〇〇六年二月に五日間かけて行つた教化儀礼である五重相伝会には、沖縄にある浄土宗寺院のなかで最も多い一三名の参加者を出し、同年十一月に行われた五重作礼には七一人の参加者を出している。なお、五重相伝会開筵の半年ほど前から毎月二五日の法然上人の命日の夜、法話と念仏の会「和順の会」を開催してきたが、参加者は毎回増加し二〇人以上



の人々が参加していた。会員のなかには、寺に依頼して沖繩では見ることの少なかった本尊の阿弥陀如来を奉る者や浄土宗独自の数珠を持つ者も出てきたという。<sup>116)</sup>

事例二) 雄山寺(真言宗智山派、本土・在家出身)<sup>117)</sup>

雄山寺には、信徒組織である護持会「佛心会」(月額一口千円から)がある。各信徒にそれぞれの役割を与えたうえで組織化されている。現在は計三九名が役員として組み込まれており、彼らが中心となり、諸行事の運営が成り立っている。雄山寺の講組織である「不動講」を運営する不動講運営部、年間行事の企画運営を行なう行事運営部、機関紙を年数回発行する文化広報部、施設の維持や拡充を計画する環境整備部などがある。また婦人部や青年部も組織されており、そこでは信徒の主体性を重視した活動が展開されている。また今年から信徒同士の親睦会が毎月一回開催されることになった。

事例三) 浄土宗三宝寺沖繩布教所(浄土宗、沖繩・在家出身)<sup>118)</sup>

浄土宗三宝寺沖繩布教所は尼僧寺院である。「女性のためのお寺」をキャッチフレーズとして開創され、古くからの友人、趣旨に賛同してくれた約一〇〇名を信徒として組織している。会費は徴収していない。居住地区により沖繩本島を三つの組に分け、それぞれに組長を置き、組長に行事などの諸連絡をお願いしている。二〇〇五(平成一七)年から寺報を信徒に送付している。

事例四) 西信寺(浄土真宗本願寺派、本土・在家出身)<sup>119)</sup>

西信寺には、檀信徒費を徴収するような組織はないが、行事を行うごとに集まる固定信者(門徒)が三〇名ほどいる。葬儀による機縁もあるが、社会活動・地域活動との結びつきによる縁で人が集まるようになった。女性中心となり懇談の場を持つ「研修会」、一緒に食事を作り懇親を深める「茶話会」が

ある。「草月生花教室」が不定期で月に約七回程度行われ、門徒以外に約二五名程度が参加している。

長谷部は「葬儀・法要の導師の執行が、すなわち依

頼者とのその後における固定的な関係を生む契機とはほとんどなっていないのが実情である」と指摘している。しかし、事例一の阿弥陀寺は、葬儀執行を契機とし、葬儀依頼者に対して積極的にアプローチすることにより、一過性でない関係を構築している。また、寺院で法話会などを開催するとともに、教化儀礼などの行事に信徒を積極的に参加させることにより、浄土宗の教義を浸透させることにある程度成功しているといえよう。このように阿弥陀寺が信徒組織形成に成功したのは、住職・住職婦人ともに沖縄出身だということも大きな要因として考えられる。住職がかつて働いていた職場の人間関係、住職婦人には地域の婦人会やPTA役員経験による、長年培ってきた人間関係がある。また、夫婦ともに沖縄の方言が理解できることにより、「特に

お年寄りに安心感を与えることが出来る」ことも大きく関係しよう。また、事例三の浄土宗三宝寺沖縄布教所においても、沖縄出身という出自を活かし、友人関係を中心として信徒を組織している。

事例二の雄山寺においては、住職と信徒は住職の霊的能力に基づく病氣治癒を契機とした関係であった。しかし、一過性の相談者でなく信徒として定着するようになったのは、住職の考えや教えに共感しているからである。また、信徒組織の運営にあたっては、その多くを信徒の主体性に任せていることが大きな理由として考えられる。<sup>21)</sup>

事例四の西信寺では、年末年始に新年参拝のため周辺地域から六千人ほど集まる。これは、地元紙の広告やラジオのコマーシャルで宣伝をしているからである。くじ引きなどのゲームを行い、旅行や玩具などの景品を多く用意している。その目的は西信寺の知名度を上げ、人々の「寺は不吉だ」というイメージを変えることが目的である。固定信者の拡大とともに、誰でも気

輕に立ち寄れる「開かれた寺」を目指し、固定信者とは異なる「緩やかな信徒関係」の構築を目指している。

また、宗派で信徒形成を促進する動きも見られる。臨濟宗妙心寺派では本山の指導により、一九七五（昭和五〇）年頃から信徒組織を形成し、本山に信徒数を報告する制度をとっている。また、浄土宗では袋中祭という行事、また五重相伝会、五重作札という教化儀礼を行い、宗派意識の向上、教義の浸透を図っている。これは、結果として各寺院の信徒組織の形成・強化にも役立ついると考えられよう。

b) 納骨堂・寺院墓地の建設と法要依頼の抱え込み

調査寺院三四ヶ寺のうち、二四ヶ寺が納骨堂を所有していることが判明した。これら納骨堂の多くは、月または年を単位とした預骨料を徴収するという、「一時預かり」を基本としている。多い寺院では千基もの遺骨を預かり、大きな収入源となっている。しかし、遺骨を預けたまま、預骨料を払わないまま行方知れず

になってしまふ場合も多いという。

近年、墓の役割を担った（永代使用料を徴収する）納骨堂、寺院が境内外に造成した寺院墓地が出現している。これらの中には、葬儀・法要は納骨堂・寺院墓地を管理している寺院に依頼することを契約条件としているところもある。これは、墓を媒体として寺への帰属を強める動きであり、新たな「檀徒」関係の萌芽ともとれる。

### ③「沖繩的」要素への対応

沖繩の僧侶は、祖先祭祀をめぐる「仏教的」と「沖繩的」との「せめぎ合い」のなかに置かれているといえる。葬儀をはじめとする先祖祭祀には僧侶が必要である、という観念は一般的なものとなっている。また、これまで沖繩では見られなかった塔婆、通夜、棚経といった本土の様式が導入され受け容れられつつある。しかし、一方で依頼者やその親族には、これまで行ってきた伝統的（沖繩的）な様式への欲求が見られる

場合も多いという。

このような状況において、沖縄的要素に対して、排除するのか、共存（黙認）するのか、取り込むのかといった異なる態度が僧侶によって見られる。これは、沖縄という独自の宗教文化を持つ地に仏教という外来宗教が入ってきたことによって生じた摩擦に対して、僧侶が採った対処方法の相違によるものだと考えられる。もちろん、同じ僧侶であっても、種々の具体的事例に応じて異なる態度を示すこともある。沖縄的要素に対して、「排除」「共存（黙認）」「取り込み」という異なる態度は、具体的に以下のような場合において見られた。

#### A. 沖縄的要素の「排除」

- ・本堂内でのユタを伴っての参拝は許可しない。
- ・ヌジファーなどの民間儀礼は受けない。
- ・年回法要に際の供え物には、三枚肉は上げさせない。

#### B. 沖縄的要素との「共存（黙認）」

- ・本堂内でのユタを伴っての参拝を許可。
- ・法要中に三枚肉はあげさせないが、法要が終わった後は許可。

#### C. 沖縄的要素の「取り込み」

- ・参拝するユタを信徒として組織化している。（臨濟宗・沖縄出身）
- ・ヌジファーなどの民間儀礼を行う。
- ・納骨式にウチカビを焼く。

調査寺院の中には、「首里十二ヶ所巡り」にあたる寺院や「琉球八社」を祀る寺院のように、祈願所にあたる寺院が含まれており、ユタを伴って多くの人が参拝に訪れる寺院もある。しかし、ユタを伴っての参詣者を、本堂内に入れるか否かでその対応が異なっている。

僧侶が沖縄の先祖祭祀を取り入れている場合も多く見られる。依頼者の求めに応じて、ヌジファー、ヤシキウガン、トドメノウガンなどの沖縄の伝統的民間儀

礼を行なっている僧侶は多い。このような場合、例えばヌジファアの場合では、「魂を抜く行為」ではなく、「供養」という意味合いである」と依頼者に説明した上で儀礼を執行している僧侶もいる。また、法要の際にウチカビを焼くなど、儀礼に沖縄の伝統的儀礼様式を取り入れる例が見られた。

なお、「排除」「共存（黙認）」「取り込み」という異なる態度と、僧侶の出自との関連については一概に言うことはできない。つまり、本土出身・沖縄出身・寺院出身・在家出身ということよりもむしろ、それぞれの僧侶個人の考えによるところが大きいうである。しかしながら、沖縄出身の在家出身僧侶には、沖縄の先祖祭祀を積極的に取り入れる傾向が強いと思われる。

次に沖縄的要素を「取り込む」ということを具体的に見るために、天台宗・天徳院の例を挙げる。天徳院住職は、葬儀・追善供養などの儀礼に沖縄方言でグアイヌ挿入を入れて行っている。天徳院住職がこのような方法を

取るようになった経緯を、天徳院の活動とともに見てみる。

#### 事例5) 天徳院

沖縄出身である天徳院住職は、沖縄での布教を開始するにあたり、祖母に相談に乗ってもらおうと考えていた。祖母は元来霊感が鋭い女性で、内臓を悪くした時「あなたは、カミンチュにならないと治らない」と判示され、ユタになった人である。そのため、祖母は沖縄の宗教や風習に詳しくだったのである。しかし、沖縄に帰って程なく、祖母が死去してしまった。仕方がないので、そのため、東京で知り合った霊能者（真言宗の僧侶、本土出身の人）に沖縄に来てもらい、ウツキ齋場御嶽で占ってもらい今後の布教の方針を決めた。それは、地元（沖縄）の風習を十分に踏まえ、沖縄の言葉で仏教を説くことである。そのため、葬儀をはじめとする儀礼を、ユタに伝統的な方法を教わったうえで、仏教式にアレンジして行うようにした。

天徳院住職の葬儀・追善供養の特徴は、沖繩の伝統的なやり方を取り入れていることである。例えば、経文の中に、沖繩の神様への拝詞を沖繩方言で組み込んでいる。これはユタが用いている拝詞を参考に作成した。葬儀では、現前に死者の霊がいるかのごとく「皆さんがあなたのために集まっていますよ、これから葬儀を始めますよ」という意味合いを沖繩方言で霊に語りかけてからはじめる。また、納骨の際には、墓を守護している神（イサイガミ）を祭り、「金の鍵、銀の鍵をあけて死者を迎え入れてください。」と沖繩方言でお願いする。戒名は必ず授けるが、これは「引導を授ける都合上戒名が必要だからであり、個人的にはあまり意味がないと思っている」という。

追善供養は、初七日法要と四十九日法要には行くことが多い。四十九日の間は死者の霊や人の気が出たり入ったりするから、四十九日法要にはイサイガミに墓の鍵を閉めてくれるようお願いする「トドメノウガン」を行う。

元カウンセラーであった住職は、一九九四（平成六）年頃から五年間ほど、カウンセリングの手法を活かしたの相談会を寺で行っていた。週に二、三人程度が相談に訪れてきたという。その中でも、先祖に関する相談ごとでは、守護してくれる先祖の存在を説き、墓参りを勧めたりした。また、場合によっては法事を行うこともあった。自分の手に負えない相談者には、その悩みや症状により医者、ユタなどそれぞれの専門家を紹介していた。現在でも相談に訪れる人がいるが、カウンセリングは行わず、それぞれの専門家を紹介するのみである。

かつては、月に一回の法話会、ユタや三世相サンシンゾウを講師として招いて、沖繩の伝統的行事についての不定期の勉強会を開催していた。なお、現在は中断している。

このように、天徳院住職は、自分の活動方針を決定する際には、霊能者に自ら相談をし、ユタに伝統的な方法を教わったうえで、葬儀をはじめとする儀礼を、

仏教式にアレンジして行うようにした。また自分に相談に来た相談者をユタに紹介する、またユタを招いての講習会を開催するなどしていることから、天徳院住職は沖繩的宗教文化を、自らの活動に取り込みながら展開しているのが分かる。しかしながら、天徳院住職の活動の方針は「地元の風習を十分に踏まえ、沖繩の言葉で仏教を説くこと」であり、あくまでも自分は「仏教僧侶」であり「仏教の教えを伝える」という姿勢を強く持っているのである。

## 結語

これまで、現在の沖繩での仏教寺院の状況、および僧侶の出自と活動の特徴を捉え報告してきた。本土復帰以降の急激な仏教僧侶の増加は、本土から僧侶がやってくると同時に、沖繩在家出身者が新たに僧侶となったというものであった。

大橋英寿は、沖繩におけるシャーマニズムを、多様な文化要素を内包する文化複合現象としたうえで、そ

の具体的側面として、固有信仰である「祖先崇拜」としての宗教的側面、実質的な「慣習法」としての生活規範的側面、「信仰治療」とでも呼ぶべき治療的側面を挙げている。そしてこれらそれぞれの側面に外来文化が拮抗しており、宗教的側面のみで言えば固有信仰である祖先崇拜が外来の諸宗教に対して「一方的有利」にあるとしている。つまり、仏教、キリスト教などに對しては、沖繩の伝統的な「祖先崇拜」が優位にあると<sup>24</sup>言うのである。

確かに、葬儀は僧侶に依頼するが、納骨、その後の祭祀はユタに依頼する事例や、追善供養の際に、僧侶とユタ両方に依頼し、僧侶が法事を勤めた直後にユタが儀礼を執るといった事例もあるように、沖繩の人びとは、状況によって僧侶とユタを使い分ける、または併用することも多い。しかし、このような状況のなか、僧侶は沖繩の人びとの要求に応えながら、沖繩の宗教的世界観と伝統的様式を柔軟に取り込み、自らの様式を変えながらも仏教僧としての立場を保持しよ

うとしている。そのうえで信徒集団を形成し、教義の浸透をはかっているのである。

(\*本稿中に出てくる寺院名は匿名であり、これまで「教化研究」一五、一九で報告した寺院名に対応している。なお、「教化研究」で報告していない寺院に関しては、「〇〇宗・A寺」のように記述した。)

(\*本稿は、名和清隆「沖繩における仏教寺院の状況と僧侶の活動」(研究代表 鷺見定信「沖繩における死者慣行の変容と「本土化」——那覇市周辺地域における実態調査」課題番号一六五二〇〇五六平成一六年度、平成一八年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 研究報告書 一部を加筆訂正したものである。)

## 註記

- (1) 浄土宗袋中寺は、現在任職が不在であるため、執事をつとめている浄土宗・光明寺任職にインタビューを行った。
- (2) 「沖繩県宗教学法人名簿」による。同名簿は、沖繩県の公式ホームページで公開されている。 [http://www3.pref.okinawa.jp/site/contents/attach/3915/s\\_syukyohoujinmeibo\\_h18.pdf](http://www3.pref.okinawa.jp/site/contents/attach/3915/s_syukyohoujinmeibo_h18.pdf)
- (3) NTT西日本発行の職業別電話番号(タウンページ)に記

載されている仏教寺院を確認したところ、沖繩県全体で一四ヶ寺が確認できた。(大正大学「沖繩と本土化研究会」調べ)。

(4) 文化庁「宗教学年鑑」より。

(5) ここでの寺院数は、寿企西編「日本寺院総鑑(二〇〇〇年版)」(寿企画、二〇〇〇年)より。

(6) 具体的には、寺院の歴史、任職のライフヒストリーと僧侶になった契機、葬儀・追善供養の現状、葬儀・追善供養以外の法要の現状、寺院の組織、納骨堂などの寺院の事業、その他特徴的な活動などを中心として聞き取りを行った。なお、聞き取りは一ヶ寺あたり二時間〜六時間程度であり、必要に応じて後日電話での補足調査を行った。

(7) この場合の「沖繩出身」とは沖繩で出生したという意味である。

(8) 沖繩における臨済宗妙心寺派の寺院は、一九二五(大正一〇)年までは任期四年の輪番制であった。

(9) 浄土宗・阿弥陀寺は一九七四(昭和四九)年から活動を開始しているが、布教所を開設した一九八六(昭和六一)年までは知り合いの葬儀・法事を行う程度であった。

(10) 長谷部八朗「沖繩と仏教」序説——沖繩における仏教の歴史と現状(駒澤大学仏教学部論集第二十七号、一九九六年)、一七八頁。

(11) 一九七〇年二月、一九七一年四月に本島北部の本部町で調査を行った桜井徳太郎は、「死の儀礼に現われた仏教の影響も無視できない。本島内の各地域では、葬儀に仏僧を招いて挙行する例が多く、その後の供養儀礼特に年忌供養



にも仏僧の関与する例が都市およびその周辺部落に多く見られる。けれども漁村や田園部になると、仏僧の招請は全くなく、ことごとくがユタの管掌となる」と述べている(桜井徳太郎「沖繩のシヤマニズム——民間巫女の生態と機能」弘文堂、一九七三年、五七頁)。しかし、現在では、名護市一四ヶ寺・本部町二ヶ寺、今帰仁一ヶ寺の仏教寺院が存在しており、本島北部においても、葬儀に僧侶をよぶ習慣が広まっていると考えられる。

(12) 沖繩では、戒名を授与することに対する特別な布施は一般的ではない。

(13) 図一参照

(14) 「教化研究」一五、「阿弥陀寺」参照。

(15) 浄土宗を始めて沖繩に伝えた袋中の遺徳を偲び、二〇〇四(平成一六)年二月七日に那覇市松山公園を中心にして挙行された。

(16) 「教化研究」一八、三〇頁参照。

(17) 「教化研究」一八、「雄山寺」参照。

(18) 「教化研究」一六、「浄土宗三寶寺沖繩布教所(善智庵)」参照。

(19) 「教化研究」一七、「西信寺」参照。

(20) 前掲「沖繩と仏教」序説「沖繩における仏教の歴史と現状」、一七八頁。

(21) 「教化研究」一八、「雄山寺」参照。

(22) 調査寺院の中には、「首里十二ヶ所巡り」にあたる寺院や「琉球八社」を祀る寺院のように、祈願所にあたる寺院が含まれている。

(23) 稲福みき子「沖繩の仏教受容とシヤーマンの職能者——「首

里十二ヶ所巡り」の習俗をめぐって」(『宗教研究』第七一卷第一号、一九九六年)参照。稲福は、「首里十二ヶ所巡り」の習俗に対する寺院側の対応を、「伝統並存型」「純粹教義型」「融合強化型」と分類している。

(24) 大橋英寿「沖繩シヤーマニズムの社会心理学的研究」弘文堂、一九九八年、三七頁。

# 遍照寺

宗派…東寺真言宗

本尊…聖観世音菩薩

## 1. 歴史的経緯

遍照寺は、一四六六年頃または一四九二年頃に開創されたと伝えられている。当初は禅宗の寺院であったが、一六七一年に(1)真言宗の門流となり、聖観世音菩薩を勧請した。

泊港を見下ろす立地にあつた当時の遍照寺は、琉球王国の各地の貢物を集積する公倉でもあつた。また、一八四四年にフランス人宣教師ホール・カンシユンの宿舎となつたことをきっかけに、報恩寺と並んで外国人の宿泊する公館として活用される機会が増加していった。一八五三年には、琉球を訪れたペリーが逗留

したという。

一九四五(昭和二十)年、戦禍によつて全ての寺院施設が焼失した。その後は、現在の那覇市安里周辺に福光寺という寺を建立して活動していた。寺名を変えて活動していた理由は、「遍照寺は本来の地になければならない」という信念が先代住職にあつたからだという。戦後、寺院があつた場所は米軍の資材置き場となつていた。そのため、一九六〇年、やむなく同地から少し離れた現在地に本堂と庫裡を再建した。現在、元々遍照寺があつた場所には教育施設が建設されている。一九七三年十二月十八日、沖縄県より宗教法人の認証を受けた。

現住職は一九一四(大正三)年に生まれた。祖父である先代住職が病気で倒れた際、現住職は岐阜県で働いていたが、遍照寺を継ぐため本土から戻ることとなつた。一九五七年、師が四十三歳の時に現在の副住職である安仁屋聖順師が誕生した。その後、先代住職が遷化し、一九五六(昭和三十)年に現住職は加行を受

けた。加行から戻った一九六〇年に現在地に遍照寺を建立、再興した。現任職が僧侶になった理由は、長男で後継ぎとみなされていたためで、周囲の期待が大きかったことがあったという。

なお、今回のインタビューは副住職である安仁屋聖順師に対して行った。聖順師は、那覇市泊の小中高校を卒業し、沖縄国際大学経済学部を卒業した。卒業後の一九七九（昭和五十四）年に京都へと渡り、一年の修行の後に自坊へと戻った。

## 2. 寺院組織と規模

二〇〇四（平成十六）年八月の調査の時点で、住職を含めて四名の僧侶が寺院に所属している。副住職である長男の聖順師のほかに、次男と三男が僧侶として寺院に所属している。住職婦人は寺務を行っているが、宗教的なことには関与していない。

施設は、本堂、庫裡、納骨堂を有している。

檀信徒組織については、「強いて言えば、泊、前島地域

の葬儀など何かあれば遍照寺に来る人々」が該当するのではないかという。集会所のような人が集まれる施設が無いため、御詠歌の会などは行なっていない。法話会はいずれ行ないたいと考えている。

## 3. 宗教活動の特徴

### ①葬儀・追善供養

現在は月に六件程度の葬儀がある。以前は倍くらい増加したため減少しているという。葬祭業者による葬祭場での葬儀の依頼は断っている。同様に、葬祭場で葬儀を済ませた後に遺骨だけを預かって欲しいという喪家からの依頼も断っており、師は「寺院で葬儀をしてほしい」と述べている。沖縄の人は全て葬祭業者に任せてしまうので、「思っていた葬儀と違った」という話や、「費用がかかりすぎた」という話をよく聞くという。

葬儀の依頼は、一昔前までは喪家から電話で直接依

頼が来ていたが、現在はほとんどが葬祭業者からであ

る。「良い葬祭業者は、依頼の際に葬儀の時間調整などについて相談してくれるが、悪い葬祭業者は段取りを決めてから時間指定をしてくる」と師は述べる。また、遍照寺を指定した喪家に対して、寺院に電話をしたふりをして「遍照寺は都合が悪い」と伝え、葬祭業者と懇意な僧侶へと誘導することがあるという。

葬儀の場所は、都市部以外では自宅が多い。本堂で行なうことも多く、自宅が狭い場合は特に本堂で行なっている。最近では葬祭場での葬儀の件数が増加していることを感じている。師は「沖繩の人はあまり葬儀について理解しておらず、悪く言えば葬祭業者の言いなりになっている」と述べている。

年忌などの追善法要は、月に二十から三十件行っている。盂蘭盆前や正月前には依頼が増える。特に初七日法要と四十九日法要の依頼が多く、次いで一周忌と三回忌が多い。沖繩では十三回忌の後に、二十五回忌があり、その後三十三回忌を行うのが一般的であると

いう。

近年、遍照寺が葬儀をしていないにも関わらず、初七日法要や四十九日法要を喪家から依頼されることが増えているという。この場合は「葬儀を葬祭業者に依頼したが、形式的なもので済まされてしまい、その葬儀に納得できなかった」ということが多いそうである。しかしながら遍照寺では、他寺院で葬儀をした後に法要から依頼された場合、基本的に依頼を断っている。

師は「沖繩の人は先祖を敬うと同時に、先祖を恐れている。法要を行なう理由もわかっておらず、子や孫に恐ろしいことが無いようにやっておくという考えではないか」と捉えている。そのため、法事の際には、仏教の難しい話をしてもしかたないので、供物の供え方や法事の意味などの説明をしているという。ただお勤めして帰るだけでは次につながらないので、喪家とコミュニケーションをとることを心掛けている。

ユタが納骨式などに関わることがわかった場合、師は現場で説明してユタを呼ぶことをやめさせている。

「ユタに依頼するならば、ユタに出棺から告別式まで全てやってもらえばいい」と言うこともあり、厳しく対応している。

## ② 追善供養以外の法事

地鎮祭の依頼は月に一件ほどで、懇意な僧侶に執行してもらうことで沖繩の人は安心するという。

「お祓い」自動車祈祷や、工場の安全祈願などがある。沖繩独特の依頼である、死んだ家族のいた部屋の「お祓い」を依頼された場合は、家族が普通に亡くなったのに「お祓い」するのはおかしいと説明した上で、供養の儀礼を行なっている。

火ヒメカの神の札を先代住職の頃は、紙を切って何百枚も手書きでお札を作っていたが、現在はハンコを押して作っている。二枚一組で、年に千枚以上需要があるという。沖繩では、困った時に仏壇ではなく火の神を拜む人もいるという。

## ③ 年間行事

年中行事としては、初詣（一月一日）、十六日祭（旧一月十六日）、観音祭（旧一月十八日）、釈尊降誕会（四月八日）、弘法大師誕生会（六月十五日）、糸満市の気象台にて戦没者供養（六月二十三日）、七夕祭（旧七月七日）、火の神祈願祭（旧十月一日）などがある。観音祭は、近年は家族だけで行なっている。

## ④ その他の活動

来世や幽霊などの霊的な相談については、「死んだことがないので分からないから、自分が死んだらお教えします。そんなことを考えるよりも他のこと考えたほうが楽しい」と論じている。そもそも仏教の修行をしているのに霊が見えるのはおかしいことであり、家族には見えず特定の職能者にのみ霊が見えることもおかしい、という考え方で対応している。

稀に修行ができないかという問い合わせがあるが、修行場がないと説明して断っている。

#### 4. 今後の展望

戦争のため伽藍が焼失した遍照寺は、元々の場所とは異なる場所に再建された。師は「元の遍照寺の場所に戻りたい。土地を返還してもらい昔の場所に本堂を建てたい」と考えている。しかし、土地の返還自体が困難である上に、周辺地域は市の公園計画に含まれているため、返還されても建物を建てる許可がでないという問題もあるという。

師は「遍照寺で話を聞いて良かった、遍照寺に行つて良かったと思われること」を心掛けているという。法話だけでなく、日常での言葉使いや言い方に気を配っており、相手に威圧感を与えないよう、上からものを言わないよう努めている。まず話を聞いてもらうことが大事であるという。

「信頼されている寺は信者が増えていく。僧侶がいい加減なことをしていたら、昔からの地域の寺であつても信者は離れていくだろう」と師は考えている。

(＊本文中の全ての寺院名・一部の人物名は仮名である。)

(1) 報恩寺については『教化研究第十七号』の同項を参照のこと。

(中村憲司)

## 道善寺

宗派…日蓮宗

本尊…大曼荼羅

### 1 歴史的経緯

道善寺は、沖縄県南城市にある日蓮宗の寺院である。住職は比嘉龍昇師である。

一九二二(明治四十五)年ごろ、沖縄の日蓮宗信徒たちは、在家信徒である前田庄次郎の私邸に集つて日蓮宗の勤行を行っていたという。ほどなくして、勤行の場は同じく在家信徒の古城徳三郎宅に移された。

一九二二（大正十）年に、古城徳三郎は那覇市内に六八四坪の土地を購入し、道善寺を創建した。鹿児島市の日蓮宗寺院から派遣された竹井師が、初代住職に就任した。二代目住職の西森師は、宮崎から派遣された僧侶であった。三代目住職の小山恵太師も本土出身の人で、彼は日蓮宗の僧籍を持たなかったが、住職として法務を行っていた。道善寺は一九四〇（昭和十五）年に宗教法人の認可を受けるが、小山師は一九四三年に戦火を逃れて本土へ帰った。そのため、当時すでに寺院活動に携わっていた現住職の父である比嘉法昇師が四代目住職に就任した。比嘉法昇師も、正式な僧籍を持つことは生涯なかった。

一九四五年の沖縄戦で、道善寺は戦火で焼失する。戦後も土地は道善寺の下に戻らなかったため、一九五〇年に那覇市内の別の場所に平屋一二坪の住宅を建て、仮の本堂とした。手狭だったため、後に一五坪分の建増しを行っている。一九七二年頃に比嘉龍昇師が五代目住職に就任し、一九七三年二月一八日に宗教法人

認証を受けた。一九九一（平成三）年、信徒より土地・物件の紹介を受けて南城市に本堂を建立し、現在に至る。

現住職の比嘉師は一九二二（大正十）年に那覇市内に生まれた。戦後は沖縄県内のテレビ局に勤務し、一九七一（昭和四十六）年に神奈川県藤沢市の日蓮宗寺院で得度を受けた。沖縄県で初めての日蓮宗僧籍取得者であった。身延山に赴いて加行を終えた後に帰沖縄に就任した。

## 2 寺院組織と規模

道善寺の敷地は二〇〇坪である。本堂は庫裏と棟続きになっており、二階に二〇坪の面積を持つ。一階の本堂の真下は納骨堂になっている。納骨堂は一・二二基分が用意されており、現在は四〇から五〇基ほどが使用されている。使用料は年間二万円、道善寺で葬儀を執り行った遺骨のみを預かっているが、中には契約更新を行わずに放置されている遺骨もあるという。

道善寺に所属する僧侶は、住職である比嘉師と、副住職である比嘉師の次男の二人である。法務は比嘉師一人が行っている。副住職は一九九七（平成九）年に得度をしているが、法務は行っていない。比嘉師の長男が県内の会社を定年になったため、二〇〇四年に得度を受けた。加行を終えて沖繩に戻り次第、住職を譲る予定であるという。

現在本堂の庫裡には副住職が住んでおり、比嘉師は那覇市の旧本堂に居住している。法務のある際に、比嘉師が南城市の本堂に通っている。

なお、道善寺には現在のところ檀信徒組織はない。

### 3 宗教活動の特徴

#### ①葬儀・追善供養

道善寺では、おおよそ月に一件の葬儀がある。葬祭業者からの依頼ではなく、日蓮宗での葬儀を希望する本土出身者の葬儀を、県庁や県内の商工会議所から紹介を受けて行うことが多いという。葬儀の場所は、ほ

とんどが施主の自宅である。本堂での葬儀はこれまで三回しか行ったことがない。葬祭業者からの依頼による葬儀がないため、葬祭場で行うこともない。

道善寺では、先代住職の頃から葬儀中に「南無妙法蓮華経」の題目を唱えないことにしている。これは、戦後の沖繩において創価学会が教線を拡大するに伴ない、「題目を唱えようと新興宗教をやっていると」言われるようになったことが理由である。どれだけ説明しても理解されないため、先代住職の苦渋の決断であったという。今でも葛藤があるが、代わりに毎朝の勤行で題目を唱えていることで良しとせざるを得ない、という。経は法華経を読むが、回向文も宗門規定の文章に比嘉師が手を加えたものを使用している。また、同様の理由から墓の建碑の際に墓碑に題目は刻まず、「佛」と刻んでいる。

追善供養は月に二、三回程度行っている。戦後しばらくはかなりの数の依頼があったが、現在は減少しているという。道善寺では檀信徒の名簿を作成していない



ため、法事の年回にあたる信徒に法事の案内を出すことはしていない。僧侶が関わらない法事も多く、「呼ばれれば行く」という姿勢である。初七日法要、四十九日法要は墓前で行う。七尺の紙を塔婆の形に切り抜き、「法伽羅婆阿」と書いて紙塔婆を作り、これを墓前で燃やす。題目を書かないのは先述と同様の理由である。

## ② 追善供養以外の法事について

屋敷の拌みや地鎮祭の依頼が時々あるという。除霊などの相談はないが、受けないわけではない。日蓮宗霊断師の資格は持っていないが、必要な作法は身につけているという。

沖縄の人の宗教的求めに対しては、葬儀や法事と同じく「依頼されれば行く」という姿勢をとっている。戦没者供養関係の依頼はないが、昭和四十年代に那覇空港で発生した墜落事故の供養に呼ばれたことはある。

## ③ その他の活動

法話会など特別の布教活動は行っていないが、日蓮宗檀信徒向けに作成される「妙法一天曆」を毎年五〇部購入し、近所に配布している。また一九九八（平成十）年ごろ、浦添市のペット霊園の経営者になったが、ほとんどなくして手放した。現在も霊園経営の誘いは時々あるが、受けないことにしている。

## 4 今後の展望

妙法寺（『教化研究』十八号参照）が二〇〇六（平成十八）年に日蓮宗直轄を外れて一般寺院に移行されるまでは、沖縄県の日蓮宗寺院は道善寺だけであった。したがって、日蓮宗で葬儀や追善供養を行いたいという人々の声に応えることで、今後の法要依頼も期待できるといえる。現在は法務を住職一人が行っているが、長男が僧籍を取得すれば長男と次男の二人に本格的に法務に携わってもらうつもりである。今後は長男たちが葬祭業者とも関わっていくことで、今後の法務依頼が見込めるであろう、と比嘉師は考えている。

(\*本文中で登場する寺院名、また前田庄次郎、古城徳三郎、竹井師、西森師、小宮恵太師以外の人名は匿名である。)

(春近敬)

## 真宗大谷派の活動

### (諦聴寺・真宗大谷派沖繩開教本部)

#### 1 歴史的経緯

諦聴寺は、那覇市の那覇港にほど近い市街地に位置する真宗大谷派の寺院である。同寺は沖繩における唯一の大谷派寺院であり、宜野湾市にある真宗大谷派の機関である真宗大谷派沖繩開教本部と活動が関連することが多い。したがって、本稿では諦聴寺と真宗大谷派沖繩開教本部(以下、開教本部と略述)の活動をあわせて記述する。

#### ① 布教のはじまり

沖繩における真宗大谷派の歴史は、一八七六(明治九年)の田原法水の布教開始に始まる。田原は一八四三(天保十四)年、現在の大分県にある大谷派寺院の次男として生まれた。一八七六年の五月、田原はハーリーの喧騒に紛れて単身那覇港に上陸し、備瀬恒矩と出会って布教活動を始める。しかし当時の沖繩は薩摩藩によって出された真宗禁制が続いており、一八七七年から翌一八七八年にかけて備瀬以下三六九名が検挙される迫害事件が起きた(第二次真宗法難事件)。田原は本土出身の僧侶であったために検挙を免れ、一八七八年六月に内務省の許可を得て仮説教所を設けた。田原は、宗派派遣の小栗憲一とともに内務省を訪ねるなど迫害事件の赦免活動に奔走した。結果、十一月に内務卿伊藤博文名で琉球藩に譴責が命ぜられ、翌一八七九年一月に真宗禁制は解かれて布教活動の自由が認められた。

布教解禁後、田原は一八八二(明治十五)年に那覇の海岸を埋め立てて大谷派説教本場を設置した。ほど

なく首里に説教支場が、現在の那覇市、北谷町、嘉手納町、読谷村内に合計七つの説教出張所が開かれ、一八九九年には名護説教場が開設された。説教本場は一八八九年に大谷派琉球別院となるが、一八九二年には田原の功績を認めて一般の寺院に転換し、田原を初代住職とした。これが現在の諦聴寺である。一八九七年から一九四五（昭和二十）年まで沖繩は鹿児島教区の管轄下となり、諦聴寺は鹿児島教区鹿児島組に編入された。その他の説教所は終戦までに廃止された。

## ② 諦聴寺

諦聴寺の堂宇は沖繩戦で焼失した。戦後敷地には米軍倉庫が置かれ、さらにその土地が民間企業に払い下げられたため、返還交渉は困難を窮めた。一九七二（昭和四十七）年に土地の一部が返還されたため再建に着工し、一九七七年に新たな堂宇が完成した。

現在の住職は宮田大覚師で、三代目である。大覚師は一九〇九（明治四十二）年に現在の愛知県安城市に

生まれた。一九三二（昭和七）年に真宗専門学校（現同朋大学）を卒業すると、親戚であった暁鳥敏の勧めにより、諦聴寺に二代目住職の養子として入った。終戦後は摩文仁でテント生活を送りながら、ひめゆりの塔、健児の塔、魂魄の塔の建立に携わり、同時に戦没者の遺骨収集作業にも尽力した。あわせて長年教師として活動を行い、更生保護団体の設立にも尽力した。また、沖繩県仏教会会長を二十年以上にわたって務めた。

## ③ 真宗大谷派沖繩開教本部

開教本部は真宗大谷派組織部所管の組織で、独立した法人格は持たない。本土復帰を控えた一九七二（昭和四十七）年五月一日、真宗大谷派は「琉球諸島及び大東諸島を開教区に準ずる地域に指定し、沖繩開教区と称し、同地域内に沖繩開教本部を設置」した。（\*1）諦聴寺に事務所が置かれ、住職である大覚師が特派開教師に任命された。しかし、他に職員は任命されず、

宗派からの職員派遣もなかった。実働的な組織として

設置されたものではなく、諦聴寺住職に特派開教師としての給与を渡すことで、沖繩唯一の大谷派寺院であった諦聴寺を支援することが主目的であった。また、諦聴寺は従前通り鹿児島教区の所屬とされた。

一九九三年（平成五）十一月一日、開教本部は浦添市に移転し、十一月八日に事務所の開所式が行われた。事実上、開教本部はこの時点で開設されたと言つて良い。告示には開教本部を「移転設置」と記されたが（\*2）、宗派機関誌『真宗』の記事見出しは「沖繩準開教区 沖繩開教本部を設置」であり、記事内でも開教本部が機関としては既にあつたことには触れず、開教本部が浦添市に「設置」あるいは「開設」されたと報じている。（\*3）このとき開教本部長、書記、嘱託職員の三名が新たに任命され、業務を開始した。一九九七年三月一日に事務所を宜野湾市の住宅地に移転し、現在に至る。

## 2 寺院組織と規模

諦聴寺は阿弥陀如来を本尊とし、現在は本堂と鐘樓台を有する。納骨堂はないが、位牌のみを預かることはあるという。

住職の大覚師は二〇〇七（平成十九）年に逝去し、息子である副住職の宮田信行師が近々住職に就任する予定である。大覚師は長らく体調を崩しており、近年の活動は信行師が担っていた。住職になるためには東本願寺で住職修習を受ける必要があるが、住職修習には住職の他に門徒総代が一名同行しなければならぬ。特定の寺院に所屬するという感覚の薄い沖繩では、何日も仕事を休ませて京都まで同行を頼むことのできる信徒が見つからないため、京都に在住する信行師の弟に門徒総代に就任してもらつてもらつたという。このほか、二〇〇五年に信行師の女婿である宮田法道師が入寺し、法務に携わっている。法道師は石川県の大谷派寺院の出身で、信行師が正式に住職に就任し次第、副住職となる見込みである。

開教本部の敷地は一三〇坪で、借地である。事務所の建物は三〇坪で、仏間を持つが納骨堂などの施設はない。

一九九七（平成九）年以降、開教本部長は大谷派組織部長の兼任となったため、沖繩に駐在しない。そのため、二〇〇七年までは書記（当時）の高津浩一師が実質的な代表者として活動していた。高津師は大分県の真宗大谷派寺院の長男である。琉球大学で社会人類学を専攻し、卒業論文では沖繩の民俗と仏教について執筆した。大谷派組織部勤務を経て、一九九四年八月一日付で開教本部に赴任した。高津師の他に、常勤嘱託職員の上坂彰師が勤務する。上坂師もまた滋賀県の大谷派寺院の長男で、琉球大学卒業後、開教本部のアルバイトを経て現職に着任した。また、相談役的位置づけとして、諦聴寺副住職の信行師が非常勤嘱託職員として所属している。通常の業務は高津師と上坂師の二名で行われていたが、高津師は二〇〇七年三月三十一日付で退職し、後任事務は本山に勤務する大谷派組織部主

事が兼務する形となった。このため、二〇〇八年二月現在、開教本部事務所には上坂師が一人駐在している。上坂師と法道師は年齢が比較的近いこともあり、活動を共にすることが多いという。

檀信徒組織としては、諦聴寺と開教本部の合同で同朋会が組織されていた。しかし、近年は実際の参加者がほとんどいなくなったため、これを発展解消する形で、二〇〇七年末に「沖繩真宗同朋の会」を開教本部に設立した。これは東京の真宗会館を拠点に置く東京真宗同朋の会をモデルとした信徒組織であり、会員は必ずしも諦聴寺の門徒ではない。設立直後のため現在の会員は一名だが、今後増える見込みであるという。

### 3 宗教活動の特徴

#### ①葬儀・追善供養

諦聴寺では、月平均で三件ほどの葬儀依頼がある。会場は九割が葬祭業者所有のホールで、自宅は一割程度である。信行師によれば、二〇〇〇年ごろからホー

ルでの葬儀が目立つようになったという。

開教本部では、葬儀と法事をあわせて月に一、二回である。葬儀・法事の依頼は基本的に諦聴寺から受けており、開教本部が施主から直接依頼を受けることは稀である。通夜は施主からの求めがあれば行う。最近はお勤めも増えてきたという。高津師は「多くは友引に葬儀を行うことは避けるが、最近はお友引の葬儀も出てきた」という。

沖繩の仏壇には本尊が置かれていないため、法事の際には巻紙に六字名号（南無阿弥陀仏）と回向文（願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國）を書いて、仏壇の横に吊り下げる。「塔婆を持ってきて欲しい」と言う施主が多く、真宗は塔婆を用いないため、この巻紙が塔婆の代わりのように受け取られているようである。巻紙を用いることで、初めて「南無阿弥陀仏」という言葉が葬儀に現れるため、それを元にして布教を行なうことができるという。

## ②追善供養以外の法事について

諦聴寺で行う年間行事としては一月の修正会、十一月の報恩講、十二月の年末法要・除夜の鐘（翌年の修正会と連続して実施）がある。

諦聴寺への地鎮祭の依頼は年に十回ほどであり、「起工式」として受ける。屋敷や部屋の「お祓い」なども受けるが、祖先供養の形式で勤行を行う。開教本部への地鎮祭および「お祓い」の直接の依頼は、年に数回程度である。それぞれ、真宗における意味を説明した上で、「嘆仏傷」「三誓傷」などの偈文を勤める。本土出身者でも、沖繩で生活するなかで周囲の人間から言われて不安になり、依頼に来ることがあるという。

沖繩には「職業的ユタ」と「ユタ的人物」がいると高津師は言う。「親戚の中には必ずそういった人がいて、葬儀の始めに突然お金を燃やし始める人などもあるが、特に止めることはしない。真宗の門徒を自認する人がそういう行為をすれば止めるが、門徒でない人の家に招かれて葬儀を行なうときは、仏教の話や親鸞聖人の

言葉の意味を話すことで、沖縄的な葬式を、少しでも仏教的な空気に変えていければと思っている」という。

二〇〇四年、那覇市の医師が「総ての戦没者の御霊を慰霊し、かつ世界に恒久平和の願いを発信するため

のシンボルとして」(\*4) インドのサールナートより菩提樹の分け樹を糸満市の魂魄の塔向かいに植え、同地を沖繩菩提樹苑として整備した。上坂師と宮田法道師はこの活動に関心を持ち、沖繩菩提樹苑の管理運営団体である沖繩菩提樹協会の会員として携わっている。

また、開教本部も協会の賛助会員となっている。沖繩菩提樹協会に関わっている仏教の寺院・僧侶は、現在のところ開教本部と上坂師、法道師だけであるという。

### ③その他の活動

開教本部では月に四回ほど輪読会を開いており、真宗の聖典を読んでいる。また、「人生ゼミナール」という公開講演会を年四、五回行っている。これはうるま市の医院で行われ、真宗大谷派の僧侶や教学者を招いて

講演を行う。これまでに五〇回以上開催されている。院長の比屋根雄二氏は沖繩出身であるが、広島大学医学部在籍中に同大仏教青年会を通じて真宗光明団の活動に触れ、帰沖後も独自に機関誌を発行するなど、積極的な活動を行っている。最近では比屋根氏自身の活動が多忙になったため、会場を徐々に諦聴寺で開催するようにしているという。

このほか、高津師や上坂師は、ハンセン病問題ネットワーク沖繩、沖繩靖国参拝訴訟などの活動にも携わっている。高津師は「本土では、宗門内の複数の寺院が連携してハンセン病問題や反戦運動などに関わるが、沖繩には連携する寺院がない。したがって、市民運動と連携して活動を行なっている」と話す。

また、「僧侶になりたい」という人がこれまでに何度か訪ねてきたという。沖繩では得度ができないので、京都の大谷専修学院への入学を勧め、得度し教師資格取得をさせた人もいる。その中の一人は、沖繩本島で開教活動を行っているという。

#### 4 今後の展望

諦聴寺の宮田信行師は、「沖繩の人々は、寺院や葬儀に対して現世利益を求める傾向が強くなってきた」と話す。また、葬祭業者の増加に伴って葬儀代が高騰してきており、さらに葬祭業者は「古い沖繩の風習を発掘してきている」ため、供物の豪華化や非精進料理化が進んでいると指摘する。

開教本部の高津師によれば、設立当初の開教本部に求められたことは、「お寺になること」であった。事務所を住宅地に置いたのも、同様に住宅地に位置する浄土真宗本願寺派沖繩別院をモデルにしたためであるという。しかし、「現在の開教本部に対するニーズは反戦・平和の連絡所としてであり、寺として自立するようなニーズはない。実際、平和学習の支援という役割においては一定の役目を果たすことができると考えている」と高津師は言う。したがって、現状では布教活動の選択肢として「お寺になることに必ずしもこだわらない

という方向性のもと活動を行っているという。

また、上坂師は上述の「沖繩真宗同朋の会」の設立に加え、東京の真宗会館で行っている悩み相談電話「コロ・ダイアル」を沖繩でもできないかと考えているという。上坂師は、東京における布教活動をヒントに沖繩布教の可能性を模索中である、と話している。

(注)

\* 1 真宗大谷派昭和四十七年告示第十八号（一九七二年五月一日）

\* 2 真宗大谷派平成五年告示第四十一号（一九九三年一月一日）

\* 3 「真宗」一九九三年十二月号、四頁

\* 4 長嶺信夫「聖なる菩提樹贈呈の経緯とその記録」『沖繩医療』Vol.39, No.12, 1-100, 二、八九頁

※なお、本文中の寺院名・人物名は一部仮名である。

#### 参考資料

東本願寺沖繩開教本部「非戦・平和の発信基地沖繩 歴史・文化・宗教・南部戦跡」（小冊子）一九九五

大城立裕「琉球真宗の夜明け」真宗大谷派沖繩準開教区報「真風」十二号、二〇〇七



玉城毅「浄土真宗と近代沖縄―名護説教場―」真宗大谷派沖縄準開  
教区報『真風』十二号、二〇〇七

(春近敬)

## 来迎寺

宗派…浄土真宗本願寺派

本尊…阿弥陀如来

### 1 歴史的経緯

来迎寺は、那覇市より北東に車で約二〇分の距離の中頭郡にある、浄土真宗の寺院である。住職である林田徳夫師は、一九五〇（昭和二五）年、徳島県の本願寺派寺院の八人兄弟の末子として生まれた。林田師は、大学在学中に僧侶への道を志し、大学卒業後、中央仏教学院に進学し僧侶となった。研修を経て本山に就職し、函館別院、帯広別院などに赴任したが、その後プ

ラジル赴任を打診され、思案しているところに沖縄で開教使が不足していることを知り、沖縄で開教使になることを決めた。

一九八〇（昭和五五）年十一月、本山より開教使補に任命され渡沖し、浦添本願寺に着任した。赴任中に布教使の資格を取得し、同年には、久米島本願寺布教所に主任として着任した。そして久米島に着任してから七年後の一九八七年、本山職員を辞任した。その理由は、「職員のままだと六五歳で定年退職になってしまうので、生涯布教活動を続けるには、寺院を建立するしかない」との思いに至ったことであった。一九八八年四月、現在地に布教所を創建した。中頭郡にした理由は、新興住宅地であり今後の発展が望める地域だからであった。一九九一（平成三）年一二月に本山と包括関係を結び、宗教法人の認証を受けるともに来迎寺と改称した。

## 2 寺院組織と規模

来迎寺は、一五〇坪ほどの土地に、約三〇畳の本堂、および納骨堂を有している。建物は民家を改装したもので、本山職員の退職を検討した時期に、住職婦人が物件を探して決めた。住職婦人は、沖繩本島の中頭郡出身で、林田師が久米島に赴任をしていた時期に、婦人会の紹介で見合い結婚をした。林田師は、住職婦人に得度を受けさせている。その理由は、かつて沖繩県内の布教所の住職が亡くなった際、奥方が得度を受けていなかったため、法務を引き継げなかったという例があったためである。ただし、「沖繩では、女性の宗教者はユタに間違われる可能性があり、その結果として僧侶のイメージを落としかねない」との理由で法務に携わることはないという。息子は現在、大阪府内の大学生であるが、将来僧侶になることを希望している。また、住職の甥が衆徒となっており、本土で布教使として活躍している。

## 3 宗教活動の特徴

### ①葬儀・法事

葬儀は現在年間二五件ほどであるが、数年前までは八〇件ぐらいあったという。葬儀は、寺院の関係者・信徒からの直接の依頼が多い。かつては、葬祭業者からの依頼が多かったというが、そこからの依頼が減少するに伴って、現在の件数になった。いまでも葬祭業者からの依頼もあるが、その場合のほとんどは、遺族が葬祭業者に来迎寺を指定している場合であるという。

沖繩でも通夜は行なわれるが、それはほとんどの場合、僧侶が介在しない通夜である。師が通夜に参加し読経するのは、年間一、二件あれば多い方とのことである。

葬儀・年回法要の際には阿弥陀如来の絵像を必ず持参し、安置したうえで法要を行う。出棺時と納骨時にはそれぞれ法話をする。そのときに初七日法要と

四十九日法要の必要性も説いている。また納骨の際、女性の骨壺を下に、男性の骨壺を上にする風習があるが、それはしなくて良いと指導している。また子供が死んだ際、門中墓に入れない場合には、一緒に埋葬してあげるように指導している。「ナーチャミー」（葬儀後三日間行なう墓参）は行なうが、終わった後で「これは本来は必要のないことだ。」と説明しているという。年回法要は、初七日法要、四十九日法要が多い。七回忌までは祥月命日に行なうが、十三回忌ぐらいから都合の良い日に遅らせたりする。二十五回忌は行なう三十三回忌を、四〇年目に他の法事とまとめて行なうこともある。法要の所要時間は、法話込みで三〇分程度である。以前、「声明の時間が長すぎる」と言われたことがあり、現在は三〇分程度に収めるようにしている。表白のとき、他宗の戒名のときは俗名を読む。真宗の法名の場合は法名・俗名両方を読むようにしている。位牌はトートローマーがほとんどだが、一代限りの場合は本土式のものを用いている。

法要について、日取りの吉凶を聞かれることがあるが、「家族親戚が一番集まれる日が良い日である」と答えるようにしている。結果的に週末になることが多い。

## ②年回法要以外の法事について

起工式が多く、年間二五件ほどである。屋敷の「お祓い」もあるが、その際には、「屋敷への感謝」「家を持たせてもらうことへの感謝」と説明したうえで行なう。かつては同様の位置づけで車の「お祓い」もしたが、最近では行なっていない。沖繩には、浄土真宗の教義からみれば許容できない儀式もある。しかしながら、最初から拒否すると沖繩の人びとから反発を招く。また、「変わったこと」（民間信仰と合わないこと）をすると、「貴方が変わったことをしたせいで自分が祟りを受ける」と言う人もいるという。そこで、沖繩の人びとから求められる諸儀式を、浄土真宗のやり方に即して行うが、終わってから「これは本来意味のないことなのだ」と説明するようにしている。寺を三世相さんじんそうのような存在だ

と思っている人がいる。このようなとき、住職よりも沖繩出身である住職婦人が沖繩方言で説明すると、お年寄りには安心するという。葬儀、法事、起工式など全ての法要を合わせると年間一八〇件ぐらいいである。

久米島布教所に勤務していた頃の経験では、久米島の人々は民間信仰への傾倒が強く、ユタの言うことに従い、師の言うことをあまり聞いてもらえなかった。そのため、人びとの求める儀式をやらざるを得なかったという。しかし、一方で「本山職員がそういう儀式を行なうのか」という批判も受け、その狭間で苦慮した。その点において、本山職員を辞め、沖繩本島で寺院を開創してからはとても楽になったという。

### ③ 個別活動

「日曜子供会」と称して、習字教室を行なっている。かつては法座会を行っていたが、数年前より休止中である。一九九八（平成一〇）年より教誨師として、沖繩刑務所で年に三、四回ほど教誨活動を行なっている。

（\*なお、本文中の寺院名・人名は匿名である。）

（名和清隆）

## 天竜寺

宗派…曹洞宗

本尊…釈迦如来

### 1 歴史的経緯

現住職の玉城有寛師はもともと沖繩市室川で活動を行なっていた。その頃は、宝善寺（曹洞宗・横浜市）の別院として建立された道場で主に座禪の指導を行なっていた。一九九四年、沖繩県認可の宗教法人として独立し、その三年後には、行政による区画整理がきっかけとなって現在地に移転することとなった。

玉城師は、一九四四（昭和一九）年、長男として那

覇市に生まれた。師の祖母は、臨済宗安国寺の先々代住職の姉であったため、安国寺とは小さい頃から親交があった。そのため、玉城師には、戦火で焼失した安国寺が、徐々に復興していく様子が記憶に残っているという。さて、戦争が終わっても玉城師の生活状況は良くならなかったため、千葉県に転居する。当時の安国寺住職の兄弟が、戦前に千葉で農業をしていた事が縁であった。玉城師は千葉の中学を卒業したのち、拓殖大学の付属高校（拓大一高）に入学、高校二年生の時に沖縄に帰った。しかし、転入した沖縄の高校が合わず、中退したという。

帰郷後、玉城氏は、娘のみであった安国寺の跡を継ぐように、と親戚から何度も言われていた。しかし、二〇代頃までは、僧侶に対して「人が死んだら稼ぎに行く葬儀屋のようなもの」という悪いイメージをもっていたため固辞していた。しかし、安国寺にあった『無門関』を読んで感銘を受け、三〇代の終りの頃には僧侶になっても良いという気持ちになり、四〇歳を過ぎ

た頃、僧侶資格を得ようと決心した。

このように当初は僧侶に対して否定的な考えを持っていた玉城師であるが、若い頃から、一人で座禅の修行だけは行なっていた。師は沖縄に帰った後、曹洞宗の老僧によって開設された座禅道場に頻繁に通っていた。その老僧は月に一度しか指導に来なかったため、師が指導せざるを得ない状況になっていったという。最初、師は臨済宗で僧侶になるつもりであったが、座禅道場で世話になった老僧のすすめもあり曹洞宗で得度した。老僧が高齢のため、その紹介で先述の横浜市にある宝善寺の住職に面倒をみてもらい、その僧堂で六年ほど禅の修行をした。その後、宝善寺からの派遣という名目で沖縄で活動を開始したのであった。

その後、区画整理に伴い現在地に移り、現在に至っている。玉城師は、当初から「円滑な寺院運営のためには遺骨を預かる施設が不可欠」と考えていた。当初は隣接住民が反対をしていたが、師はそれを押し切るかたちで納骨堂の運営を開始した。しばらくして保健

所から、許可を得るようにとの指導を受けたが、「それなら県でお骨を預かってくれ」と言うと、来なくなつたという。初期の頃は、年間で十基くらいしか増えていかなかったが、現在の納骨数はかなりの規模に上っている。

## 2 寺院組織と規模

現在、妻の弟が副住職となっている。将来的に副住職は、独立して別の寺院を開山する予定であるという。妻ならびに副住職は沖縄出身である。子供は息子が三人で、いずれも妻の連れ子である。長男は自衛隊員であり、妻帯している。次男（二〇代）は那覇市の自衛隊に所属しているが、師は次男を後継者として考えている。

天竜寺では確固とした信徒組織は有していない。しかし、納骨堂への納骨者に対しては法事連絡のほがきをご詠歌の会などの要望はあるが、それを実行するまで

には至っていない。

## 3 宗教活動の特徴

### ①葬儀式について

本堂での葬儀は年に五、六回。布施として五万円、施設使用料として十五万円が一般的であるという。葬儀の依頼は、ほとんどが葬祭業者からである。なお納骨堂使用者は、ほとんどの場合、天竜寺に葬儀を依頼してくる。

沖縄での僧侶の扱われ方について、最初は戸惑った師は、「沖縄で初めて葬儀に行った際には、控え室もなく、棺の周りに親族が適当に座っていて案内も無いので、どこに座るべきか悩んだ。お茶も出ず、以前にいた横浜であつたら帰っている所だったが、我慢した」という苦い思い出があつたという。

### ②葬儀以外の法事について

年平均で六〇〜七〇件の法事を執り行っている。以

前は周辺に二、三ヶ所しか葬儀・法事用施設がなかった

ため寺院で法事を行なうことが多かつたが、近年、施設

が増加して寺院での法事は減少傾向にあるという。

位牌を本堂に預けている人の多くは、本堂で年忌法要

を行う。葬儀を行った人の約半分が四十九日法要から

三十三回忌法要までを行うという。今後は、お寺での

永代供養が増えるのではないかと師は述べている。現

在、天竜寺では一霊あたり五〇万円ほどで永代供養を

行っている。

### ③それ以外の宗教活動について

地鎮祭は依頼があれば行なっている。「僧堂では教え

てくれなかったので、親戚を見てやり方を学んだ」と

いう。自動車祈祷の依頼もあるが、「面倒なのでやって

いない」。戦没者供養については、以前、親戚である

糸満の臨済宗蓮華院から呼ばれて、何ヶ所か行ってい

たが、五〇年を節目として少なくなつたという。また、

霊的な相談事もたまに寄せられるが「そんなものない」

と答えている。

### ④その他

師は、葬儀のときにユタに出会ったことが何度かあ

る。その中には、普通の服装をしていたユタもいた。

また、八重山出身と思われるユタが読経中に線香を差

し出したので怒ったことがある。沖繩におけるユタへ

のニーズは根強いいため、ユタには儀礼を仏式葬とは別

におこなうように依頼している。また、沖繩の伝統的

慣習のひとつであるウチカビ（紙銭）には悩まされた

ことが多かつたという。以前は、ウチカビを納骨堂内

で燃やした人がいたため、危ないので専用の場所を作っ

た。また、現在でもウチカビに供物をまぜて焼こうと

する人がいて困るといふ。

## 4 今後の展望

玉城師は、師僧から「僧侶になれ」と勧められてい

た頃、僧侶になる気はなかつた。しかし、僧侶が橋の

上に住んでいても警官は追い払おうとしなかった場面を見て、「僧侶になって乞食をしよう」と考えた記憶が今でも強く残っている。そのような考えは現在でも持ち合わせており、最低限の生活さえできればいいと師は考えている。また、沖縄県仏教会への加入を勧められたこともあるが、現在のところ加入の意志は有していない。

(\*なお、本文中の寺院名・人名は一部を除き仮名である。)

(江島尚俊)

## 正福寺

宗派…高野山真言宗

本尊…大日如来

沖縄本島中部にある沖縄市は、アメリカ空軍の嘉手納飛行場などを抱える基地の街として知られる。同市の中心部の住宅地に、高野山真言宗正福寺がある。沖縄県内の同宗寺院は、全てが総本山の直轄にあるが、正福寺もその例外ではない。

正福寺は、一九五七(昭和三二)年に島袋宗道師によって開創された。島袋師は、沖縄本島北部の名護市出身で、戦前は両親と共に移住先の兵庫県で生活していた。二三歳の頃に、家族によって寺院に預けられたため、僧侶になったという。思春期に母親と別れて生活したために、心身が荒れた時期もあったが、その後は兵庫で結婚して、子供も生まれた。

戦後に島袋師は、米軍施政下の沖縄に戻り、名護に小庵を設けて宗教活動を開始した。やがて那覇市に移り、同市天久の米軍牧港住宅地区(現在の那覇新都心おもろまち付近)の境界のフェンス脇に小屋を建てて活動を始めた。その後にはコザ市(現在の沖縄市)長の勧めから、同市内に転居して、個人で火葬場の事業を



開始した。当時は葬儀の事情に詳しい人が、僧侶しかいなかったため、依頼されたという。やがて近隣に、火葬場が完成して、その業務を担当するように要請されたものの「欲のない人だった」ので断り、火葬場の仕事から身を引いた。そして沖繩市内の現在地に移して、正福寺と改めた。一九七四（昭和四九）年には沖繩県知事所轄の宗教法人に認証された。

現住職の平良隆賢師は、一九七二（昭和四七）年に沖繩市で生まれた。正福寺は、母親の実家である。先代住職の島袋師には、六人の娘がいて、平良師の母親は、その長女である。元々は平良師の母の妹の配偶者が住職後継者の予定であった。和歌山県の高野山にも修行へ行って僧侶の資格を取ったが、離婚により夫が出ていったという。

平良師が中学一年生であった一九八五（昭和六〇）年、僧侶になることを決心した。「半分は母からおだてられた。もともと、小さいときから仏教には興味があったので、説得をうけた」と話す。平良師が後継者に決

まった同年、祖父の島袋師が七六歳で没した。ただし「返事をしたのが中学生で、高校になってから『返事しなければよかった』と思った」ともいう。その後、高野山大学の別科（二年制）と高野山専修学院（一年制）に進み、僧階（少僧都）と住職資格が与えられた。高野山で修行中、沖繩県金武町にある高野山真言宗寺院の先代住職と親交のあった高野山内の塔頭寺院で得度を受けた。

沖繩に戻った一九九三（平成五）年に、平良師は住職に就任した。先代住職が没してから平良師が住職に就任するまでの八年間は、前述の金武町にある寺院の先代住職が正福寺の住職を兼務していた。住職に就任して以降、沖繩市内の自宅に居住して、自宅と正福寺を往復しながら活動を続けている。

## 2 寺院組織と規模

正福寺では、本堂は個人所有であるが、土地の所有者は、現在でも先代の故島袋宗道師の名義であるとい

う。鳥袋師と先妻との間に娘がいるが、現在まで連絡がつかず、その了承がないと名義変更ができないからである。代表役員は平良隆賢師で、その他に責任役員が二人いる。師が住職を継承した時、平良方の親戚で地位のある人物に依頼したという。

本堂裏に納骨堂があり、遺骨と位牌は無縁も含めて約五〇〇基ある。引き取り手がない遺骨の前には、「御遺骨確認カード／平成七年六月告示／正福寺／住職」と書いた紙片が置かれている。これは同年に、位牌や遺骨を整理した際に、台帳を作成すべく、所有者を再確認するために、全ての遺骨と位牌の前に置いたのであった。有縁のものは正福寺にあらためて届けられ、無縁のものは、現在もカードがそのままになっているなど、納骨堂には無縁の遺骨も多い。

### 3 宗教活動の特徴

#### ①葬儀・追善供養

正福寺が行う葬儀では、業者からの依頼がほとんど

である。月間の葬儀件数は、一、二件で、葬儀が皆無の月もあるという。追善供養の他に同寺が行う法事については、地鎮祭がある。平成一六（二〇〇四）年は、七、八件程度の依頼があり、建築業者から依頼される場合が多い。土地や建物の「お祓い」は、沖縄市の内外に限らず直接の依頼がある。先代の鳥袋師が住職だった頃は、沖縄市周辺には他に僧侶がいなかったため、中部一帯で多忙に活動していたという。

沖縄の伝統的習俗への対応については、「ナーチャミー」（葬儀の翌日に墓参に行くこと）は、遺族に言われれば「自分達でやって下さい」と言うが、葬祭業者から依頼されたら平良師は「仏教とは関係ない」として断り、仏教と沖縄の伝統との違いを明確にする姿勢にある。また師は「葬儀社には、ある程度、強く言うべき」と述べる。師によれば、葬祭業者から平均三分の葬儀時間を「一五分くらいで終らせられないですか」と、さらなる短縮を求められることもあるという。略式で葬儀を執行しても三〇分なのに、一五分はさら

に厳しいという。「業者が自分達の使いやすい、寺を持たない僧侶を使ったがる」など、葬祭業者と特定の寺に属しない僧侶の協同を師は指摘する。これら僧侶の中には宗派や資格が不明瞭な人物もあり、外見は僧侶だがユタとして活動する人もいるという。

## ② 追善供養以外の法事について

正福寺では、「マブイグミ」などの沖縄の民間行事の依頼は受けないが、仏教とユタとの違いを説明したうえで、依頼者が真言宗の法式で承諾するのであれば、依頼を引き受けている。「沖縄の習慣、風習とのバランスがわかっていないと、仏教の教義が入り込めない」と考えている。また信者からの宗教的な求めについて、「靈魂がついているからどうかしてほしい」という依頼が、一番多いという。依頼者から電話があれば、その人に来てもらい、話を聞くようにしている。「霊的なものは見えない」と説明した上で、「お祓いはできるが、直るかどうかは分からない」と説明する。それでも納

得した人には、「お祓い」を施す。納得しない人には、「僧侶から言うべきことではない」と自覚しつつも、ユタを紹介するという。

平良師自身はユタを肯定的に捉えていない。しかしながら、ユタを否定せず状況に応じては依頼者にユタを紹介するのは、先代住職の鳥袋師に、霊能が備わっていたからである。平良師の母親によれば、名護に居たころ、鳥袋師が、家は留守で誰もいないため幼い娘（平良師の実母）を連れていった法事の帰り、道端で突然、師が法衣の下に娘を隠した。後で聞くと「子供に見せるものではないから」として覆ったという。しかし、幼い娘には何のことだかさっぱりと分からなかった。つまり、周りの人が見えないものが鳥袋師には見えていたのである。平良師はユタについて、「仏教的には否定したいが、先代のこともあるので、霊能は否定も肯定もしない」との立場を取る。

### ③年間行事

正福寺では、先代の頃から、信徒への積極的な布教活動を行っていなかった。その理由として平良師は、年間行事を「行いたいのだが、道も狭く、駐車場もなく、本堂も狭いので、来てもらえない。沖縄では車を使うので、駐車場がないと人が来ない」からと話す。

### ④その他の活動

平良師は、正福寺に居住していないため、地元自治体への参加はあまりない。正福寺では、沖縄県仏教会に加盟するほか、沖縄県仏教会加盟の古義真言宗系寺院の若手僧侶五名で定期的な会合や声明の練習を行っている。

## 4 今後の展望

正福寺では、寺院を移転し、本堂や庫裏、境内墓地を完備した新寺の建立を計画している。同寺の役員に依頼して、寺院の移転先を選定中である。一番の有力

地は、観光地として知られる北部のある村であるという。その村内には、今のところ宗教法人は一つもないが、それは村では税金の収入にならないので、これまで宗教法人の進出を拒んできたという。だがある時、正福寺の役員関係者が、「村で宗教法人を探している」という話を聞きつけた。その理由は、村を通る国道五八号沿いには古くからの墓が点在するが、村を訪れるホテルの宿泊客や観光客から「墓の評判が悪い」ため、村は墓の移動を沖縄県から要求されているという。そこで、村役場では区画整地をして霊園を作り、宗教法人もしくは公益法人によって霊園を運営する予定だったが、公益法人を設立すると時間がかかるため、宗教法人の招致を模索しているという。現在、正式決定はしていないが、運動を推進している村議会議員と正福寺との間で話し合いを進めている最中である。調整が円滑に進めば、近々にも工事着工を考えているという。土地は、村の名義で霊園区域も含まれ（二万坪）、寺院建物は法人負担になる可能性があるという。境内地は、

観光客向けの海岸にも近く、付近には大学院大学の開校も予定されているので、将来性があると師は考えている。

同地に正福寺が移転したならば、「寺院で仏教行事が出来るようにしたいが、一般の人はどうしてもお寺という構えてしまうので、お寺というのは気軽に行けるところと理解されるようになりたい。宗教的活動以外もできることはやりたいので、午前中の空いた時間には、地域還元として朝市、フリーマーケットをやりたい。村には海のもの、山のもがある。観光地の立地を生かして、ライブなどをやりたい。いま沖繩出身のアマチュアも含めたミュージシャンが注目されているので、彼らに依頼したい」と師は構想する。

(\*なお本文中に寺院名・人名はすべて仮名である。)

(大澤広嗣)

## 各地の法然上人二十五霊場研究プロジェクト報告

### 一・はじめに

第一番誕生寺から第二十五番知恩院にいたる法然上人二十五霊場（以下、本霊場）は霊沢等によって宝暦年間（一七五一〜六三）に巡拝が始められ、『圓光大師御遺跡廿五箇所案内記』（霊沢、明和三年（一七六六）刊。以下『案内記』）に二十五の札所として選定された。途中、大正末から昭和初年にかけて札所寺院の入れ替えがなされた期間があるものの<sup>53</sup>、現在では『案内記』に選定された札所に落ち着いている。

本霊場への巡拝は現在に至るまでさかんに行われる一方、日本各地には本霊場の写し霊場として法然上人の二十五霊場（以下、写し霊場という場合は法然上人

二十五霊場のものを指す）が数多く設立されている（例外として大阪の「円光大師廿五処廻」がある。「円光大師廿五処廻」は『案内記』に先立つ延享四年（一七四七）以前に成立しており、『案内記』成立後、逆に写し霊場化したことが、山本博子氏によって明らかにされている<sup>54</sup>）。明治以後の写し霊場設立時期を見ると、大正初期（七百年大遠忌）、大正末から昭和初年（開宗七百五十年）、昭和八年（法然上人生誕八百年）、近年では開宗八百年など、浄土宗の大イベントと関連して設立されたものが目につく。

これらの写し霊場には現在でも巡拝されているものがある一方、すでに存在が忘れられてしまい当該の札

所寺院にすら霊場としての記録や痕跡がないものもある。また設立の時期も江戸時代から昭和四九年ごろまでと幅広く、個別の霊場によってその設立時期、規模、設立者の地位、活動状況の遷移は大きく異なっている。

いずれにしても各地に写し霊場を設置することによって法然上人を賛仰し念仏信仰の弘通に貢献してきたことには違いはなく、現在も活動しているものももちろんのこと、すでに霊場としての機能を失ってしまったものであっても先人の法然上人賛仰の貴重な痕跡である。各地の法然上人二十五霊場研究プロジェクト（以下、本研究）は、そのような種々の写し霊場の現況を調査紹介することにより八百年大遠忌迎える法然上人の賛仰の一翼を担おうとするものである。

## 二． 本研究の経緯

本研究は個別の写し霊場の調査と紹介が中心となるので、(1) 調査対象霊場の選定、(2) 文献などに基づく事前調査、(3) 実地調査、(4) 調査結果の検討、(5) 報告・紹介、という手順を繰返すことになる。霊

場によってはすでに存在自体が忘れられてしまっている資料もほとんど残っておらず、札所寺院自体にもなんらの記録も残されていない場合もある。そのため実地調査で成果をあげるためには(1)と(2)が重要になる。

また、他の霊場の調査中に別の霊場の存在が判明するようなケースもあり、その場合は(2)と(5)の作業を並行して行うことになる。そこで、本研究では次に述べる経緯のもとで、個別の霊場の現況調査を実施した。

(1) 『新撰元祖大師二十五霊場巡拝案内記』（大正十二年、総本山知恩院開宗記念伝道部刊）。札所寺院入れ替えの状況については山本博子「法然上人二十五霊場の改訂について」（『甲仏研』二八一〜二）に詳しい。

(2) 大阪の霊場と山本博子氏の見解については、本報告中の大阪教区の項を参照。

## 二． 一． これまでの経緯と調査対象霊場の選定

本研究班発足に先立つ平成十五年に浄土宗総合研究所から各教区教務所宛に教区内に写し霊場が存在するかどうかのアンケート調査が実施された。その際、霊

場が存在する場合は、霊場名、霊場の種類（複数の札所寺院によって二十五霊場を構成しているのか、一ヶ寺の境内に二十五霊場すべてを写したもののなか）、霊場を構成する寺院名、設立者、設立時期、現在の活動状況、霊場に関する遺物の有無等を尋ねたものである。このアンケート結果が本研究の基礎資料となった。

本研究班にて調査対象とした写し霊場はこのアンケートの結果判明した写し霊場と、霊場研究者などから提供を受けた史料などに基づいて合計十六教区（栃木、茨城、千葉、富山、三河、尾張、伊勢、伊賀、福井、京都、奈良、大阪、兵庫、南海、福岡、佐賀）に設置されたものである。なお、これ以外にも写し霊場が存在することは確認しているが、本研究班では調査対象から除外した。

調査対象とした霊場一覧は次のとおりである。

・栃木教区 大雲寺（一ヶ寺内）

・茨城教区 浄土元祖圓光大師二十五霊場

・千葉教区 安房圓光大師二十五霊場

・富山教区 越中一ヶ國廿五霊所

・三河教区 圓光大師三河國廿五霊場、法然上人三河

二十五霊場

・尾張教区 宗祖法然上人尾張二十五霊場

・伊勢教区 円光大師准廿五霊場、霊場名不詳

・伊賀教区 伊賀廿五霊場

・福井教区 元祖大師廿五霊場巡拝案内

・京都教区 京都二十五処巡、京都教区丹後廿五霊場

・奈良教区 別時念仏道場大和二十五霊場、吉野二十五

霊場

・大阪教区 大坂圓光大師廿五箇所、泉日根郡圓光大師

廿五箇所、和泉國圓光大師廿五霊所、圓光大師廿五ヶ

所（河北組）

・兵庫教区 霊場名不詳

・南海教区 円光大師讚岐廿五霊場、霊場名不詳（一ヶ

寺内）

・福岡教区 明照大師廿五霊場

・佐賀教区 肥前二十五霊場



二二二 札所寺院に対するアンケート調査：調査対象霊場の選定、文献などに基づく事前調査

平成十六年度に、京都教区の「京都廿五処巡」と栃木、茨城、千葉の各教区の霊場を調査した。その調査結果を受けて、十七年度には事前調査として各霊場の札所寺院に対してアンケートを実施し、各霊場の現況の把握につとめた。基礎資料として前記の教務所宛アンケートの回答に基づいて、写し霊場ごとに、霊場名、霊場番号、寺院名、寺院の所属（浄土宗の場合は教区、組、宗外寺院の場合は宗派名）等を項目とする写し札所寺院のデータベースを作成した。このデータに基づいて個々の札所寺院宛に霊場の状況を問うアンケートを実施した。

アンケートの対象寺院は、前記の十六教区から報告のあった霊場の内、報告された寺院名と現存寺院との対応がはっきりせず住所等の確認がアンケート発送時に行うことができなかつた寺院を含む霊場と十六年度

に調査済みの霊場とを除いた合計一九六ヶ寺とした。このアンケート結果に基づき、個別の霊場の調査を実施した。

アンケートの内容は次のとおりである（実際のアンケートから質問項目と回答選択肢のみを抜粋したものである）。

※※寺様が※※霊場第※番に該当するとの報告を受けましたが、

1. 霊場の名前は正しいですか

A 正しい B 正しくない（正しくは という）

2. 霊場番号は正しいですか

C 正しい D 正しくない（正しくは第 番である）

3. 二十五霊場が作られた時期はいつ頃ですか。

E 年頃 F 不明

4. どなたによって作られましたか。

G H 不明

5. 二十五霊場は現在でもその役割を果たされており  
ますか。（巡拝、参拝等）

I 果たしている J 年頃迄あった K 現在はない

場合にはご記入ください。

6. 貴寺院には法然上人の像や画像（掛け軸・板絵など）がありますか。（二十五霊場とは関係なくても結構です。）

T 有る U 無い（12へ）  
11. 10で「T有る」と記入された方、そのご詠歌が記された額や石碑がありますか。

L 有る↓どのようなものか（お像・掛け軸など）を下欄にご記入下さい。 M 無い

V 有る↓具体的にご詠歌の記入されたものを下欄にご記入下さい。（額や石碑など） W 無い

7. 二十五霊場について関係するものが何かありますか。（新旧は問いません）

12. 二十五霊場に関する事物（お砂、宗祖の像や画像など）がありますか。

N 有る O 無い（Oに○をした場合は15から答えて下さい）

X 有る↓具体的に（宗祖の画像やお砂など）下欄にご記入下さい。 Y 無い

（N有るとお答えの方で8～14迄の中に選択肢がない場合は関係するものをお書き下さい）

13. 二十五霊場を記した標石はありますか。  
Z 有る AA 無い

8. 二十五霊場の案内書・刷り物などがありますか。 [L・M いずれかに○を]

14. 二十五霊場に関する行事（法要・巡拝・御詠歌の会等）をされていますか。

P 有る Q 無い

AB 有る↓具体的に何をされているか（法要・御詠歌の会等）を下欄にご記入下さい。 AC 無い

9. 二十五霊場専用の朱印がありますか。

15. 上記以外の宗祖祖師に関する事物・伝承などがあ

R 有る S 無い

りましたら下欄にお書き下さい。

10. 二十五霊場の貴寺院のご詠歌がありますか。 有る

ご協力誠にありがとうございました。何かご意見がございましたら下欄にお書き下さい。今後の参考にさせていただきます。

### 三、 個々の写し霊場について

以下、それぞれの霊場の調査結果を教区毎に報告する。掲載の順序は教区番号順である。概ね、霊場の梗概、歴史、現況、特記事項を報告したものであるが、霊場の状況によって報告できる内容が相当に異なっているので、報告の形式は統一をとっていない。また、諸般の事情で实地調査ができなかった霊場もあるが、文献上の調査や聞き取り調査を実施している。なお、霊場調査の報告であるから本来は札所寺院の一覧を挙げるべきであるが、諸般の事情から本報告ではこれを挙げない。

#### 三、 一、 栃木教区 二十五霊場～大雲寺

栃木教区は、他教区の写し霊場と異なり、一寺院に

おいて二十五霊場が巡拝できるようになっている。宇都宮組大運寺（双樹正道住職）では、檀信徒が、本霊場を巡拝した際に持ち帰った砂を保管し、二十五霊場を境内地に作成した。

元々、大運寺は宇都宮市材木町にあったが、道路拡張事業に伴い、寺院・墓地の全面移転が決まり、市内下荒針に順次堂宇・寺域を移転整備し、平成十六年三月に落慶法要を厳修した。その際、新境内地の南側に二十五霊場を作った。

「琵琶の池」と名付けられた調整池に隣接する霊場は、巡拝の地図をかたどった構成になっており、道をたどることにより、順番に二十五霊場を巡ることができ、非常に凝った作りになっている。標石には各霊場のご詠歌が刻まれ、お砂踏みができる。

発起人が霊場を整備し、巡拝の道筋を作った他教区の二十五霊場と異なり、檀信徒が持参した霊場の砂をもとにした、全国でもあまり例を見ない霊場である。四季の花に彩られた道を一周するだけで、順番通りに

霊場参拝ができる大運寺の二十五霊場は、新しいケースとして注目されている。

### 三、二、茨城教区 浄土元祖圓光大師二十五霊場

常総地域の二十五霊場の起源は、文政年間まで遡る。文政元年、常州筑波郡狸淵（むじなぶち）村（現・筑波郡伊奈町狸淵）浄円寺善誉伯鳳が発願主となり、武藤久兵衛、山野井五郎兵衛等が同行し、円光大師二十五霊場を巡拝し、各霊場の土を持ち帰ったとされている。また、同二年には、選定した各寺院に「円光大師霊場」の碑を建立し、ご詠歌額を奉納し二十五霊場を整備したとされる。

昭和二十年頃までは、巡拝する講もあつたが、戦後は衰微した。昭和三十年三月に石下町の中川弁吉等が、ガリ版刷りの「浄土元祖諸国廿五霊場寫」を発行している。この頃、一時的に霊場参拝の気運が高まつたと推定される。

また、昭和四十九年の開宗八百年記念に合わせ、大

楽寺住職の長谷川觀真師が茨城浄青の機関紙に常総地域の二十五霊場について寄稿している。

常総地域の特徴として、札所寺院が小貝川と鬼怒川の流域に点在していることがあげられる。小貝川の北側、小貝川と鬼怒川に挟まれた地域、鬼怒川の南側、この三か所に東西約十二キロ、南北約二十八キロの範囲で点在している。

ほとんどの寺院で文政二己卯年の標石が確認できた。小貝川は、古来より氾濫を繰り返してきた河川であり、そのような川の流域の寺院に標石が自然災害を免れ、存在してきたのは、貴重なことである。扁額に関しては、半数近くの寺院で確認できた。しかしながら、文政年間当時の額は無く、後世何らかの機会に、作られたものであつた。

前述の浄円寺の木村信雄師は、常総二十五霊場の整備と復活を強く望んでいらした。

### 三、三、千葉教区 安房圓光大師二十五霊場

安房二十五霊場は、安房郡から館山市、そして鴨川市にわたる南房総に札所寺院を置く。霊場設置の年代は不明であるが、大正二年にはこの霊場が存在していたことは確認できた。

また、大巖院に現存する書状から、この霊場の発願主が三福寺の礼阿という上人である事が判明した。文面には「此度宗祖大師二十五霊場當國之寺院江移し拝經所ニ致度志願」など、霊場の設置並びに三福寺より御詠歌額と立札を寄附する旨が述べられている。結果、発願主である三福寺は第一番霊場となっている。なお、この書状には、「辰七月」という日付が記されている。(資料提供並びに解説・石川達也師)

安房二十五霊場は、各霊場番号と対応する御詠歌をもつて写し霊場としたものである。現在、二十五霊場を示すものとして、木製の御詠歌額が約半数の寺院に現存している。額面には「圓光大師二十五霊場」という名称と、霊場番号並びに寺院名、そして霊場番号に対応する御詠歌が記されている。この他に、彩色の法

然上人御影と御詠歌が描かれた板絵を一点確認した。これら御詠歌額と板絵が、礼阿上人の願文にある御詠歌額面と立札かと思われる。このほか、霊場に関するものとしては標石が昔はあったそうだが、現存するものはない。

現在、安房二十五霊場として巡拝されることは無いようである。

### 三、四 富山教区 越中一ヶ国二十五霊場

越中一ヶ国廿五霊所（あるいは越中一ヶ国二十五霊場）は、富山教区に設置された写し霊場であり、平成十五年の教務所宛事前調査によって、二十五の札所寺院がすべて判明している。札所寺院は富山県内の魚津市から西に設置されており、特に高岡市、富山市（特に旧新湊市）にその多くがある。

設立年代は、伝承によると大正十四年、あるいは昭和六年とされているが、昭和六年という年代は、越中一ヶ国二十五霊場の巡拝のしおりである『宗祖圓光大

師二十五霊場御詠歌附越中一ヶ国二十五霊場巡拝之棗」  
(浄土宗富山明照会・浄土宗富山婦人会刊) が刊行さ  
れた年であり、実際の設立は大正十四年のようである。  
設立者は明確ではないが、法然寺の笹井孝順師のよう  
である。上記の『棗』から、二十五の札所寺院はすべ  
て判明している。

霊場であることを示す事物としては、朱印、御詠歌  
額が残されているところがある。ただし、第二次世界  
大戦における富山空襲による焼失などのため、すでに  
それらの事物が失われた札所寺院が多数である。御詠  
歌額が失われていても、各札所寺院には札所番号に対  
応する本霊場の御詠歌が配当されていて、御詠歌を写  
すことよって写霊場としたものようである。

記録上、霊場としての参拝が行われた最後の年代は、  
札所寺院様からのご報告では昭和三十六年頃、昭和  
五〇年頃、昭和六〇年頃とまちまちであり、現在は霊場  
としてまとまった実質的な活動はなされていないよう  
である。

三、五、三河教区 圓光大師三河国廿五霊場と法然上人  
三河二十五霊場

三、五、一、圓光大師三河国廿五霊場

三河教区の場合、平成事前のアンケート調査により、  
「圓光大師三河国廿五霊場」と「法然上人三河二十五霊  
場」の二つの霊場の存在が判明した。これについては、  
平成十七年度、当プロジェクトの研究活動報告(『教化  
研究』一七号、平成一八年九月)で報告し、また佛教  
大学職員山本博子氏によつて、平成十八年十二月『印  
度学仏教学研究』五十五巻第一号の「三河教区におけ  
る法然上人二十五霊場」と題す論文の中で、この二つ  
の霊場における沿革などの精密な研究がなされている。  
そこで、まず山本博子氏の研究に基づき、二つの霊場  
の沿革について簡単に紹介したうえで、今回、实地調  
査を行った札所寺院九ヶ寺から現在の活動を報告する  
ことにする。

「圓光大師三河国廿五霊場」は、明治十五年に岡崎市

「両町の森三左衛門により計画化され、翌十六年には、『圓光大師三河国廿五靈場大供養』と称する一枚刷りのしおりが刊行され、設立されるに至った。その『圓光大師三河国廿五靈場大供養』には、札所寺院が番号順に記されており、また、その緒言には、『今回二十五カ所ノ寺院ニ乞テ、亡父ノ初志ヲ満足セント欲ス』とあり、靈場計画の動機には、森三左衛門の実父、家田宗太夫の存在が欠かせない。元々、実父である家田宗太夫は、三河の地に「准二十五靈場」という写し靈場を設立することに力を尽くしていたが、志半ばで病に倒れ、江戸年間の嘉永四年に六十三歳で急逝した。その後、息子の森三左衛門が父の意志を受け継ぐようなかたちで設立されたのが「圓光大師三河国廿五靈場」であるといえる。

残念ながら現在に至っては、札所寺院であるという伝承自体すら失われた寺院もあり、靈場としての機能は果たしていない。

三、五、一、法然上人三河二十五靈場  
 「法然上人三河二十五靈場」は、浄土宗三河教区により開宗八百年記念の事業の模索から、昭和四十九年（一九七四）に設立されたものである。

まず実現化に向けて、昭和四十七年（一九七二）十一月から「二十五靈場奉讃会」が組織され、第一回の総会が開かれた。以後、実現化に至るまで計四回の総会が開かれ、その中で翌四十八年の四月には二十五ヶ所の札所・番付等が選定された。さらに、本靈場からの靈土拝受の仕方、標石、案内書（『参拝の栞』）、写経用紙、朱印長などの作成について具体化が進められる。同年十一月には、二十五靈場の紹介ポスター、靈場巡拝申込書、木札が各札所寺院に配布された。翌四十九年三月には、各靈場に本靈場に対応する御詠歌を配当させ、札所標石を建立し、ここに靈場が成立した。各靈場の札所標石は、高155cm、幅31cm、奥行16cmに全て規格形式が統一されており、正面に「法然上人三河二十五靈場／第〇番〇〇寺（院）」、裏面に、「浄土

開宗八百年記念／円光大師二十五霊場霊土拝受／昭和四十九年三月建立」と刻まれている。

平成十七年には、「浄土宗三河二十五霊場志越里」という冊子が久野金逸氏によって刊行されており、現在も年間、数名であるが巡拝客があり、霊場として機能している。また、札所寺院の中には独自で霊場に関する事物（幟、巡拝の栞等）を作成されている寺院もある。今回の三河教区における写し霊場の調査報告に当たって、「法然上人三河二十五霊場」を中心に、さらに「圓光大師三河国廿五霊場」と重複する九ヶ寺の札所寺院の聞き取り調査を行った。

### 三、六、尾張教区 尾張二十五霊場

尾張教区については明治に二十五霊場が創設されており現在も存続している。札所寺院は江南市、一宮市、津島市、犬山市、小牧市、岩倉市にの広範域に散在している。浄土宗総合研究所のアンケート調査によると戦後またたびたび再興されていたようであるが、昭和

五十年代には新尾張二十五霊場として新たな札所寺院が加わり本格的に再興されている。その新霊場再興時に作製された納経帳がある。この納経帳には冒頭に「奉納経のいわれ」が記されている。

#### 奉納経のいわれ

一、人皇第四十五代聖武天皇は仏教に深く帰依せられ、国家安穩国民豊榮を祈念されて、日本六十六ヶ国に夫々国分寺を建立された。

一、写経の功德は廣大と言われており、篤信者は信心増長仏恩報謝の為に六十六ヶ寺の国分寺に写経を奉納して巡拝し、その証として寺より印璽を授かり、それを綴ったものが納経帳のはじまりと伝へている。

一、宗祖法然上人の廿五霊場は徳川の中期頃上人御一代の有縁の寺を来迎の廿五菩薩（又は御命日の廿五日）に因んで廿五ヶ寺を選び、弥陀弘誓の摂益にあづかるは偏に選択された上人のお念仏の賜、報恩歡喜の巡拝をするようになった。



一、尾張廿五霊場は開創百年と伝へ、本霊場のお砂を拝受して礼所とし今日に到るも、新たに礼所檀林、塔頭寺院を加へ、新尾張廿五霊場となし、上人の念仏の声する処これわが遺跡なりとの御遺誠を恒に新たに、木曾の流れの余沢に栄える浄土門の礼所たる本尊の仏智不思議の慈光を蒙り、積功累徳の一端にすべく霊場の御印璽でこの奉納経帳が真赤になる程を巡拝されん事を切に念じます。

一、この奉納経帳は各自一代の積功の証として護持すべきものであります。

昭和五十一年三月十九日

開創期の廿五霊場の寺院は不明であるが、「いわれ」の後半部に記されるように昭和五十年代の新霊場再興時には本霊場に加えて壇林、礼所とその塔頭寺院が新たに加えられている。本霊場の開創は、「奉納経のいわれ」によれば昭和五十一年から百年前とあり明治九年（一八七六）であるが、表紙には開闢明治初年尾張廿五

霊場と記される。どちらにも裏付けがとれず厳密に尾張霊場がいつはじまったのかということは不明であるがいずれにせよ明治の初めには開創されたようである。

再興にあたっては愛知県江南市の古刹寺院である曼陀羅寺（浄土宗西山派）が中心となっており、当寺に新尾張二十五霊場会の事務局が設置され、またそれぞれの地方にも霊場の小事務局が設置されていたようである。なお納経帳の発行印刷所は三和商工（加藤商会）である。アンケート調査によれば昭和五十年代の尾張新霊場の発足よりしばらくは、出開帳として関係寺院が一年に一度曼陀羅寺に集まり朱印をしていたようであるが現在は途絶えているようである。浄土宗寺院と西山派の寺院が混在しており、現在も時折集印に直接お参りにこられる方がいるそうである。

### 三、七、伊勢教区 円光大師准廿五霊場

伊勢教区に設置された写し霊場に、「円光大師准廿五霊場」がある。礼所寺院は伊勢市、気多郡、松阪市、

津市一帯に設置されており、二十五の札所寺院すべてが判明している。

霊場の設立は大正十五年である。第一番札所の津市大信院の檀徒梅本惣八氏の発願により、当時の住職であった水野法全師の協力の下、設立された。設立当時の状況を物語る資料として『圓光大師准廿五霊場巡拝勤行式』がある。この『勤行式』冒頭に記された水野法全師の「巡拝のおすゝめ」には、霊場設立の目的と経緯、何をもって写霊場としたのか、について次のように述べられている。

「……されど本御霊場は多くの日子と費用とを要せねばなりませんから、皆様總てが巡拝すると云ふ事は随分難ひ事であります。是等の事を思ふて、拙寺檀家梅本惣八氏御夫婦の発願で、今回尤も交通の便利な左記の寺院（圓光大師准廿五霊場各寺院のこと、引用者注）に御霊場を移して准廿五霊場の創設を見るに至りました。同氏が本廿五霊場参拝の砌りに各御本廟の土砂少々、貫い受けて御持ち御帰えりになりました御砂を各

寺の本堂の前に埋めてありますから、此廿五霊場を御巡拝になれば本御霊場の地を御踏みに成ると同様の功德が得られる事でありますから、御互に勧め合ふて毎年二期彼岸の前後の頃は是非一度づゝ巡拝して…（句読点は引用者）」このように、霊場設立は二十五霊場巡拝の便のためであること、大信院の檀徒梅本惣八夫婦の発願によつて本霊場のお砂を持ち帰り設立されたこと、本霊場のお砂を移すことによつて写し霊場としたことが明記されている。また、この『勤行式』の刊行年月が大正十五年三月であることから、霊場の設立時期が大正十五年であると推察できる。

第二次世界大戦中の戦災により霊場としての様々な資料が失われた寺院もあるが、参道あるいは本堂前の敷石に「砂〇」と彫られたものがあつて、上引の「巡拝のおすゝめ」に見える「お砂」がそこに納められているほか、御詠歌額（札所番号に相当する本霊場の御詠歌がある）、標石を今に伝える寺院がある。その他に朱印も伝えられている。写霊場としての事物は完備し

ていたようである。

現在では霊場として特別の活動があるようではないが、寺院によってはまれに参拝者があるとのことである。

なお、多気郡内に、「圓光大師准二十五霊場第十八番」と刻まれた札所標石を伝える寺院がある。「圓光大師准廿五霊場巡拝勤行式」に伝える第十八番札所とは別の寺院であり、また圓光大師准廿五霊場の札所寺院には指定されていない。地域的には圓光大師准廿五霊場の札所寺院と重なるが、いかなる経緯で置かれたものか、不明である。

### 三、八 伊賀教区 伊賀二十五霊場

伊賀二十五霊場は、大和街道沿いに三重県旧上野市および旧阿山郡（現伊賀市）にわたり設置されている。昭和五十七年、法然上人降誕八百五十年記念に刊行された「伊賀二十五霊場 教区内四十九か寺院紹介」によると、「上野市寺町の地方本山念仏寺を一番寺院に

選び、上野市、旧柘植町、旧河合村、旧春日村など伊賀地方の中央道路沿いの寺院二十五ヶ寺を霊場と定め、念仏寺の向い隣りにある大超寺におさまるようにされてきた」とある。

霊場の正式名称は不明である。しかし、元治二年（一八六五）に「伊賀国一拾五ヶ所巡拝記」と題する木版の小冊子が発版されており（少数数現存）、その序文には「伊賀の国廿五ヶ所旧遺跡」と記されている。しかし奥書には「浄土元祖円光大師廿五箇所」とある。なお、この小冊子は伊賀教区青年会の方々により活字に起こされている。また一部寺院では霊場の標石を認できたが、大部分が近年建立のものであった。しかし、「元治元年甲子年八月廿五日」と記された標石が存在し、そこには「圓光大師廿五拜霊場」と刻まれている。

霊場の設立年代は古く、今回調査した一寺院に残る御詠歌額には、天明四年（一七八四）の年号と、「発起人念佛寺十一世相譽」の名が墨書されている。霊沢等によって本霊場の巡拝が始められたのが宝暦年

間（一七五一〜六三）とされており、比較的早い時期にこの地に写し霊場が設置されたことが分かる。また、同一形式の御詠歌額が霊場設置当初には全札所寺院にあつたものと思われる。額には霊場番号に対応する御詠歌が記されている。

この他に二十五霊場に関係するものとしては、二十五霊場専用の朱印がある。（霊場名、霊場番号記載）これは昭和五十七年、『伊賀二十五霊場 教区内四十九か寺院紹介』の発刊に合わせて作られたものであるという。

『伊賀二十五霊場』によると、昔から五重相伝をうけた同行人たちは当霊場を巡拝してまわつたとある。現在でも教区内の寺院婦人、吉水講等により巡拝が行われている。また、『伊賀二十五霊場』の刊行を機に、新たに伊賀新二十四霊場を設置し、教区内四十九ヶ寺全てを法然上人の霊場と定めた。

### 三、九 福井教区 元祖大師廿五霊場巡拝案内

福井県域では、現在も北陸不動尊、北陸三十三観音

霊場が巡拝されている。ある真言宗寺院では、四国八十八霊場巡りのお砂ふみが催されている。巡拝については以上の点からふまえると概ね盛んといえよう。法然上人二十五霊場としては、大正年間（設立は十二年頃）に伝えられている。四国八十八霊場巡りのお砂ふみの影響によるものか、関係寺院にてお砂ふみが行われたようである。各霊場として用いた木箱が一部に残るが、現状では巡拝はされていない。他の巡拝に影響を受けた特徴がみられるが反面、根強い観音信仰等のもとでは定着するのに困難であつたと推察される。

### 三、一〇 京都教区 京都廿五処巡と丹後廿五霊場

三、一〇・一 京都二十五処巡

『京都二十五処巡』は『円光大師京都廿五処巡拝記』（円心、稲泉蔵版、明和五年刊、以下『巡拝記』）によりその存在が知られる霊場である。刊行年の明和五年は、霊沢の『案内記』刊行の二年後であり、本霊場設立の直後に設立されたものである。札所寺院は現在の

京都市内に広く配置され、京都の本霊場寺院もそれに含められている。ただし現在では、移転して霊場設置時とは所在を異にする寺院もある。この霊場は単純に本霊場を写した写し霊場ではない。札所数を二十五箇所とはしていながら、そこに含まれる本霊場の札所番号や御詠歌は、本霊場と異なるものが付与されている。この霊場については、山本博子氏の「京都の法然上人二十五霊場」(『印仏研』五一―一)に詳しく紹介されており、これに加えるべきことはほとんどないので、研究で行った札所寺院の实地調査について若干述べるに止めておく。

この霊場のすべての札所寺院に対して实地調査を行ったところ、いずれの御寺院でも「京都廿五処巡」という霊場の札所に指定されていることをご存知ではなかった。残念なことに、お砂、御詠歌額、標石など、当該寺院が札所であることを示す事物は一切残っていない。しかしながら「京都廿五処巡」第十二番月輪寺には、愛宕山から仏像を移したという記録が伝えられ

ている。この月輪寺は下京区に所在し、本霊場寺院の愛宕山月輪寺とは別の寺院である。札所寺院としての月輪寺といえは愛宕山月輪寺であり、本霊場の札所番号は第十八番であつて、「第十二番」という札所番号の意味が不明であつたのであるが、今回の調査によつて、それが「京都廿五処巡」に関わる記述であつたことが判明した。なお、同寺にも御詠歌額など、札所寺院であることを示す事物は残っていない。

### 三、一〇、二、圓光大師丹後廿五箇所

丹後国、現在の京都府北部、丹後半島一帯に設置された霊場である。加悦町宝巖寺の秀誉による『圓光大師丹後廿五箇所案内記』(寛政十二年刊・以下「丹後廿五箇所案内記」)によりその存在が知られ、発起人として久美浜本願寺祐誉、梅田利右衛門、下村五郎助が名を連ねている。

『丹後廿五箇所案内記』によれば、設立の経緯は次のとおりである。霊沢上人によつて設立された本霊場は

「浄業専修の行者、一度もあゆみをはこび宗祖大師の広  
大慈恩を報謝し奉らん事を希ひねがうもの」であるが、  
「其身不如意にして志をとげぬもあり、また老人婦女、

とをく海山こへ、かんなん辛苦にたへざるもの、ため  
に」、当国（丹後）において「あらたに廿五かの巡拝所

を発起し我連門専修の同行人にじゅよせんと案内記を」  
つづつたという。著者の秀誉は、『丹後廿五箇所案内記』  
刊行の前年、実際に「諸方を巡拝」した際に、「岐路お

おくして諸人正路をもとめかねたり」という理由でこ  
の「丹後廿五箇所案内記」の執筆を思い立ったという。

『丹後廿五箇所案内記』には、一番から二十五番までの  
札所寺院を、一応その順序で掲載する。しかし、実際  
の参詣については「まはり勝手、びんぎよきやうにそ  
のじゅんはいの前後をしらべず、そのところ、勝手に  
ろしきやうにまはらるべし」として、巡拝の順序には  
こだわっていないかったようである。同時に、宮津、田辺、  
熊野郡中郡加悦谷からの参詣順について、それぞれに  
巡拝しやすい道筋を示している。さらに、丹後西国の

札所もあわせて記載し、法然上人の霊場巡拝のついで  
に「道すがらの神社仏閣もかきのせさむらへば、かな  
らず拝したまふべし」として、単なる法然上人の霊場  
案内にとどまらず、丹後一帯の寺社巡りのガイドブッ  
クとしての役割をになわせていたようである。このこ  
とは、個別の札所寺院についての記述が、ご本尊など  
の尊像の解説、付近の寺社への参詣路、景観の描写を  
中心とすることからも伺われる。

それぞれの札所寺院をどういう理由で定めたのかは  
『丹後廿五箇所案内記』には明らかではない。各札所に  
は御詠歌が配当されているが、例えば第一番札所の御  
詠歌が「のりのみちしるもしらぬもわたすべしごくら  
くへゆくふねのたよりに」であつて、本霊場第一番詠  
生寺の御詠歌「両幡の天下ります椋の木は世々に朽ち  
せぬ法の師のあと」とは異なっているように、本霊場  
の札所番号と対応して御詠歌を配したものではない。  
そもそも『丹後廿五箇所案内記』には札所寺院と本霊  
場とを対応させる記述がない。札所数が二十五あるこ

とから写し霊場と考えたくもなるが、むしろ、本霊場の影響を受けて別個の霊場として設立されたものではなからうか。

霊場に関する事物としては、かつては御詠歌額があったのご報告を頂戴している。

現在は巡拝されることはないようである。

### 三、一、一、奈良教区 別時念佛道場大和二十五霊場と吉野二十五霊場

三、一、一、一、別時念佛道場大和二十五霊場

「別時念佛道場大和二十五霊場（以下、大和二十五霊場）」は吉野町から奈良市に到るまでのほぼ奈良県全域に札所寺院をもつ。奈良県には本霊場の札所として法然寺、奥院、指図堂があり、この三ヶ寺を含む二十五の札所寺院から構成されている。設立は昭和八（一九三三）年である。

この霊場に関して、「大和二十五霊場巡拝しほり」（昭和八年一月刊、発行兼編輯人狩谷博成、以下「しほり」）

という巡拝のしおりがあり、全札所寺院と配当された御詠歌、さらに札所寺院の位置を記した略地図が添えられている。本霊場の札所寺院は、大和二十五霊場で

も、本霊場の札所番号、御詠歌がそのまま用いられている。本霊場の札所の三ヶ寺を除くすべての札所寺院には、標石があつて、霊場名（別時念佛道場大和二十五霊場）、札所番号、日付（昭和八年二月）、寄進者名（狩谷博成）が刻まれている。この標石に寺院名が刻まれたケースもあるが、後に刻んだものようである。この他に各札所寺院に共通の形式を持つ朱印もある。朱印には霊場名、札所番号、寺院名が記載されている。本霊場の札所には、大和二十五霊場としての特別の朱印は伝わっていないようであり、本霊場としての朱印を流用したもののようである。この他、写し霊場によく見られる御詠歌額は作られなかったようである。現存せず、聞き取り調査によつても御詠歌額があつたという伝承は確認できなかった。写し霊場であるから本霊場から何かを写しているはずだが、御砂などの物

品が写された形跡も記録はない。御詠歌をもって写し霊場としたものようである。

設立の経緯および設立者ははっきりとしない。『しほり』には「高誉」とのみ記された序文が添えられているが、誰のことなのか現在では判明しない。『しほり』の編集者で、標石の寄進者でもある狩谷博成氏が設立に大きく寄与したと思われる。設立年代である昭和八年は、法然上人の御生誕八百年に当たる。明治以後に各地に設置された本霊場の写し霊場は、大正初期（七百年大遠忌）、大正末から昭和初年（開宗七百五十年）、昭和四十八年頃（開宗八百年）など、浄土宗の大イベントの時期に設置されたケースが多い。『しほり』や伝承からは確認できないが、大和二十五霊場は法然上人御生誕八百年に関連して設立されたと考えられよう。

札所寺院に設置された標石が大和二十五霊場の存在を示している。平成四、五年頃に奈良教区浄土宗青年会で念仏行脚が行われた他には、現在では霊場としての活動は現在ではほとんど停止しているようである。

### 三、一、一、一、吉野二十五霊場

吉野二十五霊場は吉野川沿いを中心として吉野郡に設置されている。霊場名は吉野郡に設置されているので仮に「吉野二十五霊場」と呼び慣わされているが、正式名称は不明である。また設置の年代も不明である。二十五の札所寺院の内、十四カ寺が判明している。そのうち大和二十五霊場と重複する札所が一カ寺ある。この霊場も本霊場から物品を写した形跡は無く、霊場番号と対応する御詠歌が写され、それをもって霊場とされているようである。札所寺院には共通した形式の御詠歌額がある。額の向って右側に「圓光大師二十五霊場寫」と墨書されている。聞き取り調査では、吉野二十五霊場としての巡拜はなされていないようである。

なお、吉野郡下市町西迎院は大和二十五霊場の第四番札所であるが、本堂前に「圓光大師廿五靈場寫」と記された御詠歌額（霊場番号は第一番）が現存する。霊場番号は大和二十五霊場のものとは異なり、また、御詠歌額の形式は吉野二十五霊場のものと異なっている。



る。従ってこの二霊場とは別の霊場の札所だと考えられるが、同形式の御詠歌額の存在は他に確認できていない。霊場名、設置年代など不詳である。

三、一二、大阪教区 大坂圓光大師廿五箇所、泉日根郡圓光大師廿五箇所、和泉國圓光大師廿五箇所、圓光大師廿五ヶ所（河北組）

三、一二、一、大坂圓光大師廿五箇所

「大坂圓光大師廿五箇所」は大坂寺町の浄土宗寺院を中心に構成されている。札所寺院の内、第五番は北摂組内に移転しており、第十七番は廃寺となっている。

従来、法然上人の二十五霊場巡拝は、宝暦十二年（一七六二）の順阿霊沢等による巡拝（その内容は霊沢『案内記』に見える）から始まったとされてきたが、近年、山本博子氏が、村上張英作、延享四年（一七四七）刊の『浪花寺社巡』に「圓光大師廿五所廻」（圓光東漸大師廿五所御影順拝）が記載されていることを見出され、霊沢が二十五霊場を選定・巡拝する以前に、大坂

に二十五霊場が創設されていたことを明らかにされた。

以下、山本氏のご研究『大坂の法然上人二十五霊場―その成立と展開―』（『中外日報』第二六四〇七号、中外日報社、平成十四年十二月十日）、『円光大師二十五所廻』（『宗教研究』第三三五号、日本宗教学会、二〇〇三年）、『法然上人二十五霊場と御影信仰』（『日本宗教文化史研究』第十一卷第一号、日本宗教文化史学会、二〇〇七年）に依拠して「圓光大師廿五所廻」の特徴を概観したい。

この「圓光大師廿五所廻」は、法然上人の御影（五ヶ寺が法然直作としている）を対象とした巡拝であり、「本尊巡礼」の性格を有するものであった。ところが、宝暦十一年（一七六二）の法然上人五百五十回御忌に向けて、大坂の寺院で法然上人の遺跡寺院の出開帳が連続的に催されたことから、大坂の浄土宗の僧俗の間に遺跡寺院へ直接参詣しようという機運が盛り上がり、これを受けて霊沢が諸国の遺跡二十五箇所を巡拝し、『案内記』を上梓し、以降諸国二十五箇所が本霊場となった。それに伴って、大坂の廿五所は、本霊場の「うつ

し霊場」となり、廿五所廻は「聖跡巡礼」の性格を兼ね備えるようになった。

このように「大坂圓光大師廿五箇所」は、法然上人二十五霊場の濫觴であり、霊沢の本霊場の礼所数の決定に大きな影響を与えていることから、本霊場は、大坂の廿五所が大規模化したものといっても過言ではない。霊場の大規模化した例は、他に「洛陽阿弥陀四十八願所」が「西方四十八願所」に拡大した一例があるのみであり、また霊場の性格が途中から変化した例は、この「大坂圓光大師廿五箇所」の他には見当たらない。

現在では霊場として巡拝されることはないようである。現存する札所寺院の多くに「大坂圓光大師廿五箇所」と刻まれた標石が建っており往時を偲ばせる。

三、一二、二、 泉日根郡圓光大師廿五箇所

「泉日根郡圓光大師二十五箇所」は、泉南市・阪南市（旧日根郡）に所在する浄土宗寺院（泉南組所屬）で構成されている。札所寺院の内、第七・八、十六番は廃寺に、

第二番は墓所になっている。

成立経緯は不明であるが、谷美光氏は「法然（源空）上人が承元元年（一一〇七）讃岐（香川）へ流罪になり、同年赦免となつての帰りは谷川に上陸され、泉州路を北に向かったといわれ、この辺では「大川会（え）」と称して法然上人の徳を慕う集いがあったことから、このような霊所がもうけられたのではなからうか」（谷美光「浄土宗日根郡廿五霊場の御詠歌」、「おのさと」第四集、泉南歴史民俗資料社、一九九一年）と推測されている。

成立年時も不明であるが、慶応四年（一八八六）に霊場寺院名と御詠歌を筆録した史料があり、また第十九番札所の「真如寺の詠歌には享和二年（一八〇二）とある由で」（谷前掲論文）、江戸後期には成立していたことは間違いない。

現在では霊場として巡拝されることはないようである。

三、一一、三、 和泉国圓光大師廿五靈所

「和泉国圓光大師廿五靈所」は、岸和田市・貝塚市に所在する浄土宗寺院（泉北組・泉南組所屬）で構成されている。札所寺院の内、第七・十四・二十番が廃寺となっている。

成立経緯は不明であるが、出口神曉氏は、第一番光明寺の第十五世で当麻曼荼羅の研究で知られる後曼荼羅院陳阿靈仰（嘉永六年、一八五三、歿、七十九歳）と、二十五カ寺中十一カ寺がその末寺である第二十五番西福寺の旭誉とが共同して設定したのではないかと推測されている（出口神曉「和泉円光大師二十五霊場」、出口神曉「名所古跡を訪ねて」、称名寺、一九八五年）。

成立年時は、西福寺に現存する標石に「弘化四末年（一八四七）引用者註」六月吉祥日村檀中」と刻まれているのでこの頃に成立したと推定される。

この「和泉国圓光大師廿五靈所」は、現在、「明治・大正時代にあらたに加わった寺院を含め華頂回番元祖講と称し、念仏弘通に勤めておられます」（大阪教区教

化団編「大阪の二十五霊場」（大阪教区教化団、刊年不明）ということである。

三、一一、四、 圓光大師廿五ヶ所（河北組）

アンケート調査により、浄土宗河北組に所屬する枚方市内の寺院の中に、「圓光大師廿五ヶ所」の札所寺院が三ヶ寺あることが判明した。

このことから、以前に組内寺院で「圓光大師廿五ヶ所」が構成されていたことが推測される。しかし、第十五番札所の法楽寺に御詠歌額が現存するのみで、史料が見当たらないため、成立年時・経緯は不明としなければならぬ。

三、一三、 兵庫教区 靈場名不詳く兵庫県内の靈場三ヶ寺

三、一一、一、 本靈場第二番十輪寺

現第三番札所である十輪寺は、法然上人が建永二年（一一〇七）讃岐へ配流の折、摂津経ヶ島を経て上陸された高砂に在し、漁夫八田治部太夫老夫妻を教化され

た古刹である。寺伝によれば、嵯峨天皇の御世、弘仁六年（八一五）に弘法大師が入唐の途上高砂沖にて靈感を得、帰朝後に『地藏十輪經』の教旨に則り、勅を奉じて鎮護国家の祈願所として創建し、地藏山十輪寺としたものであると言う。その約四百年後、法然上人化益の後は、弟子信寂房が上人を崇めて中興第一世とし、自らを第二世とした。後、寛元二年（一一三二）西谷浄音上人の弟子親性房が第三世となり、西山派に属することとなる。大永七年（一一二七）、大阪堺の十万上人が讃岐小松の庄生福寺に参詣した折、法然上人自画讃の「宝瓶の御影」を得て、帰途高砂十輪寺に寄納された。以来山号を宝瓶山と改めた。現在この「宝瓶の御影」は奈良国立博物館に所在しているとのことであった。

上人配流の折、教化を受けた八田治部太夫夫妻は、漁業の最中にも口には名号を離さず、また晩には夜もすがら念仏を続け、臨終正念にして往生を遂げた。このことがもととなり本霊場第三番と定められた。現在も境内墓地に治部太夫夫妻の墓所を有する。

法然上人或いは二十五霊場に関する宝物として前出の「宝瓶の御影」。八田治部太夫に与えたとされる数珠。法然上人母君所持の両幡椽の念珠。又母君の菩提の為に記したとされる「名体不離名号」が現存する。

第三番霊場の御詠歌は「生れてはまず思い出んふるさとにちぎりし友の深きまことを」であるが、十輪寺にはこの歌が記された御詠歌額は確認出来なかった。二十五霊場としての御詠歌額は無いが、本堂内に「加古都西國霊場第三番十輪寺」として、「汐みちて」から始まる別の御詠歌の額が確認出来た。

標石については確認出来なかったが、本堂正面階段の脇の柱には「宗祖法然上人遺跡第三番霊場」と木板に白い文字で書かれた大きな表札が掲げられていた。

朱印については本霊場第三番の長方形の角印がある。

#### 圓光大師廿五霊場第三番

と刻印されているもの。宝珠の中に梵字を配したものの寺号の丸印。以上の三点を捺印したものの提供を頂いた。

三三 一三・二 本霊場第四番如来院

第四番如来院は山号を珠光山、寺号を遍照寺と号する。

法然上人配流の経路から言えば、先の第二番高砂の前に立ち寄り、遊女教化が行われた場所である。

初めは現在の尼崎市神崎町にあり、神崎釈迦堂と称せられていた。天平年中に行基菩薩が、聖武天皇の勅願によつて開基した四十九院のひとつと伝えられる。

法然上人は讃岐へ配流の際、この地に於いて多くの遊女らを念仏教化され、うち五人の遊女（寺伝には宮城・仮藻・大仁・吾妻・小倉の五名）が念仏の声と共に入水往生を遂げている。その遺骸を川岸に葬り、建てられたのが「遊女塚」（現在は梅ヶ枝公園に移転）である。その折、遊女らの亡骸を洩した橋を洩上橋（俗に由来橋）と称し、橋杭の廢材を彫つて造像された勢至菩薩像がある。

上人は建永二年（承元元年）十二月、勅免により帰洛の際もこの地に立ち寄られ、釈迦堂に於いて遊女らの

菩提の為に三日二夜の念仏回向を修せられている。この時多くの道俗から、この地に留まることを渴望された上人は、勅により勝尾寺に行かねばならぬとして、代わりに高弟であった湛空を留まらせ、湛空が造像した法然上人坐像を自ら開眼し留め置かれた。（名残の「御影」このことにより、法然上人を改宗中興開基と戴いている。

如来院の前身とされる神崎釈迦堂は、永正十四年（二五二七）の洪水により堂宇・仏像共に大破流出した。その為新たに善光寺如来を模して本尊を造像し、如来院と号するようになった。永正十六年（二五一九）細川高国の尼崎城築城に伴い、翌十七年に神崎の地より尼崎大物へ移され、その約百年後、元和二年（二六一七）、各宗の寺院が立ち並ぶ現在の寺町に更に移転したものである。

法然上人或いは二十五霊場に関する宝物としては、前出の「名残の御影」「元祖大師御舍利」上人所持の「御袈裟」「如意」「四腕」が挙げられる。又教化を受けた

遊女が往生を遂げるまでの絵解きとその版木と、入水往生した五人の遊女の遺髪も確認出来た。

御詠歌額は堂内正面に設置されている。取り外すことが叶わなかったので正確ではないが、およそ縦九十センチ×横四十センチほどの木製の額である。正面には金色の筋状の枠があり、その囲みの中に

#### 圓光大師巡拝第四番

身とくちとこころのほかの弥陀なれば我をはなれてとなへこそすれ

と青字で記され、その下に施主浪花と記されている。施主名の左脇には赤枠に金文字の角印と金枠に赤文字の角印が押されたような細工が施されている。

裏面には、確認出来ない箇所もあるが、概ね次のように記されている。

#### 奉獻如来院○主○○

為先祖代々三界萬靈

元治甲子

三月吉日亀講

元治年間は二年しかなく、甲子は元治元年（一八六四）のみである。この年に奉獻されたものと見て良い。

標石は、三門から出て左脇に続く寺町の通りに二本の角柱が、又三門に向かって左脇に一本の角柱が確認された。先の二本のうち一本の正面には「左第四番如来院」右側面には「圓光大師廿五諸國巡拝所」と刻字され、もう一本は正面に「神崎五人遊女遺趾」と刻まれている。三門脇の一本は、正面に「圓光大師二十五霊場」、右側面に「第四番札所如来院」、左側面に「明和三丙戌年四月大師講中」と刻まれ、裏面の刻字から「義譽上人」の代に建立されたものと判る。

朱印は第三番十輪寺と同様の長方形の角印に

#### 圓光大師廿五霊場第四番

と刻印されたもの（ただし円の字は新字）と、一宝珠中に「キリク」と「カ」が横並びに配されたもの。珠光山如来印の丸印。以上三点を捺印したものを提供頂いた。

案内記として法然上人二十五霊場会事務局発行のバ

ンフレット『二十五霊場に参拝しましょう』の提供を受けた。独自の案内記の存在は確認出来なかった。

三・一・三三・三三 室津浄運寺

室津（現たつの市御津町）の浄運寺は、大正末期から約十年間、本霊場第三番札所とされていた経緯のある寺院である。矢野隆雲著『法然上人遺跡の研究―二十五霊場巡礼を中心として―』にはその経緯が次のように示されている。

宝暦十二年（一七六二）に靈沢によって開創された二十五霊場が、法然上人遺跡巡りの中心として長く続けられてきたのであるが、明治時代後半になって、宗祖大師七百年御遠忌（明治四十四年・一九一三）を迎える頃より、京都において霊場改正の意見、つまり、遺跡の選定を宗史にてらして見直すべきだとする意見が出てきたのである。

浄土宗開宗七百五十年の大正十三年（一九二四）を迎えるにあたり、知恩院総本山布教師会によって一

部改正されたものが、「新撰元祖大師二十五霊場巡拝案内記」として、大正十二年十二月に、総本山知恩院教務部から発行され、そこで改正された霊場は次の八ヶ所であったのである。

第三番高砂十輪寺を室津浄運寺

第六番四天王寺念仏堂を兵庫名号石

第八番大川報恩講寺を高野山圓光大師御廟

第十一番奈良大仏龍松院を東大寺大仏殿

第十七番小倉山二尊院を嵯峨釈迦堂

第十八番鎌倉山月輪寺を太秦西光寺

第十九番京都寺町法然寺を鹿ヶ谷法然院

第廿番京寺町三條誓願寺を黒谷報恩蔵

しかし、その約十年後、この遺跡改定に異論が出てくることになり、昭和七年（一九三二）、浄宗会の取り上げるところとなって、法然上人二十五霊場委員会が発足したのである。その会の動きは早く、翌昭和八年六月には、たちまち結論が出され、再び霊場が改正されたのであるが、その内容は、以前の霊

沢の二十五霊場に戻されたものである。ただ第十一番、奈良大仏影堂龍松院のみが、東大寺指図堂と改正されたのである。

以上のように浄運寺は、開宗七百五十年を迎える前年、大正十二年（一九二三）から、再び霊沢の二十五霊場に改められるまでの約十年間、第三番札所と指定されていた。

古くは後鳥羽天皇創建（文治元年、一一八五）の西方寺といい、後に法然上人の弟子信寂房を開山、天正年間照蓮社圓誓上人を中興とし、華頂山貞誓大僧正の御真筆をもつて浄運寺と改称されたようである。

配流の経路としては、現第三番札所の高砂十輪寺を出立の後、法然上人はこの地を訪れたことになる。当時この室の泊は海運の要所として栄え、多くの遊女が存在したようである。その中には、一説に木曾義仲の夫人であったという遊女友君がおり、この地に於いて法然上人の化益を受けている。

法然上人或いは二十五霊場に関する宝物としては、法然上人が友君に授けたという「かりそめの色紙」、「六字御名号」、「袈裟」、上人御自ら頭部を作り、首より下を友君が作ったという合作の法然上人像（圓光大師所縁御影略縁起」という版本と印刷物も確認した。）。他にも友君御座像などが存在する。又寺域内には友君塚、法然上人が真水の出にくい海岸近くで貝を使って掘り当てたと伝えられる「貝堀りの井戸」を有する。

御詠歌額は二種確認された。一つは本堂の外、正面の入り口の鴨居にあたる部分に掲げられており、木製の枠の付いた横長の額である。

右から順に

法然上人二十五霊場

第三番霊跡

かりそめの色の

ゆかりの恋にだに

逢ふには身をも

惜しみやはする



と墨書されており、寄附者の所在・氏名と続く。

もう一点は堂内に入ると正面の鴨居にあたる場所に掲げられており、こちらは縦長の長方形に木枠の付けられたものである。やはり墨書で右から

法然上人廿五霊場第三番

かり染の色

ゆかりの恋にだにあふ

には身をもおしみ

やはする

と記され施主名が続いている。年代は不明。

標石は独特の形態の三門の、向かって左下石垣の角に一本の角柱があるのを確認した。

法然上人御霊場第三番

と刻まれている。他に丸型の石に法然上人御旧跡と刻まれたものも確認した。

朱印は六点が確認された。縦長の角印が二点あり、一つには

圓光大師御霊場（二重枠）

もう一つには

圓光大師廿五霊場第三番（二重枠）

と刻印されている。他に小判型の印で、中央に阿彌陀如来、やや小さく左右に観音菩薩、勢至菩薩と配されたもの一点、清涼山浄運寺の角印二点、他一点を確認した。

以上の三箇所を調査したが、本霊場としての巡拝、或いは御旧跡としての巡拝は勿論あるが、兵庫教区独自の写し霊場が新たに設置されたことはなかったようである。

三、一四 南海教区 圓光大師讚岐廿五箇拜所

圓光大師讚岐廿五箇拜所については数箇寺を選出し、平成十九年十月二十二日・二十三日の両日に調査を行った。

当霊場は、本霊場第二番の法然寺を含めた二十五箇寺と二箇所の付所、番外一箇所によって構成されてお

り、中に西山派一箇寺、浄土真宗二箇寺の寺院を有するものである。本霊場を始めとして香川県内各所に配置されており、うち二箇寺と一箇所の付所は、法然上人が四国上陸に先立って立ち寄り、島民を教化された塩飽本島に所在している。

設立の年時は不明との解答が多かったが、今回調査を行った寺院の中に、先代ご住職が設立に尽力されたという寺院が有り、そこでの聞き取り調査によれば大正初期以降と推測される。しかし、先の本霊場一箇寺には、「明治二十四年九月新調」と裏書きされた木板の讃岐霊場第一番と第二番の御詠歌額が存在しており、「新調」の裏書きから判断して圓光大師讃岐廿五箇拝所設立以前に、その原型となる霊場が存在したのかも知れない。平成十七年のアンケート調査時に提供された冊子（コピー）『圓光大師二十五箇拝所巡り』には、平成十一年当時の丸亀市文化財保護審議会会長堀家守彦氏による当霊場の調査報告が掲載されている。それには「木札の番号が案内書の番号と異なった拝所がある

ことから、拝所の設定は2回以上行われ、その最終は4枚の木札の裏の墨書から明治三四年であろうと思われる。現在の番号と異なる番号木札2枚の墨書の施主名は屋号で書かれているので、この方が古い（江戸時代カ）設定時の番号であったらうと推測する」との報告がある。

前出の聞き取り調査を行った寺院より『圓光大師讃岐廿五箇拝所巡拝案内記附浄土宗勤行法』という手引き書のコピーをご提供頂いた。

名称については『圓光大師讃岐廿五箇拝所巡拝案内記』の表題により、「圓光大師讃岐廿五箇拝所」であることが確認出来るが、設立時に教区で作成したと伝えられる朱印には「讃岐之國廿五霊場第〇〇番」と刻印されており、名称に差異が見られた。又同時期に作成されたと思われる、山号と寺号の入った角印（二十七日リ四方）も確認した。

次に御詠歌についてであるが、『圓光大師讃岐廿五箇拝所巡拝案内記』に見る限りでは、七箇寺に於いて該

当する番号の本霊場の御詠歌とは異なるお歌が記載されている。そのお歌を記した御詠歌額は約十九センチ×四十八センチ程の大きさの額が、本霊場に所在する二点を含め、数点確認されたが、全箇所現存するわけではないようである。

標石も調査中、数箇所について確認した。石表に刻字された霊場名は「讃岐二十五拝所第〇〇番元祖大師法然上人御奮跡」とあり、「箇」の有無に差異が見られた。

この標石も全体に揃えられたものではないようだ。

現在の「圓光大師讃岐廿五箇拝所」としての参拝状況であるが、本霊場の一箇所を除いて殆どの札所寺院から「無い」、或いは「年に数回」の参拝があるという回答を得ている。団体での順拝が頻繁に行われていたのは、聞き取りによれば昭和の終り頃迄であったようである。

二十五霊場に関する宝物として法然上人御作と伝えられる「お胎籠もりの上人像」「本尊阿弥陀如来像」「水鏡のの御影」、「御手植えの松」、熊谷入道所持の「指摺

之鉦鼓」、高階西忍入道に与えた「金銅仏」「忍の木鉦」等々の貴重な品々を多数有する霊場である。

又今回調査した札所寺院の一ヶ所では、山内で二十五ヶ所の巡拝が出来るように石仏を配置した所も確認した。それには特に霊場名は付いていないようである。

### 三、一五、福岡教区 明照大師二十五霊場

明照大師二十五霊場は福岡県粕屋郡および福岡市（福岡教区粕屋組）を中心として設置されている。

札所寺院について、教務所宛アンケートでは一カ寺（福岡県粕屋郡大分寺）のみが確認されていたので、大分寺様のご協力を得て、同寺の实地調査を行った。御詠歌額によれば、札所番号は第五番である。

調査の際に、航空写真を参考にしながら付近の浄土宗寺院の分布状況について確認したところ、福岡教区粕屋組の寺院が札所寺院として指定されているのではないかとの感触を持った。そこで、实地調査後に粕屋

組全寺へのアンケート調査を行い、札所寺院として指定されているどうか、霊場であることを示す事物（御詠歌額など）があるかどうか、を尋ねた。その結果、新たに札所寺院であることが判明したところがあり、合計七カ寺の札所寺院が確認できた。

霊場であることを示す事物としては、各霊場には共通した形式の御詠歌額がある。御詠歌額には霊場名として「明照大師二十五霊場」、霊場番号、対応する本霊場の御詠歌が記載されている。大分寺の場合は、本霊場第五番、勝尾寺二階堂のご詠歌「柴の戸にあけくれかかる白雲をいつ紫の色に見なさん」が記載されている。御詠歌額以外に霊場であることを示すものはなく、御詠歌を配当することで写し霊場としたようである。

設立年代、設立者などは不明であるが、霊場名に明照大師を用いていることから、法然上人七百年大遠忌以後の設立である。現在では霊場として巡拜されることはないようである。

### 三一六 佐賀教区肥前二十五霊場

肥前二十五霊場は佐賀県鹿島市を中心とし、佐賀県北部の伊万里市にまで札所寺院が設置されている。なお二十五の札所寺院のうち二ヶ寺は長崎県佐世保市に設置されている。

およそ半数の霊場には同一形式の御詠歌額（木板、縦三センチ×横五センチ）が現存している。この御詠歌額の表には、墨書にて「明照大師廿五霊場」という名称、及び霊場番号と本霊場の寺院名、そして対応する各御詠歌が記されている。裏面には「大正二年七月総本山師恩院贈與」と墨書され、併せて「華頂山印信」と刻まれた丸形の印が押されている。これにより当霊場の設立時期は大正二年七月と推察できる。大正元年（一九一二年）は法然上人七百年大遠忌であり、前年明治四十四年に明照大師号が加謚されていることから、ご遠忌に合わせて設立された霊場と思われる。なお、一ヶ寺にはお檀家様の巡拜奉納帳（大正二年九

月二十一日) が保管されており、そこには「宗祖大師二十五靈場」という名称が記されている。

また、刊行年は明らかではないが、『宗祖圓光明照大師二十五靈場巡拜之栞』という小冊子のコピーを確認した。現存部は一一〜二三頁のみで、御詠歌と寺院名が記されている。(地名の表記は、伊萬里町や鹿島村や佐世保市など) 欠落の頁には靈場設立の由来等の記載があつたものと予想される。

その他、二十五靈場に関する標石や朱印などは確認できていない。

現在では靈場として巡拝されることはないようである。(アンケートおよび実地調査の時点)

## 五、まとめ

個別の写し靈場の調査の過程で、調査対象とはしていなかった別の写し靈場の存在が明らかになることもあり、全国をくまなく調査すれば相当数の写し靈場が存在したことが明らかになるのではないかと考えられ

る。各教区の教務所からは報告されなかった靈場が実際に存在していた場合もある。法然上人賛仰の歴史を知るためには本プロジェクトで調査対象としなかった写し靈場についても極力見出して調査すべきであるが、遠忌事業の一環として平成二十三年の八百五十年大遠忌までに調査を完了するという時間的な制約、また人員の制約もあり、そのような完全な調査は不可能であつた。そのため「本研究の経緯」に示した範囲の写し靈場のみ調査対象を限定せざるを得なかった。しかしながら、これらの写し靈場の調査を通して、法然上人の写し靈場を持つ特徴の一端を明らかにすることができたと思う。その特徴をまとめると、次の五項目となる。

(1) 設立の時期。設立の時期を示す資料が残っている場合、近代以降に設立された靈場に関しては、大正初期(七百年大遠忌)、大正末から昭和初年(開宗七百五十年)、昭和八年(法然上人生誕八百年)、近年では開宗八百年など、浄土宗

の大イベントと関連して設立されたものが目につく。

(2) 設立者。設立の経緯を直接示す資料(冊子など)が残っている場合を見ると、檀信徒個人あるいは地域の寺院有志によって設立されている。また、佐賀教区のように、知恩院の関与が伺われる霊場もある。現在まで活動を続けている霊場は、寺院有志によって運営が続けられているものに限られる。

(3) 何をもって霊場とするか。三河教区の圓光大師三河國廿五霊場、尾張教区の尾張二十五霊場、伊勢教区の圓光大師准廿五霊場など、本霊場のお砂を写すことによって霊場を設立されたものや、本霊場のお歌を配当して(例えば一番誕生寺の御詠歌を写し第一番霊場のお歌とする)霊場としているものがある一方、江戸時代に設立された霊場には、京都教区の圓光大師丹後廿五箇所や京都廿五処巡のように、写し霊場とはい

えないような札所の選定をする場合もある。

(4) 設立目的。江戸期に設立された霊場の場合、地理的な条件から本霊場巡拝が困難な人々の巡拝の便のために設立したとされる場合が多い。むしろこれが主目的となる。一方、交通の便がよくなり、全国から本霊場が巡拝されるようになった現代に設立された霊場は、浄土宗のイベントに関連して設立され、霊場を設立し維持することで法然上人を賛仰しようとすることを目的とするようである。

(5) 設立後の経過。写し霊場が設立されて以後、そのまま霊場としての機能を保っているケースは非常に少ない。むしろ設立それ自体が目的であり、その霊場を継続的に機能させることを目的としていなかっただのではないかと思われるほどである。(2)とも関連するが、一旦設立された霊場が忘れ去られることなく霊場として機能し続けている場合は、札所寺院が主体的に維持

している場合に限られる。設立者が寺院ではなく檀信徒であった場合でも、札所寺院が積極的にその活動を行うことによつて維持されているようである。

法然上人の写し霊場は以上のような特徴を持つていようであるが、現代におけるその機能を考えると、(4) (5) に挙げた特徴が重要であろうと思われる。

現在では、かつてのように地理的な制約から本霊場の巡拝が困難な地域はほとんどなくなっており、本霊場の巡拝は盛んに行われている。したがつて、霊場を設立する目的は、かつての「本霊場巡拝が困難な人々の巡拝の便のため」とはなり得ない。仮に設立するのであれば、むしろ何らかのイベントにあつて法然上人の賛仰を目的として設立することになる。しかしながら、そのような形で設立された霊場は、必ずしも維持されない。設立すること自体で法然上人賛仰の目的は達成されているのだから、設立のきっかけとなった

イベントが終了すれば、維持に力が注がれなくなるのは当然のことであろう。

霊場としての機能が失われてしまった場合、霊場を作り直す場合がある。その場合、同じ札所寺院を以つて復興した例は調査した範囲ではなかった。札所寺院を新たに選定し、別の霊場として設立される。もちろん札所寺院が重複することもあるが、それは霊場の復興ではなく、新規に霊場を作るのである。

その典型的な例が三河教区に設置された霊場である。三河教区の霊場の項ですでに報告したとおり、教務所からご報告いただいた霊場は、圓光大師三河國廿五霊場と法然上人三河二十五霊場の二つの霊場であつた。実際には圓光大師三河國廿五霊場の設立前にすでに写し霊場が存在し、それが廃れたために新たに設立したのが圓光大師三河國廿五霊場であつた。その後、この霊場は再び廃れてしまう。その後、法然上人三河二十五霊場である。圓光大師三河國廿五霊場とは関わりなく、新たに昭和四九年の浄土宗開宗

八百年を記念して設立されたものである。このように幕末から昭和五〇年頃までの間に、霊場は二度興廢し、更にもう一度設立されたのである。

同様な例が尾張教区にも見られる。尾張教区の項で述べたように、明治時代に設立された霊場を、札所寺院を入れ替えて、昭和五十年代に再興している。霊場の新設ではないものの、三河教区と同じような経緯をたどったようである。

また、奈良教区の霊場の項目で報告したとおり、奈良教区には限られた地方の霊場として吉野地方一帯に吉野二十五霊場がある。一方で吉野地方には霊場名不詳の写し霊場が存在したようである。吉野二十五霊場も霊場名不詳の霊場も、霊場としての機能は果たしておらず、札所寺院のすべてが判明しているわけではない。これもほぼ同一の地域に複数回写し霊場を設立し、設立後間もなく忘れ去られたものであろうか。

ひとたび本霊場が設立された後、各地に多くの写し霊場が度々設立されてきた。そこには各時代、各地域

における、法然上人を賛仰し念仏信仰を深めようとする意識が働いていたことであろう。さもなくば大変な労力を要する霊場設置事業が行われることはなかったはずである。一方、想像するに難くないことであるが、実際に霊場を維持するためには相当の労力が必要である。むしろ設立することよりも維持することが、札所寺院に対して経済的、時間的、人的な負担を継続的にかける。ある霊場の設立に際して中心的な役割を果たした寺院が、現在では札所寺院であったことを知られることすら嫌う事例まである（霊場名、寺院名は伏せる）。写し霊場が短命に終わらざる得ない性格をもつのも頷けるところである。したがって、かつて設立され現在ではその機能を失ってしまった霊場に、再び霊場としての機能を担わせようとするのは現実的ではない。そのことが同一地域に時間を置いて新たに霊場を作り直すという結果につながっていったのであろうと思われる。今後、写し霊場を設立しようとするならば、以上に示した過去の事例から推察される問題点を踏まえ



て、札所寺院に対する十分な組織的な支援を含む、現実的な対応が必要であろうと考えるものである。

本研究班の調査に際し、約二百ヶ寺の御寺院様にアンケート調査にご協力いただきました。聞き取り調査、実地調査にうかがわせて頂きました御寺院様には貴重なお時間をお割きいただき、調査にご協力いただき、さらには貴重なご意見、ご助言を賜りました。多数の御寺院様、教区教務所様、教化団様には貴重な資料をご提供頂きました。また、札所寺院一覧として本報告書に御寺院名を掲載させて頂く御許可を頂戴した御寺院様には、諸般の事情で掲載いたしませんでしたことをお詫び申し上げます。末筆ながら、多大なご協力、ご厚意に対し、甚深の感謝の意を表します。まことにありがとうございました。

〔研究班メンバー〕 福西賢兆、○齊藤舜健、佐藤晴輝、

○伊藤茂樹、○井野周隆、○上田千年、○坂上典翁、

○曾田俊弘、○宮入良光、○八木英哉、齊藤隆尚、竹内眞道、清水秀浩（○印は本報告書分担当執筆者）



【平成19年度】研究活動報告

## 開教

### 研究の目的と内容

#### 【国内開教】

沖縄本島都市部における各宗派寺院の開教の現状を調査分析することを目的としている。平成15年～19年度までに、沖縄において活動している浄土宗寺院、他教団寺院あわせて約30ヶ寺に対して聞き取り調査を実施し、その成果の一部を『教化研究』15～18号に報告してきた。今年度は、これまでの沖縄調査を総括し、開教の現状と寺院の活動を分析するための研究会を行った。成果の詳細は、本号『教化研究』成果報告「沖縄本島都市部における各宗派寺院の現状と展望③」を

参照されたい。また、国内開教システム更新に関する研究会を実施した。

第1回研究会平成19年4月2日 今年度の研究活動について

第2回研究会平成19年4月12日 調査資料の整理

第3回研究会平成19年5月18日 調査資料の整理

第4回研究会平成19年6月13日 調査資料の整理

第5回研究会平成19年9月13日 2005年度国勢調

査の各市町村世代別データの更新

第6回研究会平成20年1月23日『教化研究』成果報

告書 内容検討

【海外開教】他教団を含めた海外開教の現状と課題を提

えるとともに、本宗における現地出身者の開教使育成のための基礎的研究を行った。具体的には、日本で浄土宗僧侶養成に参加した外国人に対して聞きとり調査を行うとともに、これまで行った新宗教を含めた他教団の海外開教担当者からの聞きとり、および平成18年に行ったハワイ調査で得た資料の整理と分析を行い、『教化研究』19号成果報告書の作成を行った。なお、成果の詳細は、本号『教化研究』成果報告「他教団における海外開教の現状と開教使(師)養成」を参照されたい。

第1回研究会平成19年4月9日 今年度の研究活動について、クライド・ウィットワース氏への聞きとり調査

第2回研究会平成19年5月21日 ウィルソン・哲雄師への聞きとり調査

第3回研究会平成19年7月2日 研究成果報告(『教化研究』)の執筆計画について

第4回研究会平成19年7月25日の執筆計画について

第5回研究会平成20年1月26日 研究成果報告(『教化研究』)原稿検討

第6回研究会平成20年2月25日 研究成果報告(『教化研究』)原稿検討

第7回研究会平成20年3月24日 研究成果報告(『教化研究』)原稿検討

文責 主務 名和清隆

## 仏教福祉

### 研究目的

かつて浄土宗は、慈善救済、社会事業、社会福祉などの社会実践において、他宗に先駆けた活動を行っていた。本プロジェクトは、こういった歴史的な背景を踏まえ、毎年テーマを定めて研究を行い、それらの成果を研究誌『仏教福祉』掲載し刊行する。

また、浄土宗内をはじめ他宗派における社会福祉事業及び活動を研究するためアンケート調査を実施し、データの分析作業を行っている。

### 作業大綱

前期は、主として浄土宗寺院を対象に実施した仏教福祉のアンケート調査の分析を行い、11月に「浄土宗寺院社会福祉事業の振興に向けて」と題してシンポジウムを開催した。また、「浄土宗の社会福祉事業の振興に関する提言」についても検討を行っている。

さらに本年度は、施設調査として岡山県の光明園（ハルセン病療養施設）と香川県の竜雲学園（知的障害者授産施設）を訪問させていただいた。

シンポジウム、研究会での書評、施設調査報告については、『仏教福祉』第11号に掲載する。

研究会開催日及びシンポジウム、検討内容

と福祉』所収1994年3月発行  
担当 石川基樹

▼第1回研究会（平成19年4月23日）

①浄土宗社会福祉協会との連携について

②アンケート調査経過報告

③『浄土宗社会福祉施設総覧』について

④『仏教福祉』第10号の編集経過について

⑤書評 水谷幸正氏論文

「浄土教と社会福祉」長谷川匡俊編『仏教と福祉』

所収1994年3月発行

担当 鷺見宗信

▼第3回研究会（平成19年6月25日）

①浄土宗社会福祉事業の振興に関する提言について

②書評 孝橋正一氏論文

「仏教社会事業の研究方法論」長谷川匡俊編『仏教と福祉』所収1994年3月発行

担当 吉水岳彦

③『仏教福祉』第10号編集経過

▼第四回（平成19年7月23日）

①日蓮宗の社会事業アンケート報告

②浄土宗の社会福祉事業の振興に関する提言について

③今年度のシンポジウムについて

④『仏教福祉』第10号の件

▼第五回研究会（平成19年9月18日）

▼第2回研究会（平成19年5月21日）

①アンケート調査経過報告

②『仏教福祉』第10号について

③書評 上田千秋氏論文

「仏教福祉学の成立を求めて」長谷川匡俊編『仏教

①日本仏教社会福祉学会の報告

②共生・地域文化大賞二次選考審査報告

③今年度のシンポジウムについて

④来年度の計画について

大正大学非常勤講師 曾根宣雄（浄土学）

山野美容芸術短期大学専任講師 関徳

子（集計報告担当）

本研究所周末スタッフ 鷺見宗信（集

計報告担当）

▼第六回研究会（平成19年10月29日）

①シンポジウム提言内容の検討

②シンポジウムの作業打合せ

③後期の予定と来年度の方向性について

▼第七回研究会（平成19年12月10日）

①研究計画連絡会議の報告並びにシンポジウムの反

省

②浄土宗社会福祉事業の振興に関する提言について

③施設調査について

④来年度の予定について

⑤他宗アンケート調査経過報告

▼シンポジウム

\*日時 平成19年11月12日 午後1時～5時

\*場所 大本山増上寺慈雲閣

\*テーマ 浄土宗寺院社会福祉事業の振興に向けて

\*報告・提言 長谷川匡俊（研究代表・本研究所客

員教授・淑徳大学学長）

▼第八回研究会（平成20年1月21日）

①施設調査について

②浄土宗社会福祉事業の振興に関する提言について

【仏教社会福祉班メンバー】

淑徳大学准教授 藤森雄介（社会福祉）



③ 来年度の予定について

▼施設調査

平成20年2月24日 岡山県瀬戸内市邑久町 光明園（ハ  
ンセン病療養施設）

平成20年2月25日 香川県高松市仏生山町 竜雲学園  
（知的障害者授産施設）

▼第九回研究会（平成20年3月10日）

① 施設調査の反省

② アンケート調査経過報告

③ 調査方法に関する提言

④ 平成20年度シンポジウムについて

⑤ 『仏教福祉』第11号の原稿について

文責者 主務・研究員 曾根宣雄

## 生命倫理

### 研究目的

生命倫理とは生命そのものの意味を問いかけるものである。脳死・臓器移植問題においては生命の終わりをどのように考えるかが焦点であった。近年、これに加えて生命の始まりを人為的に操作する技術が進展し生命操作の範囲が広がってきた。生命の始まりについては生殖補助医療の進展がある。クローン、出生前診断、遺伝子治療、代理母など命の誕生に係る状況を一変させる可能性を持っている。生命の終わりについては尊厳死に関連する問題がある。近年、このような生命そのものに対する人為的な関与が現実的な問題と

なっており、このような問題に対して浄土宗教団あるいは仏教教団が如何に対処すべきかを示すことが社会的に要請されている。

本調査研究の目的は、この生命倫理の分野において注目される諸問題を抽出し、これらの問題に対して浄土宗教団としての考え方の方向性を明らかにすることである。

### 研究内容

生命倫理の諸問題は「いのちの始まり」から「いのちの終わり」までの広範囲な生命（いのち）に関する倫理的な諸問題について、浄土宗教団としての対応の

方向性を総合研究するものである。

平成十九年度はこれまでの研究成果のうち、プロジェクトチームとして見解を示すことが出来るテーマとして脳死臓器移植、尊厳死、生殖補助医療を採りあげ、各テーマについて①歴史的展開、現状動向と将来展望、②生命倫理上の問題点、③浄土宗の立場からの見解の取りまとめを行った。本調査研究では、研究会ごとに検討対象のテーマを決め、調査研究資料に基づいて研究参加者全員の討議形式で調査研究を行った。討議ではとりまとめの内容として採りあげるべき分析項目とその内容を検討した。なお、調査研究成果は総研叢書第五集「いのちの倫理―臓器移植・尊厳死・生殖補助医療」としてとりまとめた。

(一) 脳死臓器移植についてどう考えるか

脳死臓器移植については「臓器の移植に関する法律」の改正案が国会に提出されていることから、「宗報」平成十七年七月号で『臓器の移植に関する法律』につい

て(平成十七年五月九日浄土宗総合研究所)として見解を示している。本調査研究ではこれまでの臓器移植の歴史的展開、脳死臓器移植の実施状況、今後の展開、これから予想される問題点、加えて浄土宗教師の対応方法について見解を取りまとめた。言及すべき項目と内容についてはプロジェクトチーム全員の討議によって行った。執筆は坂上雅翁、今岡達雄が担当した。執筆内容を示す目次は左記の通りである。内容は総研叢書第五集「いのちの倫理」を参照していただきたい。

一 問題が山積する臓器移植

- 1 移植医療の歴史
  - 2 日本国内の臓器移植
  - 3 海外渡航移植の問題点
  - 4 許されるのか窮余の一策
  - 5 臓器移植法改正の動き
- 二 移植医療の問題と展望
- 1 知らされない臓器移植の問題点
  - 2 心配される国民意識の変化

### 3 脳死臓器移植に依らない移植医療

#### 4 問題はありますが頼らざるを得ない臓器移植

### 三 浄土宗教師はどのように対応すべきか

#### 1 浄土宗の生命観と脳死

#### 2 臓器移植に対する基本的な対応

#### 3 浄土宗教師の対応

#### 4 檀信徒に如何に話すか

### (二) 尊厳死についてどう考えるか

尊厳死に関しては平成十九年三月定期宗議会（第九十次）で採りあげられ、浄土宗独自の終末治療の中止を求める意思表明書の文案の作成について質問が行われた。質問の骨子は、終末期における念仏者は如何にあるべきかという問題であった。これは簡単に見解を提示できる問題ではないが、まず、終末期に何が起るのかを自分自身のこととして考える必要がある。また、終末期での尊厳死に関する対応の基本は、法然上人の教えと深く関連していると考えられる。したがって、終末治療の中止を求める意思表明書の文案という

前に、法然上人の人間観や死生観を理解し、「来迎」「俱会一処」などの宗教的イメージを広げ、死を操作するよりは死を受け入れる心構えが重要と思われる。

なお、言及すべき項目と内容についてはプロジェクトチーム全員の討議によって行い、執筆は名和清隆、吉田淳雄が担当した。執筆内容を示す目次は左記の通りである。内容は総研叢書第五集『いのちの倫理』を参照していただきたい。

#### 一 尊厳死の歴史と現状

- 1 現代における「死」の状況
- 2 尊厳死とは何でしょうか？
- 3 終末期における延命治療とその中止の実態
- 4 終末期医療に関するガイドラインの制定
- 5 尊厳死法制化の動き

#### 二 尊厳死の問題点

- 1 尊厳死に対する意識の違い
- 2 リビング・ウィルとその問題点
- 3 「尊厳ある死」とは

三 浄土宗教師はどのように対応すべきか

1 臨終行儀と三種の愛心

2 法然上人の死生観

3 浄土宗教師の対応

(三) 生殖補助医療についてどう考えるか

近年、友人や姉妹による卵子提供、代理出産、夫の

死後での凍結受精卵による出産など、生殖補助医療による倫理的問題が指摘されている。体外受精技術の確

立によって着床前の受精卵が存在するという現象、つまり受精卵の外部化はその受精卵の使い方というこれ

までには存在しなかったいのちの問題を引き起こした。こどもが欲しいという欲求は、ごく自然の感情であり

尊重されるべきものであるが、それを実現するために従前の生命観をどこまで変える必要があるのかは議論

の分かれるところである。ここでは、生殖補助医療の歴史と現状、生殖補助医療の実施によってもたらされる

様々な問題を整理し、浄土宗教師がこの問題にどのように対応すべきかについての議論を行った。

なお、言及すべき分析項目と内容についてはプロジェクトチーム全員の討議によって行った。生殖補助医療については主に戸松義晴、水谷浩志が分析を行い、この両名が執筆を担当した。執筆内容を示す目次は左記の通りである。内容は総研叢書第五集「いのちの倫理」を参照していただきたい。

一 急速に進展する生殖補助医療

1 生殖補助医療の現状

2 不妊治療はどのように行われるのか

3 不妊治療の経済面

4 生殖補助医療技術についての意識調査

5 その他の生殖補助技術

二 生殖補助医療の問題点

1 生殖補助医療の何が問題なのか

2 不妊治療に対する賛否

3 ヒトES細胞研究の問題点

三 浄土宗教師はどのように対応すべきか

1 「いのち」の始まりについての浄土宗の立場

2 不妊の人々に浄土宗教師として如何に対応すべきか

#### (四) 用語集

脳死臓器移植、尊厳死、生殖補助医療などの生命倫理の諸問題に関しては、浄土宗教師にとって馴染みの無い用語が多数使われており近寄りにくい分野となっている。そこで、この分野で使われる基本的な用語について簡単な解説を加えた用語集を作成することにした。脳死臓器移植、尊厳死、生殖補助医療の各執筆担当者が用語の抽出を行い、齋藤知明が作成を担当した。

#### 作業大綱

本年度の調査研究方法は、情報収集作業を文献・資料調査で行い、生命倫理問題の抽出並びに見解作成については当該テーマに対する自由討議で行った。また、幅広く情報収集を行うために外部研究会へ参加した。

・文献・資料調査

先端医療分野の技術革新等の新しい生命倫理問題の

把握、生命倫理問題に関する公的対応の把握、国内他教団、他宗派における生命倫理問題に関する動向の把握、海外における生命倫理問題に関する動向の把握について、文献・資料調査によって情報の収集把握を行った。

・自由討議

脳死臓器移植、尊厳死、生殖補助医療の三テーマについて、①歴史的展開、現状動向と将来展望、②生命倫理上の問題点、③浄土宗の立場からの見解をとりまとめるためディスカッションを行った。

・外部研究会参加

他教団との交流事業の一つである教団付置研究所懇話会の下部組織として「生命倫理・研究部会」があり、国内他教団、他宗派における生命倫理問題に関する動向を把握するために参加している。また、本年度は日本生命倫理学会が大正大学で開催された。宗門大学での学会の開催は貴重な機会であると捉え、ワークショップ「いのちの尊厳と宗教」をコーディネートした。

## 研究会開催日及び研究内容

第一回研究会平成十九年四月二十三日

- ①本年度研究計画について
- ②生命倫理関係の最近の動向について
- ③総研叢書「尊厳死について」の内容検討

第二回研究会平成十九年五月二十八日

- ①総研叢書・第二章「尊厳死について」の内容検討
- ②総研叢書・第三章「生殖医療について」の内容検討

第三回研究会平成十九年六月十八日

- ①生命倫理関係の最近の動向について（情報交換）
- ②総研叢書・第三章「生殖医療について」の内容検討

第四回研究会平成十九年七月二十三日

- ①総研叢書の構成と執筆分担の決定
- ②教団付置研究所懇話会生命倫理研究部会について
- ③その他最近の動向について（情報交換）

第五回研究会平成十九年八月二十七日

- ①教団付置研究所懇話会生命倫理研究部会の報告
  - ②その他最近の動向について（情報交換）
- 第六回研究会平成十九年十月一日

- ①日本生命倫理学会WSでの発表内容について
  - ②その他最近の動向について（情報交換）
- 第七回研究会平成十九年十月二十九日

- ①総研叢書の目次について
- ②用語集について
- ③その他最近の動向について（情報交換）

第八回研究会平成十九年十二月十日

- ①「総研叢書」執筆状況について
- ②「総研叢書」編集ルールについて
- ③平成20・21年度の研究計画について
- ④その他

第九回研究会平成二十年一月二十一日

- ①「総研叢書」原稿提出
- ②「総研叢書」編集について

③その他

第十回研究会平成二十年三月四日

①第三章記述内容の検討

第十一回研究会平成二十年三月十日

①原稿の読み合わせ

②副題について

③執筆者表記について

④表紙デザインについて

第十二回研究会平成二十年三月三十一日

①総研叢書最終確認

外部研究会への参加

外部研究会への参加活動としては、教団付置研究所懇話会生命倫理・研究部会、並びに日本生命倫理学会へ参加している。研究会開催日は左記の通りである。

○平成十九年七月二十四日

教団付置研究所懇話会第六回「生命倫理研究部会」

が大本本部第三安生館で開催された。研究会の内容は平成十九年十一月に開催される日本生命倫理学会ワークショップ「いのちの尊厳と宗教」の事前発表をおこなった。

1、「生命倫理問題への宗教者側からの提言の社会的役割」

浄土宗総合研究所・今岡達雄 主任研究員（日本生命倫理学会正会員）

2、「宗教の役割と生命倫理―死者なき倫理の奢り―」

曹洞宗総合研究センター・竹内弘道 主任研究員（同）

3、「神道大本の「生命観」と、超宗派から見る「生命／いのちの尊厳」

大本教学研究所・齊藤泰 大本教学委員会委員（同）

4、「浄土真宗から見た生命の価値と生命倫理問題」

浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター・藤丸智雄 常任研究員（同）

○平成十九年十一月十日

教団付置研究所懇話会第七回「生命倫理研究部会」



に変わる研究会として日本生命倫理学会ワークショップ「いのちの尊厳と宗教（オーガナイザー・浄土宗総合研究所今岡達雄）」が実施された。内容は以下の通りである。

わが国では生命倫理の諸問題への宗教者からの発言は限られたものであった。これは生命倫理の議論が先端的医療の導入にあたって専門家相互間の議論を中心に行われてきたという背景があり、専門外の宗教者にとっては発言が困難な分野であったからである。最近、「いのちの始まり」や「いのちの終わり」への人為的関与の是非が問われるようになり、宗教者が議論に参加できる環境になってきた。ワークショップ「いのちの尊厳と宗教」は教団付置研究所懇話会（宗教教団に附属する研究所間の連絡組織）の下部組織である生命倫理研究会に所属する研究者の賛同を得て企画された。宗教教団に付置された研究所に所属する研究者は、宗教者であるとともに研究者でもあり、生命倫理の諸問題に対する宗教者からの発言を行う格好の位置にある

と考えた。ワークショップの目的は生命倫理の諸問題へ対応する宗教者側からの新たな道筋を提案することにあるが、今回はその歩を踏み出すことを目標にし、結論は求めずに今後の継続的な議論を導くことを主眼とした。

ワークショップでは四名の研究者から発題を頂いた。今岡達雄（浄土宗総合研究所）から「生命倫理問題への宗教者側からの提言の社会的役割」と題し、生命倫理の諸問題への宗教者側からの発言の必要性、具体的な評価基準として「欲望の自発的コントロール」と「生死を連続的な事象と捉える考え方」が示された。斎藤泰（大本教学研鑽所）氏から「神道大本の「生命観」と、超宗派から見る「生命／いのちの尊厳」と題し、大本の生命観と脳死・臓器移植への反対運動、教団付置研究所懇話会での各教団の生命観の共通点相違点の報告が行われた。竹内弘道（曹洞宗総合研究センター）氏からは「宗教の役割と生命倫理―死者なき倫理の奢り」と題して、仏教が死者の魂の救済を行ってきたことと

現状の生命倫理には死者の救済という概念が抜け落ちて  
いることが発題された。藤丸智雄（浄土真宗本願寺  
派教学伝道センター）氏から『浄土真宗から見た生命  
の価値と生命倫理』と題して浄土真宗における生命観  
と生命倫理に対する立場が説明された。参加者との議  
論では、死者の意志の尊重とはどのようなことか、健

文責者 主務 今岡達雄

康長寿への希望を煩惱と捉えるのかなどに關しての発  
言があり、意見の交換が行われた。十分な討議を行う  
には時間が短く、今後このような議論を交わすこと  
の出来る場を作るという点で合意が得られた。

総合研究 総合研究プロジェクト

## 現代葬祭仏教

### 研究目的

当研究班は、現代の葬送儀礼の実態を明らかにする  
ことと新たな葬制の対応を考え、浄土宗の法式・教学  
に対応した浄土宗的葬祭のあり方を研究している。近

年、急激な社会変化に伴い、葬祭に關する実態とその  
意識が著しく変化・多様化している。例えば、お葬式  
の場所が自宅から葬祭場への移行、家族のみで行なう  
「家族葬」の増加、そしてお葬式が簡略してきたことな  
どである。これらを鑑みて、総合研究所はこれらの実

態と意識の変化を捉えるために、平成一七年九月に正住職寺院の檀信徒に「お葬式に関するアンケート」を実施した。このアンケートの主たる目的は、喪主を務めた人が、どのような意識でどのようなお葬式を行なったかを知ることと、また同時に自分自身の場合にはどのようなお葬式をしたいかであった。これらのお葬式の実態と檀信徒のお葬式・戒名に対する意識を分析し、これに対応した葬祭のあり方を探求することが主たる研究目的である。

## 研究内容

お葬式に関する実態とその意識の諸問題の抽出  
全教区と東京教区・神奈川教区と近畿教化センター  
の三者比較分析

滋賀教区・京都教区・大阪教区の三者比較分析

関東地方教化センターの各教区比較分析

『宗報』の研究成果報告

## 作業大綱

全教区と東京教区・神奈川教区と近畿地方教化センターの三者比較分析を前年度に引き続き行い、『教化研究』第十八号にその研究成果報告をした。

六月二二日、第八十九回教学高等講習会（知恩院）でこれまでの研究成果の報告を行なった。全教区と東京教区神奈川教区と近畿地方教化センターとの三者比較分析と、併せて近畿の中の滋賀教区・京都教区・大阪教区の比較分析の報告を行なった。

①檀信徒の葬祭意識の変化―浄土宗総合研究所「葬祭アンケート」分析から（名和清隆）、②お葬式の実態、滋賀・京都・大阪各教区比較（西城宗隆）、③お葬式の意識、滋賀・京都・大阪各教区比較（大蔵健司）、④地域の変化と葬祭の変化（武田道生）。この件は『中外日報』に掲載され、『読売新聞』京都支局はじめ各研究者の問い合わせが多々あり、このアンケート調査に対する関心の高さが示された。

十月三日、第九十回教学高等講習会（増上寺）で研究

成果の報告を行なった。これまでのお葬式に関する実態とその意識の諸問題を抽出し、そのテーマ別に比較分析を行い、併せて関東地方教化センターと全教会との比較分析の報告を行なった。

①現代におけるお葬式の変化（名和清隆）、②葬儀社の役割と葬祭の場所の変化について（大蔵健司）、③葬儀に関する意識の変化（西城宗隆）、④女性の葬祭観（田中和敬）、⑤お葬式の意味―家族の場合と自分の場合―（和田典善）、⑥アンケート結果からみえるもの（武田道生）。

『宗報』四月号より、これまでの研究の集大成として「激変する檀信徒の宗教観 崩れ行く葬祭のこころ」を連載することになった。三地域の比較分析などの結果、葬祭に関するいくつかの重要な問題が明らかになった。それぞれのテーマを各地方教化センターの比較を交えながら分析し報告する。各研究員が担当のテーマを執筆し、研究会で討議し成文化している。

## 研究会

▼全教会と東京教区・神奈川教区と近畿地方教化センターの比較分析。

4月9日、16日、23日、25日、27日。

5月2日7日、14日。

▼滋賀教区・京都教区・大阪教区と東京教区・神奈川教区と全教会の比較分析。

5月28日、6月4日、11日、18日。

▼お葬式に関する実態とその意識の諸問題の抽出。

7月2日、27日。8月23日。

▼関東地方教化センターと全教会の比較分析、発表内容討議。

9月3日、19日、25日。10月1日、3日。

▼お葬式に関する実態とその意識の諸問題の抽出。

10月29日。11月19日。12月3日。

▼『宗報』連載原稿の執筆・討議。

12月10日、17日。1月7日、18日。2月4日、18日、

25日。

3月3日、10日、24日。

▼研究成果報告について

3月25日。

文責者 主務 西城宗隆

総合研究 総合研究プロジェクト

## 国際対応

### 研究目的

本研究班は浄土宗21世紀劈頭宣言にある「世界に共生を」のメッセージに基づき、法然上人の教えを世界に広く知らしめ、共生の社会を具現化するための研究を目的としている。

その一環として海外の研究者との意見交換をおこなう、国際的視点から法然浄土教を問い直し、その成果

を浄土宗の聖典翻訳に反映させる作業をおこなっている。また同時に、翻訳した聖典および国際学会やセミナーの成果を『教化研究』及び、研究所のホームページに掲載し、世界に向けて法然上人の教えを発信し、世界に開かれた浄土教を目指している。

### 研究内容

平成19年度は、英訳作業として『無量寿経』巻下、

『観経疏』、ならびに『和語燈録』「二百四十五箇条問答」の翻訳をおこなった。『無量寿経』巻下は囑託研究員のカレン・マックが中心となって翻訳をおこない、『観経疏』、ならびに『和語燈録』の英訳にあたっては、欧米における法然浄土教研究の第一人者であるニューヨーク州立大学アルバニー校東洋学科准教授のマーク・ブラム氏を招聘して、集中研究会として1ヶ月間翻訳に従事していただいた。

また、これまでに翻訳した英文の確認編集作業として『無量寿経』巻下、ならびに『和語燈録』『浄土宗略抄』の検討と、「二百四十五箇条問答」の和文解釈検討を当研究班の研究スタッフが参加する研究会で積み重ねた。

英訳作業に関する研究会に加えて、宗教・医療分野に従事する専門家が討論や調査研究を共同でおこなうプロジェクト「Ojo and Death (往生と死)」のシンポジウムおよび研究会を開催した。

シンポジウムは平成19年6月28日に「死への準備

今をどう生きるか」(浄土宗総合研究所公開シンポジウム)を開催し、300人を越える参加者があった。午前中の公開シンポジウムでは講師としてニューヨーク州立大学准教授 マーク・ブラム氏、日本生命倫理学会会長 藤井正雄氏、慶応義塾大学医学部准教授 岡野ジェームス洋尚氏、真言宗豊山派西明寺住職・普門院診療所医師 田中雅博氏、京都大学大学院教授 カール・ベッカー氏をお招きし講演していただいた。

午後は定員制ワークショップ形式でケーススタディーとして末期がん患者の直面する肉体的・精神的な苦しみを取り上げ、6グループに分かれ一人ひとり自己の問題として捉え、終末期医療について何ができ、何をすべきかを探求した。

「往生と死」の研究会は、平成19年4月に英国アミダ教団指導者・仏教精神療法士デーヴィッド・ブレイザー氏を招いて「英国における終末期医療の問題について」「死ぬことへの精神的な準備と死の看取り」をテーマとして講演いただいた。平成20年3月には、「日本にお

ける仏教者の終末期医療に対する取り組みの現状と課題」・「終末期医療の現状と宗教者の役割」をテーマとし、日蓮宗ビハーラプロジェクト主任 本澄寺住職・医師である柴田寛彦氏、四天王寺国際仏教大学専任講師 谷山洋三氏、元東京医師会会長 繁成寺住職 福井光壽氏、慶応義塾大学准教授 岡野ジェイムス洋尚氏を講師として迎え、講義・ディスカッションを僧侶・医師・医学生を交えおこなった。

また年間を通してジョナサン・ワッツ研究員を中心に、現在までの研究会・シンポジウムの成果を出版すべく『Never Die Alone』の編集作業をおこなった。

本年度に参加した国際学会は以下である。まず、平成19年8月3日から5日にかけてカナダ・カルガリー大学で開催された国際真宗学会に戸松義晴・ジョナサンワッツ・マークブラム・クライドウィットワースが参加し、「死への準備、今をどう生きるか」について英語で発表した。

また、国内での学会参加としては、9月5日から6日にかけて大正大学で開催された浄土宗総合学術大会において、戸松義晴をはじめ、嘱託研究員の薊法明・北條竜士が発表をおこなった。

以上が平成19年度の「国際交流」研究班の活動概要であるが、平成20年度に継続しているプロジェクトも多くあり、この報告をご一読いただいた方々のご意見、ご指導をいただいた上で、より良い成果を出せるように努力していく所存である。

### 作業大綱

#### ① 浄土宗の聖典英訳作業

カレン・マック担当 『無量寿経』巻下

マーク・ブラム担当、柴田泰山・袖山栄輝協力 『観経疏』

戸松義晴・マーク・ブラム担当 『和語燈録』

#### ② 英訳した聖典の検討および編集のための研究会

国際対応研究班・岩田斎肇他研究員・研究スタッフ 『無

量寿経』巻下、『和語燈録』の英訳を検討・編集

お返事』の英訳検討

③プロジェクト [Ojo and Death (往生と死)] のシンポジウム・勉強会・出版作業

5月29日『無量寿経』巻下の英訳検討

戸松義晴、ジョナサン・ワッツ担当 外部から宗教・

6月5日『観経疏』の英訳検討と読み合わせ

医療分野に従事する専門家を招いて勉強会を開催

6月6日公開シンポジウム検討会

④国際学会および国内の学会への参加

6月12日『観経疏』の英訳検討と読み合わせ

国際真宗学会へ浄土宗総合学術大会にて発表

6月13日『観経疏』の英訳検討と読み合わせ

研究會開催日及び研究内容

6月18日『和語燈録』二百四十五箇条問答』の英訳検討

平成19年

6月19日『観経疏』の英訳検討と読み合わせ

4月17日『和語燈録』「浄土宗略抄」 「念仏大意」の英訳検討

6月20日『和語燈録』二百四十五箇条問答』の英訳検討

4月23日「往生と死」勉強会 英国アマダ教団指導者デー

6月26日『和語燈録』二百四十五箇条問答』の英訳検討

4月24日『無量寿経』巻下の英訳検討

6月29日『和語燈録』二百四十五箇条問答』の英訳検討

4月15日『和語燈録』 「九条殿下の北の政所へ進呈したお返事」の英訳検討

7月2日『和語燈録』二百四十五箇条問答』の英訳検討

5月22日『和語燈録』 「九条殿下の北の政所へ進呈したお返事」の英訳検討

7月3日『観経疏』の英訳検討と読み合わせ

5月15日『和語燈録』 「九条殿下の北の政所へ進呈したお返事」の英訳検討

7月17日公開シンポジウム反省会

4月22日『和語燈録』 「九条殿下の北の政所へ進呈したお返事」の英訳検討

7月31日『無量寿経』巻下の英訳検討

4月21日『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

8月21日『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

9月11日『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

9月11日『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

10月2日『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

10月2日『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討



10月9日 『無量寿経』 卷下の英訳検討

10月23日 『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

11月27日 『無量寿経』 卷下の英訳検討

12月11日 『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

平成20年

1月15日 『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

1月29日 『無量寿経』 卷下の英訳検討

2月12日 『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

2月26日 『和語燈録』 「浄土宗略抄」の英訳検討

3月4日 『和語燈録』 「一百四十五か条問答」の英訳検討

3月8日 『往生と死』 勉強会 柴田寛彦氏、谷山洋三氏

講演

3月11日 『和語燈録』 「一百四十五箇条問答」の英訳検討

3月15日 『往生と死』 勉強会 福井光壽氏、岡野ジェイ

ムス洋尚氏講演

3月18日 『和語燈録』 「一百四十五箇条問答」の英訳検討

3月25日 『無量寿経』 卷下の英訳検討

また、マーク・ブルム氏を招聘しての集中研究会開催日は以下のとおりである。

平成19年6月4日～7月4日 『観経疏』、ならびに『和語燈録』 「二百四十五箇条問答」の翻訳

文責者 主務 戸松義晴

## 浄土宗近現代史

### 研究目的

「浄土宗の近現代史を客観的に明らかにする」を目的に昨年度よりの継続研究を行っていく。研究員の共通認識と研究方向確認の為識者より講義をいただく。

研究班領域が多岐に分かれるため研究テーマごとに班にわかれて研究を進める。また宗綱宗規等の基礎資料の収集分析活動も行う。

### 研究内容

本年度は各年度に引き続き識者よりの講義をいただき、その内容を記録にまとめた。「宗綱宗規」の収集記

録作業並びに、貴重資料である研究所所蔵のマイクロフィルムより「浄土教報」「浄土宗報」「純正浄土教報」「教学週報」を電子化（PDF化）及びその部分を紙焼き製本を行い保存資料とした。また研究に必要な書籍の購入保存を行った。

### 作業大綱

#### 研究会開催日及び研究内容

平成19年

5月7日（月）「本年度研究計画について」

7月2日（月）講義「近代における寺院社会事業の変

遷と意義」

講師…大乗淑徳学園理事長・浄土宗総合研究所客員教授  
長谷川匡俊先生

7月30日(月) 講義「明治初期の神道行政からみた仏教政策―神祇官・神祇省政策から教部省政策へ―」

講師…國學院大学名誉教授 阪本是丸先生

10月22日(月) 「研究計画について」

11月19日(月) 講義「『浄土教報』および文献室所蔵の各種資料について」

講師…佛敎大学図書館参与(浄土宗文献室担当)

三輪晴雄 先生

12月10日(月) 「次期研究計画について」

平成20年

1月21日(月) 講義「鹿児島における廢仏毀釈」

講師…栗林文夫先生 鹿兒島県歴史資料センター黎明

館学芸専門員

2月18日(月) 「来年度の研究計画」

3月31日(月) 「明治期の僧侶養成」

講師…武田道生研究員 淑徳大学准教授

文責 主務 大蔵健司

## 近世浄土宗学の基礎的研究

### 研究目的

本研究班は浄土宗正所依の經典である『浄土三部経』が、近世以降どのように理解されてきたのかを調査研究紹介することを目的とする。

浄土宗における浄土三部経の理解は、二祖三代の領解に基づくものでなければならないのはいうまでもない。法然上人に『無量寿経釈』、『観無量寿経釈』、『阿彌陀経釈』の『三部経釈』があるとはいえ、これらは逐語的な注釈ではなく、むしろ法然上人の三部経の領解を述べられたものである。逐語的な注釈となると善

導大師の『観経疏』と了慧の『無量寿経鈔』を除けば、江戸期の学僧である義山良照の『浄土三部経随聞講録』と観徹の『浄土三部経合讚』まで待たねばならない。そして現在の浄土宗における『三部経』の理解は、語句の意義内容はもちろん、音読上の音価の確定まで、この二人の著作に負うところが大きい。『合讚』は江戸時代に開板されて以後、浄土宗内では非常によく読まれ、『浄土宗全書』には収録されなかったものの、『浄土宗選集』に収録されて書き下し文として出版されている。一方、『随聞講録』は写本でしか伝えられなかったものの、『浄土宗全書』に収録されたものである。ただ、この活字本の『随聞講録』は必ずしも読みやすいもの

ではなく、誤植や、読者への配慮からと思われる書き換えが見られる。そこで本研究班では、『随聞講録』の読解研究を中心として、近世の浄土宗における『浄土三部経』の理解がどのようなものであったのかを解明してゆこうとするものである。

## 研究内容

義山『浄土三部経随聞講録』の書き下し文を作成する。その際、浄全本が底本とした写本との対校を行い、誤植などは修正する。

## 作業大綱

本年度は次の四項目の作業を行った。

イ、『浄土三部経』本文と『随聞講録』のページ数対照表の作成。

実際に『随聞講録』を参照する際の便のため、『浄

土三部経』本文のページ数と行数（『浄土宗聖典』

第一巻の本文と書き下し文、『浄土宗全書』第一巻

所収の本文）と『随聞講録』の注釈箇所（『浄土宗全書』第十四巻所収のもの）とのページ数とを対照させた。これは『教化研究』の本号に研究ノートとして掲載した。

ロ、『随聞講録』の写本の収集。

大正大学図書館様の御厚意により、同大学図書館所蔵の『随聞講録』の写本の写真撮影を行った。

内訳は、『浄土宗全書』の底本とされたと思われるもの（全十巻）と、別筆になる『阿弥陀経随聞講録』の二本である。

ハ、『阿弥陀経随聞講録』の電子テキスト化。

ニ、『阿弥陀経随聞講録』の書き下し文の作成。

事前に研究員が各自分担して書き下し文を作成し、研究会において修正してゆく。その際、ロ・得られた写本との対校、ハ・で作成した電子テキストの校正作業を並行して行った。

十九年度はイの対照表作成を主目的としていたの

で、二、の書き下し文の作成は、『阿弥陀経』序分に相当するところまでで終了した。

### 研究会開催日及び研究内容

平成十九年

4月3日、4月16日、5月29日、6月12日、6月26日、  
7月24日、9月18日、9月27日、10月16日、10月30日、  
11月6日、11月20日、12月04日、12月18日

平成二十年

1月22日、2月5日、2月26日、3月13日、3月25日  
4月3日は大正大学図書館にて写本撮影の依頼、それ以外は主として対照表作成と書き下し文作成を行った。

文責者 主務 齊藤舜健

### 基礎研究 教学的研究プロジェクト

## 浄土学研究の基礎的整理

### 研究目的

本研究会は近年の浄土学の研究動向を整理し、今現

在、浄土学がどのような研究を行う必要があるかということの解明を目的とするものである。この様な作業は極めて基礎的であり、これ自体に発展性があるもの

ではないかもしれないが、この研究動向の整理によって浄土学の今を再確認できるものと考え、それぞれの研究成果の整理を行っている。

## 研究内容

①研究動向の整理として、日本における浄土教に関する研究の中、法然以前の諸師に関する研究を中心に収集し整理する。

②聖岡『釈浄土二藏義』の書き下し作成。

## 作業大綱

①研究動向の整理作業では、かねてから行われてきた論文目録の作成ではなく、各論文の特色や他の研究に与えた影響等に留意し、各研究を評価する形で整理を行った。(本誌研究ノートに掲載) この作業は研究会では行わず、基本的には研究スタッフが個別に整理を進める形で行っている。

②聖岡『釈浄土二藏義』の書き下し作成については、近世における浄土宗学研究について、近世の檀林教学の基礎として広く学ばれてきたとされる聖岡『釈浄土二藏義』をとりあげ、研究会を開いて輪読し、書き下しの作成と、同時に漢文のテキストデータ作成を行った。これらの作業は現在までに第一巻の書き下しと出典の調査を終了し、第四巻までは書き下しが終了した。

## 研究会開催日及び研究内容

今年度開催された研究会は以下の通りである。

平成19年 4月18日

5月9日

5月30日

6月6日

6月13日

6月20日

7月11日

11月7日

11月21日

平成20年1月9日

1月30日

2月6日

2月27日

3月5日

3月19日

2月28日

3月27日

いずれも『頌義』の書き下し作成を主に行った。

文責者 主務 柴田泰山

基礎研究 法式的研究プロジェクト

## 近代の勤行の音声

はじめに

総合研究所伝承儀礼研究班では、二年間を1クールとして法式分野の中からテーマを絞り込み研究を進めてきた。平成十八、十九年度は「近代の勤行の音声につ

いて」というテーマを定め、初年度は基礎研究、次年度は研究成果の発表の準備として研究会を重ねていくことにした。また、研究員の人数も大幅に増員し、従来の研究体制から一層の充実を図った。

本研究は、伝承儀礼班がかつて平成十二年から四年



間にわたり、発表を続けてきた「礼讃聲明音譜の研究」にも関連があり、研究体制の強化と併せ、成果の大ききにも期待を持たせることとなった。

この研究は表題の通り、大正期から昭和初期に各地に存在した独自の旋律を研究するものである。なぜならば、現行の勤行式の音声は、昭和初期に東西の法式指導者が討議の末、最大公約的なものとして、統一したものである。統一以前の音声を探ることにより、いかなる過程で現行の音声が成立したのか、解明の一助になると考えられるからである。

### 研究経過

初年度の研究会では以下の五点が研究作業として確認された。

①昭和十四年の浄土宗認定本について、今一度分析、研究所所蔵の法式資料と比較検討する。

②NHKライブラリー、国会図書館に保存されている、浄土宗関係のサンプルの収集。

③増上寺式師会、知恩院式衆会の協力を仰いでサンプルを収集する。

④宗報に記載された法式関係の記事の収集。

⑤千葉満定師についての研究。

①、②、④に関しては、西城研究員が、調査を行った。国会図書館については資料は現存しておらず、NHKライブラリーにおいて入手した音源はCD化をした。③については、広く宗報に記事を掲載し、全国の寺院に協力を呼びかけることにした。その結果、⑤については、神奈川教区小田原組伝肇寺様より情報をいただき、平成十九年三月二日に坂上、山本康彦法儀司が現地へ赴き取材を行った。

平成十九年度の研究会では、研究成果を公開講座において発表することに決定し、その準備段階として初年度に収集した資料を精査し、さらに各地に伝承されている音声、他宗の音声にも着目することにした。検討の結果、研究班では「四奉請」を取り上げ、主に関西方面で唱えられる「廣節の四奉請」について平成

十八年から清水秀浩研究員を招聘し、二度にわたり研究会を開催した。さらに平成十九年九月には、天台宗大泉寺（東京都台東区谷中）住職、杜多道雄師を訪問し、天台の音声についてご講義をいただいた。杜多師は、音律研究所に在籍される天台声明の第一人者である。収集した資料を音源化し、さらに荒木、廣本康研究員の兩名によって、目安博士と五音を施した譜面の作成が行われた。また、平成二十年二月に、公開講座を催すこととし、どのような形式をとるか検討会を重ねた。

その結果、公開講座は実際に音声を実唱し、法要形式にすることに決定した。特に、伝承儀礼班では以前から「四奉請」に着目し、各種の旋律を採譜することに成功していたので、公開講座は二部形式とし、第一部では各種の「四奉請」、第二部では収集した音声を中心に、日中礼讃、初夜礼讃を経前、経後に配した法要形式に差定を組み立てた。

## 公開講座について

研究成果の発表の場として伝承儀礼班は、公開講座を開催し、広く成果を発信してきた。今回も平成二十年二月十四日に大本山増上寺景光殿において公開講座を催した。以下、当日の差定を掲げ、解説を付する。

### 第一部「各種四奉請」

#### ① 引声法要の四奉請

#### ② 法要集の四奉請

#### ③ 天台宗の四奉請

#### ④ 四奉請廣節

①の引声法要は大本山増上寺に伝承されている法要である。現在、大本山増上寺の御忌大会では、四月六日の日中法要に引声法要が勤められ、四奉請はその中で唱えられている。浄土宗においては鎌倉の大本山光明寺が引声法要の源流であるが、その後、増上寺に伝承され独自の発展を遂げた。俗に「シャッキリ押し」という技術が特徴である。②は浄土宗法要集に所収されている広く一般寺院で唱えられている。③は天台宗寺院で一般的な四奉請で、前述の杜多師からご教授い

ただいた。旋律はほとんどなく、最後の「入道場散華栞」で節が付く。発声時に若干の塩梅（えんばい）が付く。調声という役（天台では主に導師）が散華をしてから発声するのが特徴なので、公開講座でも句頭が散華をしてから発声した。④の廣節は、法要集では「十夜会古式」で唱えるよう指定しているが、関東方面ではほとんど唱えることはない。したがって、関西の研究員である清水秀浩師（大本山金戒光明寺法務部長）を招き、実唱を中心とした研究会を行った。関東の研究員はいずれも法式の専門家であるが、習得にはかなりの時間がかかり、不定期に自主的な研究会を開き、稽古を重ねた。本来は、散華を伴うが、当日は音声に集中するため、散華をしなかった。また、前述の杜多師から天台の引声四奉請のCDをいただいていたので来場者に、聞いていただいた。この音源を聞いた時は、研究員一同非常に驚いたが、浄土宗の廣節四奉請と天台宗の引声四奉請とは同一のものであった。

第二部「近代・各地の音声を用いた法要」

- 先、香偈
- 次、三宝礼
- 次、三奉請
- 次、懺悔偈 十念
- 次、日中礼讚（一尊哀愍・観音勢至・無常偈）
- 次、開経偈
- 次、四誓偈
- 次、本誓偈 十念
- 次、初夜礼讚（陰旋、後偈加唱）
- 次、摂益文
- 次、念仏一会
- 次、総回向偈 十念
- 次、総願偈
- 次、三唱礼
- 次、送仏偈

この差定の中で現行の旋律と異なるのは、香偈、三宝礼、宝礼、日中礼讚、初夜礼讚、三唱礼である。香偈、三宝礼、日中礼讚は、昭和初期に録音された音源を再現したも

のである。研究班では、当時の音声を目安博士に起こし、五音をふり、譜面を作成したが、大正十三年版の「礼讃聲明音譜」と比較すると、「両者の間に十年程度の年月の違いがあるにもかかわらず、すでに旋律の相違が各所に確認できた。特に日中礼讃は、その違いが顕著で、目安博士で表現することが困難な旋律もあった。

初夜礼讃は、いわゆる陰旋法の礼讃で、京都、黒谷の金戒光明寺の御忌、速夜法要で勤められている礼讃である。清水研究員が「四奉請廣節」の研究会の折り、各地に伝承されている音声を探究する一環として伝授していただいたものである。

#### 公開講座役配

開式挨拶 福西賢兆

解説 坂上典翁

式衆

廣本榮康

山本晴雄

中野孝昭

廣本康真

中野晃了

荒木信道

#### 終わりに

大正期から昭和初期にかけての音声、また各地に伝承されていた音声がいかなる過程を経て、現在の旋律になったのか、また、課題の多い研究である。しかしながら、実際の音声を採譜し、実唱することは極めて稀であり、総合研究所ならではの公開講座であった。すでに次年度の研究テーマも決定しているが、音声に関する研究は、伝承儀礼には不可欠であり、今後、さらなる研究を進める所存である。

#### 平成十九年度研究会

第一回 平成十九年四月十日

第二回 五月二十八日

第三回 六月十一日

第四回 六月十八日

第五回 七月二十日

第六回 八月二十九日

第七回

九月十八日

第八回

十月二十六日

第九回

十二月二十日

第十回 平成二十年一月二十九日

二月十三日 前日リハーサル

二月十四日 公開講座

文責 坂上典翁

基礎研究 布教的研究プロジェクト

## 現代布教

### 研究目的

現代における布教方法は、結縁五重の勸誡を代表とするような直接の説教形式のみならず、インターネットの利用など様々な工夫がなされている。当研究班では従来の伝統的な布教方法を再確認したうえで、より効果的、能動的な方法を模索し、具体的な資料の提供

も含め、檀信徒をはじめとする一般社会への発信を検討する。

### 研究内容

十九年度は左記の研究計画に基づき、活動を行ってきた。

一、結縁五重・勸誡録の研究

二、視覚的布教資料の研究（パネルシアターを活用した布教法）

三、一般書籍の布教利用について

四、結縁五重・勸誡における讃題と和歌・道詠の資料整理

## 作業大綱

一、結縁五重・勸誡録の研究

基本的に毎週金曜日に研究会を行った。本年は的門『信法要訣辨釋』、吉岡阿成『點睛録』、岩井智海『五重講説』三冊の比較作業を中心とした。また勸誡録ではないが、立道『眞葛伝語』、岸上恢嶺『説教帷中策』を輪読し、時代背景等の参考とした。

その研究成果として、『教化研究』本号の研究ノートに、右記、三勸誡録の内容分析、時代背景とその特異点などを列記して報告する。

また、関連研究として宮入研究員より、法洲『信法要訣』に関する報告を掲載する。

二、視覚的布教資料の研究（パネルシアターを活用した布教法）

新しい布教方法の模索として、パネルシアターによる法話を提案する。今年度は『法然上人御一代記』パネル法話の制作として、笹脇昌恵師を講師にむかえ、年四回ペースで研究会を行った、今回は「怨親平等の聖者」「智者のふるまいをせず」の二作品を『教化研究』本号の研究ノートに報告する。

また、『教化研究』第十七号にて提案した『無量寿経』パネル法話の、イラストデータを提供するためにCD-ROMを作成した。パネルシアターの実用例、及びその作品解説としてはパワーポイント、及びビューレット・カムというソフトを利用し、フラッシュユファイルにて収録をした。なお、法話録音にあたり声優の山口奈々氏にお願いをした。

※「無量寿経」パネル法話(CD-ROM)ご希望の方は、浄土宗総合研究所にご連絡をいただければ、無償にてご提供いたします。

三、一般書籍の布教利用について

本年度は資料の収集のみであり、研究報告は行わない。

四、結縁五重・勸誠における讃題と和歌・道詠の研究

『教化研究』本号の研究ノートに、平成十七年十二月八・九日と平成十八年十二月十四・十五日、近江八幡市と守山市閭魔堂にて、住蓮・安樂上人に関する遺跡調査を行った際の報告を掲載する。

### 研究開催日及び研究内容

- 4月13日(金)「内容」五重勸誠録研究
- 4月19日(木)「内容」五重勸誠録研究
- 4月27日(金)「内容」五重勸誠録研究
- 5月11日(金)「内容」五重勸誠録研究
- 5月15日(火)「内容」五重勸誠録研究
- 5月25日(金)「内容」五重勸誠録研究
- 6月1日(金)「内容」五重勸誠録研究
- 6月12日(火)「内容」『法然上人御一代記』パネル法

話作成(第五回)

講師：笹脇昌恵上人

・第三回会議資料「三、来世を恐れ、往生を願う

〜熊谷蓮生の精神〜」

完成パネル絵の再検討

・第四回会議資料「四、建永の法難〜法然上人ご

往生〜

パネル絵原画を見て検討する。

・第五回会議資料「五、至誠心の念仏」

法話原稿を読み、パネル絵について検討。

- 6月15日(金)「内容」五重勸誠録研究
- 7月6日(金)「内容」五重勸誠録研究
- 7月18日(水)「内容」五重勸誠録研究
- 7月18日(水)「内容」『法然上人御一代記』パネル法話作成(第六回)

講師：山口奈々先生

内容：パネルシアター法話配布用CDナレー

ションについて

7月27日(金)「内容」五重勸誠録研究

8月24日(金)「内容」五重勸誠録研究

9月7日(金)「内容」『法然上人御一代記』パネル法

話作成(第七回)

講師：笹脇昌恵上人

・第四回会議資料「四、建永の法難と法然上人ご

往生」

・第五回会議資料「五、至誠心の念仏」

11月2日(金)「内容」五重勸誠録研究

11月9日(金)「内容」五重勸誠録研究

11月16日(金)「内容」五重勸誠録研究

11月30日(金)「内容」五重勸誠録研究

12月7日(金)「内容」五重勸誠録研究

12月14日(金)「内容」五重勸誠録研究

12月20日(水)「内容」『法然上人御一代記』パネル法

話作成(第八回)

講師：笹脇昌恵上人

・「来世を怖れ、往生を願う熊谷蓮生の精神」

・「建永の法難と法然上人ご往生」

・「至誠心の念仏と天野四郎」

12月26日(火)「内容」五重勸誠録研究

1月8日(火)「内容」五重勸誠録研究

1月29日(火)「内容」五重勸誠録研究

2月5日(火)「内容」五重勸誠録研究

2月15日(金)「内容」五重勸誠録研究

2月22日(金)「内容」五重勸誠録研究

2月29日(金)「内容」五重勸誠録研究

3月10日(月)「内容」『法然上人御一代記』パネル法

話作成(第九回)

講師：笹脇昌恵上人

○法話原稿、パネル絵の確認。

・「怨親平等の聖者」(ご生誕と父の遺言)

・「智者のふるまいをせず」(比叡登嶺と黒谷隠遁)

く開宗

・「深心と蓮生に学ぶ」(熊谷次郎直表)

・「お念仏を伝える旅路」(法難と法然上人ご往生)



・「至誠心く耳四郎に学ぶ」(耳四郎教阿)  
・「念仏婆さん」

3月14日(金)「内容」五重勸誠録研究

特別業務 特別プロジェクト

## 浄土宗善本叢書

### 研究目的

これまで浄土宗聖教の全面的調査はあまり行われたことがないため、貴重な聖教類がどこにどれほど残っているかいまだ全容はわかっていない。史料集の出版も少なく、天台宗や浄土真宗で継続的になされているのと対比すれば、なんらかの処置は必要なはずである。

本班では、このような状況をかんがみ、なんらかの

3月28日(金)「内容」五重勸誠録研究

文責者 主務・研究員 後藤真法

有意義な史料集を出版していくことを目的としている。

そして前回までの『教化研究』で述べてきたとおり、「黒谷上人語灯録」写本の写真版を刊行していくこととした。繰り返し説明の必要はないと思うが、「黒谷上人語灯録」は法然の思想研究には必要欠くべからざる基礎史料であり、「昭和新修法然上人全集」も多くの語録をここから採取している。そこで各所に所蔵される写本を調査撮影して出版していくことにした。

## 研究内容

本班の主要な仕事は『黒谷上人語灯録』を撮影していくことである。所蔵先の寺院や博物館の許可をいただき、撮影業者とともに現地に出向いて撮影するわけであるが、これにはかなりの時間と労力を要してきた。しかし幸いにもこれといった問題もなく、一部を除きほぼ全体が終わっているので、本班の仕事の山場は越したことになる。あとは解題担当者と打ち合わせながら、解題を執筆していただくことであるが、これもほぼ日処はたつてきた。現時点で原稿はまだ揃っていないが、内容についてはおおむね構想していただいている。

撮影については、平成十九年度は『黒谷上人語灯録』の関連史料を調査した。以前にも報告したとおり、知恩院に義山版が刊行される前後に、校訂が完成した書写本を献呈したと思われるものが所蔵されている。これには白誓秀道の奥書がある。しかし実際に白誓のものがどうかというと、全体の流れからすると不審など

ころもある。そこで他の筆跡と確認する必要がある。で、白誓の筆跡を探したところ、山口県の某寺院に名号が所蔵されることを知りえた。

幸いにもご快諾いただき調査した。名号は確実に白誓の筆跡であるから、これとくらべたわけであるが、どうも似ておらず知恩院本は他者の筆跡のように思えた。これをどう解釈したらよいのだろうか。筆跡が一致すればよいのだが、違ふとなると問題である。知恩院本は右筆によるものであろうか。ともかくも、このあたりの問題については、解題執筆者におまかせすることとしたい。

ここ五年ほどのあいだ何箇所かの撮影を実施してきたが、幸いにも各所蔵者から許可をいただけてきている。本班の仕事は所蔵者のご理解をえてはじめて成り立つものなので、あらためて感謝申し上げたい。それにして、こうして調査に回ってみると、貴重なものが結構残されているのが実感できる。所蔵先の御住職からいろいろお話を伺うなかで、調査目的以外の関連

史料を見せていただくことがある。これまで学界にまったく公表されていない価値あるものが残っていたりする。既に活字化された史料で研究することも大事であるが、自分の足で各地へ赴いて新しいものを見出すことの重要性をあらためて認識させられた。このような

ことを含めて、本班の事業は必要であると確信するか  
らこそ、労力をかけて行なっている。関係各方面のご  
理解とご協力をいただければ幸いである。

主務 善裕昭

特別業務 大遠忌関連プロジェクト

## 法然上人二十五霊場―歴史と現状について

### 研究目的

第一番誕生寺から第二十五番知恩院にいたる法然上人二十五霊場（本霊場）は霊沢等によって宝暦年間（一七五一～六三）に巡拝が始められ、『圓光大師御遺跡廿五箇所案内記』（霊沢、明和三年（一七六六）刊。

以下『案内記』に二十五の札所として選定され確定された。本霊場の霊場寺院は大正十二年（開宗七百五十年の記念事業に関連する）に一度は改定されたものの、昭和八年には旧に復され（山本博子「法然上人二十五霊場の改定について」『印仏研』三八―一、平成元年）、現在に至るまで盛んに巡拝されている。一方、日本各

地には本霊場の写し霊場として法然上人の二十五霊場（以下、写し霊場という場合は法然上人二十五霊場のものを指す）が数多く設立されてきている（例外として大阪の「円光大師廿五処廻」がある。「円光大師廿五処廻」は『案内記』に先立つ延享四年（一七四七）以前に成立しており、『案内記』成立後、逆に写し霊場化したことが、山本博子氏によって明らかにされている）。明治以後の写し霊場設立時期を見ると、明治末～大正初期（七百年大遠忌）、大正末（開宗七百五十年）、昭和八年（法然上人生誕八百年）、近年では開宗八百年など、浄土宗の大イベントと関連して設立されたものが目につく。

これらの写し霊場には現在でも巡拝されているものがある一方、すでに存在が忘れられてしまい当該の霊場寺院にすら霊場としての記録や痕跡がないものもある。また設立の時期も江戸時代から昭和四九年ごろまで幅広く、個別の霊場によってその設立時期、規模、設立者の地位、活動状況の遷移は大きく異なっている。

いずれにしても各地に写し霊場を設置することに

よって法然上人を賛仰し念仏信仰の弘通に貢献してきたことには違いはなく、現在も活動しているものももちろんのこと、すでに霊場としての機能を失ってしまったものであっても先人の法然上人賛仰の貴重な痕跡である。

本研究では、すでに霊場としての機能を失ってしまったものも含めたこれらの各種の法然上人の写し霊場の歴史と現況を調査紹介し、もって大遠忌に向けて法然上人への迎慕喚起の一翼を担おうとするものである。

## 研究内容

十八年度と同様に、各地に設置された写し霊場の現況を調査報告するために、次のような手順で研究を実施した。

(1) 調査対象霊場の選定、(2) 文献などに基づく事前調査、(3) 実地調査、(4) 調査結果の検討、(5) 報告・紹介、という手順を繰返すことになる。霊場によってはすでに存在自体が忘れられてしまい資料もほとんど

ど残っており、霊場寺院自体にもなんらの記録も残されていない場合もある。そのため実地調査で成果をあげるためには(1)と(2)が重要になる。(1)調査対象霊場の選定は、本プロジェクト発足前の平成十五年度に浄土宗総合研究所から各教区教務所宛におこなった写し霊場所在確認のアンケートへの回答を基礎データとし、更に霊場研究者などからの情報に基づいた。さらに十七年度には教務所宛アンケートに基づいて、個々の霊場寺院に対して霊場の現況を確認するためのアンケートを実施した(『教化研究』第十七号参照)。これらによって得た情報に基づいて調査対象霊場を選定し、個別霊場の調査を実施した。特に十九年度は本研究のまとめの年度であり、霊場の実地調査は上半期までとした。

### 作業大綱

平成十九年度には次の霊場の実地調査を完了した。

(イ) 三河教区・圓光大師三河國廿五霊場

(ロ) 三河教区・法然上人三河二十五霊場

(ハ) 兵庫教区・霊場名不詳

(ニ) 南海教区・円光大師讚岐廿五霊場

個別の霊場の調査内容については、『教化研究』の本号において研究成果として別に報告するので、ここでは割愛する。

なお、二月に第一次の研究成果報告書を遠忌局宛提出している。

### 研究会開催日及び研究内容

本プロジェクトは京都分室と関東の研究員との合同の研究班である。実地調査などの研究会の実施日は次のとおりである。

4月3日、5月21～22日、5月29日、6月26日、9月13～14日、10月22～23日

この他に研究会には計上していないが、調査の進捗状況の打ち合わせ、研究成果報告の作成についての打

ち合わせのなどの会合を十回程度実施した。

文責者 主務 齊藤舜健

特別業務 大遠忌関連プロジェクト

## 浄土宗大辞典

### 研究目的・研究内容

昭和四十九年、浄土宗大辞典編纂委員会編『浄土宗大辞典』（以下、『大辞典』と記す）初版第一巻が発行されて以来、およそ三十年が経過した（昭和五十一年・第二巻発行、昭和五十五年・第三巻発行、昭和五十七年・第四（別）巻発行）。その後、浄土宗学・仏教学・史学をはじめとする学問研究は長足の進展を示し、あるいは、宗宝や各種文化財の指定（解除も含め）、新出資料

の発見、市町村合併に伴う住居表示の変更など、『大辞典』記載事項に改訂・増補を望む声は日増しに高まり、かつ、多岐に及んでいる。本プロジェクトは、それら多方面からの声を踏まえ、『新纂浄土宗大辞典』（以下、『新纂大辞典』と記す）の編集・発刊を目指している。無論、現今の出版を取り巻く環境、頒布・販売・検索の便宜などを鑑み、『新纂大辞典』の電子化も視野に入れて作業を進めていることは言うまでもない。『新纂大辞典』の発刊は、一層の教学振興を促し、布教施策の一助と

なるであろう。

本研究班は、平成十六年四月一日に組織された『新纂浄土宗大辞典』編纂委員会（委員長・石上善応、副委員長・伊藤唯真）の指導を仰ぎ、当プロジェクト研究員がそのまま『同』編纂実行委員会（実行委員長・林田康順、副委員長・安達俊英）として宗務当局からの委嘱を受けて営為編集作業を進めている。

### 作業大綱

本年度の作業大綱は概ね以下の通りである。

①採用項目の選定作業―『大辞典』全項目（約六五〇〇項目）をその内容に応じて分類し、ファイリングした。さらに、分野別担当毎に各種辞典・基本典籍等から新規採用候補の項目をピックアップし、それを全体会で精査・検討の上、八七六二項目を立項した（内、六五七項目は他項目への移動を指示する項目名のみ。また、『大辞典』からは二三〇項目の項目名変更ないし削除を施した）。これによって、近代人名・近代宗史・

近代書名の選定作業を除き、『新纂大辞典』採用項目の選定作業をほぼ完了した。

②執筆依頼（第三期・第四期）―①の作業を経た全項目から、分野別担当毎・全体会、さらには、西部担当者との検討・調整を経て、約二〇〇名の執筆者に向け、第三期（平成十九年五月、一三八四項目）・第四期（平成十九年十一月、一三〇六項目）の執筆依頼を行った。

③編集作業―昨年度発行した『執筆要綱（第二版）』に基づき、第二期執筆依頼分（平成十九年五月締切、依頼数一二八四項目）、第三期執筆依頼分（平成十九年十一月締切、依頼数一三三四項目）の到着原稿の編集作業を順次進めている。八七六二項目に及ぶ原稿管理については、試行錯誤を重ねながらも、大蔵健司専任研究員主務の管理班の指導のもと、粛々と進行している。

④写真・イラスト・図表、巻末資料等選定作業―『新纂大辞典』に掲載する写真・イラスト・図表、巻末資料等の選定作業を分野別担当毎に進め、それを文化局

職員同席のもと、全体会で検討した。現時点の掲載予定は、写真：三八七項目、イラスト：六八項目、図表

：一二項目、巻末資料：六六項目、計五三三項目である。

また、法式や宗史、仏教美術を中心に豊富な巻末資料となることを目指し作業を継続している。今後、総大  
本山や各寺院における什宝や各種行事の写真撮影、イ  
ラストレーターとの打ち合わせ等、文化局との定期的  
な打ち合わせをもち、項目編集と同時並行で進めてい  
くこととなる。

以上が本年度の作業大綱である。

いよいよ来年度で、近代関係等一部の分野を除き、ほとんどの項目について執筆依頼を終える予定であり（第五期執筆依頼―平成二十年五月予定、第六期執筆依頼―平成二十年十一月予定。但し、最終依頼となる第七期執筆依頼は、平成二十一年五月を予定している）、編集作業が本格化する。特に第五期以降は、近代以降の項目についても、順次、依頼予定であり、項目選定には一層の慎重を期している。

## 研究会開催日

原則として毎週月曜日に全体会を設定し、必要に応じて随時行われている管理班の研究会、分野別担当者毎の研究会を含め、本年度は四八回開催した。

## 研究スタッフ一覧

総合研究所長・石上善応研究代表以下、平成十九年度の本プロジェクト研究スタッフの構成とその担当分野は以下の通りである。

また、本プロジェクトは膨大なデータをより効率的に処理する必要がある、コンピュータによる高度な管理システムが要求されることから、発足当初から大藏健司専任研究員を主務とする管理班との共同プロジェクトとし、データの作成・保存などの情報処理作業を進めているので、その担当も付記しておく。

石上善応 研究代表／浄土宗総合研究所所長



福西賢兆 浄土宗総合研究所主任研究員

東部スタッフ

林田康順 浄土宗総合研究所研究員 主務／伝法

大蔵健司 浄土宗総合研究所専任研究員 管理班主務

西城宗隆 浄土宗総合研究所専任研究員 法式・葬祭

袖山栄輝 浄土宗総合研究所専任研究員 一般仏教

石川琢道 浄土宗総合研究所研究員 人名／管理班

石田一裕 浄土宗総合研究所研究員 一般仏教／管理

班

柴田泰山 浄土宗総合研究所研究員 一般仏教

曾根宣雄 浄土宗総合研究所研究員 宗学

名和清隆 浄土宗総合研究所研究員 民間信仰・宗教・

葬祭

宮入良光 浄土宗総合研究所研究員 布教・仏教美術

和田典善 浄土宗総合研究所研究員 書名(日本)／管

理班

荒木信道 浄土宗総合研究所研究助手 法式

佐藤堅正 浄土宗総合研究所研究助手 管理班

廣本康真 浄土宗総合研究所研究助手 法式

江島尚俊 浄土宗総合研究所嘱託研究員 宗教・宗史

(近代)・人名(近代)・組織団体

東海林良昌 浄土宗総合研究所嘱託研究員 宗史・歴

史国文

村田洋一 浄土宗総合研究所嘱託研究員 寺名・詠唱

吉水岳彦 浄土宗総合研究所嘱託研究員 宗学／管理

班

郡嶋昭示 浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員 經典・

書名(インド・チベット・中国・朝鮮)・寺

名・詠唱／管理班

吉田淳雄 浄土宗総合研究所常勤嘱託研究員 宗史(近

代)・宗制・書名(近代)・組織団体・哲学

成句

西部スタッフ

齋藤舜健 浄土宗総合研究所専任研究員

善裕昭 浄土宗総合研究所研究員

安達俊英 浄土宗総合研究所囑託研究員

大沢亮我 浄土宗総合研究所囑託研究員

清水秀浩 浄土宗総合研究所囑託研究員

米澤実江子 浄土宗総合研究所常勤囑託研究員

おわりに—お願いにかえて—

以上、私たち「新纂浄土宗大辞典」編集プロジェクト研究スタッフは、かつて『大辞典』刊行にかかわられた編纂委員の先生方やご執筆された先生方をはじめとする実に膨大な先学諸賢のご尽力に常に敬意を払い、また、『新纂浄土宗大辞典』編纂委員会の先生方の指導を仰ぎつつ、『新纂大辞典』刊行に向けた編集作業を営為進めていく所存である。

なお、その際、各項目に記載される内容の確認はもとより、各寺院の什物等の図版掲載許可や撮影依頼のため、直接・間接に、各スタッフや文化局職員が書面や電話を通じて各寺院宛に連絡をとらせていただくこ

とが多くなると思われる。本報告をご一読いただいた大方の諸賢には、本プロジェクトへのご理解をいただき、広くご協力を賜れるよう伏してお願い申し上げます。次第である。あわせて当プロジェクトへのご指導・ご鞭撻をお願い申し上げ、報告にかえさせていただきます。

合掌

文責者 主務 林田康順

## 浄土三部経

### 研究目的

宗祖法然上人八百年大御遠忌記念事業の一つ「浄土宗基本典籍の現代語訳化」に位置付けられている本研究プロジェクトは、本宗所依の經典である浄土三部経の現代語訳を提示することにより、三部経全般にわたる内容理解を容易ならしめ、本宗教師各位における布教化の一助たらんとすることはもちろん、檀信徒各位、一般市民における浄土教理解を促し、直接あるいは間接に本宗の教義宣揚に資することを目的としている。

本研究の最終成果は三部経すべての現代語訳と訳注

の刊行によって示される予定であるが、本研究に基づいてのあらたな出版企画への展開も期待されるところである。

### 研究内容

本研究会は平成十四年度に立ち上がり、これまでに研究ノートとして『阿弥陀経』の現代語訳と訳注（本誌第十四号）、『無量寿経』上巻の現代語訳（本誌第十五号）、『無量寿経』下巻の現代語訳（本誌第十六号）、『観無量寿経』の第三観までの現代語訳（本誌第十七号）、同第四観から第十三観までの現代語訳（本誌第十八号）を発表してきた。

いずれも訳語というべき段階ではあるけれども、本年度は『観無量寿経』の第十四観から巻末までの現代語訳化を試み、本号の研究ノートとして掲載した。

また本年度は『観無量寿経』の訳注作業の進捗を計り、現代語訳時に於ける訳注箇所および訳注内容の確認、参照資料の精査、訳注の執筆に取り組んだ。訳注作業の完成は二十年度の予定となっている。なお訳注作業の進捗にともない、当然ながら、これまで発表してきた現代語訳の見直し、精査が施されている。

### 作業大綱

本研究は六年間にわたって継続されており、その研究方法は大きく変わることはない。

本年度は昨年度に引き続き『観無量寿経』の現代語訳化にあたったが、底本は指定の『浄土宗聖典』第一巻収載の「浄土三部経訓読書き下し文」を用いた。

経文の解釈は高祖善導大師の『観経疏』、義山の『観無量寿経随聞講録』、観徹の『三部経合讀』を常に参照

し、必要に応じて香月院深励の『観無量寿経講義』や先行現代語訳に目を通した。こうした作業の枠組みは、昨年度と同様である。

具体的な作業としては、①下訳の提示、②下訳と本文、並びに『観経疏』『合讀』『講録』『講義』との照合、③諸本との対校照合、④先行現代語訳との照合、⑤下訳の推敲、⑥文章としての整合性の見直し、などといった作業が順次挙げられる。これらの作業には研究班の全員があたったが、①については主に袖山が、②については主に齊藤と柴田が、③④については主に石田が、⑤は全員、⑥については主に佐藤堅正が担当した。

こうした作業を経て下訳から第一次訳を作成し、それを今一度見直して推敲を重ねることにより第二次訳として整えていった。研究ノートとして提示したのは、この第二次訳である。なお、佐藤研究員には当初、オブザーバー参加であったが、実質的に作業を担当していただき、二十年度には当研究班に加わっていただく予定である。

研究会開催日と研究内容

平成十九年度、当研究会の開催は日別にして計四十一回であった。

月毎の内訳は四月四回、五月四回、六月四回、七月三回、八月一回、九月一回、十月五回、十一月三回、十二月三回、一月三回、二月四回、三月六回。一々の開催日は煩瑣になるので省略するが、一々の研究内容は以下の通りである。

第一～四回	第十四観上品中生の訳出	第二十二回	中品下生の見直しと推敲
第五～六回	第十四観上品下生の訳出	第二十三回	下品の見直しと推敲
第六～七回	第十五観中品上生の訳出	第二十四回	禁父縁までの注記箇所確認及び執筆、訳文推敲
第八回	第十五観中品中生の訳出	第二十五～二十六回	禁母縁までの注記箇所確認及び執筆、訳文推敲
第九回	第十五観中品下生の訳出	第二十七回	散善顕行縁までの注記箇所確認及び執筆、訳文推敲
第十回	第十六観上品上生の訳出	第二十八回	初観までの注記箇所確認及び執筆、訳文推敲
第十一回	第十六観下品中生の訳出		
第十二～十三回	第十六観下品下生の訳出		
第十四～十五回	得益分・流通分の訳出		
		第十六～十七回	上品上生の見直しと推敲
		第十七回	上品中生・下生の見直しと推敲
		第十八回	上品下生の見直しと推敲
		第十九回	中品上生、中品中生の見直しと推敲
		第二十～二十一回	中品下生の見直しと推敲

第二十九〜三十回 第二観までの注記箇所確認及

び執筆、訳文推敲

第三十五〜三十七回 第九観〜十観の注記箇所確認

第三十一回 第三観までの注記箇所確認及

び執筆、訳文推敲

第三十八〜四十一回 『教化研究』提出原稿の見直し

第三十二回 第四〜七観の注記箇所確認及

び執筆、訳文推敲

と推敲  
文責者 袖山榮輝

第三十三〜三十四回 第七〜八観までの注記箇所確

特別業務 大遠忌関連プロジェクト

## 四十八巻伝

### 研究目的

法然上人の八〇〇年遠忌も数年先となってきた。浄土宗では遠忌を前に各種講習会や勉強会で法然の生涯

を勉強するケースが増えてくると思う。本班の作業は  
そのような役割立つよう、わかりやすい現代語訳を  
提供することを目的としている。

『四十八巻伝』はそれまでの法然諸伝を集大成した位

置にある。鎌倉後期ころ作成され、作者は天台宗の舜昌とされるが不明なところも多い。浄土宗においては江戸時代に刊本が出版されたのを契機に、それ以降広く読まれてきた。しかし鎌倉時代の古文を読む労力は小さいものではない。正確に読んだ上で話すことのむずかしさは誰しもが経験されていると思う。その助力ともなるように、わかりやすい現代語訳を提供できればと考えている。

## 研究内容

研究内容については以前の『教化研究』の報告で何度も述べてきたとおりである。担当者が下訳を作成し、伊藤唯真台下にご指導いただきながらスタッフ全員で検討・修正する。とくに古文の尊敬や丁寧語の訳出に注意しながら、また仏教や歴史の専門用語もどのように現代語に置き換えるのかといったことに配慮しながら、完成訳に仕上げていっている。校正段階では難読の固有名詞や熟語にルビをつけている。

既に作業手順は固まっているので、あとは単調な作業を根気よく継続することが大事なことになる。ともすれば面白味がなく飽きてしまうような手順の繰り返しであるが、単調ではあっても全巻を訳出することを目標にねばり強く継続してゆきたい。

これまでも記してきたとおり『四十八巻伝』の現代語訳にはいくつかあり、本班で主として早田哲雄「昭和更編校注 勅修法然上人御伝全講」全十巻を参照している。この現代語訳の完成度は大変高く、古文の正確な読解は大変参考となるし、仏教語についても十分な理解がなされている。ただ、文体が古くて一時代前の感があり、必ずしもすっきりした訳文ではない。また、たまにはあるが誤訳もある。それらに注意しながら、より簡明でわかりやすく、すっきりした形の訳文にしている。

## 研究開催日および検討内容

一月に二回のペースで研究会を開いている。場所は

伊藤台下の住まわれている清浄華院の門主室、あるいは知恩院浄土宗学研究所をお借りしている。平成十九年度の研究会開催日は次のとおりであった。

平成十九年

四月五日（木）

十九日（木）

五月一日（火）

十七日（木）

六月七日（木）

二十一日（木）

七月五日（木）

二十三日（月）

九月三日（月）

十八日（火）

十月二十二日（月）

十一月十二日（月）

二十六日（月）

十二月十日（月）

平成二十年

一月二十一日（月）

二月十八日（月）

三月四日（火）

二十六日（水）

今回は巻九・十の訳文を本誌の最後に掲載した。巻九は後白河院の如法経において、大勢の貴族や顕密僧が参加するなか、法然が先達をつとめたという話。如法経の儀式の展開の仕方が十分に理解できなければ訳文も正しい内容とならないので、十分に内容を読み取りながら、あるいは絵図を参照しながら儀式の展開を理解することに努力した。

巻十は後白河院の十三回忌で法然が浄土三部経の如法経次第を記したという話。巻九とともに難しかったのは、この如法経のなかにでる専門用語をどう扱うか



である。たとえば料紙、前方便、次第、伽陀、法則などをどのように入れたらよいのか、あるいは無理に入らずにそのまましておくのか、この判断にかなり時間をかけた。また漢文の讚嘆文も訳するのも容易ではなかった。かならずしも完璧ではなく、今後、一冊の書籍の形になると聞いているので、修正を加えてよりよいものにしてゆきたい。

文責 主務 善裕昭



研究ノート

## 義山『浄土三部経随聞講録』对照表

●義山良照『無量寿経随聞講録』『観無量寿経随聞講録』『阿弥陀経随聞講録』（以下、随聞講録）と『浄土三部経』本文との对照表である。

●随聞講録は、『浄土宗全書』第十四卷所収を用いた。

●表の配置は、左から、(1) 三部経本文、(2) 随聞講録。ページ数(a, bはそれぞれ上段と下段)、(3) 『浄土宗全書』第一卷所収三部経ページ数と行数、(4) 『浄土宗聖典』第一卷所収の三部経(漢文)のページ数と行数、(5) 『浄土宗聖典』第一卷所収(書き下し文)のページ数と行数、とした。

●随聞講録に直接引用されていない箇所は随聞講録のページ数を「一」とした。

●随聞講録では原則的には所収の三部経本文を「●」の直後に示す。それ以外に引用された部分についてはも对照表中に示した場合がある。

●随聞講録では三部経本文を二重に積する箇所がある。例えば、まず「一切大聖」を出し、次に「一切」を別に積する。この重複部分は「一」を用いて「二切」のように示した。

●三部経本文は、新字体とした。

無量寿経随聞講録				
『無量寿経』本文	随聞講録	浄全	聖典（漢文）	聖典（書き下し）
仏	[250a]	P01L01	P003L01	P213L01
説無量寿	[250b]	P01L01	P003L01	P213L01
経	[250b]	P01L01	P003L01	P213L01
卷	[251b]	P01L01	P003L01	P213L01
上	[251b]	P01L01	P003L01	P213L01
曹魏	[253b]	P01L02	P003L02	P213L02
天竺三蔵	[254a]	P01L02	P003L02	P213L02
康僧鎧	[254a]	P01L02	P003L02	P213L02
訳	[254a]	P01L02	P003L02	P213L02
我聞如是	[254b]	P01L03	P003L03	P213L04
一時	[255b]	P01L03	P003L03	P213L04
仏	[255b]	P01L03	P003L03	P213L04
住	[256a]	P01L03	P003L03	P213L04
王舎城	[255b]	P01L03	P003L03	P213L04
耆闍崛山	[255b]	P01L03	P003L03	P213L04
中	—	P01L03	P003L03	P213L04
与	[256a]	P01L03	P003L03	P213L04
大比丘衆	[256a]	P01L03	P003L04	P213L04
万二千	[256a]	P01L03	P003L04	P213L05
人俱	—	P01L03	P003L04	P213L05
一切大聖	[256a]	P01L03	P003L04	P213L05
[一切]	[256b]	P01L03	P003L04	P213L05
神通	[256b]	P01L03	P003L04	P213L05
已達	[256b]	P01L03	P003L04	P213L05
其名	[256b]	P01L03	P003L05	P213L05
曰	—	P01L03	P003L05	P213L05
尊者	[256b]	P01L04	P003L05	P213L05
了本際尊者正願尊者正語尊者大号尊者仁賢尊者離垢尊者名聞尊者善実尊者具足尊者牛王尊者優樓頻伽迦葉尊者伽耶迦葉尊者那提迦葉尊者摩訶迦葉尊者舍利弗尊者大目犍連尊者劫寶那尊者大住尊者大浄志尊者摩訶周那尊者滿願子尊者離障尊者流灌尊者堅伏尊者面王尊者異乘尊者仁性尊者嘉來尊者善來尊者羅云尊者	—	P01L04	P003L05	P213L05
阿難	[256b]	P01L07	P004L05	P213L10
皆如斯等	[256b]	P01L07	P004L05	P213L11
上首者也	—	P01L07	P004L05	P213L11
又与	—	P01L09	P004L07	P213L12
大乘衆	[257a]	P01L09	P004L07	P213L12
菩薩俱普賢菩薩妙徳菩薩慈氏菩薩等此賢劫中一切菩薩	—	P01L09	P004L07	P213L12
又賢護等	[257b]	P01L09	P004L08	P213L13
十六	[257b]	P01L09	P004L08	P213L13

正士	[257b]	P01L09	P005L01	P213L13
善思議菩薩信慧菩薩空無菩薩神通華菩薩光英菩薩慧上菩薩智幢菩薩寂根菩薩願慧菩薩香象菩薩宝英菩薩中住菩薩制行菩薩解脫菩薩	—	P01L10	P005L01	P213L13
皆遵普賢	[257b]	P01L11	P005L04	P214L02
大士	[258a]	P01L11	P005L04	P214L03
之德	—	P01L11	P005L04	P214L03
具諸菩薩	[258a]	P01L11	P005L05	P214L03
[具諸菩薩]	[258b]	P01L11	P005L05	P214L03
[具]	[258b]	P01L11	P005L05	P214L03
無量	—	P01L11	P005L05	P214L03
行	[258b]	P01L11	P005L05	P214L03
願	[258b]	P01L11	P005L05	P214L03
安住一切	[258b]	P01L12	P005L05	P214L03
[一切] 功德之法	[259a]	P01L12	P005L05	P214L03
遊步十方	[259a]	P01L12	P005L06	P214L04
行權方便	[259a]	P01L12	P005L06	P214L04
入仏法藏	[259a]	P01L12	P005L06	P214L04
究竟彼岸	[259b]	P01L12	P005L06	P214L04
於無量世界	[259b]	P01L12	P005L06	P214L04
現成	[259b]	P01L12	P005L07	P214L05
等覺	[259b]	P01L12	P005L07	P214L05
処兜率天	[259b]	P01L12	P005L07	P214L05
広宣正法	[260a]	P01L13	P005L07	P214L05
捨彼天宮	[260a]	P01L13	P005L07	P214L05
降神母胎	[260a]	P01L13	P005L08	P214L06
從右脇生	[260b]	P01L13	P005L08	P214L06
現行七步	[261a]	P01L13	P005L08	P214L06
光明顯曜	[261b]	P01L13	P005L08	P214L06
普照十方無量仏土	—	P01L13	P006L01	P214L07
六種震動	[261b]	P01L13	P006L01	P214L07
拳声自稱	—	P01L13	P006L01	P214L07
吾當於世為無上尊	[262a]	P01L14	P006L02	P214L08
積梵奉侍	[262a]	P01L14	P006L02	P214L08
天人	[262a]	P01L14	P006L02	P214L08
婦仰	[262a]	P01L14	P006L02	P214L09
示現算計	[262a]	P01L14	P006L03	P214L09
文	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
芸	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
射	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
御	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
博總道術	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
[道術]	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
[博]	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
[総]	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09

貫	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
練	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
羣籍	[262b]	P01L14	P006L03	P214L09
遊於後園	[263a]	P01L14	P006L03	P214L09
講武試芸	[263a]	P02L01	P006L04	P214L10
現処宮中	[264a]	P02L01	P006L04	P214L10
色味	[264a]	P02L01	P006L04	P214L10
之間	—	P02L01	P006L04	P214L10
見老病死	[264a]	P02L01	P006L04	P214L10
悟世非常	[264b]	P02L01	P006L05	P214L10
棄国財位	[264b]	P02L01	P006L05	P214L11
[棄国財位]	[265a]	P02L01	P006L05	P214L11
入山学道	[265b]	P02L01	P006L05	P214L11
服乘白馬	[265b]	P02L01	P006L05	P214L11
宝冠瓔珞	[266a]	P02L01	P006L06	P214L12
遺之令還	—	P02L02	P006L06	P214L12
捨珍妙衣	[266a]	P02L02	P006L06	P214L12
而著法服	—	P02L02	P006L06	P214L12
髻除鬚髮	[266b]	P02L02	P006L07	P214L12
端座樹下	[267a]	P02L02	P006L07	P214L13
勤苦	[267a]	P02L02	P006L07	P214L13
六年	[267a]	P02L02	P006L07	P214L13
行如所応	[267a]	P02L02	P006L07	P214L13
現五濁刹	[267b]	P02L02	P006L07	P214L13
随順羣生	[267b]	P02L02	P006L08	P214L14
示有塵垢	—	P02L03	P006L08	P214L14
沐浴金流	[267b]	P02L03	P006L08	P214L14
天按樹枝	[268a]	P02L03	P006L08	P214L14
得攀出池	—	P02L03	P007L01	P214L15
靈禽翼從	[268a]	P02L03	P007L01	P214L15
往詣	—	P02L03	P007L01	P214L15
道場	[268b]	P02L03	P007L01	P214L15
吉祥	[268b]	P02L03	P007L01	P214L16
感徴	[268b]	P02L03	P007L01	P214L16
表章功祚	[268b]	P02L03	P007L01	P214L16
哀受施呌敷	—	P02L03	P007L02	P214L16
仏樹	[269a]	P02L04	P007L02	P214L16
下踰跣而坐	—	P02L04	P007L02	P214L16
奮大光明	[269a]	P02L04	P007L03	P215L01
使魔知之	—	P02L04	P007L03	P215L01
魔率官属	[269b]	P02L04	P007L03	P215L01
而来逼試	—	P02L04	P007L03	P215L02
制以智力	[269b]	P02L04	P007L03	P215L02
皆令降伏	—	P02L04	P007L04	P215L02
得微妙法	[269b]	P02L04	P007L04	P215L02

成正覺	[269b]	P02L04	P007L04	P215L03
積梵祈勸	[270a]	P02L05	P007L04	P215L03
請轉法輪	[270a]	P02L05	P007L05	P215L03
以佻遊步	[270b]	P02L05	P007L05	P215L03
佻吼而吼	[270b]	P02L05	P007L05	P215L04
扣法鼓	[270b]	P02L05	P007L05	P215L04
吹法唄執法劔建法幢震法雷曜法電樹法雨演法 施常以法音覺諸世間	—	P02L05	P007L06	P215L04
光明普照	[271a]	P02L06	P007L07	P215L06
無量仏土一切世界	—	P02L06	P007L07	P215L06
六種震動	[271b]	P02L06	P007L08	P215L06
總撰魔界動魔宮殿衆魔懼怖莫不歸伏	—	P02L06	P007L08	P215L07
捆裂邪網	[271b]	P02L07	P008L01	P215L08
消滅	—	P02L07	P008L01	P215L08
諸見	[271b]	P02L07	P008L01	P215L08
散諸	—	P02L07	P008L02	P215L08
塵勞	[271b]	P02L07	P008L02	P215L08
壞諸	—	P02L07	P008L02	P215L08
欲塹	[271b]	P02L07	P008L02	P215L08
嚴護法城	[272a]	P02L07	P008L02	P215L09
開闢	[272a]	P02L07	P008L02	P215L09
法門	—	P02L07	P008L02	P215L09
洗濯垢汚	[272a]	P02L07	P008L03	P215L09
顯明清白	—	P02L08	P008L03	P215L09
光融	[272b]	P02L08	P008L03	P215L10
佻法	—	P02L08	P008L03	P215L10
宣流	[272b]	P02L08	P008L03	P215L10
正化	[272b]	P02L08	P008L03	P215L10
入国	[272b]	P02L08	P008L03	P215L10
分衛	[272b]	P02L08	P008L04	P215L10
獲諸豐膳	[272b]	P02L08	P008L04	P215L10
貯功德	[272b]	P02L08	P008L04	P215L11
示福田	[273a]	P02L08	P008L04	P215L11
欲宣	[273a]	P02L08	P008L04	P215L11
法現	—	P02L08	P008L04	P215L11
欣笑	[273a]	P02L08	P008L05	P215L11
以諸	—	P02L08	P008L05	P215L11
法菓	[273a]	P02L08	P008L05	P215L12
救療	[273a]	P02L09	P008L05	P215L12
三苦	[273a]	P02L09	P008L05	P215L12
顯現道意	[273a]	P02L09	P008L05	P215L12
無量功德	[273b]	P02L09	P008L05	P215L12
授菩薩記	[273b]	P02L09	P008L06	P215L12
成等正覺	[273b]	P02L09	P008L06	P215L13
示現滅度	[273b]	P02L09	P008L06	P215L13



拯濟無極	—	P02L09	P008L06	P215L13
消除諸漏	[274a]	P02L09	P008L07	P215L13
植衆德本	[274a]	P02L09	P008L07	P215L14
具足功德	[274b]	P02L09	P008L07	P215L14
微妙難量	[274b]	P02L10	P008L07	P215L14
遊諸仏国	[274b]	P02L10	P008L07	P215L15
普現道教	[274b]	P02L10	P008L08	P215L15
其所修行	[274b]	P02L10	P008L08	P215L15
清淨無穢	[274b]	P02L10	P008L08	P215L15
譬如幻師現衆異像為男為女	—	P02L10	P008L08	P215L16
無所不變	[274b]	P02L10	P009L01	P215L16
本學明了	[274b]	P02L11	P009L01	P216L01
在意所為	—	P02L11	P009L02	P216L01
此諸菩薩	[274b]	P02L11	P009L02	P216L01
亦復如是	[275a]	P02L11	P009L02	P216L02
學一切法	—	P02L11	P009L02	P216L02
貫總總練	[275a]	P02L11	P009L03	P216L02
所住安諦	[275a]	P02L11	P009L03	P216L02
靡不	—	P02L11	P009L03	P216L03
致化	[275a]	P02L11	P009L03	P216L03
無數仏土皆悉普現未曾	—	P02L11	P009L03	P216L03
慢恣	[275a]	P02L12	P009L04	P216L04
慙傷衆生	[275a]	P02L12	P009L04	P216L04
如是之法	[275b]	P02L12	P009L04	P216L04
一切具足	—	P02L12	P009L04	P216L04
菩薩經典	[275b]	P02L12	P009L05	P216L04
究暢要妙	[275b]	P02L12	P009L05	P216L05
名稱普至	[275b]	P02L12	P009L05	P216L05
導御十方	[275b]	P02L12	P009L05	P216L05
無量諸仏	[275b]	P02L13	P009L06	P216L05
咸共	—	P02L13	P009L06	P216L05
護念	[275b]	P02L13	P009L06	P216L06
仏所住者	[275b]	P02L13	P009L06	P216L06
皆已得住	—	P02L13	P009L06	P216L06
大聖	[276a]	P02L13	P009L07	P216L06
所立	[276a]	P02L13	P009L07	P216L06
而皆已立	—	P02L13	P009L07	P216L07
如來導化	[276a]	P02L13	P009L07	P216L07
各能宣布	—	P02L13	P009L07	P216L07
為諸菩薩	[276a]	P02L13	P009L07	P216L07
而作大師	[276a]	P02L13	P009L08	P216L08
以甚深	—	P02L14	P009L08	P216L08
禪慧	[276a]	P02L14	P009L08	P216L08
開導	[276a]	P02L14	P009L08	P216L08
衆人	—	P02L14	P009L08	P216L08

通諸法性	[276a]	P02L14	P009L08	P216L08
達衆生相	[276b]	P02L14	P010L01	P216L08
明了	[276b]	P02L14	P010L01	P216L09
諸国	—	P02L14	P010L01	P216L09
供養諸仏	[276b]	P02L14	P010L01	P216L09
化現	—	P02L14	P010L01	P216L09
其身	[276b]	P02L14	P010L02	P216L09
猶如電光	[276b]	P02L14	P010L02	P216L09
善学無畏	[277a]	P02L14	P010L02	P216L10
之	—	P02L15	P010L02	P216L10
網	[277a]	P02L15	P010L02	P216L10
曉了	—	P02L15	P010L02	P216L10
幻化之法	[277a]	P02L15	P010L02	P216L10
壞裂	—	P02L15	P010L03	P216L10
魔網	[277a]	P02L15	P010L03	P216L10
解諸纏縛	[277a]	P02L15	P010L03	P216L10
超越	[277a]	P02L15	P010L03	P216L11
声聞緣覺之地得	—	P02L15	P010L03	P216L11
空無相	[277a]	P02L15	P010L04	P216L11
[無相] 無願	[277a]	P02L15	P010L04	P216L11
三昧	—	P02L15	P010L04	P216L11
善立方便	[277b]	P02L15	P010L04	P216L11
顯示三乘	[277b]	P03L01	P010L04	P216L12
於此中下	[277b]	P03L01	P010L04	P216L12
而現滅度	[277b]	P03L01	P010L05	P216L12
亦無所作	[278a]	P03L01	P010L05	P216L12
亦	—	P03L01	P010L05	P216L13
無所有	[278a]	P03L01	P010L05	P216L13
不起	[278a]	P03L01	P010L05	P216L13
不滅	[278a]	P03L01	P010L06	P216L13
得	—	P03L01	P010L06	P216L13
平等法	[278a]	P03L01	P010L06	P216L13
具足	[278a]	P03L01	P010L06	P216L14
成就	—	P03L01	P010L06	P216L14
無量總持	[278a]	P03L01	P010L06	P216L13
百千三昧	[278a]	P03L02	P010L06	P216L13
諸根智慧	[278a]	P03L02	P010L07	P216L14
広普寂定	[278a]	P03L02	P010L07	P216L14
深入	—	P03L02	P010L07	P216L14
菩薩法藏	[278b]	P03L02	P010L07	P216L14
得仏華嚴三昧	[278b]	P03L02	P010L07	P216L14
宣暢	[278b]	P03L02	P010L08	P216L15
演説一切經典	—	P03L02	P010L08	P216L15
住深定門	[278b]	P03L02	P010L08	P216L15
悉觀	—	P03L03	P010L08	P216L15

現在	[278b]	P03L03	P011L01	P216L15
無量諸仏	—	P03L03	P011L01	P216L16
一念	[278b]	P03L03	P011L01	P216L16
之頃無不周徧濟諸	—	P03L03	P011L01	P216L16
劇難	[278b]	P03L03	P011L02	P217L01
諸閑	[279a]	P03L03	P011L02	P217L01
不閑	[279a]	P03L03	P011L02	P217L01
分別顯示	—	P03L03	P011L02	P217L01
真実之際	[279a]	P03L03	P011L02	P217L01
得諸如來	—	P03L03	P011L02	P217L01
弁才之智	[279a]	P03L03	P011L03	P217L02
入衆言音	[279a]	P03L04	P011L03	P217L02
開化一切	—	P03L04	P011L03	P217L02
超過世間	[279b]	P03L04	P011L03	P217L02
諸所有法心常諦住	—	P03L04	P011L04	P217L02
度世之道	[279b]	P03L04	P011L04	P217L03
於一切万物而	—	P03L04	P011L04	P217L03
隨意自在	[279b]	P03L04	P011L05	P217L03
為諸	—	P03L05	P011L05	P217L04
庶類	[279b]	P03L05	P011L05	P217L04
作	—	P03L05	P011L05	P217L04
不諳之友	[279b]	P03L05	P011L05	P217L04
荷負羣生為之重担	[280a]	P03L05	P011L05	P217L04
受持如來	[280a]	P03L05	P011L06	P217L05
[如來]甚深法藏	[280a]	P03L05	P011L06	P217L05
護仏種性	[280a]	P03L05	P011L06	P217L05
常使不絶	—	P03L05	P011L07	P217L05
興大悲	[280a]	P03L05	P011L07	P217L06
愍衆生	—	P03L05	P011L07	P217L06
演慈弁	[280a]	P03L06	P011L07	P217L06
授法眼	[280a]	P03L06	P011L07	P217L06
杜三趣	[280a]	P03L06	P011L07	P217L06
開善門	[280b]	P03L06	P011L08	P217L07
以不諳之法施諸	—	P03L06	P011L08	P217L07
黎庶	[280b]	P03L06	P011L08	P217L07
如	—	P03L06	P011L08	P217L07
純孝	[280b]	P03L06	P011L08	P217L07
之子	—	P03L06	P012L01	P217L07
愛敬	[280b]	P03L06	P012L01	P217L07
父母	—	P03L06	P012L01	P217L07
於諸衆生	[280b]	P03L06	P012L01	P217L08
視若自己	—	P03L06	P012L01	P217L08
一切善本	[280b]	P03L07	P012L01	P217L08
皆度	—	P03L07	P012L02	P217L09
彼岸	[280b]	P03L07	P012L02	P217L09

悉獲	[280b]	P03L07	P012L02	P217L09
諸仏無量功德	[281a]	P03L07	P012L02	P217L09
智慧	[281a]	P03L07	P012L02	P217L09
聖明	[281a]	P03L07	P012L02	P217L09
不可思議	[281a]	P03L07	P012L03	P217L09
如是之等	[281a]	P03L07	P012L03	P217L10
菩薩大士不可稱計	—	P03L07	P012L03	P217L10
一時來會	[281a]	P03L08	P012L03	P217L10
爾時	[281b]	P03L09	P012L05	P217L11
世尊	—	P03L09	P012L05	P217L11
諸根悅予	[281b]	P03L09	P012L05	P217L11
姿色清淨	[281b]	P03L09	P012L05	P217L11
光顏巍巍	[281b]	P03L09	P012L05	P217L11
尊者阿難	—	P03L09	P012L05	P217L11
承仏聖旨	[282a]	P03L09	P012L06	P217L11
即從座起	[282b]	P03L09	P012L06	P217L12
偏袒右肩	[282b]	P03L09	P012L06	P217L12
長跪	[282b]	P03L09	P012L06	P217L12
合掌	[282b]	P03L09	P012L07	P217L12
而白仏言今日世尊諸根悅予姿色清淨光顏巍巍 如明淨鏡	—	P03L09	P012L07	P217L12
影暢表裏	[282b]	P03L10	P012L08	P217L14
威容	[283a]	P03L10	P012L08	P217L14
踴躍	—	P03L10	P012L08	P217L14
超絶無量	[283a]	P03L10	P013L01	P217L14
未曾瞻視殊妙如今	—	P03L10	P013L01	P217L15
唯然	[283a]	P03L11	P013L01	P217L15
大聖我心	—	P03L11	P013L01	P217L15
念言	[283a]	P03L11	P013L02	P217L16
今日世尊	[283a]	P03L11	P013L02	P217L16
住奇特法	[283a]	P03L11	P013L02	P217L16
今日世雄	[283b]	P03L11	P013L02	P217L16
住諸仏所住	[283b]	P03L11	P013L02	P217L16
今日世眼	[283b]	P03L11	P013L03	P218L01
住導師行	[283b]	P03L12	P013L03	P218L01
今日世英	[283b]	P03L12	P013L03	P218L01
住最勝道	[283b]	P03L12	P013L03	P218L01
今日天尊	[283b]	P03L12	P013L04	P218L01
行如來德	[284a]	P03L12	P013L04	P218L02
去來現仏	[284a]	P03L12	P013L04	P218L02
仏仏相念	[284a]	P03L12	P013L04	P218L02
得無今仏念諸仏耶	—	P03L12	P013L05	P218L02
何故威神	[284a]	P03L13	P013L05	P218L03
光光	[284a]	P03L13	P013L05	P218L03
乃爾	[284a]	P03L13	P013L05	P218L03

於是世尊告阿難曰云何阿難諸天教汝	—	P03L13	P013L06	P218L04
來問仏耶	[284a]	P03L13	P013L06	P218L05
自以慧見	[284a]	P03L13	P013L07	P218L05
問威顔乎阿難白仏無有諸天來教我者	—	P03L13	P013L07	P218L05
自以所(諸)見	[284b]	P03L14	P013L08	P218L06
問斯義耳仏言善哉阿難所問	—	P03L14	P013L08	P218L07
甚快	[284b]	P03L14	P014L01	P218L08
發深智慧	[284b]	P03L14	P014L01	P218L08
真妙弁才	[284b]	P03L14	P014L01	P218L08
愍念衆生	[284b]	P03L15	P014L01	P218L08
問斯慧義	[284b]	P03L15	P014L02	P218L08
如來以	—	P03L15	P014L02	P218L09
無尽大悲	[284b]	P03L15	P014L02	P218L09
[無尽]	[285a]	P03L15	P014L02	P218L09
矜	[285a]	P03L15	P014L02	P218L09
哀三界所以出興於世	—	P03L15	P014L02	P218L09
光闡道教	[285a]	P03L15	P014L03	P218L10
欲拯	—	P03L15	P014L03	P218L10
羣萌	[285a]	P03L15	P014L03	P218L10
惠以真美之利	[285a]	P03L15	P014L03	P218L10
無量億劫	[285b]	P04L01	P014L04	P218L10
難值難見猶	—	P04L01	P014L04	P218L11
靈瑞華	[285b]	P04L01	P014L04	P218L11
時時	[285b]	P04L01	P014L04	P218L11
乃出	—	P04L01	P014L05	P218L11
今所問者	[285b]	P04L01	P014L05	P218L11
多所饒益	—	P04L01	P014L05	P218L12
開化一切	[285b]	P04L01	P014L05	P218L12
諸天人民	—	P04L01	P014L05	P218L12
阿難當知	[285b]	P04L01	P014L06	P218L12
如來正覺	[286a]	P04L02	P014L06	P218L13
其智難量	[286a]	P04L02	P014L06	P218L13
多所導御	[286a]	P04L02	P014L06	P218L13
慧見無礙	[286a]	P04L02	P014L07	P218L13
無能匹絶	[286a]	P04L02	P014L07	P218L13
以一演之力	[286a]	P04L02	P014L07	P218L14
能住壽命	—	P04L02	P014L07	P218L14
億百千劫無數無量復過於此	[286b]	P04L02	P014L08	P218L14
[無數無量]	[286b]	P04L02	P014L08	P218L14
諸根	[286b]	P04L03	P014L08	P218L15
悅予不以毀損	—	P04L03	P014L08	P218L15
姿色不變	[286b]	P04L03	P015L01	P218L15
光顔無異	[286b]	P04L03	P015L01	P218L16
所以者何	[287a]	P04L03	P015L01	P218L16
如來	—	P04L03	P015L01	P218L16

定慧究暢	[286b]	P04L03	P015L02	P218L16
無極於一切法而得	—	P04L03	P015L02	P218L16
自在	[287a]	P04L04	P015L02	P219L01
阿難	—	P04L04	P015L02	P219L01
諦聽	[287a]	P04L04	P015L02	P219L01
今為汝說	[287a]	P04L04	P015L03	P219L01
矧曰	—	P04L04	P015L03	P219L01
唯然	[287a]	P04L04	P015L03	P219L02
願樂	[287a]	P04L04	P015L03	P219L02
欲聞	[287a]	P04L04	P015L03	P219L02
佞告阿難	—	P04L05	P015L04	P219L04
乃往	[287b]	P04L05	P015L04	P219L04
過去久遠無量不可思議	—	P04L05	P015L04	P219L04
無央數劫	[287b]	P04L05	P015L04	P219L04
錠光如來	[288b]	P04L05	P015L05	P219L04
興出於世	—	P04L05	P015L05	P219L05
教化度脫	[288b]	P04L05	P015L05	P219L05
無量衆生皆令得道乃取滅度	—	P04L05	P015L05	P219L05
次有如來	[288b]	P04L06	P015L06	P219L06
名曰光遠次名月光次名栴檀香次名善山王次名須弥天冠次名須弥等曜次名月色次名正念次名離垢次名無著次名幢天次名夜光次名安明頂次名不動地次名瑠璃妙華次名瑠璃金色次名金藏次名焰光次名焰根次名地動次名月像次名日音次名解脫華次名莊嚴光明次名海覺神通次名水光次名大香次名離塵垢次名捨厭意次名宝焰次名妙頂次名勇立次名功德持慧次名蔽日月光次名日月瑠璃光次名無上瑠璃光次名最上首次名菩提華次名月明次名日光次名華色王次名水月光次名除痴暝次名度 TMO022960 行次名淨信次名善宿次名威神次名法慧次名鸞音次名師子音次名竜音	—	P04L06	P015L06	P219L06
次名処世	[288b]	P04L12	P017L04	P220L06
如此諸仏皆悉已過	—	P04L12	P017L05	P220L06
爾時	[288b]	P04L14	P017L06	P220L07
次有仏名	—	P04L14	P017L06	P220L07
世自在王如來	[288b]	P04L14	P017L06	P220L07
[如來] 應供等正覺	[289a]	P04L14	P017L06	P220L07
明行足善逝世間解無上土調御丈夫天人師仏世尊	—	P04L14	P017L07	P220L07
時有	[289a]	P04L15	P017L08	P220L08
国王	[289a]	P04L15	P017L08	P220L08
聞仏說法心壞悅予	—	P04L15	P017L08	P220L08
尋覓無上	[289a]	P04L15	P017L08	P220L09
正真道意	[289a]	P04L15	P018L01	P220L09

棄国捐王	—	P04L15	P018L01	P220L09
行作沙門	[289b]	P04L15	P018L01	P220L10
号曰	—	P04L15	P018L01	P220L10
法藏	[289b]	P04L15	P018L02	P220L10
高才	[289b]	P04L15	P018L02	P220L10
勇哲	[289b]	P04L15	P018L02	P220L10
与世	[289b]	P05L01	P018L02	P220L10
超異詣世自在王如来所	—	P05L01	P018L02	P220L10
稽首仏足	[290a]	P05L01	P018L03	P220L11
右繞三匝	[290a]	P05L01	P018L03	P220L11
長跪合掌	—	P05L01	P018L03	P220L11
以頌贊曰	[290a]	P05L01	P018L03	P220L12
光顔巍巍	[290a]	P05L02	P018L04	P220L13
威神	[290b]	P05L02	P018L04	P220L13
無極	—	P05L02	P018L04	P220L13
如是焰明	[290b]	P05L02	P018L04	P220L14
無与等者	—	P05L02	P018L04	P220L14
日月摩尼	[290b]	P05L02	P018L05	P220L15
珠光焰耀 皆悉隱蔽	—	P05L02	P018L05	P220L15
猶若聚墨	[290b]	P05L03	P018L05	P221L01
如来容顔 超世無倫	—	P05L03	P018L06	P221L02
正覺大音	[290b]	P05L03	P018L06	P221L03
響流十方	[290b]	P05L03	P018L06	P221L03
戒聞	[291a]	P05L03	P018L07	P221L04
[戒聞] 精進 三昧智慧	[291a]	P05L03	P018L07	P221L04
威德無侶 殊勝希有	—	P05L04	P018L07	P221L05
深諦	[291b]	P05L04	P018L08	P221L06
善念 諸仏法海	—	P05L04	P018L08	P221L06
窮深	[291b]	P05L04	P018L08	P221L07
尽奥	[291b]	P05L04	P018L08	P221L07
究其涯底	[291b]	P05L04	P018L08	P221L07
無明欲怒	[291b]	P05L04	P019L01	P221L08
世尊永無	—	P05L05	P019L01	P221L08
人雄	[291b]	P05L05	P019L01	P221L09
師子	[291b]	P05L05	P019L01	P221L09
神德無量	—	P05L05	P019L01	P221L09
功勳廣大	[291b]	P05L05	P019L02	P221L10
智慧深妙	[292a]	P05L05	P019L02	P221L10
光明威相	[292a]	P05L05	P019L02	P221L11
震動大千	—	P05L05	P019L02	P221L11
願我作仏	[292a]	P05L06	P019L03	P221L12
齊	—	P05L06	P019L03	P221L12
聖法王	[292a]	P05L06	P019L03	P221L12
過度生死	[292a]	P05L06	P019L03	P221L13
靡不解脫	[292a]	P05L06	P019L03	P221L13

布施	[292a]	P05L06	P019L04	P221L14
調意	[292a]	P05L06	P019L04	P221L14
戒忍精進	—	P05L06	P019L04	P221L14
如是	[292b]	P05L06	P019L04	P221L15
三昧 智慧	—	P05L06	P019L04	P221L15
為上	[292b]	P05L07	P019L04	P221L15
吾誓得仏	—	P05L07	P019L05	P221L16
普行此願	[292b]	P05L07	P019L05	P221L16
一切	—	P05L07	P019L05	P222L01
恐懼	[292b]	P05L07	P019L05	P222L01
為作	—	P05L07	P019L05	P222L01
大安	[292b]	P05L07	P019L05	P222L01
假使	[292b]	P05L07	P019L06	P222L02
有仏 百千億万 無量	—	P05L07	P019L06	P222L02
大聖 數如恒沙	[293a]	P05L08	P019L06	P222L03
供養一切 斯等諸仏 不如	—	P05L08	P019L07	P222L04
求道	[293a]	P05L08	P019L07	P222L05
堅正	[293a]	P05L08	P019L07	P222L05
不卻	[293a]	P05L08	P019L07	P222L05
譬如	[293a]	P05L08	P019L08	P222L06
恒沙 諸仏世界	[293a]	P05L08	P019L08	P222L06
復不可計	[293a]	P05L09	P019L08	P222L07
無數刹土	—	P05L09	P019L08	P222L07
光明	[293a]	P05L09	P020L01	P222L08
悉照 徧此諸国	—	P05L09	P020L01	P222L08
如是	[293a]	P05L09	P020L01	P222L09
精進	[293b]	P05L09	P020L01	P222L09
威神	—	P05L09	P020L01	P222L09
難量	[293b]	P05L09	P020L01	P222L09
令我	[293b]	P05L10	P020L02	P222L10
作仏	—	P05L10	P020L02	P222L10
国土第一	[293b]	P05L10	P020L02	P222L10
其衆	[293b]	P05L10	P020L02	P222L11
奇妙	—	P05L10	P020L02	P222L11
道場超絶	[293b]	P05L10	P020L02	P222L11
国如泥洹	[293b]	P05L10	P020L03	P222L12
而無等双	[294a]	P05L10	P020L03	P222L12
我当哀愍 度脱	—	P05L10	P020L03	P222L13
一切	[294a]	P05L11	P020L03	P222L13
十方来生	[294a]	P05L11	P020L04	P222L14
心悅清淨	[294a]	P05L11	P020L04	P222L14
已到	[294a]	P05L11	P020L04	P222L15
我国 快樂安穩	—	P05L11	P020L04	P222L15
幸仏信明	[294a]	P05L11	P020L05	P222L16
是我真証	[294a]	P05L11	P020L05	P222L16



発願	[294a]	P05L12	P020L05	P223L01
於彼	[294b]	P05L12	P020L05	P223L01
力精	[294b]	P05L12	P020L05	P223L01
所欲	—	P05L12	P020L05	P223L01
十方	[294b]	P05L12	P020L06	P223L02
世尊 智慧無疑 常令	—	P05L12	P020L06	P223L02
此尊	[294b]	P05L12	P020L06	P223L03
知我	—	P05L12	P020L06	P223L03
心行	[294b]	P05L12	P020L06	P223L03
假令	[294b]	P05L12	P020L07	P223L04
身止 諸	—	P05L12	P020L07	P223L04
苦毒	[295a]	P05L13	P020L07	P223L04
中	—	P05L13	P020L07	P223L04
我行	[295a]	P05L13	P020L07	P223L05
精進	—	P05L13	P020L07	P223L05
忍終	[295a]	P05L13	P020L07	P223L05
不悔	—	P05L13	P020L07	P223L05
仏告阿難	[295a]	P05L14	P020L08	P223L06
法藏比丘説此頌已而	—	P05L14	P020L08	P223L06
白仏言	[295a]	P05L14	P200L08	P223L06
唯然世尊	[295a]	P05L14	P020L08	P223L07
我覺無上	[295a]	P05L14	P021L01	P223L07
正覺之心	—	P05L14	P021L01	P223L07
願仏	[295b]	P05L14	P021L01	P223L07
為我	—	P05L14	P021L01	P223L07
廣宣經法	[295b]	P05L14	P021L01	P223L08
我当修行	[295b]	P05L14	P021L02	P223L08
撰取	[295b]	P05L15	P021L02	P223L08
仏国清淨	[295b]	P05L15	P021L02	P223L08
莊嚴無量	[295b]	P05L15	P021L02	P223L08
妙土	—	P05L15	P021L02	P223L08
令我	[295b]	P05L15	P021L03	P223L09
於世速成正覺	—	P05L15	P021L03	P223L09
拔諸生死	[295b]	P05L15	P021L03	P223L09
勤苦之本	—	P05L15	P021L03	P223L10
仏語阿難	[296a]	P05L15	P021L04	P223L10
時	—	P05L15	P021L04	P223L10
世饒王仏	[296a]	P05L15	P021L04	P223L10
告法藏比丘	—	P06L01	P021L04	P223L10
汝所修行	[296a]	P06L01	P021L04	P223L11
莊嚴仏土	[296a]	P06L01	P021L05	P223L11
汝自当知	[296a]	P06L01	P021L05	P223L11
比丘白仏	—	P06L01	P021L05	P223L12
斯義弘深	[296a]	P06L01	P021L05	P223L12
非我境界唯願世尊廣為敷演諸仏	—	P06L01	P021L06	P223L12

如來淨土之行	[296a]	P06L02	P021L06	P223L13
我聞此已當	—	P06L02	P021L07	P223L13
如說	[296a]	P06L02	P021L07	P223L14
修行	[296b]	P06L02	P021L07	P223L14
成滿所願爾時世自在王仏知其	—	P06L02	P021L07	P223L14
高明	[296b]	P06L02	P021L08	P223L15
志願深広即為法蔵比丘	—	P06L02	P021L08	P223L15
而說經言	[296b]	P06L03	P022L01	P223L15
譬如大海	[296b]	P06L03	P022L01	P224L01
一人升量經歷劫數尚可窮底得其	—	P06L03	P022L01	P224L01
妙宝	[297a]	P06L03	P022L02	P224L02
人有至心精進求道不止會當剋果何願不得	—	P06L03	P022L02	P224L02
於是	[297a]	P06L04	P022L03	P224L03
世自在王仏即為説	—	P06L04	P022L03	P224L03
二百一十億	[297a]	P06L04	P022L04	P224L04
諸仏刹土	—	P06L04	P022L04	P224L04
天人之善惡	[297a]	P06L04	P022L04	P224L04
国土之龜妙	—	P06L05	P022L05	P224L04
応其心願	[297a]	P06L05	P022L05	P224L05
悉現与之	—	P06L05	P022L05	P224L05
時彼比丘	[297b]	P06L05	P022L05	P224L05
聞仏所説	—	P06L05	P022L06	P224L05
嚴淨国土	[297b]	P06L05	P022L06	P224L06
皆悉觀見	—	P06L05	P022L06	P224L06
超発	[297b]	P06L05	P022L06	P224L06
無上殊勝之願	[297b]	P06L05	P022L06	P224L06
其心寂靜	[297b]	P06L06	P022L07	P224L06
志無所著	—	P06L06	P022L07	P224L07
一切世間	[298a]	P06L06	P022L07	P224L07
無能及者	[298a]	P06L06	P022L08	P224L07
具足五劫	[298a]	P06L06	P022L08	P224L07
思惟撰取莊嚴仏国	—	P06L06	P022L08	P224L08
清淨之行	[298a]	P06L06	P022L08	P224L08
阿難白仏	[298b]	P06L06	P023L01	P224L08
彼仏国土寿量	[298b]	P06L07	P023L01	P224L08
幾何仏言其仏寿命	—	P06L07	P023L01	P224L09
四十二劫	[298b]	P06L07	P023L02	P224L09
時法蔵比丘撰取二百一十億諸仏刹土清淨之行	[299a]	P06L07	P023L02	P224L09
如是修已詣彼仏所稽首礼足繞仏三匝合掌而住				
白仏言世尊我已撰取莊嚴仏土清淨之行				
[如是修已]	[299a]	P06L08	P023L03	P224L10
[詣彼仏所]	[299a]	P06L08	P023L03	P224L11
[我已]	[299a]	P06L08	P023L05	P224L12
[清淨之行]	[299a]	P06L08	P023L05	P224L12
仏告比丘	—	P06L09	P023L05	P224L13

汝今可説	[299a]	P06L09	P023L06	P224L13
宜知	—	P06L09	P023L06	P224L13
是時	[299a]	P06L09	P023L06	P224L13
發起悅可	[299a]	P06L09	P023L06	P224L14
一切大衆菩薩	[299a]	P06L09	P023L06	P224L14
聞已	—	P06L09	P023L07	P224L14
修行	[299b]	P06L09	P023L07	P224L14
此法	—	P06L09	P023L07	P224L14
緣	[299b]	P06L09	P023L07	P224L15
致満足	[299b]	P06L09	P023L07	P224L15
無量大願	[299b]	P06L10	P023L07	P224L15
比丘白仏	—	P06L10	P023L07	P224L15
唯垂聽察	[299b]	P06L10	P023L08	P224L15
如我所願当具説之	—	P06L10	P023L08	P224L16
設	[301a]	P06L11	P024L01	P225L01
我	[301a]	P06L11	P024L01	P225L01
得仏	[301a]	P06L11	P024L01	P225L01
[第一願]	[301b]	P06L11	P024L01	P225L01
[設我得仏] 国有	—	P06L11	P024L01	P225L01
地獄	[302a]	P06L11	P024L01	P225L01
餓鬼畜生者不取正覺	—	P06L11	P024L01	P225L01
[第二願]	[302a]	P06L12	P024L02	P225L02
設我得仏国中人天寿終之後復更三惡道者不取正覺	—	P06L12	P024L02	P225L02
[第三願]	[309a]	P06L13	P024L04	P225L04
設我得仏国中人天	—	P06L13	P024L04	P225L04
不悉	[309b]	P06L13	P024L04	P225L04
真金	[309b]	P06L13	P024L04	P225L04
色者不取正覺	—	P06L13	P024L04	P225L04
[第四願]	[309b]	P06L14	P024L06	P225L06
設我得仏国中人天	—	P06L14	P024L06	P225L06
形色	[310a]	P06L14	P024L06	P225L06
不同有好醜者不取正覺	—	P06L14	P024L06	P225L06
[第五願]	[310a]	P06L15	P024L08	P225L08
設我得仏国中人天不識	—	P06L15	P024L08	P225L08
宿命	[311a]	P06L15	P024L08	P225L08
下至	[311a]	P06L15	P024L08	P225L08
不知百千億	—	P06L15	P024L08	P225L08
那由他	[311a]	P06L15	P025L01	P225L08
諸劫事者不取正覺	—	P06L15	P025L01	P225L08
[第六願]	[311b]	P07L01	P025L02	P225L10
設我得仏国中人天不得	—	P07L01	P025L02	P225L10
天眼	[311b]	P07L01	P025L02	P225L10
下至不見百千億那由他	—	P07L01	P025L02	P225L10
諸仏国	[311b]	P07L01	P025L03	P225L10

者不取正覺	—	P07L01	P025L03	P225L11
[第七願]	[311b]	P07L02	P025L04	P225L12
設我得仏国中人天不得天耳下至聞百千億那由他	—	P07L02	P025L04	P225L12
諸仏所說	[311b]	P07L02	P025L05	P225L12
不悉	[311b]	P07L02	P025L05	P225L13
受持者不取正覺	—	P07L02	P025L05	P225L13
[第八願]	[312a]	P07L03	P025L06	P225L14
設我得仏国中人天不得	—	P07L03	P025L06	P225L14
見他心智	[312a]	P07L03	P025L06	P225L14
下至不知百千億那由他諸仏國中	—	P07L03	P025L06	P225L14
衆生心念	[312a]	P07L03	P025L07	P225L15
者不取正覺	—	P07L03	P025L07	P225L15
[第九願]	[312a]	P07L04	P026L01	P225L16
設我得仏国中人天不得	—	P07L04	P026L01	P225L16
神足	[312b]	P07L04	P026L01	P225L16
於	—	P07L04	P026L01	P225L16
一念頃	[312b]	P07L04	P026L01	P225L16
下至不能超過百千億那由他諸仏国者不取正覺	—	P07L04	P026L01	P225L16
[第十願]	[312b]	P07L05	P026L04	P226L02
[漏尽→願名の速得漏尽]	[313a]	P07L05	P026L04	P226L02
設我得仏国中人天若起	—	P07L05	P026L04	P226L02
想念	[313a]	P07L05	P026L04	P226L02
貪計身者不取正覺	—	P07L05	P026L04	P226L02
[第十一願]	[314a]	P07L06	P026L06	P26L06
設我得仏国中人天	—	P07L06	P026L06	P226L04
不住	[314a]	P07L06	P026L06	P226L04
定聚	[314a]	P07L06	P026L06	P226L04
必至	—	P07L06	P026L06	P226L04
減度	[314a]	P07L06	P026L06	P226L04
者不取正覺	—	P07L06	P026L06	P226L04
[第十二願]	[314b]	P07L07	P026L08	P226L06
設我得仏	—	P07L07	P026L08	P226L06
光明	[314b]	P07L07	P026L08	P226L06
有能限量下至不照百千億那由他	—	P07L07	P026L08	P226L06
諸仏国	[315a]	P07L07	P027L01	P226L06
者不取正覺	—	P07L07	P027L01	P226L07
[第十三願]	[315a]	P07L08	P027L02	P226L08
設我得仏寿命	—	P07L08	P027L02	P226L08
有能限量	[315a]	P07L08	P027L02	P226L08
下至百千億那由他劫者不取正覺	—	P07L08	P027L02	P226L08
[第十四願]	[316a]	P07L09	P027L04	P226L10
設我得仏国中声聞有能計量	—	P07L09	P027L04	P226L10
下至	[316b]	P07L09	P027L04	P226L10
三千大千世界	[316b]	P07L09	P027L04	P226L10

声聞緣覺於百千劫悉共計按知其數者不取正覺	—	P07L09	P027L05	P226L11
[第十五願]	[317a]	P07L11	P027L07	P226L13
設我得仏国中人天壽命	—	P07L11	P027L07	P226L13
無能限量	[317a]	P07L11	P027L07	P226L13
除其本願	[317a]	P07L11	P027L07	P226L13
脩短自在若不爾者不取正覺	—	P07L11	P027L08	P226L14
[第十六願]	[317b]	P07L12	P028L01	P226L15
設我得仏国中人天乃至聞有	—	P07L12	P028L01	P226L15
不善名	[317b]	P07L12	P028L01	P226L15
[乃至]	[318a]	P07L12	P028L01	P226L15
者不取正覺	—	P07L12	P028L01	P226L15
[第十七願]	[318b]	P07L13	P028L03	P227L01
設我得仏	—	P07L13	P028L03	P227L01
十方世界	[318b]	P07L13	P028L03	P227L01
無量諸仏不悉	—	P07L13	P028L03	P227L01
咨嗟	[318b]	P07L13	P028L03	P227L01
称我名者	[318b]	P07L13	P028L03	P227L01
不取正覺	—	P07L13	P028L04	P227L02
[第十八願]	[319a]	P07L14	P028L05	P227L03
設我得仏	—	P07L14	P028L05	P227L03
十方	[320a]	P07L14	P028L05	P227L03
衆生	[320a]	P07L14	P028L05	P227L03
至心	[320b]	P07L14	P028L05	P227L03
信樂	[321a]	P07L14	P028L05	P227L03
欲生我国	[322a]	P07L14	P028L05	P227L03
乃至	[322b]	P07L14	P028L05	P227L04
十念	[322b]	P07L14	P028L06	P227L04
若不生者不取正覺	[324a]	P07L14	P028L06	P227L04
唯除五逆誹謗正法	[325a]	P07L14	P028L06	P227L04
[第十九願]	[326b]	P07L15	P028L08	P227L06
設我得仏十方衆生	—	P07L15	P028L08	P227L06
發菩提心	[328a]	P07L15	P028L08	P227L06
修諸功德	[328a]	P07L15	P028L08	P227L06
至心發願	[328b]	P07L15	P028L08	P227L07
欲生我国臨壽終時假令不与	—	P07L15	P029L01	P227L07
大衆圍繞	[328b]	P07L15	P029L01	P227L07
現其人前	[329a]	P07L15	P029L02	P227L08
者不取正覺	—	P08L01	P029L02	P227L08
[第二十願]	[329a]	P08L02	P029L03	P227L09
設我得仏十方衆生	—	P08L02	P029L03	P227L09
聞我名号	[330a]	P08L02	P029L03	P227L09
係念我国	[330a]	P08L02	P029L03	P227L09
植諸德本	[330a]	P08L02	P029L03	P227L10
至心迴向欲生我国不果遂者不取正覺	—	P08L02	P029L04	P227L10
[第二十一願]	[330b]	P08L03	P029L06	P227L12

設我得仏	—	P08L03	P029L06	P227L12
國中入天	[331a]	P08L03	P029L06	P227L12
不悉	[331a]	P08L03	P029L06	P227L12
成滿三十二	—	P08L03	P029L06	P227L12
大人相	[331a]	P08L03	P029L06	P227L12
者不取正覺	—	P08L03	P029L07	P227L13
[第二十二願]	[331a]	P08L04	P029L08	P227L14
設我得仏他方仏土	—	P08L04	P029L08	P227L14
諸菩薩衆	[331b]	P08L04	P029L08	P227L14
來生我國	—	P08L04	P029L08	P227L14
究竟	[331b]	P08L04	P029L08	P227L15
必至	—	P08L04	P030L01	P227L15
一生補處	[331b]	P08L04	P030L01	P227L15
除其本願	[331b]	P08L04	P030L01	P227L15
自在所化	[331b]	P08L04	P030L01	P227L15
為衆生故	—	P08L04	P030L01	P227L15
被弘誓鎧	[332a]	P08L04	P030L02	P227L16
積累德本	[332a]	P08L05	P030L02	P227L16
度脫一切	—	P08L05	P030L02	P227L16
遊諸仏國	[332a]	P08L05	P030L02	P227L16
修	—	P08L05	P030L03	P228L01
菩薩行	[332a]	P08L05	P030L03	P228L01
供養十方諸仏如來	—	P08L05	P030L03	P228L01
開化恒沙	[332a]	P08L05	P030L03	P228L01
無量衆生使立	—	P08L05	P030L04	P228L01
無上正眞之道	[332a]	P08L06	P030L04	P228L01
超出常倫	[332a]	P08L06	P030L04	P228L02
諸地之行	—	P08L06	P030L04	P228L02
現前修習普賢之德	[333a]	P08L06	P030L05	P228L02
若不爾者不取正覺	—	P08L06	P030L05	P228L03
[第二十三願]	[333b]	P08L07	P030L07	P228L04
設我得仏	—	P08L07	P030L07	P228L04
國中菩薩	[333b]	P08L07	P030L07	P228L04
承仏神力	[334a]	P08L07	P030L07	P228L04
供養諸仏	[334a]	P08L07	P030L07	P228L04
一食之頃	[334a]	P08L07	P030L07	P228L05
不能徧至	[334a]	P08L07	P030L08	P228L05
無數無量那由他諸仏國者不取正覺	—	P08L07	P030L08	P228L05
[第二十四願]	[334a]	P08L09	P031L02	P228L07
設我得仏	—	P08L09	P031L02	P228L07
國中菩薩	[334b]	P08L09	P031L02	P228L07
在諸仏前	—	P08L09	P031L02	P228L07
現其德本	[334b]	P08L09	P031L02	P228L07
諸所	—	P08L09	P031L02	P228L08
欲求	[334b]	P08L09	P031L03	P228L08

供養之具	[334b]	P08L09	P031L03	P228L08
若不如意者不取正覚	—	P08L09	P031L03	P228L08
[第二十五願]	[334b]	P08L09	P031L04	P228L10
設我得仏	—	P08L10	P031L04	P228L10
國中菩薩	[335a]	P08L10	P031L04	P228L10
不能演説	—	P08L10	P031L04	P228L10
一切智	[335a]	P08L10	P031L04	P228L10
者不取正覚	—	P08L10	P031L04	P228L10
[第二十六願]	[335b]	P08L11	P031L06	P228L12
設我得仏	—	P08L11	P031L06	P228L12
國中菩薩	[335b]	P08L11	P031L06	P228L12
不得	—	P08L11	P031L06	P228L12
金剛那羅延身	[335b]	P08L11	P031L06	P228L12
者不取正覚	—	P08L11	P031L06	P228L12
[第二十七願]	[336a]	P08L12	P031L08	P228L14
設我得仏	—	P08L12	P031L08	P228L14
國中人天	[336a]	P08L12	P031L08	P228L14
一切万物	[336a]	P08L12	P031L08	P228L14
嚴淨光麗	[336b]	P08L12	P031L08	P228L14
形色殊特	—	P08L12	P031L08	P228L14
窮微極妙	[336b]	P08L12	P032L01	P228L15
無能称量	[336b]	P08L12	P032L01	P228L15
其諸衆生	[336b]	P08L12	P032L01	P228L15
乃至	[336b]	P08L12	P032L01	P228L16
速得天眼有能明了弁其	—	P08L12	P032L02	P228L16
名数	[336b]	P08L13	P032L02	P228L16
者不取正覚	—	P08L13	P032L02	P228L16
[第二十八願]	[336b]	P08L14	P032L03	P229L02
設我得仏國中	—	P08L14	P032L03	P229L02
菩薩乃至少功德者	[336b]	P08L14	P032L03	P229L02
不能	—	P08L14	P032L03	P229L02
知見	[337a]	P08L14	P032L03	P229L02
其	—	P08L14	P032L04	P229L02
道場樹	[337a]	P08L14	P032L04	P229L02
無量光色高	—	P08L14	P032L04	P229L02
四百万里	[337a]	P08L14	P032L04	P229L03
者不取正覚	—	P08L14	P032L04	P229L03
[第二十九願]	[337b]	P08L15	P032L06	P229L04
設我得仏國中菩薩若	—	P08L15	P032L06	P229L04
受説経法諷誦持説	[337b]	P08L15	P032L06	P229L04
[諷誦]	[337b]	P08L15	P032L06	P229L04
而不得	—	P08L15	P032L07	P229L05
弁才智慧	[338a]	P08L15	P032L07	P229L05
者不取正覚	—	P08L15	P032L07	P229L05
[第三十願]	[338a]	P09L01	P033L08	P229L06

設我得仏	—	P09L01	P033L08	P229L06
國中菩薩	[338a]	P09L01	P033L08	P229L06
智慧弁才	[338b]	P09L01	P033L08	P229L06
若可限量	[338b]	P09L01	P033L08	P229L06
若不取正覺	—	P09L01	P033L08	P229L06
[第三十一願]	[338b]	P09L02	P033L02	P229L08
設我得仏	—	P09L02	P033L02	P229L08
国土清淨	[338b]	P09L02	P033L02	P229L08
皆悉	—	P09L02	P033L02	P229L08
照見十方	[338b]	P09L02	P033L02	P229L08
一切無量無數不可思議	—	P09L02	P033L02	P229L08
諸仏世界	[339a]	P09L02	P033L03	P229L09
猶如明鏡	[339a]	P09L02	P033L03	P229L09
觀其面像若不爾者不取正覺	—	P09L02	P033L03	P229L09
[第三十二願]	[339b]	P09L04	P033L05	P229L11
設我得仏	—	P09L04	P033L05	P229L11
自地已上	[339b]	P09L04	P033L05	P229L11
至于虛空宮殿	—	P09L04	P033L05	P229L11
樓	[339b]	P09L04	P033L05	P229L11
觀	—	P09L04	P033L05	P229L11
池流	[339b]	P09L04	P033L05	P229L11
華樹	[339b]	P09L04	P033L06	P229L11
國中所有一切方物皆以	—	P09L04	P033L06	P229L12
無量雜寶	[339b]	P09L04	P033L06	P229L12
百千種香	[339b]	P09L04	P033L07	P229L12
而共合成嚴飾	—	P09L05	P033L07	P229L12
奇妙	[339b]	P09L05	P033L07	P229L13
超諸人天	[339b]	P09L05	P033L07	P229L13
其香	—	P09L05	P033L07	P229L13
普熏十方世界	[339b]	P09L05	P033L08	P229L13
菩薩	[340a]	P09L05	P033L08	P229L14
聞者皆修	—	P09L05	P033L08	P229L14
仏行	[340a]	P09L05	P033L08	P229L14
若不如是者不取正覺	—	P09L05	P033L08	P229L14
[第三十三願]	[340a]	P09L07	P034L02	P229L16
設我得仏	—	P09L07	P034L02	P229L16
十方無量	[340a]	P09L07	P034L02	P229L16
不可思議諸仏世界	—	P09L07	P034L02	P229L16
衆生之類	[340a]	P09L07	P034L02	P229L16
蒙我光明	[340a]	P09L07	P034L03	P229L16
触其身者	—	P09L07	P034L03	P230L01
身心柔軟	[340b]	P09L07	P034L03	P230L01
超過人天	[340b]	P09L07	P034L03	P230L01
若不爾者不取正覺	—	P09L07	P034L04	P230L01
[第三十四願]	[341b]	P09L09	P034L05	P230L03



設我得仏十方無量不可思議	—	P09L09	P034L05	P230L03
諸仏世界	[341b]	P09L09	P034L05	P230L03
衆生之類	[341b]	P09L09	P034L05	P230L03
聞我名字	[342a]	P09L09	P034L06	P230L03
不得菩薩	—	P09L09	P034L06	P230L04
無生法忍	[342b]	P09L09	P034L06	P230L04
諸深總持者不取正覺	—	P09L09	P034L06	P230L04
[第三十五願]	[343a]	P09L11	P034L08	P230L05
設我得仏十方無量不可思議諸仏世界其有女人	—	P09L11	P034L08	P230L05
聞我名字	[343b]	P09L11	P035L01	P230L06
歡喜信樂	[343b]	P09L11	P035L01	P230L06
發菩提心	[343b]	P09L11	P035L01	P230L06
厭惡女身	[343b]	P09L11	P035L01	P230L06
壽終之後	[343b]	P09L11	P035L02	P230L06
復為女像	[344a]	P09L12	P035L02	P230L07
者不取正覺	—	P09L12	P035L02	P230L07
[第三十六願]	[344b]	P09L13	P035L03	P230L08
設我得仏十方無量不可思議	—	P09L13	P035L03	P230L08
諸仏世界	[344b]	P09L13	P035L03	P230L08
諸菩薩衆	—	P09L13	P035L03	P230L08
聞我名字	[344b]	P09L13	P035L04	P230L09
壽終之後常修梵行	[344b]	P09L13	P035L04	P230L09
至成仏道若不爾者不取正覺	—	P09L13	P035L04	P230L09
[第三十七願]	[345b]	P09L15	P035L06	P230L11
設我得仏十方無量不可思議諸仏世界諸天人人民	—	P09L15	P035L06	P230L11
聞我名字	[345b]	P09L15	P035L07	P230L12
五体投地	—	P09L15	P035L07	P230L12
稽首作礼	[345b]	P09L15	P035L07	P230L12
歡喜信樂	[345b]	P09L15	P035L08	P230L12
修菩薩行	[345b]	P10L01	P035L08	P230L12
諸天世人	—	P10L01	P035L08	P230L13
莫不致敬若不爾者不取正覺	[346a]	P10L02	P036L02	P230L15
[第三十八願]	—	P10L02	P036L02	P230L15
設我得仏国中人天	[346a]	P10L02	P036L02	P230L15
欲得衣服	[346a]	P10L02	P036L02	P230L15
隨念即至	—	P10L02	P036L02	P230L16
如	[346a]	P10L02	P036L03	P230L16
仏所贊	[346b]	P10L02	P036L03	P230L16
応法妙服	—	P10L02	P036L03	P230L16
自然在身若有	[346b]	P10L02	P036L03	P230L16
裁縫摺染浣濯	—	P10L02	P036L04	P231L01
者不取正覺	[346b]	P10L04	P036L05	P231L02
[第三十九願]	—	P10L04	P036L05	P231L02
設我得仏国中人天所受快樂不如	[346b]	P10L04	P036L05	P231L02
漏尽比丘	—	P10L04	P036L05	P231L02

者不取正覺	—	P10L04	P036L06	P231L03
[第四十願]	[347a]	P10L05	P036L07	P231L04
設我得仏	—	P10L05	P036L07	P231L04
國中菩薩	[347a]	P10L05	P036L07	P231L04
隨意欲見	[347a]	P10L05	P036L07	P231L04
十方無量	—	P10L05	P036L07	P231L04
嚴淨仏土	[347a]	P10L05	P036L07	P231L04
応時如願於	—	P10L05	P036L08	P231L05
宝樹中	[347a]	P10L05	P036L08	P231L05
皆悉	—	P10L05	P036L08	P231L05
照見	[347b]	P10L05	P036L08	P231L05
猶如明鏡	[347b]	P10L05	P036L08	P231L06
觀其面像若不爾者不取正覺	—	P10L05	P037L01	P231L06
[第四十一願]	[347b]	P10L07	P037L02	P231L08
設我得仏他方国土	—	P10L07	P037L02	P231L08
諸菩薩衆	[347b]	P10L07	P037L02	P231L08
聞我名字至于得仏	—	P10L07	P037L02	P231L08
諸根闕陋不具足者	[347b]	P10L07	P037L03	P231L09
不取正覺	—	P10L07	P037L03	P231L09
[第四十二願]	[348a]	P10L08	P037L04	P231L10
設我得仏他方国土	—	P10L08	P037L04	P231L10
諸菩薩衆	[348a]	P10L08	P037L04	P231L10
聞我名字皆悉逮得	—	P10L08	P037L04	P231L10
清淨解脫三昧	[348a]	P10L08	P037L05	P231L11
住是三昧	—	P10L08	P037L05	P231L11
一発意頃	[348b]	P10L08	P037L05	P231L11
供養	[348b]	P10L08	P037L06	P231L12
無量不可思議諸仏世尊而	—	P10L08	P037L06	P231L12
不失定意	[348b]	P10L09	P037L06	P231L12
若不爾者不取正覺	—	P10L09	P037L07	P231L12
[第四十三願]	[348b]	P10L10	P037L08	P231L14
設我得仏他方国土	—	P10L10	P037L08	P231L14
諸菩薩衆	[348b]	P10L10	P037L08	P231L14
聞我名字壽終之後	—	P10L10	P037L08	P231L14
生尊貴家	[349a]	P10L10	P038L01	P231L15
若不爾者不取正覺	—	P10L10	P038L01	P231L15
[第四十四願]	[349a]	P10L11	P038L02	P231L16
設我得仏他方国土	—	P10L11	P038L02	P231L16
諸菩薩衆	[349a]	P10L11	P038L02	P231L16
聞我名字	—	P10L11	P038L02	P231L16
歡喜踊躍	[349b]	P10L11	P038L02	P232L01
修菩薩行	[349b]	P10L11	P038L03	P232L01
具足德本若不爾者不取正覺	—	P10L11	P038L03	P232L01
[第四十五願]	[349b]	P10L12	P038L05	P232L03
設我得仏他方国土	—	P10L12	P038L05	P232L03

諸菩薩衆	[350a]	P10L12	P038L05	P232L03
聞我名字皆悉逮得	—	P10L12	P038L05	P232L03
普等三昧	[350a]	P10L12	P038L06	P232L04
住是三昧至于成仏常見無量不可思議一切諸仏 若不爾者不取正覺	—	P10L12	P038L06	P232L04
[第四十六願]	[350a]	P10L14	P039L01	P232L06
設我得仏國中菩薩隨其志願	—	P10L14	P039L01	P232L06
所欲聞法	[350b]	P10L14	P039L01	P232L06
自然得聞	[350b]	P10L14	P039L01	P232L07
若不爾者不取正覺	—	P10L14	P039L02	P232L07
[第四十七願]	[350b]	P10L15	P039L03	P232L08
設我得仏他方国土	—	P10L15	P039L03	P232L08
諸菩薩衆	[351a]	P10L15	P039L03	P232L08
聞我名字不即得至	—	P10L15	P039L03	P232L08
不退転	[351a]	P10L15	P039L04	P232L09
者不取正覺	—	P10L15	P039L04	P232L09
[第四十八願]	[351a]	P11L01	P039L05	P232L10
設我得仏他方国土	—	P11L01	P039L05	P232L10
諸菩薩衆	[351a]	P11L01	P039L05	P232L10
聞我名字不即得至	—	P11L01	P039L05	P232L10
第一第二第三法忍	[351a]	P11L01	P039L06	P232L11
於諸仏法	[351b]	P11L01	P039L06	P232L11
不能即得不退転者不取正覺	—	P11L01	P039L06	P232L11
仏告阿難 [爾時法蔵比丘]	[352b]	P11L03	P039L08	P232L13
爾時	[352b]	P11L03	P039L08	P232L13
法蔵比丘説此願已	—	P11L03	P039L08	P232L13
而説頌曰	[352b]	P11L03	P039L08	P232L13
我建	—	P11L04	P040L02	P233L01
超世願	[352b]	P11L04	P040L02	P233L01
必至	—	P11L04	P040L02	P233L01
無上道	[353a]	P11L04	P040L02	P233L01
斯願不満足	—	P11L04	P040L02	P233L02
誓不成正覺	[353a]	P11L04	P040L02	P233L02
我於無量劫	[353b]	P11L04	P040L03	P233L03
不為	—	P11L04	P040L03	P233L03
大施主	[353b]	P11L04	P040L03	P233L03
普濟	—	P11L05	P040L03	P233L04
諸貧苦	[353b]	P11L05	P040L03	P233L04
誓不成正覺 我至成仏道	—	P11L05	P040L03	P233L04
名声	[354a]	P11L05	P040L04	P233L05
超十方	[354a]	P11L05	P040L04	P233L05
究竟	[354b]	P11L05	P040L04	P233L06
靡所聞 誓不成正覺 離欲	—	P11L05	P040L04	P233L06
深正念	[354b]	P11L06	P040L05	P233L07
淨慧	[355a]	P11L06	P040L05	P233L07

修梵行	[355a]	P11L06	P040L05	P233L07
志求	[355a]	P11L06	P040L05	P233L08
無上道為	—	P11L06	P040L05	P233L08
諸天人師	[355a]	P11L06	P040L05	P233L08
神力	[355a]	P11L06	P040L06	P233L09
演大光 普照無際上	—	P11L06	P040L06	P233L09
消除	[355a]	P11L07	P040L06	P233L10
三垢冥	[355a]	P11L07	P040L06	P233L10
廣濟衆厄難	—	P11L07	P040L06	P233L10
開彼	[355b]	P11L07	P040L07	P233L11
智慧眼 滅此昏盲闇	—	P11L07	P040L07	P233L11
閉塞	[355b]	P11L07	P040L07	P233L12
諸惡道 通達	—	P11L07	P040L07	P233L12
善趣門	[355b]	P11L07	P040L07	P233L12
功祚	[355b]	P11L08	P040L08	P233L13
成滿足	—	P11L08	P040L08	P233L13
威曜朗十方	[355b]	P11L08	P040L08	P233L13
日月戢重暉	[355b]	P11L08	P040L08	P233L14
天光隱不現	[356a]	P11L08	P040L08	P233L14
為衆開法藏	[356a]	P11L08	P041L01	P233L15
廣施	—	P11L08	P041L01	P233L15
功德寶	[356a]	P11L08	P041L01	P233L15
常於大衆中 說法	—	P11L09	P041L01	P233L16
師子吼	[356a]	P11L09	P041L01	P233L16
供養	[356a]	P11L09	P041L02	P234L01
一切仏 具足衆德本	—	P11L09	P041L02	P234L01
願慧	[356b]	P11L09	P041L02	P234L02
悉成滿得為	—	P11L09	P041L02	P234L02
三界雄	[356b]	P11L09	P041L02	P234L02
如仏	[356b]	P11L10	P041L03	P234L03
無礙智 通達靡不照 願我	—	P11L10	P041L03	P234L03
功慧力	[356b]	P11L10	P041L03	P234L04
等此最勝尊	—	P11L10	P041L03	P234L04
斯願若剋果	[356b]	P11L10	P041L04	P234L05
大千	[356b]	P11L10	P041L04	P234L05
応	—	P11L10	P041L04	P234L05
感動	[356b]	P11L10	P041L04	P234L05
虛空諸天人 当雨	—	P11L11	P041L04	P234L06
珍妙華	[356b]	P11L11	P041L04	P234L06
仏告阿難法藏比丘說此頌已	—	P11L12	P041L05	P234L07
応時	[357a]	P11L12	P041L05	P234L07
普地	—	P11L12	P041L05	P234L07
六種震動	[357a]	P11L12	P041L05	P234L08
天雨妙華	[357a]	P11L12	P041L06	P234L08
以散其上	[357a]	P11L12	P041L06	P234L08

自然音楽	[357a]	P11L12	P041L06	P234L08
空中讃言決定必成無上正覚	—	P11L12	P041L06	P234L09
於是	[357a]	P11L13	P041L07	P234L09
法蔵比丘	—	P11L13	P041L07	P234L10
具足修滿	[357b]	P11L13	P041L07	P234L10
如是	[357b]	P11L13	P041L08	P234L10
大願	[357b]	P11L13	P041L08	P234L10
誠諦不虛	[357b]	P11L13	P041L08	P234L10
超出世間	[357b]	P11L13	P041L08	P234L10
深楽寂滅	[357b]	P11L13	P041L08	P234L11
阿難	[357b]	P11L13	P042L01	P234L11
時彼比丘於	—	P11L13	P042L01	P234L11
其仏所	[358a]	P11L14	P042L01	P234L11
諸天	—	P11L14	P042L01	P234L11
魔	[358a]	P11L14	P042L01	P234L12
梵	[358a]	P11L14	P042L01	P234L12
竜神	[358a]	P11L14	P042L01	P234L12
八部	[358a]	P11L14	P042L02	P234L12
大衆之中	—	P11L14	P042L02	P234L12
発斯弘誓	[358a]	P11L14	P042L02	P234L12
建此願已	[358a]	P11L14	P042L02	P234L12
一向專志	[358a]	P11L14	P042L02	P234L13
莊嚴妙土	[358a]	P11L14	P042L03	P234L13
所修仏国	[358b]	P11L14	P042L03	P234L13
恢廓宏大	[358b]	P11L15	P042L03	P234L13
超勝独妙	[358b]	P11L15	P042L03	P234L14
建立常然	[358b]	P11L15	P042L04	P234L14
無衰無變	[358b]	P11L15	P042L04	P234L14
於不可思議兆載永劫	[359a]	P11L15	P042L04	P234L14
積植菩薩	—	P11L15	P042L05	P234L15
無量德行	[359b]	P11L15	P042L05	P234L15
不生	[359b]	P11L15	P042L05	P234L15
欲覺	[359b]	P11L15	P042L05	P234L15
瞋覺害覺不起	—	P12L01	P042L05	P234L15
欲想	[359b]	P12L01	P042L06	P234L15
瞋想害想	—	P12L01	P042L06	P234L15
不著	[360a]	P12L01	P042L06	P235L01
色声香味触法	—	P12L01	P042L06	P235L01
忍力成就不計衆苦	[360a]	P12L01	P042L06	P235L01
少欲知足	[360a]	P12L01	P042L07	P235L02
無染患痴	[360b]	P12L01	P042L07	P235L02
三昧	[360b]	P12L02	P042L07	P235L02
常寂智慧無礙	—	P12L02	P042L08	P235L02
無有	[360b]	P12L02	P042L08	P235L02
虚偽諂曲	[360b]	P12L02	P042L08	P235L02

之心	—	P12L02	P042L08	P235L03
和顏	[361a]	P12L02	P042L08	P235L03
愛語先意承問	[361a]	P12L02	P042L08	P235L03
勇猛	[361a]	P12L02	P043L01	P235L03
精進	—	P12L02	P043L01	P235L03
志願無倦	[361a]	P12L02	P043L01	P235L04
專求清白之法	[361a]	P12L02	P043L01	P235L04
以惠利群生	[361b]	P12L03	P043L02	P235L04
恭敬三宝	[361b]	P12L03	P043L02	P235L04
奉事師長	[361b]	P12L03	P043L02	P235L05
以	—	P12L03	P043L02	P235L05
大莊嚴	[361b]	P12L03	P043L02	P235L05
具足衆行	[361b]	P12L03	P043L03	P235L05
令諸	[361b]	P12L03	P043L03	P235L05
衆生功德成就	—	P12L03	P043L03	P235L05
住空無相	[361b]	P12L03	P043L03	P235L06
無願之法	—	P12L03	P043L04	P235L06
無作無起	[361b]	P12L04	P043L04	P235L06
觀法如化	[361b]	P12L04	P043L04	P235L06
遠離	—	P12L04	P043L04	P235L07
龜言	[362a]	P12L04	P043L04	P235L07
自害害彼彼此俱害	[362a]	P12L04	P043L05	P235L07
修習	—	P12L04	P043L05	P235L08
善語	[362a]	P12L04	P043L05	P235L07
自利利人人我兼利	—	P12L04	P043L05	P235L07
棄國	[362a]	P12L04	P043L06	P235L08
捐王	—	P12L04	P043L06	P235L08
絕去財色	[362a]	P12L05	P043L06	P235L08
自行六波羅蜜	—	P12L05	P043L06	P235L08
教人令行	[362b]	P12L05	P043L07	P235L09
無央數劫	[362b]	P12L05	P043L07	P235L09
積功累德	[362b]	P12L05	P043L07	P235L09
[隨其]	[362b]	P12L05	P043L07	P235L09
隨其生處	[362b]	P12L05	P043L07	P235L09
在意所欲	[362b]	P12L05	P043L07	P235L10
無量寶藏自然發心	[363a]	P12L05	P043L08	P235L10
教化安立無數衆生住於無上正真之道	—	P12L06	P043L08	P235L10
或為長者	[363a]	P12L06	P044L01	P235L11
[長者]	[363a]	P12L06	P044L01	P235L11
居士	[363a]	P12L06	P044L01	P235L11
豪姓	[363b]	P12L06	P044L01	P235L11
尊貴	[363b]	P12L06	P044L02	P235L11
或為	—	P12L06	P044L02	P235L11
利利國君	[363b]	P12L06	P044L02	P235L12
轉輪聖帝	[363b]	P12L06	P044L02	P235L12

或為	—	P12L07	P044L02	P235L12
六欲天主	[363b]	P12L07	P044L02	P235L12
乃至梵王	[363b]	P12L07	P044L03	P235L12
常以	—	P12L07	P044L03	P235L12
四事	[364a]	P12L07	P044L03	P235L12
供養恭敬	—	P12L07	P044L03	P235L13
一切諸仏	[364a]	P12L07	P044L03	P235L13
如是功德不可稱説	—	P12L07	P044L04	P235L13
口氣香潔	[364a]	P12L07	P044L04	P235L14
如	—	P12L07	P044L04	P235L14
優曇羅華	[364a]	P12L07	P044L04	P235L14
身諸毛孔出	—	P12L08	P044L05	P235L14
栴檀香	[364a]	P12L08	P044L05	P235L14
其香	[364b]	P12L08	P044L05	P235L15
普熏無量世界	—	P12L08	P044L05	P235L15
容色	[364b]	P12L08	P044L06	P235L15
端正相好殊妙	—	P12L08	P044L06	P235L15
其手常出	[364b]	P12L08	P044L06	P235L16
無尽之寶衣服飲食珍妙華香	—	P12L08	P044L06	P235L16
繒蓋幢幡	[364b]	P12L09	P044L07	P235L16
莊嚴之具如是等事超	—	P12L09	P044L07	P235L16
諸天人	[364b]	P12L09	P044L08	P236L01
於一切法而得自在	[364b]	P12L09	P044L08	P236L01
阿難白仏法藏菩薩	—	P12L10	P045L01	P236L03
為已成仏	[365a]	P12L10	P045L01	P236L03
而取滅度為未成仏為今現在仏告阿難法藏菩薩	—	P12L10	P045L01	P236L03
今已成仏現在西方	[365a]	P12L10	P045L02	P236L05
去此	[365a]	P12L11	P045L03	P236L05
十萬億刹	[365a]	P12L11	P045L03	P236L05
其仏世界	—	P12L11	P045L03	P236L06
名曰安樂	[366a]	P12L11	P045L03	P236L06
阿難又問其仏成道已來為逕幾時仏言成仏已來	—	P12L11	P045L04	P236L06
凡歷十劫	[366a]	P12L12	P045L05	P236L08
其仏国土	—	P12L12	P045L05	P236L08
自然七寶	[367b]	P12L12	P045L05	P236L08
[自然]	[368a]	P12L12	P045L05	P236L08
金	[368a]	P12L12	P045L06	P236L08
銀	[368a]	P12L12	P045L06	P236L08
瑠璃	[368a]	P12L12	P045L06	P236L08
珊瑚	[368a]	P12L12	P045L06	P236L08
琥珀	[368a]	P12L12	P045L06	P236L08
砗磲	[368a]	P12L12	P045L06	P236L09
碼瑙	[368b]	P12L12	P045L06	P236L09
合成為地	[368b]	P12L12	P045L06	P236L09
恢廓曠蕩	[368b]	P12L12	P045L07	P236L09

不可限極悉相	—	P12L12	P045L07	P236L09
雜廁	[368b]	P12L13	P045L07	P236L10
轉相入間	—	P12L13	P045L07	P236L10
光赫焜耀	[369a]	P12L13	P045L07	P236L10
微妙	—	P12L13	P045L08	P236L10
奇麗	[369a]	P12L13	P045L08	P236L10
清淨莊嚴	[369a]	P12L13	P045L08	P236L10
超踰	[369a]	P12L13	P045L08	P236L11
十方一切世界	[369a]	P12L13	P045L08	P236L11
衆寶	—	P12L13	P046L01	P236L11
中精	[369a]	P12L13	P046L01	P236L11
其寶	—	P12L13	P046L01	P236L11
猶如第六天寶	[369a]	P12L13	P046L01	P236L11
又其国土	[369a]	P12L14	P046L01	P236L12
無	—	P12L14	P046L02	P236L12
須弥山	[369a]	P12L14	P046L02	P236L12
及	—	P12L14	P046L02	P236L12
金剛	[369b]	P12L14	P046L02	P236L12
鉄围一切諸山亦無	—	P12L14	P046L02	P236L12
大海小海	[369b]	P12L14	P046L02	P236L12
溪渠井谷	[369b]	P12L14	P046L03	P236L13
仏神力故	—	P12L14	P046L03	P236L13
欲見則現	[370a]	P12L14	P046L03	P236L13
亦無地獄	[370a]	P12L15	P046L03	P236L13
餓鬼畜生	—	P12L15	P046L04	P236L14
諸難之趣	[370a]	P12L15	P046L04	P236L14
亦無四時春夏秋冬夏不寒不熱常和	—	P12L15	P046L04	P236L14
調適	[370a]	P12L15	P046L05	P236L15
爾時阿難白仏言世尊若彼国土無須弥山其四天王及忉利天依何而住	—	P12L15	P046L05	P236L15
仏語阿難第三	[370a]	P13L01	P046L07	P236L16
熅天	[370a]	P13L01	P046L07	P237L01
乃至	—	P13L01	P046L07	P237L01
色究竟天	[370a]	P13L01	P046L07	P237L01
皆依何住阿難白仏	—	P13L01	P046L08	P237L01
行業果報不可思議	[370a]	P13L02	P046L08	P237L02
仏語阿難行業果報不可思議諸仏世界亦不可思議	—	P13L02	P047L01	P237L02
其諸衆生功德善力	[370b]	P13L02	P047L02	P237L03
住行業之地	[370b]	P13L03	P047L02	P237L04
故能爾耳	[370b]	P13L03	P047L03	P237L04
阿難白仏我不疑此法但為	—	P13L03	P047L03	P237L04
將來	[370b]	P13L03	P047L03	P237L05
衆生欲除其疑惑故問斯義仏告阿難無量寿仏	—	P13L03	P047L04	P237L05
威神光明	[370b]	P13L05	P047L05	P237L07



最尊	—	P13L05	P047L05	P237L07
第一	[371a]	P13L05	P047L05	P237L07
諸仏光明	[371a]	P13L05	P047L05	P237L07
所不能及	[371a]	P13L05	P047L06	P237L08
或有仏光	[371a]	P13L05	P047L06	P237L08
照百仏世界	[371b]	P13L05	P047L06	P237L08
或千仏世界	—	P13L05	P047L06	P237L08
取要言之	[371b]	P13L06	P047L07	P237L09
乃照東方恒沙仏刹南西北方四	—	P13L06	P047L07	P237L09
維	[371b]	P13L06	P047L08	P237L09
上下亦復如是或有仏光照于七尺或照一	—	P13L06	P047L08	P237L09
由旬	[371b]	P13L06	P048L01	P237L10
二三四五由旬如是轉倍乃至照於	—	P13L07	P048L01	P237L10
一仏刹土	[371b]	P13L07	P048L02	P237L11
是故	[371b]	P13L07	P048L02	P237L11
無量寿仏	—	P13L07	P048L02	P237L12
号	[373a]	P13L07	P048L02	P237L14
無量光	[372a]	P13L07	P048L02	P237L12
仏	—	P13L07	P048L03	P237L12
無辺	[372a]	P13L07	P048L03	P237L12
光仏	—	P13L07	P048L03	P237L12
無礙	[372a]	P13L07	P048L03	P237L12
光仏	—	P13L07	P048L03	P237L12
無対	[372a]	P13L08	P048L03	P237L12
光仏	—	P13L08	P048L03	P237L12
焰王	[372b]	P13L01	P048L03	P237L12
光仏	—	P13L08	P048L03	P237L12
清淨	[372b]	P13L08	P048L04	P237L12
光仏	—	P13L08	P048L04	P237L13
歡喜	[372b]	P13L08	P048L04	P237L13
光仏	—	P13L08	P048L04	P237L13
智慧	[372b]	P13L08	P048L04	P237L13
光仏	—	P13L08	P048L04	P237L13
不斷	[373a]	P13L08	P048L04	P237L13
光仏	—	P13L08	P048L04	P237L13
難思	[373b]	P13L08	P048L05	P237L13
光仏	—	P13L08	P048L05	P237L13
無称	[373b]	P13L08	P048L05	P237L13
光仏	—	P13L08	P048L05	P237L13
超日月	[373b]	P13L08	P048L05	P237L13
光仏	—	P13L08	P048L05	P237L13
具有衆生	[373b]	P13L09	P048L05	P237L14
遇斯光	[373b]	P13L09	P048L06	P237L14
者	—	P13L09	P048L06	P237L14
三垢消滅	[373b]	P13L09	P048L06	P237L14

身意柔軟	[373b]	P13L09	P048L06	P237L14
歡喜踴躍	[374a]	P13L09	P048L06	P237L15
善心生焉	[374a]	P13L09	P048L06	P237L15
若在	—	P13L09	P048L07	P237L15
三塗	[374a]	P13L09	P048L07	P237L15
勤苦之處	—	P13L09	P048L07	P237L15
見此光明	[374a]	P13L09	P048L07	P237L15
皆得休息	[374b]	P13L10	P048L07	P237L16
無復苦惱	—	P13L10	P048L08	P237L16
壽終之後	[374b]	P13L10	P048L08	P237L16
皆蒙解脫	[374b]	P13L10	P048L08	P237L16
無量壽仏	[375a]	P13L10	P048L08	P237L16
光明	—	P13L10	P049L01	P238L01
顯赫	[375a]	P13L10	P049L01	P238L01
照耀十方諸仏国土	—	P13L10	P049L01	P238L01
莫不聞焉	[375a]	P13L10	P049L01	P238L01
不但我今	—	P13L10	P049L02	P238L01
稱其光明	[375a]	P13L11	P049L02	P238L02
一切諸仏声聞縁覚諸菩薩衆	[375a]	P13L11	P049L02	P238L02
咸共歎譽亦復如是若有衆生聞其光明	—	P13L11	P049L03	P238L03
威神功德	[375a]	P13L11	P049L04	P238L04
日夜	—	P13L12	P049L04	P238L04
稱説	[375a]	P13L12	P049L04	P238L04
至心不斷	[375a]	P13L12	P049L04	P238L04
隨意所願得生其国	[375a]	P13L12	P049L04	P238L04
為諸	—	P13L12	P049L05	P238L05
菩薩声聞大衆	[375a]	P13L12	P049L05	P238L05
所共歎譽稱	—	P13L12	P049L05	P238L05
其功德	[375a]	P13L12	P049L06	P238L06
至其然後	[375b]	P13L12	P049L06	P238L06
得仏道時曾為十方諸仏菩薩	—	P13L13	P049L06	P238L06
歎其光明	[375b]	P13L13	P049L07	P238L07
亦如今也仏言我說無量壽仏光明威神	—	P13L13	P049L07	P238L07
巍巍	[375b]	P13L13	P049L08	P238L08
殊妙	—	P13L13	P049L08	P238L08
晝夜一劫尚未能尽	[375b]	P13L14	P049L08	P238L08
仏語阿難又無量壽仏寿命長久不可稱計汝	—	P13L15	P050L02	P238L10
寧	[375b]	P13L15	P050L03	P238L11
知乎	—	P13L15	P050L03	P238L11
假使十方世界	[375b]	P13L15	P050L03	P238L11
無量衆生	[375b]	P13L15	P050L03	P238L11
皆得人身	[375b]	P13L15	P050L03	P238L11
悉令成就声聞縁覚	—	P13L15	P050L04	P238L12
都	[376a]	P14L01	P050L04	P238L12
共集会	—	P14L01	P050L04	P238L12

禪思一心	[376a]	P14L01	P050L04	P238L12
竭其智力於百千萬劫悉共推算計其壽命長遠之數不能窮盡知其限極	—	P14L01	P050L05	P238L12
聲聞菩薩	[376a]	P14L02	P050L06	P238L14
天人之衆壽命	—	P14L02	P050L06	P238L14
長短	[376a]	P14L02	P050L07	P238L15
亦復如是非算數譬喩所能知也又聲聞菩薩其數難量不可稱說	—	P14L02	P050L07	P238L15
神智	[376a]	P14L03	P040L08	P238L16
洞達	[376a]	P14L03	P051L01	P238L16
威力自在	[376a]	P14L03	P051L01	P238L16
能於掌中	[376b]	P14L03	P051L01	P239L01
持一切世界	—	P14L03	P051L01	P239L01
仏語阿難	[376b]	P14L04	P051L02	P239L02
彼仏	—	P14L04	P051L02	P239L02
初會	[376b]	P14L04	P051L02	P239L02
聲聞衆數不可稱計菩薩亦然	—	P14L04	P051L02	P239L02
如今大目犍連	[376b]	P14L04	P051L03	P239L03
百千萬億無量無數於阿僧祇那由他劫	—	P14L04	P051L03	P239L03
乃至滅度	[377a]	P14L05	P051L04	P239L04
悉共	—	P14L05	P051L04	P239L04
計校	[377a]	P14L05	P051L04	P239L04
不能究了	[377a]	P14L05	P051L04	P239L04
多少	[377a]	P14L05	P051L05	P239L04
之數譬如大海深広無量假使有人拆其一毛以為百分以一分毛	—	P14L05	P051L05	P239L04
沾取	[377a]	P14L06	P051L06	P239L06
一	—	P14L06	P051L06	P239L06
滂	[377a]	P14L06	P051L07	P239L06
於意云何其所滂者於彼大海何所為多阿難白仏彼所水比於大海多少之量非	—	P14L06	P051L07	P239L06
巧曆算數	[377a]	P14L07	P052L01	P239L09
言辭譬類所能知也仏語阿難如目連等於百千萬億那由他劫計彼初會聲聞菩薩所知數者猶如一滂其所不知如大海水	—	P14L07	P052L01	P239L09
又其国土七宝諸樹周滿世界	—	P14L09	P052L05	P239L12
金樹	[377b]	P14L09	P052L05	P239L12
銀樹瑠璃樹	—	P14L09	P052L05	P239L12
玻瓈	[377b]	P14L09	P052L06	P239L12
樹珊瑚樹碼碼樹磤磤樹	—	P14L09	P052L06	P239L13
或有二宝三宝	[378a]	P14L09	P052L06	P239L13
乃至七宝輒共合成	—	P14L10	P052L07	P239L13
或有金樹銀葉華果	[378a]	P14L10	P052L07	P239L14
或有銀樹金葉華果或瑠璃樹玻瓈為葉華果亦然	—	P14L10	P052L08	P239L14
或水精樹	[378a]	P14L11	P053L01	P239L15

瑠璃為葉華果亦然或珊瑚樹碼礪為葉華果亦然	—	P14L11	P053L01	P239L16
或碼礪樹瑠璃為葉	[378a]	P14L11	P053L02	P240L01
華果亦然或碑礪樹	—	P14L11	P053L03	P240L01
紫宝為葉	[378a]	P14L12	P053L03	P240L02
華果亦然	—	P14L12	P053L03	P240L02
或有宝樹	[378b]	P14L12	P053L04	P240L02
紫金	[378b]	P14L12	P053L04	P240L02
為本	[378b]	P14L12	P053L04	P240L03
白銀為茎瑠璃為枝水精為条珊瑚為葉碼礪為華碑礪	—	P14L12	P053L04	P240L03
為実	[378b]	P14L13	P053L05	P240L04
或有宝樹白銀為本瑠璃為茎水精為枝珊瑚為条碼礪為葉碑礪為華紫金為実或有宝樹瑠璃為本水精為茎珊瑚為枝碼礪為条碑礪為葉紫金為華白銀為実或有宝樹水精為本珊瑚為茎碼礪為枝碑礪為条紫金為葉白銀為華瑠璃為実或有宝樹珊瑚為本碼礪為茎碑礪為枝紫金為条白銀為葉瑠璃為華水精為実或有宝樹碼礪為本碑礪為枝紫金為条白銀為葉瑠璃為華水精為実或有宝樹碼礪為為茎紫金為枝白銀為条瑠璃為葉水精為華珊瑚為実或有宝樹碑礪為本紫金為茎白銀為枝瑠璃為条水精為葉珊瑚為華碼礪為実	—	P14L13	P053L06	P240L04
此諸宝樹	[378b]	P15L03	P055L01	P240L14
行行相值	[379a]	P15L03	P055L01	P240L14
茎茎相望枝枝	—	P15L03	P055L01	P240L14
相準	[379a]	P15L03	P055L02	P240L14
葉葉	—	P15L03	P055L02	P240L14
相向	[379a]	P15L03	P055L02	P240L15
華華相順実実相当	—	P15L03	P055L02	P240L15
采色	[379a]	P15L04	P055L02	P240L15
光耀	—	P15L04	P055L03	P240L15
不可勝視	[379a]	P15L04	P055L03	P240L15
清風時發	—	P15L04	P055L03	P240L15
出五音声	[379a]	P15L04	P055L03	P240L16
[五音]	[379a]	P15L04	P055L03	P240L16
[音声]	[379b]	P15L04	P055L03	P240L16
微妙	—	P15L04	P055L03	P240L16
宮商	[379b]	P15L04	P055L04	P240L16
自然	—	P15L04	P055L04	P240L16
相和	[379b]	P15L04	P055L04	P240L16
又無量寿仏其	—	P15L05	P055L05	P241L01
道場樹	[379b]	P15L05	P055L05	P241L01
高	—	P15L05	P055L05	P241L01
四百里	[379b]	P15L05	P055L05	P241L01
其本周圍	[379b]	P15L05	P055L05	P241L01

五十由旬	[379b]	P15L05	P055L06	P241L01
枝葉四布	—	P15L05	P055L06	P241L02
二十万里	[380a]	P15L05	P055L06	P241L02
一切衆宝	[380a]	P15L05	P055L06	P241L02
自然合成	[380a]	P15L05	P055L07	P241L02
以	—	P15L06	P055L07	P241L03
月光摩尼持海輪宝	[380a]	P15L06	P055L07	P241L03
衆宝之王	[380b]	P15L06	P055L07	P241L03
而莊嚴之周匝条間垂宝瓔珞百千万色	—	P15L06	P055L08	P241L03
種種異变	[380b]	P15L06	P055L08	P241L04
無量光耀照耀無極珍妙	—	P15L06	P056L01	P241L04
宝網	[380b]	P15L07	P056L01	P241L05
羅覆其上一切莊嚴	—	P15L07	P056L01	P241L05
隨應而現	[380b]	P15L07	P056L02	P241L05
微風	—	P15L07	P056L02	P241L06
徐動	[380b]	P15L07	P056L02	P241L06
吹諸枝葉演出無量妙法音声其声流布	—	P15L07	P056L02	P241L06
徧諸仏国	[380b]	P15L08	P056L03	P241L07
其聞音者	[380b]	P15L08	P056L04	P241L07
得	—	P15L08	P056L04	P241L08
深法忍	[381a]	P15L08	P056L04	P241L07
住不退転至成仏道	—	P15L08	P056L04	P241L08
耳根清徹	[381a]	P15L08	P056L04	P241L08
不遭	—	P15L08	P056L05	P241L08
苦患	[381a]	P15L08	P056L05	P241L08
目觀其色耳聞其音鼻知其香	—	P15L08	P056L05	P241L09
舌嘗其味	[381a]	P15L09	P056L06	P241L09
身触其光心以法縁一切皆得	—	P15L09	P056L06	P241L10
甚深法忍	[381a]	P15L09	P056L07	P241L10
住不退転至成仏道	—	P15L09	P056L07	P241L10
六根清徹	[381b]	P15L09	P056L07	P241L11
無諸惱患	[381b]	P15L10	P056L08	P241L11
阿難若彼国人天	—	P15L10	P056L08	P241L12
見此樹者	[381b]	P15L10	P056L08	P241L12
得三法忍	—	P15L10	P056L08	P241L12
一者音響忍	[381b]	P15L10	P057L01	P241L12
二者	—	P15L10	P057L01	P241L12
柔	[381b]	P15L10	P057L01	P241L13
順	[381b]	P15L10	P057L01	P241L13
忍三者無生法忍此皆無量寿仏	—	P15L10	P057L01	P241L13
威神力故	[382a]	P15L11	P057L02	P241L13
本願力故満足願故明了願故堅固願故究竟願故 仏告阿難	—	P15L11	P057L02	P241L14
世間帝王	[382b]	P15L11	P057L04	P241L15
有百千音樂	—	P15L11	P057L04	P241L15

自轉輪聖王乃至	[382b]	P15L12	P057L04	P241L15
第六天上伎樂音声展轉相勝千億万倍第六天上	—	P15L12	P057L05	P241L16
万種樂音	[382b]	P15L12	P057L06	P242L01
不如無量壽國	—	P15L12	P057L06	P242L01
諸七寶樹	[382b]	P15L13	P057L06	P242L01
一種音声千億倍也	—	P15L13	P057L07	P242L01
亦有自然	[382b]	P15L13	P057L07	P242L02
万種	—	P15L13	P057L07	P242L02
伎樂	[383a]	P15L13	P057L07	P242L02
又其樂声	—	P15L13	P057L07	P242L02
無非法音	[383a]	P15L13	P057L08	P242L02
清	[383a]	P15L13	P057L08	P242L03
揚	[383b]	P15L13	P057L08	P242L03
哀	[383b]	P15L13	P057L08	P242L03
亮	[383b]	P15L13	P057L08	P242L03
微	[383b]	P15L13	P057L08	P242L03
妙	[383b]	P15L14	P057L08	P242L03
和	[383b]	P15L14	P057L08	P242L03
雅	[383b]	P15L14	P057L08	P242L03
十方世界音声之中	—	P15L14	P057L08	P242L03
最為第一	[383b]	P15L14	P058L01	P242L03
又講堂	[383b]	P15L15	P058L02	P242L05
精舍	[383b]	P15L15	P058L02	P242L05
宮殿	[384a]	P15L15	P058L02	P242L05
樓觀	[384a]	P15L15	P058L02	P242L05
皆七寶莊嚴	[384a]	P15L15	P058L02	P242L05
自然化成	[384a]	P15L15	P058L02	P242L05
復以	—	P15L15	P058L03	P242L05
真珠明月摩尼	[384a]	P15L15	P058L03	P242L05
衆寶以為	—	P15L15	P058L03	P242L06
交露	[384b]	P15L05	P058L03	P242L06
覆盃其上	—	P15L15	P058L03	P242L06
内外左右	[384b]	P15L15	P058L04	P242L06
有諸浴池或十由旬或二十三十乃至百千由旬縱 廣深淺	—	P16L01	P058L04	P242L07
各皆一等	[384b]	P16L01	P058L05	P242L08
八功德水	[384b]	P16L01	P058L05	P242L08
湛然	[384b]	P16L01	P058L06	P242L08
盈滿	—	P16L01	P058L06	P242L08
清淨香潔味如甘露	[384b]	P16L02	P058L06	P242L08
黃金池	[385a]	P16L02	P058L06	P242L09
者底白銀沙白銀池者底黃金沙水精池者底瑠璃 沙瑠璃池者底水精沙珊瑚池者底琥珀沙琥珀池 者底珊瑚沙磲磲池者底碼磲沙碼磲池者底磲磲 沙	—	P16L02	P058L07	P242L09

白玉	[385a]	P16L04	P059L02	P242L13
池者底	—	P16L04	P059L02	P242L13
紫金	[385a]	P16L04	P059L02	P242L13
沙紫金池者底白玉沙或二宝三宝乃至七宝転共合成其池岸上有	—	P16L04	P059L03	P242L13
梅檀樹	[385b]	P16L04	P059L04	P242L14
華葉垂布香氣普熏	—	P16L04	P059L04	P242L14
天優盃羅華	[385b]	P16L05	P059L05	P242L15
盃曇摩華	[385b]	P16L05	P059L05	P242L15
拘物頭華	[385b]	P16L05	P059L05	P242L15
分陀利華	[385b]	P16L05	P059L06	P242L15
雜色光	—	P16L05	P059L06	P242L16
茂	[385b]	P16L05	P059L06	P242L16
弥覆水上彼諸菩薩及声聞衆若入宝池意欲令水没足	—	P16L05	P059L06	P242L16
水即没足欲令至膝即至于膝欲令至腰水即至腰欲令至頸水即至頸欲令	[385b]	P16L06	P059L07	P243L01
灌身	—	P16L06	P059L07	P243L01
自然灌身欲	[385b]	P16L07	P060L01	P243L04
令還復水	—	P16L07	P060L01	P243L04
輒	[385b]	P16L07	P060L02	P243L04
還復	[385b]	P16L07	P060L02	P243L05
調和冷煖	[385b]	P16L07	P060L02	P243L05
自然随意	[386a]	P16L07	P060L02	P243L05
開神	—	P16L07	P060L02	P243L05
悅体	[386a]	P16L07	P060L02	P243L05
蕩除心垢	[386a]	P16L07	P060L03	P243L05
清明澄潔淨	—	P16L07	P060L03	P243L06
若無形	[386a]	P16L08	P060L03	P243L06
宝沙映徹無深不照	—	P16L08	P060L03	P243L06
微瀾	[386a]	P16L08	P060L04	P243L07
迴流	[386a]	P16L08	P060L04	P243L07
転相	—	P16L08	P060L04	P243L07
灌注	[386a]	P16L08	P060L04	P243L07
安詳	[386a]	P16L08	P060L04	P243L07
徐	[386a]	P16L08	P060L04	P243L08
逝不遲不疾	—	P16L08	P060L04	P243L08
波揚	[386a]	P16L08	P060L05	P243L08
無量自然妙声	—	P16L08	P060L05	P243L08
隨其所応	[386b]	P16L09	P060L05	P243L08
莫不聞者	—	P16L09	P060L05	P243L09
或聞仏声	[386b]	P16L09	P060L06	P243L09
或聞法声或聞僧声或	—	P16L09	P060L06	P243L09
寂静声	[386b]	P16L09	P060L06	P243L10
空無我声	[386b]	P16L09	P060L07	P243L10

大慈悲声	[386b]	P16L09	P060L07	P243L10
波羅蜜声	[386b]	P16L09	P060L07	P243L10
或	—	P16L10	P060L07	P243L10
十力無畏不共法声	[386b]	P16L10	P060L07	P243L11
諸通慧声	[386b]	P16L10	P060L08	P243L11
無所作声	[386b]	P16L10	P060L08	P243L11
不起滅声	[386b]	P16L10	P060L08	P243L11
無生忍声	[386b]	P16L10	P061L01	P243L11
乃至甘露灌頂	[386b]	P16L10	P061L01	P243L12
衆妙法声	[387a]	P16L10	P061L01	P243L12
如是等声称其所聞	—	P16L11	P061L01	P243L12
歡喜無量	[387a]	P16L11	P061L02	P243L13
隨順	[387a]	P16L11	P061L02	P243L13
清淨離欲	[387a]	P16L11	P061L02	P243L13
寂滅真美之義隨順	—	P16L11	P061L02	P243L13
三寶	[387a]	P16L11	P061L03	P243L13
力無所畏不共之法	[387a]	P16L11	P061L03	P243L13
隨順	—	P16L11	P061L04	P243L14
通慧	[387a]	P16L12	P061L04	P243L14
菩薩声聞	—	P16L12	P061L04	P243L14
所行之道	[387a]	P16L12	P061L04	P243L14
無有三塗苦難之名	[387a]	P16L12	P061L04	P243L14
但有自然	—	P16L12	P061L05	P243L15
快樂之音	[387b]	P16L12	P061L05	P243L15
是故其国名曰安樂	—	P16L12	P061L05	P243L15
阿難彼仏	[387b]	P16L13	P061L07	P243L16
国土	—	P16L13	P061L07	P243L16
諸往生者	[387b]	P16L13	P061L07	P243L16
具足	—	P16L13	P061L07	P243L16
如是	[387b]	P16L13	P061L07	P243L16
清淨	[387b]	P16L13	P061L07	P243L16
色身	—	P16L13	P061L07	P243L16
諸妙音声	[387b]	P16L13	P061L08	P244L01
神通功德	[387b]	P16L13	P061L08	P244L01
所處	[387b]	P16L13	P061L08	P244L01
宮殿衣服飲食衆妙華香莊嚴之具	—	P16L13	P061L08	P244L01
猶第六天	[387b]	P16L14	P062L01	P244L02
自然之物若欲食	—	P16L14	P062L01	P244L02
時	[388a]	P16L14	P062L02	P244L02
七宝盃器	[388a]	P16L14	P062L02	P244L02
自然在前金銀瑠璃砮磈碼碼珊瑚琥珀	—	P16L14	P062L02	P244L03
明月真珠如是諸盃	[388a]	P16L15	P062L03	P244L03
隨意	[388a]	P16L15	P062L03	P244L04
而至	—	P16L15	P062L03	P244L04
百味	[388a]	P16L15	P062L04	P244L04



飲食自然盈滿雖有此食實無食者	—	P16L.15	P062L04	P244L04
但見色聞香	[389a]	P16L.15	P062L05	P244L05
意以為食自然飽足	—	P16L.15	P062L05	P244L05
身心柔輒	[389a]	P17L.01	P062L05	P244L06
無所味著	—	P17L.01	P062L06	P244L06
事已化去	[389a]	P17L.01	P062L06	P244L06
時至復現	—	P17L.01	P062L06	P244L07
彼佗国土	[389a]	P17L.01	P062L06	P244L07
清淨	[389a]	P17L.01	P062L06	P244L07
安穩	[389a]	P17L.01	P062L07	P244L07
微妙	—	P17L.01	P062L07	P244L07
快樂	[389a]	P17L.01	P062L07	P244L07
次於無為泥洹之道	[389a]	P17L.01	P062L07	P244L07
其諸聲聞菩薩	—	P17L.02	P062L07	P244L08
天人	[390b]	P17L.02	P062L08	P244L08
智慧高明	[390b]	P17L.02	P062L08	P244L08
神通洞達	[390b]	P17L.02	P062L08	P244L08
咸同一類	[390b]	P17L.02	P062L08	P244L09
形無異狀但	—	P17L.02	P063L01	P244L09
因順余方	[390b]	P17L.02	P063L01	P244L09
故	—	P17L.02	P063L01	P244L09
有天人之名	[391a]	P17L.02	P063L01	P244L09
顏貌端正	[391a]	P17L.03	P063L01	P244L10
超世希有	—	P17L.03	P063L02	P244L10
容色微妙	[391a]	P17L.03	P063L02	P244L10
非天非人	[391a]	P17L.03	P063L02	P244L10
皆受	[391a]	P17L.03	P063L02	P244L11
自然虛無之身	[391a]	P17L.03	P063L03	P244L11
無極	[391a]	P17L.03	P063L03	P244L11
之體	—	P17L.03	P063L03	P244L11
仏告阿難譬如世間	—	P17L.04	P063L04	P244L12
貧窮乞人	[391b]	P17L.04	P063L04	P244L12
在	—	P17L.04	P063L04	P244L12
帝王	[391b]	P17L.04	P063L04	P244L12
辺形貌容狀	—	P17L.04	P063L04	P244L12
寧	[391b]	P17L.04	P063L05	P244L13
可	—	P17L.04	P063L05	P244L13
類	[391b]	P17L.04	P063L05	P244L13
乎	—	P17L.04	P063L05	P244L13
阿難白仏	[391b]	P17L.04	P063L05	P244L13
假令	[391b]	P17L.04	P063L05	P244L13
此人	—	P17L.04	P063L05	P244L13
在	[391b]	P17L.04	P063L05	P244L13
帝王辺	—	P17L.04	P063L05	P244L13
羸	[391b]	P17L.04	P063L06	P244L14

陋	[391b]	P17L05	P063L06	P244L14
醜	—	P17L05	P063L06	P244L14
惡	[391b]	P17L05	P063L06	P244L14
無以為喻百千萬億不可計倍所以然者貧窮乞人	—	P17L05	P063L06	P244L14
底極	[391b]	P17L05	P063L07	P244L15
斯下	[391b]	P17L05	P063L07	P244L15
衣不	—	P17L05	P063L07	P244L15
蔽	[392a]	P17L05	P063L07	P244L15
形	—	P17L05	P063L07	P244L15
食	[392a]	P17L05	P063L08	P244L15
趣	[392a]	P17L05	P063L08	P244L16
支	[392a]	P17L05	P063L08	P244L16
命飢寒困苦	—	P17L05	P063L08	P244L16
人理	[392a]	P17L06	P063L08	P244L16
殆盡	[392a]	P17L06	P063L08	P244L16
皆	—	P17L06	P063L08	P244L16
坐	[392a]	P17L06	P063L08	P244L16
前世	—	P17L06	P063L08	P244L16
不植德本	[392a]	P17L06	P063L08	P244L16
積財不施	—	P17L06	P064L01	P245L01
富有	[392a]	P17L06	P064L01	P245L01
益	—	P17L06	P064L01	P245L01
慳	[392a]	P17L06	P064L01	P245L01
但欲	—	P17L06	P064L01	P245L01
唐	[392a]	P17L06	P064L01	P245L01
得	—	P17L06	P064L01	P245L01
貪求無厭	[392a]	P17L06	P064L01	P245L01
不	—	P17L06	P064L02	P245L02
肯	[392b]	P17L06	P064L02	P245L02
修善	—	P17L06	P064L02	P245L02
犯惡山積	[392b]	P17L06	P064L02	P245L02
如是壽終財寶消散	[392b]	P17L07	P064L02	P245L03
苦身聚積	—	P17L07	P064L03	P245L03
為之憂惱	[392b]	P17L07	P064L03	P245L03
於己無益徒為他有	—	P17L07	P064L03	P245L04
無善可估無德可恃	[392b]	P17L07	P064L04	P245L04
是故死墮惡趣受此長苦	—	P17L07	P064L04	P245L05
罪畢得出	[392b]	P17L08	P064L05	P245L06
生為下賤	—	P17L08	P064L05	P245L06
愚鄙嘶極	[392b]	P17L08	P064L05	P245L06
示同人類	[392b]	P17L08	P064L05	P245L07
所以	[393a]	P17L08	P064L06	P245L07
世間帝王人中獨尊皆由宿世積德所致慈惠	—	P17L08	P064L06	P245L07
博施	[393a]	P17L09	P064L07	P245L08
仁愛	[393a]	P17L09	P064L07	P245L08

兼濟	—	P17L09	P064L07	P245L08
履信	[393a]	P17L09	P064L07	P245L08
修善無所違諍是以壽終	—	P17L09	P064L07	P245L08
福応	[393a]	P17L09	P064L08	P245L09
得昇	—	P17L09	P064L08	P245L09
善道	[393a]	P17L09	P064L08	P245L09
上生天上	[393a]	P17L09	P064L08	P245L10
享茲福楽	—	P17L10	P064L08	P245L10
積善余慶	[393a]	P17L10	P065L01	P245L10
今得為人	—	P17L10	P065L01	P245L10
適	[393b]	P17L10	P065L01	P245L11
生王家自然尊貴	—	P17L10	P065L01	P245L11
儀容	[393b]	P17L10	P065L02	P245L11
端正衆所敬事妙衣珍膳随心	—	P17L10	P065L02	P245L11
服御	[393b]	P17L10	P065L02	P245L12
宿福所追故能	—	P17L10	P065L02	P245L12
致此	[393b]	P17L11	P065L03	P245L12
仏告阿難汝言是也	—	P17L12	P065L04	P245L14
假如	[393b]	P17L12	P065L04	P245L14
帝王雖人中尊貴形色端正	—	P17L12	P065L04	P245L14
比之転輪聖王	[393b]	P17L12	P065L05	P245L15
甚為鄙陋猶彼乞人在帝王辺也転輪聖王威相殊妙	—	P17L12	P065L05	P245L15
天下第一	[393b]	P17L13	P065L06	P245L16
比之初利天王又復醜惡不得相喻万億倍也	—	P17L13	P065L07	P246L01
仮令天帝	[393b]	P17L13	P065L08	P246L02
比第六天王	[393b]	P17L14	P065L08	P246L02
百千億倍不相類也	—	P17L14	P065L08	P246L02
設第六天	[393b]	P17L14	P066L01	P246L03
王比無量寿仏国菩薩声聞光顔容色不相及逮百千万億	—	P17L14	P066L01	P246L03
不可計倍	[393b]	P17L15	P066L02	P246L04
仏告阿難	[394a]	P18L01	P066L03	P246L05
無量寿国其諸天人衣服飲食華香瓔珞繪蓋幢旛微妙	—	P18L01	P066L03	P246L05
音声	[394a]	P18L01	P066L04	P246L06
所居	[394a]	P18L01	P066L04	P246L06
舎宅宮殿樓閣	—	P18L01	P066L04	P246L06
称其形色	[394a]	P18L01	P066L05	P246L06
高下大小	[394a]	P18L02	P066L05	P246L07
或一宝二宝	[394a]	P18L02	P066L05	P246L07
乃至無量衆宝随意所欲念即至	—	P18L02	P066L05	P246L07
又以衆宝妙衣	[394a]	P18L02	P066L06	P246L08
徧布其地一切天人踐之而行無量宝網弥覆仏土皆以金	—	P18L02	P066L07	P246L08

縷	[394a]	P18L03	P066L08	P246L09
真珠百千雜寶奇妙珍異莊嚴	—	P18L03	P066L08	P246L09
交飾	[394a]	P18L03	P067L01	P246L10
周匝	—	P18L03	P067L01	P246L10
四面	[394b]	P18L03	P067L01	P246L10
垂以	—	P18L04	P067L01	P246L10
寶鈴	[394b]	P18L04	P067L01	P246L10
光色	—	P18L04	P067L01	P246L11
晃	[394b]	P18L04	P067L01	P246L11
耀盡極嚴麗自然	—	P18L04	P067L01	P246L11
德風	[394b]	P18L04	P067L02	P246L11
徐起微動其風調和不寒不暑	—	P18L04	P067L02	P246L11
溫涼柔輒	[394b]	P18L04	P067L03	P246L12
不遲不疾	[394b]	P18L04	P067L03	P246L12
吹諸羅網及衆寶樹演發無量微妙法音流布萬種	—	P18L04	P067L03	P246L13
溫雅	[394b]	P18L05	P067L04	P246L14
德香	—	P18L05	P067L04	P246L14
其有聞者	[394b]	P18L05	P067L05	P246L14
塵勞垢習	—	P18L05	P067L05	P246L14
自然不起	[395a]	P18L05	P067L05	P246L14
風觸其身皆得快樂	[395a]	P18L05	P067L05	P246L15
譬如	[395a]	P18L06	P067L06	P246L15
比丘	[395a]	P18L06	P067L06	P246L15
得滅尽三昧	—	P18L06	P067L06	P246L15
又風	[395a]	P18L07	P067L07	P247L01
吹散	[395a]	P18L07	P067L07	P247L01
華徧滿伽土隨色次第而不雜亂柔輒	—	P18L07	P067L07	P247L01
光沢	[395a]	P18L07	P067L08	P247L02
馨	[395a]	P18L07	P067L08	P247L02
香	—	P18L07	P067L08	P247L02
芬烈	[395b]	P18L07	P067L08	P247L02
足履其上	[395b]	P18L07	P067L08	P247L02
陷下四寸	[395b]	P18L07	P067L08	P247L02
隨拳足已	—	P18L07	P067L08	P247L02
還復如故	[395b]	P18L08	P068L01	P247L03
華用已訖	[395b]	P18L08	P068L01	P247L03
地輒	—	P18L08	P068L01	P247L03
開裂	[395b]	P18L08	P068L01	P247L03
以次化沒	[395b]	P18L08	P068L01	P247L04
清淨無遺隨其時節風吹散華如是	—	P18L08	P068L02	P247L04
六返	[396a]	P18L08	P068L02	P247L05
又衆寶蓮華	[396a]	P18L08	P068L03	P247L05
周滿世界——寶華	—	P18L09	P068L03	P247L05
百千億葉	[396a]	P18L09	P068L03	P247L06
其華光明無量種色	—	P18L09	P068L04	P247L06

青色	[396a]	P18L09	P068L04	P247L06
青光白色白光玄黃朱紫光色亦然	—	P18L09	P068L04	P247L07
曄曄煥爛	[396a]	P18L10	P068L05	P247L07
明曜日月——華中出	—	P18L10	P068L05	P247L08
三十六百千億光	[396a]	P18L10	P068L06	P247L08
一一光中出三十六百千億仏	[396a]	P18L10	P068L06	P247L09
身色紫金相好殊特——諸仏又放百千光明	—	P18L10	P068L07	P247L09
普為十方	[397a]	P18L11	P068L08	P247L10
說微妙法如是諸仏各各安立	—	P18L11	P068L08	P247L10
無量衆生	[397a]	P18L11	P069L01	P247L11
於	—	P18L11	P069L01	P247L11
仏正道	[397a]	P18L11	P069L01	P247L11
[仏説無量寿経卷下・無量寿経随聞講録卷下之一]	[397b]	P19L01	P070L01	P249L01
仏告阿難	—	P19L03	P070L03	P249L03
其有衆生	[398a]	P19L03	P070L03	P249L03
生彼国者	[398a]	P19L03	P070L03	P249L03
皆悉	[398a]	P19L03	P070L03	P249L03
住於正定之聚	[398a]	P19L03	P070L03	P249L04
所以者何彼仏國中	—	P19L03	P070L04	P249L04
無諸邪聚	[400a]	P19L03	P070L04	P249L04
及不定聚	[400a]	P19L03	P070L04	P249L04
十方恒沙	[400a]	P19L03	P070L05	P249L05
諸仏如来	—	P19L04	P070L05	P249L05
皆共	[400a]	P19L04	P070L05	P249L05
讚歎	[400a]	P19L04	P070L05	P249L05
無量寿仏	—	P19L04	P070L05	P249L05
威神功德不可思議	[400b]	P19L04	P070L06	P249L05
諸有衆生	[400b]	P19L04	P070L06	P249L06
聞	—	P19L04	P070L06	P249L06
其名号	[400b]	P19L04	P070L06	P249L06
信心歡喜	—	P19L04	P070L07	P249L06
乃至一念	[400b]	P19L04	P070L07	P249L06
至心廻向	[401b]	P19L05	P070L07	P249L07
願生彼国	—	P19L05	P070L07	P249L07
即得往生	[401b]	P19L05	P070L07	P249L07
住不退転	—	P19L05	P070L08	P249L07
唯除五逆誹謗正法	[401b]	P19L05	P070L08	P249L08
仏告阿難十方世界諸天人人民	[402a]	P19L06	P071L01	P249L09
其有至心願生彼国	[402a]	P19L06	P071L01	P249L09
凡有三輩	[402b]	P19L06	P071L02	P249L10
其上輩者	[403a]	P19L06	P071L02	P249L10
捨家棄欲而作沙門	[403b]	P19L06	P071L02	P249L11
発菩提心	[403b]	P19L07	P071L03	P249L11
一向専念無量寿仏	[403b]	P19L07	P071L03	P249L11

修諸功德	—	P19L07	P071L03	P249L11
願生彼国	[404b]	P19L07	P071L04	P249L12
此等衆生臨壽終時無量壽仏	—	P19L07	P071L04	P249L12
与諸大衆	[404b]	P19L07	P071L05	P249L12
現其人前	[404b]	P19L07	P071L05	P249L13
即隨彼仏往生其国便於	—	P19L08	P071L05	P249L13
七宝華	[404b]	P19L08	P071L06	P250L01
中	—	P19L08	P071L06	P250L01
自然化生	[404b]	P19L08	P071L06	P250L01
住不退転	[405a]	P19L08	P071L06	P250L01
智慧勇猛	[405a]	P19L08	P071L06	P250L02
神通自在	[405a]	P19L08	P071L07	P250L02
是故阿難其有衆生	—	P19L08	P071L07	P250L02
欲於今世見無量壽仏	[405a]	P19L09	P071L07	P250L02
応発無上菩提之心	[405b]	P19L09	P071L08	P250L03
修行功德 (修諸功德)	[405b]	P19L09	P071L08	P250L03
願生彼国	—	P19L09	P071L08	P250L04
仏語阿難	[405b]	P19L10	P072L02	P250L05
其中輩者	—	P19L10	P072L02	P250L05
十方世界諸天人民	[405b]	P19L10	P072L02	P250L05
其有至心願生彼国	—	P19L10	P072L02	P250L05
雖不能	[405b]	P19L10	P072L03	P250L07
行作沙門	[405b]	P19L10	P072L03	P250L06
大修功德	[405b]	P19L10	P072L03	P250L06
当発無上菩提之心	[405b]	P19L10	P072L04	P250L07
一向専念無量壽仏	—	P19L11	P072L04	P250L07
多少修善	[406a]	P19L11	P072L05	P250L08
奉持	—	P19L11	P072L05	P250L08
齋戒	[406a]	P19L11	P072L05	P250L08
起立	—	P19L11	P072L05	P250L08
塔像	[406b]	P19L11	P072L05	P250L08
飯食沙門	[406b]	P19L11	P072L05	P250L08
懸繪	[407a]	P19L11	P072L05	P250L09
然灯	[407a]	P19L11	P072L06	P250L09
散華	[407a]	P19L11	P072L06	P250L09
燒香	[407a]	P19L11	P072L06	P250L09
以此迴向願生彼国	[407a]	P19L12	P072L06	P250L09
其人臨終無量壽仏	—	P19L12	P072L06	P250L10
化現其身	[407b]	P19L12	P072L07	P250L10
光明相好具如真仏与諸大衆現其人前即隨化仏 往生其国住不退転功德智慧	—	P19L12	P072L07	P250L11
次如上輩者也	[408a]	P19L13	P073L01	P250L12
仏告阿難其下輩者十方世界	—	P19L14	P073L02	P250L14
諸天人民	[408a]	P19L14	P073L02	P250L14
其有至心欲生彼国假使	—	P19L14	P073L02	P250L14

不能作諸功德	[408a]	P19L14	P073L03	P250L15
当究無上	[408a]	P19L14	P073L03	P250L16
菩提之心一向專意乃至十念	—	P19L14	P073L04	P250L16
念無量寿仏	[408a]	P20L01	P073L04	P250L16
願生其国	—	P20L01	P073L05	P251L01
若聞深法	[408a]	P20L01	P073L05	P251L01
歡喜信樂不生疑惑乃至一念念於彼仏以至誠心願生其国此人臨終	—	P20L01	P073L05	P251L01
夢見彼仏	[408b]	P20L02	P073L07	P251L03
亦得往生功德智慧次如中輩者也	—	P20L02	P073L07	P251L03
仏告阿難	[409b]	P20L03	P074L01	P251L05
無量寿仏	—	P20L03	P074L01	P251L05
威神無極	[410a]	P20L03	P074L01	P251L05
十方世界無量無辺不可思議諸仏如來莫不稱歎	—	P20L03	P074L01	P251L05
於彼東方	[410a]	P20L03	P074L02	P251L06
恒沙仏国	[410a]	P20L04	P074L03	P251L06
無量無數諸菩薩衆皆悉往詣無量寿仏所恭敬供養	—	P20L04	P074L03	P251L07
及諸菩薩	[410a]	P20L04	P074L04	P251L07
声聞大衆	—	P20L04	P074L04	P251L08
聽受經法	[410b]	P20L04	P074L05	P251L08
宣布道化	[410b]	P20L05	P074L05	P251L08
南西北方	—	P20L05	P074L05	P251L09
四維	[410b]	P20L05	P074L05	P251L09
上下亦復如是爾時世尊而説頌曰 東方諸仏国 其数如恒沙 彼土菩薩衆	—	P20L05	P074L05	P251L09
往觀	[410b]	P20L06	P074L07	P251L12
無量覺 南西北四維 上下亦復然 彼土菩薩衆 往觀無量覺	—	P20L06	P074L07	P251L12
一切諸菩薩	[410b]	P20L07	P075L01	P251L15
各齋	[410b]	P20L07	P075L01	P252L01
天妙華	[411a]	P20L07	P075L01	P251L15
宝香無飾衣	[411a]	P20L07	P075L01	P252L01
供養無量覺	—	P20L07	P075L01	P252L01
咸然	[411a]	P20L08	P075L02	P252L02
奏天樂	[411a]	P20L08	P075L02	P252L02
暢梵和雅音	[411a]	P20L08	P075L02	P252L02
歌歎最勝尊	[411a]	P20L08	P075L02	P252L03
供養無量覺	—	P20L08	P075L02	P252L03
究達神通慧	[411b]	P20L08	P075L03	P252L04
遊入深法門	[411b]	P20L08	P075L03	P252L04
具足功德藏 妙智無等倫	[411b]	P20L09	P075L03	P252L05
慧日照世間 消除生死雲	[411b]	P20L09	P075L04	P252L06
恭敬	—	P20L09	P075L04	P252L07

繞三匝	[412a]	P20L09	P075L04	P252L07
稽首無上尊	—	P20L09	P075L04	P252L07
見彼嚴淨土	[412a]	P20L10	P075L05	P252L08
微妙難思議	—	P20L10	P075L05	P252L08
因発	[412a]	P20L10	P075L05	P252L09
無上心	[412a]	P20L10	P075L05	P252L09
願我	[412a]	P20L10	P075L05	P252L09
国亦然 応時無量尊	—	P20L10	P075L05	P252L09
動容	[412a]	P20L10	P075L06	P252L10
発	—	P20L10	P075L06	P252L10
欣笑	[412a]	P20L10	P075L06	P252L10
口出無数光	[412b]	P20L11	P075L06	P252L11
徧照十方国	[412b]	P20L11	P075L06	P252L11
迴光 [围绕身 三匝] 從頂入	[412b]	P20L11	P075L07	P252L12
一切天人衆	[412b]	P20L11	P075L07	P252L13
踊躍	—	P20L11	P075L07	P252L13
皆歡喜	[412b]	P20L11	P075L07	P252L13
大士觀世音	—	P20L12	P075L08	P252L14
整服	[412b]	P20L12	P075L08	P252L14
稽首問 白仏何縁笑	—	P20L12	P075L08	P252L14
唯然	[412b]	P20L12	P075L08	P252L16
願	—	P20L12	P075L08	P252L16
說意	[413a]	P20L12	P075L08	P252L16
梵声	[413a]	P20L12	P076L01	P253L01
猶雷震	[413a]	P20L12	P076L01	P253L01
八音	[413a]	P20L12	P076L01	P253L01
暢妙響	—	P20L12	P076L01	P253L01
当授菩薩記	[413a]	P20L13	P076L01	P253L02
今說仁諦聽 十方來正士 吾悉知彼願	—	P20L13	P076L01	P253L02
志求嚴淨土	[413a]	P20L13	P076L02	P253L04
受決	[413a]	P20L13	P076L02	P253L04
当作仏	—	P20L13	P076L02	P253L04
覺了	[413a]	P20L14	P076L03	P253L05
一切法	[413a]	P20L14	P076L03	P253L05
猶	—	P20L14	P076L03	P253L05
如夢	[413b]	P20L14	P076L03	P253L05
[如] 幻	[413b]	P20L14	P076L03	P253L05
[如] 響	[413b]	P20L14	P076L03	P253L05
滿足	—	P20L14	P076L03	P253L06
諸妙願	[413b]	P20L14	P076L03	P253L06
必成	—	P20L14	P076L03	P253L06
如是利	[413b]	P20L14	P076L03	P253L06
知法如電影	[413b]	P20L14	P076L04	P253L07
[如電]	[413b]	P20L14	P076L04	P253L07
[如影]	[414a]	P20L14	P076L04	P253L07



究竟菩薩道 具諸	—	P20L14	P076L04	P253L07
功德本	[414a]	P20L15	P076L04	P253L08
受決当作仏	—	P20L15	P076L04	P253L08
通達諸法性	[414a]	P20L15	P076L05	P253L09
一切空無我	[414a]	P20L15	P076L05	P253L09
專求淨仏土 必成如是刹	—	P20L15	P076L05	P253L10
諸仏告菩薩	[415a]	P21L01	P076L06	P253L11
令觀	—	P21L01	P076L06	P253L11
安養	[415a]	P21L01	P076L06	P253L11
仏 聞法	—	P21L01	P076L06	P253L11
樂受行	[415a]	P21L01	P076L06	P253L12
疾	—	P21L01	P076L06	P253L12
得清淨處	[415b]	P21L01	P076L06	P253L12
至彼嚴淨刹 便速得神通	[415b]	P21L01	P076L07	P253L13
必於	—	P21L02	P076L07	P253L14
無量尊	[415b]	P21L02	P076L07	P253L14
受記	—	P21L02	P076L07	P253L14
成等覺	[415b]	P21L02	P076L07	P253L14
其仏本願力	[415b]	P21L02	P076L08	P253L15
聞名欲往生 皆悉到彼刹	—	P21L02	P076L08	P253L15
自致不退転	[416a]	P21L02	P076L08	P253L16
菩薩興至願	[416a]	P21L03	P077L01	P254L01
願已刹無異	[416a]	P21L03	P077L01	P254L01
普念度一切 名顯達十方	—	P21L03	P077701	P254L02
奉事億如來	[416a]	P21L03	P077L02	P254L03
飛化	[416b]	P21L03	P077L02	P254L03
徧詣刹恭敬	—	P21L03	P077L02	P254L03
歡喜去	[416b]	P21L04	P077L02	P254L04
還到安養刹	—	P21L04	P077L02	P254L04
若人無善本 不得聞此經	[416b]	P21L04	P077L03	P254L05
清淨有戒者	[417a]	P21L04	P077L03	P254L06
乃獲聞正法 曾更	—	P21L04	P077L03	P254L06
見世尊	[417a]	P21L05	P077L04	P254L07
則能信此事	—	P21L05	P077L04	P254L08
謙敬	[417a]	P21L05	P077L04	P254L09
聞奉行 踊躍大歡喜	—	P21L05	P077L04	P254L09
憍慢弊懈怠	[417a]	P21L05	P077L05	P254L10
難以信此法	[417b]	P21L05	P077L05	P254L10
宿世見諸仏 樂聽如是教	[417b]	P21L06	P077L05	P254L11
声聞或菩薩	[418a]	P21L06	P077L06	P254L12
莫能究	—	P21L06	P077L06	P254L12
聖心	[418a]	P21L06	P077L06	P254L12
譬如	[418a]	P21L06	P077L06	P254L13
從生盲欲行 開導人如來	—	P21L06	P077L06	P254L13
智慧海	[418a]	P21L07	P077L07	P254L14

深広無涯底	[418a]	P21L07	P077L07	P254L14
二乘	[418a]	P21L07	P077L07	P254L15
非所測 唯仏独明了	—	P21L07	P077L07	P254L15
假使一切人	[418a]	P21L07	P077L08	P254L16
具足皆得道 淨慧知	—	P21L07	P077L08	P254L16
本空	[418a]	P21L08	P077L08	P255L01
億劫思仏智	—	P21L08	P077L08	P255L01
窮力	[418a]	P21L08	P078L01	P255L02
極講説 尽寿猶不知	—	P21L08	P078L01	P255L02
仏慧無辺際	[418b]	P21L08	P078L01	P255L03
如是致清淨	—	P21L08	P078L01	P255L03
寿命甚難得	[418b]	P21L09	P078L02	P255L04
仏世	[418b]	P21L09	P078L02	P255L04
亦難値 人有	—	P21L09	P078L02	P255L04
信慧	[418b]	P21L09	P078L02	P255L05
難若聞精進求	—	P21L09	P078L02	P255L05
聞法能不忘	[418b]	P21L09	P078L03	P255L06
見敬得大慶	[418b]	P21L09	P078L03	P255L06
[得大慶]	[419a]	P21L09	P078L03	P255L06
則我善親友	[419a]	P21L10	P078L03	P255L07
是故	—	P21L10	P078L03	P255L07
当發意	[419a]	P21L10	P078L03	P255L07
設滿世界火	[419a]	P21L10	P078L04	P255L08
必過要聞法	[419b]	P21L10	P078L04	P255L08
会当成仏道	[419b]	P21L10	P078L04	P255L09
広濟生死流	[419b]	P21L10	P078L04	P255L09
仏告阿難	[419b]	P21L11	P078L05	P255L10
彼国菩薩	[420a]	P21L11	P078L05	P255L10
皆当	—	P21L11	P078L05	P255L10
究竟	[420a]	P21L11	P078L05	P255L10
一生補処	[420a]	P21L11	P078L05	P255L10
除其本願為衆生故以弘誓功德	—	P21L11	P078L05	P255L11
而自莊嚴	[420a]	P21L11	P078L06	P255L11
普欲度脱一切衆生	—	P21L11	P078L06	P255L11
阿難彼仏國中	[420a]	P21L12	P078L07	P255L12
諸声聞衆	—	P21112	P078L07	P021112
身光一尋	[420a]	P21L12	P078L08	P255L13
菩薩光明照	—	P21L12	P078L08	P255L13
百由旬	[420b]	P21L12	P078L08	P255L13
有二菩薩最尊第一威神光明	—	P21L12	P078L08	P255L13
普照三千大千世界	[420b]	P21L13	P079L01	P255L14
阿難白仏彼二菩薩其号云何	—	P21L13	P079L01	P255L14
仏言一名	[420b]	P21L13	P079L02	P255L15
觀世音二名大勢至是二菩薩	—	P21L13	P079L02	P255L15
於此国土	[420b]	P21L14	P079L03	P256L01

修菩薩行	—	P21L14	P079L03	P256L01
命終轉化	[421a]	P21L14	P079L04	P256L01
生彼仏国阿難	—	P21L14	P079L04	P256L02
其有衆生	[421a]	P21L14	P079L04	P256L02
生彼国者皆悉具足三十二相	—	P21L14	P079L04	P256L02
智慧成滿	[421a]	P21L14	P079L05	P256L03
深入諸法	[421a]	P21L15	P079L05	P256L03
究暢要妙	[421b]	P21L15	P079L06	P256L03
神通無礙	[421b]	P21L15	P079L06	P256L03
諸根明利	[421b]	P21L15	P079L06	P256L04
其鈍根者	—	P21L15	P079L06	P256L04
成就二忍	[421b]	P21L15	P079L06	P256L04
其利根者得	—	P21L15	P079L07	P256L04
不可計無生法忍	[422a]	P21L15	P079L07	P256L04
又彼菩薩	[422a]	P22L01	P079L07	P256L05
乃至成仏	—	P22L01	P079L08	P256L05
不更惡趣神通自在	[422a]	P22L01	P079L08	P256L05
常識宿命	[422a]	P22L01	P079L08	P256L06
除生他方	[422a]	P22L01	P080L01	P256L06
五濁惡世	—	P22L01	P080L01	P256L06
示現同彼	[422a]	P22L01	P080L01	P256L06
如我国	[422a]	P22L01	P080L01	P256L07
也仏告阿難彼国菩薩	—	P22L01	P080L01	P256L08
承仏威神	[422a]	P22L02	P080L02	P256L08
一食之頃	[422a]	P22L02	P080L02	P256L08
往詣十方	[422b]	P22L02	P080L02	P256L08
無量世界恭敬供養諸仏世尊	—	P22L02	P080L03	P256L09
隨心所念	[422b]	P22L02	P080L03	P256L09
華香伎樂繪蓋幢幡無數無量供養之具自然化生	—	P22L02	P080L04	P256L09
応念	[422b]	P22L03	P080L05	P256L10
即至	—	P22L03	P080L05	P256L10
珍妙殊特	[422b]	P22L03	P080L05	P256L11
非世所有輒以	—	P22L03	P080L05	P256L11
奉散諸仏	[422b]	P22L03	P080L06	P256L11
菩薩声聞大衆在虛空中	—	P22L04	P080L06	P256L11
化成華蓋	[422b]	P22L04	P080L06	P256L12
光色	—	P22L04	P080L07	P256L12
昱爍	[422b]	P22L04	P080L07	P256L12
香氣普熏	—	P22L04	P080L07	P256L12
其華	[423a]	P22L04	P080L07	P256L13
周門四百里者如是	—	P22L04	P080L07	P256L13
轉倍	[423a]	P22L04	P080L08	P256L13
乃覆三千	[423a]	P22L04	P080L08	P256L13
大千世界隨其前後	—	P22L05	P080L08	P256L14
以次化沒	[423a]	P22L05	P081L01	P256L14

其諸菩薩	[423a]	P22L.05	P081L.01	P256L.14
僉然	[423a]	P22L.05	P081L.01	P256L.15
欣悅	—	P22L.05	P081L.01	P256L.15
於虛空中	[423a]	P22L.05	P081L.01	P256L.15
共奏天樂以微妙音	—	P22L.05	P081L.02	P256L.15
歌歎仏徳	[423a]	P22L.05	P081L.02	P256L.16
聽受經法	[423a]	P22L.06	P081L.02	P256L.16
歡喜無量	—	P22L.06	P081L.02	P256L.16
供養仏已	[423a]	P22L.06	P081L.03	P256L.16
未食之前	[423a]	P22L.06	P081L.03	P257L.01
忽然	—	P22L.06	P081L.03	P257L.01
輕拳	[423a]	P22L.06	P081L.03	P257L.01
還其	—	P22L.06	P081L.03	P257L.01
本国	[423a]	P22L.06	P081L.04	P257L.01
仏語阿難	[423a]	P22L.07	P081L.05	P257L.02
無量寿仏為諸声聞菩薩大衆	—	P22L.07	P081L.05	P257L.02
班宣	[423a]	P22L.07	P081L.05	P257L.03
法時都悉集会七宝	—	P22L.07	P081L.06	P257L.02
講堂	[423a]	P22L.07	P081L.06	P257L.03
広宣道教	[423b]	P22L.07	P081L.06	P257L.03
演暢妙法	—	P22L.07	P081L.06	P257L.03
莫不	[423b]	P22L.07	P081L.07	P257L.04
歡喜心解得道	[423b]	P22L.08	P081L.07	P257L.04
即時	[423b]	P22L.08	P081L.07	P257L.04
四方	—	P22L.08	P081L.07	P257L.04
自然風起	[423b]	P22L.08	P081L.07	P257L.05
普吹宝樹	[423b]	P22L.08	P081L.08	P257L.05
出五音声	[423b]	P22L.08	P081L.08	P257L.05
雨無量妙華	[423b]	P22L.08	P081L.08	P257L.05
随風周徧自然供養如是不絶	—	P22L.08	P081L.08	P257L.06
一切諸天	[423b]	P22L.09	P082L.01	P257L.06
皆齋天上	[423b]	P22L.09	P082L.01	P257L.07
百千華香万種	—	P22L.09	P082L.02	P257L.07
伎樂	[424a]	P22L.09	P082L.02	P257L.07
供養	—	P22L.09	P082L.02	P257L.07
其仏	[424a]	P22L.09	P082L.02	P257L.07
及	—	P22L.09	P082L.02	P257L.07
諸菩薩	[424a]	P22L.09	P082L.02	P257L.07
声聞大衆普散華香奏諸音樂	—	P22L.09	P082L.02	P257L.07
前後来往	[424a]	P22L.10	P082L.03	P257L.08
更相	—	P22L.10	P082L.03	P257L.08
開避	[424a]	P22L.10	P082L.04	P257L.09
当斯之時	[424a]	P22L.10	P082L.04	P257L.09
熙怡快樂	[424a]	P22L.10	P082L.04	P257L.09
不可勝言	—	P22L.10	P082L.04	P257L.09

仏語阿難	[424a]	P22L11	P082L05	P257L10
生彼仏国	—	P22L11	P082L05	P257L10
諸菩薩等	[424a]	P22L11	P082L05	P257L10
所可	—	P22L11	P082L05	P257L10
講説	[424a]	P22L11	P082L05	P257L10
常宣正法	[424a]	P22L11	P082L05	P257L11
隨順智慧	[424a]	P22L11	P082L06	P257L11
無違無失	[424a]	P22L11	P082L06	P257L11
於其国土所有万物	—	P22L11	P082L06	P257L11
無我所	[424b]	P22L11	P082L07	P257L12
心無染著心	—	P22L12	P082L07	P257L12
去來進止	[424b]	P22L12	P082L07	P257L12
情無所係	[424b]	P22L12	P082L07	P257L12
隨意自在	[424b]	P22L12	P082L08	P257L13
無所適莫	[424b]	P22L12	P082L08	P257L13
無彼無我	[424b]	P22L12	P082L08	P257L13
無競無訟	[424b]	P22L12	P082L08	P257L14
於諸衆生得大慈悲饒益之心柔軟	—	P22L12	P083L01	P257L14
調伏	[425a]	P22L13	P083L01	P257L15
無忿恨心	[425a]	P22L13	P083L01	P257L15
離盃清淨	[425a]	P22L13	P083L02	P257L15
無厭怠心	[425a]	P22L13	P083L02	P257L15
等心勝心深心	[425a]	P22L13	P083L02	P257L16
定心	[425a]	P22L13	P083L03	P257L16
愛法樂法喜法之心	[425a]	P22L13	P083L03	P257L16
滅諸煩惱	[425b]	P22L14	P083L03	P257L16
離惡趣心究竟一切菩薩所行	—	P22L14	P083L03	P258L01
具足成就無量功德	[425b]	P22L14	P083L04	P258L01
得深禪定諸通明慧	[425b]	P22L14	P083L05	P258L02
遊志	—	P22L14	P083L05	P258L02
七覺	[425b]	P22L14	P083L05	P258L02
修心仏法	[425b]	P22L15	P083L05	P258L02
肉眼清徹	[425b]	P22L15	P083L05	P258L03
靡不分了	—	P22L15	P083L06	P258L03
天眼通達	[426a]	P22L15	P083L06	P258L03
無量無限	—	P22L15	P083L06	P258L03
法眼觀察	[426a]	P22L15	P083L06	P258L04
究竟諸道	—	P22L15	P083L07	P258L04
慧眼見真	[426a]	P22L15	P083L07	P258L04
能度彼岸	—	P22L15	P083L07	P258L04
仏眼具足	[426b]	P23L01	P083L07	P258L04
覺了法性	—	P23L01	P083L08	P258L05
以無礙智	[426b]	P23L01	P083L08	P258L05
為人演説	—	P23L01	P083L08	P258L05
等觀三界	[426b]	P23L01	P083L08	P258L05

空無所有	—	P23L01	P084L01	P258L06
志求佛法	[426b]	P23L01	P084L01	P258L06
具諸弁才	[426b]	P23L01	P084L01	P258L06
除滅衆生煩惱之患	—	P23L01	P084L01	P258L06
從如來生	[427a]	P23L02	P084L02	P258L07
解法如如	[427a]	P23L02	P084L02	P258L07
善知習滅音声方便	[427a]	P23L02	P084L02	P258L07
不欣世語樂在正論	[427a]	P23L02	P084L03	P258L08
修諸善本	[427a]	P23L02	P084L03	P258L08
志崇仏道	—	P23L02	P084L03	P258L08
知一切法皆悉寂滅	[427a]	P23L02	P084L04	P258L09
生身煩惱	[427b]	P23L03	P084L04	P258L09
二余	[427b]	P23L03	P084L04	P258L09
俱盡	—	P23L03	P084L04	P258L09
聞甚深法	[427b]	P23L03	P084L05	P258L10
心不疑懼	[427b]	P23L03	P084L05	P258L10
常能修行	[427b]	P23L03	P084L05	P258L10
其大悲者	—	P23L03	P084L05	P258L10
深遠微妙	[427b]	P23L03	P084L05	P258L10
靡不覆載	—	P23L03	P084L06	P258L11
究竟一乘至于彼岸	[427b]	P23L04	P084L06	P258L11
[究竟]	[428a]	P23L04	P084L06	P258L11
決斷疑網	[428a]	P23L04	P084L06	P258L11
慧由心出於仏教法該羅無外	—	P23L04	P084L07	P258L12
智慧如大海	[428b]	P23L04	P084L07	P258L12
三昧如山王	—	P23L04	P084L08	P258L13
慧光明淨	[428b]	P23L04	P084L08	P258L13
超踰日月	—	P23L05	P084L08	P258L13
清白之法	[428b]	P23L05	P084L08	P258L13
具足円滿	[428b]	P23L05	P085L01	P258L14
猶如雪山	[428b]	P23L05	P085L01	P258L14
照諸功德等一淨故	[429a]	P23L05	P085L01	P258L14
猶如大地	[429a]	P23L05	P085L02	P258L15
淨穢好惡	—	P23L05	P085L02	P258L15
無異心	[429a]	P23L05	P085L02	P258L15
故	—	P23L06	P085L02	P258L15
猶如淨水	[429a]	P23L06	P085L02	P258L15
洗除	—	P23L06	P085L03	P258L16
塵勞	[429a]	P23L06	P085L03	P258L16
諸垢染故	—	P23L06	P085L03	P258L16
猶如火王	[429a]	P23L06	P085L03	P258L16
燒滅	—	P23L06	P085L03	P259L01
一切煩惱	[429b]	P23L06	P085L03	P259L01
薪故	—	P23L06	P085L04	P259L01
猶如大風	[429b]	P23L06	P085L04	P259L01

行諸世界無障礙故	—	P23L06	P085L04	P259L01
猶如虛空	[429b]	P23L07	P085L04	P259L02
於一切有無所著故	—	P23L07	P085L05	P259L02
猶如蓮華	[429b]	P23L07	P085L05	P259L03
於諸世間無污染故	—	P23L07	P085L05	P259L03
猶如大乘	[429b]	P23L07	P085L06	P259L03
運載	—	P23L07	P085L06	P259L04
群萌	[429b]	P23L07	P085L06	P259L04
出生死故	—	P23L07	P085L06	P259L04
猶如重雲	[429b]	P23L07	P085L07	P259L04
震大法雷覺未覺故	—	P23L08	P085L07	P259L05
猶如大雨	[429b]	P23L08	P085L07	P259L05
雨	—	P23L08	P085L07	P259L05
甘露法	[429b]	P23L08	P085L08	P259L05
潤衆生故	—	P23L08	P085L08	P259L06
如金剛山	[430a]	P23L08	P085L08	P259L06
衆魔	—	P23L08	P085L08	P259L06
外道	[430a]	P23L08	P085L08	P259L06
不能動故	—	P23L08	P085L08	P259L06
如梵天王	[430a]	P23L08	P086L01	P259L07
於	—	P23L09	P086L01	P259L07
諸善法	[430a]	P23L09	P086L01	P259L07
最上首故	—	P23L09	P086L01	P259L07
如尼拘類樹	[430a]	P23L09	P086L01	P259L07
普覆一切故	—	P23L09	P086L02	P259L08
如優曇鉢華	[430b]	P23L09	P086L02	P259L08
希有難遇故	—	P23L09	P086L02	P259L08
如金翅鳥	[430b]	P23L09	P086L03	P259L09
威伏外道故	—	P23L09	P086L03	P259L09
如衆遊禽	[431a]	P23L10	P086L03	P259L09
無所蔽積故	—	P23L10	P086L03	P259L09
猶如牛王	[431a]	P23L10	P086L04	P259L10
無能勝故	—	P23L10	P086L04	P259L10
猶如象王	[431a]	P23L10	P086L04	P259L10
善調伏故	—	P23L10	P086L04	P259L11
如師子王	[431a]	P23L10	P086L05	P259L11
無所畏故	—	P23L10	P086L05	P259L11
曠若虛空	[431a]	P23L10	P086L05	P259L11
大慈等故	—	P23L11	P086L05	P259L12
摧滅嫉心	[431b]	P23L11	P086L05	P259L12
不忌勝故	[431b]	P23L11	P086L06	P259L12
專樂求法	[431b]	P23L11	P086L06	P259L13
心	—	P23L11	P086L06	P259L13
無厭足	[431b]	P23L11	P086L06	P259L13
常欲広説志無疲倦	[431b]	P23L11	P086L06	P259L13

擊法鼓	[431b]	P23L11	P086L07	P259L13
建法幢	[431b]	P23L11	P086L07	P259L14
曜慧日除痴闇	[431b]	P23L11	P086L07	P259L14
修六和敬	[431b]	P23L12	P086L08	P259L14
常行法施	[432a]	P23L12	P086L08	P259L14
志勇精進心不退弱	—	P23L12	P086L08	P259L15
為世灯明	[432a]	P23L12	P087L01	P259L15
最勝福田	[432a]	P23L12	P087L01	P259L15
常為導師	[432a]	P23L12	P087L01	P259L16
等無憎愛	[432a]	P23L12	P087L01	P259L16
唯乘正道	[432a]	P23L13	P087L01	P259L16
無余欣戚	[432a]	P23L13	P087L02	P259L16
拔諸欲刺	[432b]	P23L13	P087L02	P260L01
以安群生	[432b]	P23L13	P087L02	P260L01
功慧殊勝	[433a]	P23L13	P087L02	P260L01
莫不尊敬	[433a]	P23L13	P087L03	P260L01
滅三垢障	[433a]	P23L13	P087L03	P260L02
遊諸神通	[433a]	P23L13	P087L03	P260L02
因力緣力	[433a]	P23L13	P087L03	P260L02
意力願力	[433a]	P23L13	P087L04	P260L03
方便之力常力善力	[433b]	P23L14	P087L04	P260L03
定力慧力	[433b]	P23L14	P087L04	P260L03
多聞之力	[433b]	P23L14	P087L05	P260L03
施戒	[433b]	P23L14	P087L05	P260L03
忍辱精進禪定智慧之力	—	P23L14	P087L05	P260L03
正念正觀諸通明力	[433b]	P23L14	P087L05	P260L04
如法調伏諸衆生力	[433b]	P23L15	P087L06	P260L04
如是等力	[434a]	P23L15	P087L06	P260L05
一切具足	—	P23L15	P087L07	P260L05
身色相好	[434a]	P23L15	P087L07	P260L05
功德弁才具足莊嚴無與等者	—	P23L15	P087L07	P260L05
恭敬供養	[434a]	P23L15	P087L08	P260L06
無量諸仏	—	P24L01	P087L08	P260L06
常為諸仏	[434a]	P24L01	P087L08	P260L06
所共称歎究竟菩薩諸波羅蜜修	—	P24L01	P088L01	P260L06
空無相	[434a]	P24L01	P088L01	P260L07
無願三昧	—	P24L01	P088L01	P260L07
不生不滅	[434a]	P24L01	P088L02	P260L07
諸三昧門	—	P24L01	P088L02	P260L07
遠離声聞	[434a]	P24L02	P088L02	P260L08
緣覺之地阿難彼諸菩薩成就	—	P24L02	P088L02	P260L08
如是無量功德	[434b]	P24L02	P088L03	P260L08
我但為汝略說之耳若広說者百千万劫	—	P24L02	P088L03	P260L09
不能窮尽	[434b]	P24L03	P088L04	P260L10
仏告勸勒菩薩	[434b]	P24L04	P088L06	P260L11



諸天人等無量寿国声聞菩薩功德智慧不可称說 又其国土微妙安樂清淨	—	P24L04	P088L06	P260L11
若此	[434b]	P24L04	P088L08	P260L12
何不力為善	[435a]	P24L05	P088L08	P260L13
念道之自然	[435a]	P24L05	P088L08	P260L13
著於無上下	[435a]	P24L05	P088L08	P260L13
洞達無辺際	[435b]	P24L05	P089L01	P260L14
宜各勤精進	[436a]	P24L05	P089L01	P260L14
努力自求之	[436a]	P24L05	P089L01	P260L14
必得超絶去	[436a]	P24L05	P089L02	P260L15
往生安養国	—	P24L05	P089L02	P260L15
横截五惡趣	[436a]	P24L06	P089L02	P260L15
惡趣自然閉	[436b]	P24L06	P089L02	P260L15
昇道無窮極	[436b]	P24L06	P089L03	P260L16
易往而無人	[436b]	P24L06	P089L03	P260L16
其国不逆違自然之所牽	[437a]	P24L06	P089L03	P260L16
何不棄世事	[437b]	P24L06	P089L04	P261L01
勤行求道德	—	P24L07	P089L04	P261L01
可獲極長生	[437b]	P24L07	P089L04	P261L01
寿樂	[437b]	P24L07	P089L05	P261L02
無有極	—	P24L07	P089L05	P261L02
然世人薄俗	[437b]	P24L07	P089L05	P261L02
共諍不急之事	[438b]	P24L07	P089L05	P261L02
於此	—	P24L07	P089L06	P261L03
劇惡	[438b]	P24L07	P089L06	P261L03
極苦之中	—	P24L07	P089L06	P261L03
勤身	[438b]	P24L08	P089L06	P261L03
營務	[438b]	P24L08	P089L06	P261L03
以自	—	P24L08	P089L06	P261L03
給濟	[439a]	P24L08	P089L07	P261L03
無尊無卑	[439a]	P24L08	P089L07	P261L04
無貧無富	—	P24L08	P089L07	P261L04
少長	[439a]	P24L08	P089L07	P261L04
男女共憂	—	P24L08	P089L07	P261L04
錢財	[439a]	P24L08	P089L07	P261L04
有無同然	[439a]	P24L08	P089L08	P261L05
憂思適等	—	P24L08	P089L08	P261L05
屏營	[439a]	P24L08	P089L08	P261L05
愁苦	—	P24L08	P089L08	P261L05
累念積慮	[439b]	P24L08	P089L08	P261L05
為心走使	[439b]	P24L09	P090L01	P261L06
無有安時	[439b]	P24L09	P090L01	P261L06
有田	[439b]	P24L09	P090L01	P261L06
憂田	—	P24L09	P090L01	P261L06
有宅憂宅	[439b]	P24L09	P090L01	P261L06

牛馬六畜	[439b]	P24L09	P090L01	P261L07
奴婢	[439b]	P24L09	P090L02	P261L07
錢財	[440a]	P24L09	P090L02	P261L07
衣食	—	P24L09	P090L02	P261L07
什物	[440a]	P24L09	P090L02	P261L07
復共憂之	[440a]	P24L09	P090L02	P261L07
重思累息	[440a]	P24L09	P090L02	P261L07
憂念愁怖	—	P24L10	P090L03	P261L08
橫為	[440a]	P24L10	P090L03	P261L08
非常	—	P24L10	P090L03	P261L08
水火	[440a]	P24L10	P090L03	P261L08
盜賊	[440a]	P24L10	P090L03	P261L08
怨家	—	P24L10	P090L03	P261L08
債主	[440a]	P24L10	P090L03	P261L08
焚漂	[440a]	P24L10	P090L04	P261L08
劫奪消散磨滅憂毒	—	P24L10	P090L04	P261L09
忪忪	[440b]	P24L10	P090L04	P261L09
無有	—	P24L10	P090L04	P261L09
解時	[440b]	P24L10	P090L04	P261L09
結憤心中	[440b]	P24L11	P090L05	P261L09
不離憂惱	—	P24L11	P090L05	P261L10
心堅意固	[440b]	P24L11	P090L05	P261L10
適無縱捨	—	P24L11	P090L05	P261L10
或坐摧碎	[440b]	P24L11	P090L05	P261L11
身亡命終	—	P24L11	P090L06	P261L11
棄捐之去	[440b]	P24L11	P090L06	P261L11
莫誰隨者	[440b]	P24L11	P090L06	P261L12
尊貴豪富	[441a]	P24L11	P090L06	P261L12
亦有斯患	[441a]	P24L11	P090L07	P261L12
憂懼万端	[441a]	P24L12	P090L07	P261L12
勤苦	[441a]	P24L12	P090L07	P261L12
若此	—	P24L12	P090L07	P261L12
結聚寒熱与痛共居	[441a]	P24L12	P090L07	P261L13
貧窮下劣	—	P24L12	P090L08	P261L13
困乏	[441b]	P24L12	P090L08	P261L13
常無	[441b]	P24L12	P090L08	P261L14
無田亦憂欲有田無宅亦憂欲有宅無牛馬六畜奴婢錢財衣食什物亦憂欲有之	—	P24L12	P090L08	P261L14
適	[441b]	P24L13	P091L02	P261L16
有一復少一	[441b]	P24L13	P091L02	P261L16
有是少是	[441b]	P24L13	P091L03	P261L16
思有齊等	[441b]	P24L13	P091L03	P262L01
適欲具有	[441b]	P24L13	P091L03	P262L01
便復	—	P24L14	P091L03	P262L01
糜散	[441b]	P24L14	P091L03	P262L01

如是憂苦當復求索不能時得思想無益身心俱勞	—	P24L14	P091L03	P262L02
坐起不安	[441b]	P24L14	P091L05	P262L03
憂念相隨	[442a]	P24L14	P091L05	P262L03
勤苦若此亦	—	P24L14	P091L05	P262L03
結業	[442a]	P24L15	P091L05	P262L04
寒熱與痛共居或時	—	P24L15	P091L06	P262L04
坐之	[442a]	P24L15	P091L06	P262L04
終身	—	P24L15	P091L06	P262L05
天命	[442a]	P24L15	P091L06	P262L05
不肯	[442a]	P24L15	P091L06	P262L05
為善行道進德壽終身死當獨遠去	—	P24L15	P091L06	P262L05
有所趣向	[442a]	P24L15	P091L07	P262L06
善惡之道	—	P25L01	P091L08	P262L06
莫能知者	[442a]	P25L01	P091L08	P262L06
世間人民	[442a]	P25L01	P091L08	P262L07
父子	[442a]	P25L01	P091L08	P262L07
兄弟夫婦	—	P25L01	P091L08	P262L07
家室	[442a]	P25L01	P092L01	P262L07
中外親屬	[442b]	P25L01	P092L01	P262L07
當相	[442b]	P25L01	P092L01	P262L07
敬愛無相憎嫉	—	P25L01	P092L01	P262L07
有無相通	[442b]	P25L01	P092L01	P262L08
無得貪惜	—	P25L02	P092L02	P262L08
言色常和	[442b]	P25L02	P092L02	P262L08
莫相違戾	[442b]	P25L02	P092L02	P262L08
或時心諍有所悲怒	[442b]	P25L02	P092L02	P262L09
今世	[443a]	P25L02	P092L03	P262L09
恨	[443a]	P25L02	P092L03	P262L09
意微相憎	—	P25L02	P092L03	P262L10
嫉	[443a]	P25L02	P092L03	P262L10
後世轉劇至成大怨所以者何世間之事更相患	—	P25L02	P092L03	P262L10
害	[443a]	P25L03	P092L04	P262L11
雖不即時時急相破	[443a]	P25L03	P092L04	P262L11
然	—	P25L03	P092L05	P262L11
含毒	[443a]	P25L03	P092L05	P262L12
畜怒	—	P25L03	P092L05	P262L12
結憤	[443a]	P25L03	P092L05	P262L12
精神	—	P25L03	P092L05	P262L12
自然剋識不得相離	[443b]	P25L03	P092L05	P262L12
皆當對生更相報復	[443b]	P25L04	P092L06	P262L13
人在世間	[444a]	P25L04	P092L06	P262L13
愛欲之中	—	P25L04	P092L07	P262L13
獨生獨死	[444a]	P25L04	P092L07	P262L14
獨去獨來	—	P25L04	P092L07	P262L14
當行	[444a]	P25L04	P092L07	P262L14

至趣	—	P25L04	P092L07	P262L14
苦業	[444a]	P25L04	P092L08	P262L14
之地身自	—	P25L04	P092L08	P262L14
当之	[444a]	P25L04	P092L08	P262L15
無有代者	—	P25L04	P092L08	P262L15
善惡變化殃福異處	[444a]	P25L05	P092L08	P262L15
宿予嚴待	[444b]	P25L05	P093L01	P262L15
當獨趣入	—	P25L05	P093L01	P262L16
遠到他所	[444b]	P25L05	P093L01	P262L16
莫能見者	[444b]	P25L05	P093L01	P262L16
善惡自然	[444b]	P25L05	P093L02	P263L01
追行	[444b]	P25L05	P093L02	P263L01
所生	—	P25L05	P093L02	P263L01
窈窈冥冥	[445a]	P25L05	P093L02	P263L01
別離久長	[445a]	P25L06	P093L02	P263L01
道路不同	[445a]	P25L06	P093L03	P263L02
會見	—	P25L06	P093L03	P263L02
無期	[445a]	P25L06	P093L03	P263L02
甚難甚難復得相值	—	P25L06	P093L03	P263L02
何不棄衆事	[445a]	P25L06	P093L04	P263L03
各	—	P25L06	P093L04	P263L03
曼	[445a]	P25L06	P093L04	P263L03
強健時	[445a]	P25L06	P093L04	P263L03
努力	[445b]	P25L06	P093L04	P263L03
勤修善精進願	—	P25L06	P093L04	P263L03
度世	[445b]	P25L07	P093L05	P263L04
可得極長生	[445b]	P25L07	P093L05	P263L04
如何	[445b]	P25L07	P093L05	P263L04
不求道	—	P25L07	P093L05	P263L04
安所須待	[445b]	P25L07	P093L05	P263L04
欲何樂哉	[445b]	P25L07	P093L06	P263L05
如是世人	[445b]	P25L07	P093L06	P263L05
[如是]	[446a]	P25L07	P093L06	P263L05
不信	[446a]	P25L07	P093L06	P263L06
作善	[446a]	P25L07	P093L06	P263L05
得善為道得道	—	P25L07	P093L06	P263L06
不信人死更生	[446a]	P25L08	P093L07	P263L06
惠施	[447a]	P25L08	P093L07	P263L06
得福	—	P25L08	P093L07	P263L07
善惡 [之] 事都不信之	[447a]	P25L08	P093L07	P263L07
謂之不然	[447a]	P25L08	P093L08	P263L07
終無有是	[447a]	P25L08	P093L08	P263L08
但坐此故	[447a]	P25L08	P093L08	P263L08
且自見之	[447a]	P25L08	P093L08	P263L08
更相瞻視先後同然	[447a]	P25L08	P094L01	P263L09

転相承受父余教令	[447b]	P25L09	P094L01	P263L09
先人祖父	[447b]	P25L09	P094L02	P263L09
素不為善不識道德	[447b]	P25L09	P094L02	P263L10
身愚神闇	[447b]	P25L09	P094L02	P263L10
心塞意閉	—	P25L09	P094L03	P263L10
死生之趣	[448a]	P25L09	P094L03	P263L11
善惡之道	—	P25L10	P094L03	P263L11
自不能兒無有語者	[448a]	P25L10	P094L03	P263L11
吉凶禍福	[448a]	P25L10	P094L04	P263L11
競各作之無一怪也	—	P25L10	P094L04	P263L12
生死常道	[448b]	P25L10	P094L04	P263L12
転相	—	P25L10	P094L05	P263L12
嗣立	[448b]	P25L10	P094L05	P263L13
或父哭子	[448b]	P25L10	P094L05	P263L13
或子哭父兄弟夫婦更相	—	P25L10	P094L05	P263L13
哭泣	[448b]	P25L11	P094L06	P263L14
顛倒上下	[448b]	P25L11	P094L06	P263L14
無常根本	[449a]	P25L11	P094L06	P263L14
皆當過去	—	P25L11	P094L06	P263L14
不可常保	[449a]	P25L11	P094L07	P263L14
教語開導	—	P25L11	P094L07	P263L15
信之者少	[449a]	P25L11	P094L07	P263L15
是以生死流転無有休止	—	P25L11	P094L07	P263L15
如此之人	[449a]	P25L12	P094L08	P263L16
朦冥抵突	[449b]	P25L12	P094L08	P263L16
不信經法	—	P25L12	P094L08	P263L16
心無遠慮	[449b]	P25L12	P095L01	P263L16
各欲快意	[449b]	P25L12	P095L01	P264L01
痴惑於愛欲	[449b]	P25L12	P095L01	P264L01
不達於道德	[449b]	P25L12	P095L01	P264L01
迷没於瞋怒	[449b]	P25L13	P095L02	P264L01
貪狼於財色	[449b]	P25L13	P095L02	P264L02
坐之不得道	—	P25L13	P095L02	P264L02
當更惡趣苦	[449b]	P25L13	P095L02	P264L02
生死無窮已哀哉甚可傷	—	P25L13	P095L03	P264L03
或時室家	[450a]	P25L13	P095L03	P264L03
父子兄弟夫婦	—	P25L13	P095L04	P264L04
一死一生	[450a]	P25L14	P095L04	P264L04
更相哀愍	[450a]	P25L14	P095L04	P264L04
恩愛思慕	[450a]	P25L14	P095L04	P264L04
憂念	—	P25L14	P095L05	P264L05
結縛	[450a]	P25L14	P095L05	P264L05
心意痛著	—	P25L14	P095L05	P264L05
迭相	[450a]	P25L14	P095L05	P264L05
願恋窮日卒歳無有解已教語道德	—	P25L14	P095L05	P264L05

心不開明	[450a]	P25L15	P095L06	P264L06
思想	—	P25L15	P095L06	P264L06
思好	[450b]	P25L15	P095L06	P264L06
不離情欲	—	P25L15	P095L07	P264L07
昏朦閉塞	[450b]	P25L15	P095L07	P264L07
愚惑所覆不能深思	—	P25L15	P095L07	P264L07
熟計	[450b]	P25L15	P095L07	P264L07
心自端正	[450b]	P25L15	P095L08	P264L08
專精行道	—	P25L15	P095L08	P264L08
決斷	[450b]	P26L01	P095L08	P264L08
世事	—	P26L01	P095L08	P264L08
便旋至竟	[450b]	P26L01	P095L08	P264L08
年壽終盡不能得道	—	P26L01	P096L01	P264L09
無可奈何	[450b]	P26L01	P096L01	P264L09
縱猥攪擾	[450b]	P26L01	P096L01	P264L10
皆貪愛欲	[451a]	P26L01	P096L01	P264L10
惑道者衆悟之者寡世間	—	P26L01	P096L02	P264L10
息息	[451a]	P26L02	P096L02	P264L11
無可	—	P26L02	P096L02	P264L11
悻賴	[451a]	P26L02	P096L03	P264L11
尊卑上下貧富貴賤	—	P26L02	P096L03	P264L11
勤苦息務	[451a]	P26L02	P096L03	P264L11
各懷殺毒	[451a]	P26L02	P096L03	P264L12
惡氣窮冥	[451a]	P26L02	P096L04	P264L12
為妄興事	—	P26L02	P096L04	P264L12
違逆天地	[451b]	P26L02	P096L04	P264L12
不從人心	[451b]	P26L02	P096L04	P264L13
自然非惡	—	P26L03	P096L05	P264L13
先隨与之	[451b]	P26L03	P096L05	P264L13
恣聽所為	[451b]	P26L03	P096L05	P264L13
待其罪極	[452a]	P26L03	P096L05	P264L14
其壽未盡	[452a]	P26L03	P096L05	P264L14
便頓奪之	[452a]	P26L03	P096L06	P264L14
下入惡道	[452a]	P26L03	P096L06	P264L15
累世	[452a]	P26L03	P096L06	P264L15
勤苦展轉	—	P26L03	P096L06	P264L15
其中	[452a]	P26L04	P096L07	P264L15
數千億劫無有出期	—	P26L04	P096L07	P264L15
痛不可言	[452a]	P26L04	P096L07	P264L16
甚可哀愍	—	P26L04	P096L07	P264L16
弘告彌勒菩薩	[452a]	P26L05	P097L01	P265L01
[彌勒菩薩]	[453b]	P26L05	P097L01	P265L01
諸天人等我今語汝	—	P26L05	P097L01	P265L01
世間之事人用是故	[453b]	P26L05	P097L01	P265L01
坐不得道	[453b]	P26L05	P097L02	P265L02

当熟思計遠離衆惡	—	P26L05	P097L02	P265L02
挾其善者	[453b]	P26L05	P097L03	P265L03
勤而行之	—	P26L06	P097L03	P265L03
愛欲榮華	[453b]	P26L06	P097L03	P265L03
不可常保	[453b]	P26L06	P097L03	P265L03
皆当別離	[453b]	P26L06	P097L03	P265L04
無可乘者	—	P26L06	P097L04	P265L04
曼佻在世当勤精進	[453b]	P26L06	P097L04	P265L04
其有至心	[454a]	P26L06	P097L04	P265L05
願生安樂国者	—	P26L06	P097L05	P265L05
可得智慧明達	[454a]	P26L07	P097L05	P265L05
功德殊勝	—	P26L07	P097L05	P265L05
勿得	[454a]	P26L07	P097L06	P265L07
隨心所欲	[454a]	P26L07	P097L06	P265L06
虧負経戒	[454a]	P26L07	P097L06	P265L06
在人後也	[454a]	P26L07	P097L06	P265L06
儻有疑意	[454a]	P26L07	P097L06	P265L07
不解経者可具問仏当為説之	—	P26L07	P097L07	P265L07
弥勒菩薩	[454b]	P26L08	P097L07	P265L08
長跪白言仏威神尊重	—	P26L08	P097L08	P265L08
所説快善	[454b]	P26L08	P097L08	P265L09
聽仏経語	—	P26L08	P097L08	P265L09
貫心思之世人実爾	[454b]	P26L08	P098L01	P265L09
如仏所言	—	P26L08	P098L01	P265L10
今仏慈愍	[454b]	P26L09	P098L01	P265L10
顯示大道	[454b]	P26L09	P098L02	P265L11
耳目開明	[454b]	P26L09	P098L02	P265L11
長得度脱	[454b]	P26L09	P098L02	P265L11
聞仏所説莫不歡喜諸天人	—	P26L09	P098L02	P265L11
蠕動之類	[454b]	P26L09	P098L03	P265L12
皆蒙慈恩解脫憂苦	—	P26L09	P098L03	P265L12
仏語教誡	[454b]	P26L10	P098L04	P265L13
甚深甚善智慧明見	—	P26L10	P098L04	P265L13
八方	[454b]	P26L10	P098L04	P265L14
上下	—	P26L10	P098L04	P265L14
去來	[455a]	P26L10	P098L05	P265L14
今事莫不究暢	—	P26L10	P098L05	P265L14
今我	[455a]	P26L10	P098L05	P265L14
衆等所以蒙得度脱	—	P26L10	P098L05	P265L14
皆仏前世	[455a]	P26L11	P098L06	P265L15
求道之時	—	P26L11	P098L06	P265L15
謙苦所致	[455a]	P26L11	P098L06	P265L15
恩德普覆	[455a]	P26L11	P098L06	P265L16
福祿巍巍	[455a]	P26L11	P098L07	P265L16
光明徹照達空無極	[455a]	P26L11	P098L07	P265L16

開入泥洹教授典攬	[455a]	P26L11	P098L07	P266L01
威制消化感動十方	[455b]	P26L12	P098L08	P266L01
無窮無極仏為法王尊超	—	P26L12	P098L08	P266L02
衆聖	[455b]	P26L12	P099L01	P266L02
普為一切	—	P26L12	P099L01	P266L03
天人之師	[455b]	P26L12	P099L01	P266L03
隨心所願	[455b]	P26L12	P099L01	P266L03
皆令得道今得值仏復聞	—	P26L12	P099L02	P266L03
無量寿仏 <small>声</small>	[455b]	P26L13	P099L02	P266L04
靡不歡喜	—	P26L13	P099L03	P266L05
心得開明	[456a]	P26L13	P099L03	P266L05
仏告弥勒菩薩	[456a]	P26L14	P099L04	P266L06
汝言是也	[456a]	P26L14	P099L04	P266L06
若有	—	P26L14	P099L04	P266L06
慈敬	[456a]	P26L14	P099L04	P266L06
於仏者實為大善	—	P26L14	P099L04	P266L06
天下久久乃復有仏	[456a]	P26L14	P099L05	P266L07
今我	[456b]	P26L14	P099L05	P266L07
於此世作仏	—	P26L14	P099L05	P266L07
演說經法	[456b]	P26L14	P099L06	P266L08
宣布	[456b]	P26L15	P099L06	P266L08
道教	—	P26L15	P099L06	P266L08
斷諸疑網拔愛欲之本	[456b]	P26L15	P099L06	P266L08
杜衆惡之源	[456b]	P26L15	P099L07	P266L09
遊步	[457a]	P26L15	P099L07	P266L09
三界無所拘礙	—	P26L15	P099L07	P266L09
典攬智慧衆道之要	[457a]	P26L15	P099L07	P266L09
執持綱維昭然分明	[457a]	P27L01	P099L08	P266L10
開示五趣	[457a]	P27L01	P099L08	P266L10
度未度者	[457a]	P27L01	P100L01	P266L10
決正生死	[457a]	P27L01	P100L01	P266L11
泥洹之道弥勒當知汝從無數劫來修菩薩行欲度衆生	—	P27L01	P100L01	P266L11
其已久遠	[457b]	P27L02	P100L02	P266L12
從汝得道	[457b]	P27L02	P100L03	P266L13
至于泥洹不可稱數	—	P27L02	P100L03	P266L13
汝及十方	[457b]	P27L02	P100L03	P266L13
諸天人民一切四衆永劫已來展轉五道	—	P27L02	P100L04	P266L13
憂畏勤苦	[457b]	P27L03	P100L04	P266L14
不可具言乃至今世生死不絶与仏相值聽受經法又復得聞無量寿仏	—	P27L03	P100L05	P266L14
快哉甚善	[457b]	P27L04	P100L06	P266L16
吾助爾喜	[458a]	P27L04	P100L07	P266L16
汝今	[458a]	P27L04	P100L07	P267L01
亦可自厭	—	P27L04	P100L07	P267L01



生死老病痛苦	[458a]	P27L04	P100L07	P267L01
惡露不淨	[458a]	P27L04	P100L08	P267L01
無可樂者	—	P27L04	P100L08	P267L01
宜自決斷	[458b]	P27L04	P100L08	P267L02
端身正行	[458b]	P27L04	P100L08	P267L02
益作諸善	—	P27L04	P100L08	P267L02
修己潔體	[458b]	P27L05	P101L01	P267L03
洗除心垢	—	P27L05	P101L01	P267L03
言行忠信	[459a]	P27L05	P101L01	P267L03
表裏相応	—	P27L05	P101L01	P267L03
人能自度	[459a]	P27L05	P101L02	P267L04
輒相拯濟	[459b]	P27L05	P101L02	P267L04
精明求願	—	P27L05	P101L02	P267L04
積累善本	[459b]	P27L05	P101L02	P267L04
雖一世勤苦	[459b]	P27L05	P101L03	P267L05
須臾	[460a]	P27L06	P101L03	P267L05
之間後生無量壽仏同快樂無極	—	P27L06	P101L03	P267L05
長与道徳合明	[460a]	P27L06	P101L04	P267L06
永拔生死根本	[460a]	P27L06	P101L04	P267L06
無復貪恚愚痴	—	P27L06	P101L04	P267L06
苦惱之患	[460a]	P27L06	P101L05	P267L07
欲寿	[460a]	P27L07	P101L05	P267L07
一劫百劫	[460a]	P27L07	P101L05	P267L07
千万億劫自在随意皆可得之	—	P27L07	P101L05	P267L07
無為自然	[460b]	P27L07	P101L06	P267L08
次於泥洹之道汝等宜各精進求心所願無得	—	P27L07	P101L06	P267L08
疑惑中悔	[460b]	P27L08	P101L07	P267L09
自為	—	P27L08	P101L08	P267L09
過咎	[461a]	P27L08	P101L08	P267L09
生彼辺地	[461a]	P27L08	P101L08	P267L10
七宝宮殿	[461b]	P27L08	P101L08	P267L10
五百歳	[461b]	P27L08	P101L08	P267L10
中	—	P27L08	P102L01	P267L10
受諸厄	[461b]	P27L08	P102L01	P267L10
也弼勒白仏言	—	P27L08	P102L01	P267L11
受仏	[462b]	P27L08	P102L01	P267L11
重誨專精修学如教奉行	—	P27L09	P102L01	P267L11
不敢有疑	[463a]	P27L09	P102L02	P267L12
仏告弼勒	[463b]	P27L10	P102L03	P267L13
汝等能於此世	—	P27L10	P102L03	P267L13
端心正意	[464b]	P27L10	P102L03	P267L13
不作	—	P27L10	P102L03	P267L14
衆惡	[464b]	P27L10	P102L03	P267L13
甚為	—	P27L10	P102L04	P267L14
至徳	[464b]	P27L10	P102L04	P267L14

十方世界	[465a]	P27L10	P102L04	P267L14
最無倫匹所以者何	—	P27L10	P102L04	P267L14
諸仏国土	[465a]	P27L10	P102L05	P267L14
天人之類	—	P27L11	P102L05	P267L15
自然作善	[465a]	P27L11	P102L05	P267L15
不大為惡	[465a]	P27L11	P102L05	P267L15
易可開化	[465a]	P27L11	P102L05	P267L15
今我	—	P27L11	P102L06	P267L15
於此世間	[465a]	P27L11	P102L06	P267L16
作仏處於五惡五痛五燒之中	—	P27L11	P102L06	P267L16
為最劇苦	[465b]	P27L11	P102L07	P267L16
教化群生	—	P27L12	P102L07	P268L01
令捨五惡令去五痛令離五燒	[465b]	P27L12	P102L07	P268L01
降化其意	[465b]	P27L12	P102L08	P268L02
令持五善	[465b]	P27L12	P102L08	P268L02
獲其福德	[465b]	P27L12	P102L08	P268L02
度世	[466a]	P27L12	P103L01	P268L02
長壽泥洹之道仏言何等五惡何等五痛何等五燒何等	—	P27L12	P103L01	P268L02
消化五惡	[466a]	P27L13	P103L02	P268L04
令持五善獲其福德度世長壽泥洹之道	—	P27L13	P103L02	P268L04
仏言其一惡者	[466b]	P27L14	P103L04	P268L06
諸天人民蠕動之類	[467b]	P27L14	P103L04	P268L06
欲為衆惡	[467b]	P27L14	P103L04	P268L06
莫不皆然	—	P27L14	P103L05	P268L07
強者伏弱	[467b]	P27L14	P103L05	P268L07
転相剋賊	[467b]	P27L14	P103L05	P268L07
殘害殺戮	[467b]	P27L14	P103L05	P268L07
迭相吞噬	[467b]	P27L14	P103L06	P268L08
不知修善	—	P27L15	P103L06	P268L08
惡逆無道	[467b]	P27L15	P103L06	P268L08
後受殃罰	[468a]	P27L15	P103L06	P268L08
自然趣向	[468a]	P27L15	P103L06	P268L09
神明記識	[468a]	P27L15	P103L07	P268L09
犯者不赦	[470a]	P27L15	P103L07	P268L09
故有	[470a]	P27L15	P103L07	P268L09
貧窮下賤	[470a]	P27L15	P103L07	P268L09
乞匄	[470b]	P27L15	P103L08	P268L10
孤独	[470b]	P27L15	P103L08	P268L10
聾盲	[470b]	P27L15	P103L08	P268L10
瘡痍	[470b]	P28L01	P103L08	P268L10
愚痴	—	P28L01	P103L08	P268L10
弊惡	[470b]	P28L01	P103L08	P268L10
至有	[470b]	P28L01	P103L08	P268L10
尪狂	[470b]	P28L01	P103L08	P268L10

不逮	[471a]	P28L01	P103L08	P268L10
之属	—	P28L01	P104L01	P268L10
又有尊貴	[471a]	P28L01	P104L01	P268L11
[尊貴] 豪富	[471a]	P28L01	P104L01	P268L11
高才明達皆由宿世	—	P28L01	P104L01	P268L11
慈孝	[471a]	P28L01	P104L02	P268L11
修善	[471a]	P28L01	P104L02	P268L11
積德所致	—	P28L01	P104L02	P268L11
世有常道	[471a]	P28L02	P104L02	P268L12
王法	—	P28L02	P104L02	P268L12
牢獄	[471a]	P28L02	P104L02	P268L12
不肯畏慎為惡	—	P28L02	P104L02	P268L12
入罪	[471b]	P28L02	P104L03	P268L13
受其殃罰求望解脫難得免出世間有此目前見事	—	P28L02	P104L03	P268L13
壽終後世	[471b]	P28L03	P104L04	P268L14
尤深尤劇	[471b]	P28L03	P104L04	P268L14
入其幽冥	—	P28L03	P104L05	P268L15
轉生受身	[471b]	P28L03	P104L05	P268L15
譬如	[471b]	P28L03	P104L05	P268L15
王法痛苦極刑	—	P28L03	P104L05	P268L15
故有自然	[471b]	P28L03	P104L06	P268L16
三塗無量苦惱	—	P28L03	P104L06	P268L16
轉質其身	[471b]	P28L03	P104L06	P268L16
改形易道	[472a]	P28L04	P104L06	P268L16
所受壽命	—	P28L04	P104L07	P268L16
或長或短	[472a]	P28L04	P104L07	P269L01
魂神精識	[472a]	P28L04	P104L07	P269L01
自然趣之	—	P28L04	P104L07	P269L01
当独面向	[472b]	P28L04	P104L08	P269L01
相從共生更相報復無有絕已殃惡未盡	—	P28L04	P104L08	P269L02
不得相離	[472b]	P28L05	P105L01	P269L03
展轉其中	[472b]	P28L05	P105L01	P269L03
無有出期難得解脫痛不可言	—	P28L05	P105L01	P269L04
天地	[473a]	P28L05	P105L02	P269L04
之間	—	P28L05	P105L02	P269L04
自然有是	[473a]	P28L05	P105L02	P269L04
雖不即時	—	P28L05	P105L02	P269L05
卒暴	[473a]	P28L06	P105L03	P269L05
應至	—	P28L06	P105L03	P269L05
善惡之道	[473a]	P28L06	P105L03	P269L05
会当	—	P28L06	P105L03	P269L05
婦之	[473a]	P28L06	P105L03	P269L05
是為一大惡一痛一燒	—	P28L06	P105L03	P269L06
勤	[473a]	P28L06	P105L04	P269L06
苦如是	—	P28L06	P105L04	P269L06

譬如	[473a]	P28L06	P105L04	P269L06
大火	[473a]	P28L06	P105L04	P269L07
焚燒人身	—	P28L06	P105L04	P269L07
人能於中	[473a]	P28L06	P105L05	P269L07
一心	—	P28L07	P105L05	P269L07
制意	[473a]	P28L07	P105L05	P269L07
端身正行	[473a]	P28L07	P105L05	P269L08
獨作	[473a]	P28L07	P105L05	P269L08
諸善	[473b]	P28L07	P105L05	P269L08
不為眾惡	[473b]	P28L07	P105L05	P269L08
者身獨度脫獲其	—	P28L07	P105L06	P269L08
福德	[473b]	P28L07	P105L06	P269L09
度世	[473b]	P28L07	P105L06	P269L09
上天	[473b]	P28L07	P105L06	P269L09
泥洹之道是為一大善也	—	P28L07	P105L06	P269L09
佞言其二惡	[473b]	P28L09	P105L08	P269L10
世間人民	—	P28L09	P105L08	P269L10
父子兄弟室家夫婦	[473b]	P28L09	P105L08	P269L10
都無義理不順法度	[474a]	P28L09	P106L01	P269L10
奢淫	[474a]	P28L09	P106L01	P269L11
僥縱	[474a]	P28L09	P106L01	P269L11
各欲快意	—	P28L09	P106L01	P269L11
任心	[474a]	P28L09	P106L02	P269L11
自恣更相欺惑	—	P28L09	P106L02	P269L12
心口各異言念無實	[474a]	P28L10	P106L02	P269L12
佞諂不忠	[474a]	P28L10	P106L02	P269L13
巧言諛媚	[474b]	P28L10	P106L03	P269L13
嫉賢	[474b]	P28L10	P106L03	P269L13
謗善	—	P28L10	P106L03	P269L13
陷入冤枉	[474b]	P28L10	P106L03	P269L13
主上不明	[475a]	P28L10	P106L03	P269L14
任用臣下	[475a]	P28L10	P106L04	P269L14
臣下自在	—	P28L11	P106L03	P269L13
機偽多端	[475a]	P28L11	P106L04	P269L14
踐度能行	[475a]	P28L11	P106L04	P269L15
知其形勢	[475a]	P28L11	P106L05	P269L15
在位不正	[475b]	P28L11	P106L05	P269L15
為其所欺	—	P28L11	P106L05	P269L15
妄損忠良不当天心	[475b]	P28L11	P106L05	P269L16
臣欺其君	[475b]	P28L11	P106L06	P269L16
子欺其父兄弟夫婦	—	P28L12	P106L06	P269L16
中外	[475b]	P28L12	P106L06	P270L01
知識	[476a]	P28L12	P106L07	P270L01
更相欺誑	[476a]	P28L12	P106L07	P270L01
各懷貪欲瞋恚愚痴	[476a]	P28L12	P106L07	P270L01

欲自厚己	—	P28L12	P106L07	P270L02
欲貪多有	[476a]	P28L12	P106L08	P270L02
尊卑上下心俱同然	—	P28L12	P106L08	P270L02
破家亡身	[476a]	P28L13	P106L08	P270L03
不顧前後	[476a]	P28L13	P107L01	P270L03
親屬內外	[476a]	P28L13	P107L01	P270L03
坐之	[476a]	P28L13	P107L01	P270L04
而滅	—	P28L13	P107L01	P270L04
或時	[476a]	P28L13	P107L01	P270L04
室家知識	[476a]	P28L13	P107L01	P270L04
鄉党市里	[476a]	P28L13	P107L02	P270L04
愚民	[476b]	P28L13	P107L02	P270L04
野人	[476b]	P28L13	P107L02	P270L04
転共從事	[476b]	P28L13	P107L02	P270L04
更相利害	[476b]	P28L13	P107L02	P270L05
忿成怨結	—	P28L14	P107L03	P270L05
富有慳惜	[476b]	P28L14	P107L03	P270L05
不肯施与	[476b]	P28L14	P107L03	P270L05
愛宝貪重	[476b]	P28L14	P107L03	P270L06
心勞身苦	[476b]	P28L14	P107L04	P270L06
如是	[476b]	P28L14	P107L04	P270L06
至竟	[476b]	P28L14	P107L04	P270L06
無所恃怙	[476b]	P28L14	P107L04	P270L07
独来独去	—	P28L14	P107L04	P270L07
無一隨者	[477a]	P28L14	P107L04	P270L07
善惡禍福追命所生	[477a]	P28L15	P107L05	P270L07
或在樂处	—	P28L15	P107L05	P270L08
或入苦毒	[477a]	P28L15	P107L05	P270L08
然後乃悔	[477a]	P28L15	P107L06	P270L08
当復何及	—	P28L15	P107L06	P270L09
世間人民	[477a]	P28L15	P107L06	P270L09
心愚少智	[477a]	P28L15	P107L06	P270L09
見善憎謗	[477a]	P28L15	P107L07	P270L10
不思慕及	—	P29L01	P107L07	P270L10
但欲為惡	[477b]	P29L01	P107L07	P270L10
妄作非法	—	P29L01	P107L07	P270L10
常懷盜心	[477b]	P29L01	P107L08	P270L11
稀望他利	—	P29L01	P107L08	P270L11
消散糜尽	[477b]	P29L01	P107L08	P270L11
而復求索	[477b]	P29L01	P107L08	P270L12
邪心不正懼人有色	[477b]	P29L01	P107L08	P270L12
不予思計	[477b]	P29L02	P108L01	P270L12
事至乃悔今世現有王法牢獄隨罪趣向	—	P29L02	P108L01	P270L13
受其殃罰	[478a]	P29L02	P108L02	P270L14
因其前世	[478a]	P29L02	P108L02	P270L14

不信道德不修善本今復為惡	—	P29L02	P108L03	P270L14
天神	[478a]	P29L03	P108L03	P270L15
剋識	[478a]	P29L03	P108L03	P270L15
別其名籍	[478a]	P29L03	P108L04	P270L15
壽終神逝下入惡道故有自然三塗無量苦惱展轉其中世世累劫無有出期難得解脫痛不可言是為二大惡二痛二燒勤苦如是譬如大火焚燒人身心能於中一心制意端身正行	—	P29L03	P108L04	P270L15
獨作諸善	[478a]	P29L05	P108L08	P271L03
不為眾惡者身獨度脫獲其福德度世上天泥洹之道是為二大善也	—	P29L05	P108L08	P271L04
仏言其三惡者	[478a]	P29L07	P109L03	P271L06
世間人民	—	P29L07	P109L03	P271L06
相因寄生	[478b]	P29L07	P109L03	P271L06
共居	—	P29L07	P109L03	P271L06
天地之間	[479a]	P29L07	P109L03	P271L06
延年壽命無能幾何	[479a]	P29L07	P109L04	P271L07
上有	[479a]	P29L07	P109L04	P271L07
賢明	[479a]	P29L07	P109L04	P271L07
長者	[479a]	P29L07	P109L04	P271L07
尊貴	[479b]	P29L07	P109L05	P271L07
豪富	[479b]	P29L07	P109L05	P271L07
下有	—	P29L08	P109L05	P271L08
貧窮	[479b]	P29L08	P109L05	P271L08
賤賤	[479b]	P29L08	P109L05	P271L08
厄劣	[479b]	P29L08	P109L05	P271L08
愚夫	[479b]	P29L08	P109L05	P271L08
中有不善之人	[479b]	P29L08	P109L05	P271L08
常懷邪惡	[480a]	P29L08	P109L06	P271L08
但念淫婬	[480a]	P29L08	P109L06	P271L09
煩滿胸中	[480a]	P29L08	P109L06	P271L09
愛欲	—	P29L08	P109L06	P271L09
交乱	[480a]	P29L08	P109L07	P271L09
坐起不安	—	P29L08	P109L07	P271L09
貪意守惜	[480a]	P29L09	P109L07	P271L09
但欲	—	P29L09	P109L07	P271L10
唐得	[480a]	P29L09	P109L07	P271L10
眇映細色	[480b]	P29L09	P109L07	P271L10
邪慳	[480b]	P29L09	P109L08	P271L10
外逸	[480b]	P29L09	P109L08	P271L10
自妻厭憎	—	P29L09	P109L08	P271L10
私妄入出	[480b]	P29L09	P109L08	P271L11
費損家財	[481a]	P29L09	P109L08	P271L11
事為非法	[481a]	P29L09	P110L01	P271L11
交結聚會	[481b]	P29L09	P110L01	P271L11

興師	[481b]	P29L10	P110L01	P271L12
相伐	—	P29L10	P110L01	P271L12
攻劫	[481b]	P29L10	P110L01	P271L12
殺戮	[482a]	P29L10	P110L01	P271L12
強奪	[482a]	P29L10	P110L01	P271L12
不道	[482a]	P29L10	P110L02	P271L12
惡心在外	[482a]	P29L10	P110L02	P271L12
不自修業	[482a]	P29L10	P110L02	P271L13
盜竊趣得	—	P29L10	P110L02	P271L13
欲繫成事	[482a]	P29L10	P110L02	P271L13
恐熱迫情	[482b]	P29L10	P110L03	P271L13
婦給妻子	[482b]	P29L10	P110L03	P271L14
恣心快意	[482b]	P29L11	P110L03	P271L14
極身作樂	[483a]	P29L11	P110L03	P271L14
或於親屬	[483a]	P29L11	P110L04	P271L14
不避	—	P29L11	P110L04	P271L15
尊卑	[483a]	P29L11	P110L04	P271L15
家室中外患而苦之	—	P29L11	P110L04	P271L15
亦復不畏	[483a]	P29L11	P110L05	P271L15
王法禁令如是之惡	—	P29L11	P110L05	P271L15
著於人鬼	[483b]	P29L11	P110L05	P271L16
日月照見神明記識	[483b]	P29L12	P110L05	P271L16
故有自然三塗無量苦惱展轉其中世世累劫無有 出期難得解脫痛不可言是為三大惡三痛三燒勤 苦如是譬如大火燒人身心能於中	—	P29L12	P110L06	P272L01
一心制意	[483b]	P29L13	P111L01	P272L04
端身正行	—	P29L13	P111L01	P272L04
獨作諸善	[483b]	P29L14	P111L02	P272L04
不為衆惡者身獨脫獲其福德度世上天泥洹之 道是為三大善也	—	P29L14	P111L02	P272L05
佞言其四惡	[483b]	P29L15	P111L04	P272L07
世間人民不念修善	—	P29L15	P111L04	P272L07
輒相教令	[484a]	P29L15	P111L04	P272L07
共為衆惡	—	P29L15	P111L05	P272L08
兩舌	[484a]	P29L15	P111L05	P272L08
惡口	[484a]	P29L15	P111L05	P272L08
妄言	[484a]	P29L15	P111L05	P272L08
綺語	[484b]	P29L15	P111L05	P272L08
讒賊	[485a]	P29L15	P111L05	P272L08
闢亂憎嫉善人敗壞	—	P29L15	P111L05	P272L08
賢明	[485a]	P30L01	P111L06	P272L09
於傍快喜	[485a]	P30L01	P111L06	P272L09
不孝二親	[485a]	P30L01	P111L06	P272L09
輕慢	—	P30L01	P111L06	P272L10
師長	[485b]	P30L01	P111L07	P272L09

朋友無信	[485b]	P30L01	P111L07	P272L10
難得誠實	—	P30L01	P111L07	P272L10
尊貴自大	[485b]	P30L01	P111L07	P272L10
謂己有道	—	P30L01	P111L07	P272L10
橫行威勢	[485b]	P30L01	P111L08	P272L11
侵易	[485b]	P30L02	P111L08	P272L11
於人	—	P30L02	P111L08	P272L11
不能自知	[485b]	P30L02	P111L08	P272L11
為惡無恥	[486a]	P30L02	P111L08	P272L11
自以強健	[486a]	P30L02	P112L01	P272L12
欲人	—	P30L02	P112L01	P272L12
敬難	[486a]	P30L02	P112L01	P272L12
不畏天地神明日月	—	P30L02	P112L01	P272L12
不肯作善	[486a]	P30L02	P112L02	P272L13
難可降化	[486a]	P30L02	P112L02	P272L13
自用	—	P30L02	P112L02	P272L13
假僂	[486a]	P30L03	P112L02	P272L13
謂可常爾	[486a]	P30L03	P112L02	P272L13
無所憂懼常懷	—	P30L03	P112L02	P272L14
驕慢	[486a]	P30L03	P112L03	P272L14
如是衆惡天神記識	—	P30L03	P112L03	P272L14
賴其前世頗作福德	[486b]	P30L03	P112L03	P272L15
小善扶接	[486b]	P30L03	P112L04	P272L15
營護助之今世為惡福德盡滅諸善鬼神	—	P30L03	P112L04	P272L15
各共離之	[487a]	P30L04	P112L05	P272L16
身独自立	[487a]	P30L04	P112L05	P273L01
無所復依壽命終盡諸惡	—	P30L04	P112L06	P273L01
所歸	[487a]	P30L04	P112L06	P273L02
自然	—	P30L04	P112L06	P273L02
迫促	[487a]	P30L05	P112L06	P273L02
共趣	[487a]	P30L05	P112L06	P273L02
頓之	[487a]	P30L05	P112L07	P273L02
又其名籍	—	P30L05	P112L07	P273L02
記在神明	[487a]	P30L05	P112L07	P273L02
殃咎牽引當往趣向罪報自然	—	P30L05	P112L07	P273L03
無從捨離但得前行	[487a]	P30L05	P112L08	P273L03
入於	—	P30L05	P112L08	P273L04
火鑪	[487a]	P30L05	P112L08	P273L04
身心摧碎精神痛苦當斯之時悔復何及	—	P30L06	P113L01	P273L04
天道	[487a]	P30L06	P113L02	P273L05
自然不得	—	P30L06	P113L02	P273L05
蹉跌	[487b]	P30L06	P113L02	P273L05



故有自然三塗無量苦惱展轉其中世世累劫無有 出期難得解脫痛不可言是為四大惡四痛四燒勤 苦如是譬如大火焚燒人身心能於中一心制意端 身正行	—	P30L06	P113L02	P273L06
自作諸善	[487b]	P30L08	P113L06	P273L09
不為衆惡者身獨脫獲其福德度世上天泥洹之 道是為四大善也	—	P30L08	P113L06	P273L10
佞言其五惡者	[487b]	P30L10	P113L08	P273L12
世間人民	—	P30L10	P113L08	P273L12
徒倚懈惰	[489a]	P30L10	P113L08	P273L12
不肯作善	—	P30L10	P113L08	P273L12
治身修業	[489a]	P30L10	P114L01	P273L13
家室眷屬	—	P30L10	P114L01	P273L13
飢寒困苦	[489a]	P30L10	P114L01	P273L13
父母教誨	[489b]	P30L10	P114L01	P273L13
瞋目	—	P30L10	P114L02	P273L13
怨鷹	[489b]	P30L10	P114L02	P273L14
言令不和違戾反逆	[489b]	P30L11	P114L02	P273L14
譬如怨家不如無子	—	P30L11	P114L02	P273L14
取与無節	[489b]	P30L11	P114L03	P273L15
衆共志厭	[490a]	P30L11	P114L03	P273L15
負恩違義	[490a]	P30L11	P114L03	P273L15
無有報償之心	[490a]	P30L11	P114L03	P273L16
貧窮困乏	—	P30L11	P114L04	P273L16
不能復得	[490a]	P30L12	P114L04	P273L16
辜較縱奪	[490a]	P30L12	P114L04	P273L16
放恣遊散	[490b]	P30L12	P114L04	P274L01
串數唐得	[490b]	P30L12	P114L05	P274L01
用自賑給	[490b]	P30L12	P114L05	P274L01
耽酒嗜美飲食無度	[490b]	P30L12	P114L05	P274L01
[飲食無度]	[490b]	P30L12	P114L05	P274L02
肆心蕩逸	[491a]	P30L12	P114L06	P274L02
魯扞抵突	[491a]	P30L12	P114L06	P274L02
不識人情	—	P30L13	P114L06	P274L02
強欲抑制	[491b]	P30L13	P114L06	P274L03
見人有善憎嫉惡之	[491b]	P30L13	P114L07	P274L03
無義無礼	[491b]	P30L13	P114L07	P274L03
無所顧難	[492a]	P30L13	P114L07	P274L04
自用職当	[492a]	P30L13	P114L08	P274L04
不可諫曉	[492a]	P30L13	P114L08	P274L04
六親眷屬	[492a]	P30L13	P114L08	P274L04
所寶有無	[492a]	P30L14	P114L08	P274L05
不能憂念	[492a]	P30L14	P114L08	P274L05
不惟父母之恩不存師友之義	—	P30L14	P115L01	P274L05
心常念惡	[492b]	P30L14	P115L01	P274L06

口常言惡身常行惡	—	P30L14	P115L02	P274L06
曾無一善	[492b]	P30L14	P115L02	P274L06
不信先聖	[492b]	P30L15	P115L02	P274L07
諸仏緣法不信行道可得度世	—	P30L15	P115L03	P274L07
不信死後神明更生	[492b]	P30L15	P115L03	P274L08
不信	—	P30L15	P115L04	P274L09
作善得善為惡得惡	[493a]	P30L15	P115L04	P274L08
欲殺真人	[493a]	P30L15	P115L04	P274L09
闖亂衆僧欲害父母兄弟眷屬六親	—	P31L01	P115L05	P274L09
憎惡	[493b]	P31L01	P115L05	P274L10
願令其死	[493b]	P31L01	P115L06	P274L10
如是世人	[494a]	P31L01	P115L06	P274L10
心意俱然	[494a]	P31L01	P115L06	P274L11
愚痴譫味	[494a]	P31L01	P115L06	P274L11
而自以智慧	[494a]	P31L01	P115L06	P274L11
不知生所從來死所趣向	[494a]	P31L02	P115L07	P274L11
不仁不順	[494b]	P31L02	P115L07	P274L12
惡逆天地	[494b]	P31L02	P115L08	P274L12
而於其中	[494b]	P31L02	P115L08	P274L12
怖望僥倖	[494b]	P31L02	P115L08	P274L13
欲求長生	[495a]	P31L02	P115L08	P274L13
會當歸死	—	P31L02	P116L01	P274L13
慈心教誨	[495a]	P31L02	P116L01	P274L14
令其念善開示生死善惡之趣自然有是而不肯信之苦心与語無益其人	—	P31L03	P116L01	P274L14
心中閉塞	[495a]	P31L03	P116L03	P274L16
意不開解	—	P31L03	P116L03	P274L16
大命將終	[495a]	P31L04	P116L03	P274L16
悔懼交至	[495b]	P31L04	P116L03	P275L01
不予	[495b]	P31L04	P116L04	P275L01
修善	—	P31L04	P116L04	P275L01
臨窮	[495b]	P31L04	P116L04	P275L01
方悔悔之於後將何及乎	—	P31L04	P116L04	P275L01
天地之間	[495b]	P31L04	P116L05	P275L02
五道分明	—	P31L04	P116L05	P275L02
恢廓窈窕浩浩茫茫	[495b]	P31L04	P116L05	P275L02
善惡報應	[495b]	P31L05	P116L06	P275L03
禍福相承	[495b]	P31L05	P116L06	P275L03
身自	—	P31L05	P116L06	P275L03
当之	[496a]	P31L05	P116L06	P275L03
無誰代者	—	P31L05	P116L06	P275L03
數之	[496a]	P31L05	P116L06	P275L04
自然	—	P31L05	P116L07	P275L04
應其所行	[496a]	P31L05	P116L07	P275L04
殃咎	—	P31L05	P116L07	P275L04

追命	[496a]	P31L05	P116L07	P275L04
無得縱捨	—	P31L05	P116L07	P275L04
善人行善	[496a]	P31L06	P116L07	P275L05
從樂入樂從明入明	—	P31L06	P116L08	P275L05
惡人行惡	[496a]	P31L06	P116L08	P275L05
從苦入苦從冥入冥	—	P31L06	P116L08	P275L06
誰能知者	[496b]	P31L06	P117L01	P275L06
獨仏知耳	—	P31L06	P117L01	P275L06
教語開示	[496b]	P31L06	P117L01	P275L07
信用者少	[496b]	P31L07	P117L02	P275L07
生死不休惡道不絶	—	P31L07	P117L02	P275L07
如是世人	[496b]	P31L07	P117L02	P275L08
難可具尽	[496b]	P31L07	P117L02	P275L08
故有自然三塗	[496b]	P31L07	P117L03	P275L08
無量苦惱展轉其中世世累劫無有出期難得解脫 痛不可言是為五大惡五痛五燒勤苦如是譬如大 火燒人人身人能於中一心制意端身正念	—	P31L07	P117L03	P275L09
言行相副	[496b]	P31L09	P117L06	P275L12
所作至誠所語如語心口不轉	—	P31L09	P117L07	P275L12
獨作諸善	[496b]	P31L09	P117L07	P275L13
不為衆惡者身獨度脫獲其福德度世上天泥洹之 道是為五大善也	—	P31L09	P117L08	P275L13
仏告弥勒	[496b]	P31L11	P118L02	P275L15
吾語汝等是世五惡勤苦若此五痛五燒	—	P31L11	P118L02	P275L15
展轉相生	[497a]	P31L11	P118L03	P275L16
但作衆惡不修善本	—	P31L11	P118L03	P275L16
皆悉自然入諸惡趣	[497a]	P31L11	P118L03	P276L01
或其今世	[497a]	P31L12	P118L04	P276L01
先被殃病	[497a]	P31L12	P118L04	P276L01
求死不得求生不得	—	P31L12	P118L04	P276L02
罪惡所招	[497a]	P31L12	P118L05	P276L02
示衆見之	[497a]	P31L12	P118L05	P276L02
身死隨行	[497b]	P31L12	P118L05	P276L03
入三惡道	—	P31L12	P118L06	P276L03
苦毒	[497b]	P31L12	P118L06	P276L03
無量自相	—	P31L13	P118L06	P276L03
熾然	[497b]	P31L13	P118L06	P276L03
至其久後	[497b]	P31L13	P118L06	P276L04
共作怨結	[497b]	P31L13	P118L06	P276L04
從小微起	[498a]	P31L13	P118L07	P276L04
遂成大惡	[498a]	P31L13	P118L07	P276L04
皆由貪著	[498a]	P31L13	P118L07	P276L05
財色	[498a]	P31L13	P118L07	P276L05
不能施惠	—	P31L13	P118L08	P276L05
痴欲所迫	[498a]	P31L13	P118L08	P276L05

隨心思想	[498b]	P31L14	P118L08	P276L06
煩惱結縛	—	P31L14	P118L08	P276L06
無有解已	[498b]	P31L14	P118L08	P276L06
厚己諍利無所省錄	[498b]	P31L14	P119L01	P276L07
富貴榮華	[498b]	P31L14	P119L01	P276L07
當時快意	—	P31L14	P119L01	P276L07
不能忍辱	[499a]	P31L14	P119L02	P276L07
不務修善	[499a]	P31L14	P119L02	P276L08
威勢無幾	[499a]	P31L14	P119L02	P276L08
[貪著財色]	[499a]	P31L13	P118L07	P276L05
隨以磨滅	—	P31L15	P119L02	P276L08
身坐勞苦	[499a]	P31L15	P119L03	P276L09
久後大劇	[499a]	P31L15	P119L03	P276L09
天道施張	[499b]	P31L15	P119L03	P276L09
自然糾拳	[499b]	P31L15	P119L03	P276L09
綱紀羅網上下相応	[499b]	P31L15	P119L04	P276L10
榮榮松松	[500a]	P31L15	P119L04	P276L10
當入其中	[500a]	P31L15	P119L04	P276L10
古今有是痛哉可傷	[500a]	P32L01	P119L04	P276L11
仏語弼勒世間如是	—	P32L01	P119L05	P276L11
仏皆哀之	[500b]	P32L01	P119L05	P276L12
以威神力	—	P32L01	P119L06	P276L12
摧滅衆惡	[500b]	P32L01	P119L06	P276L12
悉令就善	—	P32L01	P119L06	P276L12
棄捐所思	[500b]	P32L01	P119L06	P276L13
奉持經戒受行	—	P32L02	P119L07	P276L13
道法	[500b]	P32L02	P119L07	P276L13
無所違失終得度世泥洹之道	—	P32L02	P119L07	P276L13
仏言汝今	[500b]	P32L02	P119L08	P276L14
諸天人民及後世人	—	P32L02	P119L08	P276L14
得仏経語	[500b]	P32L02	P119L08	P276L15
當熟思之	[500b]	P32L03	P120L01	P276L15
能於其中端心正行	—	P32L03	P120L01	P276L15
主上	[501a]	P32L03	P120L01	P276L16
為善	—	P32L03	P120L02	P276L16
率化	[501a]	P32L03	P120L02	P276L16
其下	—	P32L03	P120L02	P276L16
轉相	[501a]	P32L03	P120L02	P276L16
勅令	[501a]	P32L03	P120L02	P276L16
各自端守	[501a]	P32L03	P120L02	P277L01
尊聖敬善	[501a]	P32L03	P120L02	P277L01
仁慈博愛	[501a]	P32L03	P120L03	P277L01
仏語教誨無敬	—	P32L04	P120L03	P277L02
虧負	[501b]	P32L04	P120L03	P277L02
當求度世	—	P32L04	P120L03	P277L02

拔斷生死衆惡之本	[501b]	P32L04	P120L04	P277L02
當離三塗無量憂畏苦痛之道	—	P32L04	P120L04	P277L04
汝等於是	[502a]	P32L04	P120L05	P277L03
廣植德本	[502a]	P32L04	P120L05	P277L04
布施旋惠	[502a]	P32L05	P120L05	P277L04
勿犯道禁	[502a]	P32L05	P120L05	P277L04
忍辱	[502a]	P32L05	P120L06	P277L05
精進一心智慧	—	P32L05	P120L06	P277L05
轉相教化	[502b]	P32L05	P120L06	P277L05
為德立善	[502b]	P32L05	P120L06	P277L05
正心正意	[503a]	P32L05	P120L07	P277L06
齋戒清淨	[503a]	P32L05	P120L07	P277L06
一日一夜	—	P32L05	P120L07	P277L06
勝在無量壽國為善百歲	[503a]	P32L06	P120L07	P277L06
所以者何彼佉國土	—	P32L06	P120L08	P277L07
無為自然	[503a]	P32L06	P120L08	P277L07
皆積衆善	—	P32L06	P121L01	P277L08
無毛髮之惡	[503b]	P32L06	P121L01	P277L08
於此修善	[503b]	P32L06	P121L01	P277L08
十日十夜	[503b]	P32L07	P121L01	P277L09
勝於佉方諸佉國土為善千歲所以者何	[503b]	P32L07	P121L02	P277L10
佉方佉國為善者多為惡者少	[503b]	P32L07	P121L03	P277L10
福德自然無造惡之地	—	P32L07	P121L03	P277L10
唯此間多惡	[504a]	P32L08	P121L04	P277L11
無有自然	[504a]	P32L08	P121L04	P277L11
勤苦	—	P32L08	P121L04	P277L12
求欲	[504a]	P32L08	P121L04	P277L12
轉相	—	P32L08	P121L05	P277L12
欺給	[504a]	P32L08	P121L05	P277L12
心勞形困飲苦食毒	[504a]	P32L08	P121L05	P277L12
如是	—	P32L08	P121L05	P277L13
息務	[504a]	P32L08	P121L05	P277L13
未嘗	—	P32L08	P121L05	P277L13
寧息	[504a]	P32L08	P121L06	P277L13
吾衰汝等	[504a]	P32L09	P121L06	P277L13
天人之類	—	P32L09	P121L06	P277L13
苦心	[504a]	P32L09	P121L06	P277L14
誨喻	[504a]	P32L09	P121L06	P277L14
教令修善	[504a]	P32L09	P121L06	P277L14
隨器開導	—	P32L09	P121L07	P277L14
授与經法	[504a]	P32L09	P121L07	P277L14
莫不承用	[504b]	P32L09	P121L07	P277L15
在意所願皆令得道	—	P32L09	P121L07	P277L15
佉所遊履	[504b]	P32L10	P121L08	P277L16
國邑丘聚	[504b]	P32L10	P121L08	P277L16

靡不蒙化	[505a]	P32L10	P121L08	P277L16
天下和順	[505b]	P32L10	P122L01	P277L16
日月清明	[505b]	P32L10	P122L01	P277L16
風雨以時	[505b]	P32L10	P122L01	P278L01
災厲	[505b]	P32L10	P122L01	P278L01
不起	—	P32L10	P122L01	P278L01
國豐民安	—	P32L10	P122L01	P278L01
兵戈無用	[505b]	P32L10	P122L02	P278L01
風雨以時	[506a]	P32L10	P122L01	P278L01
災厲	[506a]	P32L10	P122L01	P278L01
兵戈無用	[506a]	P32L10	P122L02	P278L01
崇德	[507a]	P32L10	P122L02	P278L02
興仁	[507a]	P32L11	P122L02	P278L02
務修禮讓	[507a]	P32L11	P122L02	P278L02
佗言我哀愍汝等諸天人民	—	P32L11	P122L02	P278L02
甚於父母念子	[509a]	P32L11	P122L03	P278L03
今我於此世間作佗	—	P32L11	P122L03	P278L03
降化	[509a]	P32L11	P122L04	P278L04
五惡消除五痛絕滅五燒	—	P32L11	P122L04	P278L04
以善攻惡	[509b]	P32L12	P122L05	P278L05
拔生死之苦令	—	P32L12	P122L05	P278L05
獲五德	[509b]	P32L12	P122L05	P278L05
昇無為之安	—	P32L12	P122L05	P278L05
吾去世後	[509b]	P32L12	P122L06	P278L06
經道漸滅	[509b]	P32L12	P122L06	P278L06
人民詔偽	—	P32L13	P122L06	P278L06
復為衆惡	[509b]	P32L13	P122L06	P278L06
五燒五痛	—	P32L13	P122L07	P278L06
還如前法	[509b]	P32L13	P122L07	P278L07
久後轉劇	[509b]	P32L13	P122L07	P278L07
不可悉說	—	P32L13	P122L07	P278L07
我但為汝	[509b]	P32L13	P122L08	P278L08
略言之耳佗語彌勒女等各善思之	—	P32L13	P122L08	P278L08
轉相教誡	[509b]	P32L14	P123L01	P278L09
如佗經法無得犯也於是彌勒菩薩合掌白言佗所說	—	P32L14	P123L01	P278L09
甚苦	[510a]	P32L14	P123L02	P278L11
世人	—	P32L14	P123L02	P278L11
実爾	[510a]	P32L14	P123L02	P278L11
如來普慈哀愍悉令度脫	—	P32L14	P123L02	P278L11
受佗重誨	[510a]	P32L15	P123L03	P278L12
不敢違失	—	P32L15	P123L03	P278L12
佗告阿難	[510a]	P33L01	P123L04	P278L13
汝起	[510b]	P33L01	P123L04	P278L13
更整衣服合掌恭敬禮無量壽佗	—	P33L01	P123L04	P278L13

十方国土	[510b]	P33L01	P123L05	P278L14
諸仏如来常共称揚讚歎彼仏	—	P33L01	P123L05	P278L14
無著無礙	[510b]	P33L01	P123L06	P278L15
於是阿難起整衣服正身西面恭敬合掌五体投地礼無量寿仏	—	P33L02	P123L06	P278L15
白言世尊	[511a]	P33L02	P123L07	P279L01
願見彼仏	[511a]	P33L02	P123L08	P279L01
安樂国土及諸菩薩声聞大衆說是語已	—	P33L02	P123L08	P279L01
即時	[511a]	P33L03	P124L01	P279L02
無量寿仏	—	P33L03	P124L01	P279L02
放大光明	[511a]	P33L03	P124L01	P279L02
普照一切諸仏世界	—	P33L03	P124L01	P279L03
金剛闍山	[511a]	P33L03	P124L02	P279L03
須弥山王	—	P33L04	P124L02	P279L03
大小諸山	[511a]	P33L04	P124L02	P279L03
一切所有	—	P33L04	P124L02	P279L04
皆同一色	[511a]	P33L04	P124L03	P279L04
譬如	—	P33L04	P124L03	P279L04
劫水弥漫世界	[511b]	P33L04	P124L03	P279L04
其中万物	[511b]	P33L04	P124L03	P279L04
沈没不現	—	P33L04	P124L04	P279L05
湍湲	[511b]	P33L04	P124L04	P279L05
浩汗唯見大水彼仏光明亦復如是声聞菩薩一切光明悉悉隱蔽唯見仏光明曜躡赫爾時阿難即見無量寿仏威德巍巍	—	P33L04	P124L04	P279L05
如須弥山王	[511b]	P33L06	P124L07	P279L08
高出一切諸世界上相好光明靡不照耀	—	P33L06	P124L07	P279L08
此会	[511b]	P33L06	P124L08	P279L09
四衆	[511b]	P33L06	P124L08	P279L09
一時悉見	—	P33L06	P124L08	P279L10
彼見此土	[511b]	P33L07	P125L01	P279L10
亦復如是	[511b]	P33L07	P125L01	P279L10
爾時仏告阿難	[512a]	P33L08	P125L02	P279L12
[阿難] 及慈氏	[512b]	P33L08	P125L02	P279L12
菩薩汝見彼国	—	P33L08	P125L02	P279L12
從地已上	[512b]	P33L08	P125L02	P279L12
至淨居天	[512b]	P33L08	P125L03	P279L13
其中所有	—	P33L08	P125L03	P279L13
微妙嚴淨	[512b]	P33L08	P125L03	P279L13
自然之物	[512b]	P33L08	P125L03	P279L13
為悉見不阿難對曰	—	P33L09	P125L04	P279L13
唯然已見	[512b]	P33L09	P125L04	P279L14
汝寧	[512b]	P33L09	P125L04	P279L14
復聞無量寿仏	—	P33L09	P125L04	P279L15
大音	[512b]	P33L09	P125L05	P279L15

宣布一切世界化衆生不阿難對曰	—	P33L09	P125L05	P279L15
唯然已聞	[513a]	P33L09	P125L06	P279L16
彼国人民	[513a]	P33L10	P125L06	P279L16
乘百千由旬七宝宮殿無有障礙徧至十方供養諸 仏汝復見不對曰已見彼国人民	—	P33L10	P125L06	P280L01
有胎生者	[513a]	P33L11	P125L08	P280L03
汝復見不對曰已見其胎生者所處宮殿	—	P33L11	P125L08	P280L03
或百由旬	[513b]	P33L11	P126L01	P280L04
或五百由旬各於其中受諸快樂	—	P33L12	P126L02	P280L05
如忉利天上	[513b]	P33L12	P126L02	P280L05
亦皆自然	—	P33L12	P126L03	P280L06
爾時慈氏菩薩白仏言世尊何因何緣彼国人民	—	P33L13	P126L04	P280L07
胎生化生	[513b]	P33L13	P126L05	P280L08
仏告慈氏若有衆生	—	P33L13	P126L05	P280L08
以疑惑心	[514a]	P33L13	P126L05	P280L09
修諸功德	[514a]	P33L13	P126L06	P280L09
願生彼国	[514a]	P33L14	P126L06	P280L09
不了仏智	[514a]	P33L14	P126L06	P280L09
不思議智	[515a]	P33L14	P126L06	P280L10
不可稱智	[515b]	P33L14	P126L07	P280L10
大乘広智	[515b]	P33L14	P126L07	P280L10
無等無倫最上勝智	[515b]	P33L14	P126L07	P280L10
於此諸智	—	P33L14	P126L07	P280L10
疑惑不信	[516a]	P33L14	P126L08	P280L11
然猶信罪福	[516b]	P33L15	P126L08	P280L11
修習善本	[516b]	P33L15	P126L08	P280L11
願生其国	—	P33L15	P126L08	P280L12
此諸衆生	[516b]	P33L15	P127L01	P280L12
生彼宮殿	[516b]	P33L15	P127L01	P280L12
寿五百歳	[517a]	P33L15	P127L01	P280L12
常不見仏	[517a]	P33L15	P127L01	P280L13
不聞經法不見菩薩声聞聖衆是故於彼国土謂之 胎生	—	P33L15	P127L02	P280L13
若有衆生	[517a]	P34L01	P127L03	P280L14
明信	[517a]	P34L01	P127L03	P280L15
仏智乃至勝智	—	P34L01	P127L03	P280L15
作諸功德	[517a]	P34L01	P127L04	P280L15
信心迴向此諸衆生於七宝華中	—	P34L01	P127L04	P280L15
自然化生	[517b]	P34L02	P127L05	P280L16
踰跢而坐須臾之頃身相光明智慧功德	—	P34L02	P127L05	P280L16
如諸菩薩	[517b]	P34L02	P127L06	P281L01
具足成就	—	P34L02	P127L06	P281L01
復次慈氏	[517b]	P34L03	P127L07	P281L03
佉方仏国	—	P34L03	P127L07	P281L03
諸大菩薩	[517b]	P34L03	P127L07	P281L03



發心欲見無量壽仏恭敬供養	—	P34L03	P127L07	P281L03
及諸菩薩	[517b]	P34L03	P127L08	P281L04
声聞之衆彼菩薩等	—	P34L03	P127L08	P281L04
命終得生	[517b]	P34L03	P128L01	P281L04
無量壽國於七宝華中自然化生	—	P34L04	P128L01	P281L05
弥勒当知	[518a]	P34L04	P128L02	P281L06
彼化生者智慧勝故其胎生者	—	P34L04	P128L02	P281L06
皆無智慧	[518a]	P34L04	P128L03	P281L07
於五百歲中常不見仏不聞經法不見菩薩諸声聞衆無由供養於仏不知	—	P34L04	P128L03	P281L07
菩薩法式	[518a]	P34L05	P128L05	P281L08
不得修習功德当知此人宿世之時無有智慧疑惑所致	—	P34L05	P128L05	P281L09
仏告弥勒	[518a]	P34L07	P128L07	P281L11
譬如地輪聖王別有七宝宮室種種莊嚴	—	P34L07	P128L07	P281L11
張設牀帳	[518b]	P34L07	P128L08	P281L12
懸諸綉旛	[518b]	P34L07	P128L08	P281L12
皆有	—	P34L07	P128L08	P281L12
諸小王子	[518b]	P34L07	P128L08	P281L12
得罪於王輒内彼宮中	—	P34L07	P129L01	P281L13
繫以金鎖	[518b]	P34L08	P129L01	P281L13
供給飲食衣服	—	P34L08	P129L01	P281L14
牀褥	[518b]	P34L08	P129L02	P281L14
華香伎樂如地輪王無所乏少於意云何此諸王子寧	—	P34L08	P129L02	P281L14
樂彼処不對日不但但種種方便	[518b]	P34L09	P129L03	P281L15
求諸大力	—	P34L09	P129L03	P281L15
欲自免出仏告弥勒此諸衆生	[518b]	P34L09	P129L04	P282L01
亦復如是	—	P34L09	P129L04	P282L01
以疑惑仏智故	[518b]	P34L09	P129L05	P282L02
生彼宮殿	[518b]	P34L10	P129L05	P282L02
無有刑罰	[518b]	P34L10	P129L06	P282L03
乃至一念惡事但於五百歲中	—	P34L10	P129L06	P282L03
不見三宝	[519a]	P34L10	P129L06	P282L04
不得供養	[519a]	P34L10	P129L07	P282L04
修諸善本	—	P34L10	P129L07	P282L04
以此為苦	[519a]	P34L11	P129L07	P282L04
雖有余樂	[519a]	P34L11	P129L07	P282L05
猶不樂彼処	[519a]	P34L11	P129L08	P282L05
若此衆生	[519a]	P34L11	P129L08	P282L05
識其本罪	[519a]	P34L11	P129L08	P282L05
深自悔責求離彼処即得如意往詣無量壽仏所恭敬供養亦得徧至無量無數諸余仏所修諸功德	—	P34L11	P129L08	P282L06
弥勒当知	[519b]	P34L12	P130L03	P282L08
其有	—	P34L12	P130L03	P282L09

菩薩生疑惑者	[519b]	P34L12	P130L03	P282L09
為失大利	[519b]	P34L13	P130L03	P282L09
是故应当	—	P34L13	P130L04	P282L09
明信諸仏	[519b]	P34L13	P130L04	P282L10
無上智慧	—	P34L13	P130L04	P282L10
弥勒菩薩	[519b]	P34L14	P130L05	P282L11
白仏言世尊	—	P34L14	P130L05	P282L11
於此世界	[519b]	P34L14	P130L05	P282L11
有幾所不退菩薩生彼仏国仏告弥勒有六十七億	—	P34L14	P130L05	P282L11
不退菩薩	[520a]	P34L15	P130L06	P282L13
往生彼国一一菩薩已曾供養無數諸仏次如弥勒者也	—	P34L15	P130L07	P282L13
諸小行菩薩	[520b]	P34L15	P130L08	P282L14
及修習	—	P34L15	P131L01	P282L15
少功德者	[520b]	P34L15	P131L01	P282L15
不可称計皆当往生仏告弥勒不但	—	P35L01	P131L01	P283L15
我刹	[520b]	P35L01	P131L02	P283L16
諸菩薩等往生彼国	—	P35L01	P131L02	P283L16
佗方仏土	[521a]	P35L01	P131L02	P283L01
亦復如是	—	P35L01	P131L03	P283L01
其第一仏	[521a]	P35L01	P131L03	P283L01
名曰遠照	[521a]	P35L02	P131L03	P283L01
彼有百八十億菩薩	—	P35L02	P131L03	P283L02
皆当	[521a]	P35L02	P131L04	P283L02
往生其第二仏名曰宝蔵彼有九十億菩薩皆当往生其第三仏名曰無量音彼有二百二十億菩薩皆当往生其第四仏名曰甘露味彼有二百五十億菩薩皆当往生其第五仏名曰竜勝彼有十四億菩薩皆当往生其第六仏名曰勝力彼有万四千菩薩皆当往生其第七仏名曰師子彼有五百億菩薩皆当往生其第八仏名曰離垢光彼有八十億菩薩皆当往生其第九仏名曰德首彼有六十億菩薩皆当往生其第十仏名曰妙德山彼有六十億菩薩皆当往生其第十一仏名曰人王彼有十億菩薩皆当往生其第十二仏名	—	P35L02	P131L04	P283L02
名曰無上華彼有無數不可称計諸菩薩衆皆不退転智慧勇猛已曾供養無量諸仏於七日中即能撰取百千億劫大士所修堅固之法斯等菩薩皆当往生其第十三仏名曰無畏彼有七百九十億	[521a]	P35L07	P132L08	P283L14
大菩薩衆	[521b]	P35L07	P132L08	P283L15
諸小菩薩	[521b]	P35L10	P133L04	P284L03
及比丘等	[521b]	P35L10	P133L05	P284L03
不可称計皆当往生仏語弥勒不但此	—	P35L10	P133L05	P284L03
十四仏国中	[521b]	P35L10	P133L06	P284L04

諸菩薩等当往生也十方世界無量仏国其往生者亦復如是甚多無數	—	P35L10	P133L06	P284L04
我但説	[521b]	P35L11	P133L08	P284L06
十方諸仏名号及菩薩比丘生彼国者	—	P35L11	P133L08	P284L06
昼夜一劫	[521b]	P35L12	P134L01	P284L07
尚未能竟	—	P35L12	P134L01	P284L08
我今為汝	[522a]	P35L12	P134L02	P284L08
略説之耳	[522a]	P35L12	P134L02	P284L08
仏語勞勩	[522a]	P35L13	P134L03	P284L10
其有得聞彼仏名号	—	P35L13	P134L03	P284L10
歡喜踊躍	[522b]	P35L13	P134L03	P284L11
乃至一念	[522b]	P35L13	P134L03	P284L11
当知此人	—	P35L13	P134L04	P284L11
為得大利	[522b]	P35L13	P134L04	P284L11
則是具足	—	P35L13	P134L04	P284L12
無上功德	[523a]	P35L13	P134L04	P284L12
是故勞勩	—	P35L13	P134L05	P284L12
設有大火	[523b]	P35L14	P134L05	P284L12
充滿三千大千世界	—	P35L14	P134L05	P284L12
要当過此	[523b]	P35L14	P134L06	P284L13
聞是經法	[523b]	P35L14	P134L06	P284L13
歡喜信樂	[524a]	P35L14	P134L06	P284L13
受持説誦	[524a]	P35L14	P134L06	P284L14
如説修行	[524a]	P35L14	P134L07	P284L14
所以者何	[524a]	P35L14	P134L07	P284L14
多有菩薩	[524a]	P35L15	P134L07	P284L14
欲聞此經而不能得若有衆生	—	P35L15	P134L07	P284L15
聞此經者	[524a]	P35L15	P134L08	P284L15
於	—	P35L15	P134L08	P285L01
無上道	[524a]	P35L15	P134L08	P285L01
終不退転	[524a]	P35L15	P134L08	P285L01
是故应当	—	P35L15	P135L01	P285L01
專心信受持誦説行	[524b]	P35L15	P135L01	P285L01
仏言吾今	[524b]	P36L01	P135L01	P285L02
為諸衆生	[524b]	P36L01	P135L02	P285L02
説此經法	[524b]	P36L01	P135L02	P285L02
令見	[524b]	P36L01	P135L02	P285L03
無量寿仏及其国土一切所有	—	P36L01	P135L02	P285L03
所當為	[524b]	P36L01	P135L03	P285L03
者	—	P36L01	P135L03	P285L04
皆可求之	[524b]	P36L01	P135L03	P285L04
無得以我	[524b]	P36L02	P135L03	P285L04
滅度之後復生疑惑	[524b]	P36L02	P135L04	P285L04
当来之世	[524b]	P36L02	P135L04	P285L05
經道滅尽	—	P36L02	P135L04	P285L05

我以慈悲哀愍	[526a]	P36L02	P135L05	P285L05
特留此經	[526b]	P36L02	P135L05	P285L05
止住百歲	[527b]	P36L02	P135L05	P285L06
其有衆生	[527b]	P36L03	P135L05	P285L06
值斯經者隨意所願	—	P36L03	P135L06	P285L06
皆可得度	[528a]	P36L03	P135L06	P285L07
仏語勞勩如來興世	—	P36L03	P135L06	P285L07
難值難見	[528a]	P36L03	P135L07	P285L08
諸仏經道	—	P36L03	P135L07	P285L08
難得難聞	[528a]	P36L03	P135L07	P285L08
菩薩勝法	[528a]	P36L03	P135L07	P285L08
諸波羅蜜得聞亦難	—	P36L04	P135L08	P285L08
遇善知識	[528a]	P36L04	P135L08	P285L09
聞法能行此亦為難	—	P36L04	P135L08	P285L09
若聞斯經	[528b]	P36L04	P136L01	P285L10
信樂受持	—	P36L04	P136L01	P285L10
難中之難無過此難	[528b]	P36L04	P136L01	P285L10
是故我法	—	P36L05	P136L02	P285L11
如是作	[528b]	P36L05	P136L02	P285L11
如是說	[528b]	P36L05	P136L02	P285L11
如是教	[528b]	P36L05	P136L02	P285L12
应当信順如法修行	[529a]	P36L05	P136L03	P285L12
爾時世尊說此經法無量衆生	—	P36L06	P136L04	P285L13
皆發無上正覺之心	[529a]	P36L06	P136L04	P285L13
方二千那由佗人	—	P36L06	P136L05	P285L14
得清淨法眼	[529b]	P36L06	P136L05	P285L14
二十二億諸天人民	—	P36L06	P136L05	P285L14
得阿那含果	[529b]	P36L07	P136L06	P285L14
八十万比丘	—	P36L07	P136L06	P285L15
漏尽意解	[529b]	P36L07	P136L06	P285L15
四十億菩薩	—	P36L07	P136L07	P285L15
得不退轉者	[530a]	P36L07	P136L07	P285L15
以弘誓功德	[530a]	P36L07	P136L07	P285L16
而自莊嚴於將來世當成正覺	—	P36L07	P136L08	P285L16
爾時三千	[530b]	P36L08	P136L08	P286L01
大千世界六種震動大光普照十方國土百千音樂自然而作無量妙華	—	P36L08	P136L08	P286L01
紛紛	[530b]	P36L09	P137L02	P286L02
而降仏說經已勸勒菩薩及十方來諸菩薩衆	—	P36L09	P137L02	P286L02
長老	[530b]	P36L09	P137L03	P286L03
阿難諸大聲聞	—	P36L09	P137L03	P286L03
一切大衆	[530b]	P36L09	P137L04	P286L04
聞仏所說	—	P36L09	P137L04	P286L04
靡不歡喜	[530b]	P36L10	P137L04	P286L04
仏說無量壽經卷下	—	P36L11	P137L05	P286L05

観無量寿経随聞講録				
『観無量寿経』本文	随聞講録	浄全	聖典(漢文)	聖典(書き下し)
仏	[534a]	P37L01	P139L01	P287L01
説	[534a]	P37L01	P139L01	P287L01
観	[534b]	P37L01	P139L01	P287L01
無量寿	[535a]	P37L01	P139L01	P287L01
経	[536a]	P37L01	P139L01	P287L01
宋	[536a]	P37L02	P139L02	P287L02
元嘉	[536a]	P37L02	P139L02	P287L02
中置良耶舍	[536b]	P37L02	P139L02	P287L02
訳	[537a]	P37L02	P139L02	P287L02
如是我聞	[537b]	P37L03	P139L03	P287L04
一時	[539a]	P37L03	P139L03	P287L04
仏	[540a]	P37L03	P139L03	P287L04
在	[540b]	P37L03	P139L03	P287L04
王舎城	[540b]	P37L03	P139L03	P287L04
耆闍崛山	[541a]	P37L03	P139L03	P287L04
中	—	P37L03	P139L03	P287L04
与大比丘衆	[541a]	P37L03	P139L03	P287L04
千二百五十人俱菩薩三万二千	—	P37L03	P139L04	P287L05
文殊師利	—	P37L03	P139L05	P287L05
法王子	[542b]	P37L04	P139L05	P287L05
而為上首	—	P37L04	P139L05	P287L05
爾時	[544a]	P37L05	P139L06	P287L07
王舎大城	[544b]	P37L05	P139L06	P287L07
有一	—	P37L05	P139L06	P287L07
太子	[544b]	P37L05	P139L06	P287L07
名	—	P37L05	P139L06	P287L07
阿闍世	[544b]	P37L05	P139L06	P287L07
随順	—	P37L05	P139L06	P287L07
調達	[544b]	P37L05	P139L06	P287L07
悪友	[545a]	P37L05	P139L07	P287L07
之	—	P37L05	P139L07	P287L07
教	[545a]	P37L05	P139L07	P287L07
取執	[545a]	P37L05	P139L07	P287L08
父王	—	P37L05	P139L07	P287L08
頻婆娑羅	[545a]	P37L05	P139L07	P287L08
幽閉置於	[545a]	P37L05	P139L07	P287L08
七重室内	[545b]	P37L05	P139L08	P287L08
制諸群臣	[545b]	P37L06	P139L08	P287L08
一不得往	—	P37L06	P139L08	P287L09
国大夫人	[545b]	P37L06	P139L08	P287L09
名	—	P37L06	P139L08	P287L09
韋提希	[545b]	P37L06	P140L01	P287L09
恭敬大王	[546a]	P37L06	P140L01	P287L09

澡浴	[546a]	P37L06	P140L01	P287L10
清淨以	—	P37L06	P140L01	P287L10
酥	[546a]	P37L06	P140L01	P287L10
蜜	[546a]	P37L06	P140L01	P287L10
和麩	—	P37L06	P140L01	P287L10
用塗其身	[546a]	P37L06	P140L01	P287L10
諸瓔珞中	[546b]	P37L06	P140L02	P287L11
盛	—	P37L07	P140L02	P287L11
蒲桃漿	[546b]	P37L07	P140L02	P287L11
密以上王	[546b]	P37L07	P140L02	P287L11
爾時大王	—	P37L07	P140L02	P287L11
食麩飲漿	[547a]	P37L07	P140L03	P287L12
求水漱口	[547a]	P37L07	P140L03	P287L12
漱口畢已	—	P37L07	P140L03	P287L12
合掌恭敬	[547a]	P37L07	P140L03	P287L12
向耆闍崛山	[547a]	P37L07	P140L04	P287L13
遙禮	[547a]	P37L07	P140L04	P287L13
世尊	—	P37L07	P140L04	P287L13
而作是言	[547a]	P37L08	P140L04	P287L13
大目犍連是吾	—	P37L08	P140L04	P287L13
親友	[547b]	P37L08	P140L05	P288L01
願興慈悲	—	P37L08	P140L05	P288L01
授我八戒	[547b]	P37L08	P140L05	P288L01
時目犍連	[547b]	P37L08	P140L05	P288L02
如鷹隼飛	[547b]	P37L08	P140L06	P288L02
疾至王所	—	P37L08	P140L06	P288L02
日日如是	[548a]	P37L08	P140L06	P288L02
授王八戒世尊	—	P37L09	P140L06	P288L03
亦遣尊者富樓那	[548a]	P37L09	P140L07	P288L03
為王說法	[548a]	P37L09	P140L07	P288L03
如是時間	[548a]	P37L09	P140L07	P288L03
經三七日	[548a]	P37L09	P140L07	P288L04
王食	[548b]	P37L09	P140L08	P288L04
麩蜜得聞法故	—	P37L09	P140L08	P288L04
顏色和悅	[548b]	P37L09	P140L08	P288L05
時阿闍世	—	P37L11	P141L01	P288L06
問守門	[548b]	P37L11	P141L01	P288L06
者父王今者	—	P37L11	P141L01	P288L06
猶存在耶	[548b]	P37L11	P141L01	P288L06
時	—	P37L11	P141L01	P288L06
守門人	[549a]	P37L11	P141L02	P288L06
白言大王	[549a]	P37L11	P141L02	P288L07
國大夫人身塗麩蜜瓔珞盛漿	—	P37L11	P141L02	P288L07
持用上王	[549a]	P37L11	P141L03	P288L08
沙門目連及富樓那從空而來為王說法	—	P37L12	P141L03	P288L08

不可禁制	[549a]	P37L12	P141L04	P288L09
時阿闍世	—	P37L12	P141L04	P288L09
聞此語已	[549b]	P37L12	P141L04	P288L09
怒其母曰	[549b]	P37L12	P141L05	P288L09
我母是賊	—	P37L12	P141L05	P288L10
与賊為伴	[549b]	P37L13	P141L05	P288L10
沙門惡人	[549b]	P37L13	P141L05	P288L10
幻惑呪術	[549b]	P37L13	P141L05	P288L10
令此惡王	—	P37L13	P141L06	P288L11
多日不死	[549b]	P37L13	P141L06	P288L11
即執利劍	[550a]	P37L13	P141L06	P288L11
欲害其母	[550a]	P37L13	P141L06	P288L11
時有一臣	[550a]	P37L13	P141L07	P288L12
名曰	—	P37L13	P141L07	P288L12
月光	[550a]	P37L13	P141L07	P288L12
[善婆]	[550a]	P37L13	P141L07	P288L13
聰明多智	[550b]	P37L14	P141L07	P288L12
及与善婆	—	P37L14	P141L07	P288L12
為王作礼	[550b]	P37L14	P141L08	P288L13
白言大王	[550b]	P37L14	P141L08	P288L13
臣聞毘陀論經說	[550b]	P37L14	P141L08	P288L13
劫初已來有諸惡王	—	P37L14	P141L08	P288L14
貪国位故	[551a]	P37L14	P142L01	P288L14
殺害其父一万八千未曾聞有	—	P37L14	P142L01	P288L14
無道害母	[551a]	P38L01	P142L02	P288L15
王今為此殺逆之事	—	P38L01	P142L02	P288L16
汚刹利種	[551a]	P38L01	P142L03	P288L16
臣不忍聞	[551a]	P38L01	P142L03	P288L16
是	—	P38L01	P142L03	P288L16
栴陀羅	[551b]	P38L01	P142L03	P289L01
不宜住此	[551b]	P38L01	P142L03	P289L01
時二大臣說此語竟	—	P38L02	P142L04	P289L01
以手按劍	[551b]	P38L02	P142L04	P289L02
却行而退	[551b]	P38L02	P142L04	P289L02
時阿闍世	—	P38L02	P142L04	P289L02
驚怖惶懼	[552a]	P38L02	P142L05	P289L02
告善婆言	[552a]	P38L02	P142L05	P289L03
汝不為我耶善婆白言大王	—	P38L02	P142L05	P289L03
慎莫害母	[552b]	P38L03	P142L06	P289L03
王聞此語	—	P38L03	P142L06	P289L04
懺悔	[552b]	P38L03	P142L06	P289L04
求救	[552b]	P38L03	P142L06	P289L04
即便	—	P38L03	P142L07	P289L05
捨劍	[552b]	P38L03	P142L07	P289L05
止不害母	—	P38L03	P142L07	P289L05

物語内宦	[552b]	P38L.03	P142L.07	P289L.05
閉置深宮	[552b]	P38L.03	P142L.07	P289L.05
不令復出	—	P38L.03	P142L.07	P289L.05
時韋提希	[553a]	P38L.04	P143L.01	P289L.07
被幽閉已	—	P38L.04	P143L.01	P289L.07
愁憂憔悴	[553a]	P38L.04	P143L.01	P289L.07
遙向耆闍崛山為仏作礼而作是言如來世尊	—	P38L.04	P143L.01	P289L.07
在昔之時	[553a]	P38L.04	P143L.02	P289L.08
恒遭阿難來慰問我我今愁憂	—	P38L.04	P143L.03	P289L.08
世尊重重	[553b]	P38L.05	P143L.03	P289L.09
無山得見	—	P38L.05	P143L.03	P289L.10
願遣目連尊者阿難	[553b]	P38L.05	P143L.04	P289L.10
与我相見	[553b]	P38L.05	P143L.04	P289L.10
作是語已	—	P38L.05	P143L.04	P289L.11
悲泣雨淚	[553b]	P38L.05	P143L.05	P289L.11
遙向仏礼未拳頭頃爾時世尊在耆闍崛山知韋提希	—	P38L.06	P143L.05	P289L.11
心之所念	[554a]	P38L.06	P143L.06	P289L.13
即勅	[554a]	P38L.06	P143L.06	P289L.13
大目犍連及以阿難	—	P38L.06	P143L.06	P289L.13
從空而來仏從耆闍崛山沒於王宮出	[554a]	P38L.07	P143L.07	P289L.14
時韋提希	—	P38L.07	P143L.08	P289L.14
礼已拳頭	[554b]	P38L.07	P143L.08	P289L.15
見世尊積	[554b]	P38L.07	P143L.08	P289L.15
迦牟尼仏身紫金色坐	—	P38L.07	P144L.01	P289L.15
百寶蓮華	[554b]	P38L.07	P144L.01	P289L.15
目連侍左阿難在右	[555a]	P38L.08	P144L.01	P289L.16
積梵護世諸天	[555a]	P38L.08	P144L.02	P289L.16
在虛空中	[555a]	P38L.08	P144L.02	P289L.16
普雨	—	P38L.08	P144L.02	P290L.01
天華	[555b]	P38L.08	P144L.02	P290L.01
持用供養	—	P38L.08	P144L.03	P290L.01
時韋提希	[555b]	P38L.08	P144L.03	P290L.01
見仏世尊	—	P38L.08	P144L.03	P290L.01
自絕瓔珞	[555b]	P38L.09	P144L.03	P290L.02
拳身投地	[555b]	P38L.09	P144L.04	P290L.02
号泣	[556a]	P38L.09	P144L.04	P290L.02
向仏	—	P38L.09	P144L.04	P290L.02
白言世尊	[556a]	P38L.09	P144L.04	P290L.03
我宿何罪生 [此惡子世尊復有何等因縁与提婆達多] 共為眷屬	[556a]	P38L.09	P144L.04	P290L.03
唯願	[557b]	P38L.11	P144L.07	P290L.05
世尊	—	P38L.11	P144L.07	P290L.05
為我広説	[558a]	P38L.11	P144L.07	P290L.05
無憂惱如我当往生不樂	—	P38L.11	P144L.07	P290L.05



閻浮提	[558a]	P38L11	P144L08	P290L06
濁惡	[558a]	P38L11	P144L08	P290L06
世也	—	P38L11	P144L08	P290L06
此濁惡處	[558a]	P38L11	P144L08	P290L06
地獄餓鬼畜生	[558a]	P38L11	P144L08	P290L06
盈滿	[558a]	P38L11	P145L01	P290L06
多不善	[558a]	P38L12	P145L01	P290L07
聚願我未來不聞	—	P38L12	P145L01	P290L07
惡声	[558a]	P38L12	P145L01	P290L07
不見	—	P38L12	P145L01	P290L07
惡人	[558a]	P38L12	P145L02	P290L07
今向	[558a]	P38L12	P145L02	P290L07
世尊五体投地	—	P38L12	P145L02	P290L08
求哀懺悔	[558a]	P38L12	P145L02	P290L08
唯願	[558b]	P38L12	P145L02	P290L08
仏日	[558b]	P38L12	P145L02	P290L08
教我觀於清淨業處	[558b]	P38L12	P145L03	P290L09
爾時世尊	[559a]	P38L13	P145L03	P290L09
放眉間光	—	P38L13	P145L03	P290L09
其光金色徧照十方無量世界	—	P38L13	P145L04	P290L10
還住仏頂	[559a]	P38L13	P145L04	P290L10
化為金台	[559a]	P38L13	P145L04	P290L11
如須弥山	[559b]	P38L13	P145L05	P290L11
十方諸仏淨妙国土	—	P38L13	P145L05	P290L11
皆於中現	[559b]	P38L14	P145L05	P290L11
或有国土	[559b]	P38L14	P145L06	P290L12
七宝合成	[559b]	P38L14	P145L06	P290L12
復有国土	—	P38L14	P145L06	P290L12
純是蓮華	[559b]	P38L14	P145L06	P290L12
復有国土	—	P38L14	P145L07	P290L13
如自在天宮	[559b]	P38L14	P145L07	P290L13
復有国土如	—	P38L14	P145L07	P290L13
玻瓈鏡	[559b]	P38L15	P145L07	P290L13
十方国土皆於中現有如是等無量諸仏国土	—	P38L15	P145L08	P290L13
嚴蹟可觀	[560a]	P38L15	P146L01	P290L14
令羣提希見	[560a]	P38L15	P146L01	P290L15
時羣提希白仏言世尊是諸仏土	—	P38L15	P146L01	P290L15
雖復	[560b]	P39L01	P146L02	P290L16
清淨皆有光明	—	P39L01	P146L02	P290L16
我今樂生	[560b]	P39L01	P146L02	P290L16
極樂世界阿彌陀仏所	—	P39L01	P146L03	P291L01
唯願	[561b]	P39L01	P146L03	P291L01
世尊教我	—	P39L01	P146L03	P291L01
思惟教我正受	[561b]	P39L01	P146L04	P291L01
爾時世尊即便	—	P39L03	P146L05	P291L03

微笑	[562a]	P39L03	P146L05	P291L03
有五色光	[562b]	P39L03	P146L05	P291L03
從仏口出	[562b]	P39L03	P146L05	P291L03
一一光	[562b]	P39L03	P146L05	P291L03
照頰婆娑羅頂	[562b]	P39L03	P146L06	P291L04
爾時大王雖在幽閉	—	P39L03	P146L06	P291L04
心眼無障	[562b]	P39L03	P146L06	P291L04
遙見世尊頭面作礼	—	P39L04	P146L07	P291L05
自然增進	[563a]	P39L04	P146L07	P291L05
成阿那含	—	P39L04	P146L07	P291L05
爾時世尊	[563b]	P39L05	P147L01	P291L07
告韋提希汝今知不阿彌陀仏	—	P39L05	P147L01	P291L07
去此	[563b]	P39L05	P147L01	P291L07
不遠	[563b]	P39L05	P147L02	P291L08
汝當繫念諦觀彼国	—	P39L05	P147L02	P291L08
淨業成者	[564a]	P39L05	P147L02	P291L08
我今為汝	—	P39L05	P147L02	P291L08
広説衆譬	[564a]	P39L05	P147L03	P291L09
亦令未來世	[564b]	P39L06	P147L03	P291L09
一切凡夫欲修淨業者得生西方極樂国土	—	P39L06	P147L03	P291L09
欲生彼国	[565a]	P39L06	P147L04	P291L10
者	—	P39L06	P147L04	P291L11
當修三福	[565a]	P39L06	P147L04	P291L11
一者孝養父母	[565b]	P39L06	P147L05	P291L11
奉事	[565b]	P39L07	P147L05	P291L12
師長	[565b]	P39L07	P147L05	P291L12
慈心	[566a]	P39L07	P147L05	P291L12
不殺	—	P39L07	P147L05	P291L12
修十善業二者	—	P39L07	P147L06	P291L12
受持三歸	[566a]	P39L07	P147L06	P291L12
具足衆戒	[566b]	P39L07	P147L06	P291L13
不犯威儀	[566b]	P39L07	P147L06	P291L13
三者	—	P39L07	P147L07	P291L13
發菩提心	[566b]	P39L07	P147L07	P291L13
深信因果	[567b]	P39L07	P147L07	P291L13
誦誦大乘	[567b]	P39L08	P147L07	P291L13
勸進行者	[567b]	P39L08	P147L07	P291L14
如此三事	[568a]	P39L08	P147L08	P291L14
名為淨業仏告韋提希汝今知不此三種業過去未來現在	—	P39L08	P147L08	P291L14
三世諸仏淨業正因	[568a]	P39L09	P148L01	P291L16
仏告阿難及韋提希諦聽諦聽	—	P39L10	P148L03	P292L01
善思念之	[568b]	P39L10	P148L03	P292L01
如來今者	[569a]	P39L10	P148L03	P292L02
為未來世一切衆生	[569a]	P39L10	P148L04	P292L02

為煩惱賊之所害者	[569a]	P39L10	P148L04	P292L02
說清淨業	[569b]	P39L10	P148L05	P292L02
善哉韋提希	—	P39L11	P148L05	P292L03
快問此事	[570a]	P39L11	P148L05	P292L03
阿難汝当受持	[570a]	P39L11	P148L05	P292L03
広為	—	P39L11	P148L06	P292L04
多衆	[570a]	P39L11	P148L06	P292L04
宣説	—	P39L11	P148L06	P292L04
仏語	[570a]	P39L11	P148L06	P292L04
如来今者	—	P39L11	P148L06	P292L04
教韋提希	[570b]	P39L11	P148L06	P292L04
及未来世	[570b]	P39L11	P148L07	P292L04
一切衆生	[570b]	P39L12	P148L07	P292L04
觀於西方	—	P39L12	P148L07	P292L05
極樂世界	[570b]	P39L12	P148L07	P292L05
以仏力故	[570b]	P39L12	P148L08	P292L05
当得見彼清淨国土	—	P39L12	P148L08	P292L05
如執明鏡	[571a]	P39L12	P148L08	P292L06
自見面像	—	P39L12	P149L01	P292L06
見彼国土	[571a]	P39L12	P149L01	P292L07
極妙樂事	—	P39L13	P149L01	P292L07
心歡喜故	[571a]	P39L13	P149L01	P292L07
応時	[571b]	P39L13	P149L02	P292L07
即得	—	P39L13	P149L02	P292L07
無生法忍	[571b]	P39L13	P149L02	P292L08
仏告韋提希	—	P39L13	P149L02	P292L08
汝是凡夫	[572a]	P39L13	P149L02	P292L08
心想	[573a]	P39L13	P149L03	P292L08
羸劣	[573a]	P39L13	P149L03	P292L08
未得天眼	[573a]	P39L13	P149L03	P292L09
不能遠觀	[573a]	P39L13	P149L03	P292L09
諸仏如来	[573a]	P39L14	P149L03	P292L09
有	—	P39L14	P149L03	P292L09
異方便	[573a]	P39L14	P149L04	P292L09
令汝得見	—	P39L14	P149L04	P292L10
時韋提希	[573b]	P39L14	P149L04	P292L10
白仏言世尊如我今者	—	P39L14	P149L04	P292L10
以仏力故	[573b]	P39L14	P149L05	P292L11
見彼国土	[573b]	P39L14	P149L05	P292L11
若仏滅後	[574a]	P39L14	P149L05	P292L11
諸衆生等	—	P39L15	P149L05	P292L12
濁惡不善	[574a]	P39L15	P149L06	P292L12
五苦所逼	[574b]	P39L15	P149L06	P292L12
云何当見	[574b]	P39L15	P149L06	P292L12
阿弥陀仏極樂世界	—	P39L15	P149L06	P292L12

仏告草提希	—	P40L01	P149L08	P292L15
汝及衆生	[576a]	P40L01	P149L08	P292L15
应当專心	[576a]	P40L01	P149L08	P292L15
繫念一處	[576a]	P40L01	P149L08	P292L15
想於西方	[576b]	P40L01	P150L01	P293L01
云何作想	[576b]	P40L01	P150L01	P293L01
凡作想者	[576b]	P40L01	P150L01	P293L01
一切衆生	[579b]	P40L01	P150L01	P293L01
自非生盲	[579b]	P40L01	P150L01	P293L02
有目之徒	[580a]	P40L02	P150L02	P293L02
皆見日沒	[580a]	P40L02	P150L02	P293L02
当起	—	P40L02	P150L02	P293L02
想念	[580a]	P40L02	P150L02	P293L02
正坐	[580a]	P40L02	P150L02	P293L03
西向	—	P40L02	P150L03	P293L03
諦觀於日	[580a]	P40L02	P150L03	P293L03
令心堅住	[580a]	P40L02	P150L03	P293L03
專想不移	—	P40L02	P150L03	P293L03
見日欲沒	[580b]	P40L02	P150L03	P293L04
狀如懸鼓	[580b]	P40L02	P150L04	P293L04
既見日已	[580b]	P40L02	P150L04	P293L05
閉目開目	[580b]	P40L03	P150L04	P293L05
皆令明了是為日想名曰初觀	—	P40L03	P150L04	P293L05
次作水想	[582a]	P40L04	P150L06	P293L07
見水澄清	[582a]	P40L04	P150L06	P293L07
亦令明了	[582a]	P40L04	P150L06	P293L07
無分散意	[582b]	P40L04	P150L06	P293L07
既見水已	[582b]	P40L04	P150L06	P293L08
当起水想	[582b]	P40L04	P150L07	P293L08
見水映徹	—	P40L04	P150L07	P293L08
作瑠璃想	[582b]	P40L04	P150L07	P293L09
此想成已	[582b]	P40L04	P150L07	P293L09
見瑠璃地	[583a]	P40L04	P150L08	P293L09
內外	[583a]	P40L05	P150L08	P293L09
映徹	[583a]	P40L05	P150L08	P293L09
下有金剛	[583a]	P40L05	P150L08	P293L10
七宝金幢	[583a]	P40L05	P150L08	P293L10
擊瑠璃地	[583b]	P40L05	P151L01	P293L10
其幢	—	P40L05	P151L01	P293L10
八方	[583b]	P40L05	P151L01	P293L10
八楞	[583b]	P40L05	P151L01	P293L10
具足	—	P40L05	P151L01	P293L10
一方面	[583b]	P40L05	P151L01	P293L11
[方面]	[583b]	P40L05	P151L01	P293L11
百宝所成	—	P40L05	P151L02	P293L11

一一宝珠	[583b]	P40L05	P151L02	P293L11
有千光明	—	P40L06	P151L02	P293L11
一一光明	[583b]	P40L06	P151L02	P293L11
八万四千色	—	P40L06	P151L02	P293L12
映琉璃地	[583b]	P40L06	P151L03	P293L12
如億千日	[583b]	P40L06	P151L03	P293L12
不可具見	[584a]	P40L06	P151L03	P293L12
琉璃地上	[584a]	P40L06	P151L03	P293L13
以黃金繩	[584a]	P40L06	P151L04	P293L13
雜廁間錯	[584a]	P40L06	P151L04	P293L13
以七宝界	[584b]	P40L07	P151L04	P293L13
分齊分明	[584b]	P40L07	P151L04	P293L14
一一宝中	[584b]	P40L07	P151L05	P293L14
有五百色光其光	—	P40L07	P151L05	P293L14
如華	[584b]	P40L07	P151L05	P293L14
又	—	P40L07	P151L05	P293L15
似星月	[584b]	P40L07	P151L05	P293L15
懸處虚空	—	P40L07	P151L06	P293L15
成光明台	[584b]	P40L07	P151L06	P293L15
樓閣千万	[584b]	P40L07	P151L06	P293L15
百宝合成	—	P40L08	P151L06	P293L15
於台兩辺	[584b]	P40L08	P151L07	P293L16
各有百億華幢	[584b]	P40L08	P151L07	P293L16
無量樂器	[584b]	P40L08	P151L07	P293L16
以為莊嚴	—	P40L08	P151L07	P294L01
八種清風	[584b]	P40L08	P151L08	P294L01
從光明出	—	P40L08	P151L08	P294L01
鼓此樂器	[585a]	P40L08	P151L08	P294L01
演說苦空	[585a]	P40L09	P151L08	P294L01
無常無我之音	—	P40L09	P152L01	P294L02
是為水想	[585b]	P40L09	P152L01	P294L02
名第二觀	—	P40L09	P152L01	P294L02
此想成時	[586b]	P40L10	P152L02	P294L03
一一觀之	[587a]	P40L10	P152L02	P294L03
極令了了	[587a]	P40L10	P152L02	P294L03
閉目開目	[587a]	P40L10	P152L02	P294L03
不令散失	[587a]	P40L10	P152L02	P294L04
唯除睡時	[587a]	P40L10	P152L03	P294L04
恒憶此事	[587b]	P40L10	P152L03	P294L04
如此想者	—	P40L10	P152L03	P294L04
名為	—	P40L20	P152L03	P294L05
粗見	[587b]	P40L10	P152L04	P294L05
極樂國地	—	P40L10	P152L04	P294L05
若得三昧	[587b]	P40L11	P152L04	P294L05
見彼國地了了分明	—	P40L11	P152L04	P294L05

不可具說	[587b]	P40L11	P152L05	P294L06
是為地想名第三觀	—	P40L11	P152L05	P294L06
佉告阿難	[588a]	P40L11	P152L05	P294L07
汝持佉語	—	P40L11	P152L06	P294L07
為未來世	[588a]	P40L11	P152L06	P294L07
一切大衆	[588a]	P40L12	P152L06	P294L07
欲脫苦者	—	P40L12	P152L06	P294L08
說是觀地法	[588a]	P40L12	P152L06	P294L08
若觀是地者	—	P40L12	P152L07	P294L08
除八十億劫	[588b]	P40L12	P152L07	P294L09
生死之罪	—	P40L12	P152L07	P294L09
捨身他世	[589a]	P40L12	P152L08	P294L09
必生淨國	—	P40L12	P152L08	P294L09
心得無疑	[589b]	P40L13	P152L08	P294L09
作是觀者名為正觀	—	P40L13	P152L08	P294L10
若他觀者	[589b]	P40L13	P153L01	P294L10
名為邪觀	[589b]	P40L13	P153L01	P294L11
佉告阿難及韋提希地想成已次觀寶樹觀寶樹者	—	P40L14	P153L02	P294L12
一一觀之	[590a]	P40L14	P153L03	P294L13
作	—	P40L14	P153L03	P294L13
七重	[590a]	P40L14	P153L03	P294L13
行樹	[590b]	P40L14	P153L03	P294L13
想	[590b]	P40L14	P153L03	P294L13
一一樹高	[590b]	P40L14	P153L03	P294L13
八千由旬	[590b]	P40L14	P153L04	P294L14
其諸寶樹	—	P40L15	P153L04	P294L14
七寶華葉	[591a]	P40L15	P153L04	P294L14
無不具足	—	P40L15	P153L04	P294L14
一一華葉	[591a]	P40L15	P153L04	P294L15
作異寶色	[591a]	P40L15	P153L05	P294L15
琉璃色中	[591a]	P40L15	P153L05	P294L15
出金色光玻瓈	—	P40L15	P153L05	P294L15
色中出紅色光碼礪色中出磗礪光磗礪色中出	—	P40L15	P153L06	P294L15
綠真珠	[591a]	P41L01	P153L07	P294L16
光	—	P41L01	P153L07	P295L01
珊瑚琥珀	[591a]	P41L01	P153L07	P295L01
一切衆寶以為映飾	—	P41L01	P153L07	P295L01
妙真珠網	[591a]	P41L01	P153L08	P295L01
彌覆樹上	[591a]	P41L01	P153L08	P295L02
一一樹上	—	P41L02	P153L08	P295L02
有七重網	[591b]	P41L02	P153L08	P295L02
一一網間有五百億妙華宮殿	—	P41L02	P154L01	P295L02
如梵王宮	[591b]	P41L02	P154L01	P295L03
諸天童子自然在中一一童子五百億	—	P41L02	P154L01	P295L03
釈迦毘楞伽	[591b]	P41L03	P154L02	P295L04

摩尼宝以為瓔珞其摩尼光照百由旬	—	P41L03	P154L03	P295L04
猶如和合百億日月	[591b]	P41L03	P154L04	P295L05
不可具名	[592a]	P41L03	P154L04	P295L05
衆宝間錯	[592a]	P41L03	P154L04	P295L05
色中上者此諸宝樹	—	P41L04	P154L04	P295L06
行行	[592a]	P41L04	P154L05	P295L06
相当	[592a]	P41L04	P154L05	P295L06
葉葉	—	P41L04	P154L05	P295L06
相次	[592a]	P41L04	P154L05	P295L06
於衆葉間生諸妙華	—	P41L04	P154L05	P295L07
華上自然有七宝果	[592a]	P41L04	P154L06	P295L07
一一樹葉	—	P41L04	P154L06	P295L08
縱広	[592a]	P41L05	P154L07	P295L08
正等	—	P41L05	P154L07	P295L08
二十五由旬	[592a]	P41L05	P154L07	P295L08
其葉千色有	—	P41L05	P154L07	P295L08
百種画	[592a]	P41L05	P154L07	P295L08
如天瓔珞	[592a]	P41L05	P154L08	P295L09
有衆妙華	[592a]	P41L05	P154L08	P295L09
作閻浮檀金色如	—	P41L05	P154L08	P295L09
旋火輪	[592a]	P41L05	P154L08	P295L09
婉轉葉間	[592b]	P41L05	P155L01	P295L10
涌生諸果	[592b]	P41L06	P155L01	P295L10
如帝釈瓶	[592b]	P41L06	P155L01	P295L10
有大光明化成幢幡無量宝盃是宝盃中	—	P41L06	P155L01	P295L10
映現三千大千世界	[592b]	P41L06	P155L02	P295L11
一切仏事	—	P41L06	P155L03	P295L11
十方仏国	[593a]	P41L07	P155L03	P295L12
亦於中現	—	P41L07	P155L03	P295L12
見此樹已	[593a]	P41L07	P155L03	P295L12
亦当次第	[593a]	P41L07	P155L04	P295L12
一一觀之	—	P41L07	P155L04	P295L13
觀見	[593a]	P41L07	P155L04	P295L13
樹茎	[593a]	P41L07	P155L04	P295L13
枝葉華果皆令分明是為樹想名第四觀	—	P41L07	P155L04	P295L13
次当想水	[593b]	P41L09	P155L06	P295L15
想水者	—	P41L09	P155L06	P295L15
極樂国土	[593b]	P41L09	P155L06	P295L15
有八池水	[593b]	P41L09	P155L06	P295L15
一一池水	[593b]	P41L09	P155L06	P295L15
七宝所成	[593b]	P41L09	P155L07	P295L16
其宝柔輦	[593b]	P41L09	P155L07	P295L16
從如意珠王生	[594a]	P41L09	P155L07	P295L16
分為十四支	[594a]	P41L09	P155L07	P295L16
一一支作七宝色	[594a]	P41L10	P155L08	P296L01

黃金為渠渠下皆以	—	P41L10	P155L08	P296L01
雜色金剛	[594b]	P41L10	P156L01	P296L01
以為底沙	[594b]	P41L10	P156L01	P296L02
一一水中	[594b]	P41L10	P156L01	P296L02
有	—	P41L10	P156L01	P296L02
六十億	[594b]	P41L10	P156L01	P296L02
七寶蓮華一一蓮華開門正等	—	P41L10	P156L02	P296L02
十二由旬	[594b]	P41L11	P156L02	P296L03
其摩尼水	[594b]	P41L11	P156L03	P296L03
流注華間	—	P41L11	P156L03	P296L03
尋樹上下	[595a]	P41L11	P156L03	P296L03
其声微妙	[595a]	P41L11	P156L03	P296L04
演說苦空無常無我諸波羅蜜復有讚歎諸仏相好者如意珠王涌出金色微妙光明	—	P41L11	P156L03	P296L04
其光化為百寶色鳥	[595a]	P41L12	P156L05	P296L05
和鳴	—	P41L12	P156L06	P296L06
哀雅	[595b]	P41L12	P156L06	P296L06
常讚念仏	[595b]	P41L12	P156L06	P296L06
念法念僧是為八功德水想	—	P41L13	P156L06	P296L06
名第五觀	[595b]	P41L13	P156L07	P296L07
衆寶国土	[595b]	P41L14	P156L08	P296L08
一一界上	[596a]	P41L14	P156L08	P296L08
有	—	P41L14	P156L08	P296L08
五百億	[596a]	P41L14	P156L08	P296L08
寶	—	P41L14	P156L08	P296L08
樓閣	[596a]	P41L14	P156L08	P296L08
其樓閣中有無量	—	P41L14	P156L08	P296L08
諸天	[596a]	P41L14	P157L01	P296L09
作天伎樂	[596a]	P41L14	P157L01	P296L09
又有樂器	[596a]	P41L14	P157L01	P296L09
懸處虛空	[596a]	P41L14	P157L01	P296L09
如天寶幢	[596a]	P41L14	P157L02	P296L09
不鼓自鳴此衆音中皆說	—	P41L15	P157L02	P296L10
念仏念法念比丘僧	[596b]	P41L15	P157L02	P296L10
此想成已	[596b]	P41L15	P157L03	P296L11
名為	—	P41L15	P157L03	P296L11
粗見	[596b]	P41L15	P157L03	P296L11
極樂世界	—	P41L15	P157L03	P296L11
寶樹寶地寶池是為	[597a]	P41L15	P157L04	P296L11
總觀想	[597a]	P42L01	P157L04	P296L12
名第六觀	—	P42L01	P157L04	P296L12
若見此者	[597a]	P42L01	P157L05	P296L12
除無量億劫	[597a]	P42L01	P157L05	P296L12
極重惡業命終之後必生彼国作是觀者名為正觀若他觀者名為邪觀	—	P42L01	P157L05	P296L12



仏告阿難及韋提希	—	P42L03	P157L08	P296L15
諦聽諦聽	[598a]	P42L03	P157L08	P296L15
善	—	P42L03	P157L08	P296L15
思念	[598a]	P42L03	P157L08	P296L15
之	—	P42L03	P157L08	P296L15
仏当	[598a]	P42L03	P157L08	P296L16
為汝	[598a]	P42L03	P158L01	P296L16
分別解説	—	P42L03	P158L01	P296L16
除苦惱法	[598a]	P42L03	P158L01	P296L16
汝等	[598b]	P42L03	P158L01	P296L16
憶持	[598b]	P42L03	P158L01	P296L16
広為大衆分別解説	—	P42L03	P158L01	P296L16
說是語時	[598b]	P42L04	P158L02	P297L01
無量寿仏	[599a]	P42L04	P158L02	P297L01
住立空中	[599a]	P42L04	P158L02	P297L01
觀世音大勢至是二大士侍立左右	—	P42L04	P158L03	P297L02
光明熾盛不可具見	[600a]	P42L04	P158L03	P297L02
百千閻浮檀金色	[600b]	P42L05	P158L04	P297L03
不得為比	—	P42L05	P158L04	P297L03
時韋提希	[600b]	P42L05	P158L05	P297L03
見無量寿仏	[600b]	P42L05	P158L05	P297L04
已	—	P42L05	P158L05	P297L04
接足	[601a]	P42L05	P158L05	P297L04
作礼	—	P42L05	P158L05	P297L04
白仏言世尊	[601b]	P42L05	P158L05	P297L04
我今因仏力	[601b]	P42L05	P158L06	P297L05
故得見無量寿仏及二菩薩未來衆生当云何觀無量寿仏及二菩薩	—	P42L05	P158L06	P297L05
仏告韋提希	[602a]	P42L06	P158L08	P297L07
欲觀彼仏者	[602a]	P42L06	P158L08	P297L07
当起想念	[602a]	P42L06	P158L08	P297L07
於七宝地上	[602a]	P42L07	P158L08	P297L08
作蓮華想	[602b]	P42L07	P159L01	P297L08
令其蓮華	[602b]	P42L07	P159L01	P297L08
一一葉	[602b]	P42L07	P159L01	P297L08
作百宝色有八万四千脈猶如	—	P42L07	P159L01	P297L09
天画	[602b]	P42L07	P159L02	P297L09
脈有	[603a]	P42L07	P159L02	P297L09
八万四千光	—	P42L07	P159L02	P297L10
了了分明皆令得	[603a]	P42L08	P159L03	P297L10
華葉小者	[603a]	P42L08	P159L03	P297L10
縱広二百五十	[603a]	P42L08	P159L03	P297L11
如是蓮華	—	P42L08	P159L04	P297L11
有八万四千葉	[603b]	P42L08	P159L04	P297L11
一一葉間各有百億	—	P42L08	P159L04	P297L11

摩尼珠王	[603b]	P42L09	P159L05	P297L12
以為映飾——摩尼放千光明其光	—	P42L09	P159L05	P297L12
如盃	[603b]	P42L09	P159L06	P297L13
七宝合成	—	P42L09	P159L05	P297L13
徧覆地上	[603b]	P42L09	P159L06	P297L13
積迦毘楞伽宝	[603b]	P42L09	P159L06	P297L14
以為	—	P42L10	P159L07	P297L14
其台	[603b]	P42L10	P159L07	P297L14
此蓮華台	[603b]	P42L10	P159L07	P297L14
八万金剛	[603b]	P42L10	P159L07	P297L14
甄叔迦宝	[603b]	P42L10	P159L07	P297L14
梵摩尼宝	—	P42L10	P159L08	P297L15
妙真珠	[603b]	P42L10	P159L08	P297L15
網以為交飾於其台上自然而有	—	P42L10	P159L08	P297L15
四柱	[603b]	P42L11	P160L01	P297L16
宝幢——宝幢	—	P42L11	P160L01	P297L16
如百千万億須弥山	[603b]	P42L11	P160L01	P297L16
幢上宝幔	[604a]	P42L11	P160L02	P297L16
如夜摩天宮	[604a]	P42L11	P160L02	P297L16
有五百億	[604a]	P42L11	P160L02	P298L01
微妙宝珠以為	—	P42L11	P160L03	P298L01
映飾	[604a]	P42L11	P160L03	P298L01
——宝珠	[604a]	P42L12	P160L03	P298L01
有八万四千光——光作八万四千	—	P42L12	P160L03	P298L02
異種金色	[604a]	P42L12	P160L04	P298L02
——金色	[604a]	P42L12	P160L04	P298L02
徧其宝十处变化	—	P42L12	P160L05	P298L02
各作異相	[604a]	P42L12	P160L05	P298L03
或為金剛台	[604a]	P42L13	P160L05	P298L03
或作真珠網或作雜華雲	—	P42L13	P160L06	P298L03
於十方面	[604a]	P42L13	P160L06	P298L04
随意变现	[604a]	P42L13	P160L06	P298L04
施作仏事	[604a]	P42L13	P160L07	P298L05
是為華座想名第七觀	—	P42L13	P160L07	P298L05
仏告阿難如此妙華是本法藏比丘	—	P42L14	P160L07	P298L05
願力所成	[604a]	P42L14	P160L08	P298L06
若欲	[604b]	P42L14	P160L08	P298L06
念	—	P42L14	P161L01	P298L07
彼仏	[604b]	P42L14	P161L01	P298L07
者当先作此華座想	—	P42L14	P161L01	P298L07
作此想	[604b]	P42L14	P161L01	P298L07
時	—	P42L14	P161L01	P298L08
不得雜觀	[604b]	P42L14	P161L01	P298L08
皆心	—	P42L15	P161L02	P298L08
——觀之	[604b]	P42L15	P161L02	P298L08

一一葉一一珠一一光	—	P42L15	P161L02	P298L08
一一台	[604b]	P42L15	P161L03	P298L09
一一幢皆令分明如於鏡中自見而像此想成者	—	P42L15	P161L03	P298L09
滅除五万劫	[604b]	P43L01	P161L04	P298L10
生死之罪必定当生極樂世界作是觀者名為正觀 若他觀者名為邪觀	—	P43L01	P161L04	P298L10
仏告阿難	[605a]	P43L02	P161L07	P298L13
及草提希見此事已	—	P43L02	P161L07	P298L13
次当想仏	[605a]	P43L02	P161L07	P298L13
所以者何	[605a]	P43L02	P161L07	P298L14
諸仏如来	[605b]	P43L02	P161L08	P298L14
是	—	P43L02	P161L08	P298L14
法界身	[606a]	P43L02	P161L08	P298L14
[法界]	[606a]	P43L02	P161L08	P298L14
入一切衆生心想中	[607a]	P43L02	P161L08	P298L14
是故汝等	[607a]	P43L02	P162L01	P298L15
心	—	P43L03	P162L01	P298L15
想仏	[607a]	P43L03	P162L01	P298L15
時	—	P43L03	P162L01	P298L15
是心即是	[607b]	P43L03	P162L01	P298L15
三十二相	[608a]	P43L03	P162L01	P298L15
八十随形好	[608b]	P43L03	P162L02	P298L15
是心作仏	[608b]	P43L03	P162L02	P298L16
是心是仏	[608b]	P43L03	P162L02	P298L16
諸仏正徧知海	[608b]	P43L03	P162L02	P298L16
従心想生是故应当	—	P43L03	P162L03	P298L16
一心繫念	[609a]	P43L04	P162L03	P299L01
諦觀	—	P43L04	P162L03	P299L01
彼仏	[609a]	P43L04	P162L04	P299L01
多陀阿伽度	[609a]	P43L04	P162L04	P299L01
阿羅訶	[609a]	P43L04	P162L04	P299L01
三藐三仏陀	[609b]	P43L04	P162L04	P299L02
想彼仏者	[609b]	P43L04	P162L04	P299L02
先当想像	[609b]	P43L04	P162L05	P299L02
閉目開目	[609b]	P43L04	P162L05	P299L02
見一宝像	[609b]	P43L05	P162L05	P299L03
如闍浮檀金色	—	P43L05	P162L05	P299L03
坐彼華上	[610a]	P43L05	P162L06	P299L03
見像坐已	[610a]	P43L05	P162L06	P299L04
心眼得開	—	P43L05	P162L06	P299L04
了了分明	[610a]	P43L05	P162L06	P299L04
見極樂国	[610a]	P43L05	P162L07	P299L05
七宝莊嚴宝地宝池宝樹行列諸天宝幔弥覆其上 衆宝羅網滿虛空中見如此事極令明了如觀掌中 見此事已	—	P43L05	P162L07	P299L05
	[610a]	P43L06	P163L01	P299L07

復当更作	[610b]	P43L07	P163L01	P299L08
一大蓮華	[610b]	P43L07	P163L02	P299L08
在仏左辺	—	P43L07	P163L02	P299L08
如前蓮華	[610b]	P43L07	P163L02	P299L08
等無有異	—	P43L07	P163L02	P299L09
復作一大蓮華	—	P43L07	P163L03	P299L09
在仏右辺	[610b]	P43L07	P163L03	P299L09
想一觀世音菩薩像坐左華座	—	P43L07	P163L03	P299L10
亦放金光	[610b]	P43L08	P163L04	P299L10
如前無異想一大勢至菩薩像	—	P43L08	P163L04	P299L11
坐右華座	[611a]	P43L08	P163L05	P299L11
此想成時	[611a]	P43L08	P163L05	P299L12
仏菩薩像皆放光明其光金色照諸宝樹	—	P43L08	P163L05	P299L12
一一樹下	[611a]	P43L09	P163L06	P299L13
復有三蓮華	—	P43L09	P163L07	P299L13
諸蓮華上	[611a]	P43L09	P163L07	P299L13
各有一仏二菩薩像	—	P43L09	P163L07	P299L14
徧滿彼国	[611a]	P43L09	P163L08	P299L14
此想成時行者当聞水流光明及諸宝樹	—	P43L10	P163L08	P299L14
鳧雁鴛鴦	[611a]	P43L10	P164L01	P299L15
皆說妙法	[611a]	P43L10	P164L01	P299L15
出定入定	[611a]	P43L10	P164L01	P299L16
恒聞妙法行者所聞出定之時	—	P43L10	P164L01	P299L16
憶持不捨	[611a]	P43L11	P164L02	P299L16
令与修多羅合	[611a]	P43L11	P164L02	P300L01
若不合者名為妄想	[611b]	P43L11	P164L03	P300L01
若有合者名為	—	P43L11	P164L03	P300L01
龜想	[611b]	P43L11	P164L04	P300L02
見極樂世界是為像想名第八觀作是觀者	—	P43L11	P164L04	P300L02
除無量	[611b]	P43L12	P164L05	P300L03
億劫生死之罪	—	P43L12	P164L05	P300L03
於現身中	[612a]	P43L12	P164L05	P300L03
得念仏三昧	[612a]	P43L12	P164L05	P300L04
仏告阿難及韋提希此想成已次当	—	P43L13	P164L07	P300L05
更	[612b]	P43L13	P164L07	P300L05
觀無量寿仏身相光明阿難当知無量寿仏身	—	P43L13	P164L07	P300L06
如百千万億夜摩天閻浮檀金色	[612b]	P43L13	P164L08	P300L07
仏身高六十万億	[613a]	P43L14	P165L01	P300L07
那由他恒河沙由旬	—	P43L14	P165L02	P300L07
眉間白毫	[613b]	P43L14	P165L02	P300L08
右旋婉轉	—	P43L14	P165L02	P300L08
如五須弥山	[614a]	P43L14	P165L03	P300L08
仏眼	—	P43L15	P165L03	P300L08
如四大海水	[614a]	P43L15	P165L03	P300L08
青白分明	[614a]	P43L15	P165L03	P300L09

身諸毛孔	—	P43L15	P165L04	P300L09
演出光明	[614a]	P43L15	P165L04	P300L09
如須彌山	[614a]	P43L15	P165L04	P300L10
彼仏円光	[614b]	P43L15	P165L04	P300L10
如百億三千大千世界	[614b]	P43L15	P165L04	P300L10
於円光中	—	P43L15	P165L05	P300L10
有百万億那由他恒河沙化仏	[614b]	P44L01	P165L05	P300L11
一一化仏亦有衆多無數化菩薩	—	P44L01	P165L06	P300L11
以為侍者	[614b]	P44L01	P165L07	P300L12
無量寿仏	—	P44L01	P165L07	P300L12
有八万四千相	[615a]	P44L01	P165L07	P300L12
一一相	[615a]	P44L02	P165L08	P300L12
各有八万四千	—	P44L02	P165L08	P300L12
随形好	[615a]	P44L02	P165L08	P300L13
一一好	—	P44L02	P165L08	P300L13
復有八万四千光明	[615b]	P44L02	P165L08	P300L13
一一光明徧照	[615b]	P44L02	P166L01	P300L13
十方世界念仏衆生	—	P44L02	P166L01	P300L14
攝取不捨	[618b]	P44L03	P166L02	P300L14
[不捨]	[619a]	P44L03	P166L02	P300L14
其光明相好及与化仏	—	P44L03	P166L02	P300L14
不可具説	[619a]	P44L03	P166L02	P300L15
但当憶想令心眼見此事者	—	P44L03	P166L03	P300L15
即見十方一切諸仏	[619b]	P44L03	P166L03	P300L16
以見諸仏故	—	P44L04	P166L04	P300L16
名念仏三昧	[619b]	P44L04	P166L04	P301L01
作是觀者	—	P44L04	P166L04	P301L01
名觀一切仏身	[619b]	P44L04	P166L05	P301L01
以觀仏身故	—	P44L04	P166L05	P301L02
亦見仏心	[619b]	P44L04	P166L05	P301L02
仏心者大慈悲是	—	P44L04	P166L06	P301L02
以無縁慈	[619b]	P44L05	P166L06	P301L03
攝諸衆生作此觀者	—	P44L05	P166L06	P301L03
捨身他世	[620a]	P44L05	P166L07	P301L04
生諸仏前	[620a]	P44L05	P166L07	P301L04
得無生忍	[620a]	P44L05	P166L07	P301L04
是故	—	P44L05	P166L07	P301L04
智者	[620a]	P44L05	P166L08	P301L04
应当繫心諦觀無量寿仏	—	P44L05	P166L08	P301L04
觀無量寿仏者	[620b]	P44L05	P166L08	P301L05
從一相好入	[620b]	P44L06	P167L01	P301L05
但觀眉間白毫極今明了見眉間白毫者八万四千相好自然當現見無量寿仏者	—	P44L06	P167L01	P301L06
[白毫]	[620b]	P44L06	P167L02	P301L06
即見十方無量諸仏	[621a]	P44L07	P167L03	P301L08

得見無量諸仏故	—	P44L07	P167L03	P301L08
諸仏現前授記	[621a]	P44L07	P167L04	P301L09
足為徧觀	—	P44L07	P167L04	P301L09
一切色身	[621a]	P44L07	P167L04	P301L09
想	—	P44L08	P167L04	P301L09
名第九觀	[621a]	P44L08	P167L05	P301L09
作此觀者名為正觀若他觀者名為邪觀	—	P44L08	P167L05	P301L10
仏告阿難及韋提希兒無量寿仏了了分明已次復當觀觀世音菩薩此菩薩身長	—	P44L09	P167L07	P301L12
八十萬億那由他由旬	[621b]	P44L09	P167L08	P301L14
身紫金色	[621b]	P44L10	P168L01	P301L14
頂有肉髻	[621b]	P44L10	P168L01	P301L14
頂有円光	[623a]	P44L10	P168L01	P301L14
面各	[623a]	P44L10	P168L02	P301L15
百千由旬	[623a]	P44L10	P168L02	P301L15
其円光中有五百化仏	—	P44L10	P168L02	P301L15
如釈迦牟尼仏	[623a]	P44L10	P168L03	P301L15
一一化仏有五百化菩薩無量諸天	—	P44L11	P168L03	P301L16
以為侍者	[623a]	P44L11	P168L04	P301L16
拳身	[623b]	P44L11	P168L04	P301L16
光中五道衆生	[623b]	P44L11	P168L04	P302L01
一切色相皆於中現頂上	—	P44L11	P168L04	P302L01
毘楞伽	[623b]	P44L11	P168L05	P302L01
摩尼宝	[623b]	P44L12	P168L05	P302L02
以為天冠其天冠中	—	P44L12	P168L05	P302L02
有一立化仏	[623b]	P44L12	P168L06	P302L02
高二十五由旬觀世音菩薩	—	P44L12	P168L06	P302L02
面如閻浮檀金色	[624a]	P44L12	P168L07	P302L03
眉間毫相	—	P44L12	P168L07	P302L03
備七宝色	[624a]	P44L13	P168L07	P302L03
流出八万四千種光明	—	P44L13	P168L08	P302L04
一一光明	[624a]	P44L13	P168L08	P302L04
有無量無数百千化仏一一化仏無数化菩薩以為侍者	—	P44L13	P168L08	P302L04
變現自在	[624a]	P44L14	P169L02	P302L05
滿十方世界	—	P44L14	P169L02	P302L05
譬如紅蓮華色	[624a]	P44L14	P169L02	P302L06
有八十億光明	[624b]	P44L14	P169L03	P302L06
以為瓔珞	[624b]	P44L14	P169L03	P302L06
其瓔珞中普現	—	P44L14	P169L03	P302L07
一切諸莊嚴事	[625a]	P44L14	P169L04	P302L07
手掌作	—	P44L15	P169L04	P302L07
五百億雜蓮華色	[625a]	P44L15	P169L04	P302L07
手十指端	—	P44L15	P169L04	P302L08
一一指端	[625a]	P44L15	P169L05	P302L08

有八万四千画猶如印文一一画有八万四千色 一一色有八万四千光	—	P44L15	P169L05	P302L08
其光柔輭	[625a]	P45L01	P169L07	P302L09
普照一切	—	P45L01	P169L07	P302L10
以此宝手接引衆生	[625a]	P45L01	P169L07	P302L10
拳足時	—	P45L01	P169L08	P302L10
足下有千輻輪相	[625a]	P45L01	P169L08	P302L11
自然化	[626b]	P45L02	P169L08	P302L11
成五百億光明台	—	P45L02	P169L08	P302L11
下足時有	[626b]	P45L02	P170L01	P302L11
金剛摩尼華	[626b]	P45L02	P170L01	P302L12
布散一切	—	P45L02	P170L01	P302L12
莫不弥滿	[626b]	P45L02	P170L01	P302L12
其余身相	[626b]	P45L02	P170L02	P302L12
衆好具足如仏無異	—	P45L02	P170L02	P302L13
唯頂上肉髻及無見頂相	[627a]	P45L03	P170L02	P302L13
不及世尊	[627a]	P45L03	P170L03	P302L14
是爲觀觀世音菩薩真実色身想名第十觀仏告阿 難若有欲觀觀世音菩薩者当作是觀作是觀者	—	P45L03	P170L03	P302L14
不遇諸禍	[627b]	P45L04	P170L06	P302L16
淨除業障除無數劫生死之罪如此菩薩但聞其名	—	P45L04	P170L06	P302L16
獲無量福	[628a]	P45L05	P170L07	P303L02
何況諦觀若有欲觀觀世音菩薩者	—	P45L05	P170L07	P303L02
先觀頂上肉髻次觀天冠	[628a]	P45L05	P170L08	P303L03
其余衆相亦次第觀之亦令明了如觀掌中作是觀 者名為正觀若他觀者名為邪觀	—	P45L05	P171L01	P303L03
次復應觀大勢至菩薩	[628a]	P45L06	P171L03	P303L07
此菩薩身量	[628a]	P45L07	P171L03	P303L07
大小	[628a]	P45L07	P171L03	P303L07
亦如觀世音卍光	—	P45L07	P171L03	P303L07
面各百二十五由旬	[628b]	P45L07	P171L04	P303L08
照二百五十由旬	[628b]	P45L07	P171L04	P303L08
拳身光明	[629a]	P45L07	P171L05	P303L08
照十方国	[629a]	P45L08	P171L05	P303L09
作紫金色	[629a]	P45L08	P171L05	P303L09
有縁衆生	[629a]	P45L08	P171L05	P303L09
皆悉得見	—	P45L08	P171L06	P303L09
但見此菩薩	[629a]	P45L08	P171L06	P303L10
一毛孔光即見十方無量諸仏	—	P45L08	P171L06	P303L10
淨妙	[629b]	P45L08	P171L07	P303L10
光明是故号此菩薩	—	P45L09	P171L07	P303L11
名無辺光	[630a]	P45L09	P171L08	P303L11
以智慧光	[629b]	P45L09	P171L08	P303L11
普照一切	[629b]	P45L09	P171L08	P303L12
令離三塗	[629b]	P45L09	P171L08	P303L12

得無上力	[629b]	P45L09	P171L08	P303L12
是故号此菩薩	—	P45L09	P172L01	P303L12
名大勢至	[630a]	P45L09	P172L01	P303L13
此菩薩天冠	—	P45L10	P172L01	P303L13
有五百宝華	[630b]	P45L10	P172L02	P303L13
一一宝華有五百宝台一一台中十方諸仏淨妙国土	—	P45L10	P172L02	P303L13
広長之相	[630b]	P45L10	P172L03	P303L14
皆於中現	[630b]	P45L10	P172L03	P303L14
頂上肉髻如	—	P45L11	P172L04	P303L15
頭摩華	[630b]	P45L11	P172L04	P303L15
於肉髻上有一宝瓶	[631a]	P45L11	P172L04	P303L15
盛諸光明	[631a]	P45L11	P172L05	P303L16
普現仏事	—	P45L11	P172L05	P303L16
余諸身	[631a]	P45L11	P172L05	P303L16
相如觀世音等無有異	—	P45L11	P172L05	P303L16
此菩薩行時	[631a]	P45L12	P172L06	P304L01
十方世界一切震動	[631a]	P45L12	P172L06	P304L01
[一切震動]	[631b]	P45L12	P172L06	P304L02
当地動処	—	P45L12	P172L07	P304L02
有五百億宝華	[631b]	P45L12	P172L07	P304L02
一一宝華莊嚴	—	P45L12	P172L07	P304L02
高顯	[631b]	P45L12	P172L07	P304L02
如極樂世界	[631b]	P45L12	P172L08	P304L03
此菩薩坐時	[631b]	P45L13	P172L08	P304L03
七宝国土	[631b]	P45L13	P172L08	P304L03
一時動搖	—	P45L13	P172L08	P304L03
從下方金光仏刹	[631b]	P45L13	P173L01	P304L04
乃至上方光明王仏刹於	—	P45L13	P173L01	P304L04
其中間	[632a]	P45L13	P173L02	P304L04
無量塵數分身無量寿仏分身觀世音大勢至	—	P45L13	P173L02	P304L05
皆悉雲集極樂国土	[632a]	P45L14	P173L03	P304L05
側塞空中	[632b]	P45L14	P173L03	P304L06
坐蓮華座演説妙法	—	P45L14	P173L04	P304L06
度苦衆生	[632b]	P45L14	P173L04	P304L06
作此觀者名為正觀若他觀者名為邪觀見大勢至菩薩是為觀大勢至色身想名第十一觀	—	P45L15	P173L04	P304L07
觀此菩薩者	[632b]	P46L01	P173L06	P304L09
除無量劫阿僧祇生死之罪作是觀者	—	P46L01	P173L07	P304L09
不処胞胎	[632b]	P46L01	P173L08	P304L10
常遊諸仏淨妙国土	—	P46L01	P173L08	P304L10
此觀成已	[633a]	P46L01	P173L08	P304L10
名為具足	[633a]	P46L02	P174L01	P304L11
觀觀世音大勢至	—	P46L02	P174L01	P304L11
見此事時	[633a]	P46L03	P174L02	P304L12



当起自心	[633a]	P46L03	P174L02	P304L12
生於西方極樂世界	—	P46L03	P174L02	P304L12
於蓮華中結跏趺坐	[633b]	P46L03	P174L02	P304L12
作蓮華合想	[633b]	P46L03	P174L03	P304L13
作蓮華開想	[634a]	P46L03	P174L03	P304L13
蓮華開時有	—	P46L03	P174L04	P304L13
五百色光	[634a]	P46L04	P174L04	P304L14
來照身想	[634a]	P46L04	P174L04	P304L14
眼目開想	[634a]	P46L04	P174L04	P304L14
見仏菩薩	[634a]	P46L04	P174L05	P304L14
滿虛空中	[634a]	P46L04	P174L05	P304L14
水鳥樹林及与諸仏所出音声皆演妙法与	—	P46L04	P174L05	P304L15
十二部經	[634b]	P46L05	P174L06	P304L16
合出定之時憶持不失	—	P46L05	P174L06	P304L16
見此事已	[634b]	P46L05	P174L07	P304L16
名見無量寿仏極樂世界	—	P46L05	P174L07	P305L01
是為普觀想	[634b]	P46L05	P174L08	P305L01
名第十二觀	[635a]	P46L05	P174L08	P305L01
無量寿仏	[635a]	P46L06	P174L08	P305L02
化身無數	[635a]	P46L06	P174L08	P305L02
与觀世音大勢至	—	P46L06	P175L01	P305L02
常來至此行人之所	[635a]	P46L06	P175L01	P305L02
仏告阿難及韋提希	[636a]	P46L07	P175L02	P305L04
若欲至心	[636a]	P46L07	P175L02	P305L04
生西方者	—	P46L07	P175L02	P305L04
先当	[636a]	P46L07	P175L02	P305L05
觀於	—	P46L07	P175L03	P305L05
一丈六像在池水上	[636a]	P46L07	P175L03	P305L05
如先所說	[636b]	P46L07	P175L03	P305L05
無量寿仏	—	P46L07	P175L03	P305L06
身量無辺	[636b]	P46L07	P175L04	P305L06
非是凡夫	[636b]	P46L08	P175L04	P305L06
心力所及	—	P46L08	P175L04	P305L06
然彼如來	[636b]	P46L08	P175L04	P305L06
宿願力	[636b]	P46L08	P175L05	P305L07
故有憶想者必得成就	—	P46L08	P175L05	P305L07
但想仏像	[637a]	P46L08	P175L05	P305L07
得無量福	[637a]	P46L08	P175L06	P305L08
何況	—	P46L08	P175L06	P305L08
觀仏具足身相	[637b]	P46L09	P175L06	P305L08
阿彌陀仏神通	[637b]	P46L09	P175L06	P305L08
如意	[637b]	P46L09	P175L07	P305L09
於十方国	—	P46L09	P175L07	P305L09
變現自在	[637b]	P46L09	P175L07	P305L09
或現大身滿虛空中或現小身	[637b]	P46L09	P175L07	P305L09

丈六八尺	[638a]	P46L09	P175L08	P305L10
所現之形皆真金色	[638a]	P46L10	P175L08	P305L10
円光化仏及宝蓮華	—	P46L10	P176L01	P305L11
如上所説	[638a]	P46L10	P176L01	P305L11
觀世音菩薩及大勢至	—	P46L10	P176L01	P305L11
於一切處	[638a]	P46L10	P176L02	P305L12
身同	[638a]	P46L10	P176L02	P305L12
衆生但觀	[638b]	P46L11	P176L02	P305L12
首相知是觀世音知是大勢至此二菩薩	—	P46L11	P176L02	P305L12
助阿彌陀仏普化一切	[638b]	P46L11	P176L03	P305L13
是為雜想觀	[638b]	P46L11	P176L04	P305L14
名第十三觀	—	P46L11	P176L04	P305L14
仏告阿難	[644b]	P46L13	P176L05	P305L15
及韋提希	—	P46L13	P176L05	P305L15
上品上生者	[644b]	P46L13	P176L05	P305L15
若有衆生	[645a]	P46L13	P176L05	P305L15
願生彼国	[645a]	P46L13	P176L06	P305L16
者發三種心	—	P46L13	P176L06	P305L16
即便往生	[645b]	P46L13	P176L06	P305L16
何等為三	[646b]	P46L13	P176L06	P305L16
一者至誠心	[649b]	P46L13	P176L07	P306L01
二者深心	[650a]	P46L14	P176L07	P306L01
三者迴向發願心	[650b]	P46L14	P176L07	P306L01
具三心者必生彼国	[652a]	P46L14	P176L07	P306L01
復有	[652a]	P46L14	P176L08	P306L02
三種衆生	[652b]	P46L14	P176L08	P306L02
當得往生	—	P46L14	P176L08	P306L02
何等為三	[652b]	P46L14	P177L01	P306L02
一者慈心不殺	[652b]	P46L14	P177L01	P306L03
具諸戒行	[652b]	P46L15	P177L01	P306L03
二者	—	P46L15	P177L01	P306L03
誦誦大乘	[653a]	P46L15	P177L01	P306L03
方等	[653a]	P46L15	P177L02	P306L04
經典三者修行	—	P46L15	P177L02	P306L04
六念	[653a]	P46L15	P177L02	P306L04
迴向發願願生彼国	[653b]	P46L15	P177L02	P306L04
具此功德	[654a]	P46L15	P177L03	P306L05
一日乃至七日	[654a]	P46L15	P177L03	P306L05
即得往生彼国時此人	—	P47L01	P177L03	P306L05
精進勇猛	[655a]	P47L01	P177L04	P306L06
故	—	P47L01	P177L04	P306L06
阿彌陀如來	[655a]	P47L01	P177L04	P306L06
与觀世音大勢至	[655a]	P47L01	P177L05	P306L06
無數化仏	[655a]	P47L01	P177L05	P306L06
百千比丘	[655a]	P47L01	P177L05	P306L07

声聞大衆	—	P47L02	P177L05	P306L07
無数諸天	[655a]	P47L02	P177L06	P306L07
七宝宮殿	[655a]	P47L02	P177L06	P306L07
觀世音菩薩	—	P47L02	P177L06	P306L07
執金剛台	[655b]	P47L02	P177L06	P306L08
与大勢至菩薩至行者前阿弼陀仏放大光明	—	P47L02	P177L07	P306L08
照行者身	[656a]	P47L03	P177L08	P306L09
与諸菩薩	[656a]	P47L03	P177L08	P306L09
授手迎接	[656a]	P47L03	P177L08	P306L09
觀世音大勢至与無数菩薩	—	P47L03	P177L08	P306L09
讚歎行者	[656a]	P47L03	P178L01	P306L10
勸進其心行者見已	—	P47L03	P178L01	P306L10
歡喜踊躍	[656b]	P47L04	P178L02	P306L11
自見其身乘金剛台	—	P47L04	P178L02	P306L11
隨從仏後	[656b]	P47L04	P178L02	P306L11
如彈指頃往生彼国	[656b]	P47L04	P178L03	P306L11
生彼国已	[656b]	P47L04	P178L03	P306L12
見仏色身	—	P47L04	P178L03	P306L12
衆相具足	[657a]	P47L04	P178L04	P306L12
見諸菩薩	—	P47L05	P178L04	P306L13
色相具足	[657a]	P47L05	P178L04	P306L13
光明	[657a]	P47L05	P178L04	P306L13
宝林演説妙法	[657a]	P47L05	P178L04	P306L13
聞已即悟	—	P47L05	P178L05	P306L14
無生法忍	[657a]	P47L05	P178L05	P306L14
経須臾間	[657b]	P47L05	P178L05	P306L14
歷事	[658a]	P47L05	P178L06	P306L15
諸仏	—	P47L05	P178L06	P306L14
徧十方界	[658a]	P47L05	P178L06	P306L15
於諸仏前	—	P47L06	P178L06	P306L15
次第授記	[658a]	P47L06	P178L06	P306L15
還到本国	[658a]	P47L06	P178L06	P306L15
得無量百千陀羅尼門	[658a]	P47L06	P178L07	P306L16
是名上品上生者上品中生者	—	P47L06	P178L07	P306L16
不必受持	[658b]	P47L07	P179L01	P307L01
誦誦	—	P47L07	P179L01	P307L01
方等經典	[659a]	P47L07	P179L01	P307L01
善解義趣	[659a]	P47L07	P179L01	P307L01
於	—	P47L07	P179L02	P307L02
第一義	[659b]	P47L07	P179L02	P307L02
心不驚動	[659b]	P47L07	P179L02	P307L02
深信因果	[659b]	P47L07	P179L02	P307L02
不謗大乘	[660a]	P47L07	P179L02	P307L02
以此功德	[660a]	P47L07	P179L03	P307L03
迴向願求生極樂国	—	P47L08	P179L03	P307L03

行此行者	[660a]	P47L08	P179L03	P307L03
命欲終時阿彌陀仏と觀世音大勢至無量	—	P47L08	P179L04	P307L03
大衆	[660a]	P47L08	P179L05	P307L04
眷屬圍繞持	—	P47L08	P179L05	P307L04
紫金台	[660a]	P47L08	P179L05	P307L05
至行者前	—	P47L09	P179L05	P307L05
讚言	[660b]	P47L09	P179L05	P307L05
法子	[660b]	P47L09	P179L05	P307L05
汝行大乘解第一義	[660b]	P47L09	P179L06	P307L05
是故我今來迎接汝	[660b]	P47L09	P179L06	P307L06
与千化仏	[660b]	P47L09	P179L07	P307L06
一時	—	P47L09	P179L07	P307L07
授手	[660b]	P47L09	P179L07	P307L07
行者自見坐	—	P47L09	P179L07	P307L07
紫金台	[660b]	P47L10	P179L07	P307L07
合掌叉手	[660b]	P47L10	P179L07	P307L07
讚歎諸仏	[661a]	P47L10	P179L08	P307L08
如一念頃	[661a]	P47L10	P179L08	P307L08
即生彼国	[661a]	P47L10	P179L08	P307L08
七宝池中此	—	P47L10	P179L08	P307L08
紫金台	[661b]	P47L10	P180L01	P307L09
如大宝華	[661b]	P47L10	P180L01	P307L09
経宿則開	[661b]	P47L10	P180L01	P307L09
行者身作紫磨金色	[661b]	P47L11	P180L01	P307L09
足下亦有七宝蓮華	[661b]	P47L11	P180L02	P307L09
仏及菩薩俱時放光明照行者身日即開明	—	P47L11	P180L02	P307L10
因前宿習	[662a]	P47L11	P180L03	P307L11
普聞樂声	[662a]	P47L12	P180L04	P307L11
純説甚深第一義諦	—	P47L12	P180L04	P307L12
即下金台	[662a]	P47L12	P180L04	P307L12
礼仏合掌	[662a]	P47L12	P180L04	P307L12
讚歎	—	P47L12	P180L05	P307L13
世尊	[662a]	P47L12	P180L05	P307L13
経於七日	[662a]	P47L12	P180L05	P307L13
応時即於阿耨多羅三藐三菩提	—	P47L12	P180L05	P307L13
得不退転	[662a]	P47L13	P180L06	P307L14
応時即能飛行徧至十方	—	P47L13	P180L06	P307L14
歴史	[662b]	P47L13	P180L07	P307L15
諸仏於諸仏所	—	P47L13	P180L07	P307L15
修諸三昧	[662b]	P47L13	P180L07	P307L15
経一小劫	[662b]	P47L13	P180L07	P307L15
得無生忍	[663a]	P47L13	P180L08	P307L15
現前授記	[663a]	P47L14	P180L08	P307L16
是名上品中生者上品下生者	—	P47L14	P180L08	P307L16
亦信因果	[663a]	P47L15	P181L02	P308L01

不謗大乘	—	P47L15	P181L02	P308L01
但覺無上道心	[663b]	P47L15	P181L02	P308L01
以此功德迴向願求生極樂國行者命欲終時阿彌陀仏及觀世音大勢至	—	P47L15	P181L03	P308L02
与諸眷屬	[664b]	P48L01	P181L04	P308L03
持	—	P48L01	P181L05	P308L03
金蓮華	[664b]	P48L01	P181L05	P308L03
化作五百化仏來迎此人五百化仏	—	P48L01	P181L05	P308L04
一時授手	[664b]	P48L01	P181L06	P308L04
讚言法子	—	P48L02	P181L06	P308L05
汝今清淨	[664b]	P48L02	P181L06	P308L05
發無上道心我來迎汝	—	P48L02	P181L06	P308L05
見此事時	[664b]	P48L02	P181L07	P308L06
即自見身坐金蓮華	—	P48L02	P181L07	P308L06
坐已華合	[664b]	P48L02	P181L08	P308L06
隨世尊後	—	P48L02	P181L08	P308L07
即得往生	[664b]	P48L03	P181L08	P308L07
七宝池中	[665a]	P48L03	P181L08	P308L07
一日一夜蓮華乃開	—	P48L03	P182L01	P308L08
七日之中乃得見仏	[665a]	P48L03	P182L01	P308L08
雖見仏身於衆相好心不明於三七日後乃了了見聞衆音声皆演妙法遊歷十方供養	—	P48L03	P182L01	P308L08
諸仏於諸仏前聞甚深法	—	P48L04	P182L04	P308L11
經三小劫	[665b]	P48L04	P182L04	P308L12
得	—	P48L05	P182L04	P308L12
百法明門	[665b]	P48L05	P182L04	P308L12
住歡喜地是名上品下生者是名上輩生想	—	P48L05	P182L05	P308L12
名第十四觀	[665b]	P48L05	P182L06	P308L13
仏告阿難及韋提希中品上生者若有衆生	—	P48L06	P182L07	P308L14
受持五戒持八戒齋	[666a]	P48L06	P182L08	P308L15
修行諸戒	[666b]	P48L06	P182L08	P308L15
不造五逆	[666b]	P48L06	P182L08	P308L15
無衆過患	[666b]	P48L06	P182L08	P308L15
以此善根迴向願求生於西方極樂世界臨命終時	—	P48L07	P183L01	P308L16
阿彌陀仏	[667a]	P48L07	P183L02	P309L01
与諸比丘	[667a]	P48L07	P183L02	P309L01
眷屬圍繞放金色光至其所	—	P48L07	P183L02	P309L01
演說苦空無常無我	[667b]	P48L08	P183L03	P309L02
讚歎出家得離衆苦	[667b]	P48L08	P183L04	P309L02
行者見已心大歡喜	[668a]	P48L08	P183L04	P309L03
自見己身坐蓮華台長跪合掌為仏作礼	—	P48L08	P183L04	P309L03
未拳頭頃	[668a]	P48L09	P183L05	P309L04
即得往生極樂世界	—	P48L09	P183L06	P309L05
蓮華尋開	[668a]	P48L09	P183L06	P309L05
當華敷時	—	P48L09	P183L06	P309L05

聞衆音聲讚歎四諦	[668b]	P48L09	P183L07	P309L06
應時即得	[668b]	P48L09	P183L07	P309L06
阿羅漢道	[668b]	P48L10	P183L07	P309L06
三明六通	[668b]	P48L10	P183L08	P309L07
具八解脫	[669a]	P48L10	P183L08	P309L07
是中上品上生者中品中生者若有衆生	—	P48L10	P183L08	P309L07
若一日一夜受持八戒齋	[669a]	P48L11	P184L01	P309L08
若一日一夜持沙彌戒	[669b]	P48L11	P184L02	P309L09
若一日一夜持	—	P48L11	P184L02	P309L09
具足戒	[669b]	P48L11	P184L03	P309L09
威儀	[669b]	P48L12	P184L03	P309L09
無欠以此功德迴向願求生極樂國	—	P48L12	P184L03	P309L09
戒香熏修	[670a]	P48L12	P184L04	P309L10
如此行者命欲終時	—	P48L12	P184L04	P309L11
見阿彌陀仏与諸眷屬	[670a]	P48L12	P184L04	P309L11
放金色光持七宝蓮華至行者前行者自聞空中有 声讚言善男子如汝善人	—	P48L13	P184L06	P309L13
隨順三世諸仏教	[670a]	P48L13	P184L07	P309L13
故我来迎汝行者自見坐蓮華上	—	P48L14	P184L07	P309L14
蓮華即合	[670b]	P48L14	P184L08	P309L15
生於西方極樂世界在宝池中	—	P48L14	P184L08	P309L15
終於七日	[670b]	P48L14	P185L01	P309L15
蓮華乃敷華既敷已開目合掌讚歎世尊	—	P48L14	P185L01	P309L16
聞法歡喜	[670b]	P48L15	P185L02	P310L01
得	—	P48L15	P185L02	P310L01
須陀洹	[670b]	P48L15	P185L02	P310L01
經半劫	[670b]	P48L15	P185L02	P310L01
已成阿羅漢是中品中生者中品下生者若有	—	P48L15	P185L03	P310L01
善男子善女人	[671a]	P49L01	P185L04	P310L03
孝養父母	[671b]	P49L01	P185L04	P310L03
行世仁慈	[671b]	P49L01	P185L05	P310L03
此人命欲終時遇善知識	[672a]	P49L01	P185L05	P310L04
為其広説	—	P49L01	P185L05	P310L04
善知識	[672b]	P49L02	P185L05	P310L04
阿彌陀仏国土樂事	[672b]	P49L01	P185L06	P310L04
亦説法藏比丘	—	P49L02	P185L06	P310L05
四十八願	[672b]	P49L02	P185L06	P310L05
聞此事已	[672b]	P49L02	P185L07	P310L05
尋即命終	[672b]	P49L02	P185L07	P310L06
譬如壯士	[673a]	P49L02	P185L07	P310L06
屈伸臂頃	—	P49L02	P185L07	P310L06
即生西方極樂世界	[673a]	P49L02	P185L08	P310L06
生經七日	[673a]	P49L03	P185L08	P310L07
遇觀世音及大勢至	—	P49L03	P185L08	P310L07
聞法歡喜	[673a]	P49L03	P186L01	P310L07

經一小劫	[673b]	P49L03	P186L01	P310L08
成阿羅漢	[673b]	P49L03	P186L01	P310L08
是名中品下生者	—	P49L03	P186L01	P310L08
是名中輩生想名第十五觀	[673b]	P49L03	P186L02	P310L09
仏告阿難及韋提希	—	P49L05	P186L03	P310L10
下品上生者	[673b]	P49L05	P186L03	P310L10
或有衆生	[674b]	P49L05	P186L03	P310L10
作衆惡業	[674b]	P49L05	P186L04	P310L11
雖不誹謗方等 經典	[674b]	P49L05	P186L04	P310L11
如此愚人	—	P49L05	P186L04	P310L11
多造衆惡	[674b]	P49L05	P186L04	P310L12
無有慚愧	[674b]	P49L06	P186L05	P310L12
命欲終時	[674b]	P49L06	P186L05	P310L12
遇善知識	[675a]	P49L06	P186L05	P310L12
為讚	—	P49L06	P186L05	P310L12
大乘十二部經首題名字	[675a]	P49L06	P186L06	P310L13
以聞如是諸經名故	—	P49L06	P186L06	P310L13
除却千劫	[675b]	P49L06	P186L07	P310L14
極重惡業	—	P49L06	P186L07	P310L14
智者復教	[675b]	P49L07	P186L07	P310L14
合掌叉手	[675b]	P49L07	P186L07	P310L14
称南無阿彌陀仏	[675b]	P49L07	P186L08	P310L15
称仏名	[676a]	P49L07	P186L08	P310L15
故	—	P49L07	P186L08	P310L15
除五十億劫	[676a]	P49L07	P186L08	P310L15
生死之罪	—	P49L07	P186L08	P310L15
爾時彼仏即遣化仏	[676b]	P49L07	P187L01	P310L16
化觀世音化大勢至至行者前	—	P49L08	P187L01	P310L16
讚言善男子	[676b]	P49L08	P187L02	P311L01
汝称仏名故	[677a]	P49L08	P187L02	P311L01
諸罪消滅我来迎汝作是語已行者即見化仏光明	—	P49L08	P187L02	P311L01
徧滿其室	[677a]	P49L09	P187L04	P311L03
見已歡喜即便命終	[677a]	P49L09	P187L04	P311L03
乘宝蓮華随化仏後	[677a]	P49L09	P187L04	P311L03
生宝池中經七七日蓮華乃敷当華敷時大悲觀世 音菩薩及大勢至放大光明住其人前	—	P49L09	P187L05	P311L04
為説甚深十二部經	[677a]	P49L10	P187L07	P311L06
聞已信解	[677b]	P49L10	P187L07	P311L06
發無上道心	[677b]	P49L11	P187L08	P311L07
經十小劫	[678a]	P49L11	P187L08	P311L07
具百法明門得入	—	P49L11	P187L08	P311L07
初地是名下品上生者	—	P49L11	P188L01	P311L07
得聞仏名法名及聞僧名	[678b]	P49L11	P188L01	P311L08
聞三宝名即得往生仏告阿難及韋提希	—	P49L11	P188L02	P311L09

下品中生者	[679a]	P49L13	P188L03	P311L10
或有衆生	—	P49L13	P188L03	P311L10
毀犯五戒八戒	[680a]	P49L13	P188L04	P311L11
及具足戒如此愚人	—	P49L13	P188L04	P311L11
偷僧祇物	[680a]	P49L13	P188L04	P311L11
盜現前僧物	[680b]	P49L13	P188L05	P311L11
不淨說法	[681a]	P49L14	P188L05	P311L12
無有慚愧	[681b]	P49L14	P188L05	P311L12
以諸惡業	[681b]	P49L14	P188L05	P311L12
而自莊嚴	[681b]	P49L14	P188L06	P311L12
如此罪人	[681b]	P49L14	P188L06	P311L13
以惡業故墮地獄	—	P49L14	P188L06	P311L13
命欲終時	[682a]	P49L14	P188L07	P311L13
地獄衆火	[682a]	P49L14	P188L07	P311L14
一時俱至	—	P49L15	P188L07	P311L14
遇善知識	[682b]	P49L15	P188L07	P311L14
以大慈悲	[682b]	P49L15	P188L07	P311L14
為說阿彌陀仏	—	P49L15	P188L08	P311L15
十力威徳	[683a]	P49L15	P188L08	P311L15
広説彼仏	—	P49L15	P188L08	P311L15
光明神力	[683a]	P49L15	P189L01	P311L15
亦讚	—	P49L15	P189L01	P311L15
戒定慧解脫解脫知見	[683a]	P49L15	P189L01	P311L15
此人聞已	[683b]	P50L01	P189L01	P311L16
除八十億劫	[684a]	P50L01	P189L02	P311L16
生死之罪地獄猛火	—	P50L01	P189L02	P311L16
化為清涼風	[684a]	P50L01	P189L02	P312L01
吹諸天華	[684b]	P50L01	P189L03	P312L01
華上皆有	[684b]	P50L01	P189L03	P312L01
化仏菩薩迎接此人如一念頃即得往生	—	P50L01	P189L03	P312L02
七宝池中蓮華之内	[684b]	P50L02	P189L04	P312L03
經於六劫	[684b]	P50L02	P189L05	P312L03
蓮華乃敷當華敷時觀世音大勢至以	—	P50L02	P189L06	P312L03
梵音聲	[685a]	P50L03	P189L06	P312L04
安慰	[685a]	P50L03	P189L06	P312L04
彼人	—	P50L03	P189L06	P312L04
為説大乘甚深經典	[685a]	P50L03	P189L06	P312L04
聞此法已	—	P50L03	P189L07	P312L05
應時即発	[685a]	P50L03	P189L07	P312L05
無上道心	[685b]	P50L03	P189L07	P312L05
是名下品中生者仏告阿難及韋提希	—	P50L03	P189L07	P312L06
下品下生者	[685b]	P50L05	P190L01	P312L07
或有衆生	[685b]	P50L05	P190L01	P312L07
作不善業五逆十惡	[685b]	P50L05	P190L02	P312L08
具諸不善	[685b]	P50L05	P190L02	P312L08



如此惡人以惡業故	—	P50L05	P190L02	P312L08
應墮惡道	[685b]	P50L06	P190L03	P312L09
經歷多劫	[686a]	P50L06	P190L03	P312L09
受苦無窮	—	P50L06	P190L03	P312L09
如此惡人	[686a]	P50L06	P190L03	P312L10
臨命終時	[686a]	P50L06	P190L04	P312L10
遇善知識	—	P50L06	P190L04	P312L10
種種安慰	[686a]	P50L06	P190L04	P312L10
為說妙法	[686b]	P50L06	P190L04	P312L11
教令念仏	[686b]	P50L06	P190L05	P312L11
此人苦逼	[686b]	P50L06	P190L05	P312L11
不逼念仏善友告言汝若不能念者	—	P50L07	P190L05	P312L12
應稱無量壽仏	[686b]	P50L07	P190L06	P312L13
如是	[687a]	P50L07	P190L06	P312L13
至心	[687a]	P50L07	P190L06	P312L13
令声	[687a]	P50L07	P190L06	P312L13
不絶	[687a]	P50L07	P190L07	P312L13
具足十念	[687a]	P50L07	P190L07	P312L14
称南無阿彌陀仏	[690b]	P50L07	P190L07	P312L14
称仏名故	—	P50L08	P190L07	P312L14
於念念中	[690b]	P50L08	P190L08	P312L14
除八十億劫	[690b]	P50L08	P190L08	P312L15
生死之罪命終之時見金蓮華	—	P50L08	P190L08	P312L15
猶如日輪	[691b]	P50L08	P191L01	P312L15
住其人前如一念頃即得往生極樂世界	—	P50L08	P191L01	P312L16
於蓮華中	[692a]	P50L09	P191L02	P313L01
滿十二大劫	[692a]	P50L09	P191L02	P313L01
蓮華方開觀世音大勢至以大悲音声為其広説	—	P50L09	P191L03	P313L01
諸法実相	[692a]	P50L10	P191L04	P313L02
除滅罪法	[692a]	P50L10	P191L04	P313L02
聞已歡喜応時	—	P50L10	P191L04	P313L03
即発菩提之心	[692b]	P50L10	P191L04	P313L03
足名下品下生者	—	P50L10	P191L05	P313L03
足名下輩生想名第十六観	[692b]	P50L10	P191L05	P313L04
説是語時	[693a]	P50L12	P191L07	P313L06
韋提希与五百侍女	—	P50L12	P191L07	P313L06
聞仏所説	[693b]	P50L12	P191L07	P313L06
応時即見極樂世界	[693b]	P50L12	P191L07	P313L06
広長之相	—	P50L12	P191L08	P313L07
得見仏身及二菩薩	[693b]	P50L12	P191L08	P313L07
心生歡喜	[693b]	P50L12	P192L01	P313L08
歎未曾有	[694a]	P50L13	P192L01	P313L08
靡然	[694a]	P50L13	P192L01	P313L08
大悟	—	P50L13	P192L01	P313L08
得無生忍	[694a]	P50L13	P192L01	P313L08

五百侍女	—	P50L13	P192L02	P313L09
發阿耨多羅三藐三菩提心	[694a]	P50L13	P192L02	P313L09
願生彼国	—	P50L13	P192L02	P313L09
世尊悉記	[694a]	P50L13	P192L03	P313L09
皆当往生彼国已得	—	P50L14	P192L03	P313L10
諸仏現前三昧	[694a]	P50L14	P192L03	P313L10
無量諸天發無上道心	[694b]	P50L14	P192L04	P313L11
爾時	[695a]	P50L15	P192L05	P313L13
阿難	—	P50L15	P192L05	P313L13
即從座起	[695a]	P50L15	P192L05	P313L13
前白仏言	[695a]	P50L15	P192L05	P313L13
世尊	—	P50L15	P192L05	P313L13
当何名此經	[695a]	P50L15	P192L05	P313L13
此法之要当云何受持仏告阿難	—	P50L15	P192L06	P313L14
此經名觀〔極樂国土無量寿仏觀世音菩薩大勢至菩薩亦名〕淨除業障	[695a]	P50L15	P192L06	P314L01
亦名淨除業障	[695b]	P51L01	P192L08	P314L02
生諸仏前	[695b]	P51L01	P192L08	P314L02
汝当受持	[695b]	P51L01	P192L08	P314L02
無令忘失	—	P51L01	P193L01	P314L02
行此三昧者	[695b]	P51L01	P193L01	P314L03
現身得見	[696a]	P51L02	P193L01	P314L03
無量寿仏及二大士若	—	P51L02	P193L01	P314L03
善男子善女人	[696a]	P51L02	P193L02	P314L04
但聞仏名	[690a]	P51L02	P193L02	P314L04
二菩薩名除無量劫生死之罪	—	P51L02	P193L02	P314L04
何況憶念	[696b]	P51L03	P193L03	P314L05
若念仏者	[696b]	P51L03	P193L03	P314L05
当知此人	[697a]	P51L03	P193L04	P314L05
是人中分陀利華	[697a]	P51L03	P193L04	P314L06
觀世音菩薩	[697b]	P51L03	P193L04	P314L06
大勢至菩薩為	—	P51L03	P193L05	P314L06
其勝友	[697b]	P51L03	P193L05	P314L06
当坐道場生諸仏家	[697b]	P51L03	P193L05	P314L07
生諸仏家	[698a]	P51L04	P193L05	P314L07
仏告阿難	[699a]	P51L04	P193L06	P314L07
汝好持是語	[700a]	P51L04	P193L06	P314L08
持是語者	[700a]	P51L04	P193L06	P314L08
即是持無量寿仏名仏説此語時尊者目犍連阿難	—	P51L04	P193L06	P314L08
及韋提希等	[700b]	P51L05	P193L07	P314L10
聞仏所説	—	P51L05	P193L08	P314L10
皆大歡喜	[700b]	P51L05	P193L08	P314L10
爾時世尊	[700b]	P51L06	P194L01	P314L12
足步虚空	[700b]	P51L06	P194L01	P314L12
還耆闍崛山	—	P51L06	P194L01	P314L12

爾時阿難	[700b]	P51L06	P194L01	P314L12
広為大衆	—	P51L06	P194L02	P314L12
說如上事	[700b]	P51L06	P194L02	P314L13
無量諸天	[701a]	P51L06	P194L02	P314L13
及竜夜叉	—	P51L06	P194L02	P314L13
聞仏所説	[701a]	P51L06	P194L02	P314L13
皆大歡喜	[701a]	P51L07	P194L03	P314L14
礼仏而退	[701a]	P51L07	P194L03	P314L14
仏説觀無量寿經	—	P51L08	P194L04	P314L15

## 阿彌陀經隨聞講錄

「阿彌陀經」本文	隨聞講錄	淨全	聖典（漢文）	聖典（書き下し）
仏説阿彌陀經	[703b]	P52L.01	P195L.01	P315L.01
姚秦	[705b]	P52L.02	P195L.02	P315L.02
三藏	[705b]	P52L.02	P195L.02	P315L.02
法師	[705b]	P52L.02	P195L.02	P315L.02
鳩摩羅什	[705b]	P52L.02	P195L.02	P315L.02
奉	[710a]	P52L.02	P195L.02	P315L.02
詔	[710a]	P52L.02	P195L.02	P315L.02
訳	[710a]	P52L.02	P195L.02	P315L.02
如是我聞	[711a]	P52L.03	P195L.03	P315L.04
一時	[711a]	P52L.03	P195L.03	P315L.04
仏	[711b]	P52L.03	P195L.03	P315L.04
在	—	P52L.03	P195L.03	P315L.04
舍衛国	[711b]	P52L.03	P195L.03	P315L.04
祇樹給孤獨園	[712b]	P52L.03	P195L.03	P315L.04
園	[713a]	P52L.03	P195L.03	P315L.04
大	[713b]	P52L.03	P195L.04	P315L.05
与	[713b]	P52L.03	P195L.04	P315L.04
比丘	[713b]	P52L.03	P195L.04	P315L.04
衆	[713b]	P52L.03	P195L.04	P315L.05
千二百五十人	[713b]	P52L.03	P195L.04	P315L.05
俱	[714a]	P52L.03	P195L.04	P315L.05
皆是	—	P52L.03	P195L.04	P315L.05
大阿羅漢	[714a]	P52L.03	P195L.04	P315L.05
衆所知識	[714a]	P52L.03	P195L.05	P315L.05
長老	[714b]	P52L.04	P195L.05	P315L.06
舍利弗摩訶目犍連摩訶迦葉摩訶迦旃延摩訶俱絺羅離婆多周利槃陀伽難陀阿難陀羅睺羅跋提波提賓頭盧頗羅墮迦留陀夷摩訶劫賓那薄拘羅阿菴樓駄	[714b]	52L.04	P195L.05	P315L.06
如是等	[714b]	P52L.05	P196L.01	P315L.08
諸大弟子	[715a]	P52L.05	P196L.01	P315L.08
并	[715a]	P52L.06	P196L.01	P315L.08
諸菩薩摩訶薩	[715a]	P52L.06	P196L.01	P315L.08
文殊師利	—	P52L.06	P196L.02	P315L.09
法王子	[715a]	P52L.06	P196L.02	P315L.09
阿逸多菩薩乾陀訶提菩薩常精進菩薩	—	P52L.06	P196L.02	P315L.09
与如是等	[715b]	P52L.06	P196L.03	P315L.10
諸大	[715b]	P52L.06	P196L.03	P315L.10
菩薩	—	P52L.07	P196L.03	P315L.10
及	[715b]	P52L.07	P196L.03	P315L.10
釈提桓因	[715b]	P52L.07	P196L.03	P315L.10
等	[716a]	P52L.07	P196L.04	P315L.10
無量諸天大衆	—	P52L.07	P196L.04	P315L.10

俱	[716a]	P52L07	P196L04	P315L11
爾時	[717a]	P52L08	P196L05	P316L01
仏告長老舍利弗	[717b]	P52L08	P196L05	P316L01
從是西方	[718a]	P52L08	P196L05	P316L01
過十萬億仏土	[719a]	P52L08	P196L05	P316L01
有世界名曰	—	P52L08	P196L06	P316L02
極樂	[719b]	P52L08	P196L06	P316L02
其土有仏	[719b]	P52L08	P196L06	P316L02
号阿彌陀	—	P52L08	P196L06	P316L02
今現在說法	[719b]	P52L08	P196L07	P316L03
舍利弗	—	P52L09	P196L07	P316L03
彼土何故名爲極樂	[720b]	P52L09	P196L07	P316L03
其國衆生	—	P52L09	P196L07	P316L04
無有衆苦	[720b]	P52L09	P196L08	P316L04
但受諸樂	[720b]	P52L09	P196L08	P316L04
故名極樂	—	P52L09	P196L08	P316L04
又舍利弗極樂國土	—	P52L10	P197L01	P316L06
七重欄楯	[720b]	P52L10	P197L01	P316L06
七重羅網	—	P52L10	P197L01	P316L06
七重行樹	[721a]	P52L10	P197L01	P316L06
皆是四宝	[721a]	P52L10	P197L02	P316L07
周圍圍繞	[721b]	P52L10	P197L02	P316L07
是故彼國名曰極樂	—	P52L10	P197L02	P316L07
又舍利弗極樂國土	—	P52L11	P197L04	P316L08
有七宝池	[721b]	P52L11	P197L04	P316L08
八功德水	[721b]	P52L11	P197L04	P316L08
充滿其中	—	P52L11	P197L04	P316L08
池底純以金沙布地	[721b]	P52L11	P197L05	P316L08
四辺階道	[721b]	P52L11	P197L05	P316L09
金銀瑠璃玻瓈合成	—	P52L11	P197L05	P316L09
上有樓閣	[721b]	P52L12	P197L06	P316L10
亦以金銀瑠璃玻瓈磈磈赤珠碼瑙而嚴飾之	—	P52L12	P197L06	P316L10
池中蓮華	—	P52L12	P197L07	P316L11
大如車輪	[722a]	P52L12	P197L07	P316L11
青色青光黃色黄光赤色赤光白色白光	[723a]	P52L12	P197L08	P316L11
微妙香潔	[723a]	P52L13	P198L01	P316L13
舍利弗極樂國土	—	P52L13	P198L01	P316L13
成就如是功德莊嚴	[723a]	P52L13	P198L01	P316L13
又舍利弗彼仏國土	—	P52L14	P198L03	P316L15
常作天樂	[723b]	P52L14	P198L03	P316L15
黄金爲地	[724a]	P52L14	P198L03	P316L15
昼夜六時	[724a]	P52L14	P198L03	P316L15
而雨曼陀羅華	[724b]	P52L14	P198L04	P316L16
其國衆生	—	P52L14	P198L04	P316L16
常以清旦	[725a]	P52L14	P198L04	P316L16

各以衣。	[725a]	P52L14	P198L05	P316L16
盛衆妙華	[725a]	P53L01	P198L05	P317L01
供養他方	[725a]	P53L01	P198L05	P317L01
十萬億仞	—	P53L01	P198L05	P317L01
即以食時	[725b]	P53L01	P198L05	P317L01
[食時]	[725b]	P53L01	P198L06	P317L01
還到本國飯食	—	P53L01	P198L06	P317L02
經行	[725b]	P53L01	P198L06	P317L02
舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴	—	P53L01	P198L06	P317L02
復次	[726a]	P53L03	P198L08	P317L04
舍利弗彼國	—	P53L03	P198L08	P317L04
常有	[726b]	P53L03	P198L08	P317L04
種種	[726b]	P53L03	P198L08	P317L04
奇妙	[726b]	P53L03	P198L08	P317L04
雜色之鳥	[726b]	P53L03	P198L08	P317L04
白鵲	[726b]	P53L03	P199L01	P317L04
孔雀	[726b]	P53L03	P199L01	P317L04
鸚鵡	[726b]	P53L03	P199L01	P317L04
舍利	[726b]	P53L03	P199L01	P317L05
迦陵頻伽	[727a]	P53L03	P199L01	P317L05
共命	[727a]	P53L03	P199L01	P317L05
之鳥	[727a]	P53L03	P199L01	P317L05
是諸衆鳥晝夜六時出	—	P53L03	P199L01	P317L05
和雅	[727a]	P53L04	P199L02	P317L05
音其音	—	P53L04	P199L02	P317L05
演暢	[727b]	P53L04	P199L02	P317L06
五根五力七菩提分八聖道分	—	P53L04	P199L02	P317L06
如是等法	[727b]	P53L04	P199L03	P317L06
其土衆生聞是音已皆悉	—	P53L04	P199L03	P317L07
念仏念法念僧	[727b]	P53L05	P199L04	P317L07
舍利弗	—	P53L05	P199L04	P317L08
汝勿謂此鳥實是罪報所生	[728a]	P53L05	P199L04	P317L08
所以者何	—	P53L05	P199L05	P317L08
彼仏國土	—	P53L05	P199L05	P317L09
無三惡趣	[728a]	P53L05	P199L06	P317L09
舍利弗其仏國土	—	P53L05	P199L06	P317L09
尚無三惡道之名	[728a]	P53L06	P199L06	P317L10
何況有實	—	P53L06	P199L07	P317L10
是諸衆鳥皆是阿彌陀仏	—	P53L06	P199L07	P317L10
欲令法音宣流變化所作	[728b]	P53L06	P199L07	P317L11
舍利弗彼仏國土	—	P53L06	P199L08	P317L11
微風吹動諸宝行樹及宝羅網出微妙音	[729a]	P53L07	P199L08	P317L12
譬如百千種樂同時俱作	[729a]	P53L07	P200L01	P317L13
聞是音者	—	P53L07	P200L02	P317L13
皆自然生	[729b]	P53L07	P200L02	P317L14

念仏念法念僧之心	[729b]	P53L08	P200L02	P317L14
舍利弗其仏国土成就如是功德莊嚴	—	P53L08	P200L03	P317L14
舍利弗於	—	P53L09	P200L05	P317L16
汝意云何	[729b]	P53L09	P200L05	P317L16
彼仏何故号阿彌陀	—	P53L09	P200L05	P317L16
舍利弗	—	P53L09	P200L05	P317L16
彼仏光明無量	[729b]	P53L09	P200L06	P318L01
照十方国	[730a]	P53L09	P200L06	P318L01
無所障礙	[730a]	P53L09	P200L06	P318L01
是故号為阿彌陀	—	P53L09	P200L06	P318L01
又舍利弗	—	P53L10	P200L07	P318L02
彼仏寿命及其人民	[730a]	P53L10	P200L07	P318L02
無量無辺阿僧祇劫故名阿彌陀	—	P53L10	P200L08	P318L02
舍利弗阿彌陀仏	—	P53L10	P200L08	P318L03
成仏已來於今十劫	[730b]	P53L10	P201L01	P318L03
又舍利弗彼仏有	—	P53L11	P201L01	P318L04
無量無辺声聞弟子	[732b]	P53L11	P201L02	P318L04
皆阿羅漢	[732b]	P53L11	P201L02	P318L05
非是算數之所能知	—	P53L11	P201L02	P318L05
諸菩薩衆亦復如是	[733a]	P53L11	P201L03	P318L05
舍利弗彼仏国土成就如是功德莊嚴	[733a]	P53L12	P201L03	P318L06
又舍利弗極樂国土衆生者	—	P53L13	P201L05	P318L07
皆是阿鞞跋致	[733a]	P53L13	P201L05	P318L07
其中多有	—	P53L13	P201L06	P318L07
一生補處	[733b]	P53L13	P201L06	P318L08
其數甚多非是算數所能知之但可以無量無辺阿僧祇劫說	[733b]	P53L13	P201L06	P318L08
舍利弗衆生聞者	[734a]	P53L14	P201L07	P318L09
应当發願	[734a]	P53L14	P201L08	P318L09
願生彼国	—	P53L14	P201L08	P318L10
所以者何	[734a]	P53L14	P201L08	P318L10
得与如是	—	P53L14	P202L01	P318L10
諸上善人	[734a]	P53L15	P202L01	P318L10
俱会一处	—	P53L15	P202L01	P318L10
舍利弗	—	P53L15	P202L01	P318L11
不可以少善根福德因縁得生彼国	[734b]	P53L15	P202L01	P318L11
舍利弗若有	—	P54L01	P202L03	P318L13
善男子善女人	[735b]	P54L01	P202L03	P318L13
聞說阿彌陀仏	[737a]	P54L01	P202L03	P318L13
執持	[737a]	P54L01	P202L04	P318L13
名号	—	P54L01	P202L04	P318L13
若一日若二日若三日若四日若五日若六日若七日	[737b]	P54L01	P202L04	P318L14
一心不乱	[738b]	P54L02	P202L05	P318L15
其人臨命終時阿彌陀仏与諸聖衆	—	P54L02	P202L05	P318L15

現在其前	[741a]	P54L02	P202L06	P318L16
是人終時	—	P54L02	P202L06	P318L16
心不顛倒	[742a]	P54L02	P202L07	P318L16
即得往生阿彌陀仏極樂国土	—	P54L02	P202L07	P319L01
舍利弗	—	P54L03	P202L07	P319L01
我見是利	[743a]	P54L03	P202L08	P319L01
故說此言	[743b]	P54L03	P202L08	P319L02
若有	—	P54L03	P202L08	P319L02
衆生聞是說者应当發願生彼国土	[743b]	P54L03	P202L08	P319L02
舍利弗如我今者贊嘆阿彌陀仏不可思議功德	[743b]	P54L04	P203L02	P319L04
[贊嘆阿彌陀仏]	[745a]	P54L04	P203L02	P319L04
[不可思議功德]	[745b]	P54L04	P203L02	P319L04
東方	[746a]	P54L04	P203L03	P319L04
亦有	[746b]	P54L04	P203L03	P319L04
阿閼鞞仏須彌相仏大須彌仏須彌光仏妙音仏	—	P54L04	P203L03	P319L05
如是等	—	P54L05	P203L04	P319L05
恒河沙數	[746b]	P54L05	P203L04	P319L05
諸仏	—	P54L05	P203L04	P319L06
各於其國	[746b]	P54L05	P203L05	P319L06
出広長舌相	[747a]	P54L05	P203L05	P319L06
徧覆三千大千世界	[748a]	P54L05	P203L05	P319L06
說誠実言	[748b]	P54L05	P203L06	P319L07
汝等衆生	[748b]	P54L05	P203L06	P319L07
当信是稱贊不可思議功德一切諸仏所護念經	[749a]	P54L06	P203L06	P319L07
舍利弗南方世界	—	P54L07	P203L08	P319L09
有日月灯仏名聞光仏大焰肩仏須彌灯仏無量精進仏	—	P54L07	P203L08	P319L09
如是等恒河沙數諸仏	—	P54L07	P204L01	P319L10
各於其國出広長舌相徧覆三千大千世界說誠実言	—	P54L08	P204L02	P319L10
汝等衆生当信是稱贊不可思議功德一切諸仏所護念經	—	P54L08	P204L03	P319L11
舍利弗	—	P54L10	P204L05	P319L13
西方世界有無量壽仏	[749a]	P54L10	P204L05	P319L13
無量相仏無量幢仏大光仏大明仏宝相仏淨光仏	—	P54L10	P204L05	P319L13
如是等恒河沙數諸仏	—	P54L10	P204L06	P319L14
各於其國出広長舌相徧覆三千大千世界說誠実言	—	P54L11	P204L07	P319L14
汝等衆生当信是稱贊不可思議功德一切諸仏所護念經	—	P54L11	P204L08	P319L16
舍利弗北方世界	—	P54L13	P205L02	P320L01
有焰肩仏最勝音仏	—	P54L13	P205L02	P320L01
難沮仏	[750a]	P54L13	P205L02	P320L01
日生仏網明仏	—	P54L13	P205L03	P320L01
如是等恒河沙數諸仏	—	P54L13	P205L03	P320L02



各於其国出広長舌相徧覆三千大千世界説誠実言	—	P54L13	P205L03	P320L02
汝等衆生当信是称赞不可思議功德一切諸仏所護念經	—	P54L14	P205L05	P320L03
舍利弗	—	P55L01	P205L07	P320L05
下方世界	[750a]	P55L01	P205L07	P320L05
有師子仏名聞仏名光仏	—	P55L01	P205L07	P320L05
達摩仏	[750a]	P55L01	P205L08	P320L05
法幢仏持法仏	—	P55L01	P205L08	P320L05
如是等恒河沙数諸仏	—	P55L01	P205L08	P320L06
各於其国出広長舌相徧覆三千大千世界説誠実言	—	P55L01	P206L01	P320L06
汝等衆生当信是称赞不可思議功德一切諸仏所護念經	—	P55L02	P206L02	P320L07
舍利弗上方世界	—	P55L04	P206L04	P320L09
有梵音仏	—	P55L04	P206L04	P320L09
宿王仏	[750b]	P55L04	P206L04	P320L09
香上仏香光仏大焰肩仏雜色宝華嚴身仏娑羅樹王仏宝華徳仏見一切義仏如須弥山仏	—	P55L04	P206L04	P320L09
如是等恒河沙数諸仏	—	P55L05	P206L06	P320L10
各於其国出広長舌相徧覆三千大千世界説誠実言	—	P55L05	P206L07	P320L11
汝等衆生当信是称赞不可思議功德一切諸仏所護念經	—	P55L06	P206L08	P320L12
舍利弗於汝意云何何故名為一切諸仏	—	P55L07	P207L03	P320L14
所護念經	[751a]	P55L07	P207L03	P320L14
舍利弗若有善男子善女人	—	P55L07	P207L04	P320L14
聞是諸仏所説名	[751a]	P55L07	P207L04	P320L15
及經名	[751b]	P55L08	P207L05	P320L15
者	—	P55L08	P207L05	P320L15
是諸善男子善女人皆為一切諸仏	—	P55L08	P207L05	P320L16
共所護念皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提	[751b]	P55L08	P207L06	P320L16
[阿耨多羅三藐三菩提]	[752b]	P55L08	P207L06	P320L16
是故舍利弗	[752b]	P55L09	P207L07	P321L01
汝等皆当	—	P55L09	P207L07	P321L01
信受	[753a]	P55L09	P207L07	P321L02
我語	[753a]	P55L09	P207L08	P321L01
及諸仏所説	[753a]	P55L09	P207L08	P321L02
舍利弗	—	P55L09	P207L08	P321L02
若有人已発願今発願当発願欲生阿弥陀仏国者是諸人等皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提	[753a]	P55L09	P207L08	P321L02
於彼国土	—	P55L10	P208L02	P321L04
若已生	[753b]	P55L10	P208L03	P321L04
若今生	[753b]	P55L10	P208L03	P321L05
若当生	[753b]	P55L10	P208L03	P321L05

是故舍利弗諸善男子善女人	—	P55L11	P208L03	P321L05
若有信者	[754a]	P55L11	P208L04	P321L06
应当發願生彼國土	—	P55L11	P208L04	P321L06
舍利弗	—	P55L12	P208L06	P321L07
如我今者稱贊諸仏不可思議功德	[754a]	P55L12	P208L06	P321L07
彼諸仏等亦稱說我不可思議功德而作是言釈迦牟尼仏	—	P55L12	P208L07	P321L07
能為甚難希有之事	[754b]	P55L13	P208L08	P321L08
能於娑婆國土	[754b]	P55L13	P208L08	P321L09
〔娑婆〕	[754b]	P55L13	P208L08	P321L09
五濁惡世	[754b]	P55L13	P209L01	P321L09
劫濁	[754b]	P55L13	P209L01	P321L09
見濁	[754b]	P55L13	P209L01	P321L09
煩惱濁	[754b]	P55L13	P209L01	P321L09
衆生濁	[754b]	P55L13	P209L01	P321L09
命濁	[755a]	P55L13	P209L02	P321L10
中得阿耨多羅三藐三菩提	—	P55L13	P209L02	P321L10
為諸衆生	[755a]	P55L14	P209L02	P321L10
說是一切世間難信之法	[755a]	P55L14	P209L03	P321L11
舍利弗當知我於五濁惡世	—	P55L14	P209L03	P321L11
行此難事	[756a]	P55L14	P209L04	P321L12
得阿耨多羅三藐三菩提	—	P55L15	P209L04	P321L12
為一切世間說此難信之法	[756b]	P55L15	P209L05	P321L12
是為甚難	[756b]	P55L15	P209L05	P321L13
仏說此經已	[757a]	P55L15	P209L05	P321L13
舍利弗	[757a]	P55L15	P209L06	P321L14
及諸比丘	[757a]	P55L15	P209L06	P321L14
一切世間天	[757a]	P56L01	P209L06	P321L14
人	[757a]	P56L01	P209L06	P321L14
阿脩羅	[757a]	P56L01	P209L07	P321L14
等	[757a]	P56L01	P209L07	P321L14
聞仏所說	[757b]	P56L01	P209L07	P321L14
歡喜信受	[757b]	P56L01	P209L07	P321L15
作禮而去	[757b]	P56L01	P209L07	P321L15
仏說阿弮陀經	—	P56L02	P209L08	P321L16

仏説無量壽經③

〔第十四觀〕

〔上品上生〕

〔続けて〕 釈尊が阿難と韋提希に仰せになった。

〔さて〕 上品上生の者〔について述べよう〕。

〔誰であれ〕 かの〔阿弥陀仏の〕 国に往生したいと願う衆生は、三種の心をおこすと、必ず往生する。〔では〕

何が三〔種の心〕か〔といえば〕、第一には至誠心、第二には深心、第三には廻向発願心である。〔この〕三心を具えた者は必ずかの〔阿弥陀仏の〕 国に往生するのである。

また三通りの衆生がいて、〔彼らも〕 必ず往生できるのである。何が三通りか〔といえば〕、第一には慈しみ

の心を絶やさず不殺生に努め諸々の戒律をたもつ〔衆生〕、第二には大乘經典を誦誦する〔衆生〕、第三には六念という修行を実践する〔衆生〕、〔彼らがそれぞれ修行の功徳を〕 振り向けて願を発〔おこ〕し、かの〔阿弥陀仏の〕 国に往生したいと願う。〔そして〕 こうした功徳を具えて、一日もしくは七日…すれば、〔命尽きる時には〕 必ず往生するのである。

かの国に往生する時、こうした人はひるむことなく精進してきたので、阿弥陀如来は觀世音〔菩薩〕・大勢至〔菩薩〕・数限りない化仏・十万〔百千〕の比丘・数多くの仏弟子たち・〔さらには〕 数限りない神々、〔そればかりか〕 七宝の宮殿〔までをも〕 ともなつて〔現

れる。〔しかも、この時〕觀世音菩薩は金剛台を手に執り、大勢至菩薩とともに行者の前に至り、阿弥陀仏は大光明を放つて行者の身を照らし、多くの菩薩とともに〔行者に〕手を差し伸べ迎え入れる。觀世音〔菩薩〕と大勢至〔菩薩〕は数限りない菩薩とともに行者を褒め讃え、その心をますます〔往生に〕向かわせるのである。

行者は〔そうした光景を〕見終わると、あたかも踊り出さんばかりに喜んで、〔ふと〕我が身を見てみると金剛台に乗っており、仏の後ろに付き従つて、指を弾くほどの〔わずかな〕時間でかの国に往生するのである。かの国に往生したところで、〔阿弥陀〕仏のお姿に様々な特徴が〔すべて〕具わっているのを拝見し、〔また〕諸々の菩薩のお姿にも〔様々な〕特徴が具わっているのを〔拝〕見する。〔また阿弥陀仏や菩薩方の〕光明や宝樹の林が妙なる教えを説き示し、〔それを〕聞き終わった瞬間に無生法忍〔という菩薩の境地〕を体得しているのである。〔それから〕須臾〔しばらく〕たつて 諸仏に次々とお仕えしてあらゆる世界を飛び回り、

それぞれのみ仏の前で〔汝は将来、必ず仏になるのだ〕という〕予言を授かつて〔授記〕、もとの〔阿弥陀仏の〕国に帰還し、数限りない陀羅尼の法門を得るのである。

このような者を上品上生の者というのである。  
〔上品中生〕

〔次に〕上品中生の者とは〔次のような人のことである〕。

大乘經典を覚えて唱えることまではせずとも、その意味するところをよく理解し、〔一切は空であるという大乘の〕第一義について〔聞いても〕恐れおののかず、因果〔の道理〕を深く信じ、大乘〔の教え〕を謗ることがない。〔そして〕こうしたことの功德を振り向けて、極楽世界に往生したいと願う〔者のことである〕。

こうした修行をする者の命が尽きようとする時、阿弥陀仏は觀世音〔菩薩〕と大勢至〔菩薩〕、〔さらには〕数え切れないほど多くの侍者たちに取り巻かれ、紫がかった金の台を持ち、〔上品中生の〕行者の前にお越しになって〔その者を〕褒め讃えて仰せになるのである。

『法の子よ、汝は大乗〔の教え〕を修行して第一義を理解した。だから私は汝を迎えに来た』と。

〔そして阿弥陀仏は〕千の分身〔化仏〕と同時に手を差し伸べる。行者が〔ふと〕我が身を見てみると、〔その〕紫がかった金の台に坐っており、又手合掌して諸仏を讚歎する。〔すると〕一瞬の間に、たちまちあの〔極楽〕世界の七つの宝でできた池の中に生まれるのである。この紫がかった金の台は〔極楽の住人の目には〕まるで宝でできた大きな蓮の花のように〔見え〕、〔その蓮華は〕一夜を経て開く。〔そして〕行者は、体が紫がかった金色となり、〔歩み出す〕足の下にも七つの宝でできた蓮の花がある。

〔阿弥陀〕仏と菩薩〔たち〕が同時に光明を放って行者の体を照らすと、〔行者の〕目はすぐさまはつきりとして見えるようになる。さらに前世の行いのしからしむところ、聞こえてくる音はみな、ただ深遠なる第一義諦を説くばかりである。そこで〔行者は〕金台から下りて〔阿弥陀〕仏を礼拝し、合掌して、〔阿弥陀〕世尊を

褒め讃えるのである。

〔それから〕七日が過ぎると、その時点でこの上ない完全な覚り〔阿耨多羅三藐三菩提〕〔へ至る仏道の歩み〕から退転することがなくなつて、その時点であらゆる世界を飛び回れるようになり、諸仏に次々とお仕えして、〔さらに〕諸仏のみもとで様々な精神集中〔三昧〕を修める。

〔その後〕一小劫を過ぎたところで無生〔法〕忍という〔菩薩の境地〕を得て、〔行者は諸仏の〕目の前で〔汝は将来、必ず仏となるのだ〕という〕予言を授かる〔授記〕のである。

このような者を上品中生の者というのである。

〔上品下生〕

〔次に〕上品下生の者とは〔次のような人のことである〕。

〔大乘經典の内容や第一義を理解してはいないけれども〕やはり因果〔の道理〕を信じ、大乗〔の教え〕を誇ることはない。〔そして何よりも〕ただ無上道心は発

している。こうしたことの功德を振り向けて、極樂世界に往生したいと願う〔者のことである〕。

〔こうした〕行者の命が尽きようとする時、阿弥陀仏と觀世音〔菩薩〕と大勢至〔菩薩〕が諸々の侍者たちとともに、金色に輝く蓮〔の台〕を携えて、〔さらに〕五百の仏の分身〔化仏〕を現し出し、この〔行〕者を迎えに来る。五百の化仏は一斉に手を差し伸べ〔行者を〕褒め讃えて言うのである。

『法の子よ。汝は〔因果を信じ、大乘を謗らなかつたので〕今や清らかであり、〔しかも〕無上道心を発している。〔だからこそ〕私は汝を迎えに来た』と。

〔行者が〕こうしたありさまを見ると、その瞬間、金色に輝く蓮〔の台〕に座ろうとしていた自分に気付く。座りおわると花が閉じ、〔阿弥陀〕世尊に付き従って、直ちに〔極樂の〕七つの宝でできた池の中に往生を遂げる。一昼夜を経て初めて蓮の花が開き、〔その後〕七日以内にしっかりと〔阿弥陀〕仏を拝見することができきる。〔ただし〕仏のお姿を拝見するとはいつても、そ

の様々な特徴については、まだ意識がはっきりせず、三七（二十一）日を経て初めてはつきりと拝見するのである。〔そしてまた極樂世界に流れる様々な〕調べが〔どれもこれも〕みなすばらしい教えを説き明かしているのを聞く。〔また〕あらゆる世界を自在に飛び回って〔それぞれの世界にまします〕み仏がたを供養し、〔そしてそれらの〕み仏がたの面前で奥深い教えを聞くのである。〔そのようにして人間世界の時間でいえば〕三小劫を経たところで、あらゆる教えを知る智慧〔百法明門〕を獲得し〔おえ〕る。〔そして〕歡喜地〔という菩薩の境地〕に〔あつて修行して〕いるのである。

このような者を上品下生の者という。〔また以上の上品三生を〕上輩生想といい、〔第十四觀〕というのである。

#### 〔第十五觀〕

#### 〔中品上生〕

〔統けて〕積尊が阿難と韋提希に仰せになった。〔中品上生の者とは〕次のような人のことである。〕

〔誰であれ〕もし衆生が五戒や八戒斎をたもち、〔あるいは〕諸々の戒を修めて、〔もちろん〕五逆は犯さず、破戒もなければ〔その罪の報いによつて〕苛まれることもないでしょう。〔その者が〕こうした善行を振り向けて、西方極楽世界に往生したいと願う。〔その者の〕命が尽きようとする時、阿弥陀仏は諸々の出家修行者〔比丘〕とともに侍者に取り囲まれて、金色の光を放ちながらその者のところへやってくる。〔そして一切は〕苦・空・無常・無我であると説き示し、『出家すると諸々の苦しみから離れることができる』と〔その功德を〕称讃するのである。〔その〕行者は〔こうしたことを〕見〔聞き〕終えて、心底歡ぶ。〔そして〕自分の体を見ると蓮華の台に坐っている。〔そこで〕長跪して合掌し〔阿弥陀〕仏に礼拝する。〔すると〕その頭を上げないうちに、極楽世界に往生し、〔いつの間にか閉じていた〕蓮華はすぐさま花開くのである。〔その〕花が開く時、〔極楽世界の〕さまざまな調べが四諦を誦い上げてゐるのを聞く。まさにその時、阿羅漢という覺りの境

地に到達する。〔それはそのまま〕三・明・六通 があり、八解脱 を体得している〔ことなの〕である。

このような者を中品上生の者というのである。

〔中品中生〕

〔次に〕中品中生の者とは〔次のような人のことである〕。

〔誰であれ〕もし衆生が一昼夜の間、八戒斎をたもち、あるいは一昼夜の間、沙弥戒をたもち、あるいは一昼夜の間、具足戒をたもつて、〔それぞれ〕完璧に修める。こうしたことの功德を振り向けて、極楽世界に往生したいと願う。戒という香りが〔身に〕染み込んでいるので、このような行者は命が尽きようとする時、阿弥陀仏が諸々の侍者とともに金色の光を放ち、〔侍者が〕七宝でできた蓮華〔の台〕を持って行者の前にやつて来るのを見る。〔その時〕行者が耳を傾けると虚空に『善なる者よ。汝のような善人は、〔過去・未来・現在の〕三世の諸仏の教え通りに生きてきたから、私は汝を迎えに来たのだ』と褒め讃える声がこだまする。行者が〔ふ

と」我が身を見てみると蓮華〔の台〕の上に坐つてゐる。〔すると〕蓮華はたちまちに閉じ、〔そのまま〕西方極樂世界に生まれて、七日間を宝の池の中で過ごして、蓮華は初めて花開く。蓮華が開いてしまうと、〔行者は〕目が開き、合掌して〔阿弥陀〕世尊を讚歎する。〔そして極樂世界で〕法を聞くと歓びが湧き起こり須陀洹〔という境地〕に至る。〔そして〕半劫を経たところで阿羅漢となるのである。

このような者を中品中生の者というのである。

〔中品下生〕

〔次に〕中品下生の者とは〔次のような人のことである〕。

男であれ女であれ善良な人々が〔これまで仏教に出会うことがなかつたけれども〕、父母に孝行を尽くし、また博愛の精神を発揮してきたとしよう。この人は命が尽きようとする時に、仏教へと正しく導く人が自分のために阿弥陀仏の〔極樂〕世界の安らいだありさまを縷々説いてくれたり、また法蔵比丘〔が建てた〕

四十八願を説いてくれるのに〔初めて〕出会う。〔そして〕この説法を聞き終えてそのまま命が尽きる。例えば肉体を鍛え上げた者が〔まるでボクサーのような俊敏さで〕肘を曲げ伸ばしするほど〔短い〕間に、たちまち西方極樂世界に生まれるのである。生まれてから七日を経たところで、觀世音〔菩薩〕と大勢至〔菩薩〕におめにかかり、教えを拝聴して歓びが湧き起こる。〔その後〕一小劫を経て阿羅漢となる。

このような者を中品下生の者といい、〔また以上の中品三生を〕中輩生想といい、〔第十五觀〕というのである。

〔第十六觀〕

〔下品上生〕

〔統けて〕釈尊が阿難と韋提希に仰せになった。

〔以上のように善人が往生する一方で悪人もまた往生する。そのうち〕下品上生の者とは〔次のような人のことである〕。

数々の悪業を重ねてしまう人がいる。〔ただし、そ



の者は」大乘經典を誹謗すること〔だけ〕はないが……。こうした愚か者は悪事を重ねるばかりで、少しも恥じ入ることがない。「その者は」命が尽きようとする時に、仏教へと正しく導く人（善知識）から「自分の」ために諸々の大乘經典の經題を讀えてくれるのに「初めて」出会う。そうした諸々の經典名を耳にすることに よって、干劫にわたって「積み重ねてきた」極めて重大な悪業〔による報い〕が取り除かれる。さらにまた〔その〕智者は「その愚か者に」合掌させて指を組ませ、「南無阿彌陀仏」と称えさせる。「阿彌陀」仏の名を称えるので五十億劫もの間生死を繰り返さねばならない罪〔の報いさえも〕除かれるのである。

その時、彼の「阿彌陀」仏は即座に「自身の」化仏と觀世音の化「菩薩」と大勢至の化「菩薩」を遣わして、「その」行者の前に到らせ、「その者を」褒め讃えて「次のように」言わせる。「善良なる者よ。汝は〔阿彌陀〕仏の名を称えたので諸々の罪〔の報い〕が消滅し、私が汝を迎えに来たのである」と。このように語

り終えると行者は即座に化仏〔から発する〕光明がその室内に満ち満ちるのを見る。「そしてそれを」見たとたんに飲びが湧き起り、そのまま命が尽きる。「それから」宝蓮華に乗って、化仏に付き従って「極樂世界の」宝の池の中に生まれる。七七〔四十九〕日を経たところで蓮華は初めて花開く。「その」花が開くと大悲觀世音菩薩と大勢至〔菩薩〕は大いなる光明を放ちながら、その者の前に留まって「その者の」ために奥深い十二部經を説かれる。「その者が」聞き終えたと「その教えを」確信して了解して無上道心を発するのである。「その後」十小劫を経たところで、あらゆる教えを知る智慧〔百法明門〕を獲得〔し終えて〕初地〔という菩薩の境地〕に入ることができる。

このような者を下品上生の者というのである。仏名と法名を聞くことができ、さらに留名をも聞く。「つまり」三宝の名を聞いて、そのまま往生できるのである。」

〔下品中生〕

〔次に〕 釈尊が阿難と韋提希に仰せになつた。

「下品中生の者とは〔悪人のうち、次のような人のことである〕。

五戒、八戒、具足戒を破る人がいる。〔しかも〕こうした愚人は教団の物を掠め、教団に供養された物を盗み取り、欲にかられて布教し、〔それでいて〕恥も外聞もない。〔このような〕様々な悪業がおのずと〔姿や立ち居振る舞いに〕現れ出ている。これほどの罪深き者は、悪業の報いとして必ずや地獄に墮ちるはずである。

〔その者の〕命が尽きようとする時に、地獄で〔燃え盛っている〕様々な炎が一心に迫り来る。〔その時、その者は〕仏教へと正しく導く人〔善知識〕に逢う。〔仏教へと正しく導く人は〕大いなる慈悲をめぐらし、〔その者の〕ために阿弥陀仏に具わる十力の威徳を説き、詳しく彼の〔阿弥陀〕仏の光明に具わる強大な力を説き、また〔仏たるものが具える〕戒と定と慧と解脱と解脱知見〔五分法身〕を称讃する。〔仏教へと正しく導く人の言葉を〕この者が聞き終えると、八十億劫もの間生

死を繰り返さねばならない罪〔の報いさえも〕除かれ、

〔迫り来る〕地獄の激しい炎は心地よい涼風となつて、天界に咲く諸々の花々を舞い散らす。どの花の上にも化仏菩薩が乗つていて、この人に手を差し伸べて迎え摂る。〔すると〕あつという間にそのまま〔西方極樂世界に〕往生する。〔そして、その〕七つの宝でできた池の蓮華〔の蕾〕の中で六劫〔という時間を〕過して、蓮華はようやく花開く。花が開く時に、觀世音〔菩薩〕と大勢至〔菩薩〕は聖なる響き〔梵音声〕でその人を安らかに和ませ、その者のために大乘の奥深い教え〔を説いた〕經典を説き聞かせる。〔その者は〕この教えを聞き終えると、直ちに無上道心を発するのである。

このような者を下品中生の者というのである。」

〔下品下生〕

〔次に〕 釈尊が阿難と韋提希に仰せになつた。

「下品下生の者とは〔次のような悪人のことである〕。

ある人が不善の業である五逆や十悪を犯して、〔その他にも〕あらゆる悪事に手を染めている。このような

愚人は悪業を犯したがために、必ずや〔地獄・餓鬼・

畜生の三つの〕悪しき境涯に墮ちるのであらう。〔そこ

で〕とてつもなく長い時間を過ごして、しかも果てし

なく苦しみ続けるのである。〔ところが〕このような愚

人が、命が尽きようとする時になって仏教へと正しく

導く人〔善知識〕に逢う。〔そして、その人は愚人を〕

なだめすかし、その者のために、得もいわれぬすばら

しい教えを説き仏に想いを馳せさせようとする。〔しか

し〕この人は苦しみに苛まれて仏に想いを馳せる余裕

すらない。〔そこでその〕仏教へと正しく導く人が、『汝

仏に想いを馳せることができないうなら、無量寿仏〔の名

を呼びなさない。』と告げる。そのように心の底から〔救

いを求めて〕声を絶やすことなく、『南無阿弥陀仏』と

十遍欠けることなく称えさせる。

〔すると〕仏の名を称えたので、八十億劫もの間生

死を繰り返さねばならない罪〔の報いさえも〕一遍づ

つに取り除かれる。〔そして〕命が尽きようとするその

時、まるで太陽のように〔眩い〕金色の蓮華がその人

の前に現れて、一瞬間の間に極楽世界に往生することが

できる。蓮華の中で十二大劫〔という時間に〕達する

と、蓮華は花開き観世音〔菩薩〕と大勢至〔菩薩〕の

大悲あふれる御声で、その人のために諸法実相と除滅

罪法をおおまかに説き明かす。聞き終えると〔その者は〕

大いに喜び、まさにその時、菩提心を発す。

このような者を下品下生の者といい、〔以上の下品三

生を〕下輩生想といい、『第十六観』というのである。』

〔得益分〕

〔さて釈尊は〕以上のことをお説きになった。その間、

韋提希と五百人の侍女たちは釈尊の説法を聞き、適宜

に極楽世界の広大で勝れたありさまを見て取った。

〔そして阿弥陀〕仏と〔観音・勢至の〕一菩薩〔のお姿〕

を見奉ることができると、〔韋提希は〕心に歡びが生ま

れ、〔かつてないことだ〕と感激して、目から鱗が落ち

るような境地を開き、無生忍〔という覚り〕を得たの

である。〔また〕五百人の侍女は、この上ない完全な覚

りを求める心を発し、彼の〔阿弥陀仏の極樂〕世界に生まれたいと願った。積尊は〔彼女たち〕一人一人に〔汝らは彼の極樂世界に〕必ずや往生するはずだ。彼の〔極樂〕世界に往生した後に諸々のみ仏が目の前に在す境地〔諸仏現前三昧〕を得る」との予言をお与え〔授記〕になったのである。〔また会座に連なつた〕無量の天人は無上道心を発したのである。

#### 〔流通分〕

〔すると〕その時、阿難はすかさず自席から立ち上がつて前に出て、積尊に〔次のように〕申し上げた。

〔世尊よ、〔今、説き示された〕この経をどのようにな付けたらよいのでしょうか。〔また〕この教えの肝要をどのように理解し、心に刻んでおいたらよいのでしょうか。〕

積尊が阿難に仰せになった。

〔この経を〕『観極樂国土無量寿仏觀世音菩薩大勢至菩薩』と名付けよう。あるいは『淨除業障生諸仏前』と

も名付けよう。〔阿難よ、〕汝は〔この経を〕理解し心に刻み、〔決して〕忘れてはならない。

これ〔まで説いてきた〕精神集中〔三昧〕を實踐する者は、今生の身で無量寿仏と偉大なる〔觀世音・大勢至の〕二菩薩を見奉ることが出来る。〔また〕もし男であれ女であれ善良なる人々が、ただ単に〔無量寿〕仏の名と二菩薩の名を耳にするだけでも、無量劫もの間生死を繰り返さねばならない罪〔の報いさえ〕除かれる。ましてや〔無量寿仏と二菩薩を〕憶念すれば、〔さらに多くの罪の報いが除かれるのは〕言うまでもない。よくよく知っておけ。もし念仏する者は、この人こそが〔煩惱多き〕人々の中に〔咲く、汚れなき〕白蓮華〔のよう〕である。〔そして〕觀世音菩薩と大勢至菩薩がその人の勝れた友となるのである。〔未来には〕覺りを求める座に坐り、諸仏の家系に連なるのである。〕

〔そして最後に〕積尊は阿難に仰せになった。

〔汝、〔今、私が説き示した〕この教えをしつかりと胸に刻み込め。この教えを胸に刻み込めとは、無量寿

仏の御名を胸に刻み込め、ということに他ならない。」

釈尊がこの教えを説き終えると、目連尊者と〔私〕

阿難、そして韋提希たちは釈尊がお説きになった〔お言葉〕を聞いて、「誰もが」みな大いに飲んだのである。」

〔耆闍〕云

それから釈尊は空中を歩いて、耆闍崛山にお帰りになった。

そして〔私〕阿難は〔耆闍崛山に集っていた〕大衆のために以上の〔王舎城での〕出来事を述べたのである。

〔その場にいた大比丘衆や諸菩薩はもちろん〕教限りない神々や龍神、夜叉もまた釈尊がお説きになった〔御教え〕を聞いて、「誰もが」みな大いに喜んで釈尊を礼拝して立ち去ったのである。

釈尊がお説きになった観無量寿経

## 四十八卷伝

## 九卷

## 一段

法然上人は、信仰の香りが内に立ち込め、それが行為として外にあらわれた。上は帝王や上級貴族から、下は万民に至るまで、その徳に帰依しない者はいなかった。

後白河法皇が、賀茂川の東にある押小路御所おしこうじごしよにおいて、如法經にょぼうぎやうを行われたことがあった。その際、上人を指導僧とされた。文治四年（一一八八）八月十四日に前行を始められた。写經の僧衆は、法皇、妙音院の入

道相国じやうご（藤原師長もろなが）、法然房源空上人、ならびに門弟の行賢大徳ぎやうけん、延暦寺では良宴法印りやうえん・行智律師ぎやうち・仙雲律師せんうん・覚兼阿闍梨かくけん・重円大徳じゆうえん、園城寺では道顕僧都だうけん・真賢阿闍梨まけん・玄修阿闍梨げんしゆ・円隆阿闍梨えんりゆう・円玄阿闍梨えんげんといった人達である。去る十日、日吉大社にご参拝されたとき、延暦寺の衆徒が寺務をつかさどる執当職しやくとうしやくの澄雲法印じやううんを代表として、「東寺の僧が今度の写經の僧衆に招き入れられるとうわさを聞いておりますが、如法經写經は慈覚大師円仁が始められた法則ほつそくでございますので、他宗の僧はふさわしくありません。またある上人（法然）を招き入れられるといううわさも聞いておりますが、これについては、しいてあれこれ申し立てることはご

「ございません」と申し入れた。これによって東寺の僧は招かれず、上人は法皇の命によって指導僧を勤められた。

上人は出家後の年数が最も長い上、指導僧である。よって法皇は第一の座につくよう仰せになった。上人は断りを申されたが、法皇がしきりに仰せになるので第一の座につかれた。正面の東西に座席を設けた。東側の第一の座に上人、西側の第一の座に法皇、上人の次には入道相国（師長）が着座された。良宴法印以下の人達は官位の席次に従って列座した。（かつて大仏開眼のとき）行基菩薩は、世間の慣わしに従って、婆羅門僧正の下に着座された。この例にならうと、良宴法印が上座につくべきであるが、特別の仰せによって上人が第一の座につかれた。

上人は礼盤に上がって法会の趣旨を仏前に申し述べ、その後、錫杖の偈を唱え、法華懺法を始められた。前行の間は、毎日三回の懺法である。同じ八月二十日の後夜から本行の正懺悔を始められた。後夜の発声は上

人が、晨朝の発声は法皇が勤められた。仏堂はこの上なく美しく飾られ、作法もまたおごそかであった。法皇は不思議な夢をご覧になった。詳細は、中納言の日野兼光が草した御願文に記されている。

## 二段

九月四日に写経料紙を迎えられた。その料紙は、観性法橋が寄進したものである。観性法橋は慈鎮和尚（當時は法印）と同宿の間柄であったので、写経料紙を安置した場所は、和尚の住房である三条白川房（青蓮院）であった。そこは鳥羽院の第七皇子の覚快親王が住んでおられた場所であった。良宴法印以下十一人の写経の僧衆は、三条白川房へ向かった。宿老は残り留まるという儀礼になぞらえて、法皇、上人、相国禪門（師長）は道場でお待ちになっていた。

写経料紙を銅製の筒に納め、みこしに入れてお迎えた。南側のひさしの下に台を立てて、かついできたみこしをその上に据えたてまつった。良宴以下の写経

の僧衆は屋外にはべつて伽陀かだを唱えた。正面の明かり障子を開けられて、法皇が伽陀を唱えられると、上人と入道相国も同じように法皇の声に従つてお唱えになった。写経料紙を道場に安置した後、その周囲を練り歩く行道があり、曲調の念仏を六回唱える合殺がっさつがあつた。この儀式は定まつた作法ではなく、上人がこれを指示して行われたそうだ。

### 三段

同じ九月八日に写経用の水を迎えられた。出家年数の浅い僧たちは比叡山の横川に登り、慈覚大師円仁が如法経で用いられた、根本の水ミヅを汲んで、銅製の水がめに入れて持ち帰つた。同じ九月十一日に書きはじめられた。慈鎮和尚と観性法橋は写経僧ではないけれども、もとより如法経の最中であつたので、写経のときおいでになつた。慈鎮和尚は入道相国（師長）の下に着座し、観性法橋は仙雲律師の下に着座した。法然上人は礼盤に上がつて仏事の趣旨を仏前に申し述べ、

礼盤から下りた後、行道をし、行道が終わつて伽陀を唱えた。その後、十六人が着座し、同時に筆をとつて書写をはじめられた。

### 四段

同じ九月十二日の午前十時に写経を終えたので、すぐに十種供養の儀式が行われた。衆人ぐじよのうちで位の低い公卿たちは、吹き抜け廊下の透渡殿すきわたらに着座した。位の低い衆人たちは、ひさしの西のわきに着座して沙陀さだ調の序曲を吹奏した。正面の庭の上に赤地に模様を織りなした敷物を置いて、その上に机を二脚立てて十種供養の供物を安置した。天人姿に扮した子供二人と、舞踏をする子供十六人が東西より進み出てきて、供物を取つて南の階段の下に行つて、供物を手から手に渡した。僧たちが正面の左右に立ちならんで、手から手に渡してお供えした。このあいだ十天楽じつてんがくを演奏した。導師は澄憲法印あきひさのほういんであつた。供物を渡し伝える時は、立ち入りが厳しく禁止されていて、参詣の僧侶や俗人



は遣り水の北側に行けなかつたが、説法の時は法皇の許しがあつて、僧侶や俗人は群集して聴聞した。澄憲の弁説は口から玉をはくかのように素晴しく、貴族も庶民もみな涙を流した。説法の内容はこれまでのものよりはるかにすぐれていた。法皇はとりわけ感心されたといふことを、権大納言兼雅卿（かむまろきょう）を通して仰せ下された。導師澄憲が座を下りる時は千秋楽を演奏した。入道相国（師長）が歌を歌い、中御門大納言宗家卿（むねいえきょう）はそれにあわせて歌った。そもそも今日の儀式は後の世まで語り伝えられる美談である。法皇は六十歳の祝賀を行われなかつたのも、この如法経がおのずとそれに代わるものとして勤められたのであろうかと、当時の人びとは噂しあつた。

## 五段

同じ九月十三日に、法皇はお経を奉納するために横川の首楞嚴院（しゅりやういん）にお出かけになつた。横川長吏（ちやうり）の田良法印の指示で、水飲の地に御所を設営し、お食事とご身

体を清める水を用意した。法皇は鳥居の岡から歩かれ、まず四季講堂に入堂された。そのち如法堂の中門の外に、天童以下の子供たちが供物をささげて左右に立つた。雅楽を演奏する人たちは、法界房（ほうかいぼう）の北の軒下にひかえて演奏した。

中門の中から草履を差しあげて如法堂に入堂された。中門から如法堂までは、筵が敷かれた。如法堂の西の出入り口からお経を入れ申し上げて、正面の南側のひさしの間に安置した。写経僧は南の縁側にひかえている。行智律師はお経を取り出して、法皇に差しあげた。法皇は受け取られて、横川長吏田良法印にお授けになつた。この間、伽陀を唱えていた。導師は円能法師（えんのう）（そのとき法橋）であつた。説法の後、中門の外において僧たちは布施を賜つた。次に十天楽を演奏した。それから、法界房にお移りになつて後、宗明楽（そうめいらく）を演奏し伽陀を唱えた。導師はまた円能法師であつた。円能が法会の趣旨を述べて下座した後、法皇は横川中堂にお移りになつた。

## 六段

横川中堂よりお帰りになって、食堂じきどうにおいて装束を改められた。その間、僧たちは庭に群集して、延年の様々な歌舞が披露された。如法経を執り行う任に当たった藤原定長卿ふじなながきょうを通して、法皇は「祈願が無事成就したことは、ひとえに僧衆の祈念のお陰である。そのことを大変感嘆している」ということを、澄雲法印に伝えられた。澄雲は庭において、法皇の仰せの趣旨を僧衆に伝えた。

その後、夕暮れになったので、法皇はすぐにお帰りになった。午後十時ころに押小路殿にお着きになり、如法経の本道場において懺法を行われた。これを歡喜懺法という。そもそも慈覺大師円仁の流れをくむ門徒やその余流、また山門延暦寺や園城寺には学徳のある僧や高僧が多い中で、隱遁の身である上人を召し出されて、先導役とされたことは、まったく上人の仏徳のきわみであり、法皇のご帰依が深かったためである。

## 十卷

### 一段

高倉院が天皇在位中のとき、承安五年（一一七五）の春、勅命によるお招きがあつたので、法然上人は天皇に天台宗の円頓戒えんどんかいをお授け申し上げた。公卿たちもうやうやしく授かり、宮中に仕える人たちもこうべをたれて授かった。清和天皇は、貞觀年間に慈覺大師円仁を紫宸殿にお招き申し上げ、天皇・皇后ともに円頓戒をお受けになられた。上人は円仁から九代目の正統な後継者であり、その法流はただ上人一人に伝わつた。はるかに時代をへだてて、昔の法流を復興されたことはたいそう尊いことである。

### 二段

後白河法皇のお招きがあつたので、上人は法住寺御所しよに参上されて、天台宗の円頓戒を授け申しあげた。法皇が延暦寺や園城寺の高徳の僧をお招きになつて、

順々に『往生要集』を講じさせて、それぞれの考えを述べさせられたことがあつたが、上人が言いつけに従つて講義をなさつたとき、「往生極楽のための教えと修行は、濁り汚れた末世の目や足となるものである。僧侶も俗人も貴い人もそうでない人も、いったい誰が帰依しないであろうか」と読み上げられるやいなや、初めてお聞きになつたかのように、心に深くしみみて、尊く感じられ、感動の涙をたいそう流された。

上人を信仰なさるあまり、右京職うきやうしきの長官であつた藤原隆信の朝臣に命じて、上人の肖像を描かせて、蓮華王院の宝蔵に納められた。前代にも、そのような例はほとんどないことだと人びとは噂しあつた。

### 三段

後白河法皇は、ひとえに上人の教化に帰依され、その信仰は他の人とは異なつていたので、百万遍念仏の苦行を二百余回まで功德を積まれ、比べるものがない事でいらつしやつた。

建久三年（一一九二）正月五日から病氣になられて、日に日に重くなつていかれたので、上人に善知識として参ずるようにとの仰せが下されたことから、二月二十六日に上人は参上されて、戒をお授け申しあげて、御往生のときの儀式をお決めになつた。

念仏往生の道は常日頃聞き留めておられるうえに、重ねて申される内容が丁寧であつたので、ますます信心が深まつて、念仏を怠られることはなかつた。ご臨終が差し迫つてきたので、同年三月十二日午後八時頃に御仏をお迎えになつて、十三日午後四時頃、死に臨んで心を乱されず称名念仏を続けられ、姿勢をただしお座りになり、まるで眠るかのようにして往生の願いを遂げられた。御年は六十六歳であつた。本当に前世からの因縁の結果であり、尊く思われることである。

### 四段

後白河法皇崩御の後、その御菩提を申うために建久三年（一一九二）秋のころ、前の大和国司の親盛入道

《法名は見仏》が八坂の引導寺で、心阿弥陀仏が発声し住蓮・安楽・見仏たちの仲間が声をそえて六時礼讃を行い、七日のあいだ念仏をした。儀式の終わりにあたつていろいろな供物を取り出しているのを見て、上人は納得いかない様子でいらつしやつて、「念仏は自分のための勤めである。法皇の御菩提に回向し申しあげても、布施はとんでもないことである。決してあつてはならないことである」といましめられた。これが六時礼讃を多くの人が一緒に行つたはじめである。

## 五段

後白河法皇の十三年の御遠忌にあたり、土御門院がつちみかどいん元久元年（一二〇四）三月に追善の仏事を行われたところ、法然上人は蓮華王院において浄土三部經を書写され、良い声の者を選んで六時礼讃を勤めて、ていねいに御菩提をとむらわれた。

また大和の入道見仏も、同じように法皇の御菩提を祈り申すために、どのような追善の儀式を行うべきか

と思案していたところ、法皇が見仏の夢中に現れて、私の菩提を一定の型にのつとつてとむらいなさい、とのことを示された。そこで見仏はその旨を上人に申しあげたところ、上人は浄土三部經を一定の型にのつとり書写する次第を、『法華經』の如法經になぞらえて儀式の法則を書き出された。

いわゆる、流布している書には、次のように記されている。

### 浄土三部經如法經次第

一、御料紙の事。楮コの木を植えて千日の間これを栽培せよ。その期間は念仏と六時礼讃を勤めよ。もしこのようにしてできた料紙がない場合は、市場にある料紙を用いよ。

一、堂莊嚴の事。通常のとおりである。

一、前方便七箇日の事。身体を清め身を慎み、清淨な衣帯を着けることなどは、通常のとおりである。ただし絹製と綿製のいずれを用いるかは、その人の考えによりなさい。

一、入道場の次第。門前での灑水しよすい、ならびに香炉かうろ・華け管こ・香象かうぞうなどを用いることは、通常のとおりである。

次に、無言で本尊の周りを三回めぐり、仏・菩薩を道場に請い迎える偈文や、曲調の念仏を六回唱える合あ殺などは、通常のとおりである。

次に、僧侶たちは宝座の前に並んで立ち、全員で最初によむ総礼の伽陀を唱えなさい。その言葉は次のとおりである。

「根本の師釈迦仏、およびすべての世界の如来たちに  
 帰依いたします。どうか施主である衆生の求めを受け  
 入れてくださり、慈悲を捨てずに道場へお入りくださ  
 い。すべての世界の過去・現在・未来にわたる一切の  
 仏に帰依いたします。哀れんで願いを聞き入れてくだ  
 さり、道場へお入りください。極楽浄土の阿弥陀仏と  
 聖衆たちよ、わけへだてなく共に道場へお越しになり  
 お座りください。道場へ来られた聖衆たちには、まご  
 とに会い難いことです。われわれは阿弥陀仏たちのお  
 られる会座を礼拝いたします。極楽世界の諸仏諸菩薩

に帰依いたします。慈悲をもつて護り念じ、功德を証  
 明してください。」

次に、阿弥陀仏をほめたたえ申しあげなさい。

「阿弥陀仏の広大な誓願は多く四十八を数えるが、ひ  
 とえに念仏を示して最も親しい行として。人よく  
 仏を念じれば仏もまた応じて人を念じてくださる。心  
 をひとつにして仏を想えば仏もその人を知つてくださ  
 る。極楽の教化の主阿弥陀如来に帰依いたします。命  
 終のとき必ず極楽へ往生させてください。」

次に、浄土三部経をほめたたえなさい。

「絶えず浄土の教えを聞こうと思い、一字一句誓つて  
 きちんと勤めよう。長い時間迷いの世界をさまよう苦  
 しみを思い忘れず、心をひとつにして教えを聞き真実  
 の法門に入ろう。奥深いすぐれた浄土三部経に帰依い  
 たします。命終のとき必ず極楽へ往生させてください。」

次に礼讃、日没からこれを始めなさい。僧侶たちは  
 着座し導師は礼盤に登る。礼讃を唱えて後、高声こうしやう念仏  
 を三百遍称える。ただし、時刻の早いか遅いかによつ

て念仏の数を調整しなさい。礼讃を唱える時刻は、日没（午後四時）・初夜（午後八時）・半夜（午前零時）・後夜（午前四時）・晨朝（午前八時）・日中（正午）に  
しなさい。

次に、浄土三部経をほめたたえなさい。伽陀の文句は前述の通りである。ただし、法会の始まりである開白（かいびやく）の時は念仏以後の讃嘆を省略しなさい。また開白以後については、総礼の伽陀を省略しなさい。

次に、例時作法は通常のとおりである。ただし、日没のうちの二時間をあてなさい。

次に、読経は『無量寿経』『観経無量寿』を読みなさい。読誦する量の多い少ないは、時刻の早い遅いにまかせなさい。

次に、僧たちの退堂。

以後六日は、これにならない心得なさい。準備段階の七日間の毎日の作法は、以上のとおりである。

一、写経の七日間のことについて。沐浴・潔斎・入道場・礼讃・念仏・読経などの順序は、準備段階の時のとお

りである。一つも違えてはならない。

書き始めの順序。初日は晨朝の礼讃が終わって啓白（きよびやく）をしなさい。啓白は才能のある人を選びなさい。書写の分担および墨や筆そのほかのことについては、通常のとおりである。

日ごとの書写。礼讃が終わって書写を始め、書写の多少はその時の状況によりなさい。ただし七日間で書写を終えなさい。日ごとの講義は、日中の礼讃以後にしなさい。毎日の手順はこれにならって知りなさい。七日間の儀式はこのようである。

次に写経を奉納する順序は、通常のとおりである。浄土三部経の讃歎は、先のとおりである。ただし讃歎にかける時間の多少は、その時の状況によりなさい。奉納に向かう道筋での節つき念仏は、通常のとおりである。法然上人が記録された写経の法則は、以上のとおりである。

追福のためにこのような写経の善根を行うことは、この時から始まったのだと言い伝えている。そのよう

なことで、その後、浄土三部経を定まった法則にしたがって書写することは、世間で多く知られている。

## 六段

後鳥羽院はたびたび法然上人をお招きして円頓戒を

## 現代布教

# 結縁五重相伝勸誠録の比較研究

## 一、はじめに

現代布教班では、先の教化研究十五号において「現代における結縁五重相伝のあり方」を報告した。これに引き続いて昨年度より二年間、勸誠録等布教書籍の輪読を行ってきた。本研究は結縁五重相伝勸誠録について比較検討を行うものである。

お受けになり、じようさいちんいん上西門院（統子内親王）・しうめいちんいん修明門院（藤原重子）も同じように受戒なさった。こうであつたので、高位の貴族たちもこうべをたれ、朝廷全体が法然上人を敬って伝戒の師としないことはなかつた。

今回取り上げた勸誠録は、北條的門上人『信法要決辨釋』、吉岡呵成人『點晴録』、岩井智海上人『五重講説』の三冊である。先ず三師の人物像や各勸誠録出版の背景（時代背景など）について述べる。次に内容について幾つかの点から比較考察する。最後に「三勸誠録一覧表」により構成・内容の比較一覧を示すので、考察

の参考にしていただきたい。(以下、三師の敬称は略す)

### 1. 三勸誡録選択の理由

三師とも時代を代表する高名な布教師であり、各々その時代を象徴する表現や教材が見られるものを選択した。それぞれ明治初期・明治後期・昭和初期という激動の時代に刊行されたものであり、今日に於いても尚その価値を失うことがないものである。特に今回の選択は、『浄土宗教学大系』にみられる中野隆元師の指摘に負うところが大きい。

なお三勸誡録の中には、今日の人権擁護の見地に照らして不適切と思われる表現や語句が見られるが、出版当時の時代背景を考え合わせ、充分な注意の上活用していただきたい。

### 2. 資料の性質

実際の勸誡を収録し、厳密な意味で勸誡録と呼べるものは『五重講説』のみである。『信法要決辨釋』『點睛録』

の二点は、勸誡の要点を述べた指南書と呼ぶべきものである。

#### ①『信法要決辨釋』について

出版は明治初期だが、内容は隆円上人『浄業信法訣』(文政六年)・法洲上人『信法要決』(天保年間)の流れを忠実に受け継いだものであり、江戸時代後期の結縁五重勸誡を伝える最大の書物である。『信法要決』と『信法要決辨釋』の関係については、研究ノート「大日比法洲上人の『信法要決』について」を参照

#### ②『點睛録』について

中野隆元師は『浄土宗教学大系八』において「本書は、五重の勸誡の為の教材集とも云ふ可きもの」、又「本書は五重の講義であり、而も伝道的意識を多分に織り込んだ五重の講演である」と指摘している。

また次に引用するように、『點睛録』の席数配分は講述内容から章立てされたものであって、実際の勸誡における席数配分では無いことに注意して欲しい。

次は正宗分であって、此れを席数に関せず、初重、



二重、三重、四重、五重と次第説明講述するのであって、其の席数分割は其の時の布教師の都合によって適宜分割して前方便を終わるのである。即ち内容の分割であって、席数の配当ではないのである。

③『五重講説』について  
(中野隆元著『浄土宗教学大系八』)

実際に智海の勸誡を記録したものである。全二十席のうち半数を二重の勸誡に費やしている。また、智海には『二河白道の話』という著書もあるように、四重二河白道の講説には比較的多くの席数を配し講説に力を入れている。

### 3. 使用したテキスト

『信法要決辨釋』については、『浄土宗教学大系八』所収のものを用い、適宜『浄土宗選集第八卷』所収の『信法要訣講説』並びに『的門上人全集』所収のものを参照した。『信法要訣講説』は、著者が法洲となっているが、内容は的門の『信法要決辨釋』とほぼ同一のもの

であり、的門の著書である。『點睛録』については『浄土宗教学大系八』所収のものを用いた。『五重講説』は、『浄土宗選集第八卷』及び『第九卷』所収のものを用いた。また、現在確認できている結縁五重勸誡の資料については、『教化研究』十七号(二〇〇六年)「別表1 結縁五重勸誡録一覽」(P163)をご確認頂きたい。なお、岩井智海の勸誡録は左記のものもある。ここでは題名のみ紹介する。

『岩井大僧正五重相傳記(代筆記)』(昭和三年発行・発行人中村剛直)

#### 二、各勸誡録執筆の背景

この項では、各勸誡録執筆の背景について人物像・時代背景等から考察する。

#### 1. 『信法要決辨釋』執筆の背景について

『信法要決辨釋』の執筆は、明治三年八月、北條的門六十三才のことである。明治三年といえは、一月に「大

教宣布の詔」が出され、惟神の大道を宣揚すべきとの旨が示された年である。それに先立つ明治元年の太政官布告「神仏分離令」以来、神道国教化・祭政一致の動きが激しさを増す時期である。さらに明治五年には「三條教則」が出され、敬神愛国、天理人道、皇上奉戴を説くべきことが強要される。

しかし、こうした時代的背景も直接の影響を『信法要決辨釋』の内容に及ぼしてはいない。なぜならば、この書が門独自の著作ではなく、大日比法洲の『信法要決』を講説したものである。門は『信法要決辨釋』の序文に次のように記している。(カッコ内は筆者による)

予や幸に屢しばしば二師(隆田・法洲)の許うかに趨か過かして、親聞すまひも亦た尠すくなくからず。因て謹んで二本(『浄業信法訣』・『信法要決』)を揚あ推かして、繁かを笈かり簡かんを補おひ、間ま亦た自解まを加て、以て一本(『信法要決辨釋』)を編輯ます。

と述べ、その内容を隆田『浄業信法訣』と法洲『信法要決』に基づくものとしている。

文政五年(一八二二年)、十五才にして増上寺に留学した門は、宝譽たからな顯あ了り大僧正だそうじょうに従つて研鑽けんざんを積むこと十余年の後に宗戒そうけい兩脈りやうみやくを相承する。そして天保元年(一八三〇年)二十三才、西京遊学して専念寺隆田、大日比西田寺法洲に師事している。『信法要決辨釋』は、この二師の説を忠実に継承・詳説したもので、江戸時代後期の結縁五重相伝勸誡くわんがいを伝える書物なのである。

抑も隆田が『浄業信法訣』を書いた理由は何であるか。結縁五重相伝が寺院において布教・教化の主要な方法となり、民衆の間に信行策励しんぎょうさくれいの良き行法として普及拡大するのは江戸時代後期になってからであるという。その結果、負の側面として種々の混乱が生じていたことも確かである。隆田は『浄業信法訣』の中で、

先ツ一寺二住持シテ化他ヲモセント思念スルモノ  
ハ、兼テ自行ノ爲ニ、三部経合讚、往生論註、選擇

假名鈔等。泣テモ笑テモ。責テコレ位ハ学バナバ。

眞暗闇ヲ歩行スルヤウニテ。我サヘ信心ナケレバ。

聴聞ノ人モ信心ハ發リ難キナリ。〔浄土伝燈輯要〕・

P922)

など、授ける能化側の勉強及び信心不足を指摘している。その他、口伝箇条の乱立や邪義の流布を挙げて現状を嘆いている。

また法洲は、

今時吾浄土門において五重を相伝せらるるに、宗規に違へること甚だ多し、或は一向日蓮の末徒に入衆を許し、或は半徒にして入衆せしめ、又はその信不信を問はずしてみだりに入衆を許す等、これ皆財施をむさぼる不浄無慚愧よりなすところなり。又行中不如法の事少なからず、男女交雑して雑談戯笑するをも顧みざる者、往々これあり、是他なし、導師の教誡徹底せざるの過なるをや、予はかくのごとき弊風を矯正せんがため、厳密に祖々の宗規を守り従来諸寺院において相伝せしなり（『大日比三師傳』

所収『法洲和尚行業記』・P182)

と、卑俗化する五重相伝に対する厳正なる思いを記している。（その他、法洲による指摘は、後述「大日比法洲上人の『信法要決』について」参照）

こうした現状に対する思いは的門も同様である。『信法要決辨釋』の述意には、

然れば傳法には、少しも私意を加えず、三卷七軸の所詮を和解して、安心起行の心操を決得せしむるにあるべし。夫れ傳法の開導の詮たるや、佛祖傳來の正義正理を勸導し、御遺誓の安心起行に落著せしめ、一向専修をもちたて、雜行雜修を廢せしむるにあり（『的門上人全集 第三輯』・P11）

と述べている。又、当時の五重の乱れについても、

且つ前行中、別に教導師もこれなく、組寺或は法類好身の寺院、かはるがはる法施にて、出放題の説法にて、所謂開帳場の如くにて、如法の義更になし、又傳法要偈には、先づ略して三聚戒の作法、而して直に要偈一通り辨じ畢て、是れ三國傳來佛祖相承、

異途なき旨を演説して究竟せり、余は実に悲痛千萬なりし（同・P2）

等々、自ら見聞する実状を挙げている。

結縁五重の隆盛は、一方で伝授者及び受者の質の低下と、相伝内容の混乱を招く結果となった。隆円・法洲は各々その範を示す爲に筆を執つたのである。『信法要決辨釋』もまた、こうした現状の中で著された書物である。そこには隆円法洲二師の説を通じて吉水正流の宗義を宣揚せんとする使命を感じとる事ができる。

#### 【参考文献】

『浄業信法訣』（『浄土伝燈輯要』所収）

『法洲和尚行業記』（『大日比三師傅』所収）

『信法要決辨釋』（『的門上人全集 第三輯』所収・『浄土宗教学大系八』所収・『浄土宗選集 第八巻』所収）

『浄土宗近代百年史年表』大橋俊雄著

『浄土宗布教伝道史』

『近世浄土宗における布教者と民衆―在家五重の定着過

程にみる―』長谷川匡俊著（『日本宗教史論集』所収）

（以上 宮入良光）

#### 2. 『點睛録』及び『五重講説』の時代背景

呵成の『點睛録』は明治三十九年十一月に、前年四十一歳で没した呵成の遺著として刊行されたものである。

又、智海の『五重講説』は昭和六年、智海六十八歳の時に刊行された。

一見すると、呵成は明治中期から後半にかけて、智海は大正から昭和初期にかけて活躍したような印象を受けるが、実はこの二人の年齢差は僅か一年、智海の方が一歳年長なだけで、ほぼ同時代を生きていた事となる。智海は文久三年、明治維新に先立つ五年前、福岡県に在家の次男として、その翌年、呵成は兵庫県明石に生を受けている。

呵成四歳、智海五歳の時、日本は明治維新を迎え、社会の大きな変動とともに、仏教界も激震に見舞われ

る事となった。新政府が打ち出した祭政一致政策、王政復古に伴い、神仏判然令が出されると、各地に於いて廃仏毀釈が猛威を振るつた。これまで幕府体制下で寺請け制度によつて経済基盤を保証され、安泰に過ごしてきた時代は終わる。代わつて氏子制が導入され、神職と僧侶の立場の逆転が行われたのである。しかし、仏教側の反発も大きく、政府は当初目論んでいた神道のみによる祭政一致は断念せざるを得なかつた。

明治五年、「三條教則」が制定される。その内容は次の通りである。

敬神愛国の旨を体すべき事

天理人道を明にすべき事

皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

更にこの年、神職と僧侶が共に教化の任を担う大教院が設置される運びとなった。これは仏教の側が存亡を賭けて設立を建議したものであつたが、その内実は、神職者の立場が僧侶よりも上に配置され、先の「三條教則」に外れた教えを説く事は許されず、仏教各宗の

教義を説く事は事実上禁止されていたに等しい。明治五年八月には芝増上寺に大教院が設置されている。大殿の本尊阿弥陀仏は遷座させられ、須弥壇上には天御中主神、高御産霊神、神産霊神の三神が代わつて祀られる事となった。又、大殿西側には天照大御神を祀る神殿が新造され、三門前には白木の大鳥居までが建てられたと言ふ。

政府がこの大教院に仏教側を引き入れたのには、翌六年に国内での布教を解禁せざるを得なくなつたキリスト教に対する防衛策という意味があつたようである。

翌年には従来仏教の法話の名称として使われていた「談義」「法談」「説法」などの名称は廃され、「三條教則」を説く事を意味する「説教」という呼称が定められるのである。いずれにしても、仏教の教義について説く事は許されず、これまでの布教の技術面だけを利用される形となった。こうした説くべき事の説けない時代は明治八年まで続き、浄土真宗の島地黙雷の活躍によつて、この大教院はようやく解散するのである。

松浦行真著「伝弘の生涯―大僧正岩井智海伝」によれば、当時僧侶となる事を志していた智海は「三條教則」に関する試験を福岡にて受験して及第し、教師補となる為の願書を提出しているのだから、願書が到着した時、大教院は解体となっており、願書も受理されなかった。この時当時の福岡区長の尽力によつて、ようやく許可を得たとのエピソードが載せられている。智海はこうした仏教受難の時代に、僧侶となる事を志し、皮肉にも「三條教則」を説く為の勉強に励んでいた事になる。恐らくほぼ同期の呵成も又同様の環境で勉強に勤しんでいたに違いない。当時この二人が参考とした書物についてはよく判らないが、恐らくは「三條教則」を基として、何とかして仏教をこの国に存続せしめんと苦渋の末に書き上げられたものも多々あったのではないだろうか。こうした状況下に呵成も智海も布教の基礎を学んでいる筈である。後の二人の思想にこの時学んだものの影響が現れる事は容易に想像できる。

国外からはキリスト教が西洋文明と共に流入して来

た時期でもある。大橋俊雄『浄土宗近代百年史年表』の記述によれば、明治六年の解禁当初、日本国内にいた宣教師の数は、その妻を含めて五十七人であり、この時にはさして脅威とは受け取られなかったであろうが、その教化力は予想を遥かに上回るものだったようである。五年後には宣教師は百人に増え、その八年後の明治十九年には教会数一九二、信徒一三、〇〇〇人、明治二十三年には教会数三〇〇、信徒数は既に三四、〇〇〇人と増加しているのである。こうした中、当時の総本山勧学本場（後の西部宗学本校）を卒業した智海は、意外にも大阪市に有る英和学舎というミッション・スクールに入学を果たしている。『伝弘の生涯』ではその目的を、キリスト教義の本質を見極め、西欧伝道の知識と實際を学ぶ事だとしてしている。智海が更にその（卒業後にも聖パウロ学校（後の立教大学）へ進学する事は、彼にとって如何に得るものが大きかったかを示している。

一方呵成はというと、それ以前の経緯は判らないが、

明治十五年に、何と弱冠十八歳にして、東部宗学本校の教授に就任してしまっている。如何に天才的な頭脳の持ち主であったかを物語るものである。『點晴録』中に於いても緻密な構成と、広範囲に及ぶ博識には驚かされるものがあつた。

呵成は二十一年、望月信亨ら数名と雑誌『宗粹』の主幹となり編集執筆に携わる事となる。『望無雲遺芳』収録の望月信亨の自叙伝によれば、呵成は『宗粹』編集のメンバーの中に於いても特に活発に宗政批判を行つた人物であつたようだ。

明治二十二年『大日本帝国憲法』が發布され、また、ようやく信教の自由が保証されるのであるが、やはり神道に関してだけは別であつたようで、当然信奉すべきものとの条件付きであつたようだ。

翌二十三年、呵成は京都三條寺町天性寺内に、私的なものではあるが、「浄土宗布教会」を起こし、布教を志す後進の育成を開始している。この「浄土宗布教会」は明治二十六年には公認のものとなつている。

呵成も智海も、ここへ来てようやく信教の自由を手にしたとの思いを持った事であろうと思う。

しかしながら、世はこの後、明治二十七年から、朝鮮半島の支配権を巡つての清国との戦争へと突入してゆくのである。智海も当時の管長日野靈瑞に随つて、外征軍慰問使として従軍して行く。

又、明治三十年には呵成も軍隊布教師の任を受けている。但しその活動詳細は判らない。

この頃から国粹主義は徹底されて行くようである。三十三年には治安警察法が制定されている。政治的な言論・結社・集会や集団での行進、言論を抑圧する為の法律である。これは昭和元年まで効力を保ち、更に厳しい治安維持法へと形を変えて行く事となる。これによる処断者は数万人にも昇ると言う。

又、明治三十七年にはロシアの南下による対立が激化し、日露戦争が勃発する。『點晴録』はこのさなかに執筆されたものである。出版にあたっては出版条例による検閲を受けた事も充分考えられる。呵成は日露終

戦の明治三十八年、四十一歳の若さでこの世を去っている。

智海はその後も生き続け、明治四十二年奈良當麻寺奥院に住持し、その後は各地の布教に邁進していたようである。前出の松浦行真氏の資料「五重授戒結縁寺院及結縁年月日」には、多い時には年間二十数箇所に於いて結縁五重、或いは授戒会の勸誡を行っているのである。

大正十二年、長崎大音寺の住職となり、同十四年には総本山知恩院執事長に着任している。

昭和七年には大本山清浄華院に進住、大僧正と相成るのである。今回取り上げた『五重講説』はその前年に刊行されたものである。

### 【参考文献】

- 『浄土宗近代百年史年表』大橋俊雄著
- 『廃仏毀釈百年―虐げられつづけた仏たち』佐伯恵達著
- 『図説 日本仏教の歴史』池田英俊著

『伝弘の生涯』松浦行真著

『岩井智海関係資料集』松浦行真著

『大教院の研究』小川原正道著

『明治の仏教者』常光浩然著

『近現代仏教の歴史』吉田久一著

『近代日本の仏教者たち』田村晃祐著

『角川日本史辞典』

(以上 八木英哉)

### 三、勸誡録比較考察

ここでは三勸誡録を以下の四点から比較考察する。

1. 五重相伝の本体
2. 法説に於ける表現
3. 邪義・邪宗についての言及
4. 各勸誡録にみられる譬喩の変遷



## 1. 五重相伝の本体

この項では、三師が各勸誡録の中で結縁五重相伝の本体（体、正体、法体）と述べる所について確認し報告する。

## ①『信法要決辨釋』について

浄土の法門において、安心起行の重要性は言うまでもない。的門も叙説分の講説中に、白旗制戒の「一、不可心行退転事」を特別に相伝の肝要と伝えている。安心起行の趣を信受すれば順次往生、退転すれば三悪道に沈むとし、

生死浮沈の分れ目にて、此の安心起行が、相傳の正体なり。夫れ往生は相傳にては定られず、称ふる念佛にて定るが、相傳なれば、助給への心念の進み、口に念佛のくせづく様に、修鍊し相統すべしとの、制戒なれば、能く能く定置べき要務なり。（叙説分

第二席・P159)

としている。（頁数は『浄土宗教学大系八』のもの）

その上で五重相伝の本体を、叙説分並びに第五重の勸誡にて次のように繰り返し述べている。

其法体とは何ぞ、謂く心存助給、口称南無阿弥陀佛の（心には助給へと思ふて、口には南無阿弥陀佛を唱ふるを云ふ。）一行にて、善悪智慧の簡なく、順次往生ゆるぎなきと云ふ、仏祖三国相傳の趣きを異途なく相承するが、正体なり。（叙説分第一席・

P152)

其体とは、心存助給、口称南無阿弥陀佛の一行にて、善人悪人、智慧貴賤の簡なく、順次報土往生に、動なき証據の為に、佛祖三国相傳の旨趣を、相承するが正体なり。（第五重第二席・P311)

このように、的門は五重の本体は口称一行にありとする。そして仏祖三国伝来のみ教えを誤り無く相承するという相伝の義を明言している。また、次のように十念伝に偏った相伝の誤りを指摘し、安心相承の重要性を特に強調している。

安心を直に立るより外、相伝なし。其相伝は前四重

にあれば、五重の正体は、前四重にあるなり。故に

五重伝法の制戒に、浄土白旗流安心相承制戒之事と

顕彰し玉へり。(第五重第二席・P312)

安心相承については、流通分における小消息結文の

講説中にも、

汝等此度因縁熟して、安心相承を蒙るからは、往生

極楽の肝心は、安心の決著にあり。若し安心僻越す

れば、萬行徒に施す。実に此決著が、往生極楽の先驅、

要中の至要なれば、此御消息にて、篤と安心を決著

して受た日課を一生怠らず、目出度来迎の暁夕に侍

るべき者也。(流通分第二席・P316)

と記し、極楽往生の要と捉えて日課念仏を勧奨してい

る。

また十念伝については、特に今時の誤りとして、

唯此の十念の口授が正体にて此伝を得れば往生し、

無相伝は往生ならじと云ふことあり。此は是れ超世

大悲の本願を破り、両祖大師、及び代々相伝の正義

に戻る邪説にして、必墮無間の人と云ふべし。(第

五重第二席・P313)

と指摘しながら、祐天上人の因縁話を挙げて勸誡を進

めている。この話は差所を忘れた老婆に對し、祐天が「忘

れたらば、唯念佛せよ、念佛だに申せば、往生相違な

きことは、祐天が讀合うぞ」と語り聞かせるものである。

これらの門の示すところは、忠実に法洲の『信法要決』

を引き継いだものである。(後述「大日比法洲上人の『信

法要決』について」参照)安心起行を「鳥の双翼の如く、

車の車輪の如く、一具にして用をなす」として、あく

までも心行具足にして往生を得ることを主張している

のである。

そして、現在の五重勸誡録によく見られる総まとめ

の句も、既に『信法要決辨釋』巻末に見ることが出来る。

確認できるかぎりでは初出のものと思われる。

五重総括

初重―往生記―元祖大師作(知機)

「云何なる愚痴な者も」

二重 授手印 鎮西国師作(行)

〔南無阿弥陀仏と唱ふれば〕

三重 領解 記主禪師作(解)

〔往生が出来る」と承知して〕

四重 決答 一同 作(證)

〔あら一点の疑もなく〕

五重 玄忠大師伝一 (口授)

〔助け玉へ南無阿弥陀仏と決定す〕

(流通分第二席・P364)

なお、『教化研究』第十七号「和歌・道詠の研究―五重勸誡における活用について―」の中に、過去発行された七冊の勸誡録に見られる総まとめの句が掲載されている。〔8. 諸勸誡師による【五重相伝総まとめ】・P158〕

また、(こ)では今日通常用いている「機行(法)解・証・信」ではなく、「知機・行・解・證・口授」となっており、初重と第五重の表現に違いが見られる。隆円の『浄業信法訣』巻四「第三初重自證往生」の説示には、

是ハ圓光大師ノ御作ニシテ。知機ト傳フルナリ。(『浄土伝燈輯要』下巻・P188)

とあり、また同巻「第五十念ノ傳」には、

三國傳來佛祖相承シテ。師匠ノ口ツカラ授ケテ。弟子ノ心ニ傳フ。故ニ口授心傳ト云フ。(同・P190)

と記されている。的門の表現はここに根拠を置くものかと思われる。また、同じく隆円の能化伝法に関する書である『吉水写瓶訣』第二「五通五箇」には、

卷物次第者。初三四五。如次配機法解證信。或云。

機行解證信。二云(同・P99)

と示されているように、もともとは能化の伝法にのみ伝えられるものが、結縁五重に取り入れられたものと思われる。

そして「五重総括」に続き、本書の最後には五重相伝の結論とも言える歌が詠まれている。

唯申す外に口伝も相伝も なきが浄土の口伝相伝

(流通分第二席・P365)

このお歌は法洲の『信法要訣』には見られないが、『法

洲和尚行業記』によれば法洲がこのお歌を勸誡に用いていた事が記されている。(『大日比三師傳』P284) 法洲からの門へ習い伝えられたものか。なお、今日の結縁五重相伝においても多くの諸師により活用されているものである。

## ② 『點睛録』について

吉岡呵成は五重相伝の語義を次のように定義した上で五重の法体について述べている。(頁数は『浄土宗教学大系八』のもの)

五重とは五種の要法を合せたるの意にして浄土の要義を洩らさず束ねて五類と為し、其の五類を集めて傳ふるを五重相傳と云ふ。五種とは、一に機(元祖大師、往生記) 二に行(二祖國師、授手印) 三に解(三祖禪師、領解抄) 四に證(同、決答抄) 五に信(曇鸞大師、口授心傳) (叙説分第一席・P388)

機・行・解・証・信の五種を集めて洩らさず伝えることが五重相伝であるとし、その集約されたものを、

## 五重法体

結歸一行三昧心存助給口唱南無阿弥陀佛是なり。

(同・P388)

と明言している。そして、浄土宗の要義を五重に総束することを「太空の風を扇頭に集めしが如く」と言い、五重が口称一行三昧に帰することを「開ける扇を要にて置めるが如し」と譬えている。また五重の法体である結歸一行三昧の明文は二重の巻物に記されている為、その説教方法についても、

五重中二重は尤も文廣く義詳なれば、前方便講説中自然に其の中心と為るは至當なり。(二重第三席・

P454)

として、二重の講説を最重要視している。五種を重ね伝える方法も、呵成は対象を「智解を好むもの」「比較を好むもの」「疑ひ深き者」「化他の為に廣く知ることを希ふ者」など種々の機縁を想定した上で、

廣く念佛の最勝最易なることを知らしめんが爲には、亦種々の教説の順序を経る必要あり。(叙説分

## 第二席・P388)

と、その必要性を分析している。

また、信者の為すべき行は念仏一行としながらも、さらに五重相伝を受ける理由として、種々の利益を次のように挙げてゐる。

行人修行の大意は一文不知の身に為して一心専念するに在と雖ども、尚ほ念の爲五重等の教説に依り其の信念を堅固ならしめ、教義の一分に通ずるときは独り安心不動なるのみならず、復た種々の利益あり。且らく略して左の三種を挙ぐべし。

- 一、自己の安心の正不と深淺を覚知すること
  - 二、異見異学の徒に信心を動乱せられざること
  - 三、家族及び有縁の人を勧発するの材能を得ること
- 是れ在家衆に対しても五重相伝の道を開創せられし所以なり。(同・P388)

そして呵成の指摘は、相伝者の心持ちの変化や人としての使命にまで言及している。呵成独特の思弁は、近代科学知識や西洋哲学者の思想に多く教材を取って

いることであるが、自然その教説に宗教信仰の意味や人道といった内容が多く見られる。賢者ヒレモンの「汝は人なり常に之を考へて忘るる勿れ」という言葉を引きながら、眞実の人ならば無理非道の行為は働かざる筈とし、相伝者に対しても、

我は『五重相伝の人なり。』『佛祖の血脈を傳へたる嫡孫なり。』との感念あらばおのづから善良安穩の處世を遂ぐべきなり。五重相傳者も信心の締め胸に確かならば、處世産業何事に従事するも總て人道に適合するなり。(流通分第一席・P473)

と言ひ、相伝者が広く人の道に適つた者となることを強調している。

## ③『五重講説』について

岩井智海は五重相伝の定義として、

五通りの意義を重ねて、完全なる念佛の一大事を  
お伝えする(叙説分第一席・八巻P184)

と簡潔に述べている。(巻数と頁数は『浄土宗選集』の

もの)

また、五重伝法を、

要するに五重伝法といえは佛教の早学問、浄土一宗の安心の早手捌きともいうべきものであります。この五重の順序によつて信仰修養なされば、まことに簡単にして、いかなる人も一大事を決定くださることであろう。(同・八巻 P189)

と、いささか軽いが分かりやすい表現を用いて受者の興味を引いている。その代々伝えられる内容については、すなわち心存助給口称南無阿弥陀佛の一行と申しまして、心の中にみ佛のお救いを求むる、そのままの心を口に現わして南無阿弥陀佛と称えまするといふこの一大事(同・八巻 P186)

とし、口称一行を五重相伝の本体とする点は、的門、阿成と何ら変わることはない。因みに昭和七年二月大日比西円寺での結縁五重勸誡のおり、智海がその挨拶の中で

「私は生涯多くの五重結縁をしてまいりました。そ

の根底には、大日比西円寺の第十代中興、承誉法洲上人のお説(信法要決)によつて相承してまいりました。」

と述べられたことを、西円寺住職であられた綿野得定師は伝えている。(『浄土宗現代法話大系』第十巻)このことから智海の勸誡は、的門のものと同じく法洲の勸誡を基礎として説かれたことが分かる。

また、口称一行を伝える二重の勸誡では、その重要性を今日の世界、社会状況の厳しい現実を強調した上で説いている。すなわち、文明が発達するほど生存競争が激しくなり、その競争に負けた者は文明病、いわゆる神経衰弱、精神上の病いを受けると説く。当時年間一万人以上の自殺者を出している社会問題を挙げ、

二重の南無阿弥陀佛と申すという巻物は、全くここに一切助かることのできぬ初重の巻物の人を助け上げてゆくのであります。だからこの二重は阿弥陀さまが一切世界をお救いなさる大切な救いの道を伝えた巻物である。五重伝法はこの二重の巻物を中

心として我らにお伝えくださる次第柄であつて、一重の巻物はまことに大切なお巻物であります。(一)

重第一席・八巻 P286)

として、現実世界救済の意味合いを伝えている。このことはさらにこの後続く言葉の中にも、

南無阿弥陀佛というものが浄土一宗の生命であり、この念佛ひとつをもつて浄土一宗は世界を救わんとしている宗教であります。さすれば南無阿弥陀佛と申すということだけで満足であつて、それで完全に世界が救われる宗教であるとまず私は信じております。(同・P287)

と、より明確に念仏一行による世界救済を説いている。

そしてまた、二重勸誡の総括においては、

五重伝法は何もかも忘れてしまつても、念佛申すという一声を受けとつてくださればありがたい、念佛申すという声を、確かに受け取つて申される身になつてくださるならば、そこに五重伝法の骨髄があるのであります。

今聴いて今に忘るゝ身なれども

南無阿弥陀佛の残る嬉しさ

(二重第十席・九巻 P139)

と、念仏申すことが骨髄であると伝えている。さらに続く言葉には、

佛法の奥は奥はと尋ぬれば

南無阿弥陀佛の声にこそあれ

教えの奥へ奥へと、進み進んでみれば、ただ念佛の声、

たゞ申せたゞと思わでたゞ申せ

申すがたゞのたゞ申すなり(同・P139)

とあり、「ただ申す念仏」の「ただ」さえも消え去つた南無阿弥陀佛の声のみの境地を結婦一行三昧と説き、「朝な夕なにお念仏に生かしていただく」と結勸している。

結論として第五重の勸誡において五重相伝の本体を、

心には、阿弥陀さまに救つていただきたいと思ひ、

口には、南無阿弥陀仏と称えてまいつて、如来に救われるということが、五重の体であります。(第五

重第一席・P261)

と、極めて平易な言葉で語るが、その表現は抽象的である。その救われる具体的な姿については、続く勸誡のなか結勸に至るまで、智海独自の論が展開する。

先ず、先の言葉に続き、相伝を受けた者のあるべき姿を示している。

かようにご決心くだされて、ご決心ができてみれば、ただ南無阿弥陀仏と称えて、ご相続くだされ、念仏のお声の中に、真に活き活きと、老いも若きも、親も子も、夫も妻も、姉も妹も、平等一切に手を引き合つて、共に共に、如来の膝下に進み進んでゆくのが、これが五重を受けた所詮であります。(同・P261)

と抽象的に語った上で、智海 of 言葉を借りるならば「できるだけたやすく、わかりやすく、一口に」伝えると次のようになるという。それは「的門の勸誡と同様にまとめの句を用いたものである。

初重は『往生記』、元祖明照大師の御作。機と伝え

ます。どんな愚かな人でも。二重は『末代念佛授

手印』、浄土志二代鎮西国師の御作。行と伝えます。

南無阿弥陀仏と称えらる。三重は『領解鈔』、三代

記主禪師の御作。解と伝えます。明らかに承知いた

しました。四重は『決答鈔』、同じく三代記主禪師

の御作。証と伝えます。一点も疑いはなく、第五重

は口授心伝十念の伝。信と伝えます。南無阿弥陀佛

と声に伝えてまいります。これを一口に言えば「ど

んな愚かな人でも、南無阿弥陀佛と称えらる、往生

するぞ、と明らかに承知して、一点の疑いもなく、

疑いが晴れたなら、南無阿弥陀佛と申せば助かると

深く信じて、念仏を相続する」というのが、これが

五重伝法の眼目であります。(第五重第一席・九卷

P262)

言葉に若干の違いはあるが、的門の示すところと何

ら変わることはない。明治三年、明治四五年(『信法要

決講説』、大正九年(『的門上人全集』)と三期に渡って

出版された的門『信法要決辨釋』の影響力はかなり大



きかったものと思われる。

この後、智海は念仏生活を続けるなかで感じ取るい  
 ができる自己の変化について、

淋しい生活にも広い大地を踏んで、明日の命も知れ  
 ない危うい世界にも、永遠真実の生命が生き生きと  
 感じられて、とかく三毒煩惱の罪ばかり造っている  
 私どもが、如来のお慈悲をわが慈悲とするように  
 なってまいります。(同・P274)

あなたに信ずるといふ力が、知らず知らずの間に恵  
 まれてきて、本尊さまに頭が下がるようになる(同・  
 P275)

として、仏の慈悲の伝搬作用と言うべきものを述べる。  
 そして信仰共に深まる信仰生活の様を、多くの譬喩を  
 用いて伝えている。その結論として、

こうして称えておれば、如来さまのお慈悲が知らず  
 知らず私の心に温かく移っていただけば、自然に  
 鬼のような私も、知らず知らず慈悲の心に生まれ変  
 わることが出来る。自然と明けても暮れても力の

強い温かい親切の生活に生きてゆくことができる。

(同・P276)

とし、慈悲の心に生まれ変わった者は「親切の生活」  
 を送るようになるという。

畢竟するところ、念佛者になるといふことは、親切  
 なる人になること、「親切は力なり」。自然に「親切は即ち  
 綿密なり」自然に「親切は活動なり」。(同・P277)

と合釈し、「愛国の活動」「孝行」「社会奉仕の仕事」を  
 その例に挙げて、

ただちに列祖嫡伝のみ心をとおして、大悲願王阿弥  
 陀佛に直参して、光輝ある念佛生活に更生し、佛陀  
 無限の大慈悲をわが心として、今世後世、四恩報謝  
 の活動をひとえにお願いいたします。(同・P278)

と結勸し、念仏一行の目的として往生浄土を根底に置  
 きながらも四恩(心地観経によると父母・国土・衆生・  
 三宝)報謝の活動を強く勧めている。

④まとめ

三勸誡録ともに五重相伝の本体を、心存助給口称南

無阿弥陀仏の一行としてなら変わることは無い。し

かし、『信法要決辨釋』がその目的として順次報土往生

を強調し、頑なに宗義の宣揚を計るのに対し、『點睛録』

や『五重講説』は往生浄土は当然としながらも、相伝

による人格形成や生活のあり方の変化を強調している

点に相違が見られる。そこには特に廃仏毀釈や戦争と

いった激動の時代に影響された呵成や智海ら布教師の

思想の噴出を見ることができるのである。

以下、法説に於ける各種表現の違いや譬喩の変遷か

ら、さらに各師各時代の特徴を探ってみたい。

(以上 宮入良光)

## 2. 法説に於ける表現

ここでは各勸誡録中、特に法説に見られる特徴的表

現を取り上げ、比較してみた。

① 『信法要決辨釋』に見られる表現

「弥陀」「阿弥陀仏」「阿弥陀如来」「弥陀如来」

「仏」「彼の仏」「阿弥陀ほとけ」

『信法要決辨釋』に見られる阿弥陀仏の表現で頻出の

ものは以上のようなものである。最も多く用いられる

のは他の語句と合わせての場合も含めて「弥陀」、次に

で「阿弥陀仏」である。他に「四十八願の法王」「超世

願主」「無上世尊」等も見えるが、いずれにしても、江

戸期までの表現方法を忠実に引き継いだものである。

時代に則して新たな表現を加える事は無かったよう

である。

② 『點睛録』に見られる表現

「仏」「弥陀」「阿弥陀如来」「弥陀如来」

唯一の本尊たる阿弥陀仏

絶対無上の本尊たる阿弥陀如来

阿弥陀如来は即ち心靈界に於ける吾等本属の法王

「教の主」「教主」という表現

(一) 「阿弥陀仏」の表現

「仏とは教の主」

「三心は行人の内因にして本願は教主の外縁なり。」

「御親」という表現

「我は弥陀如来の御子なり。仏の御子としては」

「阿弥陀如来の御親」

「極楽は我が精神界なり、弥陀如来は精神界の父

なり。」

『點晴録』に於いて初めて「御親」との表現が出て来る。

阿弥陀仏と衆生の関係が親子の如くであるという事からの発展形であるのかも受け取れる。

明治五年、呵成八歳当時、大教院が設置されているが、ここでの説教の根本となるものは「三條教則」であった。その内容は「敬神愛国の旨を体すべき事」「天人道を明にすべき事」「皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事」の三つである。説教は神職の者と僧侶が共に「教導職」の名で行っているが、仏教の立場は神職の下にあり、「三條教則」の内容から外れる事は許されなかった。又、従來說教の経験の無かった神職者が説

教のタネ本とする為の書籍が多数発行されている。その中、最も著名なもの一つに田中来庸の『三條演義』一卷が有る。その中に於いて、「我神教」に「あがみおやのおしへ」、「皇祖天照大御神」に「すみみおや あまてらすおほみかみ」、「叡慮」に「おほみこころ」、「神徳」に「みめぐみ」等のルビが見受けられる。呵成自身も勉学時代には少なからず時代の影響を受けざるを得ないものと考えると、『點晴録』に見られる「御親」との表現も創作したものではなく、大教院の影響下から発生したものかも知れない。因みに同時代に生まれ大正九年に没する山崎弁栄の著書中にも「ミオヤ」「オオミオヤ」の表現が多く見受けられる。彼の主導による光明会の『如来光明礼拝儀』の中には「如来」に「みおや」とのルビがつけられているのが確認出来る。これも大教院時代の影響を受けつつ修学した事に起因するものではないだろうか。

③『五重講説』に見られる表現

「阿弥陀仏」「み仏」「如来」「如来さま」

「完全円満な大人格者」「救い主の阿弥陀さま」

※『點睛録』に於いて最も頻出する「阿弥陀仏」の表

現は「阿弥陀如来」であり、一方で『五重講説』で

は単に「如来」「如来さま」が最も多く使われている。

又『五重講説』では、如来を「完全円満な」人格者としてとらえる特徴的表現が多数見受けられた。

(二)「極楽浄土」「往生」の表現

①『信法要決辨釋』に見られる表現

「極楽」「浄土」「極楽浄土」「彼の浄土」「報土」

「弥陀浄国」「一立古今無衰無変の極楽」

極楽浄土の表現は以上のようなものが見られる。最も多く見られるのは「極楽」「浄土」である。

『信法要決辨釋』に於いて特徴的なのは「報土」「無漏

の報土」といった報身報土を強調している点である。

又、「往生」については、突出して多く用いられる表

現は「往生」である。他に「極楽往生」「往生極楽」「往

生浄土」「決定往生」「得生」等の表現があげられるが、

いずれも基本を外さない正統的な表現であった。

②『點睛録』に見られる表現

「極楽」「弥陀仏国」「仏国」「仏界」

以上の表現が頻出するものであるが、ここに於いて『信法要決辨釋』では見られなかった新しい極楽の表現が出てきている。以下はその例であるが、

「限りなき仏の光明界」「無限の光明界たる西方極楽

世界」「仏境界」「極楽は我が精神界なり、弥陀如来

は精神界の父なり」

というような新出の表現が見え、「往生」についても「往生」「往生極楽」が頻出するのは勿論だが、

「其の光明界に摂取し玉う」

「仏境界に往生すること」「仏界に達する」

「無量寿に入る」

などの表現がある。特徴的なのは「光明界」という表現であり、往生を「光明界へ更生する」「無量寿に入る」

とする表現である。維新以後、西洋文明の流入、身分制度の解体、教育機関の整備が進んだ結果、知識人層が増加した事により、極楽とは如何なる世界なのか具体性を求められ始めたという背景に於いて、布教師も新たな表現方法を模索しなくてはならなくなった事が原因ではないかと推察する。

③『五重講説』に見られる表現

「西方の如来さまのお浄土」「お浄土」「完全な世界」

「如来のご膝下」「あなたのお慈悲のもと」

等が頻出の表現である。『信法要決辨釋』『點睛録』と比較すると表現は格段に柔らかくなっている。

往生を表すものとしては

「南無阿弥陀仏と申せば助かる」

との表現が多く見られるが、具体的にどう助かるのかについての言及がなく、受者は果たしてこれを往生極楽の意味で理解しているかの疑問が残る。戦時下であれば、命が助かると受け留められてしまうのではな

らうか。

その他の往生を表すものとしては

「とにかく如来のお膝下に参つて如来という完全円満な人格にしていたきたい」

「この不完全な世界から完全な世界へと進もうとする」

などが目立つ。こちらは往生の後にどうなるのか、往生後の目的が成仏にあることを示唆したものであろうか。

※「往生」という表現について比較してみると『信法要決辨釋』『點睛録』では頻出しているのに対し、『五重講説』ではあまり見受けられず、多く見られた「往生」を指す表現として「如来のお膝下にまいる」が挙げられる。

(三) 特徴的表現

① 強調表現

双方に共通して見られる表現に「大○○」という強

調表現がある。「點睛録」には「道に入り徳を進むるの大原因」「生死優遊の大目的」「念仏に滅罪の大能力」等が、『五重講説』には「念仏申すものをお救いくださる大活動」「完全円満な大人格者になりたいという大理想」等が見える。当時の憲法は明治二十二年二月十一日発布の「大日本帝国憲法」であり、これは昭和二十二年五月の「日本国憲法」の施行まで効力を有していた。こうした国家的気分を背景とした当時の表現の一種の流行であったのかも知れない。

② 「ご生命」「大生命」「生かされる」という表現

『五重講説』にのみ見られた表現に、阿弥陀仏を「ご生命」「大生命」、阿弥陀仏に「生かされる」といったものが見られた。(巻数と頁数は『浄土宗選集』のもの)

○ 「ご生命」「大生命」

このアマターユスという限りない真実に生かし給

うご生命 (八巻 P312)

天地の大生命がこの一粒の麦の中にも宿って生々とする勢いを (八巻 P250)

○ 「生かされる」

あなたご自身が永遠に生きますみ力を持つて在しますのみならず、一切の天地を限りなく生かし給うみ力、ご限りなき命とお徳とを具えているのである。

(八巻 P312)

しかるに今永遠真実の生命にお生かしくださって、罪から浄めて明るい生活にお誘いくださる阿弥陀

さま (八巻 P316)

お念仏のうえにおきましては、求めるところは西方の如来さまのお浄土ひとつ、帰依し奉るところは大慈悲の阿弥陀さまご生命ご一体、称え奉るところは南無阿弥陀仏ご生命の一条、ここに腹を決めてそうして一直線

に進んでまいりますと、漸々如来のお慈悲に生かされ、育てられ、恵まれて尊い法悦の世界に進んでゆ

くことができます。(九卷178)

念仏行者は如来に生かされつつ善業相續して、浄土に参らせてもらつたら、実に広大無辺な、私どもは力を得させてもらうことができます。(九卷179)

※以上のような新出の表現が見られたが、『五重講説』の中では、「所求・所帰・去行」を説いた上での「生かされる」であつたり、まだ確信的に使われているとは断言出来ない。しかしこの二年後に『五重講説』と内容の、或いは一部加筆して発行された智海の著『旭の心』に於いてははっきりと

誠に如来の大慈悲力は宇宙の大生命にして、一たび此の靈力に触るれば、勤勉努力の前途に横たはる四苦八苦の絶頂に立つとも、心常に軽安なることを得て、死もなを快樂に入るの門の如くに感じられ悠々生死の上に超然として活動することが出来ます。

と示されており、阿弥陀仏の大慈悲の力が「宇宙の大生命」と表現されている。「宇宙」という語句は西洋の

天文学が入る以前には無かつた筈である。又その宇宙に対しての觀念も、少なくとも維新以前の一般庶民には持ち得なかつたものである。明治・大正期に於ける教育機関の拡充によつて増加した知識者層が確実に定着した状態の昭和初期には、すでに多くの国民が、大まかではあつても宇宙に対する知識を持ち合わせつたあつただろう。目に見えぬ宗教的有り難さよりも、科学的知識に対して確実に信頼をよせている国民に対して、言葉を以て法を説く立場の布教師も、確実に納得せしめる事の可能な新しい表現を考え出さざるを得なかつたのであろう。譬喩においても、月かげのように、月の光を仏のみ光として譬喩に用いていた例が多かつた維新以前に対し、『點睛録』『五重講説』では太陽の光を譬喩に用いる例が目立つた。これも、月が自身で光を發しているのではなく、太陽光を浴びて照らされているに過ぎない事が周知されてしまった為に、月の光の有り難味が薄れてしまったからではないだろうか。世の人々が知識の増加に従つて、素直に法を受け取り

難くなつていく傾向にあつた事は、現代にも通じる問題であり、未だ確実な解決策は見出せていないのではなからうか。智海が阿弥陀仏の大慈悲力を「宇宙の大生命」と新出の表現で表すのにはこうした社会背景が理由として考えられる。現代の科学的知識を以てしても解明のし切れない人智の叶わない世界である「宇宙」と「生命」の語を、如来の働きの譬喩として新たに表現する目的は、科学を以てしても量れない世界と、浅はかな人知を以て量る事の叶わない如来の働きの世界を重ね合わせる事によって、確実に進みつつある宗教離れから起死回生を図る事にあつたのではないだろうか。

但し、これは『信法要決辨釋』での門が強調していた報身報土の阿弥陀仏から離れ、法身の阿弥陀仏へと先祖がえりしてしまう危険性も孕んでおり、これを参考とする場合はやはり、元祖大師の教説との一致を確認してゆく必要があると言えらるだろう。

### ③戦時的表現

法説ではないが、譬喩・因縁等に於いて戦時的内容の文章が多く見受けられる。

ア、『點晴録』に見られる戦時的表現

○国家・皇上・忠君・報国に関する表現

大和魂を所持し武士道を守り、忠君と云い、報国と、云う、同一人類にして、我國民は何故に斯る義務を負担せざるべからざるか (P432)

というような忠君・報国を強調するもの。又、「国家」「国家の体面」等の語句も目立つ。(頁数は『浄土宗教学大系八』のもの)

第二重の無余修の項では次のように、弥陀一仏を信仰の対象とする事と国家の祖神を敬う事との関係を、問答としたものが載せられている。

問ふ「無余修を厳守せば、余仏及び国家の祖神をも礼敬することあたわざるに至らざるか」

答ふ「礼敬と歸命とはその意地自ら別なり。余仏余



尊も衆生の先覚者として之を礼敬し、神殿・靈祠も国家的人道的觀念の下に之を礼敬するは固より敢えて不可ならず。唯、其の現在及び身後の救済的要求の為に帰命するに至っては弥陀一仏に制限せざるべからざる也。」(P478)

と、礼敬と帰命との違いとして解答している。又その譬喩として報国尽忠の節義をあらわすのは本属の天皇であるが、他国の王にも敬意を失してはならないとする。『點睛録』の指南書的性格から、呵成自身、こうした矛盾についての質問が拳がる事を想定していたという事が判る。

『點睛録』の流通分末尾には、五重相伝の者は次の「浄土宗信仰條例」を守るべし、として五箇條が挙げられているが、その第一には

一、教友は皇上の聖恩と、仏祖の慈愍とを思い奉りて暫も忘るまじき事。(P475)

とあり、仏祖より先に皇上の聖恩を配している。

○戦意を鼓舞する表現

第二重の「六重二十二件五十五の法数」についての譬喩として挙げられているのは兵法の陣の張り方である。

恰も陣を布くに魚鱗鶴翼の方あり。軍を行るに自ら知り敵を知るの術あることを解せしむるが如くならしめ、更に又願行具足の後に至りては、前頭の諸法皆な念仏の一法に決帰することを相伝すること、恰も戦略は交戦の初めに在り。其の最期の勝利に至りては突貫無念の刹那に在ることを悟らしむると相似たり。(P479)

又、二河白道の解説にて、白道を真つ直ぐに進む事を示して次の和歌を挿入している。

危きに 命を惜む武士の  
活きむとすれば死ぬるなれけり (P464)

第五重では「有間心」の譬えとして

露国軍の、露人、芬蘭人、波蘭人、猶太人等各種の

血族混淆して統一せざるが如し。(P470)

と述べてロシア軍を貶めるような表現を用いた後、「無間心」の譬喩として

大和魂の風化に統一せられたる吾軍人は、世界に於いて最も勇敢の名譽を冠せらるるが如し。(P471)

日本軍の兵士の統一を以て対比させる手法であるが、戦意鼓舞の意志が感じられる例である。

呵成が望月信亨ら数名と共に編集に携わり、毎月一

回発行していた雑誌に『宗粹』(後に『宗粹雑誌』)がある。

その別冊か、或いは特別号的な発行物として『宗粹法話』なる小冊子も存在したようである。明治三十七年発行の『宗粹法話』は、丁度日露戦争のさなか、翌年四十一歳で此の世を去る呵成が執筆したものである。

『點睛録』はこの二年後、呵成の遺著として発行(この『宗粹法話』の内容は詳細を載せないが、巻頭には大きく「恭賀戦勝新年」とあり、続いて「御製」として三種の和歌が掲載されている。「御製」とは天皇或いは皇族が

御自ら詠まれたとの意味である。いずれも仏教の教義を詠じたものではない。この一頁を見る限りでも皇上的精神を感じるものである。本編は六節に分かれるが、各節の小見出しだけを見ても

「人生は凡て戦争なり」

「征露は虎に騎るが如し」

などと戦意鼓舞的ものが殆どであり。且つ又、本文中には、「我神州」に「わがくに」とのルビがあり、日本は神国であるという皇上的表現も見られた。

『點睛録』が刊行されたのは呵成の没した翌年のことである。では執筆されたのは何時かというところ、中野隆元師の解説に「明治三十六七年より四十年代の布教革新時代を代表す可き好個のものである。」とある。呵成の没したのが明治三十八年十月である事と、日露戦争が同年九月の日露講和条約を以て終戦と考えると、執筆時期はかなり狭くなる。本文中に「我邦今や戦勝国として」と見え、ロシアの軍人を貶める譬喩があることから、執筆されたのは明治三十八年の可能性が高い。

であれば『宗粹法話』と『點睛録』はほぼ同時期に書かれたものと考えられる。だとすると当時の阿成自身の思想の中に皇上的精神があつた事は充分考えられる。その思想の中に、天皇と阿弥陀仏を同一視しようとする考えは読み取れなかつたものの、天皇崇拜の精神は、当時の一般国民と同様に持ち合わせていたと考えられる。

イ、『五重講説』に見られる戦時的表現

○国家・皇上・忠君・報国に関する表現

すなわち心の底に偽りのなき真心を捧げて一心国家の為に尽くす、その国の為に尽くす心、これが尊い当然の道と信じている。『われわれは身も心も時に命を捨てても尽くすという一心』尽くすが道と  
いうことを信じていること、この国を完全な国にしたいということは、みな籠もっているわけであり  
ます。それが一心即三心であります。(九巻 P88)

あなたにも立派なお父さんがあつた。『そなたが私の胎内にある時にお国のために名譽の戦死をなされた。』しかしながらお前の父は、よそのお父さんと違って名譽の戦死、本当にお国のために働いて尊いお体をお国に奉つた。

『五重講説』の中にはこのような「国家の為」、或いは「社会の為」といった表現が十数箇所に見受けられた。

また皇上的表現も

畏くも世々の帝の尊いご奨励のもとに『お仏壇を持つてゐるわけあります。(九巻 P88)

天武天皇陛下の思し召し(九巻 P77)

畏れ多いことながら明治天皇陛下はあくまでこの祖先を中心として、ご先祖祀りを明らかにあそばされましたお方でありまして『わが明治天皇』私ども  
しもの家庭におきまして、この大御心（おみこころ）を心と

して、節約質素の美風を養いたいものであります。

(九卷 P82)

また教育勅語を賜りました時、私は世界の偉人と仰ぎ奉る、わが天皇の大御心おほみこころから現れるご教訓で、我ら国民は実に満足である。(九卷 P83)

上天皇陛下が、いかに皇祖皇宗を大切にあそばしても下万民が、先祖などはどうでもよいということであつたら、大御心の苗を植えることはできません。

(九卷 P86)

など、『點晴録』と比較して格段に多い。更に、一ヶ所だけではあるが、第四重においては、昭憲皇太后と、皇太后自身がかつて指導を受けた盲目の琴の指導者おらくとの関係を、一方からは見えるがもう一方からは見る事の叶わない「片明り」として、如來と衆生との関係になぞらえて説いている箇所もあつた。皇族と阿彌陀仏のイメージを重ね合わせるものである。(九卷

P87)

譬喩として度々取り上げられる人物として、立場としては敗者であるが、天皇に忠誠を尽くし殉じていった、言わば皇軍の鑑として楠正成公、やはり政治的には敗者でありながら尊崇の対象となっている菅原道真公の二名が挙げられ、いずれも仏法を求めていた事を示していた。(九卷 P183)

○戦意を鼓舞する表現

信仰の姿を伝える譬喩等に於いて、その裏に戦意鼓舞のイメージが感じられる表現も多々見受けられた。以下はその例である。

信心の深い事を指して、

やめようとしてもやめられないまでに、一つ動かないところに信仰の定まるのが深い信、たとえば私にただ今実弾込めたピストルを喉に押し当てて念仏やめるかやめないか、と脅迫されてもこの信念を失つては、万劫未代助かることができません、

という確信のもとに、よしやこの場に殺されるとも、永遠に生きようとするのであります。(九卷 P288)

と生々しい。又、恭敬修の譬喩では、言葉を敬いを以て重く受け取るものとして、

これが上官の命令と敬い重んじて聞けばこそ壮士  
一度玄海を去つて後へ戻らず、白骨となつて帰つて  
くることができるのだ。(九卷 P266)

又、尋常行儀では、

どこで死んでも如来はお迎え下さる。どこで私が息  
絶えてもさしつかえがない、あんな汚い所で死んだ  
とか、あんな悲惨な誤つて木から落ちて死んだとか、  
あんな惨酷な汽車に轢かれて死んだというような  
ことがありまして如来は必ず助け給う。またどこ  
で念仏申してもよいのでありますから、最もありが  
たいものであります。(九卷 P112)

又、兜人形の経帷子と浄土宗の信仰を掛けて、

一体鎧というのは、死ぬのが嫌で着ているのである  
うか。もし死ぬのが嫌で着る鎧なら、死ぬことの嫌

な者が、どうして本当の戦争ができませんようか)

何でも如来さまの所へ参るよう、いつでも行ける  
ようにと着物を着ている。その腹が据わつてみれば、  
この体は一息でも、一分間でも大切に保護し、そう  
して戦う、これが軍人の魂である。死ぬのが嫌で  
着たのではない。鎧を着て尽くされるだけ尽くそ  
う、働けるだけ働こうというために着たのがこの鎧  
である。今浄土一宗もまたかくのごとし。真に生き  
る道が手に入つたならば、一日でも本当に寿命のこ  
の世にある間生きさせてもらう、それがためには  
一日でも体の肉を保護し生かし、病いに遇わないよ  
う、衰弱しないよう充分元気に、心の中には身命財  
一つも残さずに、生きてゆくという信念に住して  
下さる。これが浄土宗の信者、この意味において、  
この世の暇乞いができる。(九卷 P126)

との公案を臨終行儀についての譬喩で用いている。

第四重の二河白道の解説では、その行く先を明瞭に

すべき事を説く箇所に於いて、日清戦争中の竹本上等兵の例話を引き、彼がポケットに忍ばせていた一種の和歌

死なば死ね我が行く先は極楽よ

敵と味方を 道連れにして (九卷 P178)

を紹介し、同じ戦場で、幸いにして往生極楽の信仰を持つていた竹本上等兵が敵味方を隔てず、「如来さまのお膝下に道連れにして参ろう」との決意を示したと語る。「明治二十八年一月」と智海が外征軍慰問使として戦地に赴いている最中の事である事を考え合わせると実話だろう。

その他にも、仏壇に安置された像を真仏として受け取る事を「仮のものをおして、空のまことに入る」と示し、その譬喩に、練兵場の的を仮的とは思わず一心不乱に撃てば、百発百中となる事(九卷 P274)を用いるなど、現在では考えられないような表現が広範に涉つて散見された。

この『五重講説』が刊行されたのは昭和八年、満州

事変勃発の年である。智海は満州事変以前に日清戦争・日露戦争と二度の戦争を経験している。そのうち日清戦争開戦の明治二十七年には、外征軍慰問使として、日野靈瑞管長に随行し、荻原雲台と共に戦地に赴いている。智海満三十歳である。松浦行真著『伝弘の生涯——大僧正岩井智海伝』によれば、その任務は外地での戦没者法会と法話だった。智海の著書にその法話の時の様子が次のように記されている。

予は例に依つて先ず登壇す。活殺自在の法門を掲げて満腔の熱心を吐露す。説き来り説き去り、稍なほ酣なほならんとする途端、雷轟電撃の激響は空天を掠めて来り、此瞬間伝令騎兵は空を駆つて警報を伝える。予は砲声近きにあり、突進奮闘天晴大功名を立てられよ、健全にしてと勇ましく、説きつつ檀を下がれば、隊長は砲煙彈雨の中に活法を説く。(二道しるべ)

このように現前に弾丸の降り注ぐような場所で、今これから出陣して行く兵士達に対しての説法を行つて

いるのである。今現前で自分の説く法を聞いていた兵士が、亡骸となって帰って来る事も少なくなかったであろう。この経験は智海の宗教観に多大な影響を与えたに違いない。戦闘が収まった時、生き残った智海自身も、兵士達も、一様に「生かさされている」と信じなければ耐える事の出来ないような状況だった筈である。『五重講説』に於いて多数見受けられた「生かさされる」との表現、或いは「どこで死んでも如来はお迎えくださる」といった表現も、生々しい戦地体験から不幸にして培われてしまったものと言えるのではないだろうか。しかし、結縁五重の場に於いてこれを良しとするかは別の問題であり、結果的に受者を結帰一行三昧に導き得たものか、的門が強調してきた報身報土の阿弥陀仏や極楽浄土からは、ややもすると外れた受け取られ方をされる可能性も孕んでいると言えよう。

「親切」について

『五重講説』では第五重の結勸が「親切」という言葉

を通してまとめられている。

畢竟するところ、念仏者になるということは、親切な人になること、「親切は力なり」。

又その後には

「親切は即ち綿密なり」「親切は活動なり」

との標語的語句が並び、

この親切というものが、人としての通ってゆくべき大道である。それが如来さまに往くべきところの、導きである、道行きである。

阿弥陀如来の広大な慈悲を、あくまでわが心として、如来のお慈悲をもって国家に尽くし、世に尽くし、先祖に尽くし、子孫に尽くす。我も人も、慈悲の間に生きることをひとえにお勧め申す、お念仏をお勧めして、お念仏を申します。(九卷P277)

P278)

と結ばれている。

『信法要決辨釋』の結勸部分を見れば明らかなように、本来は日課勸奨を以て結ぶべき所である。「親切」と念

仏者をイコールで結ぶ事も不自然に感じられる。『五重講説』の時代背景から考えて、勸誡自体を監視されて

いた、或いは書籍として発行するにあたって検閲対策をしたのかと受け取れなくもないが、それは日課勸奨が国益に害を為すものだという場合の話である。実際天皇を侮蔑するものではないし、国家を貶めるものでもない。戦時下であつても問題のある発言とは思えない。

「親切」の語はここへ来て初めて持ち出されたものではない。特に多く見られたのは四重の二河白道の解説あたりだが、「親切心みちぬれば腹立たず」と度々見受けられたり、東岸の釈尊の声をこれほど親切な言葉はないとも表現している。

『五重講説』の中では、他に「教育」「修養」「道徳」「倫理」の語句が頻繁に見受けられた。このことは、智海の思想として戦時下の激動の時代を人心を乱さずに乗り切るには国民の人格形成を進める事が急務であるという認識があり、如來の慈悲を我が行動として働かせ

るといふ現世においての生き方の方針を「親切」と示したのではないだろうか。

(以上 八木英哉)

### 3. 邪義・邪宗についての言及

この項では、各勸誡録中に於いて、邪義・邪宗として言及のあるもの、或いは、その時代に於いて信仰の妨げとなると読み取れるものについて比較する。これによつてその当時の社会がどのような宗教的事情にあつたのかを伺い知る事が出来る。

#### ①「信法要決辨釋」

『信法要決辨釋』の中に於いて特に強調して度々示される語句として「正統」「正義」「正流」「正脈」といったものが挙げられる。叙説分二「安心相承制戒」の講説に於いて

元祖大師の御門下に、四流と分かれ（鎮西の聖光上人、西山の善恵上人、長榮寺の隆寛律師、九品の寺、覚明上人）この四流の中にて、鎮西国師正統を継ぎ、



三祖記主良忠上人に伝えたまう。記主禪師の門下に亦六派と分かる（白旗の寂恵上人、名越の尊観上人、藤田の性真上人、三条の道光上人、一条の礼阿上人、木幡の慈心上人）。白旗は所の名にて、白旗寂恵上人、その正統を伝持したまう。京都四箇の本山、関東の十八檀林は、皆白旗の正統なり。（P156）と白旗がその正統である事を明かし、

その正義相承に就いて、制戒を立てたまうに五箇条あり。これ皆正義を濫るまじき掟なり（P157）

と重ねてこの正義相承から離れてはならないとする。（百数は『浄土宗教学大系八』のもの）

さてここに於いて正統に対するものとして挙げられるのは、八宗九宗の聖道門と、先の四流六派の中「西山流」と「名越流」であり、

これ等は皆正統に非ず。両大師の御釈に違背すること多ければ、決して移るべからず。（P157）

と名を挙げて斥けられている。

又、難遂往生の機十三人の項にうち、「信心一ならず、

決定せざる人」に於いて、往生を遂げ難くさせる機縁として挙げられるのは次のように

やがて真言宗の説法を聞きて、兜率往生を願いにかかり、禪家の話則を信じて、見性せんと、坐禪をして見たり、或いは現世祈りに引き込まれて、前の飛石尤もと受けこんだり、或は神国なれば、神信心がよろしいなどというように、それへも、これへも心がつり（P181）

と信心の専一を妨げるものとして、真言宗、禪家、現世祈り、神信心の四つを挙げている。

「好んで雑縁に近づく人」では

念仏門の故実を知らぬ故、念仏は申しながら、天台の生なまがくしやう学生に出会い、称名は劣なり、観法は勝るといわれて、その説を肯いて念仏を止める。真言宗に出会い、念仏は螢火の光の如く、真言は日月の光明の如し。禪家に出会い、唯心の弥陀、己心の浄土、自己にあり外に向かつて求めるな。日蓮に出会えば、念仏無間といい、一念義は、申すは自力という。同

じ浄土宗でも、祈祷念仏を勧むるもあれば (P204)

と、聖道門の四宗、「一念義」「祈祷念仏」を挙げ、これらに乱動せられて往生を遂げ損なう事を戒めている。

「平生は極楽を欣求すると雖も、内心調わざるに由つて、臨終に狂乱する人」では、臨終の時、三心を退転させる機縁として、「御祈祷」「命乞い」「百日法華」の語句が見える。又、「臨終の時、忽然として悪知識に遇える人」でも悪知識として挙げられているのは「異学異見の人」として唯心の弥陀・己心の浄土を僻さまに解して説き立つる人、又は「百日法華」「禰宜」「山伏」「巫女」を挙げる。

又、「三重」の二祖伝燈分に於いて述べられる「末代念仏授手印」(以下「授手印」) 述作の来由では、「一念義の邪義」「小坂の弘願義」の名が見える。二祖聖光上人はこれらの異義が起るのを悲しみ、末代の模範とする為に「授手印」一卷を撰述されたと明かし、「吉水の正脈」「願行相統の正義正統」が今日伝わるのは、この「授手印」の範によるものとしている。この『授手印』

の大意を述べた「序」の解説の中で

大師の御在世既に爾り、御往生の後は、邪義の門葉はいよいよよさかり盛ん也。(P215)

とし、特にここでは「一念義」と「西山義」の二流を挙げ、「一念義」については元祖大師の一念義停止の起請文を引用し、「西山義」については

行者三心を発す時、弥陀の覺体、行者の行法たるを以て即ち心行具足し、往生を得るなり。

助け給えと思ふべからず。助かつたり南無阿彌陀仏と申せといふ。(P214)

を引いて、これらは正義正統に外れた「邪義邪構」であると指摘している。もし二祖国師の悲歎の御言を拝読しても尚、その尊信を肝に銘じない者は、願生の心なく「当来必定墮獄すべき人」であると厳しく戒めている。

又、二祖門下に於いても至誠心についての論争をきつかけとして師説を批難し、破門の後、長西の「諸行本願義」に身を投じ、二祖の義に異を唱えた「満願社」

の名も見え、「背賊」と記されている。(P215)

以上のように『信法要決辨釋』に於いて信心の專一に對して妨げあるものとして取り上げられているのは、天台・真言・禪・日蓮等の聖道門諸宗であり、又、邪義として特に數度に渡つて言及があるのは「一念義」「西山義」の二流である。これは裏を返せば「一念義」「西山義」が当時それ相應の勢力を持っていた事を示すものではないだろうか。

## ② 『點睛録』

『點睛録』の中で名を挙げて難じられているものとしては「一向宗」、具体的な名称は用いられていないが否定されているものは「多念主義を主張する者」「唯願又は唯行」主義の者であった。第二重に於いて「一枚起請文」「三心四修と申ことのく申す内に籠もり候なり。」引用解説の後次のように述べている。

然るに強て一向宗などに簡異せんとし、ことさらに安心沙汰を疎んずるの結果は、未だ安心も決定せざ

るものに對してすら、但し三心四修云々の文を妄用し、而も文字を曲解して安心無しの多念主義を主張するに至るものあり。已に文に決定して往生するぞと思ふ内にこもると云う、断じて「決定して思わざる」念仏中に「こもり候也」とは仰せられざるなり。淨土宗の正意は心行具足なり。決して唯願又は唯行にあらず。然るに心なき教化師は其の説教の傾向概ね唯行主義に流れ、徒に口頭の多念を貴んで信仰の厚薄邪正を度外とす。是れ日課念仏を唱うる口におんあぼきやべーろしゃのー」を誦し、阿弥陀如来の仏壇に於いて、大般若を繰らしめて更に憚らざる所以にして、其の信仰紊乱の原動は全く宗侶の責に存ず。豈に恐れて戒めざるべけんや。(P222)

『難遂往生機』の第五「信心深からず存するが如く」が如き人の項に於いて「余宗余縁」に誘入されてはならない事、「異学異見の徒」に耳を貸してはならない事が示されているが、具体的な名称は挙げられていない。同じく第九「好んで雑縁に近づくの人」では、や

や具体的ではあるもの

信心の節操なくして諛を有ゆる神仏に献ずるものあり、其の甚しきは素性明らかならざる天部や、愚人の唱え出せる神名や狐狸の類にまで信心の切り売を為して恥ざる輩あり。(P402)

との程度に留まる。これもこの後に続く文脈からして現世主義の「祈祷」や、迷信と正信の区別がつかない者への警告としての言及であらう。「深心」の段に於いても「迷信邪信雑信の類皆其の浅信を根底として萌生するなり。」として再び「迷信」を取り出している。根拠の無い「迷信」に惑わされる者が多く有ったことを示すものである。

又、宗教という枠からは外れるが、『點睛録』で信仰に反し、疑心を持つ人の代表として言及されているのは「近世科学万能主義」の人であり、その全てを猜疑の目を以て見ようとする事を批判して呵成は

事毎に実利上より算出し、且つ無神無仏聖を畏れず賢を敬せず。教祖の指南を冷笑し、先人の実験を軽

蔑し、其小理屈、小才知を武器として、法則道義を敗壞せざれば已むべからず。而も今や正に其行路に在り。実に塞心の至ならずや。(P432)

と嘆き、「科学の基礎の薄弱にして人智の舞台の狭浅なることを唱導し」「宗教の切要」を叫ばねばならないとしている。又、「青年男女の無信仰を実見しながら」とも見え、『點睛録』執筆当時(明治三七・三八年頃)既に、「科学万能主義」と青年層の「無信仰」が問題となっている事に注目すべきだろう。更には「科学万能主義」がもたらすものかと思うが、「宗教排斥論」との語句も見え、

他人の糟粕に依りて学位を買ひ得たるのみ何等針小の發明も無きに得々博士号を振り回し愚人の爲めに宗教排斥論を鼓吹する吾邦の小天狗連愧死すべきなり。(P435)

と厳しい語調で述べている。

又、キリスト教などの西洋の宗教について言及が無

いが、執筆の当時、正に日本は初の西洋の国との交戦中であり（日露戦争）、国内にもキリスト教信者は存在したであろうが、時局上そう表立った活動は出来ない情況だった筈である。そうした背景から言及されなかつたものかと考える。

### ③『五重講説』

次に昭和六年刊行の『五重講説』に見える邪義、或いは浄土宗の教義信仰に於いて妨げとなるものへ言及を挙げる。

『五重講説』において邪義邪宗との語句は見られないが、いくつか他宗派についての事例が述べられている。ひとつは恐らく「浄土真宗」の教義との差異を指すものと思われるが、

浄土一宗では安心一つだけで参る極楽ではなく、と  
 いて称えるばかりの行で極楽へ行くとも言いま  
 せん。行の宗旨でもなければ信の宗旨でもありません。全て浄土一宗は信行一致、願行双修の宗教であ

ります。(P290)

一般的に浄土宗の教義が「信」或いは「行」いずれかに片寄った宗旨であると誤解される傾向があった為の言及であろうか。心行具足との表現を用いて、呵成と同様の指摘をしていた。

又、「安心」の解説に於いては、坐禪の利益は厚いと  
 言いつつ妄想妄念にとらわれ、定の一心に住する事の  
 出来ない人の例が一箇所見受けられた。

他宗についてはもうひとつ真言宗の例が挙げられて  
 いる。新高野山の梵鐘を新鑄する場に立った時、真言  
 僧が『大般若』六百巻を勇ましく読むのを見て、智海  
 自身も念仏よりもそうした功德を積んだ方が満足出来  
 るのではとの思いを持った事があったそうであるが、  
 この時ある先輩の徳者から「一念大利無上功德」或い  
 は「阿字に十方三世仏、弥字に一切諸菩薩、陀字に  
 八万諸聖経の功德が収まっている」とのお叱りを受け  
 たとの因縁話がある。

四重「三河白道」の譬喩に於いて後戻りを勧める異

学異見別解別行の人についても

こういう尊い姿をなされた、歴々の立派な人たちとしてあり、その解説でも

これは私どもが五重を受けて、熱心に生活を続けて、真に如来さまのお慈悲の中に進んで行く間には、すなわち念仏をお勧めくださるようなご縁に遇うことよりも、手から数珠を取られるような縁に遇うことが多い。後ろへ引き戻されるような、縁に遇う事が多い (P252)

とだけあって、「異学異見別解別行」の言葉自体用いず、ただ信仰を退転させるような「縁」とのみ説明している。以上のように『五重講説』の中では邪義・邪宗という言葉を用いて批難するといった形での指摘は見られなかった。浄土宗の中の邪義についても言及は無い。他宗派の例が数箇所にあるものの、批判・批難というよりは比較によって浄土宗の宗義を、より明確に伝える為の一つの手法である。「二河白道」の中、一つことを繰り返し述べてわがものにする事の譬喩にも「弘法大師

の一字は天下の宝であるように」とあるように、他宗排斥の姿勢は見られない。

キリスト教については言及がない。岩井師自身がかつて聖パウロ学校(後の立教大学)や大阪の英和学舎の、今で言う「ミッシヨン・スクール」に通った経歴の持ち主である事に起因するのもかも知れないが、やはり言及が無い。全編を通じて他宗派・他宗教を攻撃するような内容は見当たらなかった。

他宗教・他宗派に関しては以上のようなのであるが、当時の社会状況や一般檀信徒の信仰の有り様についての言及が見受けられるので、参考までに挙げる事にする。初出の社会的問題は「自殺」の問題である。この勸戒の時点で年間一万人の自殺者が出ていると言い、精神病院は患者数が多すぎて収容し切れない状態になっていると言う。特に自殺については三箇所と言及が有った。

次には、社会の変化に伴う信仰の姿勢の変化である。

二重「廻向発願心」の解説には、「廻向」が既に、自身の積んだ功德を振り向けて往生を願うという所から離れ、亡くなられた方への追善廻向の意味合いの方が一般的に浸透してしまっている状況が示されている。又、

何もかも死を通した問題にしてしまつて、私どもが現在やっていることが、ことごとく死を通しての問題、年回、法事、追善、建夜、祥月命日、盆、彼岸、施餓鬼、葬式、実に死せるものを慰めるために、寺をあげて私どもが一生を働いているようなありさまであります。(P48)

仏壇や先祖の祀りについても

現代は先祖祀りということは国民全体を通じて二通りに思想が分かれる。一つは先祖は大切に祀るべきものという考え、二つには先祖を祀るなどということはどうでもよいそれは過ぎ去つた過去の話、こういうことで先祖などは祀らないでもよいという思想の人もたくさんあります。(P66)

仏壇に参らないほうが見識が高い。文明人である。こういうことに、だんだんなりつつある。(P72)

絵像木像など祀るといふことは、これは一種の偶像であつて、そんなものに頭を下げるものではない。万物の霊長たる人間がいやくも木や石に頭を下げるという法はない。こういうような考えになつておるのが今日のありさまであります。(P70)

或いは寺院に於いての説教や修養会への参加者の減少が顕著である事などを挙げて世状を憂いている。

名を挙げて邪義や邪宗へ移ることを戒めるのは、一方で相手側がある程度の勢力や教化力を持つてゐる事への危機感から来るものと考えられるが、ここにおいて岩井師が危機感を覚えたであろう事は、時代の変化と共に急速に進行した「宗教離れ」や人心の変化である事が判る。昭和初期に於いては邪義邪宗よりも、止められない「宗教離れ」の方が危惧の対象だつたものと思われる。(以上 八木英哉)

#### 4. 各勸誡録にみられる譬喩の変遷

この項では、各勸誡録にみられる譬喩の変遷に注目していききたい。譬喩とは法を説くに当たって、教的内容を身近にある題材に置き換えて、聴衆の理解を得る工夫である。説かれる法そのものは、時代が変わっても不変でなければならぬが、譬喩こそは時代と共に移り変わってゆくものであり、それこそが説教師の腕の見せ所であるともいえよう。

特にこの三師の勸誡録の説かれた時代背景をみると、各々わずか三十年程度の年代差しかなくとも、その譬喩に用いられている題材は、全く別個の色あいを示していて非常に興味深い。

しかしながら、三師ともに五重勸誡において説くべき肝心の法説部分に関しては極端にぶれることはなく、その表現方法が若干変化しているに止まる。ただ、結帰一行三昧をその時代ごとに合わせ、いかに解りやすく伝えるか、その苦心のあとが巧みな譬喩によって浮

かびあがってくるのである。

##### ①『信法要決辨釋』にみられる譬喩

まず『信法要決辨釋』は明治三年の稿本であるが、内容は近世後期に盛んに行われていた結縁五重の形骸化を糾すべく模範勸誡として隆円、法洲が提示したものを正統に受け継いだ説教内容である。譬喩も祖師方の書に出てくる譬喩をそのまま引用した伝統的なものが多い。また近世の民衆生活の中に題材を探したものが目立ち、特に食物の譬えがよく見受けられる。

また『選擇本願念仏集』三章段の「屋舎の譬え」のように、建築物の構造に譬える用例は伝統的な譬喩であるが、隆円が『浄業信法訣』で「東寺八坂ノ塔モ、五重ナレバコソ五重ノ塔トハ云へ、若シタダ一重ナラバ五重トハ云ベカラズ」と、五重伝法の骨格を建造物に譬えたのに対し、的門はここでは「本堂建立の爲、三心の地形、四修の礎、五念の柱立、五種正行の棟梁、三種行儀の敷居鴨居、その外とも仕上げ成就の上は、



唯本堂とばかり言うが如し」と、結帰一行の譬えに用いている。

「二河白道の譬え」は、向阿証賢の『西要鈔』をそのまま引用し、詳細に解説を施している。

以下、特徴的な数例を示す。(頁数は「浄土宗教学大系八」のもの)

○懺悔礼拝により身を清浄とす。

↓清き菓子類も、菓子鉢に垢穢不浄あれば、味わうに及びがたく棄捨すべし。↓それ伝法は上味の菓子の如く、この身は鉢器の如し (P174)

○浄土の法門は義なきをもつて義とす。

↓蜜や砂糖の口に甘きは常食とはならず、又支体を養わず、飯の各別の味なきは、朝夕食して飽かず、支体を養うが如し。浄土の法門、義なき義とし。様なきを様とす (P154)

○機 ↓疾前無業というて、疾の無きには薬も入用でなし、疾ありてこそ薬も入用なるが如く、疾の品に依つて薬の差別あるなり。↓これ機なければ、法ありて益なし。この故に先ず往生の成る成らざるの機類を挙げて相伝したまうが、この初重の相伝なり。(P173)

○難遂往生の機・第四↓問祖これを喩えて、泊まり定めぬ船の如しとのたまえり。各々この所を我が身に反照して、能く思熟せらるべし。たとえこの人の如く、厭い果たせた所が、岸を定めぬうかれ船、往生は出来ぬ道理なり。(P178)

○難遂往生の機・第五↓問師はこの機を三心未具と判じ、波の上に月を見るが如しと喩えたまえり。総じて世間の人が信と不信と疑とを取り違えているが多い。喩えば紅葉は赤いというを聞きて、赤いといわるるからは、赤に違ひはあるまい思うは信なり。赤くはあるまい黒いであろうと思うは不信なり。赤いといわるる

が、誠に赤いかしらと思うが疑なり。(P180)

○難遂往生の機・第六↓徒然草にも、仏壇に仏の多きと硯箱に筆の多きとはよからぬものと諷諫せり。(P181)

○五種正行 前三後一↓称名正行は、本願正因の正定業なれば、喩えば白飯の如し。前三後一の助は、汁菜の如し。今助正という時は、五種が一人の行にして、前三後一の助は、菜飯、茶飯、小豆飯、大根飯の如く、各々回向の塩加減が入用なり。第四の称名正行は、白飯の如くなれば、別に戒行等の塩加減を用いず、手のくぼ茶漬けと心安くく四威儀の乱静をいわず、日々相續して、白飯を飽か<sup>ゆる</sup>如く。(P221)

○三心の意義↓喩えば五穀の種子の因に、水や土の縁が具すれば、必ず芽を生ずるなり。その行者の内因とは、この安心の三心と起行の念仏の二つなり。外縁とは、本願なり。(P222)

○尋常・別時行儀↓それ平生食時に飯を喰うにも行儀ありて、随分に礼儀正しく喰うべき事勿論なり。されども<sup>しそがし</sup>閑亡時、或は火事場等で行儀沙汰しては空腹は凌げぬ。立ちながらも喰い、裸身でも喰う。く一時煩惱百千間の甚だ<sup>いそが</sup>聞き凡夫にて瞋恚の火事場、貪欲の大水、愚痴の夜中の真闇がりく本願の飯にしがみつき南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と連々に滅多食いく(P215)

○結歸一行↓膳部の喩え (P254)

念仏 ↓ 飯

三心 ↓ 汁

五念 ↓ 平

四修 ↓ 猪口

三種行儀 ↓ 坪

○結歸一行↓印籠の喩え (P254)

三心 ↓ 印籠

五念 ↓ 打紐

四修 ↓ 緒占

三種行儀 ↓ 根付

念仏 ↓ 良葉

○結婦一行↓喩えば本堂建立の為、三心の地形、四修の礎、五念の柱立、五種正行の棟梁、三種行儀の敷居鴨居、その外とも仕上げ成就の上は、唯本堂とばかり言うが如し。(P254)

○三心具足↓(『和語燈録』)喩えば葦の茂き池に十五夜の月宿りたるは、余所にては月宿りたりとも見えねども、よくよく立ち寄って見れば、葦間を分けて宿るなり。妄念の葦は茂れども、三心の月は宿る也。(P273)

○二河白道↓『西要鈔』が至って約なれば、今その大意を撮要して弁示せん。(P275)

東↓娑婆、西↓極楽、火の河↓瞋恚、水の河↓貪欲、

白道↓願生の善心、長さ百歩↓一期百年、

闊さ四五寸↓有るか無きかの願心、群賊悪獣↓愚痴

群賊↓五陰(色受相行識)四大(地水火風)、

悪獣(虎狼狐狸) 毒虫(龍蛇蜂蠍虻百足) ↓十煩惱

または 異学異見、別解別行(四重の破人)を悪獣毒虫に喩う。

東に人の声↓釈迦の発遣、西より呼ぶ音↓弥陀の招喚

○在心↓(『往生論註』千載闍室の譬え)譬えば戸閉じて、千年も真闇なる家なりとも、若し戸を開いて日輪の光を受くれば、忽ち明朗なるが如し。五逆罪は闇の如く、念仏の功德は日輪の光の如し。(P299)

○在決定↓(『安樂集』)譬えば百人集まりて、日々に薪を伐り積むこと百年ならんに、人有って豆計りの火をその中に投ずれば、半日の頃には焼尽するが如し。

凡夫多劫以来、罪惡の柴薪を伐り積む事、獄山の如しと言えども、本願六字の名号、一念十念の豆計りの智火を投ずる時は、あらゆる罪薪、即時に灰燼す。(P301)

○本願念仏の不思議↓凡そ世間の浅近なる人間の業にすら、猶奇々妙々なること数多あり。或いは麦を醸して甘美なる地黄煎と為し、或いは米を醸して酒となし酢となす等。又、竹を作為して笙、横笛、ヒチリキ、尺八、ヒトヨギリ種々の妙音を出し。(P305)

○十念というは業事成弁を明かす↓世間に五百両の借金ある人の、四百両までは償うといえども、尚、百両の残金あり。その残金ある間はその身自由ならず。その残る所の百両金を償い畢りぬれば、その後は身も自由なるが如し。今も九念までは余罪あり。故に無間地獄の借金を尽くさず。然れば則ち五念にても八念にても、その数には依るべからず。罪人の罪業の借金尽くる処が業事成弁なり。(『往生論註』) 喩えば蠅蚋

という虫が、春の秋のと知るでは無い。春出て秋鳴くとは、春秋を知った人間のいうことなり。(P309)

## ②『點睛録』にみられる譬喩

次に『點睛録』は、幕府の崩壊、明治政府の誕生とともに、文明が著しく西歐化、近代化した直後の勸誡(を想定して書かれた)書であるため、際立つのはやはり譬喩の題材であった。特に意識していると思われるのは、明治五年に発布された学制による国民皆教育であろう。近代科学知識に新鮮な驚きを得た一般大衆に対して、その知識を譬喩として用いる事が有効と考えたのではなからうか。例えば、第五重における在心の勸誡で、伝統的には『往生論註』に見られる「千載闇室の譬え」が用いられてきたが、それを「湿菌の日光に蝕るれば直に崩壊するが如し」と科学的題材に置き変えている事などが興味深い。

また、西洋哲学の新しい思考法に対する防衛策として、理論武装が必要と考えたのか、執拗なまでに西洋

哲学者の言葉を譬喩に引用し、旧来の浄土教学にも矛盾の無いことを強調する。

以下、特徴的な数例を示す。(頁数は「浄土宗教学大系八」のもの)

○懺悔↓清水を汲みて一瞥すれば清微塵を見ざれども、之を顕微鏡にて試験する時は、如何なる名誉の井泉も、<sup>ばいじん</sup>微菌昆虫群生して、その醜穢見るに堪えざるものなり。人類に対し宗教の浄玻璃鏡を掲ぐれば同一結果なり。(P381)

○三宝帰依、仏陀と共に共存の天地に入る↓路に迷へる小児の父母の家に還りたるが如く、小資の商人の大なる会社に擢用せられたるが如し。(P383)

○宗教の価値↓  
ピスマルク曰く「予の老いて激職に堪え得るは宗教の安慰あるによる」

アリストール曰く「天を敬はざる精神は勇氣無き精神なり」

ベーコン曰く「人も信仰心あれば人性以上の勇氣を得べきなり」

カント曰く「最高の善は、心性の不消滅を想定したる心にあざれば存在せず」(P384)

○難遂往生の機・第一 驕慢↓邪氣は物の充満せる所には入ること克はず。常に虚隙を伺ふて之に乗ず。心に勝他貢高の情を懷かば、日々千遍万遍の念仏も一々虚隙あること軽石の如く。(P396)

○厭離穢土↓ショッペンハワー曰く「生活するといふは欲望なり。欲望すとは欠乏を感じる事なり。欠乏を感じるは苦痛なり。故に生活するは苦痛なり」(P397)

○厭離穢土と処世生活↓厭離穢土とは、単に現実生活と地上の幸福のみに満足せざるの謂なり。→現実生活

以上、精神的平和の生活を求め、地上の幸福以外、心靈的高尚の幸福を欣ぶを厭離穢土と云う。(P399)

○愚鈍第一 ↓

ペーコン曰く「少し哲学を学べば宗教を排し、多く哲学を学べば宗教を信するに到る」

ホップス曰く「教法は丸薬の如し、丸吞にして噛み碎くべからず」(P406)

○称名の功德 ↓ 恰も、乳児の母の乳をのむや、もとより化学的分析の説明を要さず、身体の栄養となすが如し。又、小児が父と呼び母と呼ぶ簡單なる一語中、如何に無量の意味が含有されつつあるかを思へ。(P412)

○念仏は情にありて理にあらざ ↓ 西洋にて或る生物学者はミミズの研究に二十余年を費やしつつありと云う ↓ されば日常些末の事物すら到底信仰を離れては存用すること能わず。然るにその遙かに地上の生活と、幸

福以外に属する宗教に対し、教祖の宣説、先人の実験を軽視し、理屈を以て事にすることに解釈を得んと欲するは根本的に誤れり。(P416)

○信仰は最初が大切 ↓ 肖像画を描くに色彩光線等の過誤は後に筆削自由なれども、其の下画の曲れるは到底正すべきこと難し。人も成長後の悪習は改むべし。(P418)

○心行具足 ↓ 三心は行人の内因にして、本願は教主の外縁なり。内因、心に熟するもの表に発して念仏の声となる。(心行具足するときは、鉄と磁気との相感じ、月と潮流との相引く如く)もし亦、内因、心に熟せざれば、たとえ百万の称名を重ねと云うとも唯是れ蛙鳴蟬噪の類のみ。(P420)

○信機 ↓ 人生三天問題たる「我何れより来る」「我何の為に生活する」「我終に何くして逝く」と云う事の解決は

（現前の事実）に立脚して起こりたる信仰は確固たる根拠あるを以て異縁に会するも乱れず。未知未見の過去世の罪惡や未だ試みざる未来の墮落の如き仮定的事実の上に信仰を建立せんと企つるは、例えば、砂上に樓を築かんとするが如し。（P429）

○近世科学万能主義の弊害↓近世科学万能主義の一時世界の大勢を支配してより、疑心増の衆生の増加發生すること、新緑の毛虫の如く（P431）

○科学と宗教↓宇宙の不可解の事を以て充て、すなわち人智の有限不完全なる証明なり。くみだりに分外の所に鍬を入れんとはせず、學術の範圍として之を研究し、宗教は宗教の画線に従つて信奉するなり。

ニュートン曰く「吾が此の身が世間に如何様に現るるかを知らず、されど吾自身の眼には、吾は海浜に遊べる児童が、僅かに滑なる礫石、美しき貝殻の一片を拾ひ集め居るが如く感ずるなり」（P434）

○念仏は様なきを様とす↓（單純の中に複雑一切を包める意）彼の白色は無色なりと云うは是れ、只肉眼を以て非科学的にしばらく仮定するのみ。その実、青黄紫赤七色の融合するもの、即ち白色とは無色にあらず、七色の和なりと云うべきのみ。七色を円盤に画して迅速に回転すれば白色に化し、太陽の光線を尖りガラスに映ずれば七色に分解し得らるる事は誰しも実地に驗知する所なり。（P446）

○懺悔↓南無阿彌陀仏と称えて、其の心地を仏の光明中に安ずれば、仏徳冥加して精神自然に清浄となる。例えば汚物を執りて、太陽に曝せば、黴菌ばい菌自ずから温熱に由りて消散するが如し。（P449）

○大光明中に魔事なし↓近世もつとも進歩したる學術の實驗する所にして、その快活満足の感情は血液の中に一種の興奮劑を醸し、憂鬱不平の感情は血液中に一種

の毒物を挑発すゝしかるに造罪の記憶を仏前に表白し、至心に懺悔して心地を一洗すれば、身は重担をおろして起居自ずから軽安となり、快活と満足との感情、全身に充つる。(P452)

○ポールロワイヤル曰く「われ善を行わんと欲する時、悪の我に居る事を知る」(P453)

○ロングフェロー曰く「昼間、目を眺めて其の要を認めざりしが、夜に入つてより其の光明の貴きを知る」と。  
○如来の光照↓水、若し太陽の光熱に触るる時は、如何に洋々たる千里の大江も縹渺として水蒸気となり、天空に蒸発するは、これ優勢なる如来の他力、万機を論ぜず、その光明界に摂取したもう適例。(P460)

○厭離穢土↓

ピスマルク曰く「予が一生中、真正に幸福感ぜしは僅々二十四時間に過ぎず」  
ウィクトルユゴー曰く「最も栄華なる人の生涯にあり

てさえも、常に歡樂より悲哀の多きを見れば、曇天は吾人に恰好なるものなり」(P452)

○二河白道↓この時、東岸より声あり 茲に小兒の踵いて額上に瘤を生ずるあり。その疼痛に堪えず、声を放つて号泣するを、父母は慰諭して曰く、瘤は已に癒えたり。痛は已に去られたり、泣く泣かれと。小兒は慰諭に遭ふて忽ち其の啼を止むれば、幾くもなくして瘤もまた真に癒ゆるなり、痛もまた真に去るなり。  
↓ 仏と吾等と心靈感応するときは、貪瞋の瘤も痛苦を与ふること克はず。(P461)

○在心↓罪惡はたとえ、其の外形著大なりとするも、其の實質は不安の情と俱起するが故に、極めて脆弱なるものとす。之を例へば、混淆質の鉱物の如し。若し多方面に於いて良心善業の勢を示すあれば、忽ち其の打撃を受けて原形を失ふ。之を例せば、湿菌の日光に触るれば直に崩壊するが如し。(P468)



○在縁↓茲に二顆の果実ありとせんに、その一顆は極めて悪質にして、その一顆は極めて美質なり。然るに園丁、悪質の果を瘦地に植えて而も更に培養に勉めず。美果は肥地に種えて灌漑施肥の功を尽くすとせば、その結果如何く答へを俟たずして知るべきのみ。(P469)

○有間心↓有間心とは、造業の間に、余念余想を交ふることにして、一致の欠けたる不堅実の精神なり。例せば、ロシア軍の、ロシア人・フィンランド人・ポーランド人・ユダヤ人等各種の血族混淆して統一せざるが如し。↓所作に油断ありて必死的の勢力に欠乏するなり。(P470)

○無間心↓無間心とは、両者の中間に余意異心を挿まざるなり。自己の精神に就いて云はば、前心後心一致を保つなり。↓例せば、大和魂の風化に統一せられたる吾が軍人は、世界に於いて最も勇敢の名譽を冠せら

るが如し。(P472)

○五重の総括↓ヒレモンと云へる賢者、常に人に訓へて曰く、「汝は人なり、常にこれを考へて忘るるなかれ」(P473)

○五重の総括↓佐藤一斎曰く「聖人は猶、赤カツバの如し。胸に一つの締めりだにあれば、全体は只ふわふわとしながら、終に体を離れず」と。(P473)

○信者の処世術↓信者の処世、之を水車に喩ふべし。車の全分、水に入れば流れて用をなさず。又、全然水を離れては回り難し。半ば水に入り半ば水を出て、入る部分は流れに従ひ、出づる部分は水に逆ふて水車の用を遂ぐ。信者の世に交りて処世の務に服するは、其の水に入る部分なり。併しながら信念ありて世の邪惡に深入りせざるは、水を出て流れに逆へる部分なり。(P473)

③『五重講説』にみられる譬喩

吉岡呵成と岩井智海は同世代の人間であるが、この二冊の勸誡録は趣がまるで異なる。その理由としては、

『點睛録』が呵成四〇歳（明治二八年）の草稿であるのに対し、『五重講説』は智海晩年（昭和六年）の勸誡であり、その二十数年のギャップこそ、とりもなおさず日露戦争勝利による日本の急速な軍国主義化の影響に他ならない。前線での慰問布教をしてきた智海が、その経験から表れた譬喩を多く用いるのは当然であろう。また全体を通して、勸誡内容の大半が譬喩として構成されている事も、智海の布教の特徴であると思われる。

以下、特徴的な数例を示す。（頁数は『浄土宗選集』八・九巻のもの）

○弥陀の救い↓歴史的に眺めてみたならば、太陽というものは何十億年の歴史をもっている古いものであります。しかしこれに直接し直感してみれば、太陽は

昔の太陽ではない。〜今われらは現実に太陽の光明の中に活動させていただき、太陽の温かい光照の恵みに育つられ〜（P194）

○往生の意味↓往とは「往く」であります。人の思想の中で往くという思想は最も元気の強い、しかも希望に輝いた世にいう澆刺とした飛び立つ勢いを持っております。〜（競馬場では）出発の合図の時を待たんとするのに、馬それ自身も競争心強く起こるものとみえまして〜あの往かんとする元気、その元気な勢いは何ともいえない胸のすく心持ちがするものであります。（P249）

○往生の意味↓（生という字は）生きんとして木々の小枝に至るまで我劣らじと芽を出しているのではありません。小さな麦の一粒をとりましても、〜天地の大生命がこの一粒の麦の中にも宿って生き生きとする勢いを我らは見ます。そうすると、往生という言葉は、実に

これほどまず人間の元気を表した言葉はないと言って  
 もしかるべきでありましょう。(P250)

○還愚↓消極的に罪の消えるほうの心得には、お薬を  
 頂く心持ちでお念仏を申す。↓ただ薬学博士は、こう  
 という病いはこういう薬で助かるということを知ってい  
 るだけで、飲まなければその病気は救われぬ。(P263)

○還愚↓積極的に我らが力となり、我らが生きてゆく  
 信仰の営みを勧める方には乳を頂く心持ちにたとえる。  
 ↓母の体内から分泌して子供のために乳となる。いろ  
 いろ解剖して分析してみると、これこれの滋養分があ  
 る。その滋養分を子供が頂けば子供の胃の腑で消化  
 され肉となり血となる。わけわからずに飲んでおる。

(P264)

○観察正行↓(貧乏学生が)しばらく手を組んで目を  
 閉じておりますと、思わず故郷の父母、里方の模様が

見えてくる。〔両親が自分の卒業を待ちかねている。  
 苦勞しているということが心に浮かんできます。〕下  
 手にまごついた勉強をしてはならぬというような  
 心が内に起こってくるのが、常識的に申す観察正行で  
 あります。(P356)

○一心即三心↓たとえてみれば、一心国家のために尽  
 くす、この一心国のために尽くすということが、すな  
 わち三心ということができるのであります。一心国の  
 ために尽くすというのには、真実私の止むに止まれぬ  
 大和心、すなわち心の底に偽りのなき真心を捧げて一  
 心国のために尽くす、その国のために尽くす心、これ  
 が尊い当然の道と信じている。そうしてどうかこの国  
 を永遠に栄えさせてゆき、安全に安全にと進ませてゆ  
 きたいというために、われわれは身も心も時に命を捨  
 てても尽くすという一心、そうすると一心という中に  
 まことをもって尽くすということと、尽くすが道とい  
 うことを信じていること、そうしてこの国を完全な国

にしたいということは、みな寵っているわけでありませぬ。それが一心即三心であります。(P19)

○至誠心↓資本金がなかったら自分の腕を現わすことができませぬが、もしその人にして本当にまことの心があったなら、いかなる資本金も出てくるであろうと思う。→確かにまことの人ならば、裸一貫でもそれだけの力さえ持つておつたならば、自由自在に天下の資本金を動かしてゆくことができる、ましていわんやまことというものは実に天下を動かす、神仏を感応せしむる力がある。(P18)

○様なきを様とす↓念仏というものはちょうど水のよくなもので、ことさらに味わいのあるものではございませぬ。水というものは甘からず酸からず、辛からず、苦からず、飲んでみれば何ともないもの、お念仏もまたちようどそのとおりで、いつでも同じこと、どこで称えても一つこと、別に飛び立つような味わいのある

ものではございませぬ。→そんなら味がないかということ、甚深微妙の法悦に→色どりのないところに値打ちがあるのじあります。(P21)

○深信↓日清戦役の当時、平壤の攻撃に三面からわが国は軍を進めております。→いつの何時に各隊がどの辺まで進むという順序が立ててあります。そこに一つの疑いもなく、あの困難な中で前面の敵を追い払い、是が非でもある時日にある予定の地点までみんなが進み、揃つて平壤攻撃を始める。こういうところが相方互いに信じて疑わないところです。→その疑わず信じてゆくとところに、→わが国が大勝利を得たわけでありませぬ。(P29)

○往相回向・還相回向↓たとえますれば、私はどうかして国家のために教育に従事したい。それについては私が師範学校に入つて、どうかひとつ立派な人格を具えて人を教育するだけの器になりたいというのが往相

廻向、立派な人格が具わり立派に卒業したら還つてきて  
 孜々汲々と国民を教育してひとつあらゆる人物を国  
 家にこしらえてみたい、これが還相廻向であります。  
 財産を作つてみたいというのが往相廻向、財産ができ  
 たらひとつ社会のために大いに働いてみようというの  
 が、すなわち還相廻向ということであります。(P16)

○回向発願心↓たとえてみますと下関から朝鮮釜山行  
 きの連絡船に乗ります。上には帆柱に上つて猿のよう  
 に働いておるのもあれば、谷底のような船底に入りて  
 火をたいて働いておる者もある。くおのおの異なつた  
 持ち場持ち場の目的を持っております。けれどもその  
 船員の職分が全部一致しまして、何のために働いてい  
 るのかといえば、この船をしてどうぞ釜山の港に着け  
 たいことごとく釜山の港に行こうとする大目的に統  
 一いたしております。私どもの一切の行為はただ往生  
 極楽のため、あなたのお膝下に参らせていただきたい。  
 ここに大理想を置いて我らは生きた人生を進んでゆく

のであります。(P17)

○領解↓たとえてみますと畑の野菜、これを歯で噛ん  
 で舌でまるめて、唾液を充分に混ぜてそうして喉を通  
 す。胃の液で充分胃液と運動とによって消化し体中に  
 分泌する。それが血となり肉となる。よく話がわかつた。  
 よく話を聴くということが一番必要かどうか縁を求め  
 て正しき教えをよくお聴きになつてよく領解する。そ  
 れはちようど歯で噛んで充分に噛みこなしてゆくよう  
 なものであります。(P15)

○懺悔↓(国家衛生法による掃除の監督官に対し)こ  
 れはもう掃いて拭いて綺麗です。その掃いて拭いては  
 よいが、外へ担ぎ出して日を当ててくれたか、それは  
 もう掃いて拭いてありますから。それじゃいかな  
 外へやはり出して干して、はたいてくれないと困る。  
 しつこい厳しい試験官だな。ぶつぶつ言いながら畳を  
 外へ担ぎ出し、鞭当てて打つてみると、掃いて拭いて

奇麗な畳の中から、もうもうと塵が出てくるのであります。これを二段の掃除の警えと申します。(P181)

○二河白道↓北の方に水の河を置き、南の方に火の河が置いてあります。この北といい南というのはなぜ水の河を北に置いたか、なぜ火の河を南に置いたか。これは陰陽の警えであります。(P189) 〽北の方を陰氣にたとえ、南の方を陽氣にたとえまして (P190) 〽それから水を欲にたとえて、火を腹立つということにたとえましたのは、水は溜まる、それに毒水もたまれば匂いの悪い水も溜まる、また水晶のような水も溜まる、それで欲を水にたとえ (P191) 〽それから火というものには焼き亡ぼすものであります。すなわちこの腹を立てるということは破壊力を持つものでありまして (P193)

○二河白道・黒雲は痴の喩え↓あるいは黒雲を画いて、愚痴を自然に示しているわけであります。(P242)

○二河白道・一声一声に歩む↓汽車の列車を動かすのは、一つの車の輪が一つの列車を動かす力を持っている。一遍でよいのではない。一遍で動かす力のあるものを、もっと相続して行って、東京から大阪に列車が進むことができるように、一つ一つの車に、一遍一遍その箱を動かす力を持っている、あの力であります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称える一声一声に、我を救う力があるのであります。(P248)

○今現在説法↓如来のお膝下には常住現、常に始めもなく終わりもなく、今日も現に説法なされる。来去年ということは、人間同士のいうことでありまして、太陽には去年もなく今年もない。夜とか昼とかいうことも、地球上でいうことで、地球がぐるりと廻って太陽に背けば夜となり、太陽に向かえば昼となるけれども、太陽には夜も昼もない。去年もなければ今年もない。元日もなければ晦日もない、いつもいつも、太陽は常

住現であるように、阿弥陀さまも常に在して、我らを光明あまねく照らして救わんとなさっているみ仏である。(P253)

○懺悔↓罪の消えるということ、すなわち茶碗を洗うにたとえるのです。茶碗というのは、垢がつきごみがつくと働きを失います。たとえ何万の金をかけた、結構なお茶碗でも、ごみだらけでは、用いられません。人間もまたちようどそのとおりで、どんなに学問があり、天才があり、働きがあつても、あまり悪いことをしてくると、それを用いることができません。そのお茶碗を、洗い清めて拭きますと、元のとおり、茶碗は茶碗の働き、値打を現わしてくる。(P269)

○懺悔↓浄土宗におきまして、如来大悲のみ救いのおえにおいて、罪の消えるというのは、茶碗を洗う警えでは、意味が判然しないのであります。これには「明闇の警えを用いよ」とあります。たとえば、千年も閉

じ込められた蔵がある。提灯という尊い明るいものが、今蔵の中にお入りになる。暗い真中に、提灯を持って入る、これが浄土教格外の宗風、念仏のみ力によって、罪が消えるという味わいであります。(P270)

以上のように、近世以降、浄土宗布教の要として伝統的に続いてきた結縁五重の勸誡であっても、同じ構成、同じ法説を説くにあたつて先師は全く違う譬喩を用いているのである。

しかしながら、どんなに時代が変わり聴衆の資質が違つて来ようとも、五重勸誡における仏法そのものを歪めてしまつては、本末転倒であろう。現代科学的な知識をあたかも真理そのもののように説くとしたら、それは現代人の気質に布教師が迎合していると言わざるを得ない。そのような知識は、あくまでも譬喩としての使用に止まるものであり、それを踏み超えてしまつたら、浄土宗の法説とは別のものになってしまう恐れがある。

以上のような点をふまえて、改めて的門、呵成、智

できるのである。

海三師の勸誡を読み直してみると、法話における譬喩

(以上 後藤真法)

の性格とその使用法が、いかに大切かという事が確認

## 「三勸誡録一覽表」

叙説分	叙説分第一席	叙説分第一席	叙説分第一席
	<p>『信法要訣辨釋』(全十五席)</p> <p>○讚題「仰ぎ願わくは一切の行者等々これをも真の仏弟子と名づく」『観経疏』</p> <p>○懺悔三帰</p> <p>○加行中の制規七件</p> <p>① 帰敬三宝、敬上慈下之事</p> <p>② 毎朝洗浴、内外清浄之事</p> <p>③ 加行中葷酒婦肉は勿論、三業清浄に慎むべき事</p> <p>④ 前行中、受者欠席すべからざる事</p> <p>⑤ 前行六日間或は五日、各々懺悔之心にて礼拝都合三千礼を満じ、念仏は日々一萬遍以上、機根相応、精々相勤むべき事</p> <p>⑥ 加行中、道場内は勿論、休息中、高声雑話無用之事</p>	<p>『點睛録』(全十席)</p> <p>○讚題「受け難き人身を受けてく喜びの中のよるこびなり」『小消息』</p> <p>(宗祖中心主義を唱道して、信仰の統一、報本の観念を信徒の心胸に印象せんとせば、開口第二宗祖の垂訓を提擲して、扱法の機軸を鮮明ならしむるを必要とする)</p> <p>(信機信法の素地を作ること力む可し)</p> <p>○初席の要点</p> <p>・人生に宗教の必要なること</p> <p>・発信の機会はえがたくして逸し易きこと</p> <p>・五重相承の如きは生涯における最重要の機会なれば此時期に於て宝山空手の悔</p>	<p>『五重講説』(全二十席)</p> <p>○五重の名目(五通りの意義を重ねて、完全なる念仏の一大事をお伝えする)</p> <p>○五重の濫觴</p> <p>○五重の法体(心存助給口称南無阿弥陀)</p> <p>○伝法の由来(教巻相承、直授相承)</p> <p>○五重伝法の日程(六日間を前行、七日目を正伝法、八日目を御礼礼拝)</p> <p>○五重伝法の規程(清規、『白旗制戒』、触香、塗香)</p> <p>○浄土宗と行儀</p> <p>・身を清める三通りの意味(①衛生②尊敬③覚悟)</p> <p>・欠席有るべからず(順序を立てて聞く)</p>



<p>⑦正伝法之日は、殊に身器清浄にして、時尅遅々なく、早出たるべき事</p> <p>○五重の濫觸</p> <p>○在家への伝法の由来</p> <p>○五重の法体（心存助給口称南無阿弥陀仏の一行、仏祖三國相伝の趣を異途相承するが正体）</p>	<p>を遺さざる様勧告すること（以て初日、中日、伝法日、のみに来詣せば可なりなど思へる誤解を此の所に於て大に戒むべし）</p>	<p>ということ）</p> <p>・礼拝について（上中下品礼・合掌について）</p> <p>・念仏の申し方（心念の念仏・大きな声の念仏・小声の念仏・舌端微声の念仏）</p>
<p>叙説分第二席</p> <p>○「白旗制戒」訓読</p> <p>○制戒の意義（即今の導師得誓は、元祖大師よりは第六十幾代、了誓上人よりは第六十幾代の相伝にして、異途なく、今般汝等に伝授に及ぶ事なれば、此制戒の趣を能く能く相守らるべし）</p> <p>○制戒の文意</p> <p>・表題の字義</p> <p>・五ヶ条の意義</p> <p>・求法の意義（雪山童子求法の縁）</p> <p>・求法の心得</p> <p>・誓言</p> <p>・制戒厳守と違背の差</p> <p>・現世に無比の楽を得るの誤解（求時不得、不求自得の法門）</p>	<p>叙説分第二席</p> <p>○懺悔三帰</p> <p>○懺悔文の主旨と意義</p> <p>○三帰の意義</p> <p>○宗教の価値と三帰（唯宗教の信仰のみありて老病死苦を緩和安祥ならしむ）</p> <p>○加行中の制戒八件（事情に応じ適宜に制定すべし）</p> <p>①毎朝参詣の時先ず仏前を拝して後ち控室に入る事</p> <p>②控室に於ても成べく雑話を慎み静に法義を信念すべき事</p> <p>③道場に入るときは塗香触香を忘るべからざる事</p> <p>④道場に在つては礼拝称名を励み罪滅生善を祈るべき事</p>	

正説分	初重第一席	初重第一席	初重第一席
<p>・現受無比の榮</p> <p>○現罰受苦の因縁（近世、河内国、交野郡長尾村に、太郎の助と云ふ農民あり云々）</p>	<p>⑤家を出づるときは毛髮身体を清浄ならしむべき事</p> <p>⑥家に還る後も断えず行中に在ることを思ふて成るべく雑縁に遠かるべき事</p> <p>⑦生死浮沈決定の時機と思ひ行中は勉めて欠席すべからざる事</p> <p>⑧座次進退等すべて係員の指揮に従ふべき事</p>	<p>○五重の濫觴</p> <p>○五重の法体（結婦一行三昧心存助給口唱南無阿弥陀仏是なり）</p> <p>○「白旗制戒」訓誥（雪山童子云云の誓罰の文は不用・白旗流義の四字を削る。その故は、流派の争い殆んど絶無なる今世の於ては却つて在家の疑念を挑発する恐れあり）</p> <p>○制戒の意義（特に第四の心行退転すべからざることを本とす）</p>	<p>○初重『往生記』の大意（入信の第一歩・正しく生きる（物質生活と精神生活）・物質生活の欠陥（金銭だけで拭けぬ涙が人生にある）</p>
<p>初重第一席</p> <p>○讚題（叙説分第一席と同文）</p> <p>○五重の字義</p> <p>○五重相伝の意義（五重の次第を略示する）</p>	<p>初重第一席</p> <p>○讚題「末代の衆生をく煩惱具足せる凡夫なりと宣へり」「小消息」</p> <p>○初重伝燈分（法然上人伝歴・開宗の由来）</p>		

<p>○初重伝燈分(法然上人伝歴・開宗の理由・『往生記』制作の由来)          ○仏教の所詮(機根と所修の法・仏教の初入、機法)一種を知るを肝要とする)          ○初重の大意          ○難遂往生の機十三人を訓読(各々その意義を説く)</p>	<p>○難遂往生機第一(反至誠心・橋慢は本より信心と而立せざるの心所なり)          ○難遂往生機第四(反至誠心・欣求の思い起り難きこと・精神的平和の生活を求め、心霊的高尚の幸福を欣ぶを厭離機と云う)          ○難遂往生機第五(反深心・信心具足の三相。①我は弥陀如来の御子なり云々②極楽は我が精神世界なり云々③日課念仏相統して往生の業因を増長し現在の護念を望むべし)          ○難遂往生機第九(反回向心・二兔追う者は一兔も得ず・迷信と正信の相状・宗教の正否を試験する3点。①開祖の性格及経歴②教理の大体③感化の結果)          ○愚鈍念仏往生機の一(宗教の極致、他力の救済は唯仰いで信するもの)          (四障四機の表目を簡括して弁するも可)</p>	<p>・三毒の煩惱(信仰の生活に入るには)          ・往生記の精神に生きよ(機を知るは万福の本)          ・機根とは(知機について)          ・信仰の必要(人力の尽き果てたところが信仰の出発点)</p>
<p>初重第二席          ○序弁(難遂往生の機は三心欠けたる故・不具の三心、未具の三心)          ○四障(難遂往生の機の結釈)          ○四機(往生の機・三心必具のこと)          ○第五愚鈍念仏往生機(第一から第六の人を略弁する)          ○第一の機、単直信仰の機を詳説          ○単直信仰の因縁(勅伝)第三十、播磨国高砂の老夫婦他)          ○知機と伝える          (『小消息』は流通分にて説小)</p>	<p>初重第二席          ○初重『往生記』の大意          ・知機のとめ(助かり先のないことは私の身に現在具わっている事実)          ○往生記の内容          ・四障四機(往生できる人とできない人)          ・往生の真意(往生とは往いて生まれる)          ・『往生記』を鏡とし手本とする(自己を手本どおりに円熟させてゆく)          ・往生得不得の自己の手本(愚鈍念佛第一の機・本願の名号・平等の慈悲)          ・三愚(生愚、還愚、同愚・智者の振舞いをせずして唯一向に念仏すべし)          ・初重まとめ(信仰の入口は自分を信じてること)</p>	<p>初重第二席          ○初重『往生記』の大意          ・知機のとめ(助かり先のないことは私の身に現在具わっている事実)          ○往生記の内容          ・四障四機(往生できる人とできない人)          ・往生の真意(往生とは往いて生まれる)          ・『往生記』を鏡とし手本とする(自己を手本どおりに円熟させてゆく)          ・往生得不得の自己の手本(愚鈍念佛第一の機・本願の名号・平等の慈悲)          ・三愚(生愚、還愚、同愚・智者の振舞いをせずして唯一向に念仏すべし)          ・初重まとめ(信仰の入口は自分を信じてること)</p>

	<p>二重第一席</p> <p>○讚題「つみとがは露とや消む御名となふ阿弥陀仏の照す光りに」</p> <p>○序弁（法と伝える）</p> <p>○二重伝燈分</p> <p>・二祖聖光上人伝歴（宗祖と二祖の対面・三重の念仏・伝灯の法器）</p> <p>・「授手印」制作の由来</p> <p>○「授手印」の序文を略弁</p> <p>・各文の意義と字義</p> <p>・鎮西義と異議について（多念義・一念義・西山義）</p> <p>○まとめ</p> <p>・二祖聖光上人、一人正統正義を伝持す。</p> <p>・貞極上人曰く、仏法中に於て、此授手印は、法界第一の書也。</p> <p>・相伝の趣を守りて、順次往生の素懷を遂らるべき者なり。</p>	<p>二重第一席</p> <p>○讚題（「授手印」序文）</p> <p>○二重伝燈分（「授手印」制作の由来）</p> <p>○二重の大意</p> <p>・行と伝える</p> <p>・往生の行法をあまねく明かす（其大意を知ることに正信を防衛する上に大なる勢力と為るべき法を扱ひ、助正二行と三心と四修を弁解せんと予告すべし）</p> <p>・学問と宗義（禪勝房曰く浄土宗の学問の所詮は往生極楽は易きことと心得るまでが大事なるなり。」他）</p> <p>○正助一行</p> <p>・称名正行</p> <p>・称名の功德とその理由（他力救済は宗教の極致、唯だ信するもの自身の直覚已外謂ゆる言亡慮絶なり。言亡慮絶ながらに唱ふれば即ち其心中に無限の趣味を感得する）</p> <p>・称名を本願とする五つの理由</p> <p>①弱者が強者に擁護を要求する自然の情を満足せしめん為には良方便なり</p> <p>②対象に親近する尤も簡易なる方法なり</p> <p>③人の心識は縁境展転して緊念相続し難</p>	<p>二重第一席</p> <p>○訓読「末代念仏者浄土二宗の義を知つて浄土二宗の行を修すべき自尾次第條々行の事」</p> <p>○二重伝燈分（二祖聖光上人伝歴・「授手印」制作の由来・手印とは）</p> <p>○代念仏授手印の意義（結歸一行三昧の口称念仏）</p> <p>○初重と二重との関係（二重の巻物は、全く助からぬ初重の巻物の人を助け上げてゆく）</p> <p>○二重の大意（結歸一行三昧のお念仏を申せばよい）</p> <p>○起行（五種正行・助業）</p> <p>○口称正行について</p> <p>二重第二席</p> <p>○六字の名号について</p> <p>○念仏の心得方（阿弥陀ほとけ我を助けたまえ）</p> <p>○他力の説明（物欲的な他力と自覺的な他力）</p>
--	--	---	--

<p>二重第二席</p> <p>○讚題「礼をなし御名を唱ふる声のうち に仏のめぐみわすれこそせね」</p> <p>○誦読「末代念仏授手印。末代の念仏者、 浄土一宗の義を知って、浄土一宗の行を 修すべき、首尾次第の條條の行の事」</p> <p>○序弁「要中の要は、奥図の口伝、是れ を結歸一行三昧の相伝と云って、一宗の 極致なれば委く示せん」</p> <p>○五種正行</p> <p>○正助「行分別</p> <p>・正行の事（開宗の文により説示・口称</p>	<p>し。故に時々仏名を声音に発して自ら心 耳を驚かし以て散心を回復するには良法 なり</p> <p>④是の如く称名相續すればおのづから異 念雜念平屏息す</p> <p>⑤声に依りて信を進め信に依りて声を励 まさんが為なり</p> <p>・念仏は情に在て理にあらす</p> <p>・理性と宗教（理屈を以て宗教を解釈せ んと欲するは根本的に誤り）</p> <p>・助行（念仏の靈業を服する藥受の如し・ 同類助業、異類助業）</p>	<p>二重第三席</p> <p>○阿弥陀の三字について（我らを救いつ つ我らを生かしつつまします阿弥陀さ ま）</p> <p>○仏陀について（自分も生き周圍も生か す・宇宙全般に漲る天地のまことを私の ものにしたす）</p> <p>○如来の慈悲はまことの活動（親切心・ 盲目愛・母子愛）</p> <p>・母子愛（生命の長いこと、妬みのない こと、道徳的であること）</p> <p>二重第四席</p> <p>○如来の慈悲と親の慈悲との相違</p> <p>・平等の大慈悲（我々を救い助け、育て 恵みつつ在ますもの）</p> <p>・三業と念仏（み名を呼ぶ者を撰取して 捨て給わぬ大慈悲）</p> <p>・念仏と三部経典</p> <p>○五種正行</p> <p>二重第五席</p> <p>○安心（総安心と別安心・願往生心・安 置の義・お念仏の称え方）</p>
--	--	--

<p>念仏にて、常念相続を肝要とするなり。念仏の一行に止が故に、正とは云うなり。</p> <p>・助業の事（同類の助業、異類の助業）</p> <p>○三心</p> <p>・三心の意義（三心は、行者の安心にして、往生の正因なり・行者の内因に、仏の外縁が加われば、往生浄土の芽は生ずるなり）</p> <p>①至誠心</p> <p>・名聞利養の虚仮は病、往生の為に申すは、至誠心にて業と知るべし</p> <p>②深心</p> <p>・信機信法</p> <p>③回向発願心（往相回向と還相回向）</p> <p>○横の三心・豎の三心</p> <p>・三心不具と往生</p> <p>・三心思一心</p> <p>○三心の因縁（勅伝 第二十、沙弥随蓮</p> <p>○まとめ</p> <p>・大師の仰を一心に信じ、疑いなく称名相続せらるれば、其御念仏に、三心具足することは、別の子細なし</p> <p>・偽らず又うたがはず彼の国を願ふは三つの心なりけり」</p>		
<p>・安心と起行（針と糸との関係の如し・浄土宗徒の安心相・常念主義）</p> <p>①至誠心</p> <p>・在家の戒むべき虚仮の相（1、本尊帰依の念忠実ならずして、心行に表裏あること、2、憍慢の爲めに至誠の信仰を失うこと）</p> <p>・世は虚偽の界</p> <p>②深心</p> <p>・信機信法（「我何れより来る」「我何の爲に生活する」「我何くに逝く」、生老病死などの問題を挙げ、聴者に自己の不完全を自覚せしめる）</p> <p>・無信と浅信</p> <p>・現代人と疑心</p> <p>・家庭の統一と信仰（家長の責任）</p> <p>・宇宙の不可解と信仰（学問は宇宙の事物をある程度まで説明するが、これが爲に信仰を忘却することは断固許さざるなり）</p> <p>③回向発願心</p> <p>・社会的善根と念仏</p> <p>・回向不回向の分岐点</p> <p>・信仰と社会</p>		
<p>○一心と三心</p> <p>・三心具足（縦の三心と横の三心）</p> <p>・散の一心と定の一心（浄土一宗の一心は散の一心・助け給えと縛る一心が安心）</p> <p>①至誠心</p> <p>・誠は価値なり（まことは人なり、力なり・まことあれば人と人との心は一つになる）</p> <p>・虚仮（名聞利養の心）</p> <p>二重第六席</p> <p>②深心（疑いが無いのが信心）</p> <p>・称えずにはおられない念仏</p> <p>・信心の深さ（動不動）</p> <p>・深い信心に進む方法（聞信修）</p> <p>・疑わざる心</p> <p>③廻向発願心（往相廻向と還相廻向・如来のお膝元に参つて如来という完全円満な人格にしていたりたい）</p> <p>・廻向の誤解（活きた仏教・念仏は分けでも減らぬ）</p> <p>・総廻向と別廻向（自他共に救われ、世界と共に生きんとするところが廻向発願心の心持ち）</p>		

<p>二重第三席</p> <p>○讃題「声さゆる仏の御名に浮雲のかさぬる罪もさらにけなむ」</p> <p>○五念門（礼拝門・讃歎門・觀察門・作願門・回向門）</p> <p>・五念門の意義（五とは五行なり、念とは安心なり。門とは出入りの義とす。五念の行を以て、此穢土を出て、彼浄土に入が故に名て門と為せり）</p> <p>・五念門と三心の関係（三祖曰く礼拝等の五門、一々に三心を具足して、往生を得ることを明す）</p> <p>○四修</p> <p>①恭敬修（『西方要決』に有る五つを細釈する）</p> <p>②無余修</p> <p>③無間修（長短の二機・念時日の三相統）</p> <p>④長時修（日課念仏勸説）</p> <p>○三種行儀</p> <p>①尋常行儀（常念相統を本とする）</p> <p>②別時行儀（その方法と心得）</p>	<p>・信者と不信者（処世上の比較）</p> <p>・三心即一（横の三心、豎の三心）</p> <p>二重第三席</p> <p>○四修（往生の修行に於ける作法）</p> <p>①恭敬修</p> <p>・心身共に阿弥陀仏を尊敬し奉ることなり</p> <p>・恭敬修と宗徒の任務（一家の主人自ら仏壇、靈牌に仕えること）</p> <p>②無余修</p> <p>・雜起の心を制することなり</p> <p>・單純の念仏は萬徳の結晶体</p> <p>・雜起心病の危険性</p> <p>③無間修</p> <p>・常念主義の義なり</p> <p>・懈怠を対治するを分とは為すなり</p> <p>・念仏相統の連絡を保つこと、相統の妨害となるべき造罪を懺悔することの両面を備ふるなり</p> <p>・懺悔とは</p> <p>・懺悔の方法</p> <p>・隨犯隨懺（隨犯隨懺に依り自然に善良の習慣を養成し、徳性開發して行為の自</p>	<p>二重第七席</p> <p>○作業の四修（修について）</p> <p>①恭敬修（四句分別）</p> <p>・敬いの心（全てのものを長く続け、成就せしめる力があるもの）</p> <p>・儀式（敬いの心を姿に表したものの・先祖祀り（先祖を中心に家庭を治める・仏壇を生かす）</p>	<p>二重第八席</p> <p>②無余修（念仏一条・随逐擁護・撰取不捨）</p> <p>③無間修（貪瞋煩惱を以て交えざれ・念仏は懺悔の生活）</p> <p>④長時修（一生の間相統する・長時恭敬修、長時無余修、長時無間修）</p> <p>・日課念仏（習慣は第二の天性・念声是一これ旋火輪のよう。念仏が念仏を進める）</p> <p>・念仏生活（今日一日を尊んだ宗旨・靈感の証明）</p>
---	---	--	---

	<p>③臨終行儀（病者と看病人の心得）      ○三種行儀の中の肝要（尋常行儀が正にして、余の二は傍となるなり。此れ即ち弥陀如来の御本願は、下機を目的とし玉ふ大悲なればなり）</p>	
	<p>二重第四席      ○讚題「我が法然上人言く、善導の御釈を拝見するに、源空が目には、三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も皆俱に南無阿弥陀仏と見ゆるなり」      ○結婦一行三昧      ○奥図相伝の義（膳部之譬・印籠之譬）      ○二重総括（「授手印」裏書の因縁・「決答抄」彦山住侶の因縁）</p>	<p>然に法則に準ずるに至ること）      ④長時修      ・往生の行業一生永続して退転せざるを云う      ・安心に自造罪退、貪著身財退、異学異見退の三種の退縁ある故、長時修が必要      ○四修まとめ      ・敬ひて一、只御名ばかり二、怠らず三、命限りに四、勤むるは四修」      ・真実に三心を具足相続すれば、四修は自ら随逐して転ずる（私考）</p>
	<p>二重第九席      ○三種行儀      ①尋常行儀（死に面して・生活に面して・罪惡に面して）      ②別時行儀      ③臨終行儀（平生の念仏によるお迎え・往生の思想に死ぬという觀念はない・生者を救う葬祭・生きる信念・大悲のお救い）</p>	<p>二重第十席      ○讚題「我が法然上人の云わく、善導の御釈を拝見するに、皆共に南無阿弥陀仏と見ゆる也と。干時安貞二年十一月二十八日申時、自筆を以て書す、無からん時の形見にも在判」      ○法説（結婦一形三昧奥図の伝・「源空が目には」が要・六重二十二件五十五ヶ条の教えが籠り候なり）      ○物語念仏生活      ○声に頭れる二重の巻物（二重の巻物は行・南無阿弥陀仏と申せというお巻物）</p>



<p>三重・四重第一席</p> <p>○讚題（叙説分第一席と同文）</p> <p>○三重伝燈分（三祖良忠上人伝歴・「領解抄」制作の由来・善導大師木像と光明寺建立の由来）</p> <p>○三重の要点（此書の肝要は、奥図の伝を領解し玉うにあり）</p> <p>○四重伝燈分（「決答抄」制作の由来）</p> <p>○四重の要点（奥図の口伝、結帰一行三昧に在り）</p> <p>○一向疑心者の往生（安心の疑と起行の疑・一分往生の答え）</p> <p>○三心の具不具について</p>	<p>三重第一席</p> <p>○三重伝燈分（「領解抄」製作の由来）</p> <p>○三重の意義（五十五・六重の法門を一々伝習すること一器の水を一器に移すが如く、其の法門の一行三昧に結帰すること百川の海に朝するが如しと領解する）</p> <p>○解と伝える</p> <p>○結帰一行三昧を領解する（決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ひとりて心行具足すれば方徳自ら雲集することを心腑に落着すべきなり）</p> <p>○三重まとめ（三つ四つと分けて教うる法の糸思ひよるにて南無阿弥陀仏）</p>	<p>四重第二席（二河白道一席）</p> <p>○讚題「決答抄」に云く、問う、何が故に三心具足の上に、現世の貪欲は強盛に起り後世の心行は尚ほ弱く覚ゆるや</p> <p>二河の譬釈、能々見合すべきなり</p> <p>○序弁（下機の者も、本願に引立られて、往生を遂る、御相伝の下を弁釈するに、今一ヶ条を説き残せり）</p> <p>○法説（凡夫三心具足者の悩み）</p> <p>○二河白道の譬喩の意味（凡夫往生の故</p>
<p>三重第一席</p> <p>○三重伝燈分（「領解抄」製作の由来）</p> <p>○三重の大意（解と伝える）</p> <p>○三重の心</p> <p>・わが物となったところが領解</p> <p>・入我我入</p>	<p>四重第一席</p> <p>○四重の意義（四重は他人の疑問に對して正義を決答し玉ひしなり）</p> <p>○四重伝燈分（「決答抄」制作の由来）</p> <p>○証と伝える（「決答抄」に曰く、「弁阿亡じての後、法門の事は然阿に問わるべし云々）</p> <p>○一問答を抄出（何故ぞ三心具足の上に現世の貪瞋は強盛に起り、後世の心行は尚ほ弱く覚ゆる乎。→二河白道の譬釈、</p>	<p>四重第一席</p> <p>○四重伝燈分（「決答抄」制作の由来）</p> <p>○四重の大意（証と伝える・一点も疑うに及ばず）</p> <p>○安心起行の疑い（問何が故に三心具足の上に現世の貪瞋は強盛に起り、後世の心行は尚ほ弱く覚ゆる乎。→二河白道の譬釈よくよく思い合すべきなり）</p> <p>○一向疑心（若しは又一分の往生あるか・安心の疑いと起行の疑い）</p>
<p>三重第一席</p> <p>○三重伝燈分（三祖良忠上人伝歴・「領解抄」制作の由来）</p>	<p>四重第一席</p> <p>○四重伝燈分（「決答抄」制作の由来）</p> <p>○四重の大意（証と伝える・一点も疑うに及ばず）</p> <p>○安心起行の疑い（問何が故に三心具足の上に現世の貪瞋は強盛に起り、後世の心行は尚ほ弱く覚ゆる乎。→二河白道の譬釈よくよく思い合すべきなり）</p> <p>○一向疑心（若しは又一分の往生あるか・安心の疑いと起行の疑い）</p>	<p>四重第一席</p> <p>○四重伝燈分（「決答抄」制作の由来）</p> <p>○四重の大意（証と伝える・一点も疑うに及ばず）</p> <p>○安心起行の疑い（問何が故に三心具足の上に現世の貪瞋は強盛に起り、後世の心行は尚ほ弱く覚ゆる乎。→二河白道の譬釈よくよく思い合すべきなり）</p> <p>○一向疑心（若しは又一分の往生あるか・安心の疑いと起行の疑い）</p>

<p>実、本願大悲の徹底を尽す、甚深微妙の御釈なり)</p> <p>○凡夫往生決定の信相 (此の譬は、凡夫往生決定と云う信相を立る故実なる故なり)</p> <p>○二河白道の譬喩 (『西要鈔』の本文及び解説)</p> <p>○まとめ</p> <p>・されば心さしの弱きに目をかけず、夫れに付ても、いよいよ仏願を頼み、是一妄念の繁きを顧みず、散乱にても常に念仏すべきなり</p> <p>・『決答抄』「もしこの白道の譬え無くんば、凡夫出離の疑いなお残るべし。一も往生疑い無こと、本文分明なり」</p>	<p>能々思い合すべきなり)</p> <p>○貪瞋煩惱は流転門 (力を費やさずして加速度の働きを為す)</p> <p>○願生は還滅門 (流を激して天に朝せしめんとする)</p> <p>○問答中の要点 (他力本願はこの時に当たって、利益を施すなり)</p> <p>○二河白道の譬喩 (『観経疏』本文及び解説)</p> <p>○まとめ (煩惱の薄き厚きをもかへりみず、罪障の軽き重きをも沙汰せず、ただ南無阿弥陀仏と唱へて声につきて決定往生の思をなすべし)</p>	<p>・善因に遠き凡夫</p> <p>・疑いながら称える念仏</p> <p>四重第二席</p> <p>○二河白道の譬喩 (絵の説明・意識文にて説明)</p> <p>○譬喩の解説 (人生の目的・法律上、道徳上、宗教上の罪惡)</p> <p>四重第三席</p> <p>○譬喩の解説</p> <p>・水火の譬え (貪瞋の煩惱・人の本性は善惡定まらないもの・善欲惡欲)</p> <p>・腹立つ心 (瞋りは思うとおりにはならない)</p>
<p>四重第四席</p> <p>○譬喩の解説</p> <p>・忍の修養 (腹立つ心をなくすには・親切心みちめれば腹立たず)</p> <p>・如来の大慈悲の親切心</p> <p>・和合の生活 (人間のまことの幸福)</p> <p>・貪の波と欲の水 (氣に入ると、欲しい心が湧いてくる・人間の欲には限りがない)</p>	<p>四重第四席</p> <p>○譬喩の解説</p> <p>・忍の修養 (腹立つ心をなくすには・親切心みちめれば腹立たず)</p> <p>・如来の大慈悲の親切心</p> <p>・和合の生活 (人間のまことの幸福)</p> <p>・貪の波と欲の水 (氣に入ると、欲しい心が湧いてくる・人間の欲には限りがない)</p>	<p>四重第四席</p> <p>○譬喩の解説</p> <p>・忍の修養 (腹立つ心をなくすには・親切心みちめれば腹立たず)</p> <p>・如来の大慈悲の親切心</p> <p>・和合の生活 (人間のまことの幸福)</p> <p>・貪の波と欲の水 (氣に入ると、欲しい心が湧いてくる・人間の欲には限りがない)</p>

<p>第五重第一席</p> <p>○第五重伝燈分(曇鸞大師伝歴)</p> <p>○口授心伝の念仏</p> <p>・三義校量(①在心・②在縁・③在決定)</p>	<p>第五重第一席</p> <p>○第五重の意義(少数の念仏も尚多年の造罪を消滅し得る所以の理由を証驗する)</p> <p>・信と伝える</p> <p>○念仏滅罪往生の義(「論註」問業道經に言く業道は秤の如く重き者先づ牽くと云々)</p> <p>・相伝の注意(第五重の本義は念数の計算法にあらずして、其の尋常と臨終を問はず念仏に滅罪往生の大能力あるを信ずるに存す)</p> <p>○三義校量</p> <p>①在心</p> <p>②在縁</p>	<p>第五重第二席</p> <p>○讀題「論註」に云く、問うて曰く、心若し他縁せば、經に十念と言は業事成弁を明すのみ云々</p> <p>○業事成弁</p> <p>○十念口授の所以</p> <p>○五重の正体</p> <p>○頭伝(凝思十念の伝)</p> <p>○密伝(十念伝とは「觀經」の如是至心令声不絶具足十念称南無阿弥陀仏の伝な</p>	<p>第五重第一席</p> <p>○第五重大意(口授心伝十念の伝・信と伝える)</p> <p>○五重の結び</p> <p>・浄土宗の信心(機を信じ、如来が救つて下さると信じて念仏申す)</p> <p>・五重の体(心には阿弥陀さまに救つていただきたいと思い、口には南無阿弥陀仏と称え如来に救われる)</p> <p>・五重の総まとめ(どんな愚かな人でも「機」、南無阿弥陀佛と称えると「行」、明らかに承知いたしました「解」、一点も疑いはなく「証」、南無阿彌陀佛と声に伝えてまいります「信」)</p> <p>○十念について</p>	<p>・真実の生命に生きること(お念仏の生 活)</p> <p>四重第五席</p> <p>○譬喩の解説</p> <p>・清らかな白道(念仏を称える信心は清浄なもの・願往生心・信行具足・本願の呼び声・如来の見聞知)</p>
---	---	--	---	--

<p>り。これを「論註」の十念伝を以て伝えるなり。この密伝が十念伝の本体なり</p> <p>○祐天上人因縁話（願生念仏が本体たるを示す因縁）</p>	<p>③在決定（有後心無後心、有間心無間心）</p> <p>○三義校量の総括</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・念仏の功用と因果の原則が矛盾せざることを明かす</li> <li>・往生論註の結文に曰く三義を校量するに十念は重し、重きもの先づ牽て能く三界を出す。両経（業道経・觀経）一義なるのみ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・五逆悪人の往生</li> <li>・滅罪と念仏（三義校量・懺悔の念仏・慈悲の心と親切の生活）</li> <li>○親切は力なり（念仏者になるといふことは、親切な人になること・親切は活動なり・如来のお慈悲をもって国家、世、先祖、子孫に尽くす）</li> </ul>
<p>得益分第一席</p> <p>得益分第一席</p> <p>○讀題（叙説分第一席と同文）</p> <p>○法説（讀題の字義）</p> <p>○日課五百遍勸説（日課授与の作法は要偈道場にて行う）</p>	<p>流通分第一席（正伝法後）</p> <p>○讀題「一紙小消息」（全文）</p> <p>○法説（各段詳説・「末代の衆生を本願に乗ずる事は信心の深きによるべし」）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・機について（四障四機まとめ）</li> <li>・疑心を遮す（行の少なきによる疑、罪の重きによる疑、時の下るによる疑、身の悪きによる疑の四種）</li> </ul> <p>・所求、所帰、去行</p>	<p>流通分第一席（正伝法後）</p> <p>○讀題「生らば念仏の功つもり思ひわづらふことぞなき。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○相伝者の心得</li> <li>・相伝後の我は如何に用心すべきや</li> <li>・我は「五重相伝の人なり」「仏祖の血脉を伝えたる嫡孫なり」との感念あらばおのづから善良安穩の處世を遂ぐべきなり</li> </ul>

<p>・所乗の本願（本願に乗ず義及び願としての義）          ・能乗の願心（深心・上の四種の疑を払却する）</p>	<p>流通分第二席</p> <p>○法説（各段詳説・「受がたき人身をうけて、信じても猶信すべきは、必得往生の文なり」）          ・衆縁を具することを歎じ玉う（受人身・遇本願・発道心・離輪廻・生浄土）          ・機の信（誠門と勸門）          ・行の信（誠門と勸門）          ・弥陀の本願（要偈第一句の意）          ・釈尊の本懐（要偈第二句の意）          ・諸仏の本懐（要偈第三句の意）          ・悦遇本願・報恩勸義（自ら念仏相続する事と他を勧めて相続せしむる事）・安心の落居</p> <p>○結勸</p> <p>・相伝に約して十念勸励す（因縁）          ・尋常に約して十念勸励す（因縁・報恩の日課十遍授与）          ○五重の総まとめ</p>	<p>・相伝の人は自ら其の幸福の至高なるに歡喜踴躍すべきなり。及び未相伝者との対比</p> <p>○相伝者の任務（我と仏祖は親子の關係。寺院へ参拝して親子愛敬の情を尽すべし）</p> <p>○相伝者の信仰条例</p> <p>①教友は皇上の聖恩と、仏祖の慈愍とを思ひ奉りて暫も忘るまじき事</p> <p>②教友は豫ての御化導に遵ひて、固く教旨を守り日課念佛を相続し、往生の一大事を謬らざるよう心がくべき事</p> <p>③教友は父母に孝し、師長を敬ひ、老たるを扶け、病めるを感み、貧困を濟ひ、災厄にかかれるものを恤みて、慶弔共に至誠を盡しあふ事</p> <p>④教友は信義を以て世間に交り、和合を以て一家を修め、仏事は清浄と恭敬を旨とし、奢侈の振舞あるまじき事</p> <p>⑤教友は人命の不定なることを念じて、現世のためと来世の爲めとなるべき善事は、常恒に励みて行ふべき事</p>
---	--	--

・云何なる愚痴な者〔知機〕、南無阿弥  
陀仏と唱ふれば〔行〕、往生が出来ると  
承知して〔解〕、あら一点の疑もなく〔証〕、  
助け玉へ南無阿弥陀仏と決定す〔口授〕  
・唯申す外に口伝も相伝もなきが浄土  
の口伝相伝

## 建永の法難における住蓮房の事跡調査報告

## 一、はじめに

浄土宗史における三大法難というところ

- ①元久の法難（元久元年・…・一二〇四年）
- ②建永の法難（建永二年・…・一二〇七年）
- ③嘉祿の法難（嘉祿三年・…・一二二七年）

があげられるが、今回は「建永の法難」を取り上げ、特に住蓮房の遺跡を中心に、現地調査に基づき報告する。尚、八木英哉研究助手と共に現地調査および資料整理を行ったものである。

この調査は平成十七年から十八年にかけて二回行ったもので、

1. 御僧塚 住蓮房・安樂房の墓
2. 首洗い池 住蓮房の首を洗った池
3. 易行寺 住蓮房・安樂房の御木像を安置
4. 住蓮房母公の墓所 市村長一氏宅
5. 尼が池跡地 住蓮の母が身を投げたと伝えられる
6. 十王寺 前出市村家に最も近い浄土宗寺院
7. 大寶神社 住蓮の首を討った太刀を奉安している
8. 真光寺 住蓮房上人七百五十年遠忌大法要資料などの八カ所を取り上げている。

まず、調査報告に入る前に住蓮・安樂両上人の略歴と「建永の法難」勃発の経緯を整理しておくことにする。

## 二、安樂上人について

京の六条河原で斬罪に処された安樂房の人物像を探ると道西・安樂房ともいい、平安時代〜鎌倉時代の人で、生年は不明。建永二年（一二〇七年）二月九日に没している。少外記中原師秀の子。俗名は師広という。

安樂房の祖父師茂は大外記で、父師秀は少外記であった。父の師秀は法然上人に深く帰依し、建久五年（一一九四年）、法然上人を迎えて五十日間の「逆修説法」を行った人である。

また、安樂房は法然上人の主著である『選択本願念仏集』の作成にあたり、師匠に代わって執筆の大役を第三章まで務め（驕慢の心があり法然上人より誠められたが）、完成した『選択本願念仏集』を鎌倉の地で講説したほどの学者でもあった。

安樂房は、住蓮房とともに声明音楽に才があり、善導大師の六時礼讃に哀調を帯びた節回しをつけながらその美声で唱えた。建永元年（一二〇六年）京都鹿ヶ

谷法然院での別時念仏会では、同門の住蓮房とその能声で多くの帰依者を誘い、御所の女房が出家をしたため後鳥羽上皇の怒りをかい、建永の法難の原因となった。

このため師の法然上人は流罪、安樂房は京六条河原で死罪となった。安樂房は官人秀能に牽かれて六条河原で首を斬られる時、従容として日没礼讃を唱え、

「念仏數百遍申し十念を唱え終わって右に倒れたら安樂は極樂往生したと思はれよ」

と告げ、声高らかに十念を唱えると、サツと首は刎ねられた。すると不思議にも安樂房の死骸は右に傾き伏した。見物の人々はこのとき念仏の声を一時にワツと揚げ、虚空には紫雲が低迷したという。

辞世の句

「今はただ言うことの葉もなかりけり

南無阿彌彌佛のみ名のほかに」

## 三、住蓮上人について



清和源氏の後裔で父は陸奥寺主實遍の子。生年不明で建永二年（一一〇七年）二月九日没。

法然の弟子で元久元年（一一〇四年）の七箇条制誡にも署名している。建久三年（一一九二年）、安樂房と一緒に後白河法皇の追善供養のために六時礼讃を勤め、京都東山靈山寺で行なわれた別時念仏会にも参加している。

また、元久二年（一一〇五年）、藤原隆信の臨終の際には、臨終の善知識を果たしたと伝えられている。

建永元年（一一〇六年）十二月、安樂房遵西と共に京都鹿ヶ谷で六時礼讃を唱え、その際に御所の女房が出家をしたので後鳥羽上皇の怒りをかい、法然門下の専修念仏への弾圧も強まって、翌年、近江馬淵荘で斬罪となった。住蓮房は七條のほとりに住む年老いた母に決別を許され、佐々木義實に牽かれて近江馬淵に行き、

「極楽に生まれんことのうれしさに

身をば仏にまかすなりけり」

と辞世の二首を残し、合掌乱れず首を刎ねられた。

#### 四、建永の法難のおこり

この法難についての具体的な記述を調べてみると『四十八卷伝』（以後『勅伝』）巻三十三に、

かくて南都北嶺の訴訟次第にとどまり専修念仏の興行無為に過ぐる所に、翌年建永元年十二月九日、後鳥羽の院熊野山の臨幸ありき。そのころ上人の門弟住蓮安樂らのともがら、東山鹿の谷にして別時念仏を始め、六時礼讃を勤む。定まれる節拍子なく、おのおの悲嘆悲喜の音曲をなすさま、珍しくたふとかりければ、聴衆多く集まりて、発心する人もあまた聞こえし中に、御所の御留守の女房出家の事ありけるほどに、環幸の後あしざまに讒し申す人やありけん、大いに逆鱗ありて、翌年建永二年二月九日、住蓮安樂を庭上に召されて罪科せらるる時、安樂、

「修行することあるを見ては願書を起こし、方便破壊しては競いて恨みを生ず。かくのごときは生盲圍堤のともがらなり。頓教を毀滅して長く沈淪す。

大地微塵劫を超過すとも、いまだ、三途の身をはなるるを得べからず。」

〔法事讀〕下巻

の文を誦しけるに、逆鱗いよいよ盛りにして、官人秀能に仰せて、六条河原にして安樂を死罪に行わるる時、奉行の官人にいとまを請い、ひとり日没の礼讃を行するに、紫雲空に満ちければ、諸人怪しみをなす所に、安樂もうしけるは、

「念仏數百遍の後、十念を唱へんを待ちて切るべし。合掌乱れずして右に伏さば、本意を遂げぬと知るべし。」

と云いて、高声念仏數百遍の後、十念満ちける時切られけるに、言いつるにたがはず、合掌乱れずして右に伏しにけり。見聞の諸人随喜の涙を流し、念仏に帰する人多かりけり。

と記されるが、住蓮房の死については同じく、『勅伝』

卷三十三に、

門弟ら嘆き合へるなかに、法蓮房申されけるは、住蓮・安樂は既に罪科せられぬ・・・

とのみあり、住蓮房の最期の姿については全く記載がない。

正安三年（一二三〇一年）に原本の詞書を親鸞の曾孫である覚如が書いたとされる『捨遺古徳伝絵』（古徳伝）には、法然上人も還俗のうえ流罪と決まつた事が記され、死罪の門弟について

善禪房西意 於摂津國誅佐々木判官不知實名沙汰  
性願房 住蓮房 安樂房 已上於近江國馬淵誅二  
位法印尊長沙汰云々 已上死罪四人  
としてゐる。

法然上人門下の系譜『法水分流記』の住蓮・安樂の部分には上と同じく

安樂房遵西 於江州馬淵被誅一人頸落之後改合掌  
廻念數百八三遍 住蓮同所被誅 一人從頸放光頸  
落後高声念仏十余遍

住蓮安樂於近江馬淵二位法印尊長沙汰云々

となつており、処刑地は兩人とも近江馬淵（現、近江八幡市馬淵）であり、比叡山の尊長法印の沙汰と記さ

れている。安樂房の処刑地が「勅伝」と符合しないが、住蓮房については処刑の地は近江國馬淵となつている。

隆寛律師撰と伝えられる『法然上人秘伝』（以後『秘伝』と略す）には、住蓮房の処刑時の様子が、その前後の出来事も含めて最も詳しく書かれている。『秘伝』では、松虫、鈴虫という御所の女房達二人を出家授戒せしめたのは法然上人とされており、院の逆鱗にふれて首を斬られる事と定められるのも法然上人である。上人はここではこの事を耳にして寧ろ悦び、

「嬉しきかな 我れかの女房達二人を出家させて首べを切れん事こそ 三世十方の諸仏菩薩のいかばかり悦びたまふらんとて いとゞ御念仏申させ給ふ」と語っている。

これを末座で聞いていた住蓮房が、師の命を救うために身替わりとなつて御所に名乗り出るといのである。またそれに先んじて七条の辺に住んでいた「年八十にかたふき給ふ母」に今生の別れを告げに行き、

師の替わりに打たれようとしている事も伝えている。その後

心ぼそくも唯だ一人 院の御所にまいりて 人を  
して申上げるは 松虫鈴虫の出家の故に法然上人  
罪科におこなはれたまふべき由し承り候。あやまり  
からに上人にとがをかけ奉らんこと神慮のほども  
知りがたし。彼の女房たち二人来て出家受戒の志し  
有と候し間 誰人とは知らず 住蓮が出家をはま  
いらせて候なり。住蓮が罪科によりて忝くも因果に  
あやまりましまさぬ上人に罪を懸け奉らん事 仏  
身より血を出すにて候間箇様に申上候と云へり。院  
是を聞き召して さては法然房あやまりなかりけ  
り 住蓮が所行むざんなれとて 頓て召し取て衣  
の上に邪見の繩を付られて佐々木の九郎義實にあ  
づけらるゝ。義實に給て近江國にぐそくし下て 馬  
淵と云所にて切らんとて引すえたり。  
住蓮最後に紙と硯をこうて上人の御房へ最後の状  
をまいらす。其の言に云く、極悪深重の衆生他力往

生を遂んと思はゞ即住蓮を手本とすべしと書付て

一首

極楽に 生れんことのうれしさに

身をば仏に まかすなりけり

と書て生年三十九歳にして切られぬ。あはれなりし

事どもなり。

以上のような子細で斬刑に処せられている。

現在も近江八幡市馬淵には、討たれた住蓮房の首を

洗ったとされる「首洗い池」があり、同市内の千僧供

町には住蓮・安楽両僧の墓所と見られる「御僧塚」が

存在する。

また、この一二〇七年の「建永の法難」では住蓮房・

安楽房・善綽房西意・性願房の四名が死罪に処せられ

ているが、善綽房西意・性願房については後世あまり

語られることはなかったようである。

## 五、事跡調査報告

以下に今回調査した事跡の各々について報告する。

(一)「御僧塚(おそうづか)」について

今もなお地域住民が手向ける供養花が絶えることのない住蓮房・安楽房の墓を「御僧塚(おそうづか)」と呼んでいる。

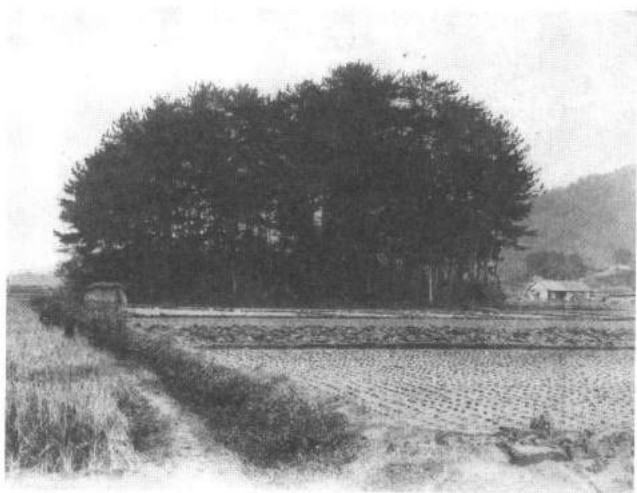
『近江輿地誌』によると蒲生郡馬淵村千僧供には、供養塚と御僧塚と称する二つの塚があげられている。その御僧塚というのが住蓮房の遺骸を埋葬した塚で元禄二年(一六八九年)の頃に村老が一つの墓を建てて追善に資したという。この伝説を掲げて住蓮房安楽房のために一寺を建立して「安楽寺」とし、池をもうけて「住蓮池」と呼び一千の衆僧が供養して七日七夜の法要を勤めたのでこの地を千僧供と称したが、正慶年間中(吉野朝時代)に火災のために烏有に帰したと伝えられ、また、『温故録』に承元年間に両僧追善のために千僧供養すると伝えられている。

また、住蓮房が千僧供村で処刑されたのは諸説あるが、馬淵という地が、

ア、昔の伊勢街道にあたり、住蓮房は伊勢の出身で



①「御僧塚」(平成 18 年)



②「御僧塚」(大正元年)

の石塔が並んで立っている。(石塔に向かって右に安楽房、左に住蓮房の墓が祀られている)  
また、「御僧塚」と称され、代々近郷農村の門徒さんらによつて大切に守られてきたこの墓は遺跡とし

あったこと。  
イ、この処刑を取りしきつた二位法印尊長の直轄の領地であったこと。  
ウ、首切り役人の佐々木九郎義実の住居の近くであったこと。

などが考えられるが、易行寺の住職によると当時の馬淵という所は処刑地であったという。  
また、言い伝えでは処刑の際、安楽房は、住蓮房と合葬してほしいと願い出たため二人とも現在の地に埋葬された。高さ四〜五mほどの小さな円墳の上に二人



③「両上人の墓」(平成 18 年)



④「両上人の墓」(大正元年)

て、滋賀県教育委員会・近江八幡市教育委員会の説明が付されている。

この説明によると、円墳は今から一四〇〇年〜一五〇〇年前に作られたもので、墳丘の真下には古墳石室と鎌倉時代の墓も確認されている。現在の住蓮房・

安楽房の石塔は江戸時代に作られたものであるという。所在地は滋賀県近江八幡市千僧供町の田園の中。国道8号線六枚橋交差点から東に約四〇〇m「象印」の工場の向かいの農道を一〇〇m入ったところにある。

(二) 住蓮房首洗いの池

ここで前述の記載によれば、

村人たちは住蓮房安楽房のために「安楽寺」を建立して、池をもうけて「住蓮池」と呼び一千の衆僧が供養して七日七夜の法要を勤めたのでこの地を「千僧供」と称したが、正慶年間に火災のために烏有に帰した

と伝えられていることである。

つまり、正慶年間までは「安楽寺」が存在し供養が続けられていた訳である。現在は「住蓮房首洗いの池」と呼ばれる池が渇水の状態で存在し、国道八号線六枚橋交差点脇の自動車修理工場の後方にひっそりとその姿を残している。

(三) 浄土真宗本願派「易行寺」について

滋賀県近江八幡市千僧供町に供養山易行寺という寺がある。「住蓮房安楽房の御木像」を安置し供養を続け、御僧塚と呼ばれる住蓮・安楽両上人のお墓を護持して



⑤「住蓮房首洗いの池」(平成 18年)

いる浄土真宗本願派の寺院である。

1. 「住蓮御房安楽御房縁起」(小冊子)

易行寺には「住蓮御房安楽御房縁起」があり、今も参詣の人々に配付され、当時の史実が住職により生々しく伝えられている。

その縁起書には次のように記載されている。

滋賀県近江八幡市千僧供町にある御僧塚と曰へる

は住蓮御房安楽御房の墳墓なり 黒谷の元祖法然

聖人 始て念佛の一門を開き一心専念の義を弘め

玉ふ 世普くこれにこそぞり 人ことごとく世に歸

(くい) しき 聖人の弟子に住蓮房安楽房と云へる

あり 住蓮房の俗姓は伊勢次郎左衛門清原信国と

曰う 安楽房は京都押小路外記入道阿部判官盛久

と名く 入皇八十二代 後鳥羽院 建永元年十二

月熊野に臨幸したもふ 其頃住蓮房安楽房は 東

山鹿ヶ谷にて別時念仏を修し六時礼讃を勤めける

に 定まれる節拍子なく をのづと哀歎悲喜の音



⑥「住蓮房首洗いの池」(大正元年)



曲をなすさま　いと珍らしく　貴とかりければ聴衆多く集り随喜する人あまたあり　其中御所御留主の女官松虫鈴虫となん曰へるもの亦発心して善尼となりければ　帝還幸の後之を聞こし召し　大に逆鱗なし玉ふ　折しも聖人の念佛弘通を悪しさまに強訴するものありけるゆへ　遂に路地往返高聲念佛を停止し剩へ聖人を流罪に処せられぬ　依て聖人は暫く小松谷法性寺の小御堂に閉居し玉ふ　住蓮房安樂房は聖人へ御暇乞とて法性寺へ参り　歸坊の途次（みちすがら）五条内裏の門前を通り念佛停止の高札を見て　乍（たちま）ち聲を揚げて曰く　輪王の位高けれども七寶久しく留まらず　天上の樂しみも多けれど　五衰早く現じける南無阿弥陀仏、　と称へしかば　使聴の官吏之を聞付け何者なるぞ御所の前にて禁制を破るとて直に近衛の西の獄舎に入れにける　建永二年住蓮房安樂房を訟庭に召されけるに　安樂房は獄吏（やくにん）に向かい五等此期になりて何の言條あるべ

きや唯念佛の為には命を惜しまず　末の世の為に身代わりとなるべけれどとて　専ら稱名念佛して更に餘言をまじえざれば　遂に獄吏　秀能に命ぜられ六条河原にて死罪に行はる　安樂房は其場に臨み　日没礼讃を誦し西に向ひて合掌し　一首の歌を詠じける

極樂に生まれんことのうれしさに

身をば仏にまかせぬるかな

哀れや劔の光に任せて遂に念佛の息たへ終んぬ  
又住蓮房は佐々木吉實に命じ馬淵繩手にて死刑に處せらる　住蓮房は素より覚悟の御身なれば差程に驚けることなく　西に向ひて端座合掌し一首の歌を讀て

このほどのかくし念佛あらわれて

彌陀にひかれし西へこそゆけ

念佛數百遍不思議の往生を遂玉ふ　時に承元元年二月九日なり　其折り兩房の遺屍を此地に合葬し御僧塚と曰ふ　爾後三十餘年をへてその側に一字

の堂舎を建立し安楽寺と曰ひ 蓮池を掘り住蓮池と名けしが 正慶中火災にかかり烏有となりぬ  
元禄二年の秋 村民其徳を追崇し 二基の石塔を築き 易行寺に兩高僧の御霊像を安置し毎年御祥月に法会供養を営む

右由来を示すものなり

滋賀県近江八幡市千僧供町 易行寺

## 2. 「住蓮房安楽房御木像安置の由来」

易行寺の本堂前に建立されている「石碑」には

当寺は永正十年（一五二三）小川道場として開かれ  
元禄九年（一六九六）本願寺より供養山易行寺と下付された。承元の法難（二二〇七）により住蓮房は

この地で処刑され、安楽房は（京の）六条河原で処刑された。元禄二年（一六八九）村の人達がお墓をつくり中山道沿にお堂を建て御木造を安置した。明治二十九年の大暴風雨によってお堂が流され、以来易行寺にまつられる。

と記載されているように、「住蓮房安楽房の御木像」は中山道沿いにお堂を建て安置していたが、明治二十九年の大暴風雨でお堂が流され、それ以来「易行寺」に安置されるようになったという。現在、御木像は本堂



⑦両上人御像・位牌

に向かって左脇間に住蓮房（右）、安楽房（左）が並んで安置されている。

それぞれの位牌には次のように刻字されている。

元祖円光大師御直弟 伊勢治郎左右衛門清原

入道 住蓮御房

元祖円光大師御直弟 阿倍判官盛久入道

安楽御房

両僧共に元は後鳥羽上皇にお仕えする武士であつたという。

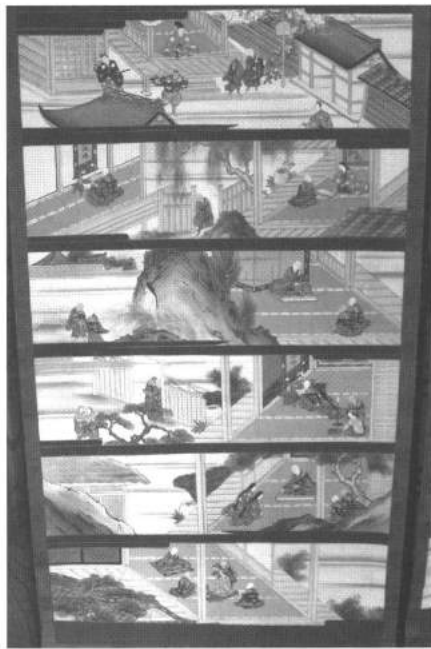
### 3. 「住蓮御坊安楽御坊縁起」(絵解き)

易行寺には、今から五〇年ほど前に作られた「住蓮御坊安楽御坊縁起」という二幅の掛軸が所蔵され、同じ時期に作られたこの掛軸の絵解き本である「住蓮坊縁起」(二冊)も所蔵されている。

この掛軸は、松虫姫と鈴虫姫が両上人の前で出家された経緯や、「安楽上人と一緒にこの地で吊つ



⑨ 「両上人絵解き」(右側)



⑧ 「両上人絵解き」(左側)

てほしい」との住蓮房の遺言から、元禄年間（一六八八〜一七〇四年）に、御僧塚に二基の五輪石塔を建てたことなどが描かれている。また、住蓮房の御命日の二月九日には毎年法要が営まれ、御絵伝も紐解かれて法難の事実が今なお語り継がれている。

#### 4. 住蓮房安楽房に関するお歌

易行寺には住蓮房安楽房に関するお歌が多く残されているが、特に法然上人が両上人の為に詠まれたというお歌は貴重なものである。

\*このほどのかくし念佛あらはれて彌陀にひかれ  
て西へこそゆけ（住蓮房辞世の句）  
\*極楽へまいらんことの嬉しさに身をば仏にまかせぬるかな  
（安楽房辞世の句）

①とげがたき苦しみの輪をぬけ出でて

この世からなる心安楽（安楽）

②苦をぬけて身を安楽と思えば

苦にかはりけん御恩忘るな（法然）

③消えがたき炎の車に引替へて

蓮の上が住ひとぞなる（住蓮）

④慈悲ふかき弥陀の恵みにあへばこそ

同じ心も蓮とぞなる（法然）

⑤哀れなる浮世の中にすこす身を

知りつつ捨つる人はつれなき（鈴虫）

⑥思ひきや花の相をおしむ共

末の薪をいかで忘れじ（松虫）

⑦おしみつつ野辺の新となさん身を

おしまで宿る花の臺ぞ（安楽）

⑧身になれし錦の小袖やきすてて

弥陀のみ国に墨（住）染の袖

（上）松虫・下 鈴虫

⑨かくて行くかりの此身と今日限り

あはん蓮の臺にてこそ（上）安楽・下 住蓮

⑩法の師の上なき慈悲に育てられ

思へばうれし身の行衛哉 (住蓮)

⑪身にかくて思ひだすにも心せばや

行末迷う人の心に (法然)

⑫此世には親子便りに思へ共

行く先の夜は南無の一声 (住蓮)

⑬親と子が現世未来とかわれども

待つぞや待たれ弥陀の浄土で (安樂)

⑭かりの世のせめくについて思ふ哉

永き闇路を出る嬉しさ (住蓮)

⑮何とてやゆう言の葉もなかりけり

南無阿弥陀仏の御名の他には (安樂)

⑯念仏を申すが罪になるとても

劫火にかわるお慈悲忘れじ (住蓮)

⑰かりの身の化業は何れちがへ共

向へたまへや蓮の臺で

(首切り役 佐々木吉實)

⑱先き立てば必ずむかひ申さなん

蓮の半ばをわけてぞ待つ (住蓮)

⑲一度は死なねばならぬ命ぞや

末の契りを待つぞ嬉しさ (安樂)

⑳今の世にまた逢う事も嵐吹く

弥陀のみ国においてたよりを (住蓮)

㉑切らるとも心は切れじ此つるぎ

よも金剛の信はきれまじ (安樂)

㉒このほどのかくし念仏あらわれ

弥陀に引かれて西へこそ行く (住蓮)

(四) 住蓮房母公の墓所 (市村長一宅) と尼が池

前出の『法然上人秘伝』によれば住蓮房が最後にしたためた手紙をご覧になった法然上人は、この書状を京七条に住む住蓮房の母親のもとへと遣わしている。更に住蓮房の母が取った行動について次のような記述がある。

状を披て見れば近江馬淵にて果ぬるよしなり。二目とも見ず 顔におしあて、啼より外の事はなし。良久しくありて我子の果ける所に尋行て骨をもひろ

ひ 我が子の形見にもせんとて かせ杖に懸りて  
近江國へ下りけるが 思ひは重る 湯水をたにも  
吞されは いかでか叶ふべき 関屋の辺にて倒れ  
臥して 八十三にして思ひ死に果られけり。哀れな  
りし事也。

近江八幡市に隣接する守山市焰魔堂町には、この母  
が我が子住蓮の非業の最期を聞いて失意のあまり身を  
投げて果てたとされる「尼が池」(現在は跡地)と、こ  
の池端にあつた母公の墓を自宅敷地内に遷し、今尚供  
養を続ける「市村家」が存在する。

以下に市村家での聞き取りの内容を記す。尚、「市村  
家」との関わりの深い近隣の浄土宗寺院「十王寺」ご  
住職石川明善尼と、『近江・湖南の風土記』(サンライ  
ズ印刷株式会社)の著者で同市内赤野井の浄土真宗本  
願寺派「常照寺」ご住職である安井澄心師にも同席し  
て頂いた。

市村家に伝わる『住蓮安樂両上人傳説之控』には  
伊勢國ノ住人戸波次良左エ門清次 壽永ニ落髮シ

テ法号ヲ住蓮ト云

安部判官盛久 文治ニ出家シテ法号を安樂ト云

同室ノヨシミラムスヒテ吉水ノ法然上人常隨ノ師

ナリ 承元ノコロ念佛ヲ称スルヲ惡テ近江國馬淵

西ノ丘ニテ殺サレ玉フトキ音瑞アリテ不思議ノ往

生ナリ 両師トモニ母堂有テ都三條辺ニ居ヲ同ス

二師ノ死跡ヲ尋テ東シ近江國ニ下向ス 草津ト守

山ノ中路ノ傍ニ小池有リ コノ池ニ捨身ス

一人ノ母堂俗名朝子ト云法号住然ト称ス

一人ノ母堂俗名時子ト云法号安然ト称ス

承元元年丁 卯三月廿三日往生ナラント

右ハ高田專修寺に古帋ノ表書トイヘル秘藏ノ書有

テ上ノ如ク記ストナン傳説セリ

巨細ハ高田一身田二行テ可尋也

右之書ハ焰魔堂ノ住人市村長左エ門殿ニ神應院禪

覺致借用書寫者也

元治元年 甲子六月九日午時

大寶天皇今宮應天太神宮 別當職小槻末葉 神

應院禪覺書

太刀之縁記来由ハ別記ニ書ス

と記されており、この地で住蓮安樂の各々の母が入水して果てたとしている。この事は他の諸伝記には見られない。この書面中に「焰魔堂ノ住人」と有るが、堂宇の名前ではなく地名を指しているようである。「焰魔堂村」地名の由来は、現在は浄土宗寺院で閻魔王・俱生神等を祀る「十王寺」のある辻として発生したものであるかも知れない。

その「十王寺」の略縁起にも

法然上人の御弟子住蓮房、同國馬淵村にて死罪の時、母の尼公あとを追きたりて、この村にて入水して、ともに往生ありけるも此村の靈縁にたよられたるものなり、その墓今も市村長左衛門の屋敷にあり、

入水の池も、尼池の字そのこれり

と記されている。

この略縁起には安樂房の母については何も書かれていない。また、安樂房の母については現段階では判らないが、住蓮房の母が我が子の処刑地へと下向するのは前出の『秘伝』と符合する。

市村家の伝承では、住蓮房の母（朝子）が処刑地馬淵を目指す道中、住蓮房の斬首がすでに執行された事を聞き、悲嘆のあまり身を投げたとされるのが、「尼が池」（尼の池とも云う）である。所在は、母朝子の墓所が有る市村家に真近の守山市焰魔堂町交差点付近である。現在は埋め立てられ整地した上に住宅が建っている。「尼が池」の跡地は、古くは地名を「馬澤村」といい、池の奥には当地に住んだ馬澤姓の一族の菩提寺が存在したと伝えられる。

しかし堂宇は無住期間が長かったのか自然に荒廃した。この寺はやがて廢寺となり、本尊である「阿弥陀仏像」は、市村家の隣に位置する真宗寺院「徳栄寺」

に遷座された。光背の様式から推測するに、元々有った馬澤家の菩提寺も浄土真宗の寺院だった可能性が高い。現在市村家も隣接の「徳栄寺」の檀家である。

現市村家当主の市村長一氏によれば農地解放の直前頃には既に堂宇は無く、「尼が池」にも水は無かったが、池跡の窪みはまだ有ったそうである。

市村家の伝承によれば、住蓮房の母は我が子が捕らえられた悲嘆によつて盲目となったのか、或いはそれ以前から盲目だったのか、いずれにしても目が不自由だったと伝えられ、失意の入水説とは別に、老体でしかも目の悪い母朝子が誤つて池に落ちたという可能性もあると言う。

処刑地である近江八幡市千僧供の真宗寺院「易行寺」に伝わる住蓮・安楽両僧の御伝の絵解きには、我が子の処刑地に向かう母に、道中で出会った役人（介錯の役人 佐々木義實か？）が禁を破つて首桶を改めさせる場面が描かれており、誤つて落ちた可能性は低いと考える。

また、市村家は敷地内に住蓮の母の墓所を設け、代々供養につとめている。母公の墓石は相当にさざれてしまつており、刻まれた文字は判読出来ない。



⑩住蓮房の首桶



その向かって右側には、正面を短冊状に削り、その長方形内に南無阿弥陀佛と彫られた無縫塔が建てられている。名号が刻まれた左側の側面にも刻字が有り、

大正二年十月於馬淵曝住蓮上人

七百周忌舉行之際亦於焰魔堂修

理該母公墓恭展香花以益延遠之

誠為之記念立此碑也

大正六年春 淨嚴院心阿愍成

と刻まれている。

この無縫塔は大正二年（一九一三年）法然上人七百年御忌の折に発願し、大正六年（一九一七年）に建立相成ったものなのであるうかと考える。

「心阿愍成」とは、大正四年に安土淨嚴院に晋山し、建立当時の住持であった大鹿愍成である。ちなみに愍成は建立の翌年大正七年（一九一八年）には黒谷金戒光明寺に転晋して法主に就任している。



①住蓮房母公の墓

建立当時の市村家当主は市村長左衛門氏（本名熊吉、大正十五年一月二十七日寂 法号は釈住道）であり、長左衛門氏と妻とめさんの間に生を受けたのが長蔵氏、その後継ぎが長次氏、そのご子息が現当主の市村長一氏である。

(五) 住蓮首討ちの太刀

市村家には代々、住蓮の首を討ったという太刀が収められていた。しかし、その所為とは考え難いが、当家に災いが重なった時期があつたようで、その為この太刀は、江戸時代前期の延寶五年（一六七七年）四月六日に、市村家の南西約一キロに位置する「大寶神社」（栗東市継）に奉納される事となった。現在も当社の大祭時には赤い錦の袋（代々市村家が調度することとなっている）に納めたこの太刀を捧持する者が、練り行列の先頭を歩く。

太刀の刀身には

奉納御太刀延寶五年巳 四月六日願主焰魔堂村

市村子孫 京五條橋通 伊勢屋治兵衛

又、柄の部分には、「吉次」との銘が刻まれている。

市村家に伝わる前出の『住蓮安樂両上人傳説之控』末尾には「太刀之縁記来由ハ別記ニ書ス」と有つたが、その「来由」には



⑫ 「太刀・鞘」

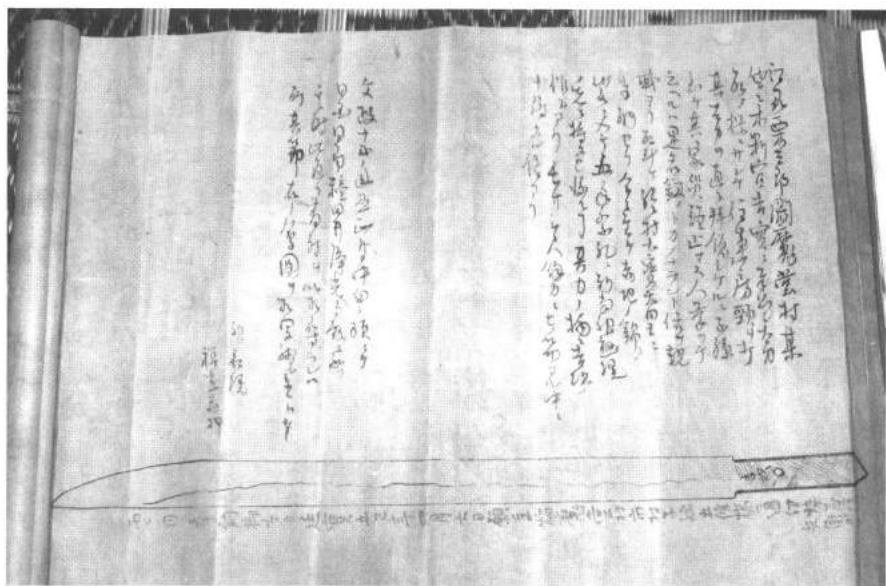
江州焰魔堂村市村某佐々木判官吉実ニ奉公シ太刀取り役ニサレテ住蓮房頸ヲ打其太刀ヲ直ニ拜領シケルニ子孫ニ至テ其家災難止マス人拳ツテ云ヘル

ハ是名劔ノトカメナラント 依テ親戚ヨリ取計テ  
 繚村大寶天王ニ奉納セリ 今ニ至テ赤地ノ錦ノ袋  
 二入テ毎年祭礼別當神應院ノ先ニ持セワタルコト  
 ……  
 と記されていた。

何故市村家が、代々母公の墓所を守り、首討ちの太  
 刀が納められていたのか。その理由がここにある。市  
 村家の先祖は佐々木九郎義實（太刀の来由には吉実）  
 の家臣であり、或いは実際に首を討った本人であった  
 可能性である。ただし、他にこれを載せる伝記等は見  
 当たらず、飽くまでも可能性に留まる。

住蓮房の身柄を預かった佐々木九郎義實の家臣であ  
 り、奇しくも母公入水の尼池に最も近い場所に住居し  
 ていたという事も、理由として考えられなくはない。

しかし、八百年もの昔から現在に至るまで代々墓所  
 を守り、毎月の命日に香花供養を手向けてきたのは、  
 市村家当家から次代の者達に、何らかの形でこの供養



⑬ 「太刀由来書き」

をし続ける事の申し送りが有ったからであろう。八百  
年間それを続けさせて来た歴代の市村家当主の方達に、  
専修念仏者住蓮に対して斬刑に値する悪僧との意識は  
感じられない。更にその母に対しても、敢えて自宅敷  
地内に墓所を守り続けている事から判断して、そこに  
ある感情は憐憫、或いは贖罪の思いではなかったかと  
考える。

(六)「遠忌法要の経緯」

ア、住蓮房上人七百五十年「遠忌大法要」

真光寺の調査によつて住蓮房上人七百五十年「遠忌  
大法要」の資料が明らかになった。

当時「住蓮房上人七百五十年遠忌奉賛会」から発行  
されている『小冊子』の表書きには

住蓮房上人七百五十年

「遠忌大法要」 知恩院門主猊下御親修

十月七日午前十時

(夜は安土淨嚴院通夜にて遺徳顕彰記念伝道)

於 近江八幡市馬淵繩手御墓所

(近江八幡駅より三キロバスあり六枚橋下車・近鉄

武佐駅より二キロ)

主催 浄土宗滋賀教区全寺院

と記され、昭和三十一年に厳修されている。

また、内容については「殉教の聖 住蓮房上人」と  
いうタイトルで「建永の法難」が説かれ、遺徳顕彰の  
ためにこの小冊子を参詣者や有縁の人々に配付したも  
のと考えられる。これは当時の法難に対する認識を知  
る上で大変貴重な資料なのでその全文をここに掲載す  
ることにする。

「殉教の聖 住蓮房上人」

慈悲の発見

西洋の宗教改革より三百五十年前に、日本の国で  
は一大宗教改革がなされています。それは浄土宗を

お聞き下され、お念仏をおすすめ下さいました法然上人様によってなされたのであります。法然上人様が浄土宗をお聞き下さる前にも貴い教え、立派な教え、多くのお宗旨もありましたが、誰れでも、たやすく救はれるというみ教えではありませんでした。そこで法然上人は、三十五年の間、いろいろ御学問御修行下さいまして、承安五年、四十三才の時私達を可愛いとし子であるとお呼びかけ下され、総べての者を救いたい、救い上げなければならぬとの親心をおかけ下されている、仏様のお慈悲をお見出し下されたのであります。

誰れでも、何時でも、何処でも、子が親を呼ぶように、南無阿弥陀仏と、み仏様の御名をお呼びするならば、我が子を思う親心のように、はかり知れないお慈悲の中に、私達をお育て下さるのがみ仏様であります。

子は親の恵みの中に、すこやかに育てられるように、お念仏を称え、み仏様のお慈悲に照らされる

時、丁度冬の日に降り積もった雪も太陽の光に照らされてとけるように、私達の心の中の迷いや悩みはキレイに消されて、ほんとうに明るい心、正しい心で、楽しい日々を送らせていただくことが出来るのであります。お念仏の声の中に、やがて家庭は自ら明るく、社会も明るく、平和なお国もつくることが出来るのであります。其の上、後には仏様の聖きみ国に生まれさせていただくことが出来るという、仏様のお慈悲をかねてふくめるようにおすすめ下さいました。

此の尊い、たやすいお念仏をおすすめ下さいますと、京の町はいうまでもなく、高い所から低い所へ水が流れるように、賢い人も愚かな人も、金のある人もない人も、男も女も法然上人様をおしたい申し、お念仏を喜ぶ人々は日増しに増えて参りました。

#### 鹿ヶ谷事件

他人の出世をねたむのは、あさましい人の心であ

ります。お念仏のみ教えが栄えるにつれて、此れを  
ねたみ、天子様にいろいろとお念仏をやめさすよう  
に訴える人たちがありましたけれどお念仏を止め  
ることは出来ませんでした。

法然上人様に住蓮房、安樂房というお弟子があり  
ました。住蓮房様は、御所をお守りする清原次郎左  
衛門信国という武士がりましたが、大變仲のよい  
阿部の判官盛久（安樂房）と共に、法然上人様の御  
説法を聞き、お弟子にしていただき、お二人で鹿ヶ  
谷の法性寺にお住まいになっていました。毎日六回  
礼讃のおつとめをし、お念仏をはげみ、またお念仏  
をおすすめになっていました。音楽を聞くことは大  
変楽しいことで、心の中までキレイに洗はれるよう  
な思いがいたします。礼讃というのはおつとめにフ  
シをつけておとなえするので、お二人の美しいお声  
でおとなえになる礼讃は、立派な宗教音楽の伝道で  
もありました。

法然上人様より一座の御説法を聞きて、仏様のお

慈悲がヒシヒシと骨身にしみこみ、念仏行者になる  
という、法然上人様は大變強い教化の力をお持ちで  
した。御所にお仕えする松虫鈴虫という二人の女官  
も、一座の御説法を聞いて、深くお念仏を喜び、更  
に出家したいとお考えになり、時の来るのをお待ち  
でした。建永元年十二月、後鳥羽上皇様は熊野へ御  
参詣遊ばされました、そのお留守に、松虫鈴虫のお  
二人は、ひそかに御所をしのび出て鹿ヶ谷の法性寺  
に、住蓮安樂の両御房様をおたずねになり、出家の  
志をお物語になり、お願いになりました。両御房様  
は、今お念仏の栄えるのをねたむ人達があつて、又  
どのような難題をかけられるかもわからないこと  
をお話しになり、出家を思いとどまるようにおさと  
しになりましたが、松虫鈴虫の命をかけてのお願い  
に、遂にお覚悟をなされ、出家得度の式をおあげに  
なりました。十九才の松虫は妙貞、十七才の鈴虫は  
妙智と名を改め、若い二人の尼僧は、其の夜一先づ  
大原へ、更に紀州粉河へ、念仏の声の中にいそいそ

と旅立ちました。時は建永元年十二月二十六日のこととであります。

### 殉教の血潮

上皇様熊野よりお帰りの後、誰云うとなく、松虫鈴虫出家のことが噂になり、特に念仏の教えの栄えるのをねたむ人達は、此の時とばかりに、上皇様に悪く申し上げましたので、遂に安楽房様は京都六条磧、住蓮房様は江州馬淵の縄手で御死刑ということになりました。

建永二年二月九日、身に縄をうけた三十九才の住蓮房様は、佐々木吉実にひかれて、江州馬淵縄手におみえになりました。

「極楽に生れんことのうれしさに

身をば仏にまかすなりけり」

お慈悲を悦ぶ念仏行者の、死にのぞんでの心の中を辞世にのこして、念仏の教えのために、美しい御最後をおとげになりました。それから丁度今年が

七百五十年の御遠忌をお迎えすることになるのであります。

### 念仏教徒の覚悟

可愛い可愛いお弟子がお二人までも死刑になられた、その時の法然上人様のお心の中はどのようなであつたでしょう。更に弟子の罪は師匠にもあるというので、法然上人様は七十五才という御老体で、遠く四国への御流罪ということになりました。

その時、お弟子方がおなぐさめ申し上げられたお言葉に、法然上人様は

「わたしはみ仏様のお慈悲をいただく時、念仏申せば死刑にするぞよと云はれても、此の尊い、有難いお念仏は申さずにはいられません」

と、お慈悲をお悦びの心の中をおもらしになりました。

法然上人様の思召しをそのままに、お念仏の教えのために、命をおささげ下さいました住蓮安楽両御

房様を偲んで、み仏様のお慈悲を、共に喜び、共に念仏して、悦びの中に、明るい家庭、明るい社会、平和な国をつくりあげ、来る昭和三十六年にお迎えする、念仏の元祖法然上人様七百五十年御遠忌の一大記念事業といたしたいことであります。

台聲

以上のように「法難」の経緯が分かりやすく語られ、今、住蓮房上人七百五十年「遠忌大法要」を厳修し、五年後にお迎えする「法然上人七百五十年御遠忌」の一大記念事業としたいと結んでいる。

また、知恩院門主猊下御親修の御法縁にちなみ、猊下が後に御染筆になり贈られたという「掛軸」が真光寺に大切に保管されていた。

「そのかみの ひ志里のちし保 今になほ

馬淵の左度に さく曼珠沙華」

昭和丙申秋住蓮安樂両上人七百五十年遠忌列里て

華頂山老衲 信宏(印)

という墨跡の内容に、刑場の露と消えていった住蓮安樂両上人への猊下の御心痛が今も偲ばれるお歌である。

## 六、おわりに

住蓮・安樂上人の亡き後も専修念仏への弾圧は止まることなく、ついに法然上人は七十五歳の高齢にも拘らず讃岐国(現在の香川県高松市)に流罪となった。翌年には摂津(大阪)の勝尾寺まで移ることが出来たが、帰洛が許されたのは法然上人七十九歳の十一月二十日、御往生の六十六日前のことであった。

そして、愛弟子の住蓮・安樂上人が念仏教化の拠点とした「鹿ヶ谷の草庵」を訪ねてみると、建物は荒廢し見る影もなく不憫に思ったことであろう。

さて、今回の調査では住蓮上人の遺跡を調査しながら、現地に伝えられる法難の伝承にじかに触れることができた。

そして、建永の法難から八百年が過ぎた現在、この貴重な体験を通して念仏の元祖法然上人が、



「われたとえ 死刑におこなわれるとも

このこといわずば あるべからず」

と、念仏停止のさなかにありながら命がけでお念仏の御教えを説き続けた尊いお姿を拝すると共に、念仏弘通に短い生涯を捧げ尽くした住蓮・安樂上人の顕彰を願うものである。

尚、現地調査にご協力いただいた多くの方々には深く感謝の意を表すると共に、ここに御礼申し上げる次第です。

合掌

【参考資料】

『住蓮山安樂寺 鹿ヶ谷縁談』（松虫鈴虫物語）

野田憲雄著

『念仏の殉教者』赤松良雄著 平成三年（易行寺）

『近江・湖南の風土記』安井澄心著 平成十五年

常照寺（浄土真宗本願寺派）

『浄土宗史の諸研究』三田全信著 昭和三十四年

『浄土宗史の新研究』三田全信著 昭和四十六年

「諸伝にみる建永の法難（一）―住蓮房・安樂房を中心として―」伊藤正順師

〔西山学報〕第五号・平成七年

「諸伝にみる建永の法難（二）住蓮房・安樂房処刑地を中心として」伊藤正順師

〔法然上人研究会〕平成八年

「諸伝にみる建永の法難（三）住蓮山安樂寺所蔵『安樂寺縁起』と供養山易行寺所蔵『住蓮房安樂房縁起』」伊藤正順師

文責者・現代布教班 佐藤晴輝

# 建永の法難に関する略年表

西暦	年号	天皇	上皇	摂政	関白	天台座主	朝廷・南都・北嶺等の動き	元祖御年	門下での出来事
一一〇一	正治二 建仁元 (一一一一)	土御門	後鳥羽	近衛基道		慈圓 (一)		六九	▲九条兼実 元祖を戒師として出家
一一〇一	建仁一 (一一一一)	〃	〃	〃	〃	眞性		七一	▲後白河院十三回忌に六時礼讃を修する。 ▲一七箇条制脚誡を作り門弟を戒しめ、天台座主に記誦文を送る。
一一〇三	建仁三	〃	〃	〃	〃	安全		七〇	
一一〇四	建仁四 元久元 (一一〇四)	〃	〃	〃	〃	〃		七二	
一一〇五	元久一	〃	〃	〃	〃	近衛家実	▲延暦寺二塔の修徒集結し、座主眞性に専修念仏停止を訴える。	七二	
一一〇六	元久二 建永元 (一一〇七)	〃	〃	〃	〃	承圓	▲興福寺衆徒念仏禁止の訴状を上皇に奏上す。「興福寺表状」	七三	
一一〇七	建永一 承元元 (一一〇七)	〃	〃	〃	〃	〃	▲興福寺の三綱、念仏禁止の宣旨を促す。 (八・五) ▲後鳥羽院 熊野へ臨幸 (一一一九) ▲御所の女房出家の事有り。 ▲専修念仏停止の宣旨下る。(一一二四) ▲一向千修の輩を召し捕らえる。 ▲後鳥羽院 高野山へ幸す。 ▲勅免の宣旨下る。(一一二八)	七四	▲院宣により法本房・安業房召し捕らえられる。(一一二四) ▲法本房行空破門 ▲元祖 東山大谷から小松殿に移る。 ▲熊谷通生往生 (四・五)
一一〇八	承元二	〃	〃	〃	〃	〃	▲住連・安業死罪 (一一九) ▲元祖の土佐流罪決まる。 (一一八)	七五	▲兼実公 寂 (四・五) ▲元祖撰津勝尾寺へ
一一〇九	承元三	〃	〃	〃	〃	〃	▲兼実公 寂 (四・五) ▲元祖撰津勝尾寺へ	七六	
一一一〇	承元四	順徳	〃	〃	〃	〃	▲元祖撰津勝尾寺へ	七七	
一一一一	承元五 建暦元 (一一一九)	〃	〃	〃	〃	〃	▲後鳥羽院 元祖の帰洛を敵す。	七八	
一一一二	建暦二	〃	〃	〃	〃	〃	▲元祖帰洛す。東山大谷へ。 (一一二〇) ▲元祖往生。(一一二五)	八〇	

## 視覚的布教資料の研究（パネル法話の検討）

### 1. はじめに

現代布教班では、新しい布教のスタイルとして、パネルシアターを利用した法話（パネル法話）を提案してきた。パネルシアターとは、一九七三年に浄土宗教師の古宇田亮順師が創案した教育法であり、パネル布を貼った舞台に、Pペーパーに書かれた絵や文字を貼ったり外したりしてお話しや歌あそびをする表現方法であるが、これを法話布教の場利用するのである。

法話に用いる利点としては、聴衆の集中力の持続、イメージ化による概念的な内容の説明、登場人物の整理をつける事、などが考えられる。また昨今ではパソ

コンを利用する事で、Pペーパーに直接絵を印刷する事ができるため、作成過程が比較的簡単になった。そこで、当研究班では法話の素材となる絵を提供することによって、パネル法話を試みる布教師が増えるのではないかと考えている。

### 2. 研究経過

平成十六年度は、『観経』パネル法話として「王舎城の悲劇」を試験的に制作し公開講座にて実演発表をした。平成十七年度は『無量寿経』パネル法話の制作を検討し、その作画講師を笹脇昌恵師にお願いして、三作品という形に仕上げた。その全体像を、『教化研究』

17号に絵コンテ形式で掲載したのである。そして、その画像データを浄土宗教師に提供する目的でCD-ROMを作成した。パネル法話作品の解説、実用例は、マイクロソフト社の「パワーポイント」、及びウェブデモ社の「ビューレットカム」というソフトを利用して同CD-ROMに収録した。その制作にあたって法話原稿の録音を、村田洋一囑託研究員協力のもと、声優の山口奈々氏にお願いをした（このCD-ROMは希望される方に、無償でご提供する）。

### 3. 今年度パネル法話試作報告

今年度は「法然上人御一代記」パネル法話の制作にとりかかり、笹脇昌恵講師のもと年四回のペースで原稿、作画の検討を行ってきた。尚、御一代記の原稿作成にあたっては、基本的に『法然上人行状画図』（以下「勅伝」）に準ずるが、「勅伝」に書かれていないような他伝記のエピソードに関しても、宗義上問題がない限り、取り入れていくものとした。

今回教化研究に収録するのは「怨親平等の聖者」「智者のふるまいをせず」の二作品である。以下にそれぞれのコンセプトを記す。

#### ①「怨親平等の聖者」ご生誕／父の遺言

「法然上人御一代記」は、どの時点で、いくつに区分するのが望ましいかと言われるが、一般的にはご生誕から定明の夜討ち、時国の遺言まで、で一区切りとする事が多く見うけられる。『勅伝』ならば第一巻に相当する。ここままで一つの法話として成り立たせるために、話のテーマを「怨親平等の聖者」という一点だけに絞り、現代の世相も合わせ見て、法然上人讃仰の一席とした。

#### ②「智者のふるまいをせず」比叡登嶺／開宗

この内容を厳密に言うとは、親覚のもとで出家、比叡山登嶺、黒谷隱遁、清涼寺参籠、南都歴訪を経て立教開宗までと、一席の内容としては量がありすぎる感も

あつた(「勅伝」ならば第二巻、第六巻までに相当)。しかしながら、この内容をそのまま使用するのではなく、むしろ、その席で自分が伝えたい部分だけをピックアップして、たとえば四人の師匠がいたという点の強調とか、比叡山の寒湿論貧の厳しさを強調するなど、適宜変更は可能だと思われる。

さて筆者は前回、今回と報告したパネル法話を、実際に数回行ってみた。また大会場において、プロジェクトを使用してパネル法話を行った事もあるが、一般的に好印象で受け入れられた手応えがある。またお年寄りの多い寺院での法話以上に、高校生を対象とした研修会においては(目新しさゆえか)、非常に効果的であつたと思う。

しかしながら常々感じる事は、絵を見せる「時間」と「タイミング」こそ技術を要するのであつて、筆者は未だにそれで失敗を繰り返す事が多い。つまり「時間」とは、絵を多く見せすぎると聴衆はそれに飽きてしまひ、思考そのものがストップして逆効果になつてしま

うという事。また、「タイミング」とは、最初序説(まくら)中には、絵を一切使用せず、ちやうど聴衆が中だるみをはじめた頃に、絵を見せる事が非常に効果的だという事である。

もちろん、パネルシアターやプロジェクトなど、特殊な道具を使ったとしても、布教師が自分の信仰をしみじみと、自分の言葉で伝え説くことがなければ、聴衆の共感を得られないだろうし、法話とは呼べないであろう。その点に於いて、過去の「絵解き説教」が多分に大衆芸能、娯楽化していった事を忘れてはならないと思う。

## 6. おわりに

我々の提供するこれらの試作は、あくまで法話布教の一可能性を示したに過ぎず、これが全ての聴衆、全ての会所に対して効果的と言うわけではない。また内容も含め、結局のところ、パネル法話も通常のパネルシアター同様、演者の話術や自由な発想があつてこそ、

聴衆とのコミュニケーションに活き、共感させることに有効なのである。

なお、来年・再来年度も「法然上人御一代記」パネ  
ル法話の作成を引き続き行い、今回同様の形でのご提  
案をさせていただく予定である。諸大徳よりの忌憚の  
ないご意見・ご指導が頂戴できれば幸いである。

現代布教班 後藤真法

#### 法話参考図書

『勅修法然上人御伝全講』早田哲雄・著

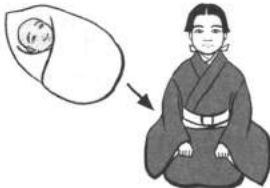

『願の聲』松島定宣・講説

『法然上人御一代記』一龍斎貞花・作

『ひとすじの白い道 物語法然さま』山本正廣・著

## 『法然上人御一代記』 パネル法話原稿①

怨親平等の聖者 「ご生誕～父の遺言」		作・後藤真法 画・笹脇昌恵
①		<p>“怨親平等”・敵も味方もなく、平等の慈悲をもって怨敵も近親も同視する心・この崇高な精神、教えに対して誰も異論を挟む事はできないでしょう。しかし実際問題となると、果たしてどれだけの方が実行できるでしょうか？</p> <p>例えば、もしも自分の肉親が他人に殺されたとしたら、相手を恨まずにいられるでしょうか？それがどんなに立派な教えであっても、この私をそれを実行できないならば、絵に描いた餅になってしまう。</p> <p>しかし長い日本の歴史の中で、その精神を身をもって示されたお方こそが、私たちの宗祖法然上人なのです。</p>
②		<p>浄土宗を開かれ、「南無阿彌陀仏」のお念仏をお伝えする事で、万人に心の救済を与えた法然上人。お生まれは長承二年、平安時代の末期、まさにこれから源平の戦いが始まろうとする動乱の世の中でした。</p> <p>故郷は美作の国、ただ今の岡山県久米郡、久米南条福岡の庄という所に、漆間時国という名の侍がおりました。押領使という役職で、地方の内乱や、暴徒の鎮圧、盗賊の逮捕など、いわばその地域を取り締まる警察署長のような仕事です。その妻は地方の豪族、秦氏の娘。</p>
③		<p>二人はとても篤信な夫婦であり、立派な子どもを授かるよう、屋敷より6kmも離れた所の“岩間の観音さま”に、二週間お籠りをして祈願されたと言われていました。</p>
④		
④		<p>その願いがすいに通り、秦氏さまはご懐妊されます。昔から偉い方のお母さんをご懐妊の時、不思議な夢を見ている。有名なのはお釈迦様のお母さま、マアヤ夫人は白象がお腹に入る夢を見ました。弘法大師・空海さまのお母さまは、天竺の高僧がお腹に入る夢を見ました。そして、法然上人のお母様はなんと剃刀を飲むという夢を見たそうですが、剃刀とは“おかみそり”すなわち“人々に戒を授ける”方がお腹に入られたとの御暗示でしょう。いよいよ四月七日の正午に可愛い男の赤ちゃんが生まれました。その時、めでたい証の紫雲がお屋敷の空にたなびき、大きな椋の木にはどこからともなく白幡がふた流れ飛んできて、梢に掛かり良い鈴の音をならしたというお話も残っております。</p>



<p>⑤</p> 	<p>時国夫妻は大いに喜び、聡明な子に育ってほしいと、勢至菩薩さまの名を取って、勢至丸と名付けました。この勢至丸こそ後の法然上人その人です。すくすくと成長されて早、九歳となられました。</p>
<p>⑥</p> 	<p>さて、この稲岡の庄という所は、平安時代から始まった庄園制度において、京の都にいる領主の代行をする預所という役人がおりました。その預所をしていたのが源内定明という侍。 時国の役職、押領使はもっと古い時代からある役職ですから、お互いうまくいきません。定明にしてみれば、自分に挨拶にも来ない時国の存在がなまいきでしょうがありません。</p>
<p>⑦</p> 	<p>その思いが高まって、いよいよ我慢が出来なくなり、手勢を引きつけて時国の屋敷に夜討ちをかけるという事件が起こりました。卑怯な奇襲攻撃です。</p> <p>「時国、覚悟！」 「ううっ！」</p> <p>この様子を勢至丸も黙って見てはいられません。小さな弓を取り出してヒュッと放つと、定明の眉間に刺さりました。</p> <p>「ええい、もう良い、みんな退け！」 と馬に乗ってひきあげます。この傷が残り、自分が夜討ちの犯人だと分かってしまうことを怖れて、この後定明はどこかへ隠れてしまいました。</p>



<p>⑧</p>		<p>父、時国は深手を負いました。瀕死の重傷、いまわの際に勢至丸を呼びます。</p> <p>「お前はこの事を武士の恥だと思って、敵を恨んではいけませんよ。これはすべて私の前世から続く罪の報いなのだから。もしこれをまた恨みとして敵を討てば、敵もまたそれを恨みに思い、尽きることがないだろう。それよりこの世俗を捨てて僧となり、私の菩提をとむらってくれ、そしてお前もまた、自分の迷いを断ち切るのだ」</p>
<p>⑨</p>		<p>そして時国は合掌し眠るように亡くなられたのです。もちろん主を失い跡取りの決まらない漆間家はお家断絶・家来もいなくなります。秦氏は自分の弟が住持している山寺に、泣く泣くわが子を預ける事を決意致します。そしてその数年後には、比叡山に登嶺することになるのですが、そうなるともう、二度と会うことも出来ないでしょう。夫を失い、たった一人の心の支え、わが子と離ればなれになる、お母さまの心境はいかなるものであったでしょうか。</p>
<p>⑩</p>		<p>そして、その日から法然上人の求道の人生が始まるのです。それまで権力者の御曹司として何不自由なく暮らしていた、わずか九歳の子が、一夜にして家を失い、父の死、母との別離、一族崩壊と、まさに諸行無常という現実と直面したのです。</p> <p>その中で聞いた「敵を怨むな」という父の遺言。これは当時の武家社会を考えてみますと、敗者が自らを奮い立たせようとする、その生き甲斐を無くしそうな言葉に思えます。しかし、結果的に九歳の少年勢至丸の目に焼き付いたこの原風景こそが、そののち三十年以上にわたり教えを追い求めた、強烈な求道エネルギーの源泉となったことは間違いありません。</p>
<p>⑪</p>		<p>そして、出された結論は皆さんご承知の通り、「南無阿彌陀仏」と称え阿彌陀さまの西方極楽浄土へ往生を願うこと。ただそれだけです。しかしコロンブスの卵と同じく、この単純な答えを出すために、法然上人がどれ程のご苦勞をされ、研鑽を積まれたことでしょうか。</p>

<p>12</p>		<p>「どうしたら全ての人たちが、敵も味方もなく平等に思えるのだろうか？ 戦い、憎しみの尽きないこの世の中では、誰もが辛く悲しい思いをしているじゃないか。理不尽に家族を殺された者たちは、どうしたら心の平安を取り戻すことができるのだろうか？」</p>
<p>13</p>		<p>毎日、飽くことなくお経本に向き合って、やっと出された究極の結論は・・・</p> <p>「阿彌陀さまにお念仏をお称えて、みんなが極楽浄土に往生できると、確信すればよい。阿彌陀さまのお迎えをいただいて、誰しも平等の来世に連れて行ってもらえれば、そこで懐かしい人たちとも再会できる」</p> <p>「そして、私の歩んできた過去の世界の道理や必然性を、極楽浄土から客観的に眺めてみるのができたなら、暗れてこの世での怨みも捨てられるであろう。むしろ憐れみの心を起こして、敵さえも極楽浄土へ導いてあげよう。この世で縁のあった人たちを、敵さえも平等に導いてあげようじゃないか」</p>
<p>14</p>		<p>これこそ「敵を恨むな」という父の遺言に対する、法然上人のお答えでありました。</p> <p>“父の仇”という怨みを捨て去り、現実世界に苦しむ多く人々の心を救済した法然上人こそ、“怨親平等”という究極の理想を、その御一生をかけて私たちにお示し下さった聖人なのであります。</p> <p>私たちが生きているこの現実世界では、「敵を恨むな」と言われても、かなわないような出来事もあるでしょう。しかし、お念仏を称えることで、“怨親平等”に生きられた法然上人のお徳の、せめて万分の一でも与りたいのであります。どうぞ共々にお念仏をお称え下さい。</p> <p style="text-align: right;">同称十念</p>

## 『法然上人御一代記』 パネル法話原稿②

智者のふるまいをせず 「比叡登嶺～改宗」		作・後藤真法 画・笹脇昌恵
<p>①</p> <p>智者のふるまいを せずして ただ一向に 念仏すべし</p>	<p>法然上人ご遺訓「一枚起請文」に、「智者のふるまいをせずして ただ一向に念仏すべし」とありますが、この「智者のふるまいをせず」とはどういう意味なのでしょう？</p> <p>別に「勉強して賢くなろうなどと、思いなさんな」と論されているわけではありません。何故なら、法然上人ほど勉強された方、研鑽を積まれた方はいらっしゃらないのですから。仏教に限らず、いろいろな学問を勉強することが悪いはずはありません。</p> <p>ただし、その勉強した知識は時としてお念仏の邪魔となり、慢心に繋がったり、あるいはもっと奥の深い教えがあるのでは・・・と詮索したりする事を諫めていらっしゃるのです。往生の為にはお念仏以外に必要なは、勉強して知識をつけることは結構けれども、往生のためには、つまるところ何も勉強していない人と同じようにお念仏を称えなさい、とおっしゃっているのです。</p>	
<p>②</p> <p>智慧第一の 法然房</p> 	<p>さて法然上人の時代、体系づけられた学問と言えば、まずは仏教でしょう。その仏教の最高学府である比叡山には全国各地から優秀な方達が集まって来ました。今で言えば東大・京大といったエリート校とも言えましょう。その秀才たちを差し置いて、法然上人は何と呼ばれていたか？</p> <p>“智慧第一の法然房”と呼ばれていたのです。そして比叡山では、そうした学僧たちの討論が、日々繰り広げられておりました。にも拘わらず、「智者のふるまいをせずして ただ一向に念仏すべし」・・・こんな大胆な事を言い切る法然上人とは、いったいどんなお方なのでしょう？</p>	
<p>③</p> 	<p>法然上人には四人のお師匠さまがいらっしゃいます。何故かという、あまりの利発ぶりに「この弟子は私の手に余る賢さだ」と言うことで、どんどん上の方に遣わされていくからであります。</p> <p>最初の師匠は那岐山菩提寺というお寺において、叔父にあたる観覚上人のもとで学ばれます。まだ法然上人が勢至丸と呼ばれていた頃です。あまりの聡明さに舌を巻き、観覚上人も「自分の小さなお寺に置いておくのは勿体ない」と、十三歳になった勢至丸に比叡山に登る事を勧めます。</p>	

<p>④</p> 	<p>その昔伝教大師最澄さまがお開きになった比叡山延暦寺。まずは観覚上人のお友達、北谷の持宝房源光上人の元に使われます。観覚上人から源光上人に当てられたお手紙がなかなかユニーク…「文殊像一体を進上す」？</p> <p>でもお供に付いてきた人に聞くと、 「この少年以外何も荷物は預かってませんよ」 「ははあ、それほど賢い子なのか」 文殊像とは「文殊の智慧」の文殊菩薩、源光上人、その意味をすぐ理解して勢至丸を弟子に迎え入れました。</p> <p>ある時、『四教義』という教科書を読ませていて、 「何か分からないところはあったかね?」 「はい、ここが分かりませんでした」 と付箋をいくつか付けています。その部分を見て、びっくり！それは昔から学僧達が議論して、答えも出せないような所ばかりだったのです。</p>
<p>⑤</p> 	<p>それで源光上人も「こりゃただ者じゃない」と、今度はさらに上の学僧、皇円阿闍梨という方の部屋に遣わされまして、そこで正式に黒髪を落とし袈裟を着け、受戒をして一人前の僧侶となれました。</p>
<p>⑥</p> 	<p>しかしながらこの頃より、勢至丸の心には比叡山の僧たちに対して、どうにもやるせない思いが起こっていました。</p> <p>『平家物語』の中で白河法皇が、「私の自由にならないものは、すぐに氾濫する鴨川の水、双六の賽の目、そして比叡の山法師」と言ったように、その頃比叡山の僧侶には、自分たちの権力を誇示するために、武器を持って朝廷を威嚇する者がおりました。</p> <p>さらにはエリート僧たち同士の出世争いも絶えない、そういった僧社会に対して、疑問があったのです。</p>
<p>⑦</p> 	<p>「私は出世するために学問をしているのではない。ただ、誰もが救われる教えを求めているだけなのに・・・」</p> <p>その事を師匠の皇円阿闍梨に話し、山林に隠遁する事を願い出たのですが、それが許されません。皇円阿闍梨も優秀な弟子を手放したくなかったのでしょうか。</p> <p>「ならばまず『天台三大部』六十巻を読んでみて、それから考えてみなさい」</p> <p>すると普通の人が一生涯をかけて読む「天台三大部」を三年で読破してしまいました。</p> <p>驚いた皇円阿闍梨は・・・</p> <p>「本当にたいしたものだ。これからも天台宗のトップを目指して精進しなさい」 とアドバイス。</p>

<p>8</p> 	<p>しかし、もはや勢至丸の決意は変わりませんでした。十八歳になった年、比叡山の中でもさらに奥まった所にある西塔黒谷、慈眼房叡空上人という方を訊ねていきました。</p> <p>深い谷、道らしき道もないような森の奥深くきびしい所です。勢至丸は新しい師匠となった叡空上人に、父の遺言が忘れられずここに修行に来たことを話しました。</p> <p>「なるほどあなたは、小さい頃から自然とすすむべく仏の道に入られたようだ。それを法然道理と言う。今日から法然と名のりなさい。また法名は前の師匠の源光と、私、叡空から取って源空と名乗るがよい」</p> <p>勢至丸はここで法然房源空と名づけられたのです。</p>
<p>9</p> 	<p>さて、ここで少し比叡山のお話を致しますと、比叡山の厳しさを表すのに「論・湿・寒・貧」という言葉が使われます。</p> <p>「論」とは自分の学んだ学問を互いに討議し合う、真剣な討論の厳しさ、今で言うディベート合戦です。</p> <p>「湿」とは湿度が異常に高く、夏は霧深く冬は降雪の続く厳しさ。</p> <p>「寒」はもちろん冬の極寒の厳しさであり、そういった土地であるから作物が実らず食べ物が少ない。</p> <p>当然「貧しい」生活をせざるを得ないという意味です。</p> <p>特に、この西塔黒谷は、冬場どれ位の寒さであったか・・・当時はマイナス20度位であったろうといひます。現在でもマイナス15度位。黒谷の青龍寺に実際に勤務されていた方の体験談ですと、四畳半の狭い控えの間で、一日中石油ストーブを焚いても室温はマイナス3度以上に上がらなかったそうです。</p>
<p>10</p> 	<p>そして「論」の厳しさ・・・法然上人は師匠の叡空上人にも討論をしばしばされています。学問上違ふと思ったら、たとえ師匠に対しても、自分の説を主張されました。</p> <p>時には、叡空上人が怒って木枕を投げつけたこともありました。でも、その後冷静になった叡空上人はちゃんと謝りにくるんです「すまん。お前の言うことの方が、天台大師さまの考えに合っていたようだ」</p> <p>この叡空上人の真摯な姿勢もまた、見習うべきところがありますね。</p>

<p>⑪</p> 	<p>この厳しい環境において、ただ一人経蔵に籠もり入り、この苦しみ多い世界から逃れる方法を探し続けられました。</p> <p>しかし次第に、法然上人にも焦りが生じてきたのではないのでしょうか。父の遺言を受け僧侶となって早や十五年、未だ自分の納得できる教えにはたどりつけないままなのです。</p>
<p>⑫</p> 	<p>法然上人は師匠に暇を乞い、二十四歳の時、一旦比叡山を降りられます。まず嵯峨の清涼寺に七日間お籠りを致しました。清涼寺には、三国伝来のお釈迦さまが祀られていて、都で一番の民間信仰、庶民信仰の場所でありました。</p> <p>この年は“保元の乱”がおこり、その戦争のしわ寄せは、みんな一般庶民に降り掛かっていました。さらには疫病、飢饉などが起こり、あまりにも酷い京の都の状況下で、苦しみから救いを求めて集まってくる民衆、必死に手を合わせる人々の姿を、法然上人はここで目の当たりにされるのです。</p>
<p>⑬</p> 	<p>その後は、奈良の名僧、高僧と呼ばれる方をあちこち訪ね回られます。つまり比叡山では得られなかった別の教えを求めて、南都六宗の三論・法相・華嚴・律・成実・俱舍宗の方々にお会いして答えを求めようとしたのです。</p> <p>ある意味、道場破り的な行動ですが、それだけ法然上人は悩み抜かれていたのでしょう。しかし、どのお方も法然上人の学の深さに舌を巻いて、逆に「弟子にして下さい」と言われてしまうありさま。</p> <p>また、弘法大師空海さまが開いた真言の教えにも法然上人は精通しており、その納得のいかない点を、夢の中で空海さまに問いかけるほど意識されておりました。</p> <p>しかし結局、誰も法然上人の疑問、問いかけに的確な答えを出してくれる人はいませんでした。</p>
<p>⑭</p> 	<p>やむなく比叡山の黒谷に戻った法然上人は、再び経蔵に入りびたり、お釈迦様の説かれた一切経を、昼も夜もなく読みふけるのです。</p> <p>すでに四十三歳となっていた法然上人、ある時、それまで何度も読んでいた、中国の普導大師が書かれた『観経疏』をもう一度、さらに二度、三度と読み返していくうち、ある一文が心に響き渡り、頭から離れなくなりました。</p>

<p>⑮</p> <p>一心専念弥陀名号          行住坐臥          不問時節久近          念念不捨者          是名正定之業          順彼仏願故</p> 	<p>「一心に専ら、阿彌陀仏の名を称え、動いていても、休んでいても、坐っていても、寝ていても、また時間の長い短いに関わらず、称え続けていれば、必ず極楽に往生できる。何故ならその行為こそ、我々を救おうとする阿彌陀仏の本願に叶っているからだ」</p> <p>とりわけ、その最後の五文字「順彼仏願故」（彼の仏の願に順ずるが故に）のご文をしみじみと会得し、「これしかない」という確信を持たれたのです。</p> <p>時、承安五年、春三月の事でありました。その後八百有余年、脈々と続いてゆく浄土宗の教えが、ここに開かれたのであります。</p>
<p>⑯</p>  	<p>「智慧第一」と讃えられ、お釈迦さまがお説きになったすべての教えを、当時のどの学僧たちよりも理解された法然上人。</p> <p>さらには、「論・湿・寒・貧」の比叡山、とりわけマイナス20度の激寒の中で、研鑽に研鑽を積まれたご苦勞の中、私たちにお示し下さった結論が、「智者のふるまいをせずして ただ一向に念仏すべし」のお言葉なのです。</p> <p>「往生の為には、私たちにはお念仏しかない。仏教を勉強することは結構だけど、往生のためには、何も勉強していない人と同じようにお念仏するしかないのだ」</p> <p>それほどのお念仏に対し、あれこれ詮索をしたり、現代的知識を加えて解釈しようとするのは、法然上人に対して誠に申し訳ない事です。</p> <p>「智者のふるまいをせずして ただ一向に念仏すべし」</p> <p>法然上人のご修行時代のご苦勞を偲び、この一節を深く味わいたいと思います。</p> <p style="text-align: right;">同称十念</p>

## 大日比法洲上人の『信法要決』について

## 一、はじめに

『信法要決』とは、大日比三師の一人である法洲上人（一七六五—一八三九）が著した結縁五重相伝会（化他五重相伝会、在家五重）についての書物である。隆円上人（一七五九—一八三四）の『浄業信法訣』を基に、説教を一日二座に配してその要義を記したものが一冊（勸誠篇）、そして七日目最終日の伝法に関するものが一冊（伝書篇）という構成である。

また、北條的門上人（一八〇八—一八八九）は、『浄業信法訣』『信法要決』の二本を基に、勸誠の要点を整理し自らの講説を加えて『信法要決辨釋』を執筆した。

今回報告の「結縁五重相伝勸誠録の比較研究」を進める上で、『浄業信法訣』を継ぎ、『信法要決辨釋』へと受け継がれる『信法要決』の確認・検討が必要となった。ここでは稀書として知られる法洲上人の『信法要決』について、整理報告するものである。（以下、諸師の敬称を略す）

●法洲 一七六五—一八三九（明和二十天保一〇）  
稟蓮社承譽上人託阿還源。江戸後期の浄土宗の僧。

大日比三師の第二。長門（山口県）大津郡河原郷の人。

父は中井氏、母は多賀氏。一七八八年（天明八）大

日比法岸につき剃髪、日課念仏三万遍を誓い、三經一論五部九卷をはじめとする宗学を学び、数箇月で



達成した。—中略—一八二二年（文化九）法岸の命により大日比西円寺を継ぎ、以後周防・長門両国以外へは出ることなく大日比一流の教線を張り、ことに破邪顕正に意を用い、吉水正流の宣揚につとめた。

—中略—一八一八年（文政二）寺職を靈幢にゆずり隱遁し、防長二州を教化し、二四年（文政七）靈幢辭職のあとを法道に継がせた。

（『浄土宗大辞典』より）

【諸本の整理】

①『浄業信法訣』・隆円著・文政六年（一八三三）刊。

Ⅱ『浄土傳燈輯要』下巻所収・大正九年刊（昭和五〇年再版）。

②『信法要決』（『浄業信法要訣』・法洲著・天保四年（一八三三）から同七年（一八三六）の間に記されたものと推定（後述）。

③『信法要決辨釋』・的門著・明治初期成立（明治三年の識語あり）。

Ⅱ『信法要決講説』・大日比三師講説発刊所・明治

四五年刊。

※著者名が「法洲」となっているが、内容は的門の『信法要決辨釋』とほぼ同一である。<sup>(2)</sup> Ⅱ『的門上人全集』第二輯所収・大正九年刊。

Ⅱ『浄土宗選集』第十巻所収・昭和五九年刊。

※明治四五年版を収録したもので、「法洲著『信法要決講説』」となっている。

二、『信法要決』について

(一)『信法要決』著述の由来

的門『信法要決辨釋』の序文に、『信法要決』著述の由来が記されている。（カッコ内は著者による注記）

往時専念の順阿上人（隆円）、一日語次予に告曰、文政年間、本山大僧正仰誉貞嚴尊者の顧命を承て、浄業信法訣五巻を著して、以て猊下に奉呈す。—中略—蓋し此の書の体なるや、偏に三代相承信法決の梗概を祖述するのみ。宜なるかなこれを席敷に配して、而も能く損益し裁制する人の鮮なきことを。爾

後天保中、本山大僧正聽譽説行尊者、不慧〔的門〕

をして長州法洲上人に使いたらしむ。命じて曰く、

化他譜法の初開導、暨加行中連日二次、講説の要義

を撮てこれを示せと。是に於いて上人初開導一冊、

伝法及び要偈一冊を製して、進獻せらる。然れども

此の冊も亦由え有つて隠没して伝はらず。且つ席敷

に充と謂ふと雖、文詞簡約、復た庸学（凡学の者）

者流（たぐい、その仲間）の輒易（容易）に左右す

る所以のものに非ざるなり。（『的門上人全集 第三

輯』）

ここから、『信法要決』（厳密には、後年『信法要決』

の名で呼ばれるもの）は知恩院説行大僧正の命により

法洲が執筆し、献上されたものであることが分かる。

執筆された年については、説行が大僧正在任中である

天保四年（一八三三）から同七年（一八三六）の間と

推定できる。

またその内容は連日二席の勸誡に配されているが、

要点のみの記述であり凡学の僧には容易に扱えないも

のどとしている。

●説行（一七七一—一八五〇）

天保三年（一八三二）二月二日知恩院住職を拜

命、六十七世の法燈をつぎ、翌四年（一八三三）四

月十四日大僧正に任じられた。在住四年、同七年

（一八三六）十二月十二日大坂一心寺事件に連座し

て十八日辞山、富小路五条の新善光寺に隠棲した。

（大橋俊雄著『浄土宗人名事典』より）

（二）稀書『信法要決』

的門が「此の冊も亦由え有つて隠没して伝はらず。」

と記すように、『信法要決』は当時すでに稀書であった。

その理由として考えられることは、大阪一心寺事件に

よる説行大僧正の辞山である。このため説行大僧正の

意向による『信法要決』流布計画といえるものが頓挫

したと思われる。「由え有つて」と明確にその理由を記

さなかつた訳も、大僧正辞山という事情からであろう。

的門の心情を推察できる。

(三)「信法要決」の構成とその写本

『信法要決辨釋』の序文に、「上人初開導一冊、伝法及び要偈一冊を製して」とあるように、『信法要決』は勸誡と伝書の二冊から成っている。ここでは佛教大学図書館に所蔵されている写本について記しておく。

①「初開導一冊」に該当するもの(勸誡篇)

A. 『伝法加行勸誡』(一冊・嘉永二年・靈洲書写・佛教大図・分類二四八・一/四三)

維時嘉永二己酉年四月七日九時世壽四十七歳最蓮社勝譽任阿法智靈洲

於山城国綴喜郡上品山蓮臺寺謹而奉拜写者也

先師稟蓮社承譽上人託阿還源法洲大和尚上酬慈恩

(奥書)

※嘉永二年は一八四九年。本文最初には『傳法加行中勸誡』と記されている。

②「伝法及び要偈一冊」に該当するもの(伝書篇)

B. 『化他伝法五重式』(一冊・嘉永二年・靈洲書写・

佛教大図・分類二四八・一/三九)

右者承譽上人託阿還源法洲大和尚御相傳之旨也

後來沙門謹而莫為輕心 云而已矣 維時嘉永二己酉年四月十八日着衣唱號謹敬而奉轉寫畢 抑予年

來之志願有 爰然に時因縁熟して茲歳三月十四日於華頂山大僧正顯道大和尚を拜して布薩傳戒奉納

受畢 誠に幸なるかなや又得此書は大雲院上人(的門)より傳ふ 今奉轉寫者城州綴喜郡上品山蓮臺寺

勝譽靈洲謹白(奥書)

上記二点は、共に靈洲という方により書写されたものである。その内容及び奥書にある由来により、この書が的門より伝えられた法洲の『信法要決』であることを確認した。また、的門は『信法要決』の勸誡篇にのみ講説を加え『信法要決辨釋』を著したが、伝書篇には触れていない。しかし、この法洲の伝書は、大正四年に『浄土真宗吉水正流安心相承』(大日比西圓寺藏版、烏田隆道発行)という題で発行されている。内容

に増減の違いはあるが、間違いなく同じ系統のものである。

その他、勸誠篇の写本二点が同じく佛敎大学図書館に所蔵されている事を確認した。<sup>(5)</sup>

C. 『五重前方便』（上下二冊・弘化四年・佛敎大図・

宗書四五四）

法州順阿真阿三師之説草ナリ 弘化四丁未年十一

月八日書写畢（奥書）

※弘化四年は一八四七年。本文最初には『傳法加行中勸誠』と記されている。また、本書は三日目初座から五日目次座の部分が抜け落ちてゐる。おそらく中巻があつたものと思われる。

D. 『傳法加行中勸誠』（二冊・明治一五年・近藤秀範書写・

佛敎大図・分類二四八、一／六六）

皆明治十五年十二月長光精舎ニテ書写ナリ 近藤

秀範（奥書）

#### （四）内容について

この項では『信法要決』の内容について若干触れる。

（概要は、【表】勸誠及び伝法の日程と内容を参照）

① 釈尊伝や、法然上人伝（初重伝燈分）が無いこと

『伝法加行中勸誠』初日初座の本文に、

信不信もえらばず猥りになすことに非ず。能々其機をえらびてなすことなり。

とあり受者を制限している。元來結縁五重相伝会の受者は篤信者に限られたものなので、釈尊や法然上人のご生涯は理解しているものとして勸誠が進められると思われ。

② 伝法の日程について

二日目次座の「伝法中約定」の文に、次のような記述がある。

要偈密室古來は夜分に作法せしかども今時は多く晝夜に執行す。されども一日兩席にては急ぐ心あり。

委悉に傳へがたく受者も勞れて能聴しがたければ兩日に傳ふるなり。

古来、伝法は夜分に行うものとしながらも、今時は昼夜二席に配する事が多いという。また、夜間二日間  
に渡る場合もある。

③結縁五重の本体について

『伝法加行中勸誡』の中で、法洲が当時の結縁五重の  
現状を次のように嘆いている。

今時五重々々と名のるといへども不正の紛れもの  
多し。西山名越云云下り下りてはありがた講秘事門  
徒等（初日初座）

結縁五重の浸透とともに、他流にも似た名目の儀式  
が行われていたものと推察できる。また、能化と受者  
の間にも結縁五重と授戒の混同があると指摘し、五重  
と授戒の關係を整理して次のように要点を述べている。

五重と授戒とを混乱し、五重すれば捨欲善心になら  
ねば罰を得るなどと心得、自損々他の大罪を造る人  
あり云云。其の捨欲善心にない得ざる者の生死を出  
離し往生成佛の大果を得るが五重相伝と云（初日初  
座）

又今時一七中の中に五重と授戒を一緒に相伝する  
とて、前行中は戒法のことを弁じて五重は唯要解と  
密室と二席に相伝する人あれども、是は心得違ひな  
り。その所以は授戒は誡門、五重は勸門、授戒は佛  
門の通法、五重は浄土の別法なれば法門の筋道差別  
あり。（初日初座）

これらを踏まえ、法洲は結縁五重の本体を次のよう  
に述べている。

今時五重を大事と云は三心具足専修念佛の義を異  
途なく相傳するが故に五重が一大事と云はるる也。  
（初日初座）

五重相承と云に就ては先其体を得心すべし。其体と  
は心存助給口称南無阿弥陀佛の一行にて善悪智愚  
の簡びなく順次往生ゆるぎなきと云佛祖三國相傳  
の趣を相承するが正体なり。（初日初座）

夫れ五重の正体は前四重か第五重十念の傳かと云  
に、前四重が正体なり（中略）安心をすなほに立る  
より外相傳なし。其相傳は前四重にあれば五重の正

体、前四重にあり。(六日目次座)

また、五重の本体について『化他伝法五重式』には次のように記されている。

其我園万行選佛名の相傳を受け、餘行を園き念佛一行とならるるとき、則ち各々の我園となる。此ときに人人の安心が三佛両祖及ひ代々相傳の祖師の御心と間に髪を入れずひしと一合する。其ひしと合する処が三國傳來佛祖相承無異途と云処で順次に決定して極樂の上品上生に往生遂ると定る処なり。爰を得と合点するが五重の肝要、傳法の骨髓なれば能々領納せらるべし。(要偈道場・傳法要偈四句の細釈)

猶此傳に就ても十念の傳斗に局執して口称念佛を忽緒にする僻見を可知。五重の体はかへすがへすも助け玉へと思ひて南無阿弥陀仏と申口称の日課称名なりと云こと決信すべし。(密室道場・第九氣息の傳)

以上、五重相傳の本体は口称の一行にあること、そ

して誤り無く相承する相傳の儀式であることが述べられている。

また、十念伝ばかりに重きを置く誤りを指摘している。安心を素直に立てた口称の日課念仏こそ正体であり、それは「前四重にあり」と明言している。この点隆円も『淨業信法訣』巻四の中で、

五重ノ正体ハ。是レ三心具足數遍ノ日課ナリ。其日課念佛ニテ往生スルヨリ外ニ別ノ子細ナシト安心決定シタル証拠ノ十念ト心得ベシ。

と述べており、両師の見解の一致を見ることができ

### 三、おわりに

説行大僧正の辞山により、『信法要決』は一部の弟子のみに伝わるものとなった。そして『信法要決辨釋』の序文に

屢しばしば二師（隆円上人・法洲上人）の許（うかが）に趨過（うかが）して、

親聞も亦た尠すくなくからず。因て謹んで二本（淨業信法訣・信法要決）を揚推（ようか）して、繁（か）を蔑り簡を補ひ、

間亦た自解を加て、以て一本（『信法要決辨釋』）を輯編す。

とあるように、的門により『信法要決辨釋』が著され、広く明治の世に流布することとなる。よつて中野隆元師が、

法洲の『浄業信法要訣』と、的門の『信法要決辨釋』

とは、其の内容、分類、廣狹、多少の差頗る著しきものもあるも、的門はもと法洲系統の人、其の所説の基準を法洲に取りて、此れを辨釋したるものなるにより、其の内容も的門のものを以て法洲を視知することが出来る（『浄土宗教学大系八』・P.210）

と指摘するように、『信法要決』の内容は的門の『信法要決辨釋』の中に収まっている。しかしまた、「其の所説の基準」つまり勸誡の骨子は法洲のものであることも確かである。

改めて、結縁五重の氣運盛んになりし今日に先師法洲上人のお示しを学び、その本意を確認することの意義は大きい。『信法要決』は、結縁五重勸誡及び伝書の

確固たる指針となるものといえる。

### 【註】

(1) 現在確認されている主な結縁五重相伝勸誡の資料については、『教化研究』第十七号（二〇〇六年）・P.123「別表1 結縁五重勸誡録一覽」参照。

(2) 『信法要決講説』の混乱については、中野隆元著『浄土宗教学大系八』第四章 信法要決辨釋解説・第五節 信法要決辨釋の内容」を参照。

明治四十五年七月には、京都三師講説発刊所より『信法要決講説』と名け烏田隆道の発行として法洲上人遺稿として出版せられて居る。此れは『三師遺稿』を称するが故に法洲上人の要決と誤解するものもあるも、法洲の要決を的門が講説したものである。（『浄土宗教学大系八』・P.123）

「講説と辨釋は一であるにも拘らず編者は何故に「講説」に的門の名を冠せず法洲の名のみ冠したのであるか、遺稿の講説なれば講説者の名を冠す可きが適當であるを思ふ。」（同書・P.136）

(3) 『信法要決辨釋』の序文では、法洲の著書の名は記されていない。『法洲和尚行業記』にも、著書として『信法要決』の書名はない。また、『略伝集』（浄全一八卷・P.54）法洲の項にも見られない。法洲執筆の当初から『信法要決』の題名が付されていたとは考えにくい。本文では、勸誡篇と伝書篇の二冊を合わせて『信法要決』と呼んでいる。しかし、的門は法洲の伝書篇には触れず、勸誡篇のみに講説を加え

て『信法要決辨釋』を著していることを考えると、勸誠篇のみを指して『信法要決』と呼ぶのが適當なのかもしれない。

- (4) 一心寺四十九世昇嘗の遺した出所不明の東照大権現の神像を、説行大僧正が開眼し証状を発給した。しかも葵の御紋を使用して表装し直した爲、幕府より罰せられる。(島野三千穂「一心寺事件の知恩院への飛び火と偽真人」『大塩研究』第三号・一九九二年)

- (5) 写本Cと写本Dは同じ系統のものである。写本C・Dには、写本Aと違って巻頭に「開口」として、『浄業信法訣』一卷の巻頭部分「傳前方便引」をそのまま載せている。また、写本Aの二日目次座にある伝法中約定が無い。そして六日目次座の最後には、『浄業信法訣』四卷(密室相承分)の「十念伝の三義」(印可決定義・見佛方便義・十念功用義)と、「勸誠 譬喩 總結」の部分が引用されている。

### 【参考文献】

『法洲和尚行業記』(『大日比三師傳』所収・明治四二年・大日比三師講説発刊所)

『浄業信法訣』(『浄土傳燈輯要』下巻所収・大正九年発行、

昭和五〇年再版・山喜房佛書林)

『信法要決辨釋』(『的門上人全集 第貳輯』所収・大正

九年発行・的門上人全集刊行會)

『浄土宗教学大系八』(中野隆元著・昭和七年発行、昭和五〇年再版・大東出版社)

『信法要決講説』(『浄土宗選集 第八卷』所収・昭和五九年発行・同朋舎出版)

『現代における「結縁五重相伝会」のあり方』(『教化研究』第十五号・平成十六年)

文責者・現代布教班 宮入良光



勸誡および伝法の日程と内容

二日目	初日
<p>○制戒訓読 ○制戒の文意 ・求法の心得 ・求時不得、不求自得の法門 ○嚴罰受苦の因縁</p>	<p>初座</p> <p>勸誡①（白箠制戒）</p> <p>○制戒訓読 ・浄土白箠流安心相承制戒の事 ○五重の濫觸 ○五重相承の体 ○制戒の文意（表題の字義）</p>
<p>○制戒訓読 ○誓言の心得 ○作法（帳読次第爪印） ○伝法中約定（帰敬三宝敬上慈下の事・日課一万遍以上など十条）</p>	<p>次座</p> <p>勸誡②（白箠制戒）</p> <p>○制戒訓読 ○制戒の文意 ・白箠制戒五箇条 ・雪山童子求法の縁</p>

五日目	四日目	三日目
<p>三重『領解末代念仏授手印抄』</p> <p>○訓読『領解抄』序文</p> <p>○三重伝燈分(『領解抄』製作の由来・その肝要)</p> <p>四重『決答授手印疑問抄』</p> <p>○四重伝燈分(『決答抄』製作の由来)</p> <p>○一向疑心者の往生・一分往生の答え</p>	<p>勸誠⑨(三重・四重)</p> <p>二重『末代念仏授手印』</p> <p>○授手印正宗分撮要</p> <p>・五種正行・正助二行分別の事・三心の事</p> <p>・五念門の事・四修の事・日課勸説</p> <p>・三種行儀</p>	<p>勸誠⑤(初重)</p> <p>初重『往生記』</p> <p>○訓読『往生記』(難達往生の機十三種々往生の機五)</p> <p>『小消息』</p> <p>○五重の次第</p> <p>○難達往生の機</p> <p>○往生の機 ○単直仰信の機</p>
<p>勸誠⑩(四重)</p> <p>四重『決答授手印疑問抄』</p> <p>○二河白道の譬喩</p> <p>○字義及び西要鈔の合釈</p>	<p>勸誠⑧(二重)</p> <p>二重『末代念仏授手印』</p> <p>○訓読『我法然上人曰善導の御釈を拝見するに四修も南無阿弥陀仏なり』</p> <p>○奥図の伝</p> <p>○総別十九箇条の口伝</p>	<p>勸誠⑥(二重)</p> <p>二重『末代念仏授手印』</p> <p>○訓読『授手印』序文</p> <p>○二重伝燈分(『授手印』制作の由来)</p> <p>○序文字義及び意義</p>

七日目	六日目
<p>○要偈道場二科</p> <p>①要偈道場(靈山淨土、二河白道)</p> <p>②伝法の由来(依憑相承、直授相承、三國二代、三國二代、半金色の伝)</p> <p>③伝法要偈四句の細釈</p> <p>○作法</p>	<p>勸誠⑪(第五重)</p> <p>第五重『往生論註』</p> <p>○五逆罪人の往生</p> <p>○三義校量の義(在心・在縁・在決定)</p>
<p>○伝法口決九ヶ條</p> <p>①焼香伝(附塗香觸香)②座具伝③初重自証門伝④二重授手印伝(附三重・四重)⑤凝思十念伝⑥仏祖拜面伝(附知識対面伝)⑦亡者回向伝⑧臨終用心伝⑧氣息伝</p> <p>○勸誠</p>	<p>勸誠⑫(第五重)</p> <p>第五重『往生論註』</p> <p>○十念伝</p> <p>○五重の正体について</p> <p>○頭伝・密伝 ○祐天上人因縁話</p> <p>○附、平生の用心(四箇条)</p>

## **Conclusion**

As a result of this questionnaire, a couple of themes have become evident. One is that western Jodo Shu priests are direly needed in more locations around the United States. The allocation of funding by Jodo Shu to train and support these western priests is crucial to the future of Jodo Shu Buddhism in the west. Without the dedication of Jodo Shu to make a concerted effort in the direction of globalization of the teachings and practice illumined by Honen Shonin, then people like the participants of this inquiry will remain left to the relative isolation of their geographic locations. For the first 100 years of Jodo Shu Buddhism in the west, the approach to only assist Japanese American immigrants has been greatly successful. However, in these rapidly changing times, remaining an entity that is relevant to western society necessarily requires an opening of the temple gates to welcome any and all even remotely interested in receiving Honen's gift.

The other major theme that became apparent was the type of rituals and the spiritual focus participants found to be critical to the application of Jodo Shu Buddhism to westerners in the United States. It is clear that western spiritual focus is more upon going for Birth and then returning to this realm to aid others (*oso-genso*), and not in the least about the worshipping of our ancestors. The monthly Special *Nenbutsu* (*betsuji-nenbutsu*) ritual of extended nenbutsu practice is a very important part of the life of many western Jodo Shu Buddhists, while the memorial rituals have little to no significance in the least. Perhaps the development of new rituals would best suit the needs of western Jodo Shu Buddhists. My hope is that with the support and guidance of the Jodo Shu, these issues will be addressed and the needs of western Buddhists will finally be met.

will be in English.” Rev. Yoshiharu Tomatsu offers an insightful perspective on this subject:

Attempts have already been made both in Jodo Shu and in other sects to modernize and to make more readily understandable the rituals of funerals and memorial services. For example, the sutras have been translated from classical Chinese into contemporary Japanese. However, these innovations have not struck an emotional chord with followers. It is my contention that these rituals are transformed when formalization is replaced by sincerity on the part of the temple, specifically the priest. What seems to be the essential difference between a meaningful and an empty ritual is not whether it has been modernized or not, but, rather, whether the priest who performs it is truly sincere or not. When a priest understands the meaning of the ritual himself, can synchronize this understanding with performance of the ritual, and then impart some of this meaning to the lay followers, the ritual becomes what it was essentially created for - a deep experience of the truth of the teachings. Unfortunately, this can often not be the case these days. This is fundamentally due to the outmoded and inappropriate methods of developing young priests in Japan, as mentioned earlier. Without going further into this complex issue, the cultivation of priests is a central concern amongst all sects in Japan today. In conclusion, I would like to put forth that well trained and committed priests would have the depth and confidence to not only attend to the basic religious needs of the people but to also develop new meaningful forms of ritual as well as teachings that confront pressing modern issues.

of hell, hungry ghosts and animals, the miseries of those who are sunk therein will be mitigated, and when they have finished their lives there, they too shall attain to perfect deliverance. It says in the Meditation Sutra, "When those dwelling in the three places of torment behold this light, they shall all obtain relief therefrom, and, after ending their lives there, shall obtain perfect deliverance."

While, personally, I do believe memorial services may serve the purpose of honoring the deceased and encouraging family members to begin sincerely practicing nenbutsu, I would hope that the families would not be confused as to where the deceased was during the forty-nine day period of time. If they were led by the priest to believe that the deceased was still in limbo on earth, then this would clearly be in contradiction to the teachings of Pure Land Buddhism.

A final question to the participants was concerning whether deathbed ceremonies, wakes, funerals and memorial services should be performed in the language of the family members of the deceased or not. This brought about a general consensus that they should be in the native language. The participants expressed their opinions that in order to be comforting to their family members, the language of the services would necessarily have to be that of the family. Otherwise the family members would not understand the meaning of the services and might become more disturbed as a result. One alternate suggestion offered was that some key prayers might be done in Japanese, with their explanations offered in English. One participant pointed out that as Buddhism had spread from India throughout Asia, much of the chanting was translated into the languages of the host country. He said, "It is only a question of time, before the same thing happens here in America. Some day in this country, the priests will be American and the prayers

“Regarding memorial services, since most of our ancestors who have passed away did not intend to enter into Amida Buddha's Pure Land, what kind of memorial services could we do for them that would best respect their families own religious beliefs? Are memorial services for our ancestors even necessary?” Most were concerned about maintaining respect for the religions of their ancestors, yet there was mention that memorial services for those of our ancestors who were not Buddhist need not take place in a Buddhist context. One participant mentioned, “Certainly among converts, there is no need for memorial services.” Another participant said, “We could do memorial services that mention their (the family's) faith, but ask that Amida Buddha welcome them and have compassion on them.”

In response to these comments I would like to quote what Honen once had to say concerning funerals and memorial services:

... you ought therefore to say masses for yourselves while you are still living. You should not depend on those who ought to pray for you after you are gone, but exert yourself to practice the nenbutsu now, and so hasten on to the Land of Perfect Bliss. Here you will attain the five supernatural faculties (*gotsu*, Skt. *pancabhijna*) and the three kinds of knowledge (*sanmyo*, Skt. *trividya*), with which you may be able to save all sentient beings who wander through the four modes of birth and the six transmigratory states, and with which also you may find out where your parents, teachers and elders are now living, so as to be able at will to come and welcome them to the Land of Bliss. Then having so done, you ought also to direct the benefits of your daily nenbutsu repetitions to the souls of the dead. If you do, Amida Buddha will illumine with his own light the three worlds

Land without ever having embraced the dharma. The teaching of *bonbu* is not supposed to be a cop-out on living an ethical and spiritual life. It is more of a way to learn self-acceptance and self-forgiveness. While Japanese Buddhist priests and their denominations are usually blamed for spreading a type of "funeral Buddhism" (*soshiki bukkyo*) where expensive kaimyo, funerals and memorial services are valued, the followers also share responsibility for neglecting their spiritual lives while they are alive and trying to make up for them at death. This is an issue that may also extend to the nature of Birth, and what would appear to be the more ethical notion of *oso-genso* as opposed to a seemingly more selfish sense of the Pure Land as a place to enjoy eternity with one's own ancestors.

This issue deeply concerned Rev. Shiio Benkyo (1876-1971), one of the most important Jodo Shu priests of the last century. He was the seventy-eighth abbot of the Zojo-ji Main Temple, and the founder of the Co-existence Movement (*kyosei-kai*), which centered on applying Honen's teaching to daily human life for the betterment of society. Rev. Benkyo was very much opposed to the practice of memorial services precisely because he felt they do not conform to Jodo Shu teachings. According to the Meditation Sutra, even the lowest level believer is instantaneously Born into the Pure Land at death. He thereby called into question the efficacy of seven-day memorials for forty-nine days.

Concerning the participants of the survey, they were unanimous that Confucian ancestor worship, as found in Buddhist funeral traditions in Japan, does not play any role in their lives. As one participant pointed out, "Honoring of ancestors is important, but not in a way that I would consider as being 'ancestor worship'. I would recommend something like a 'memorial day' where we remember them and speak of them, but don't actually 'worship' them in any sense." I asked the participants,



in this survey, such a connection is important, and they clearly expressed the desire to receive a *kaimyo* as soon as possible.

Recently, Jodo Shu has attempted to offer more often to western laymembers this precepts ceremony (*jukai-e*) at which followers receive a *kaimyo*. It was offered to nearly 100 people in Honolulu, Hawaii in 2006. Prior to that it was offered to 410 people in Brazil in 2005. As there is a growing number of very serious Jodo Shu students in the west, I hope that their spiritual needs will continue to be met. Hopefully alternate locations (like the temple in Los Angeles) may be added, and more frequent *jukai-e* be offered.

When the average Japanese Jodo Shu parishioner passes away, the priest will perform services and recite the *nenbutsu* for them. During the pre-funeral service (*makuragyo*), the precepts and dharma name are given to the deceased, very rarely before while they are still living. During the funeral, a ritual called *indo* is performed, representing the witnessing of Amida Buddha leading the deceased into the Pure Land. As the participants offer incense, they bid farewell to the deceased. These rituals after death are thought to insure the deceased's Birth into the Pure Land. Yet it confuses the teaching that one must, while still alive, sincerely dedicate one's self to the practice in order to attain Birth. These customs appear to elevate the power of the priest to a level above the practice itself. Many find this fact to be on one level compassionate to the family who wants to insure the deceased is in the Pure Land with the ancestors and will be waiting there for them when they also pass.

Yet on another, quite disturbing level, it brings into question the actual importance of one's daily practice, if the priest can come in after death and insure Birth for the deceased. It also brings into question the ethical nature of one's life in general if one can get into the Pure

realms and also visit the realms where our deceased loved ones have transmigrated.

While the ancestral aspect of Jodo Shu teachings are more mainstream within Japan and the Japanese American temples, westerners tend to be less interested in ancestor worship, and are more interested in the *oso-genso* bodhisattva ideal.

### **The Function of Ritual at Death**

In Japan, many people born into Jodo Shu families seem to not have a very clear understanding of the teachings of and the nenbutsu practice subscribed by Honen. For example, one important practice general to all Japanese Buddhism is receiving a dharma name (*kaimyo*) at the time of death. Receiving such a dharma name is a common practice throughout the Buddhist world as part of confirming faith in the Buddha and entering the dharma by receiving the lay precepts. Traditionally in Jodo Shu, a dharma name (*kaimyo*) may be given during three different times over a person's lifetime. The first is when the person takes the lay-precepts (*jukai-e*). The second is if the person receives ordination as a priest or nun (*tokudo-shiki*). And the final occasion would be at the time of death, where if the person had already received a *kaimyo* before, then the name would have additional posthumous titles added to the name. In Japan, most people only participate in the third occasion, gaining a dharma name at the time of death.

I asked the participants if receiving a dharma name (*kaimyo*) was important to them. All agreed that it was. However, some mentioned that receiving the *kaimyo* posthumously would be unimportant and perhaps even unnecessary. Having a *kaimyo* offers a sense of connection with the denomination, its teachings, practices, teachers and congregation members. For new convert Buddhists, like the participants

and widespread understanding, the Pure Land is a place to go and reside forever with our previous loved ones.

In this context, I asked what the participants thought might happen after the Pure Land experience had come to an end. Most agreed that they would hope to go on to help all sentient beings. Yet one participant stated that he would prefer to stay in the Pure Land forever in order to “study and spiritually guide others back in the saha world.” Most notable is the western Jodo Shu Buddhist's dedication to fulfilling the bodhisattva ideal. Where awakening to buddhahood is the ultimate goal, assisting others along the path is an incredibly important part of the process.

Actually, Honen did not put emphasis upon *oso-genso*, because he was concerned that practitioners might confuse it with samsara. However, the following quotes from Honen's personal letters and his guidelines for Birth in the Pure Land may offer different insight.

The real purpose is not only your personal salvation as Birth in the Pure Land but also for people's salvation in the world. Therefore, firstly, it is important for you yourself to attain Birth in the Pure Land in one of its higher realms so as to be able to guide others as soon as possible.

After gaining Birth in the Pure Land and subsequently enlightenment, as soon as possible by using your spiritual powers, guide people regardless of their relation with yourself and regardless of whether they believe or criticize the nenbutsu teaching.

If we practice the nenbutsu sincerely, we will go to the Pure Land as soon as we die and will attain enlightenment. Then we can guide to the Pure Land, in our own way, the beings of the six

one and the same, while another said that his parents "have already decided in their own minds [even though he had explained differently] that there is no difference between heaven and the Pure Land so they won't have that kind of problem." Another two participants agreed that their parents would respect their choice and beliefs and not have any problem with it at all. Most interestingly, one of the participants wrote the following: "They will hope that God will have mercy and see it only as a phase in my life. I have been baptized and Christian for a long time previously, and they would hope that would be sufficient for God's judgment."

I asked what the participants thought they might experience in the Pure Land. It became clear that they had somewhat similar concepts in this regard. Most agreed that the Pure Land was a place of "ultimate bliss," and a place where one may study and practice the dharma, eventually awakening to perfect buddhahood. There was mention that the Pure Land would be a blissful place with nothing to distract us from the dharma. One of the participants said that he was not sure what life in the Pure Land would be like, but "hopefully it won't last long, and we can come back quickly to help alleviate the suffering of others."

This brings up an important issue about what really happens in the Pure Land. The classical teaching emphasizes it is a place from which to become a buddha and gain final enlightenment (nirvana), thereby forever ending rebirth into others realms (samsara). Another interpretation which is found more strongly in the Jodo Shinshu rather than the Jodo Shu teachings is the notion of going for Birth (*oso*) and returning to this realm (*genso*) to aid others, as in the classical Mahayana notion of the bodhisattva path. There is also the more popular Japanese understanding of the Pure Land which conflates it with the indigenous notion of an ancestral spirit realm. In this popular

in the Meditation Sutra says that, “The person possessing the Three Minds (*sanjin*) will assuredly attain Birth in the Pure Land.” So we affirm that the nenbutsu repeated in this spirit of *sanjin* at any time has the same value as if said in one’s dying hour and is of greater value than all the practice one could do for a hundred years without it, for the passage explicitly says, “assuredly.”

### **Birth (*ōjo*) and the Afterlife**

I asked the participants what they thought would happen to them at the moment of death. Although one participant stated that he was not entirely certain what happens at the moment of death, the others had some definite ideas about what happens. The majority all agreed upon the fact that they would be received into the Pure Land. One suggested that Birth into the Pure Land might happen immediately, yet another thought that, “Amida accompanied by Kannon and Seishi Bodhisattvas [would arrive] and escort us to the Western Pure Land.”

I asked what type of experience one might have if sudden death were to occur, and they had no time to recite the nenbutsu or even think upon the Pure Land. Most agreed that Birth (*ōjo*) is possible under such circumstances, however, some felt that there may be karmic forces at work that will determine their future rebirth in samsara or Birth in the Pure Land. The issue of the importance of daily practice was brought up again, and the power of Amida Buddha’s Original Vow was mentioned.

I asked the participants how their family members feel about them having chosen to be Born into the Pure Land instead of being received into a Judeo-Christian heaven. I found the many different answers. One participant said he believes that heaven and the Pure Land are

Land. The attaining of *ojo* through the help of one's religious adviser, according to the Meditation Sutra, refers to those who attain to one of the three grades of the lowest class in the Pure Land. Those belonging to the lowest grade of the lowest class did not practice the nenbutsu daily, nor did they have any special intention of attaining *ojo*, but were sinners of the deepest dye, who on their death-bed conferred with a religious teacher for the first time, and reached *ojo* by some ten repetitions of the nenbutsu. But those who have made up their minds to go to the Pure Land by daily putting their trust in the power of Amida's Original Vow, and calling upon that sacred name, which after long ages of contemplation he determined to make efficacious for all, will be welcomed to the Pure Land by the Buddha himself, even though they do not have the advantage of a religious adviser.

From this quote we can see that daily practice of nenbutsu is what Honen recommends to insure Birth in the Pure Land at the end of life. One never knows exactly when, or by what means, one will come to the end of life. In the case of a sudden accident, the individual may not have the opportunity to recite the nenbutsu, nor have a priest immediately present. Honen rejected the concept that the final nenbutsu was superior to the nenbutsu recited with the Three Minds (*sanjin*) at anytime throughout one's life. He was clear that the nenbutsu offered in sincerity at any moment within our daily life is of the same value to that offered on the deathbed.

Now it is said that one repetition of the nenbutsu just at the hour of one's death is worth more than all the practice in a long life of a hundred years. Is this because at that moment there is more karmic efficacy than in all others? No. The point is that a passage

very important subject for westerners, because the reality is that Jodo Shu priests don't reside near many of them. Outside of Japan there are only temples in a handful of places, such as Hawaii, Brazil, Los Angeles, Chicago, Brisbane, Australia and Paris, France. The total number of Jodo Shu ministers residing outside of Japan is twenty-eight, with more than half of them residing within the State of Hawaii. Only two Jodo Shu ministers reside on the entire North American continent, and nine reside in South America. In this way, one of the participants said, "I personally feel very alone in my Jodo Shu faith and wish for as much help as possible from the Jodo Shu community."

The majority of the participants are quite familiar with Honen's teachings on nenbutsu practice. So when the question was asked as to what level of importance nenbutsu practice would be to them at the moment of death, everyone agreed that it is most important we practice the nenbutsu as often as possible throughout our daily lives and also, if possible, in the final moments of life. In this respect, they appear to be in line with Honen's teachings on this matter:

Some say that even though one has been saying the nenbutsu, if when one draws near the end of life, one is unable to converse with their religious teacher (*zenchishiki*), it would be hard for them to attain *ojo*. And again when one is very sick and one's mind disturbed, it would be similarly hard. But according to Shantao, when a person who has made up their mind to go to the Pure Land repeats the nenbutsu, whether many times or few, comes to die, Amida Buddha with his retinue does come forth to meet them. So in the case of one who makes this their daily practice, even if there is no religious teacher near when they are on their deathbed, the Buddha will welcome them to the Pure

In order to maintain the confidentiality of the subjects who participated in this inquiry, no names, locations of residence, or ages will be mentioned. What I can say is that three of the participants are male and two are female. All are of adult age. To my knowledge none of them have ever met in person, and private discussions regarding the questionnaire had not taken place between the five participants prior to the individual questionnaire submittals. I can also say that the five participants live in different cities across the North American continent, and are acquainted with one another only through the Jodo Shu Research Institute's internet message board.

### **Preparing for Death**

During the course of the questionnaire, I asked the participants how important they thought it would be to have a priest with them in the weeks or days leading up to death, at the moment of death, and for the family after death. Many agreed that having a priest present would be of significant benefit to them. However, there was some reservation that the priests not say things to family members that might confuse or disturb them, even if it is classical Buddha dharma. For example, one participant was very clear that it wouldn't be helpful if the priest ever said to the family members, "This life is temporary anyway, and we shouldn't be attached." ; or "All attachment leads to suffering." Since westerners are new to Buddhism, we must be careful in how we use concepts that might be new or alien to them, especially in times of crisis.

Regardless of whether a priest may be available and present during the final stages of life or not, several of the participants mentioned that daily practice is key to preparing for the confusion, anxiety and other issues that might be present during the final moments of life. This is a



# *Ojo* in the West:

## A Report on End of Life Issues in the United States of America

By Clyde Whitworth

Since 1998 Clyde has served Jodo Shu in a number of capacities, first acting as a volunteer at the Hawaii Jodo Mission and working at the interfaith, non-profit, volunteer organization Project Dana. In 2004, Clyde took tokudo ordination from Jodo Shu at the Hawaii Mission. He then lived in Tokyo from 2005-2007 training to become a minister and working as a research staff at the Jodo Shu Research Institute where he served on the International Relations translation team and helped maintain the JSRI homepage. He also participated in most of the activities of JSRI's *Ojo* and Death project, including giving presentations at our public symposia in Kyoto in 2006 and in Calgary, Canada in 2007. This paper is based on these presentations and the research he did for this project.

In mid-July 2006 a nineteen-part questionnaire was given to five non-Japanese Americans who had converted to Jodo Shu Buddhism. The results of the inquiry are quite fascinating in that they very clearly show the many different needs of a cross-section of Americans who have converted to Jodo Shu Buddhism. The purpose of this paper is to report their end of life needs, offer some insights into the teachings of Honen and other Jodo Shu priests on these subjects, and highlight certain issues specifically regarding ritualistic and priestly assistance throughout the process of dying and into Birth (*ojo*).

ascent to heaven, and the path of nirvana. This is the fifth great good.”

**[Second Scroll; end of third section]**

*\* Footnotes have been omitted at this time, pending revision.*

remorse and fear in succession. Not having practiced good, just when confronted with the end do they feel remorse, but what use is it to feel remorse afterwards? The five unfortunate paths between heaven and earth become manifest, stretching broad and deep, vast and wide. According to good and evil, does fortune and disaster follow, which must be borne by oneself and no one can take their place. Such is the principle of nature.

“According to what they practice, their offenses will pursue them throughout their life, and cannot be rid of. Good people do good, and go from happiness into happiness, from light into light. Evil people do evil, and go from suffering into suffering, dark into dark. G. 190 Who is able to know this? It is only the Buddha,<sup>29</sup> who explains the teaching and discloses it, but there are few who believe. Birth and death continue without rest, and there is no cessation of the unfortunate paths. Such are the people of the mundane world that it is difficult to express in particulars.

G. 191 “For this reason, they will naturally incur the immeasurable pain and suffering of the three realms of defilement. They will repeat the cycle of rebirth for aeons of succeeding lifetimes, without any time of leave, and it is difficult to attain release. Their pain cannot be expressed.

G. 192 “This is the fifth great evil, the fifth pain, the fifth burning. The pain and suffering is such as this, for instance like a great fire burning a person's body. G. 193 Should people be able amidst this to wholeheartedly set their minds, be upright in form and proper in thought, their words and actions correspond, their deeds sincere, their speech and words in accord, their hearts and mouth not differ, solely do good, and not practice any of the host of evils, then those people alone will be liberated, acquire merit and virtue, transcendence of this world,

or respect, nor concern how they are regarded by others.<sup>26</sup> They are self-complacent in their arrogance and cannot be admonished.<sup>27</sup>

“They do not care whether their six filial relations<sup>28</sup> and dependents have the necessities or not, and take no pity on them. They do not consider their obligation to their fathers and mothers, nor their responsibilities to their friends and superiors. Their hearts are always set on evil thoughts, their mouths on evil words, their bodies on evil conduct, without one single goodness. They do not believe in the ancient sages nor the scriptural dharma of the buddhas. They do not believe that in following the path one can attain transcendence to the other world. They do not believe that after death, their spirit will be reborn. They do not believe that doing good begets good, and doing evil begets evil. They are willing to kill an arhat and destroy the harmony of the Buddhist community. They are willing to injure their parents, siblings, and dependents. Their six filial relations loathe them and wish for their death.

“Such as this are the people of the mundane world, all of the same mind and intention. Though deluded and blind, they think they are wise. They do not know whence they came before birth nor their destiny after death. G. 188 They have neither a sense of benevolence nor the proper order of things, and their evil goes against heaven and earth. In spite of this, they hope for happy circumstances and wish for long life, but death must come to meet them. Those with compassionate feelings instruct and exhort them that they may contemplate good, and disclose that life and death, and the fate of good and evil, is such by nature, but they do not believe it. Regardless of pains taken to explain, it has no effect on them. Their hearts are shut closed and their minds are not open to understanding.

G. 189 “When the end of their life is imminent, they feel

burning. The pain and suffering is such as this, for instance like a great fire burning a person's body. G. 185 Should people be able amidst this to wholeheartedly set their minds, be upright in form and proper in conduct, solely do good, and not practice any of the host of evils, then those people alone will be liberated, acquire merit and virtue, transcendence of this world, ascent to heaven, and the path of nirvana. This is the fourth great good."

**[The Fifth Evil; T12n0360\_p0277a01]**

G. 186 The Buddha said, "This is the fifth evil. People of the mundane world are slothful and indolent.<sup>24</sup> They do not practice any good whatsoever and shirk in their endeavors, so their household and dependents suffer from hunger and cold. When exhorted to mend their ways by their mother and father, their eyes bulge in anger. They ignore what they are told and are defiant and insubordinate, so that it is like a home of hostility and their parents do not recognize their child. They take without regard to propriety, and become repugnant and loathsome to people at large. They lack a sense of obligation, disregard their responsibilities, and feel no need to make recompense. G. 187 They will become poor and destitute, and unable to be restored.

"They plunder and appropriate the possessions of others,<sup>25</sup> and then squander it away. It becomes habit for them to repeatedly gain by these means, which they use to satisfy their appetites. They indulge in wine and feast on delicacies, eating and drinking without limit. They do as their hearts desire and become profligate. They are foolish by nature and quarrelsome. They are insensitive to other's feelings, and wish to force their will on them. When they see people who are good, they loathe them with hatred and envy. They have no sense of responsibility

and commit evil without shame. They consider themselves strong and robust, and expect others to prostrate themselves in fear. They are not awed by heaven and earth, the gods and luminaries, or the sun and moon. They do not practice any good whatsoever and are difficult to subdue. They allow their own faults and lameness as reasonable, have no sense of trepidation, and accept their own arrogance as normal.

G. 182 "Their many evils such as this are conscientiously recorded by the celestial deities. Though they may rely on the vast merit and virtue made in previous lives, and their few past good deeds would serve to aid them, the evil they have done in the present life will extinguish that merit and virtue. All the virtuous gods and spirits will withdraw from them and they will be left alone standing in the void, with nowhere to turn for support.<sup>21</sup> When their life ends, all their accumulated evil acts will come back to them and naturally they will be compelled by this to meet their fate.

"Moreover, their name will be registered, and the gods and luminaries will remember it. Their offenses will draw them to their fate. Naturally they will be unable to evade the punishment of their offenses.<sup>22</sup> Rather, as a result of their previous conduct, they will be burned in a fiery cauldron, broken in body and mind, and their spirit will be subjected to pain and suffering. If at such time, they feel remorse, what could they then do? Naturally the way of heaven will not falter.<sup>23</sup>

G. 183 "For this reason, they will naturally incur the immeasurable pain and suffering of the three realms of defilement. They will repeat the cycle of rebirth for aeons of succeeding lifetimes, without any time of leave, and it is difficult to attain release. Their pain cannot be expressed.

G. 184 "This is the fourth great evil, the fourth pain, the fourth

sanctions of the king's law.

G. 177 "Such evils as these become evident among humans and spirits. Brought to light by the sun and moon, they are seen by the gods and luminaries who make conscientious records. G. 178 For this reason, they will naturally incur the immeasurable pain and suffering of the three realms of defilement. They will repeat the cycle of rebirth for aeons of succeeding lifetimes, without any time of leave, and it is difficult to attain release. Their pain cannot be expressed.

G. 179 "This is the third great evil, the third pain, the third burning. The pain and suffering is such as this, for instance like a great fire burning a person's body. G. 180 Should people be able amidst this to wholeheartedly set their minds, be upright in form and proper in conduct, solely do good, and not practice any of the host of evils, then those people alone will be liberated, acquire merit and virtue, transcendence of this world, ascent to heaven, and the path of nirvana. This is the third great good."

#### **[The Fourth Evil; T12n0360\_p0276c08]**

G. 181 The Buddha said, "This is the fourth evil. People of the mundane world are not mindful of practicing good. They incite each other to carry out together a host of evils. They are two-tongued, bad-mouthed, reckless in their remarks, and fanciful in speech. They disparage others and cause contention, hate and envy good people, and ruin the sensible, at which they remain self-complacent.<sup>30</sup> They are not filial to their parents, fail to respect their superiors, are not trusted by their friends, and find it difficult to be genuine. They think most highly of themselves and ascribe to their own logic. They throw their weight around and look down on others. They have no self-awareness

evils, then those people alone will be liberated, acquire merit and virtue, transcendence of this world, ascent to heaven, and the path of nirvana. This is the second great good.”

**[The Third Evil; T12n0360\_p0276b18]**

G. 176 The Buddha said, “This is the third evil. People of the mundane world are born relying on each other<sup>16</sup> and live together between heaven and earth. The years of one’s life cannot be estimated. Among the upper level are those with wisdom, longevity, nobility, and wealth, and among the lower level are the poor, ignoble, feeble, and foolish. Within this are those people without good, who are habitually attached to evil and have only licentious thoughts, filling their breast with anguish. They are disturbed by love and desire and cannot rest whether seated or standing.

“Shackled by carnal desire only to long in vain for its attainment, they gaze lewdly at those with delicate complexions, until their indecent thoughts are externalized. They despise their wives, and recklessly enter and depart in secret. Their household goods are lost, and they do things against the law. They band together to form groups, choose leaders, and attack each other. They go against the path by assaulting, threatening, murdering, and plundering. Their evil thoughts become overt and they no longer exert themselves in their endeavors.

“They take what they want to have and become ever more entwined<sup>17</sup> in their desires. They frighten and bully to provide for their wives and children.<sup>18</sup> They do as their hearts desire and make themselves extremely comfortable. Moreover, regardless of whether exalted or humble, their household and distant relatives are all caused pain and suffering by this.<sup>19</sup> Furthermore, they have no fear of the



nothing left to rely on. Alone they have arrived and alone they will depart, with no one to accompany them. Good and bad, good fortune or ill luck, follows them directing their place of rebirth, whether it will be an enjoyable place or they will fall into suffering and pain. Naturally afterwards, they feel remorse, but what could they then do?

G. 171 "People of the mundane world, their minds are deluded and their wisdom lacking. Seeing the good, they despise and defame it and do not think to yearn after it. They only wish to do evil, and heedlessly do they go against the law.<sup>15</sup> Always harboring hearts of avarice, they covet the gain of others, which they waste and squander only to again seek out more. They with hearts of iniquity, who are unrighteous, cringe before the countenance of others. They do not foresee that this situation will lead to remorse.

G. 172 "In this world there appears the king's law and incarceration, where one's fate is according to the offense, and punishment is incurred. The cause of this is from a former life, when the virtue of the path was not believed, and the roots of good not practiced. Should now evil be repeated, the celestial deities will engrave it, registering each name individually. When their life ends, and their spirit departs, they will fall into the unfortunate paths. G. 173 For this reason, they will naturally incur the immeasurable pain and suffering of the three realms of defilement. They will repeat the cycle of rebirth for aeons of succeeding lifetimes, without any time of leave, and it will be difficult to attain release. Their pain cannot be expressed.

G. 174 "This is the second great evil, the second pain, the second burning. The pain and suffering is such as this, for instance like a great fire burning a person's body. G. 175 Should people be able amidst this to wholeheartedly set their minds, be upright in form and proper in conduct, solely do good, and not practice any of the host of

members, husband and wife, they are all irresponsible and do not follow the natural law. Extravagant and wanton, arrogant and selfish, they desire all the pleasures. They give themselves up to their feelings and self-indulgence, and moreover deceive and fool each other. Their mind and mouth each differ and their speech and motives are not true. Their flattery and obsequiousness is insincere, using clever speech to curry favor. They are jealous of the wise and slander the good, and descend into resentment and perversity.

G. 168 "When the ruler is not perceptive and relies on the ministers, the ministers busy themselves with weaving deceit. They trample the law to accomplish their affairs, aware of the opportunities. When the ruler does not reign properly, he is deceived and loyalty and devotion to him is heedlessly lost. The will of heaven is contravened. The minister deceives the lord, the child deceives the parent. Older and younger siblings, husbands and wives, close and distant friends, all deceive and betray each other. Each embraces greed and desire, animosity and hatred, delusion and ignorance, profusely desiring only for themselves, and greedily desiring in plenty. The exalted and humble, lofty and lowly, are all naturally alike at heart.

G. 169 "Their home destroyed, their life lost, they do not look to predecessors or descendents,<sup>13</sup> and both near and distant relatives are ruined by this. There are times when members of the same groups whether family, scholars, villagers, townspeople, unlettered commoners, or rustics could turn to each other under such circumstances, but even then they cause one another harm for the sake of gain, and become angered and entangled in enmity.<sup>14</sup> If they have any wealth, they become parsimonious and are not in the least generous. They love their treasures and it weighs on them to be poor. Their hearts are labored and their body suffers. G. 170 In this way they reach the end, and have

extremely deep and relentless. Entering these dark and dismal realms, one is transferred to the next life and receives a body, and as in the case of the king's law, suffers extreme punishment.

G. 164 "For this reason, they will naturally incur the immeasurable pain and suffering of the three realms of defilement,<sup>9</sup> which will be transferred to their person and their form adapted to the ordained path. At which, they attain life, which may be long or short, and their spirit and consciousness is naturally destined to this. One must face this alone, only to be born together with one's adversary, to once again retaliate against each other without end. Until this evil karma<sup>10</sup> has been exhausted, they cannot separate from each other.<sup>11</sup> While in this cycle, they cannot leave at any time. It is difficult to attain release and their pain is indescribable.<sup>12</sup> Everywhere between heaven and earth, this is natural. Although the response may not be immediate or at once, according to the path of good or evil, it will return to meet them.

G. 165 "This is the first great evil, the first pain, the first burning. The pain and suffering is such as this, for instance like a great fire burning a person's body. G. 166 Should people be able amidst this to wholeheartedly set their minds, be upright in form and proper in conduct, solely do good, and not practice any of the host of evils, then those people alone will be liberated, acquire merit and virtue, transcendence of this world, ascent to heaven, and the path of nirvana. This is the first great good."

### [The Second Evil; T12n0360\_p0276a19]

G. 167 The Buddha said, "This is the second evil. People of the mundane world, parent and child, older and younger sibling, family

acquire merit and virtue, transcendence of this world, longevity, and the path of nirvana.”

G. 161 The Buddha said, “What are these five evils, five pains, and five burnings? How do you eliminate the five evils, maintain the good acts, acquire merit and virtue, transcendence of this world, longevity, and the path of nirvana?”

**[The First Evil; T12n0360\_p0275c27]**

G. 162 The Buddha said, “This is the first evil. The celestial deities, humans, and even species that crawl on the ground like to commit a host of evils. There are none who are otherwise. The strong oppress the weak. They turn upon each other inflicting harm. They cause murder and injury, biting and devouring each other. They do not know how to practice good, are grievous in their evil, and without the path, and afterwards they incur the retribution that is their natural destiny. The celestial luminaries keep conscientious records and do not pardon their transgressions.<sup>7</sup> For that reason, there are those who suffer poverty, lowly stature, begging for food, abandonment, deaf, mute, and blindness, delusion, perversity, in addition to conditions of hunchback, madness, and idiocy.<sup>8</sup> There are also those who have nobility, wealth, talent, and brilliance, because they all were in previous lives filial and compassionate, practiced good, and accumulated virtue.

G. 163 “In the mundane world, it is the customary way to have the king’s law and incarceration. They who have no sense of trepidation and prudence, commit offenses leading to punishment, and incur their retribution. Even should one hope to be liberated, it is difficult to attain pardon and be released. This is the circumstances of the mundane world seen right before the eyes. When life ends, the afterworld is

# 佛說無量壽經卷下 T12n360

(Skt. Larger Sukhāvativyūha Sūtra)

(Ch. Wuliangshou jing)

(Jp. Muryōju kyō)

*Translated by Karen Mack from the Jōdoshū sacred text version of the Chinese The Buddha of Immeasurable Life Sutra (The Larger Sutra) according to Japanese interpretation*

Translated in the Cao-Wei dynasty by the  
Tripitaka Master Saṃghavarman from India

## [Second Scroll; third section]

### [The Five Evils; T12n0360\_p0275c17]

G. 160 The Buddha said to Maitreya, “Should you and others be able in this world to be upright in mind and correct in thought, and not practice any of the host of evils, then this would indeed be the utmost virtue.<sup>1</sup> In the worlds of the ten directions, this is without compare.<sup>2</sup> Why is this? In the many Buddha lands, the groups of celestial deities and humans naturally perform good and do not commit any great evil; it is easy for them to be edified.<sup>3</sup> Now I have become a buddha in this world, a place of the five evils,<sup>4</sup> the five resultant pains, and the five burnings, which makes it extremely difficult.<sup>5</sup> I instruct and transform the many living beings, enabling them to discard the five evils, part from the five pains, and withdraw from the five burnings. I subdue and transform their thoughts, enabling them to maintain the five good acts,<sup>6</sup>

# 研究ノート

14日		25日	
・現代布教研究会	(総合研究所)	・国際対応研究会	(総合研究所)
17日		・近世浄土宗学の基礎的研究	(京都分室)
・浄土三部経研究会	(総合研究所)	26日	
18日		・四十八巻伝研究会	(宗学研究所)
・浄土三部経研究会	(総合研究所)	28日	
・国際対応研究会	(総合研究所)	・現代布教研究会	(総合研究所)
19日		31日	
・浄土宗学研究の基礎的整理	(総合研究所)	・浄土三部経研究会	(総合研究所)
24日		・浄土宗大辞典研究会	
・海外開教研究会			(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
	(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)	・浄土宗近現代史研究	
・葬祭仏教研究会			(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
	(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)	・生命倫理の諸問題研究会	(総合研究所)
・浄土三部経研究会	(総合研究所)		

12日  
・国際対応研究会 (総合研究所)  
・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)

13日  
・近代の勤行式の音声 (増上寺・景光殿)

14日  
・近代の勤行式の音声 (増上寺・景光殿)

15日  
・現代布教研究会 (総合研究所)

18日  
・浄土三部経研究会 (総合研究所)

・現代葬祭仏教研究会 (総合研究所)

・浄土宗近現代史研究 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

・浄土宗大辞典研究会 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

・四十八巻伝研究会 (清浄華院)

19日  
・浄土三部経研究会 (総合研究所)

22日  
・現代布教研究会 (総合研究所)

25日  
・海外開教研究会 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

・浄土三部経研究会 (総合研究所)

・現代葬祭仏教研究会 (総合研究所)

・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)

26日  
・国際対応研究会 (総合研究所)

・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)

・近世浄土宗学の基礎的研究 (京部分室)

27日  
・浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)

・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)

・浄土宗大辞典研究会 (芝罘・常照院)

29日  
・現代布教研究会 (総合研究所)

3月

3日  
・浄土三部経研究会 (総合研究所)

・現代葬祭仏教研究会 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

4日  
・国際対応研究会 (総合研究所)

・生命倫理の諸問題研究会 (総合研究所)

・近世浄土宗学の基礎的研究 (京部分室)

・四十八巻伝研究会 (宗学研究所)

5日  
・浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)

6日  
・浄土宗近現代史研究 (総合研究所)

・生命倫理の諸問題研究会 (総合研究所)

10日  
・現代布教研究会 (総合研究所)

・浄土三部経研究会 (総合研究所)

・葬祭仏教研究会 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

・生命倫理の諸問題研究会 (総合研究所)

・浄土宗大辞典研究会 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

・仏教福祉研究会 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

11日  
・国際対応研究会 (総合研究所)

12日  
・生命倫理の諸問題研究会 (総合研究所)

13日  
・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)



- ・ 仏教福祉研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
- ・ 四十八巻伝研究会 (宗学研究所)
- 11 日
- ・ 国際対応研究会 (総合研究所)
- ・ 現代布教研究会 (総合研究所)
- 17 日
- ・ 浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・ 葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
- ・ 浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
- 18 日
- ・ 近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
- 20 日
- ・ 現代布教研究会 (総合研究所)
- ・ 近代の勤行式の音声  
(浄土宗宗務庁 東京第 1 応接室)
- 26 日
- ・ 現代布教研究会 (総合研究所)

## 1 月

- 7 日
- ・ 浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・ 現代葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
- 8 日
- ・ 現代布教研究会 (総合研究所)
- 9 日
- ・ 浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)
- 15 日
- ・ 国際対応研究会 (総合研究所)
- 18 日
- ・ 現代葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)

- 21 日
- ・ 浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・ 浄土宗近現代史研究  
(浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
- ・ 生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
- ・ 浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
- ・ 仏教福祉研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
- ・ 四十八巻伝研究会 (清浄華院)
- 23 日
- ・ 国内開教研究会 (総合研究所)
- ・ 近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
- 28 日
- ・ 浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
- ・ 浄土三部経研究会 (総合研究所)
- 29 日
- ・ 現代布教研究会 (総合研究所)
- ・ 国際対応研究会 (総合研究所)
- ・ 近代の勤行式の音声 (増上寺・景光殿)
- 30 日
- ・ 浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)

## 2 月

- 4 日
- ・ 浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・ 現代葬祭仏教研究会 (総合研究所)
- 5 日
- ・ 現代布教研究会 (総合研究所)
- ・ 近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
- 6 日
- ・ 浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)

- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 30日
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)

## 11月

- 1日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 2日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 5日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 6日
- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
- 7日
- ・浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)
- 9日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 12日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・四十八巻伝研究会 (宗学研究所)
- 16日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会 (佛科大学)
- 19日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京道場)
- ・浄土宗近現代史研究  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- 20日
- ・近代の勤行式の音声  
(東京都台東区谷中・天台宗大泉寺)

- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)  
21日
- ・浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)  
26日
- ・現代葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・海外開教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・四十八巻伝研究会 (清浄華院)  
27日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)  
30日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)

## 12月

- 3日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・近代の勤行式の音声 (増上寺会館・椿の間)
- ・葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 4日
- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
- 7日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 10日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗近現代史研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

- ・生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

29日

- ・近代の勤行式の音声 (増上寺会館・松の間)

## 9月

3日

- ・現代葬祭仏教研究会 (総合研究所)
- ・四十八巻伝研究会 (清浄華院)

7日

- ・現代布教研究会 (総合研究所)

10日

- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

11日

- ・国際対応研究会 (総合研究所)

13日

- ・国内開教研究会 (総合研究所)

18日

- ・近代の勤行式の音声 (増上寺会館・蘭の間)
- ・四十八巻伝研究会 (清浄華院)
- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)

19日

- ・現代葬祭仏教研究会 (総合研究所)
- ・仏教福祉研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)

27日

- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)

## 10月

1日

- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

- ・現代葬祭仏教研究会 (総合研究所)

- ・生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

2日

- ・国際対応研究会 (総合研究所)

9日

- ・国際対応研究会 (総合研究所)

11日

- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

12日

- ・近代の勤行式の音声 (総合研究所)

16日

- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)

18日

- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

22日

- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

- ・現代葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

- ・浄土宗近現代史研究  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)

23日

- ・国際対応研究会 (総合研究所)

26日

- ・近代の勤行式の音声 (増上寺会館)

29日

- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

- ・生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

- ・現代葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)

- ・浄土宗近現代史研究  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 3日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 5日
- ・四十八巻伝研究会 (清浄華院)
- 6日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 9日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 11日
- ・浄土宗学研究的基礎的整理 (総合研究所)
- 17日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 18日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- ・現代布教研究会 (明照会館)
- 20日
- ・近代の勤行式の音声  
(増上寺会館・松の間)
- 23日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・仏教福祉研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・四十八巻伝研究会 (清浄華院)
- 24日
- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)

- ・生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- 25日
- ・海外開教研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗善本叢書研究会 (正寿院)
- 27日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- ・葬祭仏教研究会 (総合研究所)
- 30日
- ・浄土宗近現代史研究  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 31日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)

## 8月

- 2日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 7日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 9日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 10日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 21日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 22日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 23日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 24日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 27日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

- ・現代葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 5日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 6日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗学研究的基礎的整理 (総合研究所)
- 7日
- ・四十八巻伝研究会 (清浄華院)
- 11日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
- ・現代葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・近代の勤行式の音声  
(浄土宗宗務庁 東京第1応接室)
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 12日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
- 13日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- ・国内開教研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗学研究的基礎的整理 (総合研究所)
- 15日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 18日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- ・葬祭仏教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

- ・近代の勤行式の音声  
(浄土宗宗務庁 東京第1応接室)
  - ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
  - ・生命倫理の諸問題研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
  - 19日
  - ・国際対応研究会 (総合研究所)
  - 20日
  - ・国際対応研究会 (総合研究所)
  - ・浄土宗学研究的基礎的整理 (総合研究所)
  - ・現代布教研究会 (総合研究所)
  - 21日
  - ・四十八巻伝研究会 (宗学研究所)
  - 25日
  - ・仏教福祉研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
  - ・浄土宗大辞典研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
  - 26日
  - ・国際対応研究会 (総合研究所)
  - ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
  - ・各地の法然上人二十五霊場研究 (京都分室)
  - 29日
  - ・国際対応研究会 (総合研究所)
  - ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
  - ・浄土宗善本叢書研究会 (京都分室)
- 7月
- 2日
  - ・海外開教研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1応接室)
  - ・国際対応研究会  
(浄土宗宗務庁 東京第1応接室)
  - ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

## 5月

- 1日  
 ・四十八巻伝研究会 (宗学研究所)
- 2日  
 ・現代葬祭仏教研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)
- 7日  
 ・浄土宗近現代史研究  
 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)  
 ・浄土三部経研究会 (総合研究所)  
 ・現代葬祭仏教研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)  
 ・浄土宗大辞典研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 9日  
 ・浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)
- 11日  
 ・現代布教研究会 (総合研究所)  
 ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 14日  
 ・浄土三部経研究会 (総合研究所)  
 ・現代葬祭仏教研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)  
 ・浄土宗大辞典研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 15日  
 ・現代布教研究会 (総合研究所)  
 ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 16日  
 ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 18日  
 ・国内開教研究会 (大正大学)
- 21日  
 ・浄土三部経研究会 (総合研究所)  
 ・海外開教研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)

- ・浄土宗大辞典研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・仏教福祉研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- ・各地の法然上人二十五霊場研究会  
 (愛知二十五霊場)
- 22日  
 ・国際対応研究会 (総合研究所)  
 ・各地の法然上人二十五霊場研究会  
 (愛知二十五霊場)
- 25日  
 ・現代布教研究会 (総合研究所)  
 ・浄土宗大辞典研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 28日  
 ・浄土三部経研究会 (総合研究所)  
 ・近代の勤行式の音声  
 (浄土宗宗務庁 東京第2応接室)  
 ・生命倫理の諸問題研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)  
 ・現代葬祭仏教研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第2会議室)  
 ・浄土宗大辞典研究会  
 (浄土宗宗務庁 東京第1会議室)
- 29日  
 ・国際対応研究会 (総合研究所)  
 ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
- 30日  
 ・浄土宗学研究の基礎的整理 (総合研究所)

## 6月

- 1日  
 ・浄土宗近現代史研究 (総合研究所)
- 4日  
 ・浄土三部経研究会 (総合研究所)

## 平成 19 年度 活動報告

### 4 月

- 2 日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
  - ・国内開教研究会 (総合研究所)
- 3 日
- ・近世浄土宗学の基礎的研究 (京都分室)
  - ・各地の法然上人二十五霊場研究会 (京都分室)
- 5 日
- ・四十八巻伝研究会 (京都分室)
- 6 日
- ・浄土宗大辞典研究会 (総合研究所)
- 9 日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
  - ・浄土宗大辞典研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
  - ・現代葬祭仏教研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
  - ・海外開教研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
- 13 日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 16 日
- ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
  - ・浄土宗大辞典研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
  - ・現代葬祭仏教研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
  - ・国内開教研究会 (大正大学)
  - ・近世浄土宗学の基礎的研究 (大正大学図書館)
- 17 日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
- 18 日
- ・浄土学研究の基礎的整理 (総合研究所)
- 19 日
- ・現代布教研究会 (総合研究所)
  - ・四十八巻伝研究会 (宗学研究所)
- 23 日
- ・浄土宗大辞典研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
  - ・仏教福祉研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 1 会議室)
  - ・生命倫理の諸問題研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
  - ・国際対応研究会 (浄土宗宗務庁 東京第 2 会議室)
  - ・浄土三部経研究会 (総合研究所)
  - ・現代葬祭仏教研究会 (総合研究所)
  - ・現代布教研究会 (総合研究所)
- 24 日
- ・国際対応研究会 (総合研究所)
  - ・各地の法然上人二十五霊場研究会 (京都分室)
- 25 日
- ・葬祭仏教研究会 (総合研究所)
- 27 日
- ・葬祭仏教研究会 (総合研究所)
  - ・現代布教研究会 (総合研究所)
  - ・浄土宗善本叢書研究会 (京都分室)

【特別業務】大遠忌関連 浄土三部経

代表 / 顧問	石上善應		
主務	袖山榮輝		
研究員	柴田泰山	齊藤舜健	石田一裕
	佐藤堅正		
囑託研究員	マック・カレン	郡嶋昭示	

【特別業務】大遠忌関連 四十八巻伝

代表 / 顧問	伊藤唯真		
主務	善 裕昭		
研究員	曾田俊弘		
囑託研究員	真柄和人	千古利恵子	米澤実江子

【経常的運営】総合広報 編集 / HP 管理運営

主務	大蔵健司		
研究員	石川琢道		
囑託研究員	田中和敬	吉田淳雄	郡嶋昭示

【経常的運営】他研究機関連絡提携 他研究施設教団交流

主務	武田道生		
研究員	名和清隆	後藤真法	戸松義晴
囑託研究員	郡嶋昭示		



【特別業務】大遠忌関連 法然上人二十五霊場

主務	齊藤舜健	佐藤晴輝	
研究員	伊藤茂樹	上田千年	坂上典翁
	曾田俊弘	宮入良光	八木英哉
	井野周隆		
囑託研究員	清水秀浩	齊藤隆尚	竹内眞道
	米澤実江子		

【特別業務】大遠忌関連 浄土宗大辞典

代表 / 顧問	石上善應	福西賢兆	
東部スタッフ			
主務	林田康順【伝法】		
研究員	大藏健司【宗制・哲学・成句】	西城宗隆【法式・葬祭】	
	袖山榮輝【一般仏教語】	石川琢道【人名】	
	柴田泰山【一般仏教語】	曾根宣雄【宗学】	
	和田典善【書名(日本)】	名和清隆【宗教・民俗】	
	宮入良光【布教・仏教美術】	石田一裕【一般仏教語】	
研究助手	廣本康真【法式】	荒木信道【法式】	
囑託研究員	江島尚俊【宗教・宗史(近代)】	東海林良昌【宗史・歴史国文】	
	村田洋一【寺院・詠唱・組織】	吉水岳彦【宗学】	
	吉田淳雄【宗史・歴史・国文】	郡嶋昭示【典籍】	
西部スタッフ			
研究員	齊藤舜健	善 裕昭	
囑託研究員	安達俊英	清水秀浩	米澤実江子
研究スタッフ	大沢亮我		
編集担当			
研究員	大藏健司	石川琢道	和田典善
	佐藤堅正		
囑託研究員	吉田淳雄	郡嶋昭示	吉水岳彦

【総合研究】総合研究プロジェクト 近世浄土宗学の基礎的研究

主務	齊藤舜健		
研究員	曾田俊弘	上田千年	伊藤茂樹
研究助手	井野周隆		
嘱託研究員	清水秀浩	米澤実江子	

【総合研究】教学的関連プロジェクト 浄土学研究の基礎的整理

代表／顧問	石上善應		
主務	柴田泰山		
嘱託研究員	郡嶋昭示		
研究スタッフ	工藤量導	石川達也	沼倉雄人
	大屋正順	加藤芳樹	

【総合研究】法式的関連プロジェクト 近代の勤行の音声

代表／顧問	福西賢兆		
主務	坂上典翁		
研究員	西城宗隆	荒木信道	廣本康真
嘱託研究員	田中勝道	廣本榮康	渡辺裕章
	山本晴雄	中野孝昭	中野晃了
	南 忠信	大沢亮我	八尾敬俊
	清水秀浩	吉田淳雄	

【基礎研究】布教的関連プロジェクト 現代布教

主務	佐藤晴輝		
研究員	後藤真法	宮入良光	
研究助手	八木英哉		
嘱託研究員	正村瑛明	郡嶋昭示	

【特別業務】特別 浄土宗善本叢書

主務	善 裕昭		
嘱託研究員	米澤実江子		
研究スタッフ	伊藤真宏	松島吉和	

【総合研究】総合研究プロジェクト 葬祭仏教

代表／顧問	伊藤唯真		
主務	西城宗隆		
研究員	福西賢兆	武田道生	大蔵健司
	名和清隆	和田典善	八木英哉
嘱託研究員	鷲見定信	細田芳光	田中和敬

【総合研究】総合研究プロジェクト 国際対応

代表／顧問	田丸徳善		
主務	戸松義晴		
研究員	佐藤堅正		
嘱託研究員	岩田斎肇	Jonathan Watts	Karen Mack
	薊 法明	生野善応	川名里奈
	小林正道	田中和敬	北條竜士
	宮坂直樹		
研究スタッフ	生野善応	佐藤良純	袖山榮真
	服部正穩	藤木雅雄	
	松涛弘道	松涛誠達	
	Clyde Whitworth		

【総合研究】総合研究プロジェクト 浄土宗近現代史

代表／顧問	武田道生		
主務	大蔵健司		
研究員	福西賢兆	今岡達雄	戸松義晴
	林田康順	坂上雅翁	坂上典翁
	柴田泰山	後藤眞法	名和清隆
	宮入良光	石川琢道	曾根宣雄
嘱託研究員	江島尚俊	吉田淳雄	鷲見定信
	東海林良昌		
研究スタッフ	藤森雄介	石川達也	

## 平成 19 年度 研究課題別スタッフ一覧

### 【総合研究】総合研究プロジェクト 開教

代表 / 顧問	武田道生		
主 務	名和清隆		
研究員	戸松義晴		
囑託研究員	水谷浩志	鷺見定信	江島尚俊
	田中和敬	宮坂直樹	
研究スタッフ	大沢広嗣	中村憲司	春近 敬

### 【総合研究】総合研究プロジェクト 仏教福祉

代表 / 顧問	長谷川匡俊		
主 務	曾根宣雄		
研究員	上田千年	曾田俊弘	
囑託研究員	吉水岳彦	郡嶋昭示	
研究スタッフ	鷺見宗信	藤森雄介	関 徳子
	野田隆生	谷川洋三	渡邊義昭
	石川基樹	石川到覚	安藤和彦
	落合崇志	横井大覚	丹羽信誠

### 【総合研究】総合研究プロジェクト 生命倫理

代表 / 顧問	石上善應		
主 務	今岡達雄		
研究員	福西賢兆	袖山榮輝	戸松義晴
	坂上雅翁	林田康順	名和清隆
囑託研究員	水谷浩志	齋藤智明	吉田淳雄

## 平成 19 年度 研究プロジェクト一覧

【総合研究】	総合研究プロジェクト	1	開教
		2	仏教福祉
		3	生命倫理
		4	現代葬祭仏教
		5	国際対応
		6	浄土宗近現代史
		7	近世浄土宗学の基礎的研究
【基礎研究】	学術的関連プロジェクト	8	浄土学研究の基礎的整理
	法式的関連プロジェクト	9	近代の勤行の音声
	布教的関連プロジェクト	10	現代布教研究
【特別業務】	特別	11	浄土宗善本叢書
	大遠忌関連	12	法然上人二十五霊場
		13	浄土宗大辞典
		14	浄土宗基本典籍の現代語化『浄土三部経』
		15	浄土宗基本典籍の現代語化『四十八巻伝』
【経常的運営】	総合広報	16	編集 / HP 管理運営
	他研究機関連絡提携	17	他研究施設教団交流

---

## 総合研究所運営委員会名簿

(平成19年7月1日現在)

---

### 委員（役職）

稲岡康純（宗務総長）  
岡本宣丈（教学局長）  
川中光教（財務局長）  
谷地玄雅（社会国際局長）  
入西勝彦（文化局長）  
石上善應（総合研究所長）  
福西賢兆（総合研究所主任研究員）  
今岡達雄（総合研究所主任研究員）

---

### 委員

香川孝雄  
梶村 昇  
中井真孝  
花園宗善  
藤本浄彦  
丸山博正  
八木季生

---

---

## 浄土宗総合研究所研究員一覧

(平成19年7月1日現在)

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-5472-6571 (代表) FAX 03-3438-4033

(分室)

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町98 仏教大学内

電話 075-495-8143 FAX 075-495-8193

ホームページアドレス <http://www.jsri.jp/>

---

所長 石上善應

---

主任研究員 福西賢兆 (副所長)

今岡達雄

---

専任研究員 大藏健司・齊籐舜健・西城宗隆・佐藤晴輝・袖山榮輝・戸松義晴

研究員 石川琢道・石田一裕・伊藤茂樹・上田千年・後藤真法・坂上雅翁  
坂上典翁・柴田泰山・善 裕昭・曾田俊弘・曾根宣雄・武田道生  
名和清隆・林田康順・宮入良光・和田典善

---

研究助手 荒木信道・井野周隆・佐藤堅正・廣本康真・八木英哉

---

常勤嘱託研究員 郡嶋昭示・田中和敬・吉田淳雄・米澤美江子

---

嘱託研究員 薊 法明・安達俊英・岩田齋肇・江島尚俊・大沢亮我  
Karen Mack・川名里奈・小林正道・齊藤隆尚・清水秀浩  
東海林良昌・Jonathan Watts・千古利恵子・竹内眞道・田中勝道  
廣本榮康・北條竜士・細田芳光・真柄和人・正村瑛明・水谷浩志  
南 忠信・宮坂直樹・村田洋一・八尾敬俊・山本晴雄・吉水岳彦  
鷺見定信・渡辺裕章

---

研究スタッフ 安藤和彦・生野善応・石川到覚・石川達也・石川基樹・伊藤真宏  
大澤広嗣・大屋正順・落合崇志・加藤芳樹・工藤量導  
Clyde Whitworth・齋藤智明・佐藤良純・関 徳子・袖山榮眞  
谷山洋三・中村憲司・沼倉雄人・野田隆生・服部正穩・春近 敬  
藤木雅雄・藤森雄介・北條竜士・松島吉和・松濤弘道・松濤誠達  
鷺見宗信・渡邊義昭

---

客員教授 伊藤唯真・梶村 昇・田丸徳善・長谷川匡俊・八木季生

---

## 編集後記

- \*平成19年度の研究を表した教化研究19号をお届けします。
- \*今号の「研究成果」は、昨年に引き続き開教プロジェクト『沖縄本島都市部における各宗派寺院の現状と展望』、同じく開教プロジェクト『他教団における海外開教の現状と開教使(師)養成』、また大遠忌関連法然上人二十五霊場プロジェクト『各地の法然上人二十五霊場研究プロジェクトの報告』です。
- \*研究ノートは近世浄土宗学の基礎的研究プロジェクト『義山「浄土三部経随聞講録」対照表』、浄土三部経プロジェクト『仏説観無量寿経』、四十八巻伝プロジェクト『四十八巻伝』、現代布教プロジェクト『結縁五十相伝勸誠録の比較研究』、『建永の法難における住蓮房の事跡調査報告』、『視覚的布教資料の研究(パネル法話の検討)』、『大日比法洲上人の『信法要決』について』、国際対応プロジェクト『Ojo in the West: A report on the end of life issue in the United States of America』『佛説無量壽尊經卷下 Skt. Larger Sukhavativyuha Sutra』を掲載します。
- \*その他の研究継続中のものも含め、それぞれの概要研究経過等を「研究活動報告」に記載しました。

教化研究 第19号

平成20年9月1日 発行

発行人 石上善應

編集・発行 浄土宗総合研究所

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

電話(03)5472-6571(代表) FAX(03)3438-4033

制作・DTP 有限会社 仏教と文化社

印刷・製本 株式会社 双文社印刷





JOURNAL OF JODO SHU EDIFICATION STUDIES

教化研究



JOURNAL  
OF  
JODO SHU EDIFICATION STUDIES  
(KYŌKA KENKYŪ)

No. 19, 2008

*Published by*

JODO SHU RESEARCH INSTITUTE

(Jōdo Shu Sōgō Kenkyūjo)

TOKYO, JAPAN